四天王

原善

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
四天王

【Ｎコード】
Ｎ９９８３Ｏ

【作者名】
原善

【あらすじ】
２０ＸＸ年。核戦争で滅んだ地球。
残ったのは僅かな人類と、昆虫・・・そして海だけだった。
地球は砂漠化となり、文明は砂という砂に埋もれていく。
僅かに残った人類は、未だ法一つ作れないまま地上抗争を続けていた。

核戦争から３０年後の日本。拳銃を６つ持つ事から“ロク”と呼ばれる彼は、第六ポリスという街の偵察隊長。荒野に暮らすジプシ

ーを保護しポリスに連れて来るのが彼の任務だ。ある日、荒野に暮らすジプシーの家族４人を保護するのだが、実はこの父親は敵の元幹部だった。彼を奪還するべく、敵はロク達を待ち伏せするのだが、そこでロクの取った奇策とは・・・？

幼い頃から、人間兵器として育てられた、主人公と若き少年少女兵たちの恋愛、苦悩、友情、純愛、サスペンスを描くＳＦ。四天王とは果たして何なのか？なぜ少年たちは戦わなければならないのか？

その1　隊長ロク

２０ＸＸ年。

どの国がどこへ何発の核ミサイルを発射したのかは、記録に残っていない・・・

ただ、運命の日、地球の９９％が滅んだ。
大地も、空も、動物も、植物も・・・
残ったのは、僅かな人類と昆虫、そして海だけだった。

時は流れ・・・
植物を失った地球は、山が削れ荒野から砂漠となり、砂という砂に埋もれていく。
地球と海は砂漠の惑星と化していた。
南極の氷が溶け、海抜の低い所は海に沈み始めていた。

人類はかろうじて生き伸びていた。
あの日わずかに生き残った人類でさえ今では数えるほどになっている。
日本には3万人程度の人々が暮らしているものと推定されている。

残った者たちは、互いに助け合わなければならないはずなのに、未だ法一つ作れないまま地上抗争の日々が続いている。

四天王
～The Greatest Four～

エレベーターシャフトが上がっていく。音も立てず、静かに上がるそのシャフトは壁がないのか、周りの情景が下に移動していく。シャフトには車が一台。車高が低く、流れるような車体。黄色と黒の斜めに走る縞模様、赤いライト。時折下へ流れていくライトにその派手な車体が浮かび上がっては、また薄闇に隠れる。

運転席には大きなのハットに口元を覆うスカーフ、長い毛皮のポンチョ着た17、8歳の一人の少年。彼が車のキーを回すとエンジン音がシャフト内に響き渡った。更にアクセルを踏み続け、爆音を轟かしエンジン音をチェックしてる様子だ。

「よく仕上げてあるな・・・？ふふふ、さすがです！」

そう一人呟くと、他の機器も次々作動させていく。

「問題はこいつか・・・？」

少年の目が細まり、機器の一つに手をあてたまま動かなくなった。突然フロントガラスに一人の少年姿が投影された。年は15、6歳。口こそ隠していないが、車内の少年と同じハットとポンチョを羽織っていた。

『いい音ですね。ロクさん。隣のシャフトまで響いてますよ！』

ロクはモニターの少年を睨みつけた。

「山口・・・俺を外でロクと呼ぶなよ！」

ロクは映像の山口を叱ってみせた。

『す、すいません。た、隊長・・・し、しかし本当にジプシーでしょうか?ここ2年間は、外でジプシーは誰も保護されてませんし、荒野で生きて行くなんて、今どき無謀ですよ。』

「昨日の報告では、上は敵の脱走兵と見ている。」

『だ、脱走兵ですか?また厄介な・・・うちの偵察隊の4台だけで大丈夫でしょうか?武装隊の護衛がいるのではないでしょうか?昨日の奴等もまだ近くにいるようですよ?』

「不安か?」

突然ロクの目が優しくなった。

『せめて護衛くらいは付けて欲しいもんです・・・』

「だから俺らが行くんだよ・・・敵から逃げるのは得意だろ?山口副隊長?」

『・・・はあ。』

少し臆病になった山口をロクは不敵な笑みでカメラに答えた。

やがてエレベーターシャフトは止まり、前方の扉が音をたて開き始めた。砂埃がシャフト内に舞い込む。ロクは左手でギアを入れると、山口の映像に向かって叫ぶ。

「さーて・・・行きますか!?」

ロクはアクセルを踏んだ。

＞i14228－1975＜

その1　隊長ロク（後書き）

イラストはカゲオさんです。

その2　黄黒（きぐろ）の車

シャフトの扉が開き、ロクの派手な車体が外に飛び出す。外は廃墟街のように見える。2、3階建てのものが多く道路は砂だらけで、時折吹く風が乾いた道路に砂塵を舞い上げている。まだ暗いせいか街にも建物にも人影がない。

ロクは車内から空を見上げると、東の空が明るくなり始めていた。空はどこまでも雲ひとつ見えない。

「今日は風が強いな・・・急がないと・・・」

ロクの車がある建物を通過すると、それに合わせるように1台の車が合流する。ロクがさっき無線で話した山口だった。彼の車もスポーツタイプ。スピード重視の車体。大戦前１９７０年代に流行った某国のスーパーカーに似ている。更に同じような車が2台、ロクたちに合流して来た。ドライバーたちはみな若く、緊張した顔つきで車を走らせている。

「今日は急がないと、昼飯抜きになりそうだぞ?」ロクは笑いながら無線を飛ばした。

『それは勘弁して欲しいですね・・・』山口が再度モニターに映る。

4台は街中を走り続ける。前方に巨大な鉄の扉が視界を遮っている。高さおよそ8メートル、道幅より少し広く左右に開閉する物らしい。扉左右の横にある見張り台の上には、同じように幅広ハットにポンチョ姿の若者が2名づつ、機関銃を手にロクたちを待っていた。

その一人が扉の前で停車した車内のロクに、銃を振り上げ合図を送った。ロクは右手でそれに答えるとハンドルの内側のあるボタンを強く押した。

「こちら黒豹。指令室聞こえるか？」

フロントガラスに映し出されたインカムを頭に装着した少年の姿。

『こちら指令室の桑田。黒豹どうぞ！』

桑田は声を聞くとショートカットの少女だった。

「黒豹出る！西ゲート開けてくれ！」

『了解！西ゲート開けます！』

指令室の中には早朝にもかかわらず、１５名ほどの人影がある。数名は自らの机で寝ている者もいた。桑田の前には２０数台のモニターが並び、その一つにロクの顔がアップで映し出されていた。

「黒豹隊出ます！」

桑田は後ろを振り返り最上段の男に声を掛ける。男は立ったまま腕を組み、首を大きく縦に振った。

「西ゲート開けて下さい！」桑田は叫んだ。

車の前の扉が大きな音を立て左右に開き始めた。金属が擦れる鈍い音が辺りに響き渡る。すると開いた扉の隙間から砂塵が吹き込んでくる。その先にはなにひとつ無い荒野が目の前に姿を現してきた。強風で砂が舞い上がり、その向こうがどうなっているかも分からない。

「黒豹出る。行くぞ！みんな！」ロクが無線を飛ばす。

『了解！』迷いがなく覚悟を決めた山口の声。
ゲートが完全に開くの待たずに外に飛び出して行く４台の車たち。

塀の上からの映像だろうか？モニターに映る走り去るロクたちの車。それをじっと見入る桑田がいる。
「気をつけてください・・・」

「心配か？」

いつの間にか、すぐ横に先ほどの男がいた。７０歳前後の男は黒の軍服、制帽をかぶり真っ白な顎鬚を貯え、桑田の肩をたたきながら問いかける。
「いつもこの瞬間は緊張します。慣れないもんです・・・」と桑田。
「だろうな・・・」男は平然と答える。
「昨日襲撃してきた連中もすぐそこの丘にいます。４台で本当に大丈夫でしょうか？保護を装った敵の罠と考えてもおかしくありませんよ？事例もたくさん報告がありますし・・・」

不安げな桑田に、老人は笑顔で接した。
「ロクたちならやってくれるだろ。心配するな・・・」
「しかし・・・みんな武装タイプではありませんし・・・護衛もないのです！」

不安を隠せない桑田。老人は精一杯の笑顔で桑田に答える。
「あいつに追い付ける奴はいないさ！違うかい？」
「はぁ・・・」溜め息を漏らす桑田。桑田は渋々と自分の机に正対した。

『頼んだぞ・・・ロク・・・』老人は中央のスクリーンを見つめて

いた。

同刻、ロクの車たちが街から出てくるのを、小高い丘から双眼鏡で覗く男がいた。男は２０歳前後、砂漠迷彩の軍服を着て街から隠れるように身を屈めている。男は何度も肉眼と双眼鏡でロクたちの車を確認した。

「奴か・・・間違いない・・・」

再び肉眼で確認する男。

「奴だ・・・黄黒（きぐろ）が出てきた！」

その3　ヒデ、丘に立つ

その街は直径3キロ程の丸い廃墟街だった。街の周りには鉄の塀が囲っていて四方にはゲートがある。その塀よりも高い倉庫群や見張り台、風力発電機用の風車が数機。ゲート近くの見張り台には幾つもの機銃や人の姿が見れる。

街の向こうに見える東の海からちょうど太陽が昇り始めていた。

「奴だ！黄黒だ！間違いないぞ！」

男は再度、双眼鏡でロクの車を確認しながらそう叫ぶと、振り返りざま走り始める。

彼の先には、車やテントが並び、様々な格好をした者たちが食事や車の整備に追われていた。

その中には片足を無くした老人、肌を必要以上に露出した若い女性たち、刺青を全身に彫っている筋肉男。そして、戦闘で負傷したのか血だらけの包帯を巻き、無数のハエに集られて寝ているのか死んでいるのか分からない者、数人の子供の姿までいる。

車の大半はジープ仕様。半分は破損している様子。屋根があるようなものは1台も無い。後部座席には機銃砲を取り付けてある。またどの車もボンネットには黒いパネルが取り付けている。

そんな集団の中心に戦車のような装甲車が置かれていた。

そこは、まるで小さな街だった。

「ヒデ！ヒデ！？」

集団の中を名前を呼びながら走り回る男に、一人の女が指をさす。

指された方に急ぎ駆け出す男。

男は一人、集団から離れていた。痩せた顔つきに、眼光鋭く、鍛えたシャープな体、背丈は１８０センチを超えているだろう。

「ヒデ、ここか！奴だ！黄黒だ！」

その場所は、様々な物で作られた十字架が大小無数に建てられていた。あえて街に見えるように建てられたのかもしれない。十字架の数だけ仲間が死んでいた。

その中の一つ、錆びた鉄骨で組み込まれた十字架の前で、膝を折り、祈りを捧げながらヒデが答える。

「今、行く・・・」

明らかに不機嫌な声。しかし、ヒデはなかなか祈りをやめようとしない。その後ろ姿にそれ以上声を掛けれず一人集団の中に戻ろうとする男。するとヒデはすっと立ち上がると男と並んだ。

「で？どこに向かったんだ？」

男に問うヒデ。小走りに二人は丘の方へと向かった。

「南だ！車は４台だけ。全部偵察車タイプだ！」

「４台全部が偵察車か？舐められたもんだな・・・？」

「えっ？」

「昨日の今日で、俺らがここにいるのは分かってるはずだ。なのに奴らは・・・」

ヒデは親指を唇に当てた。

「ど、どういう事だよ！？」ヒデの言葉を理解出来ない男。

丘に着くと、男から双眼鏡を取り街の方を覗く。しかし砂煙で既にロクたちを双眼鏡では確認する事は出来なかった。

「うーん、もう確認出来ない。奴で間違いないんだな丸田？」

「間違いない。あの黄黒の斑だ！」

丸田と呼ばれた男は身振り手振りでヒデに説明する。

「なぜ奴らこんな早朝に偵察なんだ？」とヒデ。

「分からない。なぜ偵察車だけなんだ？危険を承知で出てくることがあるのか？奴らは？」

「まあいい。仇が取れるじゃねえか？リキの仇がよ！南に向かったんだろ？なら帰るルートは２つだ。丸田！お前の装甲車で奴らを追え！」

「早朝に出たんだ・・・奴等遠出じゃねぇのか？」不安がる丸田。

「偵察タイプだ！山は越えんさ！」とヒデ。

「そうだな！正論だ！分かった！」

丸田は激しく首を振った。

「極力、街の近くを目立つように走れ！装甲車の２０ミリなら奴らは逃げるしかないからな！」

「わかった。挟み撃ちだな？頼むぞ。今日からお前がリーダーだからな！？」

「全員に伝えろ！リキの弔い戦をするぞ！」

ヒデは大声を上げた。

桑田がいる指令室。偵察隊を送りだし、各自おもいおもいに作業をしていた室内に突然響く声。

「動きました！昨日の奴らです！」

桑田のすぐ後ろの席、ある眼鏡の男が叫んだ。一時の緊張が解かれていた室内が、その一声で一気に慌ただしくなった。一斉にモニターに目を向ける。桑田も眠い顔をしていたが、額の前に上げていたインカムのマイクを口の前に戻し机に正対した。

「装甲車とSCが4台。こちらを無視して南に向かっています！」

その眼鏡の男は後方の黒服、制帽姿の老人に報告する。

「ロクの所か？奴は人気者だな・・・桑田！バズーをスタンバイさせろ！」

老人はモニターを見てニヤリと笑った。

「バズーさんで宜しいのですか？」命令を聞き直す桑田。

「装甲車じゃ勝ち目があるまい・・・」諦めに近い口調。

「了解！」と桑田。

「柳沢！他の連中は？」

老人は少し大声を上げた。

「変です！まだ丘の上です。動きはありません！」と柳沢。

「どういう事だ？装甲車じゃ追いつけないはずだ？奴らもそこまで馬鹿じゃないよな？まして本隊が動かないとは・・・？なぜ追えない相手を追うのだ・・・？」

「昨日の戦いで多少ながらダメージを追っているのではないでしょうか？」柳沢が冷静に答えた。

「もーう、昨日の戦闘に勝手に入るからこうやって狙われるのよ・・・」桑田はひとり小声で呟く。

「うーん。そうあって欲しいな。桑田！念のためだ。ロクに追手が行くことを伝えろ。まだ無線は届くはずだ！装甲車はこっちに来ないんだな？街への警報はなし！但し警戒レベル3は継続だ！」

「了解！」と桑田。

「うーん・・・昨日と何かが違うな？焦りがない・・・余裕すら感じるな？」

老人は制帽を脱帽すると、無造作に髪の毛をかき始めた。

その４　行きますか？

ロクたちの４台は、南に向かって荒野を走っていた。
「追手か？装甲車だろ？なぜ装甲車なんだ？」とロク。

車のフロントガラスには、桑田の姿が映し出されている。走行中の為か、ぶれる桑田の映像。
『本隊がまだ動いてないそうです。親父さんらの話では、昨日のダメージが多少あるのでは？という事ですが・・・』
「まあ、そんなとこだろ。敵も日に日に数が減っているような気がするしな。昨日は死者も出しているはず・・・しかしおかしいな？偵察隊を普通追うかな？」
『昨日の戦闘・・・またなんかやったんでしょ！？』
「別に・・・」口を尖らすロク。

『新しい情報があり次第、また連絡しますね！』
「もう無線電波の限界だ。後はこっちでなんとかする。まあ俺らには追いつけないよ・・・」
『出た出た・・・あっ！いえいえ！そ、そうですね。了解しました。気をつけて下さい。』
小声で慌てる桑田を見てロクは少し笑った。
「ああ・・・わかった・・・」

映像が切れると、仲間に無線を入れる。
「みんな聞こえたろ？後方から装甲車らしい。少し先を急ぐぞ！」

ガラスのモニターには代わって山口が投影された。
『了解。装甲車とは厄介ですね。奴ら軍の者でもないのにどこから調達してるんでしょうか？』

「さあな。そんな事より、山口！タイヤ跡を見落とすなよ！情報ではトラックらしい。余程じゃない限り残るはずだ！」
『わかりました。トラックぐらいの車高なら目立つはずなんですがね・・・？』
「昨日の目撃情報、走行距離、夜間移動を考えると・・・この先に窪地があったよな？俺なら夜はそこに隠しておくが・・・どうか？」
『同感です！距離的には、あそこでしょうね。夜は移動しませんからね！』
「まあそう簡単には見つからないがな・・・急ぐぞ！風が強い。タイヤ跡が消えてしまうぞ！」

無線を切ると、ロクは少し考え込んだ。
『なぜ、逃げるのにトラックのような足の遅い車なんだ？』
運転するロクの眉間にはしわが寄る。

丘の上。ヒデが仲間を集め、ジープの荷台に立って周りに睨みを効かすと叫び始めた。

「昨日のポリスとの戦いで、リキが死んだ！殺ったのはあの装甲の厚いド派手な黄黒の奴だ！その黄黒が、さっきノコノコとポリスを出てきた。たった４台で南に向かっている。
４台とも武装をしていない偵察タイプだ。今、丸田が装甲車で追いかけている。」

すると中の一人がヒデの話に口を挟んできた。
「足の速い奴だろ？なぜ装甲車で追わせた？」
「装甲車がなければ、ポリスがこっちに攻めて来るだろ？」
「そうだ！そうだ！」
「なぜ行かしたんだ？」

「負傷者の手当てが先だろ!?」
周りの者たちも同じように騒ぎ始める。
「奴らが今まで攻めて来た事があったか?出てきたら戦えばいいだろうが?いつから臆病になった!?」
ヒデが大声を上げると、声を静める周囲の者たち。
「リキは俺らのリーダーだった。そして俺のダチだった。いや俺たちの兄だったはずだ。兄なら家族の仇をお前たちは討ちたくないのか!?」
その一言で静まり返る。みんながヒデの真剣な顔を見つめている。
「装甲車で奴を追わせたのは訳がある。装甲車の機銃しか黄黒を狙えない。まして偵察隊だ。装甲車で追われれば奴ら別ルートでポリスに戻ってくるだろう。丸田にはあえて海岸ルートで追わせている。つまり奴等は内陸ルートでしか帰れないという事だ。いくら足が速くても、山場はどうだろうか?」
「槻木(つきのき)か?」
「あそこは、山と山の間が極端に狭い。」
「しかし、我々がポリスを後ろにするのはどうか?」
「ポリスでも、仲間ぐらいは助けに来るだろ?」
「奴等に後ろを取られるぞ!!」
「一度、北に帰ると見せかけ、山側を迂回して南に戻る。ポリスには察しされずに槻木で待ち伏せする。俺らの銃でも奴のタイヤくらいは狙えるはずだ!どうだみんな!?」
「おぉっ!」
ヒデの作戦に賛同したのか、みんなは機関銃を空に突き上げてい

た。中には空に向かって機関銃を派手に撃ちまくる奴もいる。

ロク隊の４台。荒野を横４台で並行して走っている。ロクも車内から目を凝らし荒野を見渡している。

「あったぞ！左舷方向！」

ロクは、荒野に太いタイヤ跡を見つけスピードを落とした。横に広がっていた他の車もそのタイヤ跡を確認する。ロクは車を降りてその跡を確認した。他の者もロクのそばに集まってくる。

ひときわ長身のロクは他の者より頭一つ抜き出している。またロク開いたポンチョからは腰に幅広いベルトを巻き、左右のホルダーに拳銃を携帯しているのが見える。

「まだ新しい物です！この方向・・・やはりあそこの窪地でしょうか？」と山口。

「そうだな。急ぐぞ。１時間で後ろの装甲車に、追いつかれる。窪地近くになったらエンジン音を低くして風下にまわるぞ！いいな？」

「り、了解！」怯える山口。

「心配するな！交渉は俺がする！お前らは後方支援だ！」

「相手は脱走兵ですよ！？」

「普段通りだ！訓練を思い出せよ！」

「了解！」全員が一つになった。

「太陽光の充電で、まだ足止めされてくれればいいが・・・？」

四人は再び車に乗り込むとすると、そのタイヤ跡の先に向かって車を急ぎ走らせた。

「妙です！丘の奴等が北に向かいました！撤退する模様！」

柳沢の一言で再び慌ただしくなる指令室。そこに黒服の老人が降りてきた。さっきまでいた桑田の姿は席にも指令室にもなかった。

「どうした?なぜ北に?」と老人。
「３０台全部です!変だと思いませんか!?」と柳沢。
「撤退?わからん。どうしたいんだ奴等?」
「誰かに追わせますか?」と柳沢。
「黒豹の偵察隊は全部出払ったか?困ったな・・・我妻?ダブルを呼べ!」
「了解!」桑田の席の隣にいた男が命令を受ける。

ロクは荒野に立っていた。先程まで強く吹いていた風も弱まっている。ロクの後ろに控える山口ら3人。ロクは彼らを振り返ると、左手で左右を指さす。3人は無言でロクの指先の方向に二手に素早く別れた。ひとりになったロク。

「さあーて・・・行きますか・・・?」

ロクはそういうとスカーフで口を隠し、右腰の拳銃を抜き空に向かって3発の銃弾を発射した。

その5　あらら・・・

突然、荒野に響き渡った3発の銃声。男はテントからトラックに荷物を運んでる最中だった。窪地を選んで隠れているため、窪地外の様子がよく掴めない状態だった。

「んっ!?やけに早いな!ポリスか?油断も出来んな・・・」

痩せた、長髪に無精ひげ姿の５０前後の男は、急ぎテントに入ると、中にいた3人の子供たちに向かって叫んだ。

「ジプシャンかもしれないから、子供たちだけで車の荷台に隠れていなさい!」

慌てて１０才前後の男の子と女の子がテントから飛び出してきた。後からもう一人、１５歳位の少女がついて出る。先ほどの男が少女を呼び止め、彼女にライフルを手渡した。

「頼むぞ・・・」

うなずく少女に、男は再びテントへと戻っていく。少女は二人をかばうようにトラックのところまで連れて行くと、箱型トラックの荷台に乗せてやる。自分も辺りを警戒しながら後から乗り込み、荷台の扉を閉めると、いくつも空いている銃痕の穴から、息を殺して男のいるテントの方を覗きこんだ。

ライフルの弾を確認し、子供たちの方に目を走らせ“静かに”と合図を送ると、再び監視の目をやる。

男は、テントの小さなほころびを探し、銃声のした方に監視の目を向ける。男たちがいたのは窪地になっていたせいか、やや見上げるようにその方向をじっと監視していた。

砂を踏む音とともに現れたのは、大きめのハットにポンチョ姿の男だった。ゆっくりした足取りで一歩一歩テントに近づいてくる。

「貴様、誰だぁー!?」

まだ遠い男に、テント中から大声で問いかける。トラックの中で身を寄せ合っている二人の子供と少女にも緊張が走った。

「おねぇちゃん・・・怖いよ・・・」女の子が少女の手を握る。

「大丈夫、大丈夫だからね・・・」

小声で声をかける少女も震えていた。

「ポリスの者だ!ロクという。あんたらを保護に来た!」

緩やかな坂道を、ゆっくり下りながら大声で答える。

男は、ロクの答えに安堵し銃の構えを緩めかけたが、腰にぶら下がった二丁の銃に再び警戒を強める。

「わかった!だが銃はそこに置け。それにコートと帽子もだ!」

そこでで立ち止まり、言われたままに帽子とポンチョを投げ置く。なんとポンチョの下にも左右の脇に銃がぶら下がっていた。

「一体いくつ持ってるんだ?怖い怖い・・・」

テントの中からロクの様子を監視している男の顔に浮かぶ呆れ顔。トラックの中で息を殺して成り行き見守る少女たち。

ロクは腰のベルト、胸に渡したベルトも外し、四丁の銃をそっと自分のポンチョの上に置く。ポンチョの下には上下グレーのポリスの制服姿だった。

最後に口元を覆うスカーフを下にずらし両手を上げる。

「子供か・・・？時代って奴だな・・・？」
童顔のロクに、男の口から本音がこぼれる。

「これでいいか！？」とロク。
「よし！まっすぐこっちに来い！」
「ああ・・・」
両手を上げたまま、ゆっくり男のテントに近づくロク。安心したのかトラックの中の少女も荷台の扉を開け、ロクにライフルの狙いを定めていた。男も銃を構えたままテントからゆっくり出てくると、周りを窺いロクに向かって歩き出した。

「そこで止まれ！どこのポリスの者だ？本当にポリスなんだろうな！？」
男も足を止めると、問いかけてくる。

「第６ポリスだ！」ロクは答えた。
「Ｐ６（ピーシックス）だと？」
「そうだ！」
「保護は拒否出来るんだよな？」
「そうだが、何か不都合があるのか？」
「ああ、あまりポリスには世話になりたくはない。ほっといてくれないか？」
「一応・・・規則なんでね・・・」
「ポリスが勝手に作った規則だろ！？従う義務はないはず！」ムキになる男。
「おいおい・・・やけにポリスの事に詳しいな？」

『厄介なタイプや・・・このおっさん・・・』渋い顔のロク。その時だった。

「んっ！！」
突然、荒野に響き渡った銃声にロクと男に緊張が走った。

「きゃっー！」
重なる少女の悲鳴。

「直美！？」
トラックに向けられた男の銃先で、右手の甲から血を流しながら少女が投げ出された。荷台からは、恐怖に声も出せず泣いている女の子の髪の毛を鷲づかみし、その頭に銃を突きつけた迷彩服に目だし帽をかぶった大男がゆっくり現れた。

「お、おとうさんー！」女の子が助けを呼ぶ。
「なっ・・・！」

大男は荷台から降りると、女の子を羽交い絞めにし銃を突きつけたまま叫んだ。
「銃を捨てろっ！そっちのポリスもだ！このガキを殺すぞ！」

ロクは焦った。
「あらら・・・あんにゃろ～意外と早かったな・・・」

その6　隠し銃

予想外の出来事だった。ロクたちの前に現れたのは山口たちではなかった。しかもこれから保護しようとしている家族の一人までもが人質に取られている。男は銃を構えたまま横のロクに叫ぶ。

「俺たちを騙したのか？わざわざ3発の銃声の演出までして。お前ら、下手な芝居を打ちやがるな！」

「奴とは関係ない。じゃあなぜ俺まで手を上げているんだ？」

二人の会話に大男が声を荒げる。

「何ヒソヒソ話してるんだ！さっさと銃を捨てろ！」

「ここは、奴のいう通りに銃を置け！」とロク。

「いちいち指図するな。小僧が・・・」

男はしぶしぶライフルを投げ捨て、両手を高々と上げた。

「荷台の小僧も出て来い！そして全員テント前に集まれ！」

ロクと男の家族5人は、テント前の地べたに座らされた。

ふと、ロクがトラックの向こうに目をやると、崖の上から山口が顔を覗かせている。大男に気を取られないよう目線で合図を送る。

山口の顔が消えたかと思ったら、こぶし大の石がトラックの屋根めがけて投げられた。

「ゴン！」

という音に、大男の視線がトラックにそれた瞬間、一発の銃声が荒野に響き渡る。

大男の手から放り出された銃。何が起きたのか理解されぬまま空になった手に目をやる大男。あわてて拾おうとしたが、崖から銃を大男に構えた山口が走り下りてきた。

「はーい、それまでー！」

「お、遅いぞ・・・山口！」

一瞬の出来事に驚いたのは大男だけではなかった。茫然と山口とロクに目をやる男と家族たち。ロクが小型の銃で大男を狙い撃っていたのだ。

「すいません。先客がおられたので・・・」

そう言うと、大男の顔を拳銃で殴りつけ、昏倒させてしまった。

「山口！そいつを縛っておけ！アキラはこいつのＳＣを調べて来い。シンは周りを警戒。他にまだいるかもしれない。山口も縛り終わったら警戒に当たれ！」

次々と合流してきたアキラ、シンにも指示を飛ばすと、男の家族の元に近寄った。

「わかったろう？荒野は危険なんだぜ。」

ロクは、男に“直美”と呼ばれた怪我をしている少女に、どこからか取り出した包帯を手に近寄った。

「腕を見せてくれ。手当てする！」

「大丈夫よ。かすり傷よ。」

直美はロクと目も合わすこともせず、避けるように弟や妹のそばに行き、二人を抱きしめた。二人は安心したのか大声で泣き出した。

「もう大丈夫よ。泣かない泣かない・・・」

「・・・どこに隠していた?」
男が自分の家族を見守りながら、横目でロクに問いかける。
「ん?何が?」
「拳銃だよ?」
「・・・足首だよ。」
「小僧、何丁持ってやがるんだ・・・?」
ロクはズボンの裾をめくり上げ、足首にある拳銃ホルダーに小型の銃を収めると笑顔で男に話しかけた。

「それじゃあ、保護?受諾してくれますね?」とロク。
男は長い髪の毛をかきむしり二、三度頷いた。
「勝手にしろ!ただし条件はあるからな。」
「保護成功なり・・・」

「こいつ・・・何にもしゃべりませんよ。」
山口は目出し帽の男の胸ぐらを掴み、ロクに報告する。テントは既に畳まれており、男の家族たちはアキラの監視の下、移動の準備を終えていた。

ポンチョに大き目のハット姿に戻っていたロク。
「ジプシャンだろ。しゃべらないはずだ。しかも、一人で追ってくるような奴だぞ。無理無理・・・」諦め顔のロク。
「こいつ、昨日の連中じゃないんですね?」
「昨日の連中ならすぐ吐くだろうな~そんな素人じゃないぜ!」

「おい?トラックは置いて行くのか?」
二人のところに男がやって来た。
「追手が来ている。トラックでは追いつかれる。後ですぐ取り来させる。今は必要なものだけにしてくれ。」

「こいつどうしますか？」
山口が大男をライフルで突いた。
「帽子を取れよ！」

大男の頭から目だし帽を外すと、すでに山口に殴られただろうたくさんの痕が顔にあった。その様子を見ていた男が顔をしかめた。
ロクは男の様子を横目に山口に命令をする。
「いい面構えだな？たった一人で来るなんて。軍の事は色々知ってそうだ・・・お前のトランクにでも入れておけ。Ｐ６でたっぷり聞かせてもらうよ！」
「怖い、怖い・・・」
男はふざけてそう口に出した。
「準備はいいのかい？」男に問うロク。
「ああ・・・」

ロクたちＰ６のメンバーと男の家族は、ロクたちの車が置いてあるところまで移動してきた。男はロクの黄黒の車体を見て絶句する。

「なんだ!?こいつは？これもソーラーカーなのか？そしてこの低さ・・・」
「そうだが・・・」ロクは頭をかいた。
「パネルがないじゃないか？ソーラーパネルが・・・ガソリンで動くタイプか？」

男は前後左右とロクの車を舐めるように覗き込む。
「まさか・・・ボディ全部がソーラーパネルで、その上に太陽光だけを通す特殊なコーティングを加工しているんだ。拳銃では穴１つ空けれない。」
「ふーん、時代って奴だな・・・怖い怖い・・・」

「少し狭いが、こいつに乗ってもらう。」
「家族全員か?」
「そうだ。無理すりゃ狭いが5人は乗れるんだぜ!」

「隊長!北方向に砂煙確認!急いで下さい。来ます!」
アキラが手を向ける。その方向に目をやると、まだ遥か彼方だが砂煙がハッキリと確認出来た。

「来た道は帰れないか・・・迂回して、内陸のルートで戻ろう!全員急げよ!」
ロクは男の家族を自分の車に乗せると、急ぎその場を後にした。

車内は後部座席に男と幼い子供二人、助手席には直美が座っている。
「大場だ!」
運転中のロクに、後部座席からいきなり男は名乗った。
「ロ、ロクだ。」

運転席から後ろを振り返り手を差し伸べ握手を交わす。
「上から、直美、勝也、雨音(あまね)だ。」
「よろしくな!」

ロクは助手席の直美に片手を差し出し挨拶するが、直美はロクに背を向けて窓から外を見ている。返事も無かった。ロクは渋々と出した手を引っ込める。
「・・・しかし、あんたいい腕だったな?あの男の拳銃だけを撃ち抜くなんて神業だな?あいつは怪我ひとつしてなかったじゃないか・・・?」
「そりゃどうも・・・」

褒められるのに慣れてないロクは、返事に窮する。重ねるように大場の質問が来た。

「あんた・・・四天王・・・だろ?」

大場の言葉に車内が静寂が走る。直美までもが振り返りロクの横顔を見つめている。大場にバックミラー越しに返答するロク。

「・・・ああ、俺が四天王だ!」

驚きに言葉を失う大場と直美だった。

その7　嘘とうそ

太陽はいつの間にか真上に来ていた。ロクたちは北に向かって走っている。追手と出くわさないため、内陸ルートを選び基地に向かう。しかし、内陸ルートは道幅が狭く山に挟まれていて起伏も多い。ロクたちのように車体の低い車ではやや走りにくい道となっている。

激しい揺れの中、先ほどの出来事も忘れたように、目を輝かせて車内を物珍しげに眺めていた子供たちが、シートとシートの間から顔をのぞかせて今度はロクの運転をながめている。そんな中での一言だった。

「ああ・・・俺が四天王だ！」

「！」

「なっ・・・」と直美が声を上げた。

大場も驚いた。お世辞半分、探り半分で問いかけた返事にロクは簡単に答えてきたからだ。二人とも四天王をもっと鍛え抜かれた年配の者だと想像していた。この少年が四天王とは・・・？二人の疑いの目が続く。

「・・・って言ったら、俺はこの隣のお嬢さんに首を狩られてしまうのかな？」

そう言うと、隣に座る直美に目を向けた。ロクと直美はこの日初めて目を合わせた。間近に見たロクの顔に慌てて目をそらし、再び背を向けた直美。

「首を狩るなんて、そんな野蛮な事しないわよ！ばっかじゃないの！」背中で怒る直美。

ロクはその様子に笑いながら前方に目を戻すと、再び話し始める。

「四天王狩りって知ってますか?最近フリーのジプシーがよくＰ６に襲いに来るんですよ。ジプシャンが四天王の首を持って来た者には幹部のイスを用意するとか、金塊を出すとか噂を出したんです。なんかすごい待遇らしいですよ。」

「へぇ、ジプシャンがねぇ・・・」

「昨日も６０台近いＳＣにうちは襲われました。今、俺らを追っている装甲車も昨日の奴らだと思う。そんな中で四天王“さま”が直々にポリスを出て、危険を承知でジプシーの家族を保護しに来ると思うかい?」

「そう言われればその通りだな。あんたはあんたで人も殺さない、四天王には程遠い優しい顔だしな。」

「ふふふ、褒められてんだか、けなされてんだか分かんないが、まあいいように受け取りますよ。」

「ははは、そうだな。」と大場。

「で、どうして俺が四天王だと?」今度はロクが男に問う。

「うん・・・先ずひとつ。さっき言ったがあの拳銃の腕だ。あんたが足に隠していたのは、小型で狙いも難しい。また弾は一発しか入らない隠し銃タイプ。それであの男にけがをさせずに銃だけを狙うのは至難の業だ。とても人間業じゃないさ・・・それとふたつめはこの車だよ!」

「こいつ?」ロクが目を丸くする。

大場は手の甲で、後部座席の窓ガラスをコンコンと叩いてみせた。

「これ防弾ガラスだろ?それにこの車の装甲はドアの厚さを見ればば一目瞭然だ。最新のＳＣだな?ポリスは余程あんたに死なれたくないらしいな。それと・・・」

「まだあんの？」呆れるロク。

「みっつめは、あんたの銃の数だ。俺に見せたのは右足の隠し銃を入れて5丁の拳銃・・・確認はしていないが左足の足首にも隠してるだろう？」

「ああ、あるよ。」

「噂では、Ｐ６には六丁の銃を持つポリス最強の四天王がいると聞くが、あんたも六丁だろ？違うかい？」

「ふふふ、ではひとつ目の答えです。俺は人を撃ったことがない。奴の銃だけを狙ったんじゃない。臆病で奴の銃しか撃てなかったんだ。」

「えっ！？」

直美はロクの意外な答えに驚き、再びロクの顔を見た。

「ふたつ目の答えは、俺らは偵察部隊だ。まして俺は隊の責任者だ。こうやってジプシーを保護するのが俺の任務でね。せっかく保護したジプシーを危険に遭わせたくないんで、こんな厳つい車になってるんですよ。まぁ銃を撃たなくていいので、俺には好都合なんですが・・・」

「それで、みっつ目は？」と大場。

「みっつ目は、ポリスでは死んだ兵の拳銃は部下や同僚が引き継ぐ。死んでも一緒に戦うという意味を込めてね。だから、十丁位身につけている奴もいるよ。俺の銃・・・六丁だけだと思いますか？」

「おいおい、まだ他に隠しているのか？怖い怖い・・・」と呆れる大場。

「ははは、さあどうですかね。・・・それでは、こっちから質問なんですが宜しいですか大場さん？」

「なんだい？」ロクの質問に改まる大場。

「大場さんは、ジプシャンの脱走兵では？」

攻守が逆転し、車内の空気が変わった。一瞬顔をしかめた大場だったが、すぐにこう答えた。
「ああ、俺は脱走兵だ！」
バックミラー越しに、ロクの目を見て真顔で答える大場。しかしロクは笑顔のままＳＣを運転している。

「・・・って言ったら、俺ら家族はＰ６の秘密の地下室でキツイ拷問に遭うのかい？」

大場はわざとロクの口調を真似て返す。直美も、この時ばかりは後部座席を振り返り父親を睨んだ。
「ははっ、今どきポリスは拷問なんてしませんよ・・・まあちょっとはするのかな？」とロク。

「怖い怖い。で？・・・あんたはどうして俺が脱走兵だと？」
ロクと同じように質問をしてくる大場に、あえて同じように答えるロク。

「まずひとつ、それは張っていたテントの張り方です。あのロープの張りは軍で教えていたものだ。」
「ほう・・・」驚く大場。
「ふたつ目はテントとトラックの位置。風が強かった昨日、普通ならトラックのそばの風下にテントを張るんですが、トラックと離れた位置に張っていた。これは、二手に分かれた際、最悪どちらかが生き延びるための配置。」
「ふふふ・・・」

「何かに警戒してたんじゃないんですか？でも結果は出来なかった・・・」

直美の肩が少し震えた。
「それとみっつ目は、大男の目だし帽を外した時。」
「おっ！」
顔をしかめる大場。
「彼は顔見知りでしょうか？そしてよっつ目は・・・」
「もういい。いい読みだ。あんたには負けたよ。」
大場は大げさに両手を上げてみせた。

「お褒めの言葉ありがとうございます。詳しくは向こうに戻ったら話してください。拷問・・・？俺はしたくないので。まぁ俺は担当外ですがね・・・」
「わははは！わかったよ。拷問は勘弁してくれ！・・・じゃあ何かい？あんたは俺が脱走兵だと知っていて、わざわざ自分の車に乗せたのか？？ろくすっぽ俺たちの身体検査もせずにか・・・？」
「お子さんたちの前では言いたくなかったんですが・・・念のため、腰の二丁の拳銃はあなたに向いています。」

「えっ・・・！？」
大場と直美はポンチョ下にあろうロクの拳銃を見つめた。
「それで車内でもポンチョか・・・？用心深いんだな？人は撃てないんだろ？」と大場。
「まあ・・・臆病なだけですから・・・」
「怖い怖い・・・時代って奴だな・・・？賢いよ・・・」

その時、車のフロントガラスにアキラが映し出された。
『隊長！最後尾のアキラです。こちらから肉眼で装甲車が見えるようになってきました！』

「あらら、あの装甲車って意外と足早いんだな？悪路では向こうの

方が上かよ?だが間もなく悪路を抜ける槻木だ。平地になる。抜けたら全車ポリスまで飛ばすぞ!」
『了解!』とアキラ。

映像が突然、山口に切り代わった。
『ま、待って下さい隊長!前方にも砂塵確認!かなりの数のSC確認!!』
「あらら、敵の待ち伏せか?・・・装甲車の追手は・・・こういう事ね・・・?」
苦笑いをするロクがいた。

その８　砂漠の雷獣

ここは、旧宮城、槻木地区。ロクが走っている内陸ルートとしては、悪路が荒野に変わる所で、また一番山間部分が狭い箇所でもある。ヒデはここに目を付け、残りの仲間を待機させロクたちを待ち伏せていた。

ヒデのＳＣ本隊約２５台。ジープタイプを中心とするヒデの部隊は、コの字の陣形を組み、南へと移動していた。ヒデは中央のジープ系の助手席に立ち、無線のプレストーク部分を持ち進行方向を見つめていた。するとヒデが乗る後部座席に設けてある、機銃を構える男がヒデに向かって叫んだ。

「前方来ます！砂煙確認！」
「来たかっ！？」とヒデ。
「ややスピード落としています！警戒してるようです！」

ヒデは各車に、無線を飛ばした。
「左右の隊は、展開して待機！中央の隊は正面を前に向けたままここで待機！丸田頼んだぞ！」
『了解！奴のケツあおって、そっちに追い込むぜっ！』
「了解！・・・リキ！見ててくれよ！」

ロクの車内。
「後ろには２０ミリ弾の装甲車。左右は山、正面に本隊。槻木からはＰ６に無線も届かなから助けも無理・・・うーん、なるほど敵ながらいい作戦だな・・・」

ロクが余裕で一人呟いてるのに対し、山口が慌てて無線で口を挟んだ。
『こんな時に、敵を褒めてどうすんですか!?隊長、左右の隊は数が少ないようです。足が遅くなりますが、二手に別れて山側に逃げましょう!』
「駄目だ!遅くなればタイヤを狙われるな・・・それが敵の狙いだ!」
『なら隊長だけでも逃げて下さい。ここは我々が・・・』
「山口言うねぇ~だが・・・」
『だが・・・?』
「中央突破する!!」
『はい?』声が裏返る山口。

その言葉に大場と直美は驚いた。
「怖い怖い・・・」
「えっ!?ち、ちょっと・・・」

「隊!縦一文字態勢!いいか?最後尾以外ライト点灯、前のバックライトだけを頼りに俺の少し後を走れ!」
『しかし・・・た、隊長?』慌てる山口。
「大丈夫、左右からは奴等は撃ってこない!後は・・・なんとかする!」
『ひっー!出た出た・・・』
「ふふふ、逃げ切るぞ山口・・・みんな行くぞ!」

ロクはギアをトップに入れアクセルを更に踏み込む。するとロクはギアの前の二つのスイッチをポンポンと上に上げた。なにか接続音が響き、大場の座る後部座席の下から空気の流れる音がし始め、その音は徐々に大きくなる。大場や子供たちはその音に驚き、大場は子供二人の肩を両手で抱き寄せた。

「な、なんだ?この音は!?」
大場は聞かれない異音に、ロクの運転席を覗き込んだ。
「ふふふ・・・」笑うロク。
ロクの車は巨大な砂煙を上げていた。

『後ろの２０ミリ銃を避け、奴は戻ったりはしない。正面に２０台！左右の隊はわざと少なく配置している。奴等は2台に別れて左右に分かれるはず。山に入れば足は遅くなる。側面になり、タイヤに銃弾を撃ち込めば・・・いくら装甲が厚くたって、タイヤさえ撃ち抜けば・・・』
ヒデは、心の中で自分なりの方程式を作り、勝利を確信していた。すると部下の一人がヒデに向かって叫んだ。

「や、奴らっ!突っ込んで来るぞ!」
「なっ・・・馬鹿なっ・・・」驚きで声にならないヒデ。
ヒデは双眼鏡で確認すると、ロクの黄黒の車が、高さ幅とも１０メートル近い巨大な砂煙を巻き上げ、こちらに向かっているのを確認する。砂煙を高く上げているのは黄黒の車だけで、他の3台は、かすかに確認できる程度であった。その砂煙はロクの車の後ろをどんどん左右に広がって行く。

「なんだ!?車の砂煙じゃないぞ!」それを見ていたある兵が叫んだ。
「な、なんだ!?風を味方に付けてるとでも言うのか?」とヒデ。

「万が一がある。頭を伏せていてくれないかい?」
ロクは笑顔で、助手席の直美と後部座席の大場らに伏せるように説得した。４人はロクの指示通りに頭を座席の下まで下げた。直美

はかがみながら、自分の肘や手で自分の頭を覆いかぶせていた。
ロクは昼間なのに、車のライトを点けた。ライトはボンネットから９０度の角度で迫出し、正面に赤い不気味な光を放った。

山口やアキラの車も同じようにライトを点け、ロクの車が作った巨大な砂煙の中に入ると、ライトが放つ光りさえも見えなくなり、砂煙の中にスッポリ消えてしまった。
更にロクは、コクピットのあるボタンを押すと、タイヤのホイル部分の中心部分から銀のパネルのようなものが、花咲くように広がってきた。横から見るとタイヤの全部ではないが、約９割近いタイヤの部分を隠ししてしまった。
するとロクの車はグングンとスピードを上げてヒデの本隊正面に突き進む。

「先頭！キグロ！まもなく射程距離です！！」
ジープ後部の機銃を構えるヒデ隊に緊張が走る。
「左右の隊は後ろに合流し発砲はするなよ！同士撃ちになるぞ！丸田何してる！？どんどん引き離されてるじゃないか！？」
『馬鹿言うな！奴等この荒野で３００キロは出してるぞ！まして砂煙で視界がきかなくなっている！追いつけないぞ！』
「敵、来ます！！」
「くそがぁ！いいか全車、黄黒のタイヤだけを狙えよ！後は構うな！・・・てぇーっ！！」

爆進してくる、ロクの車。ヒデ率いる本隊の機銃砲が一斉に火を噴く。数十発、数百発の銃弾がロクの車に集中し火花を散らしていた。

ロクの車内は、鈍い金属音と高い金属音が入り乱れ、子供や直美らが悲鳴を上げ、パニックを起こしていた。しかしそれも最初のうちで、その音に慣れてきた直美は、ふと運転席のロクに目をやる。するとロクは笑ったまま、楽しそうに車を運転していた。直美はその姿をを見てゾッととした。

「く、狂ってる・・・」

ジャガーのスピードメーターの針は３８５キロを指していた。

ヒデは助手席で指示をしていたが、歯がゆいのか自分の車の後部席の機銃担当を蹴散らし、自ら機銃でロクの車を狙った。

「どけっ！！・・・くそっ！くそっ！くそっ！」

ヒデが放つ弾は、確実にロクの車に当たっているが、ロクの車は真っ直ぐヒデの正面に近づく。この時、ヒデは運転席のロクと目が合う。ロクは運転をしながらニヤリと笑っていた。ヒデはゾッとした様子で、ロクの車のフロントガラス目掛け更に銃を撃ちまくった。

ロクはヒデの隊、ギリギリまで近づくと、ヒデ隊の陣の僅かな隙間を見つけ、そこを全速力で突破してしまった。ヒデの隊はロクの車が舞い上げた砂煙で一瞬の内に視界を奪われた。

ロクの車と思われるエンジン音が徐々に遠くなっていくなか、更に３台のエンジン音がそばを通過して行った。

「ごほっ！ごほっ！す、砂煙が・・・な、なんなんだ?どうした?奴らにここを突破されたのかぁ！?」

しかし、まだ一部の仲間が機銃を撃ちまくっていた。

「撃ち方止めろ！同士撃ちになるぞ！奴等が突破したぞ！Ｕターン

して追う!ポリスには帰すなよ!」
　視界が晴れないまま、ヒデの命令で本隊の２０台のＳＣはＵターンを始めた。すると、再びエンジン音がヒデの隊に迫ってくるのが分かった。

「な、なんだ?この音は?」
　その音は、更に大きくなってきた。すると丸田が運転する装甲車や左右に展開していた仲間のＳＣがヒデ隊に突っ込んできたのだ。気づいた時は、すでに仲間同士接触、衝突、中には車を乗り上げられた車もあった。特に丸田の乗る装甲車に体当たりされたのは火まで吹き上げている。ヒデ隊は一瞬で壊滅状態に陥った。
「や、奴め・・・こうなることも計算してやがったな・・・?」

　ロクの車は、戦場を脱出していた。ロクはギアの前のスイッチ２つをポンポンと下げると、ギアも１つ下げた。すると後部座席から聞こえていた空気の流動音も小さくなり、車体から出ていた砂煙も徐々に無くなっていった。すると砂煙の中から他の３台が現れてきた。ロクはすぐ無線を飛ばす。
「山口?大丈夫か?」
『な、なんとか生きてますよ・・・』と山口。
「アキラ?シンは?」
『大丈夫です。シンは?』
『正直、小便チビりそうでしたよ・・・』とシン。
『隊長こそ大丈夫ですか?後ろから見たらドえらい事になってますよ!!』
「そ、そうか?まあ、走行に問題ないし・・・」頭を掻くロク。

　よく見るとロクの車は、フロントガラスのワイパー、右側のサイドミラー、バックライトを点けるために点灯した、赤のフロントラ

イトが無くなり、左側のサイドミラーはブラブラと取れかかっていた。また防弾仕様のフロントガラス、ボンネット、ドアの所々にいくつかの銃弾が突き刺さったままでいる。また黒の塗装の所は目立たないが、黄色の部分には無数の焦げ痕があった。

「あらら、また技師長にどやされるな。あっ！もうみなさん大丈夫ですよ！」

ロクは後部座席と助手席の大場や直美に声を掛ける。みんなはようやく顔を上げたか、みんなは呆然となっていた。

「し、死ぬかと思った・・・もう何て無茶な作戦なのよ！？」

直美がロクを横目に怒り始めた。すると後部座席の大場がロクに問う。

「なあ？あれはなんだったんだ？」

「あれ？・・・とは？」

「あれだよ。俺の尻の下で鳴っていた音と、あの砂煙？」

「ああ、ジプシャンにも船はあるでしょ？それを動かす装置ですよ！」

「んっ？ま、まさか・・・船などに使う空気圧縮装置か？」

「そう！その小型版。ポリスではエアーブースターって言ってますが・・・まだテスト中でね、なんか使用中に亀裂が入って爆発すると、乗ってる俺らは骨も残らない程ぶっ飛ぶらしいけどね。ははは・・・」

「ははは・・・そこ笑うとこじゃないでしょ！？そっちの話がゾッとしたわよっ！！」とツッ込む直美。

「ああ、ごめん！話さない方が良かったな。ははは、でもうちのメカニックたちはこれで近い将来、車で空を飛んだり、海面を走らせるんだって毎日頑張ってるよ。まあ、夢見たいな話だけどね・・・」

「ほぉー！空をねぇ～？まさに時代って奴だな・・・そう言えば、この車なんて名前なんだ？」
大場が尋ねた。
「・・・あれ？そう言われるとこいつに名前は・・・？なんせ、こいつに今日乗るの・・・初めてなんだよね？」

「は、はい？」驚く直美。
「まだこいつに名前はありません。ははは・・・」
「まさか、俺たちをテスト走行の車に乗せたのか？」と大場。
「もうイヤーだぁー！こんなのー！」
「怖い怖い・・・」呆れる大場と直美。
「す、すいません・・・」とロク。

戦闘の興奮冷めやらず、大場は時折見せる、ロクの明るさと子供っぽさに正直呆れていた。

『しかし・・・こいつはあの包囲網を一台も犠牲を出さずに突破しやがった・・・敵が弱すぎたのか？嫌違う！自分を囮にして仲間までも全員救いやがった。しかも銃弾も発射せず、戦わずに勝利するなんて聞いたことない・・・やはり、こいつは・・・？』
後部座席からロクの様子を伺う大場。

ロクたちは再び、ポリスに向かって帰路に就いていた。

ロクにとってこれは小さい戦いの１つに過ぎなかった。しかし、これがのちに全ジプシャン軍を震え上がらせた『砂漠の雷獣』と呼ばれた男の伝説の始まりだと、彼自身知る余地もない。

その9　第六ポリス

この世界は、雨は滅多に降らない。
降ることはあるが、そう長い雨ではない。雨が降らないという事は、虹を見るのは奇跡に近い。
また雷（いかづち）も同じである。

初めて虹を見たものは、それを神の恵みといい。
初めて雷を見たものは、それを神の怒りという。

これはその雷の名を継ぎ、人々から恐れられたある男の物語である。

先程、戦闘があった槻木地区。ヒデは呆然とし、地べたにあぐらをかいて座っている。空を見上げては溜め息を漏らす。そこに丸田がやって来た

「おい！ヒデ！」と丸田。
「・・・」
「ヒデ、どうした？」
「聞こえてるよ。」
「なら返事くらいしろよ！」ムッとする丸田。
「ああ・・・」
「8台が廃車・・・怪我人が数名だ！死人が出なかっただけでも運がいいかな？」
「そうか・・・」

「それと、気づいたか？」
「なんだ？」
「さっきの黄黒、リキを倒した奴じゃない。」
「ああっ！？どういうことだ！？」
ヒデは急に立ち上がり丸田に詰め寄った。
「少しだがリキの時の奴と違うような気がする・・・タイヤや形とか・・・」
「今更っ！！あんな派手な車が２台あるというのか？ふざけるな！」
怒りで荒野の砂を蹴り上げるヒデ。少しだが砂が舞った。
「すまん・・・」
「すまんで済まんよ！」
「で？これからどうするんだ？」
「わからん・・・が・・・一度ジプシャンに行こう・・・」
「なぜ？」
「装甲車は一度ジプシャンに返さなくてはならない。それがリキとの約束だ。」
「律儀に返さなくていいだろ？ジプシャンから分捕ってしまえよ！」
「ポリス不利の中で今、ジプシャンを敵に出来ないぜ。そこまで仲間を危険にさらせないな・・・」
「行くのはいいが、四天王の首はどうする？それが条件だったろ？」
「しょうがないだろ？正直に話すさ！」
「こんな話はしたくはないが・・・この間、戦死した誰かの首でいいじゃねぇか？誰も四天王の顔は知らないんだろ？」
「馬鹿言うな！仲間の遺体の首を取るのか？だったらリキの遺体を掘り起こしてリキの首をお前が持って行けよ！」
「じょ、冗談だよ。冗談、冗談・・・そう怒るなよ。」
キレたヒデを両手でなだめる丸田。

「秀則！」
二人の会話中に、一人の女性が大声をあげ二人の前に現れ近づいてきた。頭にはターバン、タンクトップは短くヘソが見え、半ズボン姿。年齢は２０歳前後に見える。
「聖（ひじり）だ！ヒデ、今の話は嘘だからな。聖には・・・」
そう言うと、丸田は聖が来る前にその場を離れて行く。

「丸田はどうしたの？」と聖。
「なんでもない。今後を話していたのさ・・・」聖と目を合わさないヒデ。
「そう・・・どうするのこれから？みんな不安がっているわ・・・」
「一度、ジプシャンに行こうと思う・・・」
「また？・・・どうして？もう戦いを止めたら？」
「どうしろと？ポリスに投降でもするのか！？」
「それは、分からない・・・」
「リキの事・・・か？」
「それも・・・ある・・・食料もやばいし、ＳＣがないのにもう無理でしょ？これでジプシャンに入っても、前線に送られて犬死するだけ・・・」
「ジプシャンにいいように使われるのは俺も嫌だ。だが仕方がないじゃないか？生きる為だ！」

「こんな時代だもん、仕方ないよね。でも自分らしさってあるでしょ？ポリスにもジプシャンにも就かず自由に生きる。それが死んだリキの言葉だった。だから私はついて来た。秀則もそうでしょ？」
「秀則って言うなよ！いつまでもガキ扱いしやがって！もう俺がリーダーだ！」

「わかってる。でも弟はもう帰ってこない・・・悲しいのはあんた

だけじゃないの！みんな悲しいの・・・私もよ・・・」

そう言うと聖は怒り震えるヒデの元を去って行った。

「くそっ！どうすればいいんだよ！？」

ロクの車の中。ロクはポリスに向け、無線を放った。

「こちら黒豹。ポリス聞こえるか？」

ロクのフロントガラスには映し出されたのは桑田ではなく、ロクと同世代の男が映し出された。

『こちら、Ｐ６の我妻。ロクさん！ご無事で！！』

「我妻か？あれ？桑田は？」

『今夜、ロクさんのカストリーの整備らしいので、今ちょうど休んでます。』

「そうか・・・ああ、ジプシーだが男２名、女２名確保。ゲートはどこから入るんだ？」

『すいません。北ゲートも東ゲートもまだ不具合で、西ゲートを使用してくれませんか？』

「あらら、この時間の西ゲートかよ！？車専用の通用口は？」

『先日の戦闘でどこも不具合ばかりで・・・』

「ふう・・・こっちの中央突破の方が大変だな・・・？」溜め息のロク。

大場はさっきの件もあり“中央突破”という言葉に過敏になった。

「また中央突破か！？」と大場。

『はぁ、中央突破ですか？』と我妻も問う。

「い、いや、こっちの話だ。まもなく到着する。警戒がなければ、もうゲート開けてくれ。そうだ一人敵の捕虜もいる。手の空いた物

に迎えに来させてくれないか？」
『了解です。では４７番シャフトを使って下さい。保護の方々は、北の軍エリアまでお願いします。』
「了解！」

無線が切れ。後部座席で無線を聞いてた、大場が口を挟む。
「なんだ？また座席の下に伏せてなきゃいけないか？」
「いや、しなくていい。着けばわかるさ・・・」
「怖い怖い・・・そういや、あんた？ジプシーなのか？」
「ああそうだ！」
「なぜ、ジプシーがポリスに手を貸す？」
「なぜって？・・・親が死んで、物心ついた時からポリスにいたんだ。仕方ないな。選べた立場ではない。」
「そうか・・・親はジプシャンが？」
「話ではね。俺が保護された時には死んでいたらしい。」

直美は無言でロクと父親の会話を背中で聞いたいた。
「５才から銃を持たされ、７才の時には戦場に出された。まあ補助的なものばっかりだったけどね・・・ポリスはジプシーのガキから育った俺らみたいな兵士を、プロジェクトソルジャーって呼んでるんだよ！」
「プロジェクト・・・ソルジャー・・・？」
「さあ、着いたよ。あれがＰ６だ。」

ロクの隊の４台は、Ｐ６に到着した。朝に出てきたゲートと同じ西ゲート前。ゲートの上の塀には朝よりも多い兵の数が見え、ゲートは既に開きかけていて、徐々に中の様子が伺える。

「意外と塀が低いんだな？」と大場。
「ここは初めてか？」

「ああ、ポリスの中に入る事態がな・・・」
「お嬢さんも？」
背を向けていた直美にも問うロク。
「ポ・リ・ス・キ・ラ・イ・な・の・で！」怒った口調の直美。無言で頭を掻くロク。

ゲートの中には朝と違って、たくさんの人が道に埋め尽くしていた。何かの作業をする者。道で追いかけっこをする子供たち。道端で魚を並べる者。夕食の支度だろうか？何か料理をしている者と様々である。道は人で埋め尽くされていた。
「こういう事か・・・」納得した大場。

ロクの隊は、その人が溢れる道を、ゆっくりと車を進めて行く。大半は、道端に避けてはくれるが、老人で耳が悪い者や、足の悪い者を、時折クラクションを鳴らして退かしていた。また子供たちはロクの車が珍しいのか、窓を叩き車中を覗くものまでいる。ロクは子供らに笑顔で手を振った。それを真似して後部にいた大場の子供たちも、外の子供たちに手を振っている。
大場や直美たちは、物珍しいのか窓の外ばかり見ていた。よく見ると建物の中にも人が見え、その上には南向けに、ソーラーパネルを貼ってある建物が多い。

「予想よりも人が多いな。しかも子供が多い・・・」
「今、日本の人口の９割はここだと言われているからな。」
「誰が言った？ジプシャンも入っているのか？」
「そ、それは知らん・・・」厳しい突っ込みに慌てるロク。

街の中を暫く走ると、街から倉庫街に変わる。そして横に長い建物の前に着いた四台は建物の入口前で停車した。その施設前には街の人々がいなく、銃を持った数名の兵がいた。その建物の中からロ

クと同じ格好の小柄の男が、慌ててロクの車に近づいてきた。

「あっー!!俺のジャガーじゃないか!?お前、何勝手に乗り回してんだよ!!」

「ジャガー?名前あるじゃないか?この車?」怒るこの男の言葉を聞いてロクに問う大場。

「え、ええ・・・ジャガーって言うのは基本のベースの事で・・・あの・・・その・・・」なぜか慌て始め、言葉が出ないロク。

「彼の車なんだろ?」ピンと来た大場がロクに問う。

「えっ?ええ・・・はい・・・簡単に言うとです・・・ああ、ここで降りて下さい。俺の担当はここまでです。後は彼が担当しますので・・・」苦笑いのロク。

車外では、先程の彼が、ミラーがないとかライトがないとかを大声で叫び、車の周りをぐるぐる回っていた。ロクは意を決して車内から降りる。

「お前なっ!」

その男はいきなりロクの胸倉を掴んできた。

その１０　ストーム

この世界には、ガソリンがない。エネルギーは太陽光と風力発電だけである。主に車はソーラーカーの原理で動く。通称ＳＣ“エスシー”。以前は、車体の横や、ボンネットの上にパネルを貼り付けるＳＣが主流だったが、最近ではＳＣのボディ自体がソーラーパネルを兼ねているものが増えてき始めていた。ロクが乗っていたのもその一つであった。

「お、俺の車を・・・こ、こんな姿にしやがって・・・」
怒りに震えるその男は、自分よりも背のでかいロクの胸倉を掴むと、ロクを車の運転席側に強引に押し当てた。
「おいおい・・・これって?ダブルの車なの?俺の２番機じゃないの?」

ロクの軽い応対に、ダブルと呼ばれた男は更に逆上し、ロクの体を大きく揺らし始めた。
「・・・んなわけねぇだろ!これは俺用にカスタマイズしてたのに、こんなロクの馬鹿みたいな塗装までしやがって!挙句の果てにこんなボロボロに・・・どうしてくれんだよロク!?」

「そうかダブル用なんだ。どうりで車内が狭いはずだ・・・」冷静に答えるロク。

「ぷっ!」
ロクの後ろにいた、山口はロクの言葉についに笑いを堪えられなくなり、吹いてしまった。アキラやシンらも必死に笑いを堪えていた。

「そうか・・・お前らとうとう俺を怒らせたようだな・・・？」

ロクはその言葉にも平然としていたが、山口たちはダブルの怒りの顔を見てびくついた。すると、ロクの車の助手席から直美が我慢出来ずに外に出てきた。

「あぁ～狭かった・・・」

ロクはふと気がつくと、今まで自分の胸倉を掴んでいたダブルがいなくなっている事に驚く。辺りを捜してみると、助手席側の直美の前に、片膝をついて頭を下げているダブルがいた。

「これは、これはお嬢様。長旅さぞお疲れでしょう。」

「だ、誰よあんた・・・？」絶句する直美。

「これは、これは失礼しました。わたくし、住居担当のダブルと申します。もちろんニックネームでございます。」

「そう、どうでもいいんだけど、みんなトイレに行きたがってるの。あの彼に、ちょっと怖い思いをさせてもらったし。」

直美はドアの反対側にいたロクに視線を合わせた。

「これは、これは私の部下たちが何か無礼な事を・・・あとで良く叱っておきます・・・」

「部下じゃねぇし・・・」

ロクは小声でぼやいていると、もう一人ロクたちと同じ格好の男がロクの後ろに立っていた。

「相変わらず、奴は女に目がないな・・・」

ロクが後ろを振り返る。歳はロクらと同世代。ロクよりもやや背が高く、前髪が長い痩せ型の男だった。ポンチョの下にはライフルだろうか？中になにか長い物を持ち歩いている。

「キーン!?」驚くロク。
「捕虜を貰いに来た・・・」
「お、おお。おい山口!キーンに捕虜を引き渡せ!」
「了解です。おい!アキラ、シン!」

山口らが自分の車の後ろに行き、トランクを開け始める。アキラ、シンも山口の左右後方に立ち、銃を構えていた。

「それにしても、お前にしては派手にやられたな?」キーンはボロボロのSCを見回していた。
「そうかな?」
「山口らのSCが無傷なのを見ると大体察しがつくよ。ロクは少しSCの性能に頼り過ぎるぞ!」

子供たちが車を降り、最後に大場がロクの車から降りてきた。すると反対側にいたロクの方を向きこう叫んだ。
「おい!?ストーム!・・・ジャガーストームってのはどうだ?こいつの名?」
「ストーム?ジャガーストーム?・・・かっこいい!それ頂き!おい!ダブルこいつの名前ジャガーストームになった!」喜ぶロク。

「ロク!勝手に名前付けるんじゃねぇよ!」とダブル。

「俺が付けたんだが・・・気に入らないか?」と大場。
「あっ?あんだぁ?」大場に反抗的なキーン。
「父です・・・」冷静な直美。

直美の父だと分かると、態度と声を豹変させるダブル。
「これは、これはお父様でいらしゃいますか?ジャガーストーム。大変気に入りました。一生大切に使わせて頂きます。なんとセンス

に満ち溢れた名前でしょうか・・・ではこれより皆様をお部屋の方へ、ご案内させて頂きます・・・ロク！後で、顔貸せよ！」

「はいはい・・・」と呆れるロク。

「おい！？ロク！保護の条件、忘れんなよ！」と大場。

「ああ、はいはい・・・」

そう言うと、ダブルと大場の家族は、その長い施設の中に入って行った。それと入れ替えに、その建物からロクらと同じ格好の男が、更にもう一人現れた。身長は１９０センチ以上。体は筋肉質で体重は１００キロはあろうかという体格の持ち主だ。髪は短髪。よく見ると肩から紐で背中に何かを背負っているがポンチョコートで見えない。

「みんなここに居たのか？しかし何だこれ？どうなるとこうなるんだ？」

「ちょっと風が強かったんだよ。バズー。」

ロクにバズーと呼ばれた3人目の男は、ロクらに近づいて来るとその大きさはロクらより遥かにでかい。

「司令がお呼びだ。凄くカンカンだぞ。また何しやがったんだよ？ロク？」

「そうだな。強いて言えば、無断で開発中の車に乗ったくらいかな？」

「お前なぁ。山口たちの前で説教したくないけど、隊長になって部下もいるんだからさ、少しは自重しろよ・・・」

バズーがそう言うと、ロクとキーンは互いに顔を合わせてプッと吹いてしまった。捕虜を連れてきた山口らも、必死に吹くまいとバズーの顔を見ないように後ろを向いていた。

「な、何だよ。何がおかしいんだよ!?」
「お前の口から“自重”なんて出てくるとは予想できなかったよ!」
とロク。
「一理ある!一番自重しなくちゃいけない奴に、そう言われるロクがかわいそうだな・・・」とキーン。
「な、なんなんだよ。キーンまで?」

慌てるバズーを見ていた山口やアキラは、とうとう笑いを耐え切られなくなり吹いてしまった。
「お前らまで、笑ってんじゃないぞっ!」拳を上げるバズー。
「ひーっ!!」

バズーは、ロクやキーンではなく、後ろにいた山口らに飛びかかって行った。止めに入るロクとキーン。
日は西に沈みかけていた。

ロクの車は、エレベーターシャフトを降りていた。シャフトはすぐ止まり、前方の扉が上へと開く。ロクはギアを入れると車を前進させた。
そこは車体整備機器がずらりと並んだある一室であった。作業着を着たスタッフが3名ほど、ロクの帰りを待っていた。すると４０くらいの背の低いメガネを掛けた男が、片足を引きずりながらロクの方に近寄ってきた。ロクも車から降りてきた。

「あーあー、俺の最高傑作が・・・」
その男は、ロクの車を見ると落胆してしまった。
「すいません。高橋技師長。でも走行には問題は・・・」
ロクに高橋と呼ばれた男は、優しくロクに接した。
「誰の許可を貰ったのかな、ロク君?」

「お、おやじさんですが・・・」その優しさに驚くロク。

「確かに、連絡は来た。が、お前が出た一時間後にな！全く、なんでもかんでもおやじさんの名前を出せば済むと思ってんのか！おやじさんはもう現役を退いてるんだぞ！俺は司令の許可を取れっていつも言ってんだろ！？」

「すいません・・・緊急だったので・・・」

「それに百歩譲って、勝手に乗って行ったのは許す！が！しかしこの様（ざま）はなんだ？」

「なにを言うんです。こいつのおかげで４人のジプシーの尊い命が救われたんですよ。」

「結果優先と言う事か？」

「そ、そうは言いませんが・・・」

「しかも車体に特殊コーティングをしたのに、銃弾が突き刺さるなんてありえん。また研究し直さないと・・・」

「うーん・・・それは・・・どうかと・・・」

「まだまだ改良の余地があるな。まあ、今回は結果オーライという事で良しとしよう。それで走行はどうだったんだ？俺はそこが聞きたいんだ。」

「はい、時速４００キロまでの加速はかなり早く・・・それにあの空気圧縮も・・・」

「ちょっと待て！お前テスト走行で、４００キロも出したのか？慣らしってもんがあるだろ？慣らしってもんが！それにあの装置はまだテスト中なのに・・・爆発の可能性は教えたよな？なぜ実戦で使ったんだ！？」

「ちょっと暑かったんで・・・へへへ。」とぼけるロク。

「扇風機じゃねぇぞ！」

「へへへ、それは嘘ですが、あの勢いなら軽くジャンプも可能かと思われますよ！」ここぞとばかりゴマをするロク。
「そうか、よしよし・・・そうだ桑田がメンテしてたんだが、俺様の手が少し開いてたんでな、お前の愛車のカストリーちゃんを少し“手直し”しておいたよ・・・」ロクを見てニヤリとする高橋。

「ま、まさか・・・」
ロクの顔は高橋技師長の言葉にやや蒼くなっていた。

その１１　妖艶なる女総帥

仲がいいのか悪いのか・・・？

ロクと高橋の端から見た関係である。親子程歳が離れている二人は、いつも喧嘩しているように周りからは見えていたのだ。

数あるエピソードにこんな話がある。ロクは昔から好奇心旺盛の新しいもの好きで、テスト車があれば、まず自分が先に乗らないと気がすまないタイプだった。

そんな折、高橋が製作中のテスト車を、ロクが無断で乗り回した事があった。高橋はもちろん激怒し、反省しないロクに対し、仕返しにロクの当時のＳＣにたくさんの電飾をこっそり付けたことがあった。しかしロクはこのド派手になったＳＣで平然と出撃し元に戻す事はなかった。それが、逆に高橋を怒らせる結果に終わった。

また同様な事で、ロクの今のスタイルを決定付けた秘話がある。それは、今度ばかりと高橋はロクのＳＣにあえて黄色と黒の縞模様の塗装をこっそりしておいた時があった。戦場では迷彩色が主流の時代に、あえて目立つ塗装をしてやったのだ。さすがに、この報復だけはロクも反省するだろうと思った高橋だったが・・・しかし、この仕返しもロクは「戦場で目立つ！」「敵の目を引き付けられる。」とあっさり受け入れてしまい、いつの間にか自分のカラーにしてしまった。

それ以降、ポリス内ではこの黄色と黒の斜め縞は、ロクカラーと呼ばれ恐れられた。が・・それ以降そのカラーを誰も真似する者はさすがにポリスからは出てこなかった。

「で・・・今度は、赤と白ですか？」
最初は、蒼くなって驚いて見せたロクだが、芝居なのかすぐにこやかにこう返した。

「そんなに、気になるなら自分で見に行けよ！」
「はい。分かりました。ただ司令に呼ばれていますので、後にします。失礼します！」

ロクはそう言うと、自分の車が置いておる車庫に向かわず、指令室の方に続くエレベーターに駆け込んだ。すると高橋は不敵な笑みを浮かべてロクの背中を見つめていた。

「ロク・・・今度こそ吠え面かかせてやるからな・・・」

指令室の自動ドアが開く。ロクが一礼して入ってきた。ドアのすぐ脇には、我妻や柳沢などの顔が見れる。
「入ります！」

ロクは指令室の雛壇の階段を一気に駆け上がると、そこには2人の黒い軍服を着た男がいた。一人は、朝方ロクを見送った老人が立って、もう一人は２５から３０歳くらいの若い男性が座っていた。ロクは二人の前で直立し敬礼をする。

「黒豹隊、ロク以下３名。只今ジプシー保護より南方より戻りました！」
「ご苦労！・・・で？」

若い男は自分の席に座り、パソコンをいじりながらロクに目を合わす事無く答えた。

「保護は男2名、女2名の家族。それとジプシャンと思われる捕虜1名です。」
「俺の聞きたいのはそこじゃない。ジプシャンの脱走兵か？ジプシーかだ？」
「自分では、脱走兵と言っておりました！」

その言葉に後ろにいた、老人が口を挟んできた。
「ここに来る前に、もうそこまで吐かせたのか！さすがロクだ！な！？弘士！？」
「じいちゃんは、黙っててくれないか・・・それで？男とその家族らは？」
老人はその言葉に、再び沈黙した。

「先程、ダブルに引き渡しました。捕虜はキーンに引き渡してます。」
「で・・・？形式な報告はいい。ロク・・・お前の本音を聞かせてくれ？」
「はい司令・・・我々の保護の同時刻にすでにジプシャンと思われる追手がこの者に近づき、暗殺を謀ろうとしました。」
「それが捕まえた捕虜か？」
「はい・・・ジプシャンの追手の早さは尋常ではありません。どうしても、我々に保護されたくはなかった・・・殺してまでも・・・そう感じましたが・・・」
「ただの脱走兵ではない・・・という事だな？」
「かなり位の高い幹部と思われます。」
「了解した。ダブルに伝えよう。それと暫く、この家族を一般のジプシーと隔離する。護衛も付けろ！２４時間だ！トップクラスで扱ってやれ！」
「了解です！」

「吐かせれる物は全て吐かせろ！手段は選ばない！」
「それは俺の担当では・・・」弘士の勢いに負けそうなロク。
「そうだったな？ご苦労だった。下がってよし！・・・あ！そうそう、高橋技師長から試験車についてクレームが来てるが、これはどういう事かな？」
「それは・・・その・・・ねえ？」老人の顔を伺うロク。

慌てて老人が再び口を挟んだ。
「それは、わしの報告が遅れたんだ。そうだな？ロク？」
「は、はい・・・」
助け船を出す久弥。ロクはうまく話を合わせる。

「相変わらず、じいちゃんはロクにだけは甘いな・・・」
「ロクはお前同様、この久弥の孫だからのう！」
「ロク！いい理解者がいて良かったな？」
「は、はぁ・・・ははは・・・」素直に笑えないロク。
「それとどんな出撃の際も、俺には連絡しろ！いいな？」
「ロクはお前に気を使って・・・」と久弥。
「それは不要だ！連日の戦闘でみんな疲れている。気遣いはいい。わかったな？勝手にこのポリスを出るなよ？寝ていても構わんぞ！」
「了解しました、司令！」

重苦しい状況に早くここを出たかったロクは、二人に素早く敬礼し雛壇を降りていった。すると、ロクが入って来たドアの側に桑田が立っていた。桑田は制服ではなく作業着を着て、顔の所々に油汚れが付いている。
「ロクさん、ご無事で・・・」
「ああ。腹減ったな・・・昼飯がまだでな。」
「カ、カストリーを整備してたんですが、技師長がですね・・・」
「聞いたよ！」

「そうですか・・・では早速・・・」
「取り合えず、飯だ、飯・・・」

ロクは桑田の肩をポンと叩くと、指令室を早々に出て行ってしまった。桑田はロクの行為に顔を少し赤らめ下を向いている。そこへあの老人がやって来る。
「おやおや?桑田さん?規則をお忘れかな?」
「おやじさん!分かってます。分かってます。分かってますよ。分かってますって・・・分かってますから!」
「それならいいんだがな・・・」

桑田はロクが去ったドアを暫く見つめていた。
『こりゃあ、相当重症だな・・・』
久弥は制帽を取ると髪の手をかき始めた。

ヒデと丸田が数名の兵士にボディチェックを受けている。
「こっちに来い!」

ヒデと丸田は、2名の機銃を持つ兵士の案内で、ある一室に連れて来られた。固い岩を採掘したのだろう、周りが岩がむき出しのままになっている。四隅にはろうそくが点けられ、奥には一つの席が用意されていた。
「そこに跪け!」
銃を持った兵に、脅されるように二人はその部屋の中央に跪いた。

丸田は、物珍しく周りを見渡した。
「こんな格好しないと会えない相手かよ?どんだけ偉いんだ~?ここが本当にジプシャンの本部なのか?まるで洞窟だな?」小声でヒデに囁く。

「さあな?俺も初めてだし、前回はリキ一人だったしな。しかし、この中は意外と涼しいな?」
「さあて、総統やらといよいよご対面か・・・」

よく見ると、部屋の左右の端には何かの液に入った男性の生首が5体づつ、円柱のガラスに入れられ飾られていた。

「ヒデ?これ誰の首だよ?それにしても趣味悪いな?夢に出そうじゃないか・・・?」
「ポリスの四天王かな!?」
「ま、まさか・・・?それにしちゃあ皆、柔な顔してやがるじゃないかよ?」

ガラスの中の生首は、全て目を閉じ音もなく、二人を見ているようでもあった。すると部屋の奥の通路から何名かの足音が聞こえてくる。
「頭を下げろ!」
後ろにいた銃を構えた兵の言う通りに、二人は床に手を付き頭を下げた。誰か部屋に入ってくる気配に、更に深く頭を下げる二人。数名の足音が部屋に響く。

「お前らか?リキの手の者という奴等は?」
「は、はい!」
「構わぬ!面(おもて)を上げろ!」

ヒデと丸田は頭を上げると、そこには先程の座席に一人の女性が座っていた。
「私が、ジプシャン軍総帥の土井寛子だ。」

『お、女が総帥かよ・・・?』寛子の姿にヒデは驚いていた。

その１２　四天王の首

そこに座っていた女は、２０代前半、透けたマントに、露出が多い服、数多くの装飾品を纏っている。まるで二人を誘惑するように、女はイスの肘掛に右手を置き、体を斜めにし自分の指をコメカミに当て、露出した足を組み、その大きな瞳で二人を見つめた。たまに揺れるローソクの炎が彼女を妖艶に魅せていた。

更に土井の後ろには、一人の目つきの悪い軍服を着た男が参謀のように控え、二人を見つめていた。

「リキの姿がないな!?どうした?」

突然、女総帥が大声を上げる。

「き、昨日のＰ６との戦闘で死亡しました・・・」

「ふっ・・・柔な奴だな。」

「なに・・・」

ヒデは聞こえるか聞こえないくらいの声を思わず漏らしてしまった。ヒデを横目で静止する丸田。だが幸いにも総帥の耳にはヒデの声は聞こえなかったようだ。

「私の前では、四天王の首を取るなどぬかしておったのにな。・・・それで?その方ら、四天王の首はどうしたのだ?それが入隊の条件だったはずだ?」

「はい・・・それが・・・」

何も言えない丸田に代わってヒデが口を開く。

「正直に申しますと、失敗に終わりました。」

「ほう・・・四天王の首一つ取れずに戻って来たと言うのか?」

「申し訳ございません・・・」

「ならば、入隊の話はなしだ。とっとと立ち去るがよい。」
「出来ません。もうポリスには戻れません。女、子供もいます。なんとか、軍に置いてはくれませんか？」
「正直に話し、装甲車を返しに来たのは、褒めてやろう。最近では仲間の遺体の首を切り取り、これが四天王の首ですとわざわざここに来る族が多い中、お前らの行動は関心する。」

そのセリフを聞いた丸田は、少し蒼くなった。
「しかし、仲間の仇すら取れないお前らに、ここの居場所はない。即刻立ち去れ。」
「もう一度、チャンスを頂けないでしょうか？」

すると、後ろに控えていた男が、土井の前に立ちふさがり、二人に叫んだ。
「帰れと言っているのがわからんのか？」
「どうしてもというなら、せめてリキの仇でも取って来たらどうだ？話はそれ以降だ。」

二人を置き去りにし、土井らが席を立ちその部屋から出ようとした時だった。土井が入って来た通路から、3人の軍服姿の男性が入って来た。中央に迷彩帽を被った小柄な不精髭の男。その右には、何か荷物を持った背の高い痩せ型の男、左には、同じく荷物を持った体格がいい男の3人だった。すると、中央の帽子の男が土井に向かって話しかけた。

「よっ！」
驚いた総帥が声を上げる。
「タケシ！？いつ戻った？前線は？」
「今さっきだ。死神に任せてある。」

「あいつに指揮が勤まるはずがないだろ?」

そうこう二人が揉めていたのを見ていたヒデと丸田であったが、丸田は何かに気づいて横にいたヒデに小声で囁いた。

「こいつ・・・ストラトスのタケシだ・・・」

「ストラトスのタケシ・・・」

「・・・補給を頼んでも、銃弾一つ届かない!俺たちは銃弾がなければただのSC隊だ。面倒だから取りに来ただけだ。」

「勝手に前線を離れおって・・・」

「新しい船も出来上がるそうじゃねぇか?それと新しい武器っての も気になる・・・」

「そんな事で、わざわざここまで戻るお前か?・・・そうか?本当は、大場の事だろ?」

図星なのかタケシの顔が一瞬引きつった。

「・・・で?どうなんだ?」

「追手は出した。まだ見つかってはいない、足の遅いトラックで逃げてる。捕まるのは時間の問題だ。」

「どう命令したのかは知らんが、大場だけはどうにもならんのか?」

「脱走兵は銃殺!その掟は変わらない。」

すると、後ろの参謀が再び口を挟む。

「大場は我々を裏切ったんですよ、タケシさま!」

「残念だが、時機に大場の首はここに届く。」

「その家族も・・・だったよな。」

「珍しくお前らしくないな?もう、忘れたらどうだ?」

「いや、別に・・・そうそう姉貴に土産だ!姉貴の新しいコレクションに加えてくれ。おい!」

そういうと、タケシは後ろにいた二人に声を掛けた。すると二人は、背中に担いだ荷物を土井と犬飼の前に投げ捨てた。

「な、なんだ・・・？」

それは、足、そして手を後ろに縛られた2体の遺体だった。断末魔の顔。開いたままの目。首には紐のようなものに繋がれ、特に首の部分の皮は剥がれており出血の痕ががある。また着ていたと思われる服はボロボロで、体中には無数の傷跡があった。

「P５（ピーファイブ）の二人の四天王だ・・・」

「こ、これが・・・」

「四天王だと・・・？」

ヒデたちは言葉を失った。

その１３　姉弟

丸田とヒデは、タケシの言葉に驚愕した。なにせ目の前にある、2体の遺体はＰ５の四天王というのだから・・・

「こ、こいつらが、し、四天王かよ・・・？」

「まだガキじゃないか・・・？」

あまりにも傷ついた遺体だったが、よく見ると2体の遺体ともまだ顔は幼く、１体の方はまだ華奢な体つきなのに、ヒデも丸田も驚いた。その時、タケシはヒデらに近寄る。

「で・・・？姉貴、こいつらは誰なんだ？」

「志願兵だ・・・だが断った・・・」

「ふっ・・・なぜだ？」

「入隊に条件を出したんだがな・・・」

「どうせ、姉貴の事だ。無理難題を言ったんだろ？」

「ふふふ・・・Ｐ６の四天王の首さ！」妖しく笑う寛子。

「ふはっはっ！そりゃおもしれぇなっ！！」突然笑いだすタケシ。

笑っていたのは、タケシだけではなかった。タケシの後ろに控えていた嶋と石森もタケシと一緒に笑っていた。それを見ていたヒデは、跪いた格好から我慢できず、立ち上がろうとした。しかし、それを察した丸田が沈黙のままヒデを制止した。

「お前ら？俺らがこの2人を倒すのに、何人の部下の犠牲を出したと思う？５０名じゃ済まなかったぞ！しかもＰ６の四天王は、Ｐ５より上だ！」

「どういう事だ、タケシ？」

「こいつらを始末する前に、嘘か本当か知らんがこう言ったのさ。Ｐ６の四天王は俺では倒せんと。最後に苦し紛れに言った話としてはよく出来てたぜ！」
「なんの話だ？」タケシに問う寛子。

「Ｐ６の四天王。こちらが掴んだ情報と交えて言う・・・一人は大男で格闘と爆弾の達人、素手でこいつに敵う奴はポリス広しと言えどいないと言う・・・もう一人は剣と狙撃の達人、バイクに乗ってはライダーたちを切りつけるまさに荒野の狩人・・・もう一人は機関銃とメカニックそしてＳＣ戦闘の達人、機銃を二丁を操る名ドライバーだそうだ・・・」

ヒデの顔が一瞬強張った。
「最後が、ポリス最速の男、拳銃と戦略の達人らしい・・・しかし、この最後の男が厄介らしいぞ・・・」

「厄介だと？」寛子の顔が強張る。
「俺の部下も、北で何人か遭遇している。気づいたら後ろに付かれ、銃を撃つ前には抜きさられている。南に現れたと思うと、北に現れる神出鬼没・・・」
「ほう・・・」
「うちの部下たちは奴をこう呼んでいる・・・奴は“砂漠の雷獣”だと・・・」

「ライジュウ・・・？」
ヒデはあの車と確信していた。
「雷獣とは空想の生き物と言う意味だそうだ。雲と雲を渡り歩く疾風のような獣・・・空まで、飛んでたという報告まであるそうなので、そう呼ぶようになったとか・・・？今じゃ北では、奴の噂は一人歩きしている・・・」

「馬鹿な・・・空を飛ぶだと?」寛子が笑ってみせた。

タケシの言葉にヒデが口を開いた。

「もしかしたら、それは黄色と黒の斑の車では!?」

「そうだ。お前らもこいつに遭遇したか?」

「はい。昨日はそいつに仲間を殺され・・・今日は、３５台のＳＣでそいつを挟み撃ちをしましたが、突破され・・・」

「そいつは話が違うな・・・」とタケシ。

「はぁ・・・?」

「俺が奴が厄介と言ったのは、こういう事だ・・・奴はなぜか殺しはしない・・・」

「ば、馬鹿な!?」驚くヒデ。

「余裕なのか、俺たちを弄んでいるのか定かではないが、奴は銃弾一発撃って来ないのだ!」

総帥が不敵に笑い出した。

「そいつ・・・おもしろいな・・・」

「逆にそれが兵たちを脅(おびや)かしている。弄ばれたドライバーの中には精神的におかしくなった奴もいる・・・」

ヒデは思い出していた。リキが死んだときの事を・・・黄黒の車と接触したのは見ていた。その後、リキの車はハンドルを取られ、横転し炎上していたのだ。

『確かに・・・奴の攻撃には銃撃はなかった・・・』

「先日も、死神の隊が８０台を持って奴を囲んだが、捕らえる事も出来ない・・・そんなＰ６の四天王だ。お前ら素人では到底無理な話だな・・・」

「奴が・・・四天王か・・・?」ヒデは驚愕した。

「しかし一度くらいは、そんな馬鹿と手合わせしてみたいもんだ。最近の敵は柔な奴ばかりだしな・・・」

その言葉に、女総帥が怒り始める。

「タケシ！Ｐ６は最後だ！父の遺言を忘れたか！？」

「分かってるさ・・・奴らに・・・Ｐ６に・・・最後までプレッシャーを掛けて滅ぼす・・・」

「なら、まずＰ５を陥落してからだ。Ｐ６はそれからでも遅くないはず・・・」

「分かってるぜ姉貴。しかしだな・・・こうもそいつに暴れられると後ろが気になってな・・・」

その時、ヒデたちが入って来たほうの後方の通路から、一人の兵が慌てて入って来て土井の側に近寄った。

「入ります。偵察からの連絡で・・・・・それが・・・」

「どうした？続けろ？」兵の言葉に何か気づく寛子。

「はい・・・しかし・・・」

兵はちらりとタケシの様子を伺い発言を躊躇する。

「大場の話なら、構わんぞ！」タケシが雰囲気を察する。

「は、はい・・・追手の者は失敗し不明。大場家族は全員Ｐ６に保護された様子です！」

「ふん・・・仕方ないな・・・」顔色が変わる寛子。

「なら、俺が連れ戻す！」その話にタケシが割り込んだ。

「街の中には侵入は出来る。しかし、今のポリスの内部の侵入は不可能に近い！ポリス内部に潜入させた者に大場を殺らせるよう手配する！」

タケシはヒデを指差す。
「くっ・・・おい、お前！」
「は、はい！」驚くヒデ。
「Ｐ６まで案内しろ！」
「はい！？」

「タケシ！命令を無視するのか！？」剣幕を立てる寛子。
「Ｐ６を陥落しなければいいんだろ！？」
「止めるんだ！大場はこちらで手を打つ！」
「奴は俺を育ててくれた師だ。恩人だ。自分自身で決着つけたい。たとえ殺すんであってもな。それが礼儀だろ？」
「バカな・・・」
「姉貴、本気でＰ６に入れるとは思えないだろ。偵察だよ、偵察・・・偵察するだけだ。」

「勝手にしろ！」
「なら、こいつらは二人は、俺らが貰うぜ。おいついて来い。」
「はい・・・」
タケシは、ヒデと丸田、そして嶋と石森を連れ出し部屋を出て行った。

「大丈夫でしょうか？タケシさまの力ならＰ６など問題ではないのでしょうか？」タケシらの行動が気にかかる犬飼。
「知るか！？・・・犬飼！奴に連絡を取れ！」
「はぁ！？奴と言いますと？」
「ポリス内部から大場を暗殺する！このまま奴を生かしてはならん！」
「はっ！」
「あの女に・・・連絡を取れ・・・」唇を噛み締める寛子。

その１４　手紙

あるポリスの一室。薄暗いガランとした部屋だった。窓はなくベットが一つ、机が一つが置かれ、机の上には銃が４丁置かれている。机の上の照明だけが少し明るい程度。

そのベットの上にロクが寝ている。横向きに毛布にくるまり、熟睡しているのか、子供のような顔で寝ていた。すると、ロクの足元の方にあるドアを叩く音が聞こえる。ロクはベットから起き上がった。

「誰だ？」

そのドアの反対だろうか、長い廊下に面したある部屋のドアの前に桑田の姿があった。

「桑田です。」

『どうした？』

「お休みの所すいません。ダブルさんが、ロクさんを呼んできて欲しいと・・・」

すると、ドアが開きロクが出てくる。ロクは上半身が裸、髪は寝癖で目を細いまま桑田の前に現れた。桑田はロクの裸を見て、慌てて横を向き赤い顔をしたままロクに報告した。

「何だ？」

「ロ、ロクさんが昨日に保護した男性が、ロクさんになら話すと言う事で・・・」

「分かった・・・すぐ行く。」

ロクはドアを一度閉めると、制服の上着を肩に通しながら再び中から出てきた。寝起きなのか顔は不機嫌そうだ。ロクは待っていた桑田を無視するように廊下を歩き始めた。

「すいません。非番の所・・・」
「ダブルの仕事だろ?」
「そうですが・・・」
「またダブルの機嫌が悪くなる・・・」
「すいません・・・ロク兄ちゃんが・・・」

そう桑田が言うと、ロクは急に立ち止まり、後ろを歩いていた桑田を睨んだ。
「桑田!?ポリス内や指令室では、その呼び方はしない約束だろ!?」
「す、すいません!」

桑田を一度怒鳴ったロクだったが、桑田の顔を見ると再び笑顔に戻った。
「なつみ。最近変だぞ。なんか仕事に気持ちが入ってないっていうか・・・その言い方も人前ではするなよ。」
「す、すいません・・・」

ロクは再び、廊下を歩き始めた。少し早歩きのロクを追いかけるように桑田も追いかける。そのロクの背中を見ていた桑田は、意を決したかのように、胸ポケットから紙を出した。そして自分で一度うなずくと、ロクに向かってこう告げた。

「ロクさん!?」
「んっ!?」

再び、振り返ったロクに、桑田は手にした紙をロクの前に両手で突き出した。
「こ、これ・・・ロ、ロクさんに呼んでもらいたくて。」
桑田がロクに手渡そうとしたのは手紙だった。その手紙を見たロクは少し驚いた顔して桑田を見つめる。ロクの顔を見ることが出来ず、目を伏せる桑田。

「おい?こ、これは・・・ひょっとして・・・?」
「す、すいません。規則はわかってます。で、でも。」
「お前なっ!」

ロクは、その手紙を見ると桑田を再び怒鳴り散らした。
「す、すいません。じ、自分の気持ちに嘘は・・・」
「これって、紙だろ?」
「・・・は、はい?・・・それが?」
「大事な資源だろ!?連絡ならメールで済ませ。もったいないだろが!」
「はあ?・・・怒るとこ・・・そこですか?」
「で・・・どこで見つけた?それ?」
「はぁ・・・」
「桑田?」
「は、はい・・・おやじさんから手紙を書くって言って、貰いました・・・」
「読めばいいんだな?」

ロクは、気の抜けた桑田の手から手紙をさっと抜き取った。
「いや・・・あの・・・それは・・・」

桑田はロクが奪った手紙を取り返そうとする仕草をしたが、その手はすぐ自分の口元に戻り黙ってしまった。

「カストリーは、どうなったって？」
「は、はい・・・ロクさん怒りませんか？」
「技師長の悪戯は慣れたよ。」
「本当に怒りません？」
「ああ、今度は何だ！？」
「あの・・・バルカン砲が2門・・・カストリーの屋根部分に装備され・・・」

「はぁっ！？」
ロクの顔は蒼くなった。

その15　ロクの嫁？

「なつみ・・・俺のスタイルは知ってるよな？」

ロクは、桑田に怒っていた。さっきよりも、冷たい言い方に変わっていた。いつものロクはここまで怒らない。本気で怒っている。そう桑田は思っていた。ロクは怒ると黙るタイプ。桑田は知っていた。

「す、すいません・・・」慌てて謝る桑田。
「まあ、後で見に行く・・・」

素っ気無い言葉に、桑田はますますロクが怒っていたのを察する。
「わ、私は、一度指令室に戻ります。ここで・・・」
「それと桑田？後でストームも整備してくれないか？」
「ストーム？」
「今日、俺が乗った試作ＳＣだ。ダブルのブラックカラーにしてやってくれ。」
「ダブルさんが乗る予定だったんですか？」
「そうだ。勝手に俺があの塗装にしたけどな。頼んだぞ。」

ロクはそう言うと、長い廊下を歩き始めた。
「あっ・・・手紙ですが・・・」
「ちゃんと、読んでおくよ。」

ロクは桑田に背を向けながら右手を上げ、軽く左右に振った。ロクは再びいつものロクに戻っていた。桑田はロクの姿が見えなくなるまでロクを見つめている。
「プロジェクトソルジャー・・・か・・・」

ロクは廊下を歩いていると、銃を持った兵が2名付いた部屋の前を通る。部屋のドアは開いていて、中には直美が食事を取っていた。妹と弟は毛布を掛け、そばの長椅子で寝ていた。ロクは、兵に挨拶をするとその部屋に入って行った。

「ここの食事はどうだい？」

直美は少し驚いて、途中だった食事を止めた。

「うーん。まあまあかな・・・」

「それは、良かった。魚ばっかりで俺は嫌だけどな・・・」

「父はまだなの？もう何時間ここで待たせる気？」

「君の父に呼ばれている。これから会うが、基本的には俺の担当ではないんでね・・・」

「そう。父になにかあったら、私が承知しないから！」

「おお、怖い怖い・・・」

「それ！父の口癖よね！？」直美はロクにおちょくられたのを感じる。

ロクはわざと直美の父親の口癖を使ってみた。

「ふふふ・・・気づいたか？」

ロクはそう言うと、笑いながら再び廊下に出て歩き始めた。

「あいつ・・・何か、気に入らないわ！！」ムッとする直美。

狭い部屋にダブルと大場の2人がいる。中央に机。互いに向かい合って座っている。二人とも不機嫌そうだ。部屋の天井の角にはカメラが設置してある。すると、ドアがノックする音が聞こえ、ロクが部屋に入って来る。

「よっ！」
「おっ？」

ロクは、ダブルの肩をポンと叩くとダブルの座っている後ろに立った。
「ほんと、いいとこばかり持っていくな。お前は・・・」

ダブルはそう言うと、部屋から出て行った。代わりにダブルが座っていたイスにロクが座った。

「ご指名、ありがとうございます！」
「さっきの彼に、注射を打たれそうになったんでね。自白剤を打たれるなら、あんたになら話すって言ったんだ。」
「自白剤なんて、ありませんよ・・・脱走を認めたんだから、あんたも素直に吐けば済むことでしょ？」
「こっちにも意地がある！」腕を組み直す大場。
「もう！頑固だな・・・」目を細めるロクだった。

ポリス内の指令室。いつになく人が多い。弘士やおやじさんと呼ばれている弘士の祖父久弥、バズーやキーンはもちろん、柳沢や我妻がこのロクと大場のやり取りを、大きいモニター３つを使って見ていた。指令室には、普段２０名くらいの配置だが、その倍の４０名くらいがこの取調べを見に来ていたのだ。そこへ、先程ロクを呼びに行っていた桑田も帰って来た。

「さて、どうする？ロク？」と弘士。

「そう言えば、言っていた保護の条件とは・・・？」とロク。

「俺の命はいい。子供たちの命だけは守って欲しい。これは必ず守ってくれよ!?」
「既にあんたら家族は、他のジプシーとは隔離して暮らしてもらう事が決まっている。」
「ポリスにしては早い対応だな。街以外にか?それで平気なのか?」
「さあな~まあ最善は尽くすよ!でもジプシャンのあんたへの対応の方が早いんじゃねぇか?正直、今朝は驚いたよ。よほどあんたを連れて帰りたいみたいだな?」
「くくくくっ、俺も、驚いたさ!」バカ笑いをする大場。
「・・・それだけか?条件?」
「ああ?そうだな、もっと希望を聞いてくれるんだったら。まだ頼みはあるんだが・・・」

「何だい?出来る範囲だけだぜ!」
「そうだな・・・?そうだ!うちの娘を嫁に貰ってはくれないか?」
「はあ!?」驚くロク。

「えっ!?」
指令室にいた桑田は驚いた。

「おおーっ!」
桑田だけじゃない。このやり取りをモニターで見ていた指令室いた者たちは一斉に声をあげた。
「どうした?交渉人!?押されてるぞ!」
「桑田!凄いライバル出現だな!?」
「こりゃ、桑田も女の部分を頑張らないとな!?」
「ロクが嫁をもらうのか?どんな娘なんだ?」
「このおっさんの娘!?そんなにいい女か?」
「その娘?今どこに居るんだ!?」

「見に行こうぜ！」
桑田は指令室の最前列から、無言で後ろの野次を飛ばした男たちに向かって鬼の表情で睨み返した。一瞬で黙る外野たち。

「珍しくロクが、押されてるな？」
「さあ、どう出る！？ロク！」
キーンとバズーもこの会話をモニターで見ていた。

「いい女だろ？」
「雨音ちゃんか・・・？」とぼけるロク。
「馬鹿！そうじゃない。上の直美の方だよ。歳もあんたとそう変わらんだろ？料理もうまいし、銃の腕もいい。気は強くじゃじゃ馬だが、なーに、あんたならうまく捌けるさ。・・・というか、俺があんたみたいな息子が欲しいなー！」
「お、俺を息子にか？な、なんでだよ！？」
「さあな。こんな荒んだ時代には、やけに優しいしな・・・」
「あ、ありがとう・・・ございます・・・」妙に照れるロク。
「で？どうだ？直美の件？」
ここぞとばかり大場は机に身を乗り出した。

指令室がロクの回答に全員がモニターを見つめ、部屋全体が静まり返っていた。特に桑田は動揺を隠せない。
「え？え？」

「悪いな。俺には惚れてる女がいるんだ！」ロクが呟いた。

ロクのその一声に指令室は沸きに沸いていた。
「ロク、痺れるぜぇ！」
「か、かっこええわー！」
「ピーピー！」
「桑田良かったなー！」
「これ、お前へのプロポーズじゃないの？」

指令室か沸く中、同じオペの我妻だけがなぜか不機嫌だった。
「・・・」

指令室の男たちは、一斉に桑田を冷やかし始めた。
「もうー！私じゃありませんったら！」目が点になりながら顔を真っ赤にする桑田。

「そうか、残念だな。いい息子になれそうだったのにな。で？ジプシャンの何から聞きたい？」
「今のジプシャンの兵力！・・・かな！？」
「ＳＣは８００台。バイク部隊は２００台。小型サンドシップ１隻、中型が２隻、そして大型の船がまもなく完成する。兵は３０００人かな？」
「なぜ、軍を脱走した？」
「戦争が嫌になった。人間関係。まあ何もかもだな・・・」
「ジプシャンは脱走兵は銃殺と聞く？そこまで危険を冒してまで脱走？あんな子供まで連れてかい？それにあの足の遅いトラック・・・正気の脱走作戦とは思えんな・・・？」
「だから風の強い日を選んだのさ！確かに正気の作戦ではない！だがそこまでやらなければならなかったんだ。」
「下手したら、家族全員が死ぬとこだったんだぜ？それでもかよ？」
「そうだな、あんたから見たら無謀だな。今の総帥には呆れてな。

俺は昔の総帥の片腕だった。死んじまったがいい男だったぞ。」

その言葉を神妙な顔つきで見守る弘士と久弥。
「前総帥か・・・？」と久弥。
「土井一族の事か？」と顔をしかめる弘士。

「トップが代わってジプシャンも変わった。なにか血も涙もないっていうか・・・殺戮と強奪。弱い奴らが泣くのはもう見たくないんでね・・・」
「それが・・・理由？」
「それと・・・俺はあんたが四天王だと思っている！」

大場の言葉に驚くキーンとバズー。
「おっ？やるなぁ、このおっさん！」とバズー。
「言えるが、あまりにもしゃべり過ぎじゃないか？どう思います司令？」
「スパイの可能性はあるだろうな？」と弘士。

「おいおい、勝手にそっちで決めないでくれよ・・・」両手を挙げて呆れるロク。
「昨日の帰りの道、あの包囲網を無傷で突破したのは、とても偶然とは思えないしな！若いのにその風格、度胸・・・あんたはその若さで幾つもの修羅場は潜ってきたはず・・・違うかい？」
「だからあれは、車の性能が・・・」目が泳ぐロク。すると突然大場が真顔になった。

「いいか、よく聞け。その四天王だから話しておく！間もなくＰ５（ピーファイブ）は落ちるぞ！」
「なっ・・・」驚きで声にならないロクがいた。

その16　ポリスの秘密

大場の一言で、指令室は静まり返った。

「どうせ、はったりだろが!?」バズーが大声を張った。
「どうでもいいが、司令?包囲網ってなんですか?」とキーン。
「ロク・・・あいつまたなんかやったな?」呆れる弘士。

「まもなく、ジプシャンは、2隻の巨大シップが完成する。そこにあんたらが開発した、太陽熱砲を取り付ける。対要塞型の新兵器なんだろ?それが完成したらポリスは消える・・・」
「あらら、それは耳が痛いな・・・」
「あららが出るということは、あんたの本音だ。」
「あらら、バレた?」焦るロク。

「かなりの強わ者だよ。このおっさん!」とバズー。
「どこから漏れた情報だ?」とキーン
大場の言葉を聞く度、弘士も久弥も顔が強張っていく

「それだけじゃない。沖の浮遊ドックもジプシャンは把握してるぞ・・・」
「スパイがいるのか?」慌てるロク。
「ああ、仕方ない。作業はジプシーにさせているんだろ?作業時は内部にも入れる!」
「それはそうだが、その情報はトップしか知らない。」
「いるんだよ。そのトップに・・・」

この大場の一言は、指令室をざわつかせた。それは弘士も一緒だった。
「誰かが裏切っているという事か・・・」
「スパイ・・・トップに?」
桑田も不安げな表情でモニターのロクを見つめていた。

「誰がスパイだ?」とロク。
「教えてやりたいが、残念ながら俺の担当ではない。」
「あらら、そこが一番肝心でしょ・・・?」
「そこまでしゃべったら、俺は本当に消されちまうよ。」
「そりゃ、そうだな・・・」
「それと、ジプシャンの総帥は女だ!しかもこいつの悪趣味は四天王の首を飾ること・・・首を切り落としガラスの水槽に入れて飾るんだ。」
「あらら!?」とロク。

ロクの表情は瞬時に曇った。
「息子になる、あんたをあの中に入れたくはないんでな。」
「あらら、勝手に息子にしないでくれ・・・」
「俺の話が嘘だと思うならこんな話はどうだ?最近Ｐ５の四天王が2名不明になってないか?」
「聞いてないぞ!どういう事だ!?」
「何日か前に、捕らえられた報告があった。もう既に飾られているか、タケシの車の後ろを引きずられている。」

ロクの顔が急に険しくなる。

「タケシ？あのストラトスのタケシか！？」
「こっちでも有名人らしいな・・・ああ、恐ろしい男だ。だが今のあんたの腕なら・・・」
「残念だが、俺は偵察専門でな！期待には添えないよ。」
「ドライバーとしても、ガンマンとしてもいい腕なのにな。それでいて偵察隊か？それを封印するのはもったいない。それならあんたが言っていた四天王様はさぞ強いんだろうな？」

「・・・強いのか！？そのタケシって奴？」
「そうだな。俺がイチから育てた。」
「どんな奴が来ようが、問題ない・・・なんとかする！」
「・・・ロク！今ジプシャンを叩け！」
「はぁ！？」

大場は急に机に乗り出してきた。
「ジプシャンの本隊が北にいる今！本部を叩くんだ！本部や周りの基地のＳＣは僅かだ。」
「残念ながら、今のＰ６に敵に攻めに行くような力はない・・・」
ロクは下を向き落胆した様子だった。

指令室は二人の会話に落胆していた。何人かの兵はそのまま指令室を出る者までいる。　弘士は深刻な顔付きになっていた。
「まずはスパイ狩りだな・・・？」

その時だった。警報の一部が鳴り始めた。柳沢が叫んだ。
「北よりＳＣ確認！例の装甲車もです！」
「キーン頼む。バズーは待機だ。街には２次警報。各員戦闘配備だ。ダブルは出れるか！？」
弘士は急ぎ指示を出した。

「前のＳＣなら可能です。」と桑田。
「ダブルの隊はスタンバイだ！」
「了解！」

急遽、指令室が騒がしくなった。
「変です。装甲車以外の３台はデータにありません。新顔です。例の丘に停車しています。夜なので望遠でも確認不能！」
「またキャンプかよ・・・」とモニターを見る弘士。

Ｐ６を見渡す丘に、タケシと嶋、石森そしてヒデと丸田が既に車を降りていた。ヒデの立っている側にはリキの墓があった。ヒデはリキの墓をじっと見ていると、Ｐ６の見える所に移動した。

「Ｐ６か・・・意外と低い外壁だな？ヒデ？なぜこんな無防備な街を、どうして我々が最後に残しているか分かるかい？」タケシはヒデに問う。
「父の遺言が、どうのこうのと言われてましたが？別の理由があるのですか？」
「それは他の兵への建前だ。本当はな・・・Ｐ６が見えないのさ！」
「・・・見えない？・・・と言いますと？」
「なぜ、丸い？」
「はぁ？」
「なぜポリスは、ああ丸いと思う？ヒデ？」
「丸い・・・！？」と戸惑うヒデ。

荒野は間もなく、夜が明けようとしていた。

その１７　夜明けの襲撃

ヒデはタケシの質問に答えられなかった。今まで何度も、この丘からＰ６を見てきて、一度もそんな疑問を持った事がなかったからだ。

「わ、わかりません・・・」

「核戦争前には、この辺りは自衛隊と呼ばれた軍の施設が何箇所か存在した。苫竹、松島、多賀城、そして塩釜の海保・・・Ｐ６は旧陸上自衛隊多賀城駐屯地の跡だ・・・そこに各国は３発の核ミサイルを落としたと言われている・・・」

「核ミサイル・・・世界が滅んだ兵器・・・」ヒデはタケシの横顔を食い入るように見つめた。

「しかし、見ろ！あの街並みは核戦争前の建物だ！なぜあの丸の中だけ建物が破壊出来なかったか？３発の核だぞ！」

「さあ・・・検討もつきません・・・」

「何かあるんだよ！あの地下に！それを確認する。」

「本当に３台だけで・・・？」

「姉貴への意地もある。部下たちは休暇を取らせたいしな。それより本音は“雷獣”だな。手合わせしたい！」

「タケシ様は根っからの戦争屋でな！強い奴がいると聞いただけで、こうやって飛び出すんだよ！」嶋が自分のストラトスに乗り込む。

「我々はどうしたら？」呆然とするヒデたち。

「ここで見てろ！」

そう言うと、タケシら３人は自らのＳＣに乗り込んだ。タケシのＳＣは車のボディにやたらと鉄板のような物を貼り付けている。特に車窓の所は僅かな隙間を残し、全て窓を鉄板を貼り付けていた。

3台とも1人乗り用で、後ろのタイヤが大きいラリータイプであった。すると3台は丘を駆け下りると、真っ直ぐP6に向かってスピードを上げた。

「どうする?ヒデ?」丸田がヒデに問う。
「どうせなら見学させて頂きますか・・・すとらとすのタケシを・・・それと四天王をな!」
ヒデは、丘の上にどっしり腰を降ろした。太陽は東から昇ろうとしていた。

P6指令室が慌ただしくなった。
「先程のSC3台!こっちに来ます!」と柳沢。
「我妻!東ゲートから、風神第一部隊出せ!」弘士が叫ぶ。
「了解。キーンさん!風神第一部隊お願いします!」
『了解!風神マルイチ出るぞ!』
「正気の攻撃か・・・?夜明け前だぞ!?」弘士は眉間を細める。

P6の東ゲートが開く。キーンは屋根ありのラリータイプのSCを乗りゲート内に控えた。先頭に立ってP6から出てきたSCは10台程。各車ジープ系のSCで、後部座席には機銃が設けられ、運転手と機銃者がペアで乗るタイプだ。その中、キーンが無線を飛ばした。

「屋根つきの新顔だ。データがない。各車、左右に展開しろ!正面に立つなよ。第一陣!奴らを囲めよ!」

「たった10台か?寂しい出迎えだな。嶋、石森!雑魚は任すぞ!」

タケシが戦況を見極めていた。
『了解！』
「ふん！マニュアル通りか・・・気に入らねぇな！」

屋根つきは機銃が正面にしか向かない。よって正面に立たないのが、この当時のＳＣ戦のセオリーだった。しかしタケシのストラトス部隊はあえて左右に展開したポリスの１０台の中央部分に入って来る。

「なぜだ？装甲に自信があるのか？気をつけろ。各車仲間を撃つなよ！」
『任せて下さい！キーンさん。なーに、たかが3台です！』

タケシのストラトスは急加速を駆けると、１０台の中央に入り車体にスピンを駆け、回転しながら一斉に銃撃を仕掛けた。ポリスの先発隊の１０台も機銃で応戦するが、一瞬の内に大半のポリスのＳＣを走行不能とした。

「機銃が効かないのか？指令室へ！俺が出る。」

Ｐ６指令室。各員が小まめに動いている。
「柳沢、戦況は？」
「風神押されてます！第一部隊６台が走行不能！風神の第二部隊も投入します！」
「機銃が効いてないようです！」と我妻。

「タイヤを狙え！後方の丘の上の装甲車は？」
「動きはありません！」と柳沢。
「わからん、なぜ動かん？圧倒的なのに・・・」

その頃、キーンのＳＣが単独でタケシのストラトスに、接近戦を仕掛けていた。
「こいつ・・・まあまあやるな！」

「こいつ、装甲の厚さで分からなかったが・・・ランチャーストラトス！？ま、まさか？」キーンがタケシの車種に気づいた。

Ｐ６指令室。
「風神より、連絡！敵はランチャーストラトスの車種！」
「ストラトス？ストラトスのタケシか？」
「Ｐ３をたった3台で撃破したという、ジプシャン最強ののチームストラトスか・・・？」
「ダブルの山猫隊の援軍を出す。桑田！ロクのカストリーは出れるのか？」
「走れます！が、まだバルカンの最終調整が・・・」
「ロクを呼べ！」
「はい！」
「バズーは？」
「北ゲートが開かないため、南に回ってます。」
「遅い・・・後手に回ったな・・・」
「山猫の２０台、東ゲートより出ます！」
「頼む・・・各車、敵の動きを良く見ろ！」

キーンが出た東ゲートから、ダブルの隊が出てくる。ダブルの隊も２０台、車種はラリー系、屋根付きのものが多い。

『タケシ様。東より敵の援軍です！』と嶋の無線。
「雷獣はどうした？雷獣を出して来い！こいつらじゃ話にならん！」
『斑模様は、まだ見当たりません！』と石森の無線。
「もったいぶるじゃないかＰ６！」

大場とロクが控えていた部屋に、桑田が突然入ってくる。ロクが後ろを振り返る。

「ノックぐらいしろよ、桑田！」
「す、すいません、緊急です！北からストラトスが・・・」
「ストラトス！？」驚くロク。
「ストラトスのタケシか！？」
「ロクさんもカストリーで・・・」
「整備中だろ？」
「出れる事は出れますよ！」
「わかった・・・あんた、また後でな。」
「タケシなのか？」と大場。
「そうらしいな・・・あんたが引き込んだらしいな？」
「かもな・・・」ニヤリとする大場。

廊下を車庫へと急ぐ、ロクと桑田。
「急に起こされたけど、今何時だ？」
「夜明け前ですね！」

「なぜ、敵は夜に移動して来たんだ・・・？ＳＣの戦闘で夜はタブーだろ！？それで、戦況は？」
「キーンさんは劣勢。ダブルさんも出てます！」
「バズーは？」
「南のゲートにまわっていて、遅れています！」
「武器がない俺にどうしろと言うんだ？」
「ロクさんは、スタンバイという事ですから・・・」
「待機って・・・俺も出るぞ！」
「ですから・・・ロクさんは待機です！」
「仲間を見捨てる奴がどこに居るんだよ！？」
「・・・はい！そうですよね！それがロクさんかと！命令無視はいつもの事ですね！？」薄笑みを浮かべる桑田。

そうこうしていると、二人は格納庫に着いた。そこにはストームと同じカラーをしたＳＣが置いてあった。外見は同じだが、後ろのタイヤがストームよりも大きく作られている。最大の違いは、ドアの上の屋
根の左右の部分に2門のガドリングバルカン砲が付いている。ロクはその砲を見ると落胆した。
「あらら、想像以上に酷いな。美的センスもない・・・」

「説明します。このギアの後ろのＴ字のスティックコントローラーを押し込むと屋根からバルカンが飛び出ます。で、スティックを回すと、砲座は３６０度回転します。角度は少し押し付けるような感じで倒して下さい。自分の車体には打ち込まないようにはセッティングはしてます。どうせタイヤしか狙わないロク仕様に砲筒の角度を深くするのには苦労しましたよ。」

「助かる・・・」
「このＴ字の右横が発射ボタンです。弾は２０００発積んでますが、

普通に撃ってたら1分も持ちませんよ。運転中は大変かと思います。本来は助手席の担当ですから・・・」

「後は実戦で・・・うん、この間の箇所もよく直ってる！さすが桑田ってとこだな！？」

「どうも・・・そう言えば、なぜこの間は戦闘に・・・」少し照れる桑田。

「偵察帰りにたまたまだよ。結果的にダブルを救う事になったがな・・・」

「さてはダブルさん？またあのセリフですか？」ニヤリとする桑田。

「ああ・・・またロクの奴、美味しいところを・・・ってな・・・」ニヤリと返すロク。

「出た出た・・・」更に笑いを堪える桑田。

「さあーて、こっちも行きますか・・・？」

ロクがジャガーのエンジンを掛ける。車庫内に響き渡る轟音。傍にいた桑田は思わず耳を塞ぐ。

その頃、ダブルとタケシも接近戦を展開していた。対決は1対1だったが、タケシは既に逃げの態勢に入っていた。そこへバズーの高速戦車が駆けつける。

「遅いぞ！バズー！」

『すまん・・・』

バズーが乗る高速戦車はアシカムと呼ばれていた。戦車と言われているが砲台がなく、いくつかの機銃が見える程。丸み先端、全長は12メートル、高さは3メートル程と高く、通常の戦車を凌ぐスピードでこの戦闘に割って入って来た。

『敵の高速戦車です！』と嶋。

『雷獣が出ないなら、戻りましょう！奴相手では分が悪い。Ｐ６にも挨拶になったはずです！』と石森。
「奴は足が遅い。まだだ！こいつらを追い込め！」

バズーのアシカムが入った事で、形勢を逆転したかったポリス側だったが、アシカムの足の遅さが仇となった。

「邪魔なんだよ！バズー！」ダブルが無線に叫ぶ。
『す、すまん！』
『あいつら、バズーの足の遅いのを利用して・・・バズーを盾にしてる・・・』とキーン。
「ストラトスが！」
『あの装甲で足が早すぎるぜ！しかも、なんてパワーだ！』

Ｐ６ポリス指令室。
「風神隊、負傷多数！」我妻が叫んだ。
「何してるんだ？うちの連中は？たった3台に！山猫の2次部隊を投入するぞ！」
「・・・はぁ？いえ・・・は、はい・・・司令！ロクさんが出ると言っております！」我妻が叫ぶ。
「黒豹隊か？ロクはまだ待機だ！」
「いえ！ロクさんのカストリーだけです！」
「機銃の取付けは終わっているのか？しかもバルカンは試作機だろうが！？」
「はい！桑田が大丈夫と言ってます！」
「・・・目には目か・・・よしロクを出せ！」

Ｐ６を見下ろす丘のヒデと丸田。
「圧倒だな・・・」とヒデ。
「た、たった３台で５０台を相手してる・・・凄いな・・・」目を丸くする丸田。
「奴は、その数を利用している。数が多い程、ポリスは不利だな・・・完全にタケシの思う壺だ・・・ん?あれは?」

その時、ヒデはポリスの西ゲートから１台のＳＣが出てくるのを発見する。
「や、奴だ・・・斑の雷獣だ!遂に出てきたか!?」

薄暗い荒野を赤いライトを付け、爆進する斑模様の車があった。

その１８　ロクＶＳタケシ

西のゲートから猛スピードで戦場に出てきたのはロクの愛車、ジャガーカストリーだった。カストリーは先に乗ったストームと違ってやや車高も高く。後部車輪はストームよりやや大きくなっている。塗装はやはり黒と黄色の斑模様だった。

ヒデは暗闇を走るジャガーを見つけると立ち上がった。

「奴だ！間違いない！」

「しあしあれは、昨日もおとといのとも違うんじゃねぇのか？」丸田がジャガーの少しの違いに気づいていた。

「奴をやらないと、軍に入れない！丸田出るぞ！」

「タケシにここで待機と言われたぜ！？」

「口実は後からするさ。行くぜ！後部の機銃を頼む！」

「わかった！」

装甲車に急ぎ乗り込む二人。

『タケシ様！西から新手です。雷獣では！？』と嶋の無線。

「やっと出てきたか！？良い演出じゃないかＰ６！？」

『おい！ロクが来たぞ！』とバズーの無線。

「ロクめ。いつも美味しいとこを・・・」ダブルが口を尖らせた。

『斑です！やはり雷獣かと思われます！』嶋の無線。

「さあ。手合わせと行くか。嶋、石森！他は任せる。手出し無用！奴とは１対１でやりたい。」

タケシは、１台だけ戦線を離れロクの正面に向かった。ロクはそれを察知すると、タケシのストラトスを誘うように別の場所に連れ出した。それに遅れまいと、タケシのストラトスもジャガーに取り付いた。

「これが、ストラトスか？足が速いな！なら・・・」

ロクはジャガーのギアをトップに入れる。

「速いな！雷獣！噂では４００まで上げられるはず。フォーミュラータイプのエンジンを搭載してると聞く！しかし・・・舐めるなよ。こっちもだ！だがあのバルカンはなんだ。武器の報告は聞いてないぞ！？」

タケシも負けずにスピードを上げ、ジャガーを追い上げた。

Ｐ６指令室。柳沢が司令に叫ぶ。

「丘の装甲車！動きました！」

「動いたか？バズーを当てろ！」と弘士。

「何ーっ！装甲車が？」バズーが無線を受ける。

『はい！今そこに来れば戦況は不利です。』

「わかった。食い止める。ダブル後は頼むぞ。」

『だから邪魔だって！』キーンが無線に割り込む。

「ロクは？」

『奴なら、ストラトスの１台と交戦中だ！』

バズーの無線にダブルが割り込む。

タケシのストラトスがジャガーの後ろに喰らい付く。ジャガーの走行で細かい小石がストラトスに当たる。
「よくついて来れるな？なら・・・これを使ってみるか？」
ロクは桑田に説明を受けた、Ｔ字のスティックコントローラに手を掛ける。すると屋根の一部と左右のバルカン砲が上に突起し、前に向いていた砲座が１８０度回転し、タケシのストラトスに向けられた。
「てぇー！」
ロクの車からバルカンが発射されたが、まだうまく使えないのか、後方のタケシに掠る事も出来ない。
「あらら・・・だから新しい機械嫌いだよ・・・」
「こいつ、乱射か！それとも作戦なのか・・・？」
タケシのストラトスはロクのジャガーの後ろに付いたが、ジャガーのバルカンで真後ろには付けなかった。
「真後ろに付かせない気か！しかし奴は機銃が効かないタイプ。タイヤを狙うしかない！」と
タケシが乗るランチャーストラトスは、車体のボディに機銃が内蔵しており、正面の物しか照準が合わせられない。
「離れないのか・・・しつこいのは嫌いなんだよね！？」
ロクは意を決して、後ろに付いていたタケシに対して急ブレーキ

をかける。

慌ててタケシはハンドルを切り、ロクの右横にかわした。すると、ロクは再びアクセルを踏み、スピードを上げタケシのストラトスの真横に付けた。

タケシは鉄板の張られた細い隙間の窓から、ジャガーの運転席を見る。ロクもストラトスの座席を見る。一瞬だったが、目を合わす二人。ロクはタケシに一瞬笑ってみせる。するとロクはバルカンを真横に向け、あえてタイヤを狙って発射した。弾丸はストラトスの後輪のタイヤに命中する。

「くそっ！横にバルカンが！？」

タケシのストラトスは車体を揺らしスピードが落ち、ロクの車から離れていった。

バズーは戦車内から、その光景を見ていた。

「あのロクの馬鹿野郎がっ！」

「嶋？聞こえるか？後輪をやられた！」

『平気ですか？』

「辛うじてまだ走れる。このままオメオメと帰れるかよ！雷獣のタイヤを殺るぞ。“三方魚雷”だ！」タケシの負けず嫌いな性格が分かるセリフだった。

“三方魚雷”・・・第二次世界大戦時、飛行機が主力となった頃、わずか３機の雷撃機で駆逐艦などの足の速い艦艇を沈めるために編み出された航空機での戦法の一つだ。

まず１機目の飛行機が艦艇の横側から魚雷を発射、艦艇がその魚

雷に水平になるために舵を切った瞬間に、2機目が艦艇の回避航路に魚雷を打ち込む。更に艦艇が二発目の魚雷を避けるために舵を切った瞬間、3機目が艦艇の動きを予想して3番目の魚雷を側面に打ち込むという、各機別々の箇所から攻撃する戦法だった。

ロクのジャガーの周りに3台のストラトスが集まり始めた。

「囲まれたか。まだやるのか？タイヤは破壊したのに。何をする気だ！？」

「仕掛けるぞ！1番！」タケシが嶋を呼び込む。

『おう！』

するとロクのジャガーの側面に嶋のストラトスガ勢いよく体当たりを仕掛けた。

「なんだ！こいつ！？」突然の体当たりに回避するロクのジャガー。

「2番！」タケシは次に石森のストラトスを呼び込む。

『おう！』

間一髪でこれをかわした瞬間、別方向から来た2台目の石森のストラトスがジャガーの側面に突っ込んでくる。

「だから、なんなんだ！？こいつら！」

これも間一髪でかわすジャガー。しかし、ジャガーのすぐ横にいたのはタケシの3台目のストラトスだった。

「もらったぞ！雷獣がぁー！」

「くっ・・・」慌てて再びハンドルを切る。
タケシのストラトスがジャガーの側面に銃撃をしようとした瞬間、中に割って入ってきたのは、バズーのアシカムだった。
「バズー！？」
『何やってんだ！馬鹿野郎がぁー！』無線でバズーがロクを怒鳴る。

「ふん、救われたな雷獣・・・もういい、こっちもタイヤをやられている。バッテリーも僅かだ！使い過ぎた！引き上げるぞ！」タケシが各員に無線を飛ばす。
『ヒデの装甲車が来ています。後は奴らに・・・走れますか？タケシ様？』と嶋の無線。
「なんとかな・・・雷獣・・・噂通りだな・・・しかし弱点はある・・・しかし1対1の勝負なら俺は奴に・・・」
3台のストラトスは戦線を離れて行った。

Ｐ６の指令室。
「敵のＳＣ３台、撤退します。」と柳沢。
「山猫より連絡、ワレ追撃する！どうしますか！？」と我妻。
「追うな！まだ装甲車がいるんだろ？風神は撤退！分が悪い。山猫に負傷者の手当てに回れと伝えろ！」と弘士。
「了解！」
「ロクはどうした？」
「1台にダメージを与えた様子です。ストラトス3台を追っています！」
「もう追わすな。バズーはどうか？」

「ジャガーのそばです。装甲車を抑えています！」と柳沢。
「安全圏まで追え。それ以降は追うなと伝えろ。たった3台にこっちのダメージが多きすぎる・・・負傷者の手当てを優先する！」

「タケシの後ろに付く。丸田！後続車を頼むぞ。この場を離れるぞ！」
『分かった。任せろ！』
ヒデの装甲車も、機銃で後方の敵を牽制しながら、タケシらの離脱に合わせてその場を離れて行った。

この戦いはポリス側にダメージを与えた。死者5名、負傷は16名、SCを3台に及んでいた。

P6指令室。
「この、馬鹿野郎がー！！」
バズーはロクの顔を見るなり、右の拳でロクの顔面をぶん殴った。
ロクは指令室の後方に大きく飛ばされていた。

その19　儚い夢

殴られたロクは床に倒れこんだ。バズーは更にロクに馬乗りになり殴り付けようとした。近くにいたキーンが慌てて割って入った。
「どうしたんだ？バズー！？ロクが何をしたんだ？」

指令室が騒がしくなった。大男のバズーを止めるのはキーンだけでは足りず、我妻や柳沢の姿もあった。ダブルは指令室の端で冷静にその様子を見つめるだけであった。また桑田はその様子を見て、涙目になっていた。

「いい加減にしろ！」
弘士の一言で、バズーも冷静となる。

「どうしたんだ？バズー？」と弘士。
「こいつ！ストラトスのタケシを仕留められたのに、タイヤだけを狙って、逃がしやがった！」
「どういう事だロク？」弘士がロクに問う。
「それは・・・」

ロクは口からの血を拭きながら弘士の前に立ち上がった。すると桑田がその雰囲気に我慢出来ず、涙目のまま口を開いた。

「わ、悪いのは私です！ロ、ロクさんは悪くないです。バルカンの調整が甘く・・・説明不足でした。メカニックの私の責任です。」
「また、銃が引けなっかだけだろ？そうだろ？ロク？」バズーが再びロクに詰め寄った。
「バズーさん？取り付けて、すぐ実戦なんて・・・無理に決まってるじゃないですか！？」

「やめろ！桑田！俺が悪かったんだ。車体を頂きたかった。ストラトスの構造も知りたかった。それでタイヤだけを・・・相手をナメていたよ。相手があのタケシって事もすっかり忘れていたしな・・・」

「ロクさん！？」と桑田。

「すまん。みんな・・・」指令室にいたみんなに頭を下げるロク。

「謝るなら！部下を亡くしたダブルとキーンに謝れ！」と再びバズー。

「俺はいい・・・」とキーン。

ロクは指令室の端にいたダブルの方を向くと深々と頭を下げた。

「ダブル・・・すまん・・・」

「もういい・・・」

ダブルはそう言うと、指令室を出て行った。

「バズー？なぜロクが撃ったＳＣがタケシだと？」と弘士。

「あっ・・・いや・・・なんとなくだ・・・勘だよ。奴の戦いぶりを見て・・・どっちにしろ、ストラトスだろ？逃がしたのには変わりないだろうが！」

「バズーさん見損ないました。慣れない武器持たされて戦ったロクさんの身になって下さい。ロクさんは戦闘チームじゃないです！偵察隊じゃないですか？」頭に血がのぼった様子の桑田。

「もういい。桑田・・・すまなかったバズー！キーン！」再び頭を下げるロク。

「わかりゃーいいんだよ・・・」とバズー。

「気にするな。ロク！」優しく笑うキーン。

「ちゃんと仕留めていたら最後だってああじゃなかったはずだ！俺が出なければ死んでたぜ！」

「そうだな・・・すまないバズー・・・」

弘士は指令室の雛壇の上でその様子を見ていたが、やがて自分の席に着いた。すると弘士はロクを自分の席に呼びつけた。
「ロク！ちょっと！」
「はい・・・」

ロクは殴られた顔を押さえながら、弘士のとこに上がっていった。他の者たちも各々自分の席に戻って行ったが、桑田だけはロクと弘士の方をじっと見ていた。
「顔は大丈夫か？」と弘士。
「バズーが本気だったら。この程度ですみませんよ・・・自分が甘かったんですから・・・」
唇の血を拭きながらも笑って見せるロク。
「そうだな・・・午後からP5だったよな？山口にでも行かせるか？」
「まだ山口では無理ですよ・・・予定通り自分が行きます。死龍の事も気になりますし・・・あのおっさんの話も確認したく・・・」

「大場の話を鵜呑みにするなよ！」
「しかし、嘘を言ってるようには見えません・・・」
「それとバズーの言う通り、本当にストラトスのタケシだったのか？」
「わかりません・・・何度か後ろを取られましたが、撃ってこなかったんですよ。」
「なぜだ？」
「こちらの装甲が厚いのを知っていたのか？それで無駄弾を使わなかったのか？何か弄ばれた感じはしました。」

「そうか。・・・それとバルカンの件は、高橋技師長を責めないでほしい。」
「別に、俺は怒ってなんかは・・・」

「俺が頼んだ。お前の最近のデータからも付けた方がいいと思ってな。まして最近のＰ５のジプシャンの包囲網を非武装で行かせたくはないのでな。」
「わかりますが・・・自分は・・・」
「わかってるつもりだ。ただお前の腕を、偵察隊だけで終わらせたくはないんだ。戦況も見ての通り不利だしな。」
「すいません・・・」
「謝るな・・・では昼まで待機だ。帰ったらまた別件で話がある。時間をくれないか？」
「了解！」敬礼をして弘士の席から離れるロク。

ジプシャン軍本部。土井総帥の前にはタケシ、嶋、石森の他、ヒデと丸田の姿があった。
「Ｐ６にやられたと聞く・・・？」と寛子。
「挨拶に行っただけだ・・・」とタケシ。
「例の雷獣という奴か？」
「そうだ・・・」唇を噛み締めるタケシ。
「こちらはタイヤの破損。向こうは、死傷者を出させています！負けたわけでは・・・」

嶋がタケシをかばう様に言い訳する。
「様はないな・・・」と寛子。
「このままでは、済まない！雷獣が！」
「明日には、前線に戻る予定のはずだ！指示通りにＰ５を先に陥落させるんだ。いいな！」
「了解・・・」

タケシは納得がいかず下を向いている。ヒデは自分たちの明日の身を案じていた。

「北か・・・」

Ｐ６の医務室。ロクがベットに横たわっている。すぐ側に桑田がロクの顔にタオルを当てている。そこに４０代くらいの白衣の女が入ってくる。髪は長く大人の女性を感じる容姿は、桑田と正反対な感じさえもする。

「また、喧嘩したの？ロク？」と白衣の女性。
「聞いて下さいよ。関根さん、バズーさんがいきなりですよ。殴ってきたの・・・」
「もうよせ、桑田・・・」
「だってぇー。」
「まあまあ、昔からあんたたち仲がいいんだから・・・心配ないわよ。なつみ。本人たちが一番わかってるはずよ。」

関根と呼ばれた女性は棚から何やら取り出した。
「仲間思いなんだよ、バズーは・・・だからああやって熱くなる。」とロク。
「私、バズーさんの無神経なとこ嫌いです。」凄い剣幕の桑田。
「大事な兄さんの一人だろ？」
「殴られて、そんな脳天気なロクさんも嫌いです！」舌を出す桑田。
「はいはい・・・」

関根が桑田にシップを持ってくる。
「なつみ、ロクの顔にシップを貼っておきなさい。」
「はーい。」
「それと、昨日ロクが保護してきたジプシーの家族の結果が出てる。全員健康！遺伝子にも怪しいところなし！・・・と言いたいところだけど、誰一人本当の家族ではなかったわ。」

「と、言うと？」
「子供たちは、皆彼の血を引かない。子供たちも皆、別々の遺伝子よ。まあ今となっては珍しくない家族構成だけどね・・・」

「そうですか。やっぱり家族を装ったスパイでしょうか？」
「そう考えるのが筋かな？私には軍事的な事は分からないわよ！」
「桑田、後でこの資料を指令室に持って行ってくれ。」
「了解です！」小さく敬礼をする桑田。
「それにしても、ロクがここに来るのいつ以来かしら？」
「覚えてないですよ。」
「確か、左の鎖骨の所！貫通してしばらく復帰出来なかった１２の時じゃない？」
「関根さん。よく覚えたますよね？」
「覚えてるわ。あれから私が、ロクの心のケアまでしてあげたんだもん。よくここで添い寝してあげたわよね・・・」

桑田は自分の頬に手を当てる。
「な、なんか・・・爆弾発言です・・・」
「あら、ロクは私みたいなおばさん、もう相手にしてくれないわ。そうでしょロク？」

「そ、そんな事ないですよ・・・」照れるロク。
「うれしいわ・・・親子くらい離れてるのに・・・」
「け、結婚しないんですか？せ、関根さんは？」

ロクと関根の怪しい雰囲気に桑田が慌てて口を挟んだ。
「これでもしてたのよ・・・子供もいたしね。ジプシャンの襲撃で旦那と子供と離れてしまって・・・生きていればなつみくらいかな。女の子だけど・・・」
「いつか、会えますよ。」精一杯に笑顔になる桑田。

「そうだといいわね・・・」

寂しい表情で関根は二人の側を離れ、自分の仕事に戻って行った。

「・・・それでですよ。ロクさん！」真顔でロクに詰め寄る桑田。

「な、なんだ？怖い顔して？」顔が強張るロク。

「あ、あの・・・尋問の際、ロクさんの惚れてる人って？」目を合わさない桑田。

「ふっ・・・なんだ聞いてたのか？」ロクは笑顔に戻った。

「指令室は朝５時なのに、満員札止めでしたよ。しかもポリスの人たち賭けとかしてるし・・・最低ですよ！」

「ああでも言わなきゃ、あの大場って人諦めなさそうだろ？」

「そ、そうですよね・・・な、なーんだ・・・」

桑田は照れて、ロクに背中を向けた。

「それに、俺たちプロジェクトソルジャーは恋愛禁止だぞ。お前も知ってるだろうが？」

「分かってます。でも・・・戦争が終わったら・・・ソルジャーでなくなったら・・・ロクさんも隊長とかじゃなくなったら・・・恋愛してもいいんですよね？」

「女って、よくそんな先の事まで考えるよな？生まれた頃から、ドンパチしてたんだぜ・・・俺らが生きている内に、果たしてこの戦争が終わるのかな？」

「戦争の終わりか・・・来ますよ。必ず・・・」

桑田は低い天井を見上げた。

その２０　女四天王・死龍

ロクが車内にいる。再びエレベーターシャフトを上に上がろうとしていた。ロクは運転席にて、車内の異変に気づく。ある場所に見覚えのあるスイッチが増えているのだ。

「あの、おっさん！またこんないらんもんを俺の車に取り付けやがって・・・で？今度はなんだよ？」

車内を見渡すロク。すると後部座席に目が止まった。暫くすると車内でロクは、少しイラついていた。するとハンドル内のボタンを押し、指令室を呼び出した。フロントガラスに桑田の映像が映し出される。

『こちら、指令室桑田です！』

「桑田？なんか俺に、報告はないのか・・・？」

ロクの怒っている口調に桑田は慄く。

『す、すいません・・・技師長が・・・私もさっき知らされたばかりで・・・』

桑田は、急に小声になった。

「俺のメカニックとしては失格だな？」

『す、すいません・・・』言葉が詰まる桑田。

「技師長は？」

『今、ストームの整備かと・・・？』

「まあいい。どうせ俺はあの人のモルモットだからな。」

『ブースターの使い方はストームと同じ。使用中の注意も同じ・・・ひびが入れば半径２０メートルは・・・』

「骨も残らない・・・か？」

口元だけは笑って見せるロク。

『はい・・・それで、明日の帰還時刻ですが・・・？』恐る恐る桑田はロクに問う。

「夕方には戻る。あのタケシはまた来るぞ。そんな気がする。ダブルやキーンにもそう伝えておいてくれよ！」

『ひ、日帰りですか？り、了解です。でも帰りは夜になりますね？そう伝えます。夜の走行でバッテリー切らさないで気をつけて下さい・・・』

「なんとかする！」

『出た出た・・・』笑いを堪える桑田。

「よし！黒豹出る！」

するとシャフトが止まり、前方の扉が開きロクのジャガーはジプシーが賑わう街へと走り出す。

ポリス指令室。弘士の席に、祖父の久弥が呼ばれていた。

「相談とは・・・？」と久弥。

「ロクの件ですが・・・」腕を組み、深刻な弘士の表情。

「うむ・・・」何かを察した久弥。

ジプシャン軍本部。ヒデと丸田が控えている部屋にタケシが入って来る。

「ヒデと言ったな。他に仲間は？」とタケシ。

「今は山側のキャンプにいます。」

「明日から、俺の隊に所属してもらう。その前に、してもらいたいことがある・・・」

「はぁ？」

「全ての仲間を連れ、今朝の場所に待機して欲しい。そこで今夜からキャンプを張ってくれ。なるべく派手にな。」
「仲間とですか?今朝のところですか?」丸田と顔を見合わせるヒデ。
「そうだ、頼んだぞ。」

そう言うとタケシは部屋を出て行った。
「どういう事だ?ヒデ?」と丸田。
「奴は、動く・・・」
「はあ!?」
「行くぞ!丸田!」
「おいおい・・・どこに行くんだよ?」
「キャンプに決まってんだろ!これから面白くなるぞ!」ニヤリと笑うヒデ。

ポリス指令室。ある広い会議室。
「ロクを偵察隊から外す?」と久弥。
「銃が撃てない者を、最前線に置くというのは・・・参謀たちも同意見です。」
冷静な口調の弘士に久弥は反論した。
「その為の偵察隊だろうが?」
「しかし、こうも周りから反発があれば、私としても外す方向で考えなければなりません。」
「どこに、ロクを配置するんだ?」久弥が身を乗り出す。
「P7(ピーセブン)かと・・・?」
「ロクに車を降りろと言うのか?しかもあのロクをあそこに?無理な話だろ?」
「我々もロクを頼り過ぎてます。それも彼にはプレッシャーになっているかと・・・?」

「本人がなんと言うか・・・」久弥は下を向いた。
「Ｐ７の教育係りで以前の様に、新しい者を育てて貰うのはどうでしょうか?決して悪い話ではないかと・・・ポリスの我々より、ジプシーの志願兵をまとめてもらうには適任かと思います。」
「その教育係りの仕事は、わしの最後の仕事だと思っていたんじゃがのう・・・」久弥が渋い顔で弘士を伺った。

その頃、ロクは街を飛び出し、Ｐ５へと北に向かって走り出していた。Ｐ５はＰ６の約３００キロ北、現青森の三沢市近辺に位置する。この間には、いくつかのジプシャン基地が存在する。ロクはそれを避けるために、山脈寄りのルートを迂回して北に向かう。世に言うポリス道だ。

「ガトリングバルカンとブースターのおかげで、なんかケツのバランスが悪いな・・・重心が寄ってるのか?さてさて、テスト走行なしでうまくＰ５まで辿り着けるかな?」
ロクは車内でひとり呟いていた。ジャガーは果てない荒野を北へと突き進んで行く。

ポリス内のある整備室。高橋が何人かでジャガーストームを整備している。屋根の部分にはロクのカストリーと同じ、２門のガトリングバルカン砲が取り付けられようとしていた。そこへ桑田が作業着に着替え高橋の元へやって来る。

「すいません。すぐ手伝います!」桑田は急ぎ手袋を着け始める。
「奴はＰ５へ行ったのか?」高橋は作業を続けながら桑田に問う。
「はい・・・だいぶ怒ってましたよ。ロクさん・・・」

「だろうな・・・」
「自分はモルモットだと・・・」
「まだまだ甘ちゃんだよ。奴は・・・俺に試されてるだけでもありがたいと思え！そう言っとけ！」

高橋は、桑田を向く事もなく、足を引きずりながらストームにバルカンを取り付ける。桑田もそれに加わる。
「技師長はロクさんと組んで長いですよね？なぜ、ロクさんは銃を撃てなくなったのか知ってますか？」
「お前？それは聞いていないのか？」と高橋。
「人の心の闇の部分です。恐くてとても聞けませんよ・・・」
「だろうな・・・」
「何か知ってるんですか？」
「Ｐ５の死龍だよ・・・」
「えっ？女四天王の・・・死龍？」桑田の表情が強張った。

その２１　第五ポリス

ポリスの地下にある。特別生活保護室。ある部屋の前には銃を持った兵が一人警備をしている。そこへやって来たのはダブルだった。ダブルはその兵に軽く挨拶をすると、その部屋をノックした。部屋には大場の家族がいた。

「よく休まれましたか？」とダブル。
「朝まで詰問はきつかったな～」大場は敢えてダブルの前で大きなリアクションをしてみる。
「お父様に続きをお願いしたいのですが・・・」
「わかった・・・おい直美、後を頼むぞ。」

大場は、直美に声を掛けると、部屋から出てきた。
「はい・・・」
「直美様、お父様をお借りします。」
「だからあんた誰？」
ダブルに対して渋い表情を見せる直美。

大場とダブルは部屋を出て、廊下を歩き始めた。
「今朝、タケシが来てた様だが・・・？」と大場。
「あんたの婿候補が、追い払ったぜ。」
「ロクか？やはりな・・・それでタケシは？」
「ダメージだけで撃退した・・・まあこっちも色々あったがね。」
「婿候補・・・やはりあいつやるな・・・」ニヤリと笑う大場。
「その件は断ったんだろ？ロクは？」
「ああ断って来た。惚れてる女がいるとか・・・あの少年みたいな少女か？」
「なつみの事か？まさか。あいつはロクの妹みたいなもんだよ。」

「まあ、なんにせよ残念だな。諦めた訳じゃないけどな！」
「お父様、もしよろしければわたくしが・・・」
「兵士に娘はやらん！」
「ロクも兵士だぜ。なぜロクに・・・？」

大場は立ち止まって、ダブルを直視した。
「まだ分からんのか？最初に無理難題を押し付ける。次にやや可能の条件を出す・・・“交渉”の基本だよ。」
「お、恐れ入りました・・・」大場のしたたかさに驚くダブル。

「死龍はロクの恋人だった・・・」と高橋。
「えっ！？」
「真相は知らんが、二人はそういう仲だったらしいぞ！」高橋は桑田の様子を伺いながら、敢えてそんな事を言ってみせた。
「う、嘘です・・・」真剣な桑田。
「噂だよ。噂・・・あいつがＰ５にあんまりにも行くからみんながそう言っているだけだ。ただ、死龍が戦場に出なくなった頃だよ。ロクが銃を撃てなくなったのは・・・」
「それから銃をですか・・・？」
「そうだな・・・それ以降、あいつがＰ５によく行くようになったのも事実・・・」
「でも、昔はここに居たんですよね。死龍さん？」

高橋の作業している手が止まり、何かを思い出している。
「ああ、お前が指令室に上がるだいぶ前だ。その頃は死龍って名前じゃなかったがな。確か“しゅりゅう”って名じゃなかったんじゃないか？あの頃はロクがしゅりゅうのパートナーだったはずだぜ。互いにプロジェクトソルジャーでは１、２位を争う程の成績だった・・・詳しくは知らんがな、事故があったらしい。まあその後、死龍

はＰ５に配置になったと聞く・・・戦場には出ず、戦略や教育専門になったと聞くが・・・」

「キーンさんたちなら知ってますか？」

「あいつらに聞いても無駄だと思うぜ。意外とみんな仲間思いだからなぁ・・・」

「なんとかロクさんの力になりたいんですよ！」

「なら、ほっとけ！結局は自分自身で這い上がるしかない。ロクは昔っからそういうタイプだ。彷徨えば彷徨うほど、輝くっていうか・・・ほら！それよりダブルの車の塗装だ。急げよ！」

「は、はい・・・」慌てて作業に取り掛かるなつみ。

ここはＰ５に近い、ジプシャン軍前線基地。いくつかのテントの中に大きなコンテナや倉庫、無線用の簡易アンテナや小型レーダーがＰ５を見下ろす低い丘の上に立ち並んでいる。ＳＣの数が少なく、２輪や３輪のバイクが目立っていた。

そこは大型倉庫の中に簡易な指令室を設けており、小型コンピューターをはじめ、通信機やレーダーのシステムが揃えられている。兵は４、５人程で上官らしい人物が席も着かずイライラしていた。

その男は２５才くらい。背は高いが、かなり痩せて見える。服はタケシと同じ砂漠用迷彩軍服を着ていた。彼はタケシや総帥の土井寛子が死神と呼ぶ大広だ。

「タケシ隊を呼びに行った者は、なぜまだ戻らないのですか？これでは戦力になりませんね？」

大広は部下らしい兵にでも“敬語”で語っていた。

「はい、昨日に本部に戻って行って連絡がなく・・・」

「銃弾が乏しいのに、本隊のＳＣ部隊までいなくなるとは困りましたね・・・」

「再度、本部に使いを出しましょうか？」
「任せてもいいですか？」
すると、基地のある者が大声で叫ぶ。

「南よりＳＣ！我軍の物ではありません。車種不明。かなりのスピードです。まもなくＰ５圏内に入ります！」
「また雷獣か？全車迎撃体制を取って下さい。三輪部隊を出してく下さい！」

基地に警報が鳴り、テントから兵が十名程がヘルメットを被りながら出てくる。兵たちは数十台の三輪バイクに跨り、基地から緊急出動していく。

ロクの車内から前方に砂煙が見える。
「やはり、ここは無事には通してくれないか？なら・・・」
ロクはアクセルを更に踏み込むと、その砂煙を避けるように、左へとハンドルを切った。

ここはＰ５の地下の指令室。作りはＰ６の指令室によく似ている。やはり雛壇になっている席には、１５名程の兵が正面のスクリーンを見つめている。
「Ｐ６からの定期便か？黒豹かと思われますが、データが前回と違っています！車種データなし！」

この指令室での最上段にいた者がすぐ反応した。

「ロクか？あいつまた試作車を・・・？」
両目の部分に仮面のベルト型マスクを被っているその者の声は、若い女性の声だった。

「西南に８キロ。敵バイク部隊と交戦中です！」
「司令を呼べ！守衛隊は戦闘配備！ボブ隊は発進準備！無線はあるのか？」と女。
「まだありません！」
「ロクなら援軍は出さん。奴はそういう男だ・・・こちらから無線を飛ばせ！」
「ボブ隊地上に出します！南ゲートに集結させます！」
「南ゲートでボブ隊は待機だ！ゲートのタイミングは任す！」
「無線以前応答なし！」
「助け無用という事か？相変わらず頑固ね・・・」と女。

そこへ弘士や久弥と同じ黒い軍服を着た３０才くらいの男性が現る。
「五十嵐司令！Ｐ６の定期便です！」
「ロクか？」五十嵐が仮面の女に問う。
「ここを突破出来るのは恐らく彼かと・・・？」と女。

その頃、ロクのジャガーは４、５台の三輪バイクに追われていた。バイクは前方に向いた機銃でジャガーを狙い撃つ。

「これは使いたくなかったんだがな・・・」

ロクは、新たに設置されたエアーブースターのスイッチを入れると、ジャガーより砂煙が巻き上がった。後方にいたバイク隊はジャガーが作り出す砂煙に巻き込まれ視界を奪われる。

「これで、諦めてくれよ・・・」

Ｐ５の指令室。
「追撃部隊は振り切りましたが、新手です！死神の本隊です！」
「死神め！ここに入れないつもりか？」

司令が焦る中、その女は手馴れていた。
「ボブはまだ待機よ！」と女。
「なぜ、まだ援軍を出さん？苦戦してる様子だが？」
「助けを求めるならＳＯＳをとっくに出してるわ！こいつはロクよ！間違いない！ロクなら助けは拒む・・・昔からそういう男なのよロクは・・・南ゲートに銃撃部隊を数名だけ配備して！」
「どうする気だ？」と五十嵐。
「まあ見てて！」口元がニヤリと笑う仮面の女。

ロクのジャガーは３０台のバイク部隊と交戦中だった。バイク部隊は銃が効かないと分かると、手榴弾攻撃に切り替えてロクのジャガーに手榴弾を投げ付ける。
「こいつも使いたくなかったんだよね・・・」

ロクはそう言うと、屋根のバルカンを上げ、周り構わず乱射した。バイク部隊はジャガーに近寄れない。ロクの乱射に慌ててハンドルを切り転倒するバイクもあった。

ジプシャン軍前線基地。大広が待機している。
「敵が銃を乱射してます！」
「攻撃ですか？雷獣ではないのですか？どうであれこいつをＰ５に

入れさせないで下さい！味方の被害はどうですか？」
「まだ報告がありません！」
「味方より無線！やはり雷獣です！模様は斑です！」
「雷獣め！またしても、こちらを弄ぶのですか！？」大広が握り拳を振り上げる。

Ｐ５指令室。
「無線です！」
「私が受ける！中央に！こっちで応対するわ！無線をこっちにまわして！」
その仮面の女は、マイクがあるデスクに移動する。

指令室のメインのモニターにロクの姿が映し出される。戦闘中なのか、映像が乱れ、銃声、エンジン音が高く入ってくる。女は平静を装いモニターのロクに呼びかけた。

「何か、手伝いがいて？ロク？また車種を変えたようね！？」
仮面の女は皮肉たっぷりに映像のロクに問う。

『死龍無事なのか？』と無線のロク。

一瞬だが、ロクに呼ばれた仮面の女の口元が笑みとなる。しかしすぐに女は怒り出した。
「勝手に殺さないでよね！」

『ふふっ・・・』
その死龍の応対に、モニターに映るロクの顔も一瞬笑みを溢した。

その２２　ロクと死龍

ロクの顔に笑顔が溢れていた。その笑顔に呆れたのは死龍だけだったのかもしれない。

「もう・・・こっちが、拍子抜けしちゃうじゃない！」

『無事でなによりだ・・・で？どこから入ればいい？』と映像無線のロク。

「いつもの所よ。ゲートはギリしか開けないからね！？」

『了解！今回はバルカンを積んでいる。１０センチ、いや２０センチ高く上げてくれないか？』

「あら、珍しい事？いつから自分のスタイル変えたのかしら？」

『上司命令だよ・・・頼むぞ！』不服な様子のロク。

無線が切れ、死龍は五十嵐司令の顔を見る。

「上に迎えに行きます。司令、後の指示をお願い出来ますか？」

「わかった！」と五十嵐。

「では行きます！」

死龍はそう言うと、指令室を司令に任せ慌てて出て行ってしまった。五十嵐はその死龍の後ろ姿を見ていた。

「まるで、恋人に逢いに行くみたいだな・・・？よし！ロクの位置を確認しろ！敵も来るぞ！守備隊も援護しろよ！」

死龍がエレベーターに乗っている。扉が開き、Ｐ５の地上と思われる所に出てきた。Ｐ６と違い街はなく、大きな倉庫や、コンテナが目立っていた。コンテナ等は爆破されたような物が多い。死龍はその殺風景な地上を全力で走っていた。

Ｐ５指令室。
「黒豹、軌道に入ります！」ある兵が叫ぶ。
「よし！来るぞ！ゲートを開けろ！」と五十嵐。

Ｐ５のゲートが開く。Ｐ６の左右に開くゲートと違い、Ｐ５のそのゲートは上に向かって開き始めた。しかしゲートは人の身長も行かない程だけ開き、そこで止まってしまった。ロクのジャガーの車高に合わせたのであろう、その高さは他の車やバイクでは入れない高さであった。

ロクのジャガーは何台かのバイクに追われているが、真っ直ぐにゲートに合わせスピードを落とすこともなく、Ｐ５のゲートに向かっていた。するとジャガーの屋根に迫り出していたガトリングバルカンが収納される。

その光景をゲート内から見守る死龍たち。
「来たか！？機銃用意！ボブ！死神を入れるなよ！」死龍が他の兵に叫ぶ。

死龍は、少し開いたゲートの裏にいた。開いたゲートの向こうにジャガーの車体が見えてきた。
「来るぞ！各員構え！」
死龍と共にいたボブが叫んだ。ゲートの裏にいた数名が、開いたゲートに向かって銃を構えた。

ジャガーが、スピードを上げゲートに突っ込んでくる。すると、後ろに追いかけてきたバイク隊もスピードを上げる。

しかし、ゲート高さを感じたのか追うのを途中で諦め、ゲート前で左右に別れ始めた。ジャガーは少し開いたゲートをギリギリで潜り、Ｐ５の進入に成功した。

すぐゲートが下がり始め、ジャガーは死龍たちがいる所で急ブレーキをかけ急停止した。死龍らはジャガーの側に集まると、ロクもジャガーから降りて来た。

「やあ！」と笑顔のロク。
「久しぶりね。ロク・・・どうしたのその顔？」
死龍はロクの顔の傷を気遣った。今朝バズーに殴られた傷だ。
「ちょっとな・・・」照れるロク。
見詰め合う二人。二人しか分からない時間だった。

Ｐ５指令室。
「それで、ダンとトリプルは？」慌てるロク。
「未だ連絡なし。５日程前に、敵の前線の様子を見に行ったきり・・・その話が本当なら、間違いないな。」と死龍。

一人気を落としていたのは、先程死龍たちと地上にいた１５歳程のボブという少年だった。
「残念ですね・・・」
指令室で三人は、人を避けるように話し合っていた。三人とも黙り込み、次の言葉が出てこない。

「それを、確認したかった・・・」とロク。
「それを確認にわざわざここまで？」驚く死龍。
「死龍やボブの安否もだよ・・・なら向こうに戻る。」

「えっ？もうか？急ぐのか？」

ロクの言葉に、寂しげな表情を見せる死龍。
「今日中に帰ると言って来てる。」
「夜か、朝にしろ。今出るのは危険だ！」

死龍の言葉にボブも大きく首を振った。
「Ｐ６が心配だ。今朝、ストラトスの襲撃があった。」
「何？タケシか！？」
「わからないが、ランチャーストラトスは奴以外乗る奴がいるのか？ボブ？」
「ストラトスは3台あるが・・・」死龍が首を傾げる。
「タケシたちはいつも3台で行動します！そうか・・・どうりでここ何日かは静かだったのか？」とボブ。
「タケシだけではない。敵サンドシップもいない・・・」

二人の言葉に、戦況が苦しいのを察するロク。
「どうなんだ？こっちの様子は？」
「決して良くない。死神だけなら問題はなかったがな。ただ本隊がいない今なら反撃の余地はある・・・」

「そうか、間もなくＰ６はレヴィア全艦が完成する予定だ。それとここで開発した太陽光利用した武器もだ。それが出来るまでだ。それまでＰ５は耐えてほしい。」
「レヴィアか・・・懐かしいな。１番艦はまだ・・・？」
「ああ、まだおやじさんが乗っているよ。現役を退いても未だ元気だよ！」
「よろしくと伝えてくれ。なんとかＰ５は、現状を耐え切ってみせると・・・」
「わかった。伝えるよ。五十嵐司令にも宜しくと伝えてくれ。ボブ

！こうなった今、死龍やここを頼んだぞ！」
「任せてください。ロクさん！」

ロクは急ぎ指令室を出て行く。ロクに慌てて敬礼する兵士たち。
死龍は慌ててロクを追い掛けて行った。
「ロク、上まで送るわ。ボブ！ゲート頼むわよ！」
「了解！」とボブ。

ロクと死龍は同じエレベーターに乗り込んだ。
「ロク？また背が伸びたんじゃない？」と死龍。
「そうか？死龍が小さくなったんじゃないか？」ロクは自分の手で死龍と自分の背を比べてみた。
「失礼しちゃう！」
「ふふ・・・」笑うロク。
「もう！」怒って見せる死龍。

「指令室勤務は慣れたのか？」
「ここの指令に任されるようになったわよ。五十嵐司令は、ほとんど整備室でメカ相手だもん。」
「悪いな・・・」
「謝らないで。これでいいと思い始めてるんだから。」
「・・・すまん。」
「だーかーら！」
「ふっ！」
「うふふ・・・」

二人は目を合わせて笑い始めた。死龍自身、こう笑ったのは久々だったように感じていた。
「俺がこっちに来るか？」とロク。

「私じゃ、あてにならない？」
「そうじゃないが・・・」
「気持ちはうれしいけど、Ｐ６にはロクが必要でしょ？」
「俺の居場所なんてないよ・・・」
ロクの寂しそうな表情に死龍は掛ける言葉がなかった。

Ｐ５の地上。既にロクはジャガーに乗り込んでいる。見送りに来ていたのは死龍だけだった。
「こちらからの定期便は予定通りよ。」
「敵もかなり位置を上がっている。無理しなくていいぞ！」
「Ｐ５にも意地があるのよ！予定に変更はないわ。水、食料・・・不足なのは変わらないし、兵士たちに腹一杯食べさせたいしね。」
「水もか？」
「もう９０日も雨が振ってないわ。地下水も不安定よ・・・だからこそ、そんな時にＰ６から補給される海洋深水を取りに行かないとね。」
「そうか・・・深刻だな？仕方ないな・・・なら俺は行くぞ！」
「うん・・・ゲートを上げて！」

死龍はゲート上の兵に大声を上げる。するとゲートが上がり始める。すると、ジャガーはエンジンが掛かり、ロクはアクセルを踏み空吹かしを始めた。ロクは窓から死龍の顔を見る。

「またな？」とロク
「うん・・・」死龍が頷いた。

ゲートがジャガーの車高で合わせて止まると、ジャガーは急発進してＰ５のゲートを潜って出て行った。ゲートはジャガーが出るとすぐ閉まり始めた。死龍はジャガーが見えなくなるまで、その姿を

見続けていた。するとその仮面の下から死龍は涙をこぼしていた。
大粒の涙が右の目から流れ落ちてくる。

「あ、あれ？・・・私なんで泣いてるんだろう！？」

その２３　逆襲と奇襲

死龍は一人ゲート前で泣いていた。嬉しくて泣いているのでもなく、悲しくて泣いているのでもなく、自分自身がなぜ泣いているのかがよく分かっていない様子だった。

ゲートが完全に閉まり荒野から吹く風と砂が収まる。するとようやく死龍は涙を拭き始めた。やがて死龍はゲートを後ろにして再び歩き始めていた。

ロクはジャガーのギアをトップに入れた。スピードメーターはすぐに３００キロの部分を指していた。機銃の音が聞こえていたが、ロクは前だけを向いて車を走らせていた。

ロクはエアーブースターのスイッチを再び起動させると、車内は空気の流動する音が大きくなり、ジャガーの後方を大量の砂煙を巻き起こしていく。ジプシャン軍のバイク隊の何台かがジャガーを追っていたが、その砂煙で転倒したり、他のバイクと接触したりして追うことが不可能となってしまった。ジャガーは更にスピードを上げて荒野を駆け抜けていく。

Ｐ６の取調室。大場とダブルが机を挟み向かい合って座っていた。大場は不機嫌そうな顔をしている。

「もう、あんたに話す事はないぞ・・・」

「あんたの脱走理由が、どうしても気になるんだな・・・これが・・・」目を細めるダブル。

「言った通りだ・・・嫌になった！」と強気の大場。

「スパイは誰なんだ?」
「それは、知らないと言ったはずだ!なんでもかんでも知っているかよ!」
「ここから、情報を持ち出すのは至難の技だ。どうやって情報を持ち出すと思う?」
「ジプシーは地下3階までしか入れないだろ?それ以下に入れるジプシーだっているよな?」
「確かにいるが・・・」
「その中の誰かだよ。スパイは・・・」
「馬鹿を言うな。地下4階に入れるのは、ここで育ったジプシーだけだ。それも数名なんだよ!途中で保護されたジプシーは入れない。もしいるとなれば限られた者だ・・・」

P6の指令室。弘士、久弥、曽根を初め、何人かがモニターでこの二人の様子を見ている。
「こちらを、混乱させる気では!?」と曽根。
「可能性はある。だが奴が嘘をついてるようには見えない。」と弘士。
「もし本当なら。ロク、キーン、バズー、ダブル、桑田、松井の他10名もいないはず・・・」と曽根。
「しかし、彼らは、1才から3才に保護され、ここで育っている。向こうと接触しようがない!」久弥はその言葉に反論した。
「その前はどうでしょうか?」と曽根。
「まさかな・・・?幼い子供だぞ!?そこまで疑うか?そんな事を子供たちに教育出来るはずはない・・・」と久弥。
「念には念をですよ。全員調べさせます。それでいいですか?前司令?」弘士が重い口を開く。
「わかった・・・」

「敵ＳＣ隊確認！」
指令室に柳沢の声が響いた。
「数は？」弘士が自分の席に戻る。
「数約２０。装甲車を含む、いつもの常連です。いつもの北の丘です！また“キャンプ”の様子です！」と柳沢。
「またか・・・四天王の首か・・・？街への警報はいい。もう夕方だろ？今日は、襲っては来ないだろうな。松井！一応バズーを待機させろ！」と弘士。
「了解！」

桑田の隣には１８才くらいの女の隊員がいた。名前は松井。彼女もジプシー出身で、桑田同様に指令室勤務を任されている者だった。その時、柳沢が叫ぶ。

「北西１０キロにＳＣ！黒豹です。」

「早っ・・・」
桑田は耳を疑った。

「ロクのジャガーか？桑田どうなってる？ロクは今日は向こうに“お泊り”じゃないのか？」
「はい！早く帰るかも？とは言ってましたが・・・早過ぎでしょ？まだ日暮れ前ですよ。」

半分諦め顔の桑田の様子を見て、弘士も悟った。
「ロクに連絡！例の丘に装甲車！迂回しろと！・・・このままだと横っ腹を突かれる可能性がある！」
「了解です！」
「往復６００キロ以上。僅か４時間ちょっとかよ・・・」
「こちらＰ６の桑田。黒豹聞こえますか！？」

すると桑田の前のモニターに、ロクが映し出された。
『こちら黒豹。聞こえます。どうぞ。』
「早いお帰りで・・・？」と桑田。
『どうした?桑田?』
「あっ・・・えーと・・・例の丘に装甲車です。念のために、迂回ルートをお取り下さい！」

『遅い！今通り過ぎたぞ！あと2分で着く。このままＰ６に向かう！』
「し、しかし・・・」
『なんとか・・・する！』
「出た出た・・・」呆れる桑田。
『任せろ！』

そう言うと、ロクは一方的に無線を切ってしまった。
「この自信どっから来るのやら。」

その頃、ヒデたちはＰ６を見渡せるリキたちの墓がある丘に来ていた。ヒデと丸田は既に車から降りてＰ６を見下ろしていた。すると、聖(ひじり)が慌ててヒデの所にやって来た。
「ねぇ！？北からなんか来るよ！？」聖が二人に叫ぶ。
「何だ！？」とヒデ。
「タケシか？」
「砂煙は１台だけよ！」

ヒデは丘から北を双眼鏡で覗く。すると南に走っている、ジャガーの姿を見つける。

「雷獣だ！俺は運がいい・・・丸田！急げ！装甲車で出る！」
「らいじゅう？ライジュウって何よ！？」と聖。
「待てよ。ヒデ？ここで待機だろうが！」丸田がヒデに反論する。
「タケシに先に殺らせるか！奴を倒せば、仲間を楽させれる！リキの仇もな！いいから出せ！」
「あのスピードだ。ここからじゃ間に合わないぞ！」
「体当たりしても奴を潰す！出せ！」

「あたいらは？」聖は自分自身に指を差した。
「お前らじゃ奴は無理だ！ここにいろよ！」
「へいへい・・・」目を細くしヒデを睨む聖。
ヒデと丸田は装甲車に乗り込み、ジャガーの進路方向へ丘を駆け下りていった。それを見送る聖。

ロクの車内から、向かって左の丘から装甲車が猛スピードで丘を駆け下りてくるのを見つける。
「体当たりでも仕掛けて来るのか！？懲りないな！俺ばっか付け狙うなよ・・・しょうがない！このカストリーがただの偵察車じゃないのを見せ付けてやる！」
ロクは再びエアーブースターを起動させると、ギアをローに下げハンドルを左に切り丘の方へと登って行った。

面を食らったのは装甲車のヒデたちだった。勢いよく雷獣の進路を塞ぐ為に丘を降りてきたのに今、自分たちのいた所に雷獣が向かったのだから。
「丸田！急いで戻るぞ！Uターンだ！」慌てるヒデ。
「無理だヒデ！この傾斜だ！このままUターンしたら、こいつの車高だ！転倒して丘を転げ落ちるぞ！？」

雷獣は丘に登っているが全くスピードを落とす事無く、丘を上へと上がって行く。ヒデが無線を飛ばした。

「聖！そっちに雷獣が行く。真横からタイヤを狙え！」
『はぁっ？ライジュウって？ち、ちょっと待ってよ。こっちは、なんの準備もしてないわよ！』

「突破すつもりだったが・・・行ってみますか？」
ジャガーは装甲車と丘の上の間を、砂煙を上げ突破する予定だったが、何を思ったのか更にハンドルを左に切り、丘の一番上を目指した。ジャガーは大量の砂埃を上げ丘の上に到達すると、聖の前で急ブレーキをかけ停止した。

「えっ・・・？」
唖然とする聖。するとジャガーからロクが降りて来た。ロクは満面の笑みで聖にこう言った。

「どうも～」車越しに聖に手を振るロク。
「こ・・・こいつが・・・雷獣なの？」突然の訪問者に動きが止まる聖。

日は西の山脈に沈み始めていた。赤く染まろうとしている空の下、ロクと聖は丘の上で向き合っていた。

その２４　神の区域

『どうした聖!?奴はどこに行った!?』無線で叫ぶヒデ。
「ここにいるの・・・」聖はロクの様子を伺いながらヒデに答える。
『はぁ?』
「奴は・・・奴はここよ・・・この丘の上にいるの・・・」
『どういう事だ!?分かるように言え!』無線の中でも混乱するヒデ。

ヒデとの無線をする時も、聖はロクを見つめていた。ロクはいつものハット、ポンチョ。口のスカーフはなく顔を晒している。ロクは笑顔のまま聖を見つめていた。

「奴だ!奴が来たぞ!」
「雷獣だー!」
「銃を持てぇー!」

急ブレーキの音か、ヒデの無線を聞いていたのか、聖の周りにライフルや銃を持った仲間が集まり始めた。皆、ロクとジャガーを見ては度肝を抜かれた。
「ひ、ひとりかよ・・・!?」
「雷獣・・・!?」驚く聖の仲間たち。

Ｐ６指令室。
「く、黒豹!丘の上に停止してます!」驚く柳沢。
「えっ!?」
「どういう事だ!?く・わ・た?」
弘士は少しキレ気味に桑田を怒鳴る。

「ロ、ロクさん・・・？」心配そうな桑田。

ヒデの仲間は聖を中心に左右に展開し始めた。その数はおよそ25人。女性や老人の姿もある。

「動くな！」

その声に、皆が停止した。ロクはピクリとも動かず、聖を見つめ笑顔のままだった。すると聖が皆を制止すようにと、無言で左手を挙げ“動くな”の合図を出した。すると、聖は意を決して口を開いた。

「動くなだと？それはこっちのセリフだ！こっちはこの人数だぞ。そっちこそ手を上げろ！」

「数は関係ないぜ。なんだ俺はそっちから“らいじゅう”って呼ばれてんのか？」

「四天王か！？」

「さあな・・・」その質問は素っ気なく答えるロク。

「こ、これは、なんの真似だ！？」そのロクの態度にやや躊躇する聖。

「あんたがリーダーか？なら話が分かりそうだな？あの装甲車がここに来るまで2分は掛かるだろう。それまでに考えてくれ！」

「何をだ！？」

「あんたらを保護する！」

「ふ、ふざけるな！」

ロクの言葉に、聖は一瞬、言葉を失った。

「俺は、無駄な血を流したくないだけだ。」

「な、何を言ってるんだ？お前！？」ロクの意外な言葉に驚く聖。

聖は言葉が詰まった。時折ジャガーが作り出した砂埃が丘の上まで巻き上がってくる。その都度、１０メートル程しか離れていないロクの顔が見えなくなる事があった。

「それが嫌なら、ここからすぐ立ち去ってくれ！」とロク。

「お、お前は、弟の仇だ！」

「かたき？」

「よくも弟を・・・」憎しみの顔に変わる聖。

「おとといの炎上した車か？」

「そ、そうだ！」

「そうか・・・すまなかった・・・」

「なっ・・・どうして？どうしてそっちが謝んのよ！？」

否定されると思った聖だったが、ロクが素直に謝罪したのを見て驚いた。

「さっきの件、時間がない・・・どうする？」

すると聖の右にいた男が少しずつ横に移動して、ロクにライフルを向けようとした時だった。一発の銃声が聞こえた。よく見るとロクのポンチョの内側から発射されたのだろう、ポンチョには穴が開き、煙がロクの体を漂っていた。聖が右の男を見ると利き手を押さえて蹲っている男がいた。

「動くなと言ったはずだ！」聖を睨むロク。

「ちぃ・・・」

驚いたのは、ロクは銃を撃つときも聖の目を見たまま銃を撃っていたのだ。そして今も聖の目を見ている。その異様な光景に誰もが動けなくなった。

その時、先程よりも濃い砂煙が再び丘の上を包みこんだ。視界が悪くなり、互いの顔が見えなくなるほどだった。

「今だ！撃て！」
聖の後ろで、誰かが叫んだ。
「ま、待って！」

聖は仲間を制止しようといした。しかし、仲間たちは一斉にロクのいた方向に、銃口を向けた。砂煙がロクの姿を隠そうとしていた。その瞬間だった。何発かの銃声が続いて響いた。２０発は鳴ったであろうか。その後銃声は消え、風の音しか聞こえなくなった。すると風が強く吹き、再び視界が開けて来た。聖はロクの立っている姿を確認した。よく見るとロクのポンチョに銃弾の穴がたくさん開いているのを確認した。

『殺ったのか？』聖は心の中で叫ぶ。

しかし更に視界が開け周りをよく見ると、すぐ側にいた銃やライフルを持った仲間たちだけが、腕や指、手の甲を押さえてしゃがみ込んでいた。撃たれていたのは自分の仲間たちだったのだ。ロクはポンチョから銃を出す事なく、２０名近くの仲間を撃っていたのだ。

「先に抜いたのは・・・そっちだぜ・・・」

唖然とする聖。すると、装甲車のエンジン音が丘の下から聞こえて来た。

「時間だ。立ち去るんだ。いいな？」
するとロクは、慌ててジャガーに乗り込んでその場を急発進する。

「レ、レベルが違いすぎる・・・」

聖は急に恐くなって、その場に跪いた。そこへヒデらが乗った装甲車が丘の上に到着し、聖の側に停止した。ドアが開きヒデが慌てた様子で出てきた。

「どうした!?聖!?」

聖は、しゃがんだまま動くこともなく、正面を向き、他の仲間は手を押さえていた。ヒデは聖や仲間の様子が尋常でない事を察した。

「お前ら・・・何があったんだ?」

P6指令室。

「黒豹、動きました。こちらに向かっています!」と柳沢。

「ロクの奴・・・桑田!?無線は?」弘士が桑田に問う。

「応答なし!切ってると思われます・・・」

「桑田、一度任務を離れ、ロクをここ連れて来い。」

「わ、わかりました!」

丘の上のヒデは、静まり返っていた。

「どうしたんだ?奴に何されたんだ?」

「ここを・・・ここを撤退しろと・・・」

「なんだと!?」

そこへ、丸田が駆けつけて来た。

「指を折った者が一人。後は打撲程度だ・・・驚く事に、血一滴流れてないよ・・・」

「ぜ、全員撃たれていないのか・・・?」驚くヒデ。

「化け物よ・・・奴は・・・」

「説明しろ聖!」

「一人で乗り込んで、銃を構える事なくポンチョの下から銃やライ

フルを持った者の銃だけを撃ち抜いた・・」
「馬鹿な・・・」とヒデ。
「この人数で勝てなかった。しかも向こうは銃だけを・・・砂の中に入って視界が見えないのによ!相手にならない。奴の腕は神の区域よ・・・」
「嘘だろ・・・」丸田も驚く。
「リキの死を責めたら、反論どころか謝罪したのよ・・・おまけに私たち全員を保護してやるって・・・私たちが戦っている相手ってなんなの?ねぇ!?」
「ポリスだろ・・・」素っ気ないヒデの返答。

聖はヒデのポンチョを掴むと急に涙を流し始める。
「ねえ?なんで奴らと戦わなければならないのよ。ポリスは間違っているからじゃないの?」
「それは・・・」
「もう争いはやめようよ!わかんないよ。ポリスもジプシャンも!あれが四天王なら、あんなのがあと3人もいるのよ?勝ち目なんて到底ないわよ・・・」
「やめてどうするんだ。」
「ポリスに投降するの。このままだと、うちら全滅する。あんなのが相手じゃ絶対・・・」
「恐くなったか?雷獣に?」
「うん。あいつは身を呈して私たちを説得に来たの・・・しかも殺さずに生かしてくれた・・・あれがジプシャンならどうなってた?全員殺されてたよ!」
「投降したいなら勝手にしろ!俺は止めはしないぜ!」

二人の気まずい会話に丸田が割って入った。
「ヒデ・・・言い過ぎだ。聖もそんなこと言うなよ。聖も銃を向けられたからだろ?怖くなっただけだよな?このタケシの作戦まで待

てよ。」
「俺は止めはしない・・・逃げたら銃殺だ！」とヒデ。
そう言うとヒデは二人の前から立ち去って行った。
「おいヒデ！！聖もよく考えろ。な？な？」
「勝手にするわよ・・・」
聖もヒデの反対方向に歩き始める。

ロクがＰ６に帰ってきた。北ゲートの修理が終わっていたのか、ロクは北ゲートをオペの我妻に誘導され街に入った。しかしそこは、軍ブロックの一つでジプシーは一人たりともいない。銃を持った兵が、倉庫や大きな建物の前にいるだけの所だった。

ロクはある建物の前に停車すると、車内からエレベーターの操作をし、扉が開くのを待っていた。するとロクのジャガーの助手席をノックする者がいた。ロクが窓を覗き込むと、軍服だけのキーンの姿があった。ロクは助手席側の窓を開ける。

「どうした？キーン？」とロク。
「ロク！内部でヤバイ事になっている！」深刻な顔のキーン。
「何っ！？」

その25　誘惑

「下に行く。取りあえず乗れよ！」とロク。
キーンはロクの車の助手席に乗り込むと、車はシャフト内に入庫する。
「あの大場のおっさんの発言で、俺たちにもスパイ疑いが掛かっている・・・」
「あらら・・・スパイの件か？まあ誰が騒いでるか察しがつく。」
苦笑いするロク。
「桑田や松井らは、さっき指令室を一時外された。」
「それは酷いな・・・で？俺たちは？」
「まだ指示は出てない。」
「仲間なのにな・・・」ふと寂しげな表情を浮かべるロク。
「それとロク！？丘の上で何してた？指令室は大騒ぎだったそうだぞ！？」
「ふふふ・・・ジプシーの保護活動だよ・・・」
ロクは微笑んだ。
「お、お前？撃たれたのか？」
キーンはロクの穴だらけのポンチョを見て驚いていた。
「いいや。ここから撃っただけだ。撃たれたんじゃない。」
「なんでこのタイミングなんだよ？しかも敵のど真中かよ？今、一番疑いがあるのはロクだぜ？Ｐ５に用もないのに行ったりするだろ？あの参謀がうるさく言ってるそうだ。」
「ポリスは何でもかんでも、こっちのせいにするよな？まあ今更だけどな・・・」

エレベーターが停まると、地下3階の車庫に到着する。そこには桑田と松井が待っていた。
「ロクさん。ご無事で・・・」と桑田。
「聞いた。指令室を外されたんだって?」

松井もここぞとばかりロクに愚痴をこぼす。
「酷いですよ。ジプシーだからって・・・」
「そう言うな。ポリスも仕事だろ?対象者は何人だ?」
「約8人です・・・それと司令が呼んでいます。」と桑田。
「俺たちは指令室に入っていいのか?」
「ロクさんたちは、IDはまだ無効になってないはずです。」
「すぐ行く!そうだ、それと桑田?“らいじゅう”って意味調べておいてくれないか?」
「は、はい・・・“らいじゅう”ですか?」首を傾げる桑田。
「うん・・・頼む・・・」

P6指令室。雛壇の上には弘士でもなく、久弥でもない軍服を着た男が座っていた。歳は45くらいだろうか。そこにロクが入ってくる。
「司令は!?」
「敬礼ぐらいしろ。ロク!」男はロクを叱りつける。

ロクは、不機嫌な仕草で敬礼をする。
「どこにいます!?参謀?」

男はこのP6の参謀で曽根。ロクたちの天敵だった。
「会議室で会議だ。少し待て!」
「あんたか?ジプシーの隊員を追い出したのは?」

「まずは報告だろうが！Ｐ５はどうなんだ？」
「なぜ仲間を疑るんだと聞いている？」
「司令の命令だ・・・」
「その事で司令に会う！」無理に突破しようとするロク。
「駄目だ！」体を張って曽根が阻止する。

「桑田らがここに入れないなら、俺たちもここに入らないぜ！」
「それは構わないぞ・・・で？まず説明しろ！丘で何をした？」
「保護活動さ・・・」口を尖らすロク。
「敵と接触してたのではないか？スパイがどうのこうの言ってる時に、疑われる行動するな！」

「仲間を信じないのかよ？あんた、どうかしてるぜ・・・」

「参謀！北ゲートから連絡。ジプシーの女性が一人、投降した来たとの事です！」我妻が曽根に報告する。
「なに？」
「それが・・・今街に入った。ライジュウを出せと言ってるそうです？」
「ロク、お前のようだな？保護活動が実ってよかったな。」

まるでロクに嫌味を言うように曽根は呆れていた。
「上に行きます！Ｐ５の件は四天王は２名不明。大場のおっさんの言う通りだとそう司令に伝えて下さい。」
そう言うと、ロクは指令室をそそくさと出て行った。

Ｐ６北ゲート。既に日は暮れていた。塀の向こう、暗い荒野の中にライトを浴びて聖が立っていた。タンクトップは胸の下まで、半ズボンは穴だらけ。露出の多い聖を見たさに、既に塀の上にはたく

さんの見物兵でいっぱいになっていた。

「いい女じゃねか！なんて格好だよっ！？」

「よう！ねぇちゃん、早くこっちに来いやー！俺たちが暖めてやるぜ！ははははっ！！」

塀の上からたくさんの声が飛ぶ中、聖は徐々にイラついていた。

「いつまで待たせるのさ！夜なんだからさ、凍えちまうよ！」

すると、重い北ゲートが左右に開きだした。ゲートの中からは銃を構えた兵が5名程、その中にロクの姿があった。すると後からダブルがこの5人を追いかけてきた。

「耳が早いな・・・ダブル・・・」とロク。

「なぜ俺に連絡しないのかな？ロク君・・・お待たせしましたお嬢様・・・」

「あ、あんた誰！？」

唖然とする聖に対して、ダブルはいつもの口調だった。

「申し遅れました。わたくし・・・」

「ヒジリか？」

その名前に一番びっくりしたのは聖本人だった。

「おいロク・・・お前な・・・？」とダブル。

「どうして私の名前知ってのよ！？」ダブルを無視してロクに語る聖。

「無線でそう呼ばれていた・・・」

「耳がいいねぇー！さすが四天王！」

「随分派手な格好だな？」聖を下から見回すロクだったが、聖の露出の多い格好に、一度目をそらした。

「イヤらしい目で見ないでねよね！武器を持ってないように見せないと撃たれるじゃん！」
「俺の説得で投降したわけだ？」
「そうよ！ありがたいと思ってよ！」口を尖らす聖。
「寒かったでしょう。中にどうぞ。お嬢様？」とダブル。
「だ・か・ら・あ・ん・た・誰・よぉー？」
「申し遅れました・・・わたくし・・・」
「私は、この四天王に用があるの！ねぇ早く街の中を案内してよ？」

　すると聖は、ロクの肘に手を入れるとＰ６の中に入っていった。
「くっ・・・ロクめ、いつもおいしい所を・・・」二人の背中を見つめるダブル。

　ロクと数名の兵が聖を乗せてエレベーターに乗り込む。ダブルの姿はなかった。聖はロクの横顔をじっと見つめていた。
「あんた・・・本当は弟を殺してない・・・」突然、聖の重い口が開く。
「ん？」
「噂が本当ならあんたは人を銃で撃たない。さっき、指を折った者が一人だけ・・・しかも銃を構えないで撃つなんて・・・ジプシャンなら殺されていた・・・」
「その噂、どんな噂だよ・・・？」目を細くするロク。
「いいの！あんたは弟は殺してない！そう決めたんだ！」
「ふっ・・・変な女だな。確かに俺はあの時何もしてない。だが俺のせいで死んだのは事実だろ？恨まないのか？」
「弟と言っても、本当の弟じゃないし・・・」
「すまなかった・・・」
「いいの。もう忘れる・・・」

「ところで、ライジュウってなんだ?そう言われていた。」
「さあ知らないわ。皆がそう言ってたから。そう言えばあんたの名前は?」
「ロクだ。明日から取調べをする。いいな?」
「ろく?・・・じゃあ、あんたが担当してよね?」
再びロクの肘に腕を絡める聖。
「あいにく、担当外でな・・・」
エレベーターが止まると、ドアの前には桑田がいた。桑田はロクよりも聖に目が行く。

「ふーん・・・ポリスにも女はいるんだ?」
桑田の姿に慌てて手を振り切るロク。
「と、当然だろ・・・ど、どうした桑田?」桑田の様子を伺うロク。
「は、はい。会議が終わったので、司令が会議室に来て欲しいと伝言です・・・」
「わかった。この人を連れて行ってからそっちに行く。」
二人の様子を興味深く観察する聖。

そうするとロクたちは、桑田を置いて廊下を歩き始めた。
「今の・・・あんたの彼女でしょ?」
聖は初めてロクの前で笑顔になる。

「血は繋がってないが・・・妹だ。」
「嘘よ。彼女を見れば、わかるわよ。同じ女ですもん!」
「何がだよ?」
「私といたあなたを見て、悲しい顔してたわ。謝っておいてね。」
「あんたが謝ることはない。彼女はそんなに弱くないさ・・・さぁて、今日はここにいてくれよ。」

ある長い廊下に面した一室の前に二人は止まる。その部屋に真っ

先に入る聖。小綺麗な作りのワンルーム。聖の目が輝く。
「あら、ポリスにしては随分まともね。ベットもあるし・・・私ね、誰か添い寝してくれないと寝れないの。今日はあんたでいいわ。」
上目使いでロクを見上げ、胸の谷間を寄せてみる聖。
「おいおい・・・まだ首と胴を離したくないんでね・・・さっきの奴なら声掛けておくけど?」慌てて聖の目線から目を逸らすロク。
「いい男だけど、あたし背の低い子駄目なの・・・」
「ふふっ。そう伝えるよ!また明日な!」部屋を出ようとするロク。
「明日、あんたじゃなきゃしゃべんないからね!」
「なら自白剤で吐いてもらうさ。」

ロクはそう言うと部屋を出て行った。聖はベットに飛び込んで横になった。
「ベット初めて!」
聖は枕を力任せに抱き締め、ベットを左右に転がり始めた。

会議室。２０名くらい座れる丸テーブルに、弘士一人が座っている。そこにロクがノックして入ってくる。
「入ります!」
「すまん。まあ座れ。」

弘士に対するようにテーブルの反対の席に座るロク。
「桑田の件ですが・・・」まずロクが開口一番に発した。
「ああ、明日にでも解除させる。あんな噂が出る以上しかたがなかった。許せ・・・」
「いいえ・・・」
「Ｐ５の二人の件は曽根参謀から聞いた・・・二人ともお前が育てあげたんだよな?」
「弟以上の奴らでした。まだ二人とも１５歳なのに・・・」

ロクは目の前のテーブルを力任せに叩いて見せた。

「それで?向こうは持ちそうなのか?」

「次の定期便で、残りのジプシーを送りたいそうです。」

「そうか・・・いよいよだな・・・?」

「Ｐ５の地下工場プラントが無くなれば、Ｐ６は・・・」

「確かにＳＣはもちろん、武器等はなくなる・・・」

「しかし・・・死龍ならやってくれると思います。あの・・・?そう言えば司令は私に話があるのでは?」

「あ、ああ・・・ロクに命令を下す!」弘士が急に命令口調になる。

「は、はい!」　ロクは直立になる。

「明朝、０７（ゼロシチ）時にレヴィアにてＰ７（ピーセブン）に向かへ!」

「Ｐ７・・・?ですか・・・?」　ロクは一瞬戸惑った。

その２６　リバイアサン

この時代、ポリスは既に２つしか残っていない。旧三沢市にある第５ポリスと、旧多賀城にある第６ポリスだけである。第１から第４のポリスは、この時既にジプシャンに陥落させられていた。

ポリスは旧自衛隊が設けた核シェルターから始まっている。いつからポリスと呼ばれたのかは定かではない。由来は、ポリス＝小都市の説もあるが、地表に生き残ったジプシーを救っていった頃、警察の役割をしたからとも言われている。言わばジプシーが付けた愛称だった。

弘士はロクにＰ７に向かへと命令していた。Ｐ７とは・・・？Ｐ６が海の沖合いに作り出した、移動海上ドックの名で正式なポリスではないが、七番目のポリスとしてＰ６の中での通称であった。主に戦前に沈んだ沈没船を引き上げ、貴重な金属を回収するのと、海からの食料となる魚や海草を捕獲し、深海から海洋水を調達するのが主な役割であった。また軍事的には、ポリスの海兵を教育する施設でもある。

「前司令から詳しく話はあるだろう。」と弘士は険しい顔でロクに語る。

「はあ・・・Ｐ７で俺にどうしろと？」

「行けば分かる。前司令も同行する。詳しくは・・・」

「タケシは・・・また来ます！」弘士の言葉の途中でロクは立ち上がり反論した。

「だろうな。しかし今はＰ５を救うのが先だ。心配するな。Ｐ７からはすぐ戻る予定だ。」

「はあ・・・」溜め息を漏らすロク。ロクにはＰ７に行きたくない理由があった。

真夜中の丘。ヒデたちのキャンプ。ヒデが一人テントに寝ている。そこへ、丸田が入って来る。

「ヒデ！大変だ！」

「なんだ！？」起きるヒデ。

「聖がいないんだ！」

ヒデが起き上がり眠い顔を手で擦った。

「それが！？」

「それがって？本当にＰ６に投降したんじゃないのか？」

「先にアジトに帰ったんじゃないか？」

「ＳＣと武器を置いてか？」

「ほっとけよ・・・時期に食料が無くなったら戻るさ・・・」

「しかし・・・」

「タケシには報告するなよ。銃殺だ・・・」

「わかった・・・」テントを出ていく丸田。

「聖の奴・・・」ヒデはテントの隙間から一人遠くを見つめた。

Ｐ６指令室。夜のせいか人も少なく司令席には誰もいない。桑田は一人でパソコンをいじっていた。

「らいじゅう・・・雷獣？これか！白鼻芯？ハクビシン？哺乳類？タヌキに似た？・・・それと・・・雲と雲を行きかう神出鬼没の伝説の獣・・・うーん、これがどうしたのか？」

Ｐ６のある個室。聖がベットで天井を見ながら寝ている。

「明日、タケシは来るのか?その時はヒデも・・・?」聖は眠れない様子だった。

Ｐ６の大場家族の部屋。家族４人が川の字になって寝ている。その中、大場と直美だけが起きていた。
「お父さん?いつになったら、地上に出れるのかな?」と直美。
「さあな・・・?」大場は幼い二人の寝顔を見ている。
「水や食事に困らなくなったのはいいんだけどね・・・なんだか不安なんだよね・・・?」
「この子らが安心して寝れるならいいじゃないか。」
「ポリスってなんか好きになれないのよね・・・」

ジプシャン軍本部。１００台以上のＳＣが並んでいる横にタケシと石森の姿。
「各車ミサイル積載完了です!」
「そうか・・・見ていろ・・・雷獣め!」

Ｐ６の南ゲートの塀の上。ロクが一人、夜の海を見ている。
「Ｐ７か・・・」ロクは一人呟いた。

各々の、運命の日が開けようとしていた・・・

軍服を着た久弥が、ポリス軍区画の地上にいた。太陽は東から昇り始めていた。空は雲一つない快晴。すると、ロクのジャガーカス

トリーが向こうから走ってくる。久弥の側に止まると、ロクが降りてくる。

「狭いですが、どうぞ！」助手席のドアを久弥の為に開ける。

「うむ・・・ご苦労！」

久弥がジャガーに乗り込むと、ロクも車に乗り込み車を走り出した。車はまだ人がいない街を通り過ぎ、南ゲートの前に止まる。塀の上には2名の兵が見える。

「こちら黒豹。南ゲート開けてくれ！」

『了解！』と我妻の声。

ゲートが開き始めると、全てが開くのを待てずにジャガーはＰ６を出て行く。車は海へと走り出す。するとその海岸線には、船をひっくり返したような巨大な建造物が海岸に停泊していた。船の底となる部分に艦橋のような物が設置されている。長さは８０メートル、高さは艦橋部分で１５メートルはあろうか、遠くからみると海岸に転覆した船が打ち上げられたようにも見える。色はくすんだ赤。ジャガーはその巨大な船に走り出して行く。

「何か話があると聞いてますが・・・？」ロクは久弥に問う。

「うむ・・・実はお前にＰ７配置を考えている。」

「はあ・・・私に車を降りろと・・・？」

「Ｐ７でＰ５から来るジプシーの志願兵を、海兵として育てて欲しい。その教官として働かんか？」

「ありがたい話ですが、少し考えさせて下さい・・・」低い声のロク。

「銃で敵兵を撃てない奴を前線に置けないと、反発する声が多くてな・・・」

「曽根参謀ですよね？」

久弥はその質問は答えなかった。車はその赤い船の側に来ようとしていた。
「こちら、黒豹。レヴィア1番艦。ハッチ開けてくれ。」
『確認した。了解！』無線が返って来る。

船の外側の中心部分が上から下へと開き始める。砂地にその部分が付くと、その扉部分が坂道となり車ごと船に入れるようになっている。ロクはSCごとその坂道部分から船へと入る。

船の中は、SCが5台程が格納される広さだった。扉は再び閉じ始める。艦内は所々が逆さまのままの作りが残っている。扉が閉まると、空気の流動する音が多く聞こえていた。

薄暗い車庫。車を降りたロクと久弥は、近くの階段で上へと登り始めた。船の底、この船では甲板部分に上がると、更にブリッチまでの階段を上がる。

ブリッチ内は意外と狭く、ロクよりも若い海兵4人程が計器を見つめていた。その一人で艦の操縦器を握っていた男がロクに声を掛けてきた。

「ロクさん！これはお珍しい！」
「おお・・・桜井か・・・？」

ロクに声を掛けたのはこの船の航海士の桜井。歳はロクと同じくらいだ。
「訓練航行で船酔いでダウンされて以来ですかね？」
「それを言うな・・・」桜井から目を逸らすロク。
「この艦、P7に向かうんですよ？陸戦トップのロクさんが海兵の

P7に何用なんですか？」
「さあな？親父さんに聞きな？」素っ気ないロク。

久弥は階段入り口近くの後方中央部分に座ると各員に指示を出した。
「レヴィア発進準備！」
「了解！」と桜井。
「俺は下の格納庫にでもいますよ・・・」

自分の居場所がないと感じたロクはブリッチを出ようとしていた。
「ここにいろロク。間もなく潜水航行を取る。」
「はあ・・・」
「ブリッチ、封鎖します！タラップ上げろ！」桜井は発進準備に入る。

ロクは仕方なく、開いている席に座った。甲板からブリッチに通じている階段が上がり、ブリッチは密封された。

P6の見える丘。ヒデのテントに丸田が入って来る。ヒデの隣には、裸の女が寝ていて、慌ててテントを出る丸田。
「おいおい・・・」
呆れる丸田。テントの外で丸田はヒデのテント内に大声を上げた。
「ヒデ！雷獣だ！しかも海竜もいる！」

ヒデは渋々テントから出てくると。裸の上半身にポンチョを羽織っていた。
「待機だろ！？出る幕じゃねぇよ。」
「いいのかよ！？昨日とは態度違うんじゃねぇか！？」

丸田はヒデの態度に怒りさえ感じていた。するとＰ６の方から巨大な、砂煙と轟音が響き渡った。風のせいか、５キロ離れた丘までも聞こえてくる。　丸田が海竜と言っていたのは、ポリスの強襲戦艦レヴィアであった。レヴィアは船体の周りからは砂煙をはきながら海へと移動して、そのまま海へと入って行く。更にしばらく行くと甲板まで海水に漬かり、しまいには見えなくなってしまった。

「海に入ったら追えねぇな・・・」双眼鏡でその様子を見つめるヒデ。

「どうすんだよ!?」と丸田。

「待機だろ?もうひと寝入りだな・・・」再びテントに入るヒデ。

レヴィアブリッチ。既に海中を航海している。

「レヴィア潜水航行に入ります!」と桜井。

エアー音からエンジン音に艦は切り替わった。

「ロク・・・先程の話だが、断ってもいいんだぞ?」

「はあ・・・?」

「弘士に言われた時に、ロクは受けないと思うと言ったんだ。お前は進んで車から降りないとな。ストラトスのタケシもタイミングよく来たしな。ロクにはまだまだＳＣに乗っててもらわないと、奴とまともに戦えるのはロクとダブルくらいだしな?」久弥は海中の窓を見つめる。

「おやじさん・・・」

「海兵の教育はわしがしよう。元々わしがする予定だ。わしの最後の仕事だ。ロクも車相手なら戦えるのだろ?」

「まあ・・・」

「なら、弘士にはわしからそう伝えておく・・・」決してロクの顔を見ない久弥がいた。

「すいません・・・」

Ｐ６の取調室に机と二脚の椅子。一つに聖が座らされている。そこへノックもせずダブルが部屋に入ってくる。
「なんだ、あんたか！？」がっかりして机にダラケて見せる聖。
「俺じゃ悪かったようだな・・・」ちょっとムッとするダブル。
「あいつは？ロクとかハチとか・・・」
「今日はいない。」
「そうか・・・じゃあ早く取調べしてよ。」

聖はロクが居ないのを知ると、机に両肘をついて頬杖をつき、気を抜けた態度を取る。
「なぜ投降を？」
「昨日、あいつに話したよ・・・」目を合わさない聖。
「聞いてないな・・・」
「タケシ・・・また来るよ・・・」話を変える為、話題を逸らす聖。
「なぜ？」
「仲間・・・そう言っていたし～」
「あんたは軍に所属してるのか？」
「まさか！正式にはまだよ。ジプシャン軍が出した条件は四天王の首だった・・・仲間は四天王の首を取ろうとした・・・でも失敗・・・」
「それでポリスに侵入した・・・？」

「もう嫌になった！！ロクみたいなのがまだゴロゴロしてるんでしょ！？無理よ・・・あんたも四天王なの？」時折キレてみせる聖の喋り。
「ここでは四天王とは言わない。ジプシャンの四天王狩りが始まってからは特にな・・・」

「そうだね。確かにハイって言わないよね？」
「タケシはいつ来るんだ？」
「さあね。上の人間だけ会ってるけど、見たことないしね。タケシの命令で丘で待機になってるようよ・・・ねぇ？本当にここ大丈夫なの？ポリスはいい噂聞かないよ？来て早々に陥落させられたらイヤだよ・・・」
「心配するな・・・」

潜水航行中のレヴィアブリッチ。桜井の動きが慌しくなる。
「親父さん！間もなく、Ｐ７近辺です！」
「よし、レヴィアを海上に浮上させる！」と久弥。

レヴィアは海上に浮上し始めた。海上は波が高く、浮上したレヴィアはその波に大きく揺れていた。その前方には、幅が３００メートル、高さは海上から２０メートルくらいの四角い鉄の要塞が海上に浮いていた。

その２７　志願兵

それは、まるで海に浮かぶ要塞だった。

Ｐ７の正面には、ロクや久弥の乗るレヴィアと同じ形の艦が２隻繋がられていた。皆、船底部分の形だ。やや艦首やスクリュー部分、長さが違うが、甲板から伸びるブリッチ、左右の機銃は同じ形である。左の艦の側面に「２」と白く書かれ、右の艦の側面には「３」と書かれている。Ｐ７の一番上の部分には、機銃が何機備え付けられている。そこに勤務してるのだろう若者が大きく手を振っている。

「２番艦と３番艦ですか？もう航行出来るのですか！？」ロクは蒼い顔をしながらも自分の席をよろよろと立ち上げた。

「この後ろに４と５もある。まだテスト航行がまだじゃがな。」

「もう完成してたのか・・・」

「だがまだ乗組員がいない・・・この艦を動かすには最低でも５０人はいる。１０隻で５００人。志願兵ではまだまだ足りん。」

「この艦隊が完成したら海からＰ５を支援出来ますね・・・？それと太陽光の新兵器・・・」

「そうだな・・・おい、桜井。左の５番ブロックに停泊しろ！」

「了解！」

Ｐ６の取調室。バズーと大場が向かい合って座っている。

「取調べはない。昼から街に出てもらう。と言っても他のジプシーらとは隔離する。午後からは仕事もしてもらう。」

「やっと、穴倉から出れるのかぁー！」大場は背伸びした。

「長女もいたよな？ここは１２歳からは仕事だ。子供らは学校になる。」

「学校か・・・まだこの世にそんな施設があるとはな・・・？兵隊育成学校ならうちの子は行かせんぞ！」バズーに睨みを効かす大場。
「そんな所じゃないよ。さあ部屋に戻り支度をしてくれ。」
「わかった・・・」

別の取調室にはダブルと聖が向かい合っていた。
「じゃあ、正式には軍ではないじゃないか？」
「まあ、正式には・・・」
「なら、午後には街だ。それとその格好、街じゃ危ない。ある程度の物は与える。着替えろ。明日からは仕事だ。」
「ああ、やるよ。肉体労働だって、メカニックだって。」
「さっきの話が本当なら、タケシはやはり来るのか？」
「さあね。キャンプを張れ！しか聞いてないから・・・」
「そうか・・・奴は・・・必ず来るな・・・」不安を隠せないダブル。

Ｐ７内の指令室。箱型のＰ７の天井部分の角に位置するのだろうか？高い位置から館内の風景が見えていた。時折、溶接の光が館内全体に光っている。一番底の部分には、６から１０と書かれた艦が並べられていた。久弥たちが乗って来たタイプとは色も形も違うタイプだった。

側面の壁には通路が設けられ、そこを１０人前後で訓練兵が走っている。底は沈没船を引き上げるためか、海水が見える所もあり、時折白波が立っている。ブリッチもそれに合わせて揺れる時があった。製造中の艦は一隻に２０名前後の整備員が作業をしている。

狭い指令室には５名程が待機していたが、そこにロクと久弥らが

階段を上がって来る。

「よう。楠本！」

久弥が声を掛けた男は軍服で３０前後、背は低くニキビ跡が多い男だった。楠本はその声にすぐ立ち上がり、久弥たちの方へ近寄った。

「すいません。おやじさん。出迎えも行けず・・・５番艦の最終調整が忙しく・・・」

「いいんだ！」久弥は楠本に微笑むと、空いていた席に腰かける。

「おっ！ロクか、ここに来るなんて珍しいな？」楠本が後ろのロクに気づく。

「あんまり、ここは来たくはないですよ・・・」

「ふふふ、ポリス一番のドライバーも、船酔いには勝てんようだな？」楠本はロクの蒼い顔を見て薄笑みを浮かべた。

「海は嫌いです！」

「お前が来るって事は、まさかお前が新しい教育係りか？」

すると二人の会話に久弥が入った。

「その予定だったが。その役はわしがする。」

「おやじさんがですか・・・？」

「それで？６から１０番艦はどうだ？」

「まあ、８０パーセントってところですかね・・・」

「急いでくれよ！」

「それより、海兵です。ここには整備兵合わせて２８０名です。半分にも満たない・・・」

「あと３００名か・・・今日連れてきたのが３０名。なんとかジプシー志願兵を至急集めよう。」

「Ｐ５の戦況はどうなんですか？」と楠本。

「うーん・・・厳しいと聞く・・・」
「四天王2名が行方不明だそうです。戦況は不利ですが、なーに死龍がいますから・・・」二人の会話に口を挟むロク。
「死龍か・・・」
楠本は何か思いつめていた。

「それで、2から5番艦は？」
「あとは潜水航行だけですかね。まあ問題ないです。いけます！」
「そうか。今日からわしもここに残るぞ。」
「はい？本日からでありますか？」
「善は急げじゃ！あとは任すぞ。ロク？」
「はぁ・・・」不安げなロク。

P6地下。大場の仮部屋。直美や弟、妹がいる所に大場が帰って来る。
「みんな！これから地上に上がるぞ！」
「やっとだね。」雨音が笑顔で大場に近寄る。
「直美は、給食センターという所で勤める事になった。」
「この子らはどうするの？」不安そうな直美。
「学校があるらしい。そこに預かってもらう。」
「そうなんだ・・・」
「なんだ、どうした？」
「いつも一緒だったから、いざ離れるとなんか寂しい。」
「慣れは人の最大の武器・・・」
「そうだね。さあ行くよ。みんな！」
直美は嬉しそうに弟と妹を連れ出して行く。大場は自分の荷物を持ち出しながら、その3人の後ろ姿を見ていた。

Ｐ６の地上の街。たくさんの人が行き交う街を、ダブルと聖が歩いている。
「しばらくは監視が付く。スパイの疑いが消えるまでな？」とダブル。
「覚悟はしてるよ。しょうがないよね。」
「仲間は心配じゃないのか？」
「うまくやるよ。あいつらは・・・」
「ここがこれからあんたの家だ！」

ダブルはある建物の前で止まった。２階建てのその建物は決してきれいではなく、外壁が崩れかかっていた。
「家に住むの初めてなんだ・・・」
「地下がシェルターになる。警報がなったら地下に行け。地下２階は隣家と繋がっている。仕事は朝からだ。隣の家に８時に集まれ。」
「あんたらに逢いたくなったらどうするの？」
「無理言うなよ。一応軍人だぜ。しかもあんたらって、ロクが目当てだろ？」
「わたし人の恋路を邪魔するような嫌な女じゃないの！」
「はぁ？」
「あの人は無理よ・・・先約があるの！」
「なんだか知らないが、俺ならいつでも来てやるよ。監視役に言えよ。じゃあな。」聖に背を向けるダブル。
「私の添い寝役には役不足よ！」
「はいはい・・・」背中越しで手を振るダブル。

Ｐ７の内壁に設置されてる細い通路。久弥の船に乗っていたのであろう、３０名近いジプシーの志願兵が建造中の内部を見ていた。通路の手摺りから身を乗り出して物珍しく見ている。皆若く、１２才から１５才の少年たちだ。中には少女の姿もあった。そこへロク

がやって来た。

「今日からここの勤務だそうだな？頑張れよ！」

ロクが来ると、皆壁際に直立した。すると若い兵が不安そうにロクに話しかけた。

「我々に本当に出来るのでしょうか？」

「そうだな・・・まずは船酔いを克服する事・・・」

「はい！」全員が声を揃える。

それを様子を聞いていた桜井がやって来る。

「克服するのは、ロクさんもですよ。」ニヤニヤ顔の桜井。

「そう言うなよ・・・そうだ！帰りはおやじさんは乗らんぞ。」

「はぁ？」

「ここに残るそうだ・・・」

「やはり・・・なんとなく感じてました・・・それにしても、みんな若いですね・・・」

「そうだな。今のポリスの事情じゃしょうがないな。途中保護のジプシーを軍施設に入れられないしな。」

「近々Ｐ５からもジプシーが来るって聞いてますが？」

「うん。こちらで保護する。無事に届いたらの話だ。」

「そうですか・・・」

「Ｐ６に戻る。出港準備をしてくれ。」

「了解！」

Ｐ７の指令室。ロクや桜井、そして志願兵を上から見ている久弥と楠本。

「教育係りは、ロクではなかったのですか？」

「うむ・・・ロクには、まだやってもらわなければならない事があ

る・・・」深刻な表情の久弥。

その２８　なつみとなおみ

レヴィアブリッチ。桜井が艦長席に座るロクに向かって叫ぶ。
「出発しますよ。艦長！」と桜井。
「艦長って・・・俺かい？」
桜井の突然の言葉にロクは動揺する。

「はい、おやじさんに帰りの指揮はロクさんにやらせろって。」
「か、艦長をか？で、出来るわけないだろ？」
「ふふふ、そこに座っててくれれば、後は我々がしますから・・・」
「そ、そうだよな・・・？」
「左がレーダー員の国友、右が通信兵の三島です！」桜井が二人のクルーを紹介する。
「国友です！」
「三島です！ロクさんを乗せれて光栄です！」
「ああ・・・頼む・・・」顔が益々強張るロク。
「ふふふ、この人結構人見知りなんだよ！」笑いながら二人に紹介する桜井。

諦め半分で今朝おやじさんが座っていた、後方の指揮席に腰掛けるロク。ブリッチが慌ただしくなった。
「アンカー切り離せ。レヴィア潜水準備！」
「進路クリアー！ブリッチタラップ上げます！」と三島。

１番艦のブリッチの階段が上がり、ブリッチは密閉される。桜井は艦内用の無線のプレーストックボタンを押し放送を始める。
「本艦はこれより、潜水航行を取る！各員配置につけ！」

『艦内異常なし！』スピーカーが鳴る。

「潜水します！」桜井が操縦管を引く。

レヴィアはＰ７のすぐ側で海に潜り始めた。３０メートル程海底に潜ったあと停止する。

「１８０度反転。取り舵一杯！」

レヴィアはその場で艦首を反対側に向け始めた。

「進路Ｐ６。微速前進！」

「Ｐ７より無線。ロクさん宛てです！」と三島。

「こっちに繋げ！」

ロクの座っていた席のスピーカーより久弥の声が聞こえた。

『ロクか？弘士に志願兵を頼むと伝えてくれよ。』

「はあ？」

『至急、兵らは海兵としてものになるまで鍛えると・・・』

「了解です！」

『任せたぞ。ロク・・・』

Ｐ６の街外れ。ある建物から大場の家族が現れた。そこへ待ち受けていたのは桑田だった。

「大場さんですよね？」と桑田が笑顔で近寄る。

「そうだが・・・」と大場。

「家まで案内を任されました。桑田と言います。」

「よろしく。先日は・・・」

「よろしく・・・」と直美。

「家はこちらになります。行きましょう！」

「はい。」

桑田は先頭を歩きながら、後ろの直美に話しかける。

「ダブルさんが喜ぶ訳が分かりました。」

「えっ？」突然に驚く直美。
「綺麗な人って言ってましたけど、直美さんですよね？」
「あいつ・・・そんな事言ってたの？」目が険しくなる直美。
「はい！」
「なんか鼻に付くのよね。あの背の低いの・・・そしてもう一人の奴・・・」
「だ、だ、誰ですか？」嫌な予感の桑田。
「ロクだっけ？あいつの名前？」軽く握り拳の直美。
「ああ、ロ、ロ、ロクさんですか？ま、まぁ変わりもんで屁理屈屋で頑固ですけどね・・・はははは・・・はははは・・・」何か気まずい直美との間の空気。

「あいつの事、よく知ってるの？」今度は直美が質問する。
「私、ロクさん専属のメカニックなんです。っていうか、子供の頃からいつも一緒で兄貴なんですよ。ダブルさんもみんなです！」
「そうなんだ・・・そう言えば、あいつ四天王なの？」
「しっ！・・・ここでは四天王って禁句です。四天王狩りはポリスの中でもあるんですよ。ジプシャンはどうも街にスパイを侵入させているようで・・・」

桑田は直美の四天王の言葉に敏感に反応し辺りを警戒した。
「そ、そうなんだ。」口を手で覆う直美。
「ど、どうしてロクさんが四天王だと？」
「父がね・・・保護された帰り、車の中であいつに向かって四天王じゃないかって聞いたら、最初はハイって言ったんだよ。」
「あいつ・・・」次は桑田が握り拳を作る。
「えっ！？どうしたの？」
「いえ、べ、別に・・・そ、それで？あいつ・・・いえロクさんなんて言ったんですか？」
「四天王さまが直々にジプシーの保護に来ますかー？って言ってた

かな?」
「そ、そうですよね。そ、その通りですよ・・・」何か誤魔化そうとしているなつみ。
「四天王様って言うくらいだからやっぱり違うのかな?でも変な奴だよね?あいつら・・・?」
「た、確かに変わってます。でも・・・」
「で、でも・・・?」ここはすぐ突っ込む直美。
「優しいですよ~ん!ロクさん・・・」

既に自分の世界に入り、一人照れるなつみに対し、直美は冷ややかな視線だった。
「ふーん、そうなんだ・・・桑田さんでしたよね?桑田さんはポリスの“人”なの?」

「い、いえ・・・私、ジプシーの出で・・・」
「そうなんだ。なんだ同じだね。私、ポリス嫌いなんだ。逃げてるばっかだもんね!」

「す、すいません・・・」
「なんで桑田さんが謝るの?私はポリスが嫌いと言っただけで・・・」なぜかなつみの態度に恐縮する直美。
「ここで育ったんです・・・ポリスに助けられたと言うか、育てられたというか・・・」
「そうか・・・ごめん・・・そうだよね?」
「い、いえ・・・」再度頭を下げる桑田。

「なつみちゃんはいくつなの?」
「15です。もうすぐ16ですが・・・」
「15?なんだ~!一緒じゃん!」
「そうなんですか。全然年上に見えました。嫁がどうのこうのって

言ってたんで・・・」

直美が険しい顔でなつみを覗き込む。

「な、何よ?嫁ぇー?い、いきなり、何の話よ?」今度は両手が拳の直美。

「い、いえ、こっちの話です・・・」気まずくなった桑田。

そこに大場が慌てて二人の会話に割り込んでくる。

「そ、その話は、冗談だよ・・・」と大場。

「えっ?お父さんまで・・・ちょっと、何なの二人して・・・」怒る直美。

「そ、そうなんだ・・・冗談でしたか・・・あっ、ここが大場さんたちの新しい家になります。」

そこは街から少し離れた所にあった家であった。他のジプシーが入れない軍施設内に１０軒くらいの家が立ち並んでいる。家の近くには機関銃を持った兵が３名程見える。

「給食センターは向こうになります。学校はあっちです。しばらくは大場さんたちは、監視と護衛の兵が付きますので・・・御用があれば兵に申して下さい。」

「わかった・・・ありがとう。」桑田に礼を言う大場。

「よかったら、学校と給食センター案内しますよ。直美さん、一緒に行ってみない?」と桑田。

「うん。行こう行こう!お父さんいいよね?」

「ああ、行っておいで!」

桑田は直美の弟と妹を連れて、別の施設に向かった。

Ｐ６指令室。柳沢が監視中に異変が起こった。

「西から敵ＳＣ・・・た、大群です！」と蒼くなる柳沢。
「街に警報だ！風神出せ。バズー、ダブルも呼べ！」と弘士。
「了解！」と我妻。
「柳沢、正確な数を出せ。松井、レヴィアはどうか？」
「現在、こちらに向かっています！」
「各砲座用意！予備兵は各ゲートだ！」
「数１５０！車両不明！」と柳沢。
「１５０・・・ジプシャンの本隊なのか！？」弘士は驚く。

その29　女スパイ

Ｐ６の街に警報が鳴り響いた。だが街は警報が鳴っても慌てた様子もなく、避難する者は少なかった。最近よく警報が鳴る事が多く、しかもいつも何事もなく警戒が解除されるせいでもあった。街のジプシーは警報がなっても、各家の地下シェルターに入る者はあまりいなかったのだ。

桑田や直美がいる学校近辺も、地下に避難する者が少なくまだ地上にいる者らの方が多いくらいだ。

桑田は慌てて、直美たちに向かって叫んだ。

「警報！？また敵が来たんだわ！私は指令室に戻るわ！大丈夫だと思うけど、直美さんらは一応ここの地下シェルターに入って！」

「わかった・・・さあみんな入るよ！」妹たちをかばう直美。

「どうして、みんなは逃げないの？」

雨音は他のジプシーらが逃げないのを見て、直美に問う。

「いいから、入るわよ！」

桑田は直美が地下に入るのを見守ると、急いで指令室に向かい街を走り出した。

Ｐ６指令室。

「第一波！あと5分で来ます！西ブロック方面！」と柳沢。

「機銃、砲座配置完了！」我妻が叫んだ。

「街の避難はまだか？」と弘士。

「まだ避難してない者がたくさん街中を・・・」

「松井！再度警報だ！何をしてるんだ！？」

「は、はい！・・・もう！なつみどこに行ったのよ！？」
松井は空席になったなつみの席を見つめた。

指令室内は緊張感が高まった。
「丘のキャンプは？」と弘士。
「まだ動きはありません！」と柳沢。
「風神出れます！」と我妻。
「少し待て！数が多すぎる！４０台では・・・ダブルは？」
「地上までまだ掛かりそうです！」
「バズーは？」
「東ゲートで待機してます！」
「ひ、飛行物体です！ミ、ミサイルです！」柳沢が叫ぶ。
「な、なに！？」

Ｐ６の西から来たのは、ジプシャン軍ＳＣ本隊で、ミサイル部隊である。
１５０台あるＳＣの約１２０台が屋根部分に４発の小型ミサイルを搭載していた。１００発近いミサイルはＰ６の高い壁を越え街へ降り注いだ。街は避難途中の者もたくさんおり、その中にミサイルは着弾した。

爆発する家、吹き飛ぶ人々。直美らがいる学校近くにもミサイルが着弾し爆発する。直美たち3人は地下のシェルターで頭を押さえ身を屈めていた。

Ｐ６指令室。
「西ブロック、被弾！」松井が叫ぶ。
「柳沢！被害は！？」

「１４、１６、１７から２０のエレベーター破損！」
「住居ブロックに被害拡大！」
「奴らなぜＳＣにミサイルを・・・」
「司令？こちらもＳＣを！」と曽根。
「数が違いすぎる・・・砲座は？」
「応戦中！何台かは撃破！数が多すぎると言ってます！」
「バズーさんからです。ゲートを開けろと・・・」焦っている松井。
「少し待たせろ！今は危険だ！外壁の機銃で出来るだけ対抗しろ！」と弘士。
「キーンさんからも連絡！ゲートをすぐ開けろと言ってます！」松井に無線が集中する。
「まだ駄目だ！・・・広角砲！何してる！」

丘の上のヒデキャンプ。ヒデや丸田の他、たくさんの仲間が被爆されてるＰ６を見下ろしている。
「始まったぞ！ヒデ！」丸田が立ち上がった。
「なんて数だ！まるで死骸に群がるハエだな・・・」とヒデ。
「これがストラトスのタケシか・・・」
「こっちは見てるだけかよ・・・」唇を噛むヒデ。

ジプシャン軍のＳＣ本隊。ストラトスにはタケシが乗っていた。
タケシは無線を飛ばした。
「２番隊、正面のゲートにミサイルを集中しろ！中へ突入する！」
『２番隊了解！』

Ｐ６の西にある住居地区は一部火の海となっていた。聖はその火の街を彷徨い歩いていた。所々火傷を負いふらふらの状態で意識を

失い欠けていた。
「きゃーっ！」
そこを更にミサイルが降り注ぎ、聖は炎の中に消えていった。

Ｐ６指令室。
「敵ＳＣ西ゲートに集中してます！」と柳沢。
「予備兵全てを西ゲートに！」と弘士。
「了解！」
「敵がばらけたな！？今だ！風神、アシカム出せ！」
「北、東ゲート開けます！」

「発射！」
タケシ隊の二次部隊が放ったミサイルはＰ６の西ゲートを直撃。左右のゲートを破壊した。高さ８メートル程の分厚いゲートが中で待機していた守備隊を押し潰すように倒れていく。

「よし！突入する！動く者は女子供も皆殺しだ！」
タケシ率いる三次部隊が西ゲートからＰ６に進入して来た。タケシのストラトスは街に侵入、道行くジプシーを機銃で撃ちまくっていた。白い外壁の町並みが血で染まっていく。

Ｐ６指令室。
「西ゲートが内側に倒れた？守備隊が全滅？どういう事だ！？」
「敵ＳＣ、街内に入り込んでいます！」飛び交う無線。
「くそっ！守備隊はどうしてる！？」と曽根。
「一部が応戦中ですが・・・ゲートに押し潰された者も多く！」
「補助電源作動しません！西ブロックのエレベーター使用不能！兵

を送る事も出来ません！」
「他のブロックに振り分けろ！」曽根が叫び続ける。
「ジプシーの死傷者多数！救助班を上に！」
「三班！？どうした！？・・・西ブロック守備隊応答なし！」
「ＳＣ戦が無理なら各員銃を持て！街の中で各建物を使ってでも白兵戦に切り替えるぞ！瓦礫で敵も易々と街の奥まで入れんはずだ！？」独り厳しい表情の弘士。

北の軍ゲートから出たキーン率いるＳＣの風神隊は、敵ＳＣと交戦中だった。
「指令室！数が多すぎる！歯が立たない！ダブルはどうした？ダブルの援護が必要だ！？」とキーン。
『こちら松井！停電やエレベーターの故障で地上に上がれないのが多数で、閉じ込められてる者も多く・・・他のブロックに振っていたり、別のを使ってますが、街の道が瓦礫で封鎖されており自由に移動が困難になっています！』
「もういい！！バズーはどうした！？」
『今そちらに向かってます！』

その頃、海中を航行するレヴィアにも無線が入った。ロクの座っている艦長席のモニターに我妻の姿があった。
『Ｐ６はミサイルで攻撃を受けており・・・』
「ミサイルだと？敵はＳＣだけだろ？」
『敵のＳＣに搭載しているのを確認しています！』
「すぐ戻りたいが、この足だ・・・」とロク。
『西の住宅街に侵入されており・・・』
「なんだと？あのゲートが破られたのか！？浜に上がり次第、すぐ艦砲射撃で援護する！随時連絡をくれ！」

『了解！』
「頼むぞ！」

無線が切れるとロクは席を立ち上がった。
「桜井！艦を浮上させる。ジャガー出撃もある。浮上と同時に主砲用意！桜井？こいつの射程距離は？」
「約３、８キロメートル！」と桜井。
「海上からでも撃てるのか？」
「可能ですが、波があり海上からは正確な砲撃は不可能かと思いますが、うちの砲撃手なら任せて下さい！」
「とにかくＰ６へ急行しろ！全速だ！」
「了解！多聞？聞こえるか？浮上と同時に主砲を出すぞ！主砲用意！方位そのまま！角度３５度！」桜井が内線を掴む。
『了解！桜井！？訓練じゃないよな？』聞きなれない声。
「実戦に決まってるだろ！」内線に怒鳴る桜井。

「タケシの奴、やはり・・・みんな・・・持ちこたえてくれよ・・・」焦るロク。

街はパニックになっていた。破壊された街を逃げ惑う人々。地下シェルターから火が着いたまま飛び出してくる者。建物の下敷きになりもがき苦しむ者。そこへジプシャン軍のＳＣが流れ込んでくる。

大場の新しい家でも、大場が地下のシェルターに入っているが、子供らが気になって１階と地下を行き来している。するとすぐ側で銃声が聞こえる。地下にいた大場は驚き、地上へと上がろうとした。

その時だった。大場の前に黒いヘルメット、体のラインがわかるライダースーツを着た者が突然銃を持って現れた。その容姿は女性

で大場に一歩一歩近づいて来た。

「誰だ貴様・・・！？」

「久しぶりね？大場・・・」ヘルメットの奥から女が答えた。

「まさか・・・る、瑠南花（るなか）か・・・？」大場は女を見て慌てた。その女は引き金を引き、大場に狙いを付ける女。

突然、一発の銃弾が大場の体を貫いた。

その３０　ポリス爆破命令

レヴィアは海上に浮上した。浮上と同時に甲板前部の砲座口が開き、２連砲塔が上がってきた。ブリッチからは既に海岸が見え、その先にはＰ６が煙を上げているのが分かった。

レヴィアの砲座内に１５、６の少年兵が一人いた。レヴィア１番艦主砲担当の砲撃主で名は多聞（たもん）。

「おい？桜井？砲撃目標は！？さっきの指示じゃ街を砲撃する事になるぞ！？いいのか！？」

レヴィアブリッチ。

「少し待て！多聞！」と内線に叫ぶ桜井。

「Ｐ６までの射程距離は？」ロクが国友に問う。

「あと１キロ！」

「砲撃用意だ！」ロクが指示を出す。

「主砲は出しました。しかし、すぐ傍に味方もいるようです！」と桜井。

「三島！Ｐ６に連絡、西ゲートの味方を下げさせろ。こちらから砲撃が出来ん！」

「了解！」と三島。

「国友？敵のＳＣの様子を細かく報告しろよ！？」とロク。

「了解！」

丘の上のヒデたち。

「海の方を見ろ！ポリスの海竜が浮上してきたぞ！」海岸を見てい

た丸田が叫ぶ。
「丸田！装甲車の無線で、タケシに連絡してやれ！海から海竜が来たと！」
「わかった！」

街内を走行中タケシのストラトス。
「何っ！ポリスの援軍だと？海からだぁ？あと少しで撤退する。まだ海の上だ！そう簡単に砲撃出来んだろ！？石森！外の連中に敵と一緒にいるように言え！砲撃される！出来るだけ敵を引き付けておけ！嶋はいるか！？各エレベーターへの作業はどうなってる？」
『はい！なんせ数が多く・・・頂いた街の地図ではなかなか街を移動出来ません！』と嶋。
「半分でいい。壊滅しては姉貴に叱られる。それと奴は出て来ないのか？」
『外にはいません！』と石森。
『中にも見当たらないです！』と嶋。
「雷獣め、どこだ！？今度こそ決着つけてやる！」

Ｐ６指令室。桑田が遅れて部屋に入って来る。
「遅くなりました！」
「遅いよ！ロクさんのレヴィアとの無線をお願い！西ブロックの敵のＳＣをレヴィアで砲撃するの！その細かい指示を出してあげて！」
「了解！・・・松井さん？状況は？」
「悪いよ。とってもね・・・街は白兵戦になっている。被害は見当もつかないわ・・・」

「変です！街のＳＣ隊が外に出てきてます！撤退と思われます！」
と柳沢。

「なぜだ?圧倒的なのに・・・桑田!西ゲート部分に敵が集中すると思われる。そこを砲撃を出来ないかとロクに伝えろ!」
「ほ、砲撃を?に、西ゲートをですか?」と桑田。
「西ゲートごとだ!西ゲートの守備隊を下げろ!」
「了解!レヴィア?聞こえますか?西ゲート近辺に砲撃出来ますか?」
『波が高く、正確な砲撃は不可能だ!陸地に上がるまで待てないか?』とロクの声。
「敵がなぜか引き上げているんですよ!」
『こちらに気づかれたな・・・』

ジプシャン軍本部。寛子が例の部屋に座っていると、参謀の犬飼が入って来る。
「総帥!浜田基地より連絡!タケシ様の第一ＳＣ隊がＰ６を襲っているそうです!」と犬飼。
「馬鹿な!タケシは今朝、北のＰ５に向かったのではないのか?」
犬養がその報告に驚く。
「どこかでＵターンして戻られた様子です!」
「寛子さま・・・如何いたしましょう?」
「すぐタケシを呼び戻せ!」寛子が呆れた顔で命令する。
「はい!」
「タケシ・・・何をやっているのだ!?」

タケシのストラトス。
「設置した者から撤退させろ!急げよ!」
『了解!』と嶋。
「石森!後続は任せるぞ!」
『了解!』と石森

「ヒデのいる丘に全車を集める。早坂の2番隊は全車Ｐ6から撤退させろ！」

その頃、ダブルのジャガーストームはＰ6内で、敵ＳＣ隊と交戦中だった。

「敵が引き上げてるぞ。指令室？どうなっているの！？」とダブル。

『レヴィアが上陸します。それを勘付かれた様子です！』と松井。

「ロクか！？またあの野郎！おいしい所を・・・バズーに西ゲートに行けと言え！敵は西に集中するぞ！」

『いえ、このまま西ゲートごとレヴィアで敵を砲撃する予定です！各車、敵の追撃は行わないで下さい！』

「西ゲートごとか・・・無茶しやがる・・・了解だ！」

その頃、ロクの乗るレヴィアはＰ6の南の海岸に上陸していた。レヴィアは下部の部分から大量の空気を放出し、巨大な砂煙を吐き荒野を走り始めた。時速は３０キロ程度だったが、その姿は砂漠を走る船でもあった。

レヴィアブリッチ。

「桑田？街の中の敵ＳＣは？」とロク。

『撤退しています！ダブルさんらが西に追い込んでいます！』

桑田の報告とは裏腹に、ロクは疑問が残っていた。

「なぜだ？この船だけで逃げる相手じゃないぞ・・・？」

「しかし・・・さすがにタケシですね？逃げも早い・・・」と桜井。

「国友！敵の動きを全て報告しろよ！」

「了解！現在何台かは例の丘に集結しつつあります！」と国友。

「丘だと・・・？」

Ｐ６指令室。
「敵は丘の上に集結しつつ・・・」と柳沢。
「数が数だ！我妻！ダブルに深追いするなと伝えろ！」と弘士。
「了解！」
「司令？夕方になります。敵も帰りのバッテリーを考えているのではないでしょうか？」と曽根参謀。

「それなら、日が高いうちに襲っているはず・・・ロクのレヴィアは？」
「間もなく、南ゲート付近に着きます！」と桑田。
「みんなよく耐えた！街の救出に向かえ！」

丘の上に到着していたタケシ。ヒデや丸田もいる。皆Ｐ６を見下ろしていた。
「皆帰って来たようだな・・・？さあ、ショータイムだぜ！」

タケシは何かのボタンを押す。すると先程、嶋の隊がＰ６の地上エレベーター部分に仕掛けていた爆弾が各地で爆音を出しながら爆発した。

レヴィアブリッチ。
「なんだあの爆発は！？」ロクは驚いた
「西ブロック住居地区近辺です！」と国友。

Ｐ６指令室。

「な、なに?地響き・・・この音?」怖がる桑田。
「な、なんなんだ柳沢!?」
「各エレベーター!爆破されてます!」
「敵の罠か・・・?」弘士は嘆いた。

エレベーターで街に救出していたポリス兵らが箱のままシャフトを落下し最下位部で爆破していた。ポリスの街中も次々と炎と煙を上げていた。街中で救出活動していた者もこの爆発に巻き込まれていた。

レヴィアブリッチ。レヴィアは西ゲート近くに停泊した。時はタケシ撤退から一時間程が経過していた。日は沈みかけ、街の建物に長い影を落としている。
「だいぶやられたな・・・指令室は?」ロクは無線を握る。
『無事です。エレベーターがだいぶ落下して、被害は拡大してます・・・』と桑田。
「外から見てると建物の数が減ったな・・・」
『41エレベーターは無事です。そこから地下へ・・・』
「みんな無事なのか?」
『一応は・・・』
「そうか・・・」
桑田の声も沈んでいた。

ロクはP6の街中を歩いていた。車で来たのだが瓦礫が多く途中から歩きだしていたのだ。街に動くものはなく、燃えている建物からは煙が出ている程度だ。道端には黒こげに焼き爛れた死体から、銃で撃たれて血まみれになった死体まで瓦礫以上にジプシーの死体

の数が多かった。
その一つが微かに動いているのに気づいた。ロクは急いでそこに近づき、微かに動いていた体を抱き起こした。

「おい！しっかりしろ！」
顔に火傷を負っていた。服も所々火で燃えたあとがある。性別は僅かに女性と分かる程度であった。その時、ロクはある事に気づく。上に着ている服は違うが中に着ていたタンクトップが露出が多い事だ。

「まさか・・・？ひ、ひじりさん！？」ロクは驚いた。

その３１　夕焼けのバラード

ロクは聖を背負い、必死の形相でＰ６の地下廊下を走っていた。
「ど、退いてくれ！」
廊下にはたくさんの負傷者が座り込んでいる。皆ジプシーだ。ロクの向かう先には少しづつ人が多くなり、廊下を走るのも困難になっていく。ロクはそこを掻き分けて行く。
「先生っ！？」

ロクが着いたのは、地下三階のジプシー専用の医療室だった。関根の他、僅か１０名程のスタッフがジプシーの手当てを手早く行っている。患者はスタッフ以上。既にそこは戦場だった。

「先生！？この人を・・・」
関根はロクが言い終わる前に口を挟んだ。

「急患！？それ以外は今無理よ！」
関根の言い方に、ロクも事態を把握した。

「突っ立ってないで、あんたも手伝いなさい！もうポリスは全然応援も寄越さないんだから！」ロクについ不満をぶつける関根。
「酷い火傷なんです。どうしたら・・・」
「とにかく、まず冷やして！それから隣の部屋から包帯とガーゼを持ってきなさい。」

「は、はい・・・」
「終わったら下から、桑田や松井たちを呼んで来なさい！出来ればポリスの医療スタッフもね！」
「分かりました！」

「いい？みんな！重い患者を優先よ！軽い怪我の人は後回しよ！」

スタッフが１０名程しかいないジプシー専用の医務室は、既に戦場以上となっていた。次から次へと運び込まれて来る患者たちに、関根は苦悶の表情を作っていた。

街を彷徨う、直美とその兄妹たち。

「お姉ちゃん・・・？」雨音は直美の手を引っ張った。

「お父さんは？どこに行ったの？」と勝也。

「家の形が・・・街はどうなちゃったの・・・？なにがあったのよ・・・？」直美は呆然とし三人は街をただ歩くしかなかった。

ポリス指令室。弘士がポリススタッフを中央に集めていた。

「まずは、ジプシーの救出が優先だ！それから西ゲートの復旧！エレベーターはその次だ。人手はいる！Ｐ７の海兵も呼び戻す。いいな！？」指示を出す弘士。

「了解！」

そこへロクが指令室に入って来る。

「桑田、松井！関根さんのところ手伝えないか？司令！医療室が負傷者で一杯だ。スタッフも手が足りん・・・それとポリスの医療スタッフも・・・？」

「手配してる。松井、桑田。いいだろう、行ってやれ。」

「はい！」

桑田と松井はインカムを外すと司令室から出て行く。

「被害は？」

「死傷者で７０００人・・・まだ増えるな・・・」

「そうか・・・ダブル！？」

そこにダブルが入って来た。

「司令、ロク・・・軍施設に隔離していた大場だが・・・」

「どうした？」とロク。

「射殺されていた・・・」

「どういうことだ？」と弘士。

「車の銃弾ではない。拳銃の銃弾だ。胸を撃たれて即死していた・・・」

「護衛がいたじゃないか？」

「護衛も撃たれていた。俺が見つけた時には、護衛にはまだ息があった・・・撃った犯人は若い女だと・・・」

「若い女だと・・・？」

「あそこは軍関係者しか入れない。やはり軍部にスパイがいるのか・・・？ほ、他の家族がいたはず！どうした？子供たちは？」

「家にはいなかった。シェルターにもだ・・・」

「そうか・・・」

弘士は桑田に案内をさせた事を思い出した。

「桑田が、大場たちを家に案内したはずだが・・・」

「桑田に聞いてみる。それと昨日、投降した聖だが・・・」とロク。

「どうした？」

「今、医療室にいる。酷い火傷を負ってる。」

「そうか・・・」

「自分、医療室に戻ります。負傷者が増えてますので！」

「頼む。」

ロクは弘士に敬礼をすると指令室を慌てて出て行く。

「やはり、ポリス内にスパイはいるのでしょうか？」とダブル。

「わからん・・・」

「キーンとバズーは？」
「街で救出作業にまわっている。」
「私の隊もそちらにまわります！」
「頼む！」

地下3階の医療室。山口ら黒豹隊も負傷者を手当てしている。そこへロクがやって来た。
「山口！すぐ偵察だ！」
「はあ？どういういう事です！？」
「敵ＳＣ隊を追え！また襲って来る可能性がある！」
「ひ、一人でですか？」
「逃げるのだけは得意だよな・・・山口？」
「は、はい・・・」顔が引き吊る山口。
「それと桑田を捜しているんだが？」
「奥にいますよ・・・」
「了解！早く行けよ！いいな？」
「り、了解！」

医療室の奥に入るロク。関根の患者の足を押さえる桑田と松井。
「桑田！大場の家族はどこだ？」
「学校のシェルターです・・・どうかしたんですか？」
「行方不明なんだ。わかった。ありがとう。」
「私も行きます。松井さん！あとお願い！」
「わかったわ！」
そう言うとロクと桑田は医務室を出て行った。

地上に向かうエレベーター。

「直美さんたちがどうしたんですか？」
「父親が何者かに撃たれた・・・故意的にな・・・」
「えっ？それで大場さんは？」
「死んだ・・・」
「そ、そうですか・・・」
「家族の直美らも危ない・・・」
「そ、そんな・・・」

再び街に出るロクと桑田。先程と違ってポリス兵や、他のジプシーが救出作業を行っていた。　ロクはあるシェルターから出てくる。
「学校のシェルターにはいない・・・」
「私、大場さんの家に行きます！」
「ダブルの話だと居なかったらしい。」
「静まってから戻ったかもしれない。」
「そうだな。手分けしよう！」
「はい・・・」

ロクが瓦礫の街を捜索していると、ある建物から直美と弟、妹が出てきた。
「無事だったか・・・」とロク。
「父が家にいないの・・・どこかに運ばれてない？」
「実は・・・大場さんは・・・」幼い子供たちの前で、言葉が出ないロク。

「父はどうしたの！？」
「死んだんだ・・・」
「えっ・・・」

二人に声はなかった。　Ｐ６街は長い影が帯び、日が暮れようとしていた。

四天王　第一章　プロジェクトソルジャー　完

第二章予告

ロク「桑田がスパイ？」
弘士「あの時、地上にいたのは桑田だけだ・・・大場を暗殺出来たのは・・・」
ロク「ふざけるな！！仲間を疑うのか？」

女性二人に囲まれ酒を飲むタケシ。
タケシ「わははは！。Ｐ６なんざ、口ほどにもないわ！」

死龍「私がＰ６に行く！ロクを助けれるのは私しかいないわ！」

桑田「生きて戻ってきてください。」
敬礼する桑田。車の中から桑田に親指を立てるロク。

直美「何で父は死んだの！ここは安全って言ったじゃない。」
ロクに激しく詰め寄る直美。

ヒデ「タケシを殺してここを脱出する・・・」
丸田「面白い。」

曽根「ロクは狂ってます。奴の作戦では・・・」

久弥「賭けてみようじゃないか。その奇襲作戦・・・」

病室のベットで寝ている聖。
聖「私が・・・奴らを説得する・・・」
ダブル「その体じゃ無理だ！」

バズー「なにやってんだ！あと2分だ！！」
バズーが銃撃し、機械の前で焦るダブルとキーン。

『ロクが放つ奇襲作戦とは？そしてポリスの怒涛の反撃が始まる！』

海上から浮上するレヴィア3隻。砲座が上を向く。
桜井「発射5秒前・・・4・・・3・・・2・・・1」

ロク「あんたらが、いつまでもこんな差別をするから、この戦争は終わんないんだ！」
会議室の中、一人立ち上がり怒り叫ぶロク。

ロク「必ず生きて帰る・・・」
見詰め合うロクと桑田

次回　四天王　第二章　松島奇襲作戦に賭けろ！

その1　暴動

この世界、既に“神”というものはなくなっている。もし神がいるのであればこんな惨劇はなかっただろう。第六ポリスが作られて２５年以上。タケシ襲撃はＰ６最大の惨劇だった。

１６：３０　Ｐ６の街に日が沈もうとしていた。街はまだ焦げ付いた臭いがたちこめている。親族が亡くなったのか、声を枯らして叫ぶ少女や、親と逸れたのか、路上で泣き叫ぶ子供。意気消沈し瓦礫の上で座り込む老人と様々だった。

ロクと直美は二人向かい合っていた。直美の目からは涙がこぼれ、それでもロクを見つめていた。

「もう一度言って！」直美はロクに正対した。

「君のお父さんは・・・死んだんだ・・・」

「嘘よ、嘘だよ・・・」

「君らも危ない。地下に保護する・・・」

直美は突然ロクの胸倉を掴むと怒りに任せロクに詰め寄った。

「何で父は死んだの！ここは安全って言ったじゃない！」

ロクを激しく揺さぶり泣き叫ぶ直美。ロクは何の抵抗もなく、直美の怒りを受け止めていた。しばらく詰め寄っていたが、力尽きた直美をロクはそっと抱きしめていた。ロクの胸で泣き叫ぶ直美。

「行こう・・・ここは危険だ。」

「誰がこんな事を・・・」

弟と妹は、なぜ姉の直美が泣いているのかを理解も出来ず、ロクと姉をポカンと見ていた。

１６：４７　Ｐ６指令室。
「司令。海岸線に、レヴィア２番艦と３番艦です。」
「動けるのか？テスト航海もしてないのに・・・我妻、Ｐ７に無線だ！」
「了解！」
指令室の中央スクリーンに久弥と楠本の姿が映し出された。
『派手にやられたみたいだな・・・桜井から連絡があった。テスト航海中の２番艦と３番艦をそちらに向かわせた。もう着く頃だが・・・』と久弥。
「到着しました。負傷者は７０００人を超えそうです。死者は５００人を超え・・・」
『なぜジプシーたちはシェルターに入らなかったんだ？』
「警報は何度か出したのですが・・・いつもの事だと思ったのでしょう・・・慣れ・・・という奴です・・・」
『そこの者らは無事なのか？』
「幸いにも・・・」
『上陸したら、海兵も作業に当てさせろ。皆、各々の家族を心配している。』
「分かりました・・・」

１７：０２　Ｐ６西ゲート前。
破壊されたゲート前には、たくさんの生き残ったジプシーたちが、自分の荷物を持って集まっていた。ゲート前にはアシカムが横付けされており、ジプシーを通さない格好に置かれていた。
アシカムの前には銃を持ったポリス兵が並び、銃を集まったジプ

シーに向けている。ジプシーの数は住居地区に近いせいか、時間が経つに連れどんどん増えていく様子だった。皆ポリスから出せと騒いでいる。

バズーはアシカムの上部に立ってこの様子を見ていたが、慌てて指令室に無線を飛ばした。

「こちら西ゲート、バズー。指令室聞こえるか？」

『こちら指令室我妻ですが・・・』

「西ゲート前に、ジプシーが集まっている。数は千人以上。皆ポリスを出ると言っている！」

17：03　P6指令室。

「了解・・・司令。西ゲートでジプシーの暴動。バズーさんから応援要請です！」と我妻。

「どこも手が一杯だ。キーンの隊をまわせ！」と弘士。

「了解！」

「暴動だと・・・？避難さえちゃんとしてれば・・・」

17：04　P6西ゲート前

怒り出したジプシーが瓦礫の破片を持っては、バズーのアシカムに投げ始めた。すると何人ものジプシーが投石を行いだした。石はアシカムはもちろん、前にいた兵にも当たり事態は深刻化して行く。

その時だった。一発の銃声がジプシーの集団の後ろから響き渡った。集団は慌てて後ろを振り向くと、拳銃を上に向けて立つロクと、直美の兄妹がいた。

「逃げたきゃ、逃げな！」

ロクの言葉に唖然とする一同。ロクは直美らを連れ群集を掻き分けると、アシカムの上にひょいと飛び乗った。

「逃げたい奴は逃げればいい。止めやしないさ！」
すると最前列にいたジプシーの男がロクに叫ぶ。

「だったら、そのでかい戦車をさっさとどけろ！」
「逃げてどうすんだよ！？」
「ここよりはマシだ！ここにいたらさっきみたいにみんな死んじまうぞ！」
「そうだ！そうだ！」
「ポリスは守ってくれないじゃないか！？」
「お前らなにしてんだよ！軍人だろうが！」
「これからは俺らは外で暮らすぞ！」
再び騒ぎ始めた群衆。

「ったく・・・」
するとロクは再び、拳銃を抜き空に向かって二発も発射した。再び沈黙する群集。
「助かるかもしれないな・・・ほんの何人かは・・・」

群集を説得するロクを不安そうに見つめる、直美やバズー。
「ロク・・・」心配するバズー。

「荒野に出ればみんな殺される。ジプシャンはそうしてきた。それはみんな知ってるよな？」アシカムの上でオーバーな素振りを見せるロク。

「ここに居たって同じだろうが！」
「何人死んだんだ！？」

「さっさと出せよ！」
「軍人の言う事は聞かんぞ！」

「ここに居れば仲間がいるじゃないか！助け合って、かばいあって、飯食って・・・荒野で死んだって誰も墓も作ってくれないぜ！」
静まり返る群衆。

「それでもいいなら出て行きな・・・バズー！こいつを動かせ！」
「しかし・・・」躊躇するバズー。
「いいから動かせ！」
バズーがアシカムを動かし、ゲート前から移動した。その先には荒野が見えている。誰も動こうとしない群集。

「心配するな！俺たちはジプシャンみたいに後ろから撃たないぜ！」
ロクはアシカムを降り、直美らの方に近づいた。群集は外に出るものはなく、各家に帰り始めた。
「やるな・・・ロク・・・」バズーが群衆に消えるロクの背中を見つめる。

「寄り道したな・・・行こうぜ！」唖然とする直美にロクが声を掛ける。
「ええ・・・」
歩き出す四人。直美たちはロクとの距離を置いた。
「ねぇ、お姉ちゃん？この人ちょっとかっこいいかも？」雨音が直美に小声で話す。
「言うね、雨音。そうかも・・・」

「あれ？俺・・・車どこにやったっけ？」
ロクは乗り捨てたジャガーを見失っていた。

「やっぱ、撤回・・・」その姿に幻滅する三人。

そこへ、キーン率いる風人隊が西ゲートに応援に来た。
「暴動はどこだ?」とキーン。
「あいつにやられたよ・・・」バズーは四人の方向を見つめた。
「ロクか・・・さすが交渉人だな・・・」

17：10　ジプシャン軍浜田基地。
ここはP6から北へ12キロと一番近い浜田基地。松島湾の海岸線の中央部に位置する。このすぐ北3キロに松島基地。さらに海岸線を東に6キロに手樽基地とジプシャンは松島湾だけで3つの基地を設けてあった。この3つの北の部分わずか8キロに、本部である品井沼基地がある。つまりこの3基地がジプシャン軍のP6側最終防衛ラインとなっていた。

浜田基地は基地といっても、簡単な囲いに建物とテントがいくつか、簡易レーダーに無線を飛ばす高い塔だけの基地らしい基地ではない。普段は20台程のSCだけを常駐している。三方を山に囲まれ、一方は海という自然の要塞でもあった。最前線基地の役割が大で、実質の基地の役割は隣の松島基地にあった。そこにタケシのSC本隊140台が集結していた。先程のP6での戦いでは、奇襲が功を奏して犠牲は僅か10台程であった。更にそこには、ヒデの仲間のSCが加わり150台以上のSCが集まっていた。

「ヒデ、ご苦労だった!」タケシがヒデを見つける。
「いいえ。お役に立てず・・・」
「お前らは隊の中に女を入れているのか・・・?」

タケシはヒデの仲間の露出の多い女たちを見ていた。
「はあ・・・おかしいでしょうか?」
「いや、うちの軍には女はいらん。まあ、後で話そう。まずは松島基地で酒だ!祝杯を挙げるぞ!」
「はい!」

突然、石森が見慣れない者を連れてきた。雲行きが怪しい様子だ。
「タケシ様・・・本部の者が・・・」
「姉貴の手の者か・・・ここに通せ!」

輪の中央に入って来る使者。タケシを見つけると人を掻き分けタケシに近寄る。
「タケシ様、総帥がお呼びです・・・」
「明日の朝、本部に寄る。それまで待てと伝え!」
「すぐお呼びとの事です!」使者は強い口調になった。
「呼びつけられるような事はしてない・・・ミサイルのテストだと伝えろ。」
「しかしですが・・・」

タケシはいきなり拳銃を抜き使者の額に向けた。
「タケシ様!な、何を!?」慌てる使者。
「姉貴に伝えろ!!明日朝戻ると・・・」
「わっ、わ、わかりました・・・」

代理が慌てて帰るのを、嶋や石森らも笑いながら見ていた。
「大丈夫ですか?本部の物に・・・」と嶋。
「ある意味、タケシ様より怖い方ですぞ。寛子様は・・・」と石森。
「構わん!言い訳は考えてるよ!それより酒だ!みんな行くぞ!」
「ははっ!」

タケシはある年配の部下に向かい命令した。
「念の為、早坂の二番隊は浜田基地に残り、隊の殿(しんがり)を任す！」
「ははっ！」
「それと、手樽基地にも隊を分ける！いいな！」
「相変わらず、用心深いですな？」
早坂は妖しく笑いながらタケシを見た。
「枕を高くして眠る為だ・・・」

17：32　P6地下3階。検死室。
大場の遺体が置かれている。暗い部屋には直美とロクだけで直美は涙を溢しながら大場と対面していた。

「本当の父ではなかったの・・・」直美が大場の顔に布を被せる。
「そうか・・・」
「でも、私たちにとってはいい父だったわ。一体誰がこんな酷い事を・・・？」
「教えてくれ？なぜ、あんたたち家族はジプシャンを脱走したんだ？」
「そ、それは・・・」　うつ向く直美。

その2　こだわり

17：33　地下3階検視室。
直美は黙っていた。ロクは大場の言葉に嘘がある事を見抜いていた。
自分が命を危険にさらしてまで、脱走など有り得ないと感じていた。
直美は一度ロクの顔を見るが、再び父の遺体を見つめた。

「今は話せない・・・時が来たらじゃ駄目かな?」
「構わないが・・・」
「ごめん・・・あの・・・」直美は何かを言い掛けた。
「いいんだ・・・ちびっ子らはどうする?」
「私が話すわ・・・」
「そうか。しばらくは地下3階で過ごしてもらうぞ・・・」
「なぜ私たちも?」
「脱走兵は家族も銃殺、ジプシャンの掟だったはずだ。」
「そうだよね・・・忘れてた・・・」
「君らも狙われる可能性もある。護衛は俺の手の者にさせる。部屋も特殊な所だ。しばらくは我慢してくれ・・・」
「わかったわ・・・」

17：55　P6指令室。弘士が慌ただしく指揮を取っていた。
「夜になっても復旧作業は続行!救出作業はどうだ?」
「被爆したところを中心に、確認作業になっています!」と我妻。
「手の回らない所は海兵を回す。負傷者は?」と弘士。
「増える一方です。子供、年老いが多いようです。」と柳沢。
「素直にシェルターに入っていれば・・・」
「司令。黒豹の山口からです!」
「中央に映せ!」

中央のスクリーンに黒豹隊の山口の姿が映し出された。
『こちら黒豹。山口！』
「どうした？」
『敵のＳＣですが、浜田、松島、手樽の三基地に分かれています。各５０くらいでしょうか？』
「三基地にか・・・？」
『宴会などを催しています。もう今夜は襲っては来ないと思われますが・・・』
「山口・・・勝手に判断するな！」
『す、すいません・・・』
「わかった。そのまま偵察だ！」
『了解！』
映像無線が切れる。
「おい柳沢？松島湾の地図を出してくれ！」と弘士。
「了解！」
「三隊に分かれたと言うのか？タケシと言う奴・・・用心深い奴だ・・・」
中央スクリーンには松島湾の地図が映し出される。弘士はそれをじっと見つめていた。

１８：１５　外は既に暗く、ロクは南側ゲート近くの塀の上に立って街の中を見ていた。
「こんなんじゃＰ５も持たない・・・時間の問題だ！どうすれば・・・？」
そこに息を切らした桑田が登ってくる。
「捜しましたよ。やっぱりここだ・・・」

「どうした?桑田?」
「どうしたも、こうしたも・・・山口さんから連絡があり敵の本隊が海岸の三基地にいるとの事!」
「海岸の基地に・・・」
「一度地下に戻って下さいと司令が・・・」

ロクはポリスの反対側を見る。海側にはレヴィアが3隻、陸上に停泊している。桑田の言葉が耳に入らず、ロクはその向こうの海を見ていた。
「なぜ敵は海岸線の基地に・・・?」独り言を呟くロク。
「もしもし?ロクさん!?」
「海から・・・レヴィアで・・・海岸を・・・?」

ロクは何を思ったのか急に走り出し、なつみを置いて塀の階段を降りていく。
「もう、どこへ行くんですか?」ロクの背中に叫ぶなつみ。
「レヴィアだ!大場の家族を地下3階の特別室に保護している。後は頼む・・・」
「は、はい・・・って・・・もう、命令無視ばっか!」

18:20　レヴィア1番艦ブリッチ。ロクが急いでブリッチに上がって来る。ブリッチには桜井他3名の兵がいた。
「桜井!聞きたいことがある!?」
「な、なんでしょう?」突然ロクが現れ驚く桜井たち。
「松島湾の水深はどのくらいある?」
「深い所で30メートルでしょうか?それが何か??」
「こいつで湾内に入れないか?」
「レヴィアでですか?以前から作戦としてはありましたが・・・入口の島々の狭い所には敵の機雷があり無理なんです。」

「機雷？機雷って水の上だろ？潜って湾に入るんだよ。」
「こいつ高さが１２メートルです。機雷が集中してる所って湾の真ん中にある桂島近辺なんですよね。その辺って水深が１２から１３メートルなんですよ・・・」
「機雷か・・・レヴィアじゃ無理か・・・？」
「この艦橋がなければ余裕なんですけどね。」
「少しづつ進んで、手で退けたらどうだ？」
「かなり機敏なタイプですぐ爆発するようです・・・元々はポリスの物らしいですね・・・で？ロクさんはどうして湾からの攻撃をお考えですか？」

「あの本隊をＰ５に行かせるわけにはいかない・・・それとこの海岸に基地が多いのは向こうの本部に近いからだ・・・ここを叩けばジプシャンは動揺するはず・・・Ｐ５に向いている敵の目をこっちに向かせる事が出来る！」
「しかし湾からは無理ですよ。ここ二十年、誰も突破してないそうですからね・・・」
「そうか、とはいえ陸からレヴィアでは、勘付かれる。こいつ陸上じゃ足が遅いだろ？」
「そ、そうですが・・・」

「満潮ならどうですか？」
そこに口を挟んだのは、レヴィアレーダー員の国友だった。

「満潮？」
「はい・・・近いとこですと・・・明日の夜明け前、０４時２４分に満潮になり海水が少し上がりますが・・・」国友が自分のメモを取り出してはロクに報告する。
「無理だ！それでも余裕は５０センチ程だろ・・・？波次第ではこのブリッチ部分にぶつかるぞ。しかもこの辺には奴らテトラポット

を無造作に沈めていると言う・・・レヴィアの存在を知られてから、奴らその対策は十年以上・・・海岸の一部も上陸出来ないようにしてる箇所がたくさんあり・・・」と桜井。

「厳しいね・・・ジプシャンも考えるなぁ・・・しかし、絶対に突破で出来ないというのを、突破してこそ奇襲・・・」とロクが顔をしかめる。

「た、確かにそうですが・・・」

「事前に砲撃して除去しておく・・・というのは?」通信兵の三島も口を挟んだ。

「次回の作戦には有効だけどな・・・奇襲にはならん・・・敵に猶予を与えてしまう・・・」

「どうしても海からみたいですね?ロクさんは・・・?」と桜井。

「俺はそれしか能がなくてな・・・ん?桜井?敵の機雷ってただ海上に浮いてるだけか?」

「そうですが?何か?」

「船のエアーブースターって水中でも可動できるのか?」

「もちろん可能です。急浮上や方向転換に使ってます。ただし水中です・・・新しい空気が取り入れないので空気の量に限りがありますが・・・」

「エアーブースター・・・・・・上等だ!!敵に気づかれず湾に入れる!」

「えっ?」

「桜井!一緒に来てくれ!」

「はあ?どちらに?」

「上の参謀どもを説得したい!」

「構いませんが・・・国友、三島、後を頼む!」桜井が席を立った。

レヴィアの左側面が開き、ロクと桜井を乗せたジャガーがP6の

西ゲートに向かった。

１８：４０　Ｐ６地下３階ジプシー特別保護施設。直美兄妹がいる部屋に桑田がＩＤカードを使って入って来る。
「直美さん！無事でしたか・・・？」
「ああ・・・ええ・・・」戸惑う直美。
「その・・・今回は・・・」
「いいの・・・」
「しばらくは、狭いですが辛抱して下さい。」
「平気よ。昔から穴倉育ちだから・・・」
「雨音も平気よ！」幼い雨音もなつみに声を掛ける。
「みんな強いね・・・」

桑田は雨音の返事に少し涙ぐんでいた。
「なんかあったらすぐ呼んで下さいね？」
「ありがとう・・・」直美も目に涙を溜めていた。

１８：５３　Ｐ６指令室。ロクと桜井が入ってくる。ロクは入るなり弘士にこう叫んだ。
「司令！緊急招集会議をお願いします。」
「なんだ？ロク、いきなり！？」司令の傍にいた曽根がロクの態度に激怒する。

「松島を・・・敵の基地を奇襲します！」

その3　差別

１９：２５　　Ｐ７指揮室。久弥と楠本が話している。
「わしも一度Ｐ６に戻るぞ。」と久弥。
「ではテスト中の４番艦をお使い下さい。」
「兵はいるのか？ここに兵が少なくなるが・・・」
「皆訓練生ばかりです！緊急事態です。仕方がありません！」
「最低限の兵でいい。艦を動かせればいいんだ。」
「わかりました！」と楠本。

１９：２８　　Ｐ６大会議室。弘士を筆頭に曽根や幹部らがいる。バズー、キーン、ダブルの他、指令室からは柳沢、端の方には高橋技師長の顔もある。ロクと桜井は中央に位置し立って皆を見渡していた。そこへ桑田と松井が会議室に入って来た。それを見つけた曽根が立ち上がった。
「誰がお前らを呼んだ！！」曽根が叫ぶ。
「えっ？」
「私ですが・・・」

ロクが曽根の態度に低い声で答え立ち上がった。
「指令室勤務とはいえ、ジプシーはこの会議を外す！」曽根が強い口調で怒鳴る。
「俺もジプシーだが・・・」とロク。
「俺もだ！」
「俺もだ！」
「おお、俺もだ！」

その言葉に、キーン、バズー、ダブルの３人も席から立ち上がっ

た。
「桑田らが外れろと言うなら、俺も出るぜ！」と無表情のロク。
「何だと！お前から呼び出しておいて！」
曽根が激怒し一度座った曽根も再び立ち上がった。
「二人とも止めないか！」

いがみ合う二人に弘士が一喝した。
「ロク！大場の件もある。今回は桑田と松井には外れてもらう！」
「いいんです。ロクさん。私たちジプシーだから・・・」
「・・・うん。」
「失礼します・・・」
顔を見合わせこっそりと会議室を出る、桑田と松井。ロクは怒りが収まらず、目の前の机を激しく叩いた。
「司令っ！？」
「言いたい事は分かる。スパイ騒動が収まるまでだ。」
「くっ・・・」バズーが何かを言い掛け立ち上がる。
「いつまで続くんですか？」

ロクは下を向いたまま弘士に話しかけた。
「ん？」
「いつまで・・・こんな差別が・・・」
「そうだよ。ロクの言うとおりだ！」
たまらずキーンがロクに加勢した。
「ジプシーだからって言うのはもうやめろよ！」
「何だと・・・？」

曽根が低い声でロクたちに凄む。
「分かってるつもりだ・・・」弘士が頭を下げて見せた。
「分かってない！あんたらがいつまでもこんな差別をするから、この戦争は終わんねぇんだ！」

「ジプシーの分際で・・・」ロクの言葉に曽根も本音が飛び出す。
「なんだと!?」
いがみ合う五人がいた。
「みんな止めろと言ったよな!」
叫ぶロクに対し、弘士は珍しく凄んでみせた。弘士の凄味に席を立ち上がった3人も冷静になった。
「時間がない!ロク!?説明を始めろ!」弘士が無表情のまま声を発した。
「は、はあ・・・」曽根を睨むロクだった。

19:30　ジプシャン軍松島基地そばの酒場。裸に近い格好の若い女性たちが何人も行き交う中、タケシと石森、嶋らが中央の席で酒のようなものを飲んでいた。嶋の上には女が座り、嶋の首元で何か囁いている。タケシは両脇に女性を座らせ、気分よく酔い始めていた。その中、ヒデと丸田もこのタケシらの席と一緒に混じっていた。
「ここはいつ来てもいいすねー!」嶋が隣の女を自分の足の上に座らせている。
「ああ、酒もうまいし、食いもんもうまい!しかもいい女ばっかだ!」と石森。
「わははは!Ｐ6なんざ、口ほどにないわぁ!・・・どうした!?ヒデ?全然飲んでないじゃないか?」

タケシらが盛り上がる中、ヒデと丸田は酒がすすまない。
「はあ・・・」溜め息を付くヒデ。
「そうだ。まるで葬式じゃないか?」と嶋。
「明日には、Ｐ5だ!今のうちだぜ。女も酒も・・・」と石森。
「何が不満だ!?ヒデ!?」タケシがヒデに絡む。

「あれでＰ６は陥落したのでしょうか？」ヒデは重い口を開く。
「壊滅ではないな・・・しかし半分以上のエレベーターを爆破したんだ。復帰まではしばらく掛かるだろうな！」
「しかし、雷獣が出てこなかったのは妙です。」と嶋。
「Ｐ５へ偵察中か、ミサイルで死んだかだ。」
「奴の目だ・・・」
タケシがグラスをテーブルに叩きつける。
「えっ？」店の中の空気が止まる。

「初めての戦闘の際、奴はこちらを見て笑っていた。奴は、狂ってやがる・・・」とタケシ。
「確かに狂ってますね・・・」恐る恐るタケシの新しいグラスに酒を注ぐ嶋。
「しかも、タイヤしか狙って来なかった・・・」
「偶然ですよ・・・」
「しかし・・・今度遭遇したら必ず決着つけてやる！雷獣！」

１９：３５　ジプシャン軍品井沼本部。先程タケシと話をしていた使者と土井総帥が話をしている。傍に犬飼参謀もいる。
「明日の朝立ち寄るとの事・・・」
「あいつ・・・それでＰ６は？」
「はい・・・壊滅状態という訳ではありません。被害は住居地区が目立ち、軍施設の被害はないようです。街中は一時、暴動が発生しましたが、現在は目立った動きもなく・・・」
「壊滅ではないという事か？」と犬飼。
「また、言い訳されてしまいそうだな・・・」寛子は頬肘をしながら笑って見せた。
「本人もミサイルの試し撃ちと申しまして・・・銃を抜かれ脅されました。」

「ふふふ・・・分かった。下がれ。」

たまらず犬飼が口を挟んできた。

「どうしましょうか？」

「ミサイルがなければ明日、また補給には来る。どうせ海岸基地にいるだろうし・・・好きにさせるがいい。またヘソを曲げられ、前線を離れられては困る！」

「ははっ！」

１９：３８　Ｐ６大会議室。

「あのミサイル部隊を、このままＰ５に行かせる訳には行きません。偵察の話では、１５０台のＳＣは各５０台に別れ現在、浜田、松島、手樽の３基地にあります。これを松島湾よりレヴィアで攻撃します！」とロク。

「レヴィアで攻撃か・・・？」驚く弘士たち。

「馬鹿な・・・湾からなんて土台無理な話だ！」

「湾内の機雷ですが、レヴィアなら排除出来ます！」

「何だと？」

「明日の朝、海は満潮になります。満潮になれば潜水で湾内に入りますが、まだ高さがギリギリで機雷に接触する可能性があります。そこをレヴィアのブースターを海中で使用し、海中から空気を放出し泡となって真上の機雷を退かすのです。」

「船のエアーブースターの泡でか？」

「艦の両脇から出るんだ。中央に集中するだろ？」

曽根は鼻からロクの作戦に興味はない。そんな顔でロクの意見に反対した。

「艦首先頭の船の幅が狭い所から集中して出します。そうすれば、一点に集中して噴出して空気を出します。」

「うむ・・・」
「そう、うまく行くかな?」と曽根。
「潜水中、何度かブースターを使用してます。空気の量によっては効果はあるはずです。」
「2番艦と3番艦は1列となりそこを通過します。そして3艦がそれぞれ各基地に攻撃を仕掛けます。」
「この機雷は、以前ポリスが使っていた機雷。性能が同じなら人が触っただけでも爆発する。泡で爆発しないのか?」
「多少の高波でも平気です。それは私が保証します!」
ロクはこの会議で初めて口を開いた高橋技師長を見て“ニヤッ”とする。

「駄目だ!」
弘士のその言葉に、傾きかけた会議の流れがまた元に戻った。
「なぜですか?」
「松島基地周辺には、ジプシーがいる・・・」
「我々に付かず、ジプシャンに付くジプシーが基地そばで酒場をしているというのだ。」と曽根。

「えっ?」
「それでも、ジプシーを攻撃するのか?ロク?」弘士はロクを睨んでみせた。
「くっ・・・」
ロクは弘士の言葉に一瞬で黙り込んでしまった。

その４　囮作戦

武器を持たないジプシーをポリスは攻撃してはならない。

ポリスが創立して２５年以上。ポリスが作ったいくつかの法の一つだ。ロクはもちろん、ガキの頃から徹底的に叩き込まれた一つだった。

しかし、この法のせいで何人ものプロジェクトソルジャーが若い命を亡くしている。この法を逆手に取り、武器を隠しポリスを襲うジプシーが増えていたのも事実なのだ。ロクにとっては嫌な法の一つになっていた。

「また、厄介な物を・・・」

ロクは頭を抱えた。そこに桜井が助けに入った。

「我々につかず、ジプシャンにつく者らです。多少の犠牲は仕方ないと思いますが！」

「お前たちは、知ってて攻撃をしろと言うのか？女子供でもか！？」

「仕方がないと思います！」桜井は更に反論した。

「何だと！桜井！それが出来るなら、苦労はしてないぞ！」曽根が怒鳴る。

「あえて、ジプシーを置けばこちらが攻撃出来ないのを知っている・・・賢いな・・・」ロクは下を向いて呟いた。

「ロク・・・敵を褒めるなよ！」と曽根。

「それでもするのか？」弘士が再びロクに問う。

黙ったロクを見て司令が追い討ちをかけた。

「ふぅ・・・」
「それでもするのかと司令が聞いている。ロク!?」曽根が畳み込んできた。
「それはお手上げですね・・・今回は・・・」諦め顔のロク。
「ロクさん・・・」
「桜井!みんな・・・この案、練り直そう!」
「はあ・・・」

「司令、会議は“一度”解散して下さい。」
「馬鹿馬鹿しい!!」
曽根は真っ先に席を立った。
「なら会議は一度解散する。」
弘士が告げると、会議室からは参謀たちが早々と出て行く。

２０：０４　Ｐ６指令室。桑田の席の周りにロクと桜井、キーン、ダブルの４人が集まっていた。
「レヴィアは実際２５名で動かせます。問題は砲撃手です。これだけは訓練兵じゃあ・・・」桜井が熱弁を振るっていた。
「訓練はしてるんだろ?」
「しかし、当たらなければ話になりません!」
「やってもらうしかない・・・」
「レヴィアは問題ない・・・あとはジプシーだな・・・桑田?」
「は、はい・・・これでいいですか?」

桑田が松島湾の地図をスクリーンに投影した。
「浜田と手樽は問題ない。松島だけなんだ問題は・・・」
「一気に全部狙いじゃなくてもいいんじゃないか?」
「おそらく主力は松島基地だ。タケシも恐らくここにいる。５０台を３基地に配置する奴の用心深さが出ている。まして軍に所属しな

いものらを基地側に置くなんて・・・ここを叩かなければ、この作戦をする意味がないんだ！」

「浜田と手樽で１００台、８割を叩いたとして８０台でもいいと思うが・・・」とバズー。

「それじゃ、ロクが納得しないとよ。今のロクは松島しか見えてない・・・」とダブル。

皆、スクリーンを見たまま動かない。

「突っ込んでみるか・・・？」

「どこにだ！？馬鹿を言うなロク！松島の前に浜田の５０台のＳＣ。それに松島の５０台。常駐のＳＣも入れれば１５０はある。とても正気とは思えん。犬死にするのが見えるよ。無謀にも程があるぞ！？」キーンは反対した。

「なんとかする！」

「出た出た・・・」

桑田はロクのいつもの言葉に小声で返していた。

「ところで桑田、これってなんだ？」

ロクは地図の海岸線に不自然な部分を見つける。自然の地形ではなく、コの字になっている。

「さあ？柳沢さんこれってなんでしょう？」

「それは・・・ああジプシャンが作った橋ですよ。」

「橋？」

「はい、浜田から松島までは狭い１本道です。山側は急な崖。海岸線の海に近い所は、満潮になると海水で道が無くなってしまう所にジプシャンが橋を建てたんですよ。ここと、ここと、ここの３箇所に・・・橋とは言え、ボロい桟橋です。ガードレールもないんですから。」

「ふーん。橋か・・・しかも満潮時？・・・俺らが作戦をするのも

満潮だよな?」
「そうですね。」
「じゃあ、この時間って奴ら橋を使うんじゃん!?」
「そういう事ですね。」と柳沢。
「基地から誘い出して、ここに孤立させるのはどう?」
「孤立?」
「どうやってここに誘うんだ?」
ダブルとキーンが険しい顔でロクに問い詰めた。
「うーん・・・」悩むロク。
「・・・考えておけよ!」一応突っ込むダブル。
「そういや、聖が言ってた。ロクは敵から“砂漠の雷獣”って呼ばれて恐れられているそうだ。」
その言葉に桑田はいち早く反応した。
「ライジュウ?」
「それを利用するんだよ!」とダブル。
「えっ・・・?」
会議の流れはロクからダブルへと変わる
「今回、タケシが攻めて来たのが妙に気になっていた・・・ひょとして先日の・・・」
「ロクとの戦闘か・・・」とキーン。
「今回、実はこの襲撃はロクが原因かもよ・・・タケシのプライドをズタズタに切り裂いたか?または向こうはロクを高く評価しているかだ。」
「確かに一理ある!」とキーン。
「おいおい、勝手に推測するなよ・・・」慌てるロク。
「なら試して見るか?雷獣さん?」ダブルはロクを挑発してみせた。
「あらら・・・」

ダブルがロクに不敵な笑いをする。

２０：２０　久弥の乗ったレヴィア４番艦がＰ６の南付近に到着していた。久弥はブリッチからＰ６の街を見るが、まだ燃えているのか所々赤く炎で照らされている所が点々とある。

「だいぶやられたようだな・・・」

久弥の横には、若い水谷艦長がいた。

「被害は西の住居地区ですね・・・」

「子供や老人の被害が多いと聞いたが・・・２番艦、３番艦とは別の所に停泊する。」

２０：３０　Ｐ６大会議室。再び集められたＰ６の幹部たち。しかし今回は、高橋とバズーの姿はない。

「今度は何だロク！？忙しいんだ！街の復旧作業を優先にしてくれ！」曽根が口を開く。

「先程のＢプランです！」

「同じ事だ！レヴィアを動かす海兵がいないんじゃなっ！」

会議はロクに変わってダブルがメインで進められた。

「レヴィアは２５名いれば運航出来ます。砲撃手は訓練兵がする・・・」

「レヴィアの件はなんとかなるはずだ・・・問題は基地そばのジプシーたちだ。そこを説明しろ！」曽根が皆を急かした。

「はい・・・最悪でも成果は浜田と手樽だけでいいと思います。」

「そうだな。成果は3分の2はあげられる。で?松島基地は?」
「浜田基地砲撃前、浜田基地経由で松島基地に我軍のＳＣを突入させます!」
「浜田と松島に?それで?」と弘士。
「敵はロクに一目置いているでしょう・・・そこで、ロクに囮になってもらいます!」

「おとり・・・だと?」
「これを見て下さい。浜田と松島の間に3つの橋があります。満潮時にジプシャンが使用する橋です。敵が松島基地より出てきたら、浜田寄りの橋を砲撃し、後方の橋も砲撃します。つまり、この1キロほどの海岸線に敵ＳＣを孤立させます。ここの崖は急でラリータイプ以外は潮が引くまでは、ここから出れないのです。松島基地を攻撃する事なく、敵の主力を叩けます!」

「・・・もし敵が松島基地から出てこなかったら?」と曽根。
「そうだな。もし出てこなかったらどうする?隊は両基地の部隊に挟まれ壊滅するだろう!逃げ道がないんだからな!」
呆れ顔の弘士と曽根が、ダブルを問い詰めた時だった。急に黙っていたロクが万を期して、席を立ち上がった。

「奴らは必ず出てきます。なぜなら・・・囮は私一人だけだからです!」

その5　白装束

２０：３３　大会議室が静まり返った。ロクの単独の囮作戦に誰もが声を失っていた。

「１台で行くだと・・・！？」

弘士がロクを睨むと、再びダブルの説明が続く。

「今回のタケシの奇襲ですが、先程も言いましたがロクはジプシャンから高く評価されていると思われます。初戦のタケシとの戦闘です。それでタケシは本領を出しＰ６を襲った・・・」

「あらら・・・そうかな～？」惚けるロク。

「Ｐ５の再三の偵察で、敵の兵からも“砂漠の雷獣”と呼ばれ恐れられているくらいです！」

「ロクがか・・・？」驚く曽根。

「司令？もしそのロクがたった１台で松島基地に突入したらどうでしょうか？」

「俺なら・・・まあ迎え撃つわな？」

「はい・・・」

「し、司令！？しかしそううまくいきますか？」と曽根。

「少なくても、仲間の仇を取りにきた“バカ”には見えると思いますが。なあキーン？」とダブル。

「ああ！死にに来たお馬鹿さんにな・・・」とキーン。

「おいおい・・・」細目のロク。

「いっそロクに白装束を着させて突入させますか～？」とダブル。

「おいおい・・・」頭を抱えるロク。

「だが・・・タイミングが合わなければ、ロクは犬死だぞ？」と弘士。

「ジャガーのエアーブースターがあります！」

「ん？」

ロクが再び息を吹き返し会議に入って来る。

「最悪、崖は這い上がりますよ！」

「砲撃前に、浜田に突入はいいがタケシの５０台に常駐を合わすと７０から８０台はある。それはどうする？」

「なんとかします！！」

ロクの言葉にキーンは一人薄ら笑いをする。

「出た出た・・・」

「馬鹿な！一台でなんとかなる数か！？」呆れる曽根。

「司令？浜田基地は１台の攻撃に７０も迎え撃ってくれるでしょうか？」

「うーん・・・俺なら出して２０台前後だな・・・？」と弘士。

「ですよね～だから１台で行く事に意義があるんですよ。これが５台、１０台なら“作戦”に見えるのです！」

「わはは、確かに、敵討ちにきたバカには見えるな！」バカ笑いする弘士。

「おいおい、司令まで・・・えーそこで浜田を突破されれば、松島も出てきます。どうでしょうか！？」

「ふふふ・・・確かに面白いな！」他の参謀も意見してくる

「はい！」声を揃えるロクたち。

「幹部で検討する。お前らは下がっていろ！」弘士がロクたちに叫ぶ。

「了解！」

２０：３７　Ｐ６大会議室前廊下。ロク、キーン、ダブルと桜井が出てくる。

「もう一度、練ろう。絶対成功させたい！」とロク。
「うーん・・・柳沢の力がいるな・・・？」とキーン。
「指令室に行こう！」

２０：３８　Ｐ６大会議室。弘士や他幹部がいる会議室に久弥が入って来る。
「もう戻られましたか？」と弘士。
「聞いてたよ。ロクの作戦・・・」
「少し無理があるような気がしますが・・・」
曽根はロクの案を無理と感じていた。

「Ｐ５の事を思って立てた作戦だろ？あいつらしい。確かに可能性は無くはない。」
「敵の裏を突く面白い作戦とは思います。しかし、ロク一人で突入させるのはとてもまともな作戦とは・・・」他の参謀たちが口を揃える。
「ロクは狂ってます。奴の作戦では・・・」曽根も賛同する。
「賭けてみようじゃないか。その奇襲作戦・・・」
「はあっ！？」驚く曽根。
「しかし・・・」顔を見合わせ不安そうな参謀たち。
「Ｐ５が落ちればこちらも危ない、多少の援軍になればいいが・・・ワシの４番艦も出す。１、２、３の帰りのルートを確保する為、湾の入口の機雷を砲撃しよう。」
「しかし、それでは・・・」
「犠牲が出てもロク一人・・・なにかまずいことはあるのかね？曽根参謀？」
「下手すればレヴィア３隻もです。湾内にどんな仕掛けがあるかわかりませんよ！」と曽根。

「先頭は桜井の1番艦・・・奴ならやってくれる。それで駄目なら仕方あるまい・・・即2、3番艦を撤退すればいい。」
「しかし・・・」
「曽根？松島基地側にいるジプシーは何人いるんだ？」
「何年か前の資料ですが、25名程ですが・・・」
「軍人相手で食いつないでる若い女ばかりだろ？恐らく子供もいるはずだ。」
「そう聞いてます・・・」
「その命まで救うために、ロクは自分の命を掛けようとしてるんだ。俺なら松島基地砲撃後、ジプシーが居るのは知らなかった・・・なんて後から弁明するとこだがな・・・曽根参謀もそうするだろ？」
「い、いや・・・私はそんな・・・」
本音を久弥に突かれ慌てる曽根。そんな中、弘士だけが黙っている。

「わしはロクを信じてみる・・・一人の兵を信じてみる！これじゃ指揮官として駄目かな、弘士？」
「リスクはロク一人ですか・・・？」
「敵も数時間で反撃してくるとは思っていまい。そこを突く！」
「わかりました！」弘士は納得した。
「司令！？」曽根が弘士の顔を伺う。
「弘士は2番艦で総指揮、曽根！お前は3番艦だ。」
「ははっ・・・」
「1番艦は桜井でよかろう。SCは1台も出さない。これでいいか現司令？」
「はい。前司令・・・」互いに見つめ合う久弥と弘士。

20：41　P6指令室。桑田の席に、ロク、キーン、ダブル、桜井の4人がやって来た。

「桑田？俺の式典用の白い軍服があったよな？」
「ありますが・・・2年前ですよ。少し太られません？特にズボンは・・・あっ失敬！」

「おいおい・・・言うね～なら上着だけ用意してくれよ。」
「どうするんですか？」
「着て行くんだよ。戦場に・・・」
「まるで戦場に死にに行くみたいじゃあ・・・？えっ？えっ！？それどういう意味ですか！？」驚く桑田。
「敵に覚悟を見せるだけだ。大した意味はない。」
「そ、そうですか・・・分かりましたが・・・」何か腑に落ちない桑田。

「柳沢！忙しい所悪いんだが、もう一度時間を逆算して欲しい。」
「は、はい！」
「満潮が4時24分・・・この時間に湾入り口を通過。しかも3隻のレヴィアをだ。それから、各基地を砲撃ポイントまでの移動。浮上から砲座を出して、標準を合わせる。俺はいつ浜田に突入すればいい？」

「ジャガーの足ならレーダー範囲から浜田まで、3分で到着するな・・・まずそっからだな！？」　とキーン。

キーンがパソコンをいじる柳沢に注文を入れた。
「レヴィアなら入り口からポイントまで10分、急浮上で砲座用意まで3分でしょうか？」と柳沢。
「レヴィアの砲撃位置到着後ならいつでもいいんじゃないんですか？」と桜井。
「とは言え、あまり遅いと日が昇る。レヴィアが海上にいるのが分かる程度の明るさでは駄目だ。奇襲の意味がない！そうだろロク？」

桜井とキーン、ダブルの意見が続いた。

「日の出か・・・さすがキーン！そんな計算まで・・・桑田？明日の日の出は？」とロク。

「明日は・・・０５時２５分ですね！」

「問題は浜田から松島に応援を要請し出てくる時間か？」

「どっちにしろ、時間はないのは確かだな？」

「面倒だから、０４時２４分の満潮時に突っ込むよ！」とロク。

「は、早いですよ。なんかヤケクソになってませんか？ロクさん？もしレヴィアに何かあったら・・・」

「桜井。その時は、作戦はなし！」

「なしって・・・そ、それではロクさんが・・・？」

「・・・なんとかする！」

ロクのいつもの名セリフを桑田は一人、小声で楽しんでいた。

「出た出た・・・」

「そうだな・・・そん時は、海にでも飛び込むよ。」

そのセリフには、桑田は口を挟んだ。

「ロクさん・・・人が整備したＳＣ放り出すの！？」

「最悪な・・・機雷の海を泳いで帰るよ！これでいいかな？みんな？」

「ああ、後はロク次第だよ。」とダブル。

「そう言えば、俺らの出番がないんだよな・・・？なあダブル？」

とキーン。

「えっ？」

「そうそう、少しは俺らの見せ場くれよ？」とダブル。

「後方支援で・・・どう・・・？」恐る恐る二人を見つめるロク。

「納得出来ないなぁ・・・」

腕組みして、ロクに対峙するキーンとダブル。
「んー。ジプシャンの情報が欲しい。砲撃の合間に浜田基地に侵入。情報を盗む・・・スパイの濡れ衣を晴らす・・・は？」
「まあいいだろう。どうだダブル？」
「ん！？・・・情報収集なら俺の出番ってとこだな・・・いいだろう！」
「忘れてた！バズーは・・・ん～と、切り込み役でいいかな？」

後ろでわいわい騒ぐ3人の様子を見ている桑田はなぜか嬉しそうだった。
「桜井さん？まるで、みんなでどっかに遊びに行くみたいですね。とても作戦をするように見えないわ・・・」

「この人たちとっては、そうなんだろうな・・・どこか楽しんでるよね？・・・って桑田さん？指令室入ってるし？」
「あっ？いっけねぇー！」

慌てて指令室を飛び出す桑田。そこへ、弘士、久弥、曽根の3人が指令室に入って来る。
「おやじさん！？戻られたんですか？」ロクが叫んだ。皆が久弥の元に集まる。

「ロク！お前の作戦を実行する！」と弘士。
「はい！！」
「各員！作戦準備に掛かれ！」

その6　スパイ疑惑

２１：００　　Ｐ６南ゲート前。レヴィアが並んで４隻止まっている。その周辺は慌ただしく、兵やトラックが動き回っている。　トラックの荷台に証明が付いている車がレヴィアの横コンテナ部分を照らし、夜間作業を明るくしている。ロクはこの光景を南ゲートの塀の上で眺めていた。海はまだ月が東のせいかまだキラキラともせず、静かな海であった。その塀の上に、ロクを捜しに来たのか桑田が息を切らしながら登って来る。

「はぁー。やっぱここでした・・・みんな捜してます。お願いですから、無線持って下さいよー。」
「悪い。作業さぼって・・・もうちょっと自分でイメージしたくて・・・」
「司令が、幹部にもう一度作戦を説明して欲しいと・・・」
「そっちかよ。」
「いつも、ここに来ますね。」
「好きなんだな。ここが・・・」
「私もです。」

二人はそこを動く事なく、また海を見つめていた。
「なんか、星と海見てると楽しかったあの頃に戻れるっていうか・・・ああ、ごめん手紙まだ呼んでないや・・・」
「あっ、いや・・・あの・・・返して下さいっていったら駄目ですか？」
「なんで！？」
「うーん・・・でもいいです。呼んで下さい。」
「どっち？」
「呼んで下さい。」

「なんだよ。」
「あの・・・うまく言えないんですが・・・頑張って帰って下さい。」
「なんとかする。」
「出た出た。」
「本当は恐いんだぜ。でも自分を励ますって言うか・・・俺のおまじない。」
「知ってます・・・凄く痩せ我慢してる時のロクさんのセリフです。」
「知ってたか？」
「知ってますよ。ロクさんのオペですよ。」
「もう3年か・・・」
「いいえ。12年ですよ。妹から数えたら・・・」
「長いな。」
「長いですよね。」
「・・・」
「・・・」

二人は海を見ながら黙り込でしまった。

「あのさ。」
「は、はい・・・」
「お前は生きろよ。」
「えっ？」
「お前は生きろ。」

桑田は何か緊張の糸が切れたか目に涙を浮かべた。

「なんで、そんな事言うんですか・・・なんで・・・？」

急に泣き出した桑田を見て、ロクは動揺した。

「ごめん・・・泣くなよ・・・」
「行かないで下さい・・・行かないでお兄ちゃん・・・行かないで・

・・」

桑田は泣きながら両手でロクの右腕を掴んでいた。ロクは桑田の正面に立ち、左手で桑田の手をそっと包み込む。するといつもの笑顔で桑田に答えた。

「戻るよ。なつみが整備した車だ。大丈夫だ。」

「ほんと？・・・ほんとに？」

「約束する。」

「ほんと？」

「大丈夫だ。」

桑田は、我に返ったのかロクの腕を放した。赤くなる桑田とロク。

「すいません。私・・・」

「帰るよ。必ず。」

「はい。」

二人は暫く向かい合っていた。

２１：１５　Ｐ６大会議室。弘士、久弥、曽根の他に数名の参謀。キーン、ダブル、バズー、柳澤、高橋技師長など、１５名程が揃っている。そこにロクと桜井が遅れて入ってきた。

「すいません。遅れました。」

「すぐ始めてくれ。」

ロクは会議室中央にあるスクリーンの前に立つと、長い棒を持って説明し始めた。

「レヴィア１から３番艦は、明日０３時１５分にここを出発。満潮の０４時２０分まで湾入り口の海底で待機。機雷のもっとも薄い所を捜し湾内に侵入します。この際、機雷が接触する可能性があるの

で、レヴィア艦首より船のブースターを海底で始動。噴出した泡で機雷を移動し、艦1隻分の進路を確保します。微動での移動につき、3隻全部湾内に入るのに15分程度。更に各艦が各基地の射程距離までの移動に10分。この際、1番艦は浜田基地、2番艦は松島基地と浜田基地の間の橋、及び松島基地から出てきたSC隊。3番艦は手樽基地の射程距離まで移動です。砲撃の合図ですが、私が浜田基地に単独で侵入します。作戦を装わせないように1台で目立つように浜田基地を襲撃し、その足で松島基地に向かう振りをします。そこで、松島基地より迎撃があれば、2番艦の砲撃をきっかけに各艦が各基地に砲撃します。2番艦はその後、松島寄りの橋を砲撃、敵SCを海岸線に孤立させます。その際なんですが、浜田基地にアシカムを先頭にダブルとキーンが突入します。」

「それは聞いてないな・・・」

「砲撃は10分間だけ止めていただければ十分です。」

「どういう事だ?」

曽根は最初から、ロクの意見に聞く耳はない口調子だった。

「保険というのか、私が浜田に向かった時にどのくらいのSCが出て来るかなんですが・・・たくさんのSCに迎撃された場合、基地を攻撃しても本来の目的のSC隊への砲撃が出来なくなってしまいます。それの壊滅が最大の目標です。それとですね・・・」

「まだあるのか?」

「バズー、キーン、ダブルが基地内に侵入、敵情報を収集します。」

「無茶だ。砲撃をした基地だぞ。」

「基地の破壊具合では、こちらの作戦は中止します。まあ敵のドサクサを狙うんですが・・・」

「しかし・・・」

「やらせてやれ、どうせ無理はしないんだろ?こいつらが一番分か

ってるよな？」
　横にいた久弥が初めて口を開いた。
「はい！４番艦には１から３のレヴィアの逃げ道を作ってもらう為、同刻湾外より機雷を砲撃してもらいます。以上までで０５時１０分。なにか質問は？」
「情報収集の意味はあるのか？」
「最近、ポリス内を騒がすスパイ騒動・・・浜田基地より怪しい無線が出てると聞きます。恐らく何らかの指示等はここが発信源かと・・・」
「まあそれしかありえないと思うが・・・もっと違うやり方はないのか？危険過ぎるぞ・・・」
「今のところは・・・まあ意表を突くという事です。他に何かありませんか？」
「いいだろう。時間がない。各員作戦まで他言だ。海兵にも行き先は語るな。いいな？」
「はい！」
　会議が終わり、皆部屋から出ようとしていた。すると弘士がロクを呼び止めた。
「ロク！すまん！」
「何か？」
「二人だけで話がある。」
「はい・・・」
　会議室は二人を除き全員が出て行き、急に静かになった。ロクは立ったまま弘士に正対した。
「実は大場の件だ。」
「何か分かったのですか？」
「いや何も分かっていない。ただ、大場を取り調べした時の事を覚

えてるか?」
「なんでしょう?」
「スパイは内部に入れるジプシーだと・・・」
「それは・・・」
「地下3階以降に入れるジプシーはロクら4人と、桑田、松井、メカニックの2名の8名。」
「それが・・・?」
「襲撃があった時刻、地下3以降にいなかったのは、戦闘をしてた3人、P7に行ってたロクと・・・」
「・・・と?」
「桑田だ。」
「う、嘘だろ!?」

ロクは大声を出す。司令からそんな言葉が出るとは思ってもいなかったのだ。
「幹部の一部では桑田がスパイと見ている・・・」
「桑田がスパイ!?何かの間違いです。」
「あの時、地上にいたのも桑田だけだ・・・大場を暗殺出来たのは・・・」
「ふざけるな!仲間を疑うのか?」

その7　聖の決意

「本気で言っているのか？」

ロクは立ち上がり弘士に詰め寄った。

「落ち着け。まだ決定というわけではない・・・」

「俺はあいつを信じる。あいつはそんな奴じゃない。ガキの頃からここで育ったんだ。ジプシャンと接触出来るはずがない。なぜそれが分からない？」

「どこでどう繋がるかは分からない。それはポリスだって同じだ。」

「だったら先にポリスを疑れ。」

「分かっている。ポリス内は全員調べている。」

「くそっ！どうすりゃいいんだ？」

「一人一人調べている。ただ一番が桑田という事だ。」

「俺は絶対信じないからな！」

ロクは、怒って一方的に会議室を飛び出してしまった。困り果て、怒りをどこにもぶつけられない弘士がいた。

２１：３８　Ｐ６地下３階ジプシー専用医務室。その中のある病室に１０人くらいの患者がベットに寝ている。そこにダブルが入って来る。ダブルはその一人に近づくが、その者は頭部の目以外全部を包帯で巻かれていて誰かが分からない状態だった。ダブルはその者のベットの側のイスに腰掛けた。そのベットの者は目を開けていた。

「聖さんかい？」

「うん・・・ここは？」

「ポリスの地下３階だ。ロクが連れて来たそうだ。」

「顔が痛い・・・」

「顔に火傷を負った。」

「覚えてない・・・」
「無理もない。爆風を受けたらしい。」
「何があったの？」
「Ｐ６が攻撃を受けた・・・」
「タケシ？」
「そうだ。」
「たくさん死んだの？」
「ああ・・・」
「子供たちも・・・？」
「ああ・・・」

聖は突然、ベットの上で泣き始めた。
「ごめん・・・」
「なんで謝るんだ？」
「私の仲間だもん・・・」
「そうとは限らない。」
「だって・・・」
「そんな事はどうでもいい。治療に専念してくれ。」
「私が・・・奴らを説得する・・・」
「その体じゃ無理だ！！」
「お願い・・・仲間のところに連れてって。お願い・・・」
「あんたは重態だ。今は動かせない・・・」
「お願い・・・」
「無理だ・・・いいか、今はちゃんと専念しろよ。」
ダブルが途中で諦め、病室を出て行く。聖はベットに寝たまま号泣していた。

２１：５５　ジプシャン軍松島基地近くの酒場前。ヒデと丸田が暗い路地で話していた。
「ヒデ？明日にはＰ５だな・・・」

「わかっている。」
「このままでいいのか？」
「何が？」
二人は東の空から昇り始めた月を見ていた。
「軍に入りたいが、いきなり前線送りかよ・・・」
「Ｐ６の奇襲の際、逃げるべきだったな？」
「逃げれば銃殺だぜ・・・」
「それも、分かってる。」
「聖は分かったのか？」
「タカの話だと、Ｐ６に向かった足跡があったらしい。」
「聖が・・・Ｐ６に・・・まさか・・・」
「可能性はなくない・・・」
「どうする、これから？」
「タケシを殺して、ここを脱出する。」
「面白い。」
「まあ、それは最終プランだな？」

そこへ、二人の男がヒデらに近寄ってきた。２人ともヒデらと同世代で体格のいい二人だった。
「ヒデ！」
先に声を掛けたのはタカ、髪の毛はなく色黒の男だった。
「Ｐ６が変だ。」
「どうした？」
「海竜が４隻いる。」

後に声を掛けたのが羽生（はにゅう）。色は白いが同じ坊主であった。
「Ｐ６に４隻・・・？」
「Ｐ６は、戦艦は１隻じゃなかったのか？」
「それとなんだか慌ただしいんだ。Ｐ６が・・・」
「ジプシャンは？」

「まだ気づいていない。偵察も出してないぞ。」
「余裕だね・・・」
「どうする?ヒデ?タケシに報告するか?」
「なぜだ?いいチャンスじゃないか。」
「チャンス!?」
「飲み直すぞ!」
「どういうこった・・・?」
「ん?・・・面白くなる・・・」
ヒデらは、再び酒場へと戻って行った。

22:00　P6地下3階検視室。大場の遺体の左右にロクと関根の姿があった。
「ロク、忙しいのよ・・・患者はまだ来るのよ?」
「すいません。」
「しょうがないわね・・・」

関根は大場の遺体、特に撃たれた傷口をよく見ていた。
「心の臓を狙っている。至近距離から・・・即死ね。プロだわ。銃弾は突き抜けていて・・・弾は分からないわ。ただ恐らくポリスと同じ銃口径。または反動が少ない拳銃ね・・・この人は逃げなかった。」
「ど、どうしてですか?」
「正面から入って、真っ直ぐに抜けてる。逃げる暇を与えてないかもしれない。背は低い奴の犯行。あとは解剖しないと無理よ。」
「女ですか?」
「そう言えばそうね。女なの?この犯人?」
「そんな噂です。」
「それなら話が合う・・・背の低い女・・・背の低い男ってダブルくらいだし・・・」

「はあ・・・分かりました。ありがとうございました。」

大場の遺体に、再び布を掛けるロクb。

「ああそうそう、聖って女だけど・・・」

「何か？」

「妊娠してた・・・」

「えっ？」

「あんたっ！？」

関根は、怖い顔でロクに迫った。

「なんでっ！？」

「そうよね・・・」

関根は、笑ってロクに話す。

「ダブルなら可能かと・・・」

「そうよね。まああんたらじゃなくて良かったわ・・・」

「それで、お腹の子は？」

「うーん、流産したの・・・しかも今回の怪我より流産の方が深刻なの。」

「というと・・・？」

「命も危ないの・・・」

「えっ・・・？」

その8　ミュウ

関根は深刻な顔でロクに語り始めた。
「ちょっと危険かな・・・」
「そんな・・・」
「実は死んだ赤ちゃんがあまりにも不自然で、検査して調べたの・・・」
「ま、まさか・・・」

ロクの顔色が変わった。
「うん・・・ミュウの反応・・・」
「ほ、本当ですか？」
「あの子はここに来た時には、問題なかった。ただ7：3で女性が発症する確立は多い。ただ今回は恐らく男の方。」
「男・・・」
「怪我も、流産自体もそう影響はないの、ただミュウの影響の方が大きく母体に響いた。あんたの説得でここに来たんでしょ？後で男の詳しい事聞いてきなさいよ。」
「は、はい・・・それで命は？」
「私、専門じゃないからなんとも言えないわ。後はポリスの医師チームに渡すつもりよ。ただ今までのデーターから言えば・・・」
「助けて下さい！お願いします！」

ロクは深々と頭を下げる。関根は困った顔をしていた。
「あんたの言葉じゃないけど・・・なんとかする！引き渡すまではね・・・」
「お願いします。」
「そう言えば、この遺体の家族っていなかった？」
「他のシェルターにいて無事でしたが・・・」

「そう・・・幼い子供もいたわよね。また孤児が増えたわね。ちゃんと面倒みんのよ！ロク！あんたの後輩よ！」
「は、はい・・・」
「それと人手が全然足りないの。桑田も松井もどっか行くし。誰か寄越してよ。ポリスは何コソコソしてんのよ！！」
「復旧作業にちょっと・・・」
「聖の事は、任せて！あとで報告するから！いい！？」
「はい。」

２２：１３　Ｐ５指令室。Ｐ５の四天王のボブと２５前後の軍服を着た男性が言い争っている。周りのオペや兵らもその様子を見ていた。

「だから何でですか！？」
「タケシがいなくても、数が増えてるじゃないか？しかも死神の前線は、１ヶ月前よりだいぶ上がっている。危険度は前の比にならない・・・」
「タケシがいない今がチャンスなんですよ。なぜ分からないのですか？」
「分かっている。しかし護衛が少なすぎる。せめて１０台のＳＣを付けて欲しい。」
「数は前回よりは少ないですが・・・しかし・・・」
「せめて、ここから２０キロは付いてくれないと・・・いくらバイク隊とはいえ・・・」

「今のうちの現状だと、１０台しか無理ですよ！」
「死にに行くんじゃないんだぞ！」

「騒がしいわね！」

指令室の雛壇上の扉が開き、そこへ死龍が入って来た。死龍は雛壇を降りてくると、二人に近寄った。
「山中艦長!?どうしたの?」
「明後日のＰ６への補給です。タケシがいないので護衛を減らすとボブが・・・」
「タケシがいない今も戦力は裂けれないのが現実よ。」
「しかし、死神のバイク部隊も数が増え、前線基地も前回よりも上がっています・・・」

「不安?」
「はい、兵は不安がっています。」
「そう・・・なら護衛には私が付くわ。」
「いや、それは・・・」
「わざわざ死龍さんがいく程の事ではないかと・・・」
ボブが口を挟んできた。

「この間、ロクが来た時の事が気になってね。」
「はい?ロクさんが何か?」
「あいつ、ポーカーフェイスだから顔に出さないけど、自分が苦しいのを人に見せない奴よ。」
「え?」
「昔からね、あいつはそういう奴なの。人を巻き込みたくないのよ。だから分かるわ。タケシに苦戦している事・・・」
「ロクさんに限ってそんな・・・」
「後輩の君には見せないわよ。いいわ、私がＰ６に行く!ロクを救えるのは私しかいないわ!いいでしょボブ?」
「しかし、ここの指揮は?」

ボブは死龍の無茶な提案に困惑した。
「本来の司令がいるでしょ?どう、山中艦長、私じゃ不満かしら?」

「とんでもないです。兵も喜びます。」
「ご存知の通り、私は運転出来ないわ。それでもいい？」
「しかし、司令がなんと言うか・・・」
「私から言うわ。駄目なんて言わせない。久しぶりにＰ６のみんなにも会いたいしね。２日くらいどうってことないでしょ？」

２２：４０　地下３階ＳＣ整備室。高橋技師長一人がロクのジャガーを整備している。そこへロクがやって来る。

「お呼びですか？技師長？」
「おお。来たか・・・説明だけさせてくれ。」
「はぁ・・・」

高橋は上半身を車内に入れると中の説明を始める。
「バッテリーは倍積んでる。夜に行くなんてお前らしいな。それで車の重心が後方にぶれるからな。バルカンも結構バッテリーを喰う。乱射は避けろ。それとあまり飛ばすなという事だ。まあこの辺は説明しなくてもいいだろ・・・今回改造したのがブースターの射出口だ。」
「射出口？」
「お前の注文通り、噴射量も調整出来るようにした。」
「さすがです。」
「なんだ、お前から褒められるとゾッとするよ・・・」
「へへへ・・・」
「射出口は角度が調整出来る。前だけ、左だけとか、左右だけとか・・・煙幕を自由に張れるという事だ。以上・・・」
「それだけ？」
「ああ、ブースターはバッテリーを消費しやすい、くれぐれも使い過ぎるな。本来、ジャガータイプはバッテリーを消費しやすい・・・

昼間明るい内に走るならともかく、歴代のジャガータイプは夜戦用じゃないんだ。バルカンくらいなら平気だが、ブースターはかなり浪費するからな。」
「なら泳いで帰りますよ。」
「な、なんだ?ジャガーを捨ててくる気か?」
「作戦前に呼び出す事ですか?全部計算の上ですよ。」
「なんだよ!会議中、助け出したろ?」
「はあ、ありがとうございます。」
「素直!恐いなぁ。」
「もう行きますよ。作戦前に寝ておきたいんです。」
「勝手にしろ!」
ロクが整備室から出て行こうとした時、高橋は再度ロクに声を掛けた。
「おい!ロク!」
「まだ何か?」
「生きて帰って来い・・・」
高橋はロクに背中を向けたままそう呟いた。
「はい・・・技師長・・・」

２３：０１　Ｐ６指令室。弘士が指揮を取り各部に声を掛けている。
「レヴィアはどうなってる?」
「砲弾、ミサイルの積み込み完了。」
「ロクらは?」
「仮眠を取ってるのでは?」
「救助作業は?」
「８０％完了。西ゲートも今夜中には・・・問題はエレベーターかと・・・」

「後は任せていいか？一度、レヴィアに向かう。」
「了解！」

２３：１０　Ｐ６地下４階ポリス専用食堂。時間も遅いせいか、広い食堂に１０名程が食事をしている。その１つのテーブルにロク、キーン、バズー、ダブルの４人が軽食を取っている。
「ああ！桑田が！？」
「声でかいよ。バズー！」
「それで今回、指令室を外されてんのか・・・」
「馬鹿にしやがって。どこまでコケにすんだよ。」
「俺が司令に言ってくるよ！」

バズーはいきなり席を立った。
「いやいや、お前が行くと余計話がこじれるから・・・」
バズーを席に着かせる３人。
「しかし、地下３階以降に入れる奴だろ？」
「確かに数は限られる・・・」
「今回の作戦も漏れてなければいいんだがな。」
「ほんとに一人で大丈夫かよ？」
「今更なんだよ。ダブルの提案だろ？」
「そう聞くと不安になる。」
「なんとかする。」
「出た出た・・・」
「俺は少し寝る。みんなは？」
「寝るか！」
「そうだな。」
「ならここ２時集合で・・・」
「ああ・・・」
４人は席を立ち、各々の部屋に帰っていく。

２３：２０　Ｐ６地下４階。ロクの部屋。

ロクが毛布に包まって寝ている。ロクは目を開けて起きていた。よく見るとロクの体は小刻みに震えている。

その9　銃殺

２４：０３　　Ｐ６地下３階ジプシー医務室。聖のいる病室。関根が入って来る。

「起きてた？」
「顔が痛くて・・・」
「今、薬出すわ。」
「はい・・・」

点滴を変え始める関根。聖はぼんやり天井を見つめている。
「それと、あなただけ地下に移送するの。」
「はい・・・」
「それと・・・赤ちゃんなんだけど・・・流産したわ。」
「そう・・・妊娠したのも分からなかった・・・体調が悪いことはよくあったけど・・・うちら医者がいなくて・・・」
「自覚がなかったの？」
「すいません・・・」
「誰？父親？」
「ジプシー・・・仲間です・・・」
「そう・・・それが分かっているならいいわ。桑田？この子を運ぶわよ。」

すると隣の部屋にいた、桑田が入って来た。
「どこへ運ぶんですか？」
「地下６階のポリスの医療チームよ。私は下に行けないわ。桑田が地下まで運んで。」

「えっ？・・・あっ・・・はい・・・」

関根の言葉に、桑田はすぐ事情を察知した。普通、ジプシーは地下6階に行かないからだ。

聖はベットごと部屋から出され、関根と桑田に運ばれて行った。廊下にはジプシーの患者が座り込んだり、そのまま寝込んだりして混雑していたがその中を掻き分けるように二人はエレベーターの前に来ていた。そのエレベーターは地下3階以降専用で、桑田は自分のＩＤカードをかざしエレベーターを呼ぼうとした。

「あれ？・・・あれ？」

「どうしたの？」

「私のＩＤが効かない・・・」

「故障？しょうがないわね。スタッフを上に呼び出すわ。ここにいて。いい？」

「はい・・・」

桑田は懲りずに何度かＩＤをかざすが応答しない。するとベットの聖が桑田に気づく。

「あんた・・・ロクの・・・妹ね・・・？」

「えっ！？あなたは・・・？」

「昨日・・・投降したの・・・地下であなたを見たの・・・睨んでたでしょ・・・？」

「ああ・・・あの時の派手な格好の？すいません顔に包帯してたので・・・」

「いいの・・・ねぇ・・・ロクは？」

「上で救出作業かと・・・」

「ロクって・・・どんな奴？」

「どんなって、幼なじみの兄ってしか答えようが・・・」

「やっぱり・・・」
「えっ？」
「あんた・・・嘘下手だよ・・・そんな答えじゃ・・・好きだって・・・ばれるよ。」

「えっ？そんな・・・ロクさんとは・・・」
「いいの・・・目を見れば・・・分かるわよ。」

するとエレベーターが開き、二人の白衣の男が来た。
「ここで結構です。あとは我々が・・・」
「お願いします。」
「ち、ちょと・・・」
聖はベットの上から桑田を呼んだ。ベットに近づく桑田。

「あんたらは・・・幸せになるのよ・・・」
「えっ？」
「じゃあね・・・」
聖がエレベーターに入っていく。ポカンと見つめる桑田。

２４：２０　ジプシャン松島基地そば酒場。タケシは酒に酔い潰れ、丸田とヒデが嶋と石森の相手をしている。そこへ酒場の入り口から一人の露出の多い服装の女性が入って来る。その女性は目つきが悪く、ヒデの席に着くと座っていたヒデの腕を掴み、店の入り口付近まで引っ張り回した。
ヒデはその強引さに、腕を振り払った。

「何だよ。ミキ！？」
「何だよじゃないよ。私たち女らにいつまでもあの兵らの酒の相手させるのよ？」

「今夜だけだろ?我慢しろよ。」
「嘘よ。兵らは言っていたわよ。女は軍には入れない。だから軍近くの酒場で慰安婦になって働くって・・・」
「嘘に決まってるだろ。真に受けるな。」
「じゃあなんで、胸やお尻をさわられなくっちゃいけないのさ。私たちはアジトに戻るよ。」
「落ち着けよ。やっと軍に入れたんだ。今だけだ。」
「聖だっていなくなたのよ。どうすんのよ?」
「知らねぇよ。あんな女・・・」
「私は聖がいなくなってよかったけど・・・」
「そう言うなよ。」
「聖から聞いてんのよ!聖はあんたに抱かれての後悔してたんだから・・・」
「あ、あれは・・・あいつは誰にでも・・・ちょっと遊んでやっただけだよ・・・」
「リキの姉を抱く勇気のある奴、他にいた?」
「そ、それは・・・酒の勢いもあり・・・」
「あ、そう。酒の力なんだ?私の時も?」
「そ、それは・・・」
「もういい!」
そう言うと、ミキは酒場から出て行く。すると後ろから嶋がヒデのとこにやって来た。

「どうした?揉め事か?」
「なんでもない・・・」
「いい女じゃないか・・・」
「そうか・・・」
「お前の女か?」
「違うな。」

「なら俺がもらってもいいよな？」
「あ？」
「なーに、呼び戻して、酒の相手をさせるだけだよ。」
そうすると嶋は慌てて店を出てミキの後を追って行く。
「くそっ・・・」

ミキは暗い夜道を、基地に向かって歩き始めていた。店の前には明かりがあったが、基地の方にかすかに明かりがあるだけで明かりらしい明かりはなかった。海が近いのか波の音だけが響いていた。すると後ろから誰かが走ってくる足音が聞こえミキは後ろを振り向いた。ミキはヒデが追いかけてきたと思いその場で立ち止まっていたが、それはヒデではなくミキの見慣れない男だった。

「おい、お前！」
「誰よ？」
「ヒデのとこの女だろ？一緒に飲もうぞ。」
「嫌よ。私あの人と関係ないし。」
「じゃあなんでここにいるんだ？」
「もうアジトに戻るから、バイバイ。」
「脱走か？脱走は銃殺だ！」

嶋は腰の拳銃を抜き、ミキに銃口を向けた。
「何の真似？」
「俺はお前らの上官になるんだ。命令は絶対なんだよ！！」

嶋は拳銃でミキを殴り倒した。ミキは意識を失いながら顔面から血を流していた。
「くそが・・・」

ミキは嶋に唾を吐きかける。
「てめぇ・・・口の減らない女だな・・・」

更に嶋は地べたに横になっていたミキを拳で殴り始めた。
「銃殺よりはマシだろ。」
身動き出来なくなったミキは顔を腫らし涙を流していた。

「ヒ・・・ヒデ・・・」

嶋はミキに馬乗りになり、ミキの着ていた短いタンクトップを両腕で引きちぎった。

その10　ファースト・キス

０１：３８　ジプシャン軍松島基地近くの酒場。さっきまで居た酒場の女たちも少なくなり、店は静かになっていた。兵たちは昼間の戦闘もあり、ほとんどの兵が酔い潰れている。しかし、タケシたちのテーブルはタケシ以外は、皆まだ海草酒を飲み続けていた。

「そう言えば嶋は？」

石森が嶋が居ない事に気づいた。

「さあな・・・」

「小便にしては長いな・・・」

「・・・」

すると、ソファーで寝ていたタケシがすくっと起き上がった。

「俺も小便だ・・・」

「は、はっ。」

「どうしたヒデ？さっきから落ち着きがないな？」

「なんでもない・・・」

０１：４５　松島基地に近い浜辺。衣服を引き裂かれたミキが砂浜に横たわっていた。声は出してないが目からは涙が流れている。顔は何発もの殴られた跡が目立つ。その横で、ミキを見ながら軍服を整える嶋がいた。

「気が済んだ？」

「ああっ？」

「男なんてみんな同じね・・・」

「死ななかっただけありがたいと思え・・・」

「くそが・・・」

「ふん・・・」
嶋はミキを置き去りにするとその場から立ち去って行った。

０１：５５　Ｐ６の地下。ロクの部屋。目覚ましの音が鳴り、ロクは毛布の中から手を伸ばしそれを停止させた。
「くぅー！やっぱ全然寝れねぇ！」
ロクは起きて、グレーの制服を着ようとしたが、やめて白い式典用の白い制服を手にした。それに袖を通す。
「ちょっときついか・・・」

机の上に放り投げていた拳銃を、一つ一つホルダーに入れ始めた。
「なんとかする・・・」

ロクは、自分に言い聞かせるように言葉を発すると部屋を出て行った。

０２：００　Ｐ６ポリス専用食堂。誰もいない食堂にロクがやって来る。ロクは時計を見る。
「あいつら・・・」
すると、後ろからダブルとキーンが入って来る。
「よお。」
「おお。」
「よく寝れた顔じゃないな。」
「まあな。バズーは？」
「あいつはギリまで寝るタイプだ・・・」
「そうだな。」
「やっぱり白で行くのか？」

「そうしろって言ったじゃないか。」
「夜じゃ見えないぜ。」
「あらら・・・意味ないじゃん。」
「ふふっ、さあて行くか？」
「おいおい？」
３人は食堂を後にした。

０２：０５　Ｐ６指令室。弘士や久弥、曽根がいる。そこへ３人が入ってくる。
「入ります！」
ロクらは入り口で一礼すると、雛壇上の弘士らの側に集まった。
「寝れたか？」
「あまり・・・」
「おっ、珍しいな・・・」
「我々は、レヴィアに行く。我妻と連絡をするように。」
「桑田と松井は？」
「今回は・・・医務室の手伝いだ。」
「桑田じゃないと作戦しませんよ？」
「ロク！親父さんに何て言い方だ？」
「すいませんでした！」

曽根とロクの会話に司令が察知したのか口を挟む。
「慣れないかもしれんが、頼むよロク。」
「我妻なら大丈夫でしょ。なあ？」
「ま、任せてください。」

ロクの言葉には少し棘があった。桑田を外した司令室への、小さな抵抗だった。
「お前の作戦をベースに詳しい時間等をジャガーに送った。いいな

？時間を間違えるなよ？」
「俺より、この２人に言っておいて下さい。なあ？」
「俺らより、バズーかな？」
「バズーは？」
「まだ寝てるんじゃないですか？」
「あいつ・・・誰か起こして来い！」
「はい。」

曽根はバズーを起こしに兵一人を送る。すると司令はダブルの肩を軽く叩いた。
「俺に味方の所に砲撃させるなよ！」
「ロクと違って我々は無理はしないよ。なあキーン？」
「そうだな。」
「街は？」
「死亡が１８００名ってとこだな。内、軍人が５８０名。負傷６７００名。軍人のほとんどが第２次攻撃でだ・・・西ゲートは朝には復旧する。エレベーターの復旧の見通しはたっていない。」
「エレベーターに爆弾、しかも時間をずらすなんて。」
「非道だな。」
「恐ろしい奴だよ。」
「我々は、そろそろ行くぞ。頼んだぞ、ロク。」
「了解！」

０２：２０　Ｐ６地下３階。車両整備室。
部屋は暗く誰もいない。その整備室に明かりを点けロクが入って来る。既にジャガーカストリーは整備が終わっていた。ロクは運転席に乗り込むと、キーを差込みエンジンを掛けた。車内の全ての電光が光り、ロクは機器をチェックし始めた。フロントガラスには、メールで送られたのであろう、作戦指示が細かく書かれていた。ロ

クはハンドルの内側のスイッチを駆使してその指示メールを読み始めていた。すると、ロクの車の窓を叩く音が聞こえる。ロクがふと横を見ると桑田の姿があった。ロクは車の窓を開けた。

「どうした?」
「見送りじゃ・・・嫌ですか?」
「嫌じゃないが・・・お、お前、医務室の手伝いいいのか?」
「じ、じゃあ見送らせて下さい。」
「ああ・・・初めてだな?」
「はい?」
「見送られるの・・・」
「そうですよね。いつも指令室ですもんね。」
「そうだよな。」
「・・・エレベーター・・・呼びますね?」
「う、うん。」

桑田は、部屋端にあるエレベーターのボタンを押す。すると静かな部屋に微かな機械音が響いてきた。桑田は再びロクの側に近寄ってきた。

「上まで送らせて下さい。」
「えっ?ここにいろよ。」
「送らせて下さい・・・」
「じゃあ・・・乗れよ。」
「はいっ!」

桑田は、ロクの言葉に胸躍った。急いで反対側の助手席に回ると、ジャガーに乗り込んだ。
「初めてなんですよね。実際に走っているカストリーに乗るの・・・」
「嘘!?いつも乗ってるイメージしかないな・・・」

「整備ではいつも乗ってますよ・・・でも動いているカストリーは・・・」
「そうだな・・・」

エレベータが到着し扉が上に開きだした。
「行くぞ。」
「はい！」

車は桑田を乗せながらシャフト内に入った。
「初めてです！シャフト内！意外と暗いですね。」
「いつもここを通る時は緊張する・・・」
「す、すいません・・・はしゃいじゃって・・・」
「いいんだ・・・」
「・・・帰りますよね？・・・約束したんですからね？」

桑田はロクの横顔を見つめる。
「ん？」
「いつもと違うんだもん・・・ロクさん・・・」
「そうか？いつもと変わらないぜ。」
「いつも以上に、痩せ我慢して・・・」
「してないって・・・」
「嘘付き。」
「嘘付いてる顔かよ？」
「・・・」
「・・・」

見詰め合う二人・・・桑田は急に無表情のまま涙を溢し始めた。
ロクはそんな桑田を愛しく思ったのか、おもわず抱き締めてしまった。ロクの突然の行動に桑田は少し驚いていたが、やがて桑田もロクに必死に抱きついていた。互いに顔を近づけ、唇と唇を重ね合わ

せていた。

その１１　生きて帰る

一度、顔を離し互いの顔を見つめ合うロクと桑田。
「・・・」
「・・・」
「ちゃんと帰って来て下さい。」
「うん・・・」

そう言い終えると二人は再びキスをし始めた。一度目よりも大胆に・・・互いに何かを確かめるように唇を重ねて行く。上から流れてくるシャフト内のライトが微かに二人を照らしている。ロクは桑田の助手席に体を合わせ、更に深くキスをする。すろとシャフトは止まり、前方の扉が開き始めた。二人は我に戻り顔を離した。抱き締めあった手も急に互いを突き放すように離れていく。扉が完全に開き切ると、ロクは車を前に出す事無く静止していた。

「あらら・・・規則を破ってしまった・・・」
「うん・・・」
「ごめん・・・」
「いいんです・・・」
「ごめんな。どうかしてた・・・」
「だから・・・いい・・・」

桑田がロクの顔を見るとロクは再び桑田の肩に手を回すと桑田の顔を引き寄せキスをした。
「えっ・・・」

桑田も目を瞑り、ロクの大きな背中に腕を回す。何かを忘れようと無我夢中で二人は求め合う。するとロクが急に桑田から離れると、

再び我に返った。
「生きて帰る。」
「うん・・・」

離された桑田は目が輝き笑みさえこぼれていた。ロクは車のギアを入れるとシャフト内から車を急発進する。車は復旧続くＰ６の住居街を走る。ロクは途中で車を止めた。
「ここで降りろ。このエレベーターは生きてるよな？」
「はい・・・」

桑田はロクの車を降り、運転室側に回り込んだ。運転席から桑田を見つめるロク。
「ほんと・・・生きて帰って来て下さいね。」
「なんとか・・・する・・・」
「ぷっ！」

桑田は笑顔で車の側でロクに敬礼をする。ロクは右手の親指を立て桑田に答えた。するとロクはギアを入れると再び車のアクセルを踏み、街中を走り始めた。その姿を桑田はいつまでも見つめていた。

０２：３５　Ｐ６北ゲート前。軍事ゲートではあるが、兵の数はいつもより半分もいなかった。そこへロクのジャガーカストリーが来た。ロクはハンドルの内側の無線を押した。

「こちら黒豹。指令室聞こえるか？」
『こちら指令室我妻。どうぞ。』
「黒豹出る。北ゲートを開けてくれ。」
『了解。』

すると北ゲートが左右に開き始めた。ロクはいつものように開き終わるまでにはゲートを通過し、外の真っ暗な荒野に飛び出して行った。

同刻　Ｐ６南ゲートに揃う、１番艦から４番艦からのレヴィア４隻は、既に発進準備に入っていた。２番艦ブリッチには司令と、艦長の佐々木がいた。

「司令！各艦発進準備が整いました。」

「ご苦労、佐々木艦長。艦の方は宜しく頼むぞ。予定より早いが、１番艦から４番艦は外海へ向かう。」

「了解！各艦発進！先頭は１番艦。」

『了解！』

同刻　レヴィア１番艦ブリッチ。

「レヴィア１番艦、発進する！」

「進路良好！風無し。」

「各艦、１番艦出ます。」

桜井らの乗せたレヴィア１番艦が砂埃を巻き上げ、海に向かって動き始めた。続いて２番艦、３番艦、４番艦と４隻のレヴィアは縦一列になり、海に向かっていた。

同刻　Ｐ６を見下ろせる丘。マントを被り、姿勢を低くしてこの様子を見ていた男がいた。

「海竜が？・・・動いた・・・」

男は慌てて、その場を走り立ち去った。

０３：００　浜田基地より南西約８キロの地点。浜田基地のレーダーの範囲からはギリギリの箇所である。そこにいたのは浜田基地を徒歩で偵察していた山口のＳＣがあった。そこに静かにライトも点けず近寄ってきたのはロクのジャガーだった。ジャガーは山口のＳＣの側に停車すると、ロクが車から降りて来た。するとロクは山口の車の助手席に乗り込んだ。

「よお！どうだ？」
「隊長！変わりません。敵は偵察車も出してないです。」
「舐められたな～」
「はい・・・って何で白制服なんですか？」
「作戦だ。そうか・・・偵察も出してないのか？どうせ奴ら、海草酒でも飲んでるんだろ！？」
「ですね・・・あれ？ロクさん以外は？」
「ん？ああ“後から”来る。」
「ですよね？いくら隊長でも一人じゃあ・・・」
「一人じゃあ？って？」
「普段の浜田基地でも隊長一人じゃあキツイのに、タケシ部隊５０台がある以上、一人で突っ込むのは・・・」
「自殺行為か？」
「はい・・・それ以上かと・・・」
「うふふ・・・そうだな・・・」

ロクは笑いながら山口を“睨んだ”
「作戦を聞いてないのですが、私はどうしたら・・・？」
「後方支援！」
「はあ～？」
「不服か？」
「いや・・・別に・・・それが偵察隊かと・・・」

ロクには戦場に出た事がない山口の本心が分かっていた。
「お前を俺の隊に入れたのは、お前は俺と同じように臆病だからだ。」
「はっ？」
「臆病でいいんだよ。無理して死に急ぐより、臆病になって生き延びようって奴の方が俺は好きだけどな。」
「はぁ・・・」
「死に急ぐなよ。まだ１５だろ？」
「なんか、隊長にそんなに熱く語られたの初めてです。」
「そうか。じゃあ頼むぞ。後から別隊も来る。お前は北に回りこみ徒歩で松島基地偵察だ。」
「松島基地を・・・了解です！」
「頼むぞ！」
ロクは山口のＳＣを降りると自分のジャガーに戻って行った。

０３：３５　レヴィア艦隊４隻は松島湾入口約１キロの外海の海中にいた。
レヴィア１番艦ブリッチ。指揮は桜井が操縦を兼ね執っていた。桜井は潜望鏡を覗いている。
「意外と多いな。国友？行けそうか？」
「厳しいです。特に深い所にはびっしりですね。」
「まあこの数を敷けば、向こうとしては安心だな。出来るだけ薄いとこを検索してくれ。」
「了解！少し時間が・・・その先は沈没船のオンパレードですし・・・」
「急げ！ロクさんの勇気から比べれば俺たちなんて・・・あの人を死なせないぞ。」

同刻　レヴィア2番艦ブリッチ。
「どうしたんだ?なぜ停止し動かない?」
「ルート検索でしょう。桜井の事です。何か考えはあるはずです。」
「間に合うのか・・・もうすぐ満潮だぞ・・・」

その１２　難攻不落

０３：４５　Ｐ６地下３階ＳＣ整備室。全部黒で塗装された、ダブルのジャガーストームの脇に桑田の姿があった。運転席にはダブルが乗っている。

「もう・・・なんでわかんないんですかね！？」
桑田がキレ気味にダブルに説教をしていた。

「もう一度だ・・・もう一度最初から説明を・・・」
「もーう！ロクさん“ですら”勘で覚えましたよ！」
「お前・・・言い方きついなー。」
「最後ですよ！いいですか！？ダブルさん？」

桑田が、ダブルに怒って機器の説明をしている。その様子を見ているキーンと高橋技師長。
「なんか明らかに変わってますね。なつみ・・・」
「さっきから、別人になったような・・・」

その様子にキーンはなつみに質問をぶつける。
「おーい！なつみ？どうした？ロクにキスでもされたのかー？」
「そっけんな○△×※□▼◎だがー！」

桑田は説明途中にキーンの方を振り返ってキレていた。
「図星か・・・どこの方言ですか？技師長？」
「分かりやすい。誰だあいつをスパイって疑ってんの？」
「さ、さあ・・・？だ、誰でしょうか？」

キーンと高橋が小声で話す中、そこにバズーが眠そうな顔で入っ

て来る。
「やっと起きたか・・・」
「あれ?ゴロゴロ様は?」
「だ・れ・だ・よ・・・?」
「ロクだよ。なんかあいつ、敵から砂漠の雷さまって言われてるんだろ?」

そこに桑田が飛び込んで来て、バズーの顔の近くまで近寄った。
「それを言うなら。砂漠の雷獣ですよ!らいじゅう!ライジュウ!RAIJYU!」

そういい終えると、再びダブルの車に戻って行く。
「ダブルさん!全然出来てないじゃ・・・死にたいんでしょ!?だからここは・・・あー違う!」
桑田の豹変振りに戸惑う3人。

「さてと、俺はシンガリだよな?北ゲートにいるぞ!」
「ああ。頼んだぞ。」
「悪いな。お前のは間に合わなくて・・・」
「いいえ、ロクとダブルが優先ですから。」
「ただフロントガラスは、防弾ガラスにしてある。」
「ありがとうございます。おーいそろそろ時間だろ?ダブル行くぞ?」

「まだです!全然まだです!この人に教育ってものがそもそも・・・あー!だ・か・らっ!」
「あとは、ロクみたいに勘でするよ。ねぇ、技師長?」
「そ、そうだな。おい、もう許してやれよ。桑田?」
「はあ、私はそんなつもりで・・・でも戦場で困るのはダブルさんですよ?」

「ロクに出来て、俺に出来ない事ないだろ？」
「その自信どこから来るのか・・・？」
「じゃあ、俺も行きますんで。」
キーンはこの部屋を出て行った。するとこの部屋のエレベーターシャフトの扉が開き始めた。ダブルは自分のジャガーストームをシャフト内に入れ始めた。桑田と高橋は、ダブルのＳＣの側に近寄った。

「必ず帰って来て下さい。」
「同じセリフをロクにも言ったか？」

桑田は、急に真っ赤な顔をして目が飛んでしまった。
「そうか・・・」
「な、なんかあったんですか。ロクさん？」
「いいや、大丈夫だよ。ロクは俺らが守る！」
「はい！」
「行って来る！」
ダブルは運転席から桑田に親指を立てた。桑田と高橋はシャフト内のダブルに対し敬礼をする。

０３：５０　ジプシャン軍松島基地側居酒屋。
既に酒場の女たちの姿はなく、タケシは酔い潰れていた。ほとんどのテーブルは兵らが酔いつぶれている中、ヒデと丸田、嶋、石森の４人は酒を飲み続けている。そこへヒデの仲間のタカが入って来る。ヒデの側に近寄ると、ヒデに耳打ちをする。

「海竜が妙な動きを・・・」
「ん？」
「補給をし、再び海に潜っています・・・」
「そうか・・・わかった・・・」

「それと・・・」
「ん？」
「ミキが戻っていないって女たちが・・・」
「そうか・・・捜せ。」
「はい・・・」
タカが店を出る。その様子を見て、不審がる嶋。

「どうしたヒデ？」
「いえ、なんでも・・・」
「・・・・・・」
「そういやぁ、なぜポリスの船はここを襲わない？」

すると、嶋とヒデの会話に石森が口を挟む。
「湾の入り口に大量の機雷を敷き撒いてる。」
「潜ればいい。向こうは潜れんだろ？」
「向こうの方がデカイ。機雷の下はくぐれない。それに湾の中は、浅いところも多く、座礁しやすい。湾内にはいくつもの沈没船もあるしな。水陸両用タイプにしては、エアーブースターの船底をぶつけたら致命だ。そうだな嶋？」
「ああ、過去２０年近く、ポリスはここを破ってない。俺が敵なら機雷を除去して攻めるな。しかしその時間にこちらは、守備を固められる。後ろは山、左右は細い海岸道、更に正面に海。ここは難攻不落の要塞だ。突破など不可能だ。」

「ふはははっ！」
ヒデは突然笑い出した。
「何がおかしいんだ！？」
嶋がその態度にヒデを責めた。
「いや、悪い悪い！急に昔の仲間を思い出してな。」
「仲間だと？」

「ああ、絶対に無理だと聞くと、破るまで何日も考える馬鹿がいたなと思ったら急におかしくなってよ！」
「バカバカしい！」
「うふふふ、あの馬鹿が生きてるなら、ここをどう攻めるんだろうな・・・？」

０３：５４　ロクのジャガー。ロクは車内の時計を見つめていた。
「あと３０分・・・」

０３：５５　Ｐ６北ゲート。キーンのＳＣ。
「出るぞ。我妻！ゲート開けてくれ！」
『了解！』
北ゲートから出るダブルとキーンのＳＣ。２台は北の浜田基地に向かう。

０３：５８　レヴィア１番艦ブリッチ。
「このルートなら、リスクは少ないと・・・」
国友の席に近寄り、地形データーを見つめる桜井。
「うん・・・確かに・・・作戦まで２６分・・・行くぞ。三島！後方の３隻に、照明信号！“ワレ二ツヅケ”だ。」
「了解！」
「３分後に移動する！・・・ロクさんの言葉じゃないけど、さーて行きますか？」

０３：５９　レヴィア２番艦ブリッチ。司令と佐々木がいた。
「１番艦より照明信号。“ワレ二ツヅケ”です。」

「来たか。よし我艦も動くぞ！」

０４：０１　レヴィア１番艦ブリッチ。
「進路このまま。微速前進！」

０４：０２　レヴィア４番艦ブリッチ。久弥が席から立ち上がり、一人腕を組んでいた。
「動いたか？この艦は指示があるまでここで停止！頼むぞ！桜井！・・・ロク！・・・」

満潮まであと２２分・・・

その１３　侵入せよ！

３隻のレヴィア艦隊は、湾の入口に近辺にいた。海上は波風もなく穏やかで、夜明け前か若干、東の海の空の色が変わり始めていた。その海底を３隻は微速で進んで行く。しかし、湾の入口には数百の機雷がこれを拒むように、立ち塞がっていたのだ。近いものでは１メートル間隔で浮遊するものまである。

０４：１０　レヴィア１番艦ブリッチ。緊張した桜井たち。

「機雷まであと３０メートル！」

「艦をギリギリまで寄せるぞ。国友！よく見張れよ！」

「満潮まで１４分！」

「よし。少し早いが行くぞ。艦首を機雷の真下につける。微速前進。」

桜井らの乗るレヴィア１番艦は機雷網の真下に艦を移動させて行く。そこの機雷の間隔は２メートル程で、桜井のブリッチからでも微かに見えるくらいに近寄って行く。

「停止する！」

レヴィア艦が停止する。まさに艦首の真上に３つの機雷が浮いていた。

「ふぅー。確かにくぐれないな・・・国友、これ以上潜れないか？」

「無理です。海底まで５０センチ切ってます！海が荒れていたら、上は艦首すら危ないですし、船底部分は座礁しかねます。これ以上は・・・」

「なら、予定通りだ。少し早いが行きますか？」

「はい！」

「行きましょう！」

「艦首部分のみのエアーブースター始動！空気弁開け！」

レヴィアの艦首部分の真下からたくさんの空気が噴出した。空気は泡となって船の左右に別れ海面に上がって行く。海面に上がる頃には、大きな泡となって海面に出てきた。

「どうだ？国友？」

「機雷・・・位置変わらず。駄目です！動きません！」

「くそっ！もう一度だ！」

「現在エアーの残り７５パーセント。緊急浮上用のエアーを残して６０パーセントを一気に噴出しませんか？」

「しかし・・・」

「桜井さん！？」

「ロクさんが、命張って敵基地に突っ込むんだ・・・俺たちだって・・・」

「やりましょう！桜井さん？」

「うん、やろう！」

「わかった。残りのエアーで最大量を噴出する！」

「了解！」

「６０％のエアーを艦首部分に集中します。」

「これで駄目なら・・・作戦は・・・よし！エアーブースター再始動！空気弁開け！」

再度、レヴィアの艦首部分からエアーブースターの空気が噴出される。１回目より空気量も多く、たくさんの泡は海面まで一直線に上がって行く。たくさんの泡は海面を揺らし波になり、機雷を少しづつ左右に動かして行く。

「機雷！左右に動いてます！」

「やったか！よし、前進するぞ！微速前進！三島、２番艦に証明信号。“ワレワンナイ二ハイル”だ。」

レヴィア1番艦のエアー噴出で機雷は左右に動き、1番艦は機雷と機雷の間をギリギリで通過する。

04：14　レヴィア2番艦ブリッチ。
「1番艦・・・通過！」
「よし！俺たちも後に続くぞ！」
「了解！無線員、3番艦に照明信号だ。“ワレニツヅケ”だ」

04：15　レヴィア3番艦ブリッチ。曽根参謀と艦長の水谷がいる。
「2番艦より、連絡！“ワレ二ツヅケ・・・”です。」
「よし！微速前進。」
「微速前進！」
「2番艦のケツに付けろ！」
「了解！」
「万が一だ！こちらもエアーブースター用意！船の移動の海流で、機雷が戻るなよ・・・」

04：20　レヴィア1番艦が作った海の道を、2番艦、3番艦と続けて通過した。満潮ながらたまにブリッチの屋根部分が少し、海上から顔を出していた。そのブリッチのすぐ両脇には、機雷が浮いている。

04：22　レヴィア1番艦ブリッチ。
「3番艦無事通過！作戦は成功です。」

「慌てるな。本当の作戦はこれからだ。照明信号！“ワレシテイノバショニイドウスル”だ。」
「了解！」
「国友！オペ頼むぞ。ここからは浅瀬との勝負だ！座礁する訳にはいかんからな。」
「任せてください！」
「本艦は浜田基地の射程内まで移動する。」

０４：２３　レヴィア２番艦ブリッチ。
「１番艦より証明信号です！ワレシテイノバショニイドウスル・・・です。」
「了解。ケントウイノル・・・と打ち返せ！」
「了解！」
「我が艦も、浜田と松島の間の橋砲撃地点に速やかに移動する。後は任せたぞ佐々木！」

「了解！レーダー！浅瀬、見落とすなよ。」

０４：２４　ロクのジャガーカストリー。
「そろそろ時間だな？無線連絡がないなら、行かせてもらいますよ。」

ロクは車のエンジンを掛ける。ロクはポケットからカセットテープを取り出すと、車内にあるデッキに放り込んだ。するとロック調の曲が段々と大きく聞こえ始める。ロクもそのリズムに合わせ、アクセルを吹かしまくった。するとロクは車のライトを点ける。闇夜に赤い光が妖しく光った。
「さあーて、行きますか？」

ロクは車のギアを入れた。

“砂漠の雷獣”伝説第2章が始まろうとしていた。

その１４　突撃

０４：２６　ジプシャン軍浜田基地。基地内の警報が突然鳴り響いた。
「敵襲！Ｐ６方面より、ＳＣ確認！」
「何！夜中だぞ！数は？」
「い、１台です・・・」
「はあっ！？」

暗い荒野を赤いライトを点け爆進するジャガーカストリー。運転席には白い制服を着たロクがいた。ロクは不敵に笑いながら運転している。

「迎撃だ！」
「了解！何台・・・出しますか？」
「第一迎撃隊だ！出せ！」
「車種不明！データーありません。新型です。改造タイプかもしれません・・・」
「タケシの隊はどうしますか？」
「奴らは客だ。出さすな！浜田の意地見せろ！」
基地内は慌ただしくなった。各倉庫からはジープタイプのＳＣが１０台前後出動した。その様子を見ていたあるタケシ隊の兵が走りまわっている基地兵に声を掛ける。

「どうした？なんだこの警報は？」
彼はタケシ隊二番隊長の早坂。年齢は４０才前後で、鋭い眼光が特徴だった。
「敵襲です。」
「Ｐ６か？」

「分かりません。たった1台ですから・・・」
「なんだと!?」

04：28　ロクのジャガーカストリー。ロクの視界には浜田基地から迎撃してきた敵SCのライトが見えてきた。
「予想通り・・・15か・・・まあそんなもんだろうな。なら、派手に行きますか。」

ロクは点灯してたライトを消し、ハンドルを左に切った。

04：29　浜田基地迎撃隊。
「ライトが消えた!奴が消えたぞ!」
『大型ライト点灯!隊を横一字隊形に展開!』
『各車、エンジン音で確認しろ!』

浜田の迎撃隊はSCの屋根上の大型ライトを点け、広い範囲で荒野を照らす。後部座席の機銃者も目を懲らした。

「どこだ?出て来い・・・」
すると突然、隊の右方向からロクのジャガーが現れる。
「右だ!」

各車の大型ライトが右に集まる。そこに照らされたのは白制服を着たロクが操縦するジャガーが照らし出された。迎撃隊は一斉に機銃で応戦する。しかしそれをいち早く察知したのか、ロクは更に左にハンドルを切った。

「後ろにまわったのか!?」

ジャガーのバルカン砲が迎撃隊のタイヤを打ち抜く。一瞬で4、5台SCが転倒する。

「斑模様・・・や、奴だ・・・」

04：31　浜田基地。

「相手は1台だろ?何してるんだ!?」

『相手は斑模様!屋根にバルカン装備!』

「斑だと・・・?」

先程、警報を気にしていたタケシ隊の早坂が、無線に割って入った来た。

「そのSCは、黄色と黒か!?」

『そうです!ドライバーは白装束を纏い、うわっー!・・・』

「おい!どうした!?おい!?」

「後続隊を出せ。」

「止めろ!」

「どうした?」

「雷獣だ!」

「ライジュウ?」

「しかも、白装束で・・・奴に間違いない。我々が出る!お前らではかなう相手ではない!松島のタケシ様に無線だ!」

04；33　ジプシャン軍松島基地指令室。浜田基地よりも機器が豊富で、人数もかなりたくさんの兵がいる。

「浜田基地より無線!ライジュウに襲撃されているとの事!タケシ様を呼び出して欲しいとの事です!」

「ライジュウ?なんだそれは?タケシと言っても・・・おい!誰か

酒場に使いを出せ！そこで飲んでるのだろう！」
「了解！」

０４：３４　ロクのジャガーカストリー。
「もう終わりか！」
ロクのジャガーは１５台の敵ＳＣ隊のタイヤ部分を狙い撃ち、走行不能にしてしまった。

「ちょっと、早かったかな。ならこのまま松島基地へ行かせて頂きますよ！」
すると、更に浜田基地より５０台のＳＣ隊が出てくる。
「あらら・・・計算狂ったな？５０台全部かよ！さすがに簡単には行かせてくれないか？」

浜田基地から出てきたのはタケシ隊の５０台。ミサイルは積んでいないが、ロクのＳＣを囲むように二手に分かれてきた。
「ここで弾を使い果たす訳にはいかない・・・少し遊んでもらういますよ。」
ロクは慌ててハンドルを切ると、浜田基地から離れ北の松島基地に向かった。

０４：３５　タケシ隊ＳＣ部隊。
「間違いない！雷獣だ！奴め松島基地に向かうのか？全車追うぞ！」
『了解！』

０４：３６　ジプシャン軍浜田基地。
「ライジュウが松島へ！？」

『そうだ！タケシ様に連絡は！？』
「飛ばした。しかし松島までは狭い一本道。なぜ奴は・・・？」
『さあな、１台で仲間の仇でも取りに来たんじゃないか？俺たちはこのまま奴を追う！』
「分かった。無線を飛ばす！」

０４：３７　タケシＳＣ部隊。早坂車。
「待て・・・１台とは妙だ。敵の本隊がいるかもしれない。浜田が手薄になる。半分は奴を追う！半分は浜田待機だ！どうせ一本道だ奴は逃げれないはず・・・馬鹿な雷獣が、焦って突っ込んできやがって・・・」

０４：３８　松島基地側の酒場。基地の兵が慌てて店内に入って来る。
「タケシ様は？」
「どうした？」
「浜田より、隊の方から無線です。ライジュウが浜田を襲っていると・・・」

　すると店のソファーで横になっていたタケシがムクッと起き上がった。
「雷獣だぁー！？」
「詳しくは分かりませんが、一度基地の方へ来て欲しいと無線が入りまして・・・」
「分かった、おい行くぞ！」
「はい！」

０４：４０　レヴィア２番艦ブリッチ。２番艦は松島基地から近い満潮用の仮橋の射程ポイントの海底に停泊していた。
「予定より少し遅れたが・・・」
「まだ海岸線は動きはないようです・・・」

０４：４２　ロクのジャガーカストリー。ロクは松島基地に向かって車を走らせていた。道幅は狭く、すぐ右が海になっている所も多い。ロクはバックミラーで後方を確認する。
「２０台？まあこんなもんか・・・あとは松島が動かなければ・・・２０なら反転して叩くか・・・逃げ道が無くなるな。しかし予想以上に道が狭いな・・・さあどうする？」

０４：４３　松島基地指令室。
「雷獣で間違いないのか？」
『そちらの隊長がそう申してました。黄色と黒だと。しかもそちらに向かっています。ドライバーは白装束だそうです。』
「早坂か？それでＰ６の様子は？」
『動きはありません。』
「なぜ１台でなんだ・・・？」

タケシは一気に酔いが醒めた様子で、一人下を向いていた。
「仲間の仇を取りに奴は１台でこちらに・・・」
『海岸線です。あと８分でそちらに到着します。』
「迎え撃つ！奴は死ぬつもりだ！それなりの歓迎をしてやれ！浜田基地はそのまま待機だ。うちの部隊の半分が追っているんだな？」
『はい！半分は基地に待機してもらっています。』
「出るぞ！今度こそ決着付けてやる！」
「しかし、なにか引っかかります・・・」

「なんだ?」
「それが・・・」
「時間がない。ヒデらは2次隊で後から来い?」
「は、はい・・・」
「うちの隊は全車緊急発進だ!!」

ヒデは自分の親指を無意識に噛んでいた。
『本当に血迷ったのか?奴はなぜあの一本道を・・・?なにかある・・・』

その15　策士、策に・・・

０４：４５　　ロクのジャガーは既に浜田基地と松島基地の中間部分にいた。道路が狭いのと、若干悪路のせいか浜田からの追手もロクの車には容易に近寄れなかった。ロクは追ってくる車両のライトをバックミラーで覗いては、一人呟いていた。

「まずい・・・松島に着く・・・このままでは・・・戻るなら今しかない・・・」

ロクは急にハンドルを切ると、車をスピンさせ浜田方面に方向を変えた。今まで走っていた道よりはやや広く、戦闘をするには適度と感じたのだ。

「ここなら・・・」

ロクは近寄ってくる敵ＳＣのライト数を数えていた。

「２２、２３、２４、２５ってとこか・・・ここでやるしかない！」

ロクは再びライトを消すと、屋根のバルカンをせり出した。ロクはバックミラーを確認する。遠くに松島基地の明かりが見え、その中から、数十台のＳＣのライトを確認する。ロクは振り返ってもう一度、自分の目で確認する。

「やっと基地内から出て来たか・・・しかし・・・」

０４：４６　　レヴィア2番艦ブリッチ。立ったまま仁王立ちする弘士の姿があった。

「来ました！松島基地から援軍です！」

「ロクの位置は？」

「ほぼ基地と基地の真ん中です。浜田からの追手と交戦に入ります。

数およそ２５台。」

「よし！作戦を決行する。レヴィア急速浮上！橋を砲撃するぞ！」

「了解！エアーブースター始動！」

レヴィア２番艦は海上に浮上してきた。湾内は波もなく穏やか。東の空が更に明るくなってきた。

「砲撃準備！目標は敵建造の橋！浜田寄りからだ！」

「砲撃準備！」

レヴィア２番艦の前部の甲板が開き、下から３連装主砲２門が姿を現した。

「距離３．２キロ、方位４８度。」

「松島隊は？」

「間もなく２番目の橋を渡ります。」

「砲撃用意！」

「砲撃用意！」

０４：４７　浜田寄りの橋。その頃、ロクのジャガーは浜田からの追手と交戦中だった。

「くそっ！数が多い！しかもＳＣの戦闘に慣れている。さすがタケシ隊だな。一筋縄ではいかんな。突破させろ！」

ロクのジャガーは完全に押されていた。浜田からのタケシ隊２５台も突破されないように道を塞ぐようにジャガーに攻撃を仕掛ける。ロクのジャガーは敵ＳＣを炎上、撃破するがそのＳＣが帰り道を塞いでしまう。

「崖が急過ぎる。登れない。帰れないなら。」

ロクは再び車にスピンをかけ、敵ＳＣの包囲網の中、松島基地方面に車を走らせた。すると浜田寄りの約８０メートルの橋を渡り始めた。

「間に合え！」

０４：４８　松島基地指令室。
「ああっ？湾にレーダー反応？な、なんだ？」
「ポ、ポリスです！Ｐ６の戦艦です！」
「ば、馬鹿な・・・なぜ湾内に？警報だ！」
「は、はい・・・」

０４：４８　レヴィア２番艦ブリッチ。
「２番目の橋！全車通過！」
「砲撃始め！」
「主砲！てぇー！」

レヴィア２番艦から発射した２門の主砲の弾が、ロクがまさに今渡っている橋をジャガーが通過するすぐ後ろを破壊して行く。スピードを上げるジャガー。

０４：４８　ロクのジャガー。
「わおっ！やるじゃん司令！危なっ！・・・お前、いい子！」
橋が爆破されたせいで浜田からの追手は、ロクを追うこ事が出来なくなった。

０４；４８　タケシ２番隊早坂車。
「逃がしたか！タケシ様！雷獣はそちらに向かいました！浜田寄りの橋は爆破されました。」

０４：４８　松島から出たタケシの本隊。
「何だと!?橋が砲撃されている・・・」
するとタケシのＳＣに追報の無線が入った。
『海上に敵艦です!』
「何っ!?」

０４：４８　レヴィア１番艦ブリッチ。
「２番艦の砲撃始まりました!橋を爆破した模様です。」
「よし!浜田を叩く!艦浮上!多聞(たもん)?浮上と同時に砲撃準備!」
『了解!』

０４：４９　タケシ本隊。
「海上に敵というのがよく分からん。どういう事だ?」
『砲撃は海からです。海から・・・』
「海だと?・・・奴らどうやって湾に・・・」
『正面から雷獣!』
「なにぃ!」

タケシの前には赤いライトを点けたジャガーが現れた。するとタケシの後方の一番松島寄りの橋が爆破された!
『松島寄りの橋爆破!前後の道を絶たれました!』
「やってくれるじゃないの・・・ポリスめ!」

タケシ隊の１００メートル先にジャガーは停止し、アクセル音だけを吹かしている。
「まあ潮が引けば道は戻る。その前に・・・雷獣・・・奴だ!」

０４：５０　レヴィア２番艦ブリッチ。
「前後の橋の爆破確認！」
「落としたか？よし、次は松島隊のＳＣを砲撃するぞ！」
「し、司令・・・ち、ちょっと待って下さい。」
「どうした？」
「ジャガーの反応が、敵松島部隊と同じ所にあります・・・？」
「ば、馬鹿な・・・なぜロクが・・・！？」

その16　雷獣、雲渡り

０４：５０　１番艦レヴィアが海上に浮上する。前部甲板が開き２連式主砲が１門出て来る。
「目標浜田基地、距離２キロ！」
『了解！』
「敵主力は基地内にいると思われます。」
『砲撃用意完了！』
「てぇー！」
桜井の号令が響く。レヴィア１番艦が浜田基地に攻撃を開始した。同刻３番艦も手樽基地に砲撃を開始する。

０４：５０　浜田基地南西に８キロ地点。キーン、バズー、ダブリの３名が車内、アシカムで待機している。
「攻撃だ！行くぞ！」
『了解！遅れるなよバズー！』
『お前らに追いつけるかよ！？』
「ふふふ・・・ついて来いよバズー！突っ込むぞ！」
３台は浜田基地に向かって走り始めた。

０４：５１　レヴィア２番艦ブリッチ。２番艦の主砲は三連砲塔が２門が発射準備が完了している。
「ロクは！？」
「敵ＳＣと交戦中！」
「司令！潮が引いたら奴らは・・・しかも浮上してます。基地もこちらに気づきます。」

「分かっている・・・しかし・・・」
「ロクさんの好意を無駄には出来ません・・・」
「ロクに無線は？」
「出来ます！」
「繋げ！」
「はい！・・・こちら海蛇２、黒豹応答せよ・・・？」

　すると雑音の多い無線が弘士の耳に届いた。
『なに・・・してんだ・・・早く・・・砲撃しろ！』
「お前こそ何してんだ！？そんなとこで！？」
『ちょっと・・・計算が・・・狂っただけだ・・・早く砲撃しろ！』
「馬鹿な・・・撃てるか！」
『こっちは・・・問題ない！・・・なんとかする！・・・早く・・・砲撃を・・・』
「司令！？」
「絶対・・・帰って来い・・・いいな？」
『戻るって約束したんだ・・・帰るさ・・・！』

　ロクとの無線が切れる。下を向く弘士。しかし再び佐々木を見つめる。
「・・・砲撃だ！」
「りょ、了解！」
　レヴィア２番艦は橋と橋の間に留まっているタケシ本隊のＳＣに砲撃を開始する。

０４：４３　その頃、ロクとタケシ隊は狭い道幅で壮絶なバトルを繰り広げていた。そこへレヴィア艦からの砲撃が始まった。
『こいつ・・・バケモンです！機銃がまったく・・・』
『機銃隊全車走行不能！』

『雷獣が・・・崖を走っています！うあぁぁ！』

タケシの耳に入る数多くの無線は、部下の悲痛な叫び声と、弱音な声ばかりだった。そんな無線の中、タケシは激怒した。

「何してる！体当たりしてでも奴を止めろ！！」

『海から砲撃です・・・タケシ様・・・崖を登れるタイプは撤退させましょう！』

そんな中、嶋の無線までもが弱音を吐き始めていた。

「こいつを前にして逃げろと言うのか！？」

『このままでは隊は全滅します・・・』

「なら崖を登れるタイプは逃げろ！他の物はＳＣを置いて脱出しろ！」

『タケシ様は？』

「奴と決着付ける！」

『なら我々も残ります！』

タケシは遂に隊の撤退命令を下していた。しかし眼光だけはジャガーに向けられている。

０４：４４　ロクのジャガー。

「あいつ、本当に撃つかよ？しかし突破口は出来た！」

ロクのジャガーは隊が乱れた始めたタケシ隊の隙を突き、松島基地方向に走り抜けた。

０４：４４　タケシのストラトス。

「野郎っ！逃がすか！」

ストラトスの３台はジャガーを追って松島方面に向かう。

０４：４５　レヴィア１番艦ブリッチ。
「キーン、ダブル部隊が基地に接近！」
「多門、撃ち方止め！」
『了解！』
「あとは連絡待ちか・・・松島の方は？」
「砲撃してるんですが・・・同じ場所にロクさんのＳＣ反応もあり・・・」
「どういう事だ！？」
「ここからではなんとも・・・」

０４：４６　浜田基地。ダブルとキーンのＳＣが基地に近寄ってくる。
「基地半壊、ＳＣ部隊は壊滅ってとこか？キーン？」
『１番艦の砲撃主、いい腕だな。』
「出迎えがないって事は、そういう事？」
『そうだろ？』
「なら行くぜ。俺が先頭で行く。援護頼む。バズー早くしろよ・・・」
『了解！』
『あと２分くれ～』
「待てねぇな・・・」

０４：４８　松島寄りのジプシャン軍臨時橋。そこにロクのジャガーが近寄ってくる。その後に、３台のストラトスがジャガーを追ってくる。その橋は全長で２５０メートル、よく見ると橋は海側にコの字のコースで建てられている。ガードレールらしきものはなく、高い所で１０メートル程高くなっている緩い逆Ｕ字型だが、レヴィ

アの砲撃でその一番高い部分が３０メートル程に渡って欠損していた。
「司令・・・いい仕事しやがる・・・３０メートルってとこだな？あそこ・・・」
　ロクはその橋を見てそうぼやいた。
「あのカーブがあるから加速は無理だな。しかしここに居れば巻き添いかストラトスの相手かだな？ならば・・・」
　橋のコの字になった曲がりを見て、ロクは加速が出来ないと感じた。
「技師長・・・あんたブースターで車を空に飛ばすって言ってたよな？ならば・・・その言葉、信じる！」
　ロクは海岸線から橋の入口にハンドルを切った。
０４：４９　ストラトスのタケシ。
「まさかあいつ、橋を飛び越えようとしてるのか？」
『無理です。あの距離ではいくら奴のＳＣでも・・・』
『装甲が厚い分、かなり重いはずです・・・』
「本当に・・・死にに来たか？・・・雷獣よ！？」
０４：４９　ロクのジャガー。
「やはりこの距離では十分な加速が出ない・・・しかしエアーブースターなら・・・」
　ロクのジャガーはコの字のカーブを曲がると橋の直線部分で停車した。
「舗装されてる道・・・やってみっか・・・」
　ロクはブレーキを踏みながらアクセルを何回も踏み出した。タイヤは空回りし夜明け前の海岸に異音を轟かした。

「ジャンプと同時にエアーブースター最大出力・・・船が浮くんだ・・・車だって・・・」

ロクは更にアクセルを踏み込んだ。タイヤと舗装部分の擦れた音が更に大きくなった。

「タイヤ減らしたらまた技師長に怒られる・・・まあいいか・・・行けぇぇぇ！」

ロクは崩壊した橋に向かって急加速した。

その17　疾風（しっぷう）のロク

０４：５０　ジャガーは崩壊した橋に向かって走り出した。ロクがブレーキを外した瞬間にはロクが運転席で仰け反るくらいの反動だった。短い距離だったがジャガーはぐんぐんスピードを上げる。ロクはブースターのスイッチに手を掛けた。

「行くぞぉぉ！」

ロクは、ジャンプ寸前でブースターのスイッチを最高にした。空気の音が今まで以上になり、砂埃こそ立たなかったが、ジャガーは勢いよく橋を飛び出した。夜明け前の海の上をジャガーは飛んでいるように見えていた。車体は少しブレたが、ブースターの力もあって、反対側の壊れた橋に飛び移った。着地時、わずかに右に着地しあわや海に落下してしまうかにも見えたが、ロクはうまく車をコントロールし、車体を橋の中心に戻しその橋を渡り切った。

「お、お前・・・いい子！」

０４：５１　ストラトスのタケシ。

「飛んだよ・・・」

０４：５２　浜田基地内。キーンとダブルが、基地内で銃撃戦をしている。ダブルは機関銃を、キーンは拳銃で。

「バズーの野郎肝心なとこで来やしねぇ・・・」

「おい！ダブル！？手榴弾もうないぞ！」

「くそが・・・」

そこに、相手側にミサイルのような物が二人の後ろから発射され

た。　二人が応戦していた敵数名はこの爆発によって全員吹き飛んだ。すると二人の前にバズーカを持ったバズーが現れる。
「何もたついてんだよ！お前ら！」
「遅いんだよ！」
「基地突入は、お前の担当だろ？」
「アシカムでお前らに追いつけるかよ！」

戦闘中だがダブルとキーンに笑みがこぼれる。
「さて、急ぐぞ！どっちだダブル？」
「奥だ！行こう！」
３人は浜田基地の奥の部屋に突入した。するとダブルのインカムに無線が入る。
『レヴィア１番艦三島です。』
「おお、どうした？」
『ロクさんを追ってた部隊があと４分でそちらへ！』
「４分？」
『数は１８台！砲撃まではまだ時間がありますが・・・』
「わかった３分でする。」
『了解。』

無線が切れると、顔を見合わせる３人。
「ここに敵が戻ってくる。急ぐぞ！」

３人は指令室の部屋の前に来ると、音を潜めた。ドアに近寄り、ドアに耳を当てるキーン。中にはまだ数名の兵が居る様子で、無線で助けを呼んでいた。
「ここは俺が。」
キーンは背中のライフルを取り出し、ライフルの銃先を剣に切り替えた。するとキーンは静かにドアを開け中へ突入する。キーンは慌てた兵らをその剣型ライフルで２名の兵を切りつけた。

「拳銃使えよ・・・」
ダブルは援護しながらも、半ば諦め顔でその様子見ていた。
「弾がもったいない・・・だろ?」
「敵兵に敬意を払えよ・・・切られる身になれ。」
「ちゃんと、即死させてるよ。」
「はいはい・・・」

０４：５３　松島基地内。ヒデと丸田が装甲車に乗り込もうとしている。何人かのヒデの仲間が装甲車の周りに集まっている。女子供の姿もある。皆
不安げな顔で二人の傍にいた。
「何?タケシが?」
「敵から砲撃を受けてるらしい。」
「ミキもいないのよ。」
「取り合えず、丸田と様子を見に行く。みんなはここにいてくれ。」
「ここは安心だからな。」
ヒデと丸田の乗った装甲車は松島基地から出て行く。

０４：５３　浜田基地内。ダブルが必死でパソコンをいじっている。部屋の外ではバズーとキーンが銃撃戦をしている。キーンが一度ダブルの様子を見に来る。
「まだか!?ダブル?弾も尽きるぞ!」
「もうすぐだ・・・」
「何やってんだ!?あと2分だぞ!」
「膨大な量だ・・・あと1分・・・バズー、外の敵ＳＣ隊を引き付けておいてくれ!」

「分かった。ここを頼むキーン!」

「了解！急げダブル！砲撃来るぞ！」
「くそっ、ようやく見せ場が来たのによ！」

０４：５４　ロクのジャガー。
「渡ったのはいいが、基地を見学する訳もいかないし。」
ロクはレヴィアに無線を飛ばした。
「こちら黒豹。レヴィア２番艦聞こえるか？」
『無事かロク？』
無線の声は弘士だった。
「危うく吹き飛ぶ所でしたけどね・・・」
『松島基地に向かってんのか？』
「酒場があんだろ？ちょっと覗きたいんだよな・・・」
『・・・お前な。』
「嘘、嘘、この先に砂浜がある。そこにレヴィアで迎えに来てくれたら・・・嬉しいよね。」
『はぁ？』
「あっ・・・いや・・・正直に話すとエアーブースターを使い過ぎバッテリーがなく・・・」
『ふっ・・・そう言え！』
「閉じ込めたＳＣ隊は？」
『６割ってとこか？後は崖を登られ逃げられたよ。』
「上等！じゃあお迎えよろしく！」
『浅瀬じゃなきゃな！夜明け前だし作戦中だ！上陸出来ないなら泳いで帰れよ。』
「了解・・・」

０４：５４　レヴィア１番艦ブリッチ。
「１分前だ。砲撃を再開するぞ多聞！」

『了解！』
「三島無線は？」
「ありません。」
「よし！砲撃用意！」

０４：５４　浜田基地内。
「出来た・・・コピー完了！キーン！残り時間は？」
「３０秒！」
「余裕じゃん！行くぜ！」
二人は急ぎ基地内を脱出する。

０４：５５　レヴィア１番艦ブリッチ。
「アシカム確認！脱出した様子です！」
「よし！ありったけを喰らわせてやる！上部ミサイル、主砲！発射５秒前・・・４・・・３・・・２・・・１・・・てぇっ！」
再び、浜田基地を砲撃し始めるレヴィア１番艦。今回は甲板から真上に伸びる２０発程のミサイルも発射された。

０４：５５　浜田基地近く。ダブルとキーンは自らのＳＣに乗り込むと素早く基地を後にする。
「バズー！当たるなよ！頃合を見て逃げるぞ！！」
『おお！』
ダブルとキーンのＳＣが基地を離れた瞬間、後ろの浜田基地がミサイルや主砲の攻撃に遭い爆発を起こした。
「こちら、山猫。作戦終了。」

０４：５６　松島基地まで約２キロの海岸線。ロクのジャガーは海岸線の道を走っていた。東の海は、だいぶ明るくなり、ロクの肉眼でもレヴィアを確認が出来るくらいだった。

「来たか？しかし松島には常駐隊がいるはず・・・なぜ船を攻撃しない？」

　すると、ロクが海岸の方ばかり気にしていた所に、正面からヒデの乗る装甲車が現れる。

「うおっ！またこいつか・・・」

　面を喰らったのはロクの方だけではなかった。ヒデの装甲車もロクを見て慌ててハンドルを切った。

「奴だ！雷獣だ！なんでここに居るんだよ？」

　ヒデらが運転する装甲車はすぐＵターンすると、すぐジャガーを追いまわした。ロク「こういうのを砲撃してくれよ！」

　ロクは一度、ハンドルを左に切ると、崖を海岸に添って平行に走り出し、装甲車の左側を走った。

「丸田！奴は崖の上だ！」

「分かってる！」

　丸田が装甲車の上部の機銃を手にした瞬間、ロクのジャガーは崖から滑り落ち、装甲車の横側に体当たりを掛けた。

「うおっ！」

　重心の重いジャガーの体当たりで車高の高い装甲車はハンドルを取られ海辺に横転してしまった。運転席のヒデは辛うじて意識があり、上となってしまった運転席を開け、装甲車から出ようとした。

「痛たた・・・丸田？無事か！？」

　すると装甲車の後部座席から、声が聞こえる。

「ああ・・・なんとかな・・・奴はどうした？」

「さあな・・・」

ヒデが装甲車から出ようと、試みたその時だった・・・ヒデが手を当てた装甲車の側部に誰かが立っているのが分かった。ヒデは恐る恐る上を見上げると、そこには拳銃を構えたポンチョコートを着た男が立っていたのだ。ハットとスカーフで顔を覆い、ポンチョコートの下には白い軍服を纏っていた。まさしくロクの姿だった。

「お前・・・雷獣か？」

「雷獣？お前らが勝手に付けた名前らしいな？ヒデ？」

ヒデは自分の名前を呼ばれギョッとした。

「なぜ俺の名を・・・？」

「忘れたか？」

ロクは口元のスカーフを胸元まで下げると、改めてヒデに顔を見せつけた。

「お前・・・疾風（しっぷう）のロク・・・」

その１８　再会、ロクとヒデ

“疾風（しっぷう）のロク”。ロクが１０歳の頃に周りの者に付けられたニックネームだった。当時、１０歳のロクはプロジェクトソルジャーとしてＳＣの訓練を始めたばかりだった。しかし、ドライバーの才能をわずか１年で開花したロクの前を走るドライバーは、他に誰もいなかったのだ。疾風のロクはその際に同じプロジェクトソルジャーやポリス兵に言われていた。

０４：５８　ヒデの装甲車。東の空はだいぶ明るくなっている。風もなく海岸に打ち寄せる波は静かだ。遠く砲撃の音と爆破音が微かに響いていた。恐らく浜田基地への攻撃か、湾入口の機雷を４番艦が攻撃している音だとロクは勘付いていた。

「疾風のロク？あのロクなのか？」

「懐かしいな・・・いつ以来かな。そう言われんの・・・」

「生きていたか・・・？」

すると装甲車の奥にいた丸田が運転席の方に出てきた。

「どうした？誰と話してんだ？」

「動くな！」

ヒデの声で事態を把握した丸田。

「雷獣のドライバーか！？」

「そうだ・・・」

「なっ・・・」

「しばらく見ないうちに、でかくなったよな？最後に逢った時は、まだガキだったしな・・・しかも、いつの間にかあんな化け物みたいなＳＣに乗るようになっちまったのか？」

「時間がない。用件だけ言う。すぐポリスに投降しろ。」
「今更だな・・・そう言えば、あいつはどうした?」
「ん?」
「手榴弾(しゅりゅう)だ?」
「生きてる。」
「そうか・・・くたばってなかったか・・・」

ヒデは丸田が腰の銃を抜く気配を感じ、丸田を牽制した。
「動くなって言っただろ!丘を襲撃したのもこいつだ!分かるだろ!」
「ああ・・・」
「投降はしない。P6に戻る事はない。」
「そうか・・・ならここで・・・」

ロクは改まって、ヒデに拳銃を向けた。
「武器を持たないジプシーを攻撃してはならない・・・そういう規則だよな?俺は丸腰だぜ。」
「装甲車に乗っている・・・武器と見なす・・・」
「噂では雷獣は殺しはしないはずだ・・・」
「ふう・・・」

ロクは一度肩の力を抜き、構えていた拳銃を腰のホルダーに戻すと腕を前に組み始めた。
「ヒジリって女は知っているよな?」
「ひ、聖がどうした!?」

聖の名を聞いたヒデの声が裏返った。
「昨日のお前らの襲撃で、重症を負った。」
「そうか・・・」
「妊娠していた。父親を探している。」

「さあな、誰とでも寝る女だからな・・・」
「父親が分かるなら、そいつも後で投降させろ。」
「なぜだ!?」

「その男が“ミュウ”だ。」
「何っ!?」
「ポリスでしか治療は出来ない。命が惜しいならそいつに投降しろと伝えろ。」
「なんだと・・・」

すると、数百メートル先の海岸にレヴィアが上陸し停泊するエアーブースターの音が聞こえてくる。ロクのインカムに無線が入る。
『上陸しました。急いで下さい。』
「分かった。今行く・・・俺は行く。今日、お前を見逃すのはその男の為だ。すぐその男を連れ投降するんだ。」
「殺さないのか?いつから俺だと気づいてた?ロク?」
「槻木の時だ。あえてお前の正面に立った・・・」
「て、てめぇ・・・狂ってるぜ、あの時も、丘の時も、そして今日のこの作戦も・・・」
「ああ、そうだな・・・狂っている。」
「ただな・・・こんな馬鹿な作戦を立てるのはお前しかいないと思っていたよ。」
「ふっ・・・」

ロクは胸にあった手榴弾を1つ外すと、ヒデの側の装甲車のドア近くにそっと置いた。
「何の真似だ?ロク?」
「下手な真似をしたら、こいつを撃つ。」
「ふざけるな!」
「お前に言ったんじゃない。もう一人の奴にだ。」

「てめぇ・・・」
「俺の“腕”は知ってるよな？サンドウルフ？」
「くっ・・・」
ヒデはロクの言葉に顔をしかめた。

ロクは装甲車を降りると、側に止めてあったジャガーに乗り込み、海岸に停泊しているレヴィアに向かった。ヒデはロクがいなくなるのを確認すると側に置かれた手榴弾を投げ捨てた。
「くそっ！」
「どういう事だ？ヒデ？なぜお前は奴を知っている？」
「それは・・・」
「しかも、サンドウルフって？それとミュウって？」
「ロクの野郎・・・」

０５：０５　海岸に停泊しているレヴィア２番艦。ロクのジャガーが近寄ると、左部分の格納庫の扉が開きロクはジャガーをそこに入れる。
「閉めてくれ。」
レヴィアはすぐ格納庫の扉を閉めると、すぐ後退し海岸を離れて行く。

０５：０８　ヒデの装甲車。ヒデと丸田が、横転した装甲車を手で戻そうとしている。
「無理だ、ヒデ。２人じゃ・・・戦車並みの重量だぞ！」
「仕方ない、歩いて基地に戻るか？」
「そうだな・・・」

二人は装甲車を諦めて、松島基地に歩き始めた。

「聞かせろよ、ヒデ？」
「ああ・・・俺はリキに拾われる前にＰ６に居たんだ。」
「それは聞いた覚えがある・・・俺が聞きたいのは、奴との関係だ？」
「俺は元・四天王候補生・・・元プロジェクトソルジャーなんだ・・・」
「お前が・・・し、四天王・・・」

その19　サンドウルフ

０５：１０　浜に上陸したレヴィア２番艦ブリッチ。弘士の命令は早口になっている。

「潜行する。この場を脱出する。」

「了解！」

「しかし妙だな？松島は砲撃すらしてこない。」

潜行モードだった為か既にブリッチまでの階段は密閉されていた。すると弘士が座っていた席の後ろに、ハンドル式の緊急非難口があり、まさにそのハンドルが音を立てながら勝手に回り始めた。するとその穴の蓋は開かれ下からロクが這い上がってきた。

「いやーこの穴狭い。バズーなら通れないですね・・・」

「御無事で・・・ロクさん・・・」

艦長の佐々木が穴から出るロクに手を貸した。

「遅いぞロク！まず報告だ！」

「はい！戻りました！」

「艦を上陸するなんて作戦にはなかった・・・」

「終わり良ければ、全て良し。・・・でしょ？」

「まあ、作戦は無事に終わったが・・・」

「湾を抜けるまでは・・・ですよ・・・」

「そうだが、松島はこちらに攻撃すらしてこなかった。」

「まさか海からなんて誰も思わなかった・・・でしょ？」

「ふう・・・そうだな。」

「他の３人は？」

佐々木が弘士とロクの会話に割って入った。

「無事帰られていますよ。」
「そうかやったな。ああ、司令・・・ヒデに逢いましたよ。」
「ん？」
「サンドウルフのヒデ・・・」
「懐かしい名だな。それで？」

一度ロクに向けられた目線だったが、弘士は再び前を向き直した。
「逃げられちゃいました。」
「簡単に言ってくれますねぇー。お前がいて逃がすとはな・・・奴はなぁ！」
「分かってます・・・最近、装甲車に乗って攻撃をしてたのはヒデですよ。」
「そうか・・」
「奴がミュウですね。」
「なぜ、奴がミュウだと？」
「うーん、わかりません。ただ、必ず奴はまた来ます。」
「そうか・・・」

松島基地に続く道。ヒデと丸田が歩いていた。
「２歳下？じゃあ、あいつまだガキじゃないか？」
「ＩＱは１７４、ＳＣの運転はトップ、拳銃は虫の触覚すら打ち落とせる。当時にしたらとんでもない化け物だった。」
「虫の触覚！？そりゃ、化け物だな。覚醒って奴か？」
「ガキで覚醒はしない・・・上の連中は、面白くないんだよな。ガキの頃から死ぬ思いで訓練してきたのに、あんなガキに四天王の座を取られんじゃないかとビクつき始めた・・・俺らもよくアイツを裏に呼んでは、みんなで殴り付けた。しかし・・・いつもアイツの目だ・・・」
「目？」

「なんとも言えない嫌な目でこちらを睨むんだよな。ガキのくせにさ・・・結局おれらはいつの間にかあいつに追い越された。何もかも・・・」

「嫉妬か？お前らしくないな？」

「それ以上だな！訓練で死ぬ奴もいたんだ！それなのにだ・・・そんなガキに四天王の座は渡せない！・・・俺はとうとう１４の時、Ｐ６から脱走した。追って来たのは１２歳の奴だった。初めて人を撃った。それが奴だ・・・」

「なぜ奴はお前を撃たなかった？」

「俺は人質を連れていたからな・・・」

すると後ろから２０台近くのＳＣが走ってくる。ヒデと丸田は敵と思い、道端に身を屈めた。するとその中には3台のストラトスが含まれていた。

「なんだ仲間じゃないか！」

丸田は慌てて道に飛び出したがＳＣ隊は走り去ってしまった。

「おーい！なんだ乗せて行けよ！」

間もなく日が東の海から昇ろうとしていた。タケシのＳＣ隊は松島基地に到着しようとしていた。すると右の海岸から一人の女がフラりと出てきた。隊はその女に気づく事なく走り過ぎていた。すると嶋のストラトスがその女を跳ねてしまう。

「おい！嶋！今なんか跳ねたんじゃないか？」

『さあ？気づきませんでしたよ？』

「ふっ・・・そうだな・・・」

このポリスの奇襲でジプシャンは最前線の浜田基地と手樽基地を

失い、タケシは自らのＳＣ隊１２０台を失い、軍全部でのＳＣは１６０台、死傷者は２８０名にも及ぶ。

レヴィア４隻は、一時Ｐ７に向かって帰還していた。朝日が海上に昇り始めている。

ポリスＶＳジプシャン。本当の戦いが今、始まろうとしていた。

第二章　松島奇襲作戦に賭けろ！　完

第三章　予告

遂にその姿を現してきた、ポリス最大の謎「ミュウ」・・・・・

「四天王」はこのミュウを中心に新たなる展開に・・・

弘士「ミュウ確保だ！」

ロク「誰があの子の父親なんだ？」

聖「あの子の父親は・・・」

直美「弟を兵士なんかにさせないわ！！」

タケシ「誰を敵にしたのか、教えてやらないといけないな。」

ヒデ「なぜあいつは死なないといけなかったんだ！」

死龍「ロクとは恋人だった・・・」

桑田「えっ？」

久弥「こいつをレヴィアに取り付ける！」

バズー「一発射撃砲はどうでしょう？」

ダブル・キーン「えっ！？」

死龍「お前が知ってるロクは、ロクじゃない・・・お前は本当のロクの姿を知らない・・・」

弘士「何かの歯車が狂い始めている・・」

ロク「な、なんだ・・・前の死龍と別人じゃないか・・・」

“若者が作る未来ー”

ダブル「俺たちが未来を守らなければ誰が未来を守るんだよ。なあ？」

キーン「うんうん。」

“激化するジプシャンとの戦闘の中、狂乱する死龍・・・果たしてミュウとは？

そしてポリスの潜入しているスパイは誰なのか？”

ポリスの塀の上。

ロク「なあ桑田？」

桑田「はい？」

ロク「俺たちはあと何回あんな夕焼けを見て死んで行くんだろうな・・・」

桑田「はぁい？」

“明日は見えるのかー？”

死龍「教えて下さい・・・」

久弥に銃口を向ける死龍。

久弥「死龍・・・」

死龍「私の・・・残された時間を・・・」

“今、ロクと死龍の謎が遂に明かされる!!”

次回　四天王　第三章　死龍覚醒

その1　ひとり歩きした噂

「聞いたか？」
「聞いた・・・」
「奴はたった1台で、５０台を撃破したって言うぞ！」
「いや、１００台って聞いてるぜ。」
「俺は、タケシ隊を全滅させたって聞いてるぞ！」
「タケシは、何も出来なかったらしい・・・」
「人は撃たないんだろ？」
「橋と橋の３０メートルを飛び越えたらしい・・・」
「本当に空を飛ぶんだ・・・？」
「基地２つは奴が襲ったらしい・・・」
「ＳＣだけを壊して、死傷者を出してないらしいぞ。」
「ポリスが流したデマじゃないのか？」
「奴のためにサンドシップはＰ６に向かったらしい。」
「神の町で生まれた申し子とも聞く。」
「神の子なのか化け物なのか？」
「さあな、覚醒したミュウの子じゃないか？」
「そんな奴相手にどうやって戦うんだ？」

タケシ敗戦の知らせは、ジプシャン軍の全ての基地に伝えられた。
ロクの噂と共に・・・
既にロク、いや“砂漠の雷獣”の噂は一人歩きを始めたのだ。
もちろんＰ５の前線基地の“死神”の耳にも・・・

ジプシャン軍Ｐ５歳前線基地指令室。
「どういう事ですか？」

「はあ、タケシ隊が全滅と聞いてます。」
「タケシはどうしたのですか？」
「ストラトスの3台は生きて本部に到着との事です。」
「くっ・・・くたばってなかったのですね。しかしタケシを追い込んだのはあの雷獣は何なんでしょうか？」

ジプシャン軍松島基地指令室。
「はあ、タケシ様はここに居られます。はあ・・・30台程ですが。はい、分かりました伝えます。」

基地の司令は無線を切ると、側のタケシに伝言を伝えた。
「タケシ様。すぐ、残存部隊を連れ本部に戻るようにとの事です。」
「くそっ！ポリスめ！海からとは考えたな！どうでもいいんだがなぜ松島基地は、湾の船を攻撃しなかった？」
「お言葉ですが、タケシ様。ここ数年ポリスからの攻撃がないからといい、武器を北に持っていかれたのは、あなたではないでしょうか？」
「ああっ？」
タケシはいきなり拳銃を抜くと、基地の指令の額を撃ち殺した。
これには嶋や石森も驚いた。

「おいおい・・・」
「人のせいにするんじゃねぇ！副司令はいるか？」
「はあ・・・」
「前司令は責任を取って自害された。後任はお前だ！」
「は、はい・・・」
「取り合えず、本部に戻る。準備しろ。」
「はい！」

ヒデと丸田が基地のある建物から出てくる。そこへヒデの仲間の羽生らが集まってくる。
「ミキが見つかった。」
「そうか・・・良かったじゃないか。」
「死んでいたんだ。」
「はあ？」

基地の地べたに毛布を掛けられた遺体が一つ。ヒデと丸田はその遺体に近寄った。
「何かに跳ねられた・・・」
「黄色の塗装が付いていた。」
「黄色？」
「それどころか、顔は何かに殴られたような跡ばかりだ・・・」
「着ている服も不自然すぎる。男に襲われたんじゃないか？」
「黄色の塗装って、雷獣か？」
「いや、ストアトスも黄色だぜ・・・」
「ストラトスな・・・」
「まさか・・・」

そこへ、嶋と石森がヒデらのとこにやって来る。
「どうした？ヒデ？」

嶋はミキの顔を見ると、顔をしかめた。
「死んだのか？こいつ？こちらの基地の者が雷獣が轢いたのを見たらしいぞ。」
「本当か？」
「間違いない。」
「・・・」
ヒデは不服な顔をして、ミキの死体を見つめていた。

レヴィア2番艦ブリッチ。ロクは蒼い顔をして、無線機を握り締めていた。
『それでそれで?』
「橋を飛び越えたんだよ・・・」
『それでそれで?』
「ブースターがあったから飛べたようなもんで・・・」
『それでそれで?』
「あとは・・・いいだろ?P6に帰ってからだ。」
『船酔いでしょ?ロクさん?』
無線の相手は1番艦の桜井のようだった。

「訓練校時代、船酔いの訓練なんてなかった。しかも俺らは陸戦専門だぞ・・・」
『まあ向こうに着いたら詳しく聞かせてください。』
「まあ生きてたらな・・・」
ロクは1番艦との無線を切ると、再びハンドル式のマンホールに入ろうと、ハンドルの蓋を開け始めた。気分が悪いのか蒼い顔をしていた。その様子を弘士と佐々木艦長は見ていた。
「どうされましたか?」
「寝る・・・というか横になります・・・」
「下のベットを使ってください。」
「ジャガーで寝るよ。車内ならまだ落ち着く。司令?いいですよね?」
「許可する。」

P6指令室。我妻の無線に4、5名が集まっていた。バズーやキーンの姿もある。

「・・・・・了解です。皆に伝います。」
「ロクはどうしたって？」
「無事だそうです。現在、レヴィア２番艦にいるそうです。」
「時間になっても戻らないから心配して損した。」
「殺して死ぬタイプでもあるまい。」
「間もなくＰ７に到着します。」

ポリス地下３階ジプシー専用医務室。未だ患者は増えスタッフは休むことも出来ない状態だった。そんな中、桑田が治療の手伝い中、松井が入って来る。
「ロクさんが？」
「無事よ。今、Ｐ７らしい。」
「良かった・・・」
松井と桑田の会話を見て、関根が怒り始めた。
「ねぇ！口より手を動かして！まだ患者は来るわよ！」
「す、すいません。」

ポリス地下６階ポリス専用医療室。隔離されたカプセルのようなベットで聖が横になっている。それをガラス越しに見つめるダブル。聖の周りには３人の女性スタッフが動いていた。ダブルの横に女医が近づく。
「知り合い？」
「いえ・・・」
「美人だもんね。ダブルにしてはもったいないわね。」
「包帯してるのに、よく分かりますね？どうして分かるんですか？」
「うふっ。ほら、否定しないじゃない！」
「はぁ・・・」

P7指令室。久弥、弘士、楠本、曽根、桜井などのメインのメンバーが顔を揃えている。
「では、私はこのまま1番艦で戻ります。」
「海兵なら任せてくれ。そう言えばロクは?」
久弥はロクが居ないのに気づき辺りを捜した。すると弘士に変って桜井が口を開く。
「さっきから居ないんですよ。」
「いつもの病気ですよ。」
「ああ、あれな。」
「連れて帰ります。奴は海では使い物になりません。」
「ジャガーは1番に積み替えてますから。」
「ご苦労!では桜井、曽根戻るぞ。」
「了解。」

弘士、桜井、曽根は久弥に別れを言うと指令室を出て行った。
「これからが大変ですね。」
「ジプシャンの本隊を呼ぶことになるかもしれない。早速だが海兵らの訓練だ。早くレヴィアが動かなければ・・・」
「急ぎ訓練に入ります。」

レヴィア1番艦ブリッチ。
「すぐ出るぞ。ロクはこっちに乗り換えたか?」
「先程、乗船してましたから、大丈夫です。」
「まあ、今回一番のお手柄ですから・・・」
「湾入口の機雷も除去した・・・本部攻撃の可能性も出てきたわけだな。」

曽根の口調も明らかに軽かった。
「ジプシャンがこのまま引き下がるかな?」
「頭のいい指揮官なら・・・そう思いますが。何か問題でも?」
「タケシという男・・・そうは思えん。」
「今回の攻撃で死んでればよいのですが・・・」
「まあいい、急速潜行!レヴィアＰ６に向け発進!」
「了解!急速潜行!レヴィアＰ６に向かいます。」

ロクはレヴィア１番艦の格納庫に積んであるジャガーの運転席で寝転んでいた。
「気持ち悪りぃー」

その２　四十秒の賭け

ジプシャン軍本部。寛子の座る大きな部屋の前で、タケシが立たされていた。立たされていたのはタケシだけではない。嶋、石森、早坂やその後ろにはヒデや丸田の姿もある。寛子の強張った表情に対し、皆目線を下げていた。

「説明してもらおう・・・タケシ？」
「ああ、Ｐ６の反撃にあった。２基地を落とされた。」
「報告では、１台のＳＣの襲撃とも書いてるが？」
「湾から攻撃された。」
「湾だと！？なぜあそこが・・・突破されたのか？」
「わからねぇ・・・しかし、湾内に敵戦艦がいたのは間違いない。」
「前線基地が２つ、ＳＣが１５０台以上、死者３００弱。過去ない失態だ。お前が弟でなければ、その首切り落としていただろう！」
「必ずこの借りは返す・・・」
「その必要はない！お前は我が軍の主力となるＳＣ本隊を壊滅状態まで追い込んだ。これ以上Ｐ６への関与は許さん！即刻、残存部隊を引き連れＰ５の前線に戻れ！」
「しかし、これは俺の責任だ！」
「反論の余地はない。これは命令だ！」

寛子の口調は強いものに変わっていた。
「わかった！・・・行くぞ！」
タケシは嶋、石森を引き連れその部屋を出て行く。

「犬飼！この本部を引き払う。これより本部は鹿島台とする。海岸の基地を失ってはここは丸裸だ。それと参謀らを集めろ。Ｐ６の対策を再度練り直す。やはりただの平地の基地ではなさそうだな。」

「噂では、あの街は神の街だと・・・」
「迷信だ。我が父も、それを恐れていた。しかし所詮は人が作った物。Ｐ３以来負けなしの我軍に不可能ではない！」
「はっ！」
「それを考えると、本来ならタケシは銃殺だぞ・・・ここに来て我軍が敗れるとは・・・」

Ｐ６の指令室。本来桑田と松井が本来座る席に、ダブル、キーン、バズーの姿があった。ダブルは必死でパソコンを操作している。
「まだかよ、ダブル？」
「なんせ、奴らと形式が違うんでな・・・」
「あー、俺寝るわ。昨日徹夜だったし。」
「そうしろ。そうしろ。」

バズーは、ダブルの作業に興味すら沸かないのか指令室を出て行った。
「うーん。結構暗号で守られてる。なにか鍵のようなキーワードがいるな・・・」
「お前を持っても駄目か？」
ダブル「他は、簡単なんだ。そういうのに限ってどうでもいい情報だし・・・しかし、この重要なファイルだけはどうしても開けない・・・２、３日・・・いや４、５日くれないか？」
「俺に言うより、司令が帰ったら伝えろよ。じゃあ俺も寝るわ。今日当番お前だよな？。」

「俺がタケシならすぐ反撃する・・・」
「まさか？タケシ隊は壊滅した。反撃など無理だ。」
「夜明けに襲撃された時の奴の攻撃・・・死をも恐れない姿勢・・・そんな奴が、おめおめと引き下がるはずがない。奴はここに最初に

来た時、たった3台で来たんだぞ。」
「考えすぎだ。今朝の攻撃で下手したら死んでる。」
「そうなってくれてればいいがな・・・」

その頃レヴィア1番艦は、P6近くの海岸に停泊していた。船の左側の格納扉が開く。格納庫からはロクのジャガーが飛び出して来る。
「ふう・・・やっと・・・陸だ・・・」

そこへ、弘士と曽根、桜井が格納庫から浜に降りてくる。桜井が停止したジャガーの運転席側の窓を叩いた。
「大丈夫でした、ロクさん?」
「ジャガーに乗ってれば少しは平気かな。」
「では我々はここで・・・」
「ありがとう。今回の作戦はお前のおかげだ。」
「とんでもないです!ロクさん勇気です!」
「またな!桜井!みんなにも宜しく伝えてくれ。」
「はい!ロクさんも!」

ジャガーは弘士と曽根を乗せると、真っ直ぐP6に向かって走り出した。出てすぐロクは無線を飛ばした。
「こちら黒豹。P6、聞こえるか?」
『こちらP6の我妻。黒豹どうぞ。』
「まもなく到着する。東ゲート開けてくれ。」
『まだ3キロもあるじゃないですか?』
「なら40秒だな・・・」
『ふ、不可能でしょう・・・』

ロクは我妻の言葉を聞くと、ジャガーを停車した。後部座席の弘

士と曽根が無線に口を挟む。
「あーあ、言ってしまったか？我妻よ。ロクにその言葉は禁句だろ？」
「おい、ロクどうした？」
「我妻？不可能かどうか賭けてみるか？」
『な、なにを・・・ですか？』
「なら俺が勝ったら、お前がジャガーの洗車。俺が負けたら、お前の夜勤変わってやるよ。」
「お前らな・・・」

呆れる曽根を横に、無線の我妻から勝気な返事が返ってくる。
『う、受けますよ！』
「よし！ここから、東ゲート前な。司令？カウントお願いします。」
「よかろう！許可する。」

弘士の言葉に、慌てたのは曽根だった。
「し、司令？馬鹿言わないで下さい。わ、私は降ります。あ、歩いて帰りますよ・・・」

「５秒前！」
「えっ！？」
「曽根参謀！シートベルトを！」
「だ、だからロク・・・お、俺降りるって！」
「２・・１・・・ＧＯ！」

ロクはギアをトップに入れアクセルを踏み込んだ。曽根は後ろのシートに頭をぶつけるほどの加速でスタートした。車はぐんぐん加速しスピードメーターはわずか５秒過ぎで３００を超えていた。
「ロク！お前な・・・」
「参謀！？たまにはＳＣ乗りの気持ちも体験しないと。いい司令官

になれないですよ。」

「なりたくなーい！」

「そうですか？この辺は小石一つないから平気ですよ。」

「ふふふっ・・・」

慌てる後部座席の曽根に対し、弘士は助手席で眉一つ変えなかった。すると視界にはＰ６の東ゲートが見え始めた。曽根は外を見ることが出来ず、ロクの座る座席を両手で抱え込んだ。

「そろそろ止まりますが、二人ともシートベルトしてますよね？」

「ああ。」

「おお。」

曽根は顔を上げ正面に目を向けると、閉まったままの東ゲートがぐんぐん迫ってくる。スピードメーターは４３０近くを指していた。

「ブ、ブレーキだ！ロ、ロク！」

「まだまだ。」

「お、おい！」

ロクはギアを変えると、ハンドルを切りながらブレーキを掛けた。５、６回車体はスピンしただろうか？ジャガーはゲート前１メートル前で停まっていた。

「司令！？タイムは！？」

「ああ・・・３９秒フラット。ロクだな。」

「よし！」

『あちゃースゲー！』

無線の我妻も驚くしかなかった。ロクはバックミラーで後部座席の曽根の様子を伺う。

「どうですか？曽根参謀？４００キロの世界？」

「ロク・・・漏らしちゃった・・・」
「はあ?車内でですか?」
「く、くくっ・・・」
弘士は苦笑いし、ロクが慌てて後ろを振り返ると曽根は真っ赤な顔をして下半身を隠していた。やがて、Ｐ６の東ゲートが開き始めた。ジャガーはポリス内に入っていく。

その3　孤児、ロク・・・

Ｐ６東軍事ブロックあるエレベーター前。ジャガーを降りた弘士と曽根の姿があった。

「それなら、わかりませんよ。」

車を降りていた、弘士と曽根にロクは車内から答えた。よく見ると曽根は、ロクが愛用している穴だらけのポンチョを羽織っていた。

「わ、悪いな・・・」

「では、司令、参謀。先に技師長の所に寄って行くんで！」

「ああ、後でこっちにも寄れ。」

「失礼します。」

ロクは街の中心部に向かって走り出した。既に日は真上を指していた。自分の車庫のエレベーターは昨日の襲撃で破壊されていたため、住居街を抜け別なエレベーターシャフトに向かった。街は昼時なのか、道には人が溢れている。しかし昨日の奇襲のせいか、以前のような賑わいではない。人々の顔も暗く、まるで光を失ったようだ。海で採れた魚の干物も建物の窓から出している所が少なく、ポリスが臨時で配給している食事の列に人が並ぶ姿が多く見られていた。

「子供が多いな・・・」

ロクは車内で一人そう呟くと、昨日の奇襲で親のない孤児が増えたのを感じた。ロクの目には、その子供らの姿しか見えなかった・・・

ロクも孤児（みなしご）だった・・・

年齢も分からない。まだ立てないときなので1歳未満と考えられる。ロクはパトロール中の久弥に拾われた。既に両親はジプシャンに殺され死後2、3日は経っていた。その中、ロクは母親に抱きかかえられ、大きな声をあげ泣いていたらしい。まるで“生きたい”と久弥の耳には聞こえたらしい。

久弥はすぐにロクをP6に連れて帰った。今の身体検査と違い、当時の身体検査はやたらと注射で済ます。だから、この頃のロクの腕は内出血でいつも真紫色だったと言われる。ロクは5歳まで孤児施設で育った。幼く拾われた彼に名前すらない。唯一親しかった母親代わりはポリスの女スタッフがいたが、それすらも引き離され、ロクはプロジェクトソルジャーの訓練校に入れさせられた。

ここで初めて、ダブル、キーン、バズーと出会う。3桁の数字で呼ばれる毎日。7歳で初陣、と言っても後ろで兵のアシストをするものだった。10歳まで訓練校にいたロクたちは、僅か5年で殺人兵器と呼ばれる集団になっていた。訓練は実戦に近く、亡くなる仲間も多かった。ロクはその死んでいった仲間たちの拳銃を握り始めた。彼らの遺志を引き継ぐのを目的に・・・そして6つの銃を持った時、初めて仲間から“ロク”と呼ばれていた・・・

ロクは車窓の風景と、自分の過去を照らし合わせていた。懐かしくもあり、せつなくもあり。

ジプシャン軍本部。表の駐車場部分には、40台程のSCが並んでいる。嶋、石森やヒデ、丸田の仲間の姿も見える。

「タケシ様、ミサイル隊は積載完了。」

タケシは別な所を遠く見ていた。タケシの目線の先には、長さ3

０メートル程の巨大な大筒がまさに巨大なクレーンによって何かに取り付けられようとしていた。
「あれが新兵器の大筒か・・・姉貴の船にでも取り付けようとしているのか？」
「タケシ様・・・？」
「お、おっ！・・・これより古川基地に向かい新型のサンドシップを受け取り、北のＰ５に向かう。いいな！？」

タケシが５０人程の兵に熱弁の中、ヒデと丸田は小声で話し始める。
「おい？・・・本当に嶋の言うことを信じるのか？」
「あれはどう見ても、跳ねられた感じじゃない。」
「どうみても強姦されてる・・・」
「その後、跳ねられたか・・・？」
「それにしても、やったのは松島の兵か、タケシの隊の奴だろ？」
「そうだな・・・やはりあいつだよな？」
ヒデはタケシの横にいる嶋を睨み付けた。
「こいつだ・・・」

Ｐ６地下３階整備室。ロクと高橋がジャガーを挟んで話している。
「そうか・・・飛んだか？」
「はい！」
「車体は装甲を厚くした分とガトリングバルカンを積んだ分、１トンに近い。それで３０メートルか・・・」
「加速だけではないと思います。」
「分かった。更にパワーを増そう！」
「２メートル・・・」
「ん？」
「２メートル・・・垂直に真上に飛べないでしょうか？」

「垂直に2メートル？うーん・・・」
「無理な話ですか？」
「エアーブースターがもう一つはいるな。出来なくはないが、こいつの後部座席を潰すならばな。」
「ちょっと早急にやってもらえませんか？」
「ああ、お望みとあらば・・・丁度キーンの仕事もなくなったしな。」
「キーンがどうしたんですか？」

ロクの顔がいつになく真剣になった。
「あいつ、話してないのか？ＳＣから降りるそうだ。」
「バイク・・・ですか？」
「慣れないＳＣより、奴らしいよ。」
「そうですが、今まで何度も生死を彷徨ってんのに。」
「奴らもさ、何だかんだお前を目標にしてんだよ。」
「目標？」
「お前に追いつきたいって言うか・・・なんかうまく言えないけどさ。自分の居場所を捜してんだよ。みんな。」
「はあ・・・」
「親父さんがよく言ってるよ。お前は彷徨えば彷徨うほど輝きを増して帰ってくるって。みんな、昔のお前を待ってんだよ。だからお前以上に輝こうって頑張ってんじゃないか？」
「待たれる程の器量なんてないですけどね。」
「そうだな。ただの屁タレなのにな？あっそうだ、お前桑田に何かしなかったか？」
「へっ？」

ロクの顔が珍しく崩れた。高橋はそんなロクの表情を見逃さなかった。
「図星か！？なつみに手出したら、わしが許さんぞ！規則を破った

ら監獄行きだからな！」
「プロジェクトソルジャー規則第7条：ソルジャーは恋愛を禁止をする。これを破る者は禁固と処する。」
「わかってんなら、女を突き放すのも愛だろ！？今は戦争中だ。いいなロク？」
「技師長・・・」

「ガキの頃から、お前ら二人を知ってんだ！互いの気持ちは俺が一番知ってるよ。ここは我慢するんだ。残念ながら今は敵とドンパチしてんだぞ！もっと現実を・・・」
「分かってます。分かってますから。」
そう言うとロクは整備室から出て行こうとする。

「お前・・・全然分かってないよ・・・」

その4　118・・・キーン

「キーンなら、今この4つ向こうの整備室にいる。昔のバイクを引っ張りだしてたぜ。」

整備室を出て行くロクの後ろに高橋は声を掛けた。立ち止まり高橋の方を振り向くロク。

「風神隊はどうなるのですか?」

「それは、弘士にでも聞いてくれ。俺の担当外だ。」

「わかりました、行ってみます。」

ロクは整備室を出て行く。ロクは長い廊下を歩きながらキーンと出会った日を思い出していた。

P6の住居街で、ある路地裏。ロクが5歳の頃、ロクは年上のポリスの男の子3人に囲まれていた。

「こいつ、訓練所の奴だぜ!」

「親もいない奴らが集まるとこだろ?」

「ジプシーのくせに、俺たちよりいい物食ってんだろ!?」

「街をうろうろするな!汚ねぇー!」

なぜ絡まれたかは、ロクには分かっていた。

『自分はジプシーだから・・・』

しかも、当時体の弱かったロクに、年上の3人に敵うはずがなかった。ロクはいつものように理由も無く殴られ続ける。涙と血が入り混じり、記憶さえ飛ぶ事もある。表の路地からは大人のジプシーがこの喧嘩を見ているが誰も止めようとするものはいなかった。

その時だった。3人の内の1人が奇声を上げて倒れこんだ。ロクは微かに開いた目で空を見上げた。そこには制服に『118』の数字が書かれた同じ訓練校の生徒が、自分の身長の2倍はあろう棒を持ってロクの側に突っ立っていた。

「118（イチイチハチ）？」

ポリスの残り2人の子供らも、その118のゼッケンを付けた彼が自分よりも幼い奴だと分かるとすぐ反撃に出た。しかしその『118』の彼はその2人も棒で一瞬に殴り倒した。泣きながらその場を立ち去る3人。『118』は初めてロクの顔を見ると手を差し伸べる。

「逃げるぞ！」

「うん・・・」

2人は街の路地という路地を走り回った。すると人通りのない街の外れに2来て2人は座り込んだ。

「ポリスの子を殴ったな。もう帰れないな・・・おれは118（イチイチハチ）だ。お前は何番だ？」

「俺は412（ヨンイチニー）」

それが今のロクとキーンとの出会いであった。ロク5歳、キーン6歳。

「ふふふ・・・」

ロクはその頃の事を思い出し、つい笑ってしまった。すると進行方向に明かりの点いた整備室が見えて来る。ロクが近寄ると、中からバイクのエンジン音が聞こえてきた。

「おお？やってる、やってる！」

幼い2人は日が暮れても、訓練校には戻らなかった。
「逃げようぜ。ここ。」
「どうやって?」
「あれだよ。」

１１８は、ポリスの高い外壁を指差した。
「あそこに登って飛び降りるんだ!」
「無理だよ。飛び降りたら死んじゃうよ!」
「大丈夫だぜ。下は砂だし。」

笑ったキーンの前歯がなかった。そして、2人は決行した。だが結果は壁を登ることも出来ずに、監視兵に捕まった。二人はすぐ訓練校へと逆戻り。重い体罰程度で済んだ。それからの2人は恐いものは無かった。ロクにとっても、キーンにとっても初めての仲間が出来たのだ。二人は身長より長い棒をどこからか見つけて来ては、街を歩くようになる。2人のポリスの子供たちへの復讐の日々が始まる。

「戻った!」
「おう、ロク!」
キーンの顔は油汚れが目立ち、額から汗が流れていた。
「またこいつに乗るのか?」
ロクはキーンが整備していた、3輪バイクを見た。
「俺はＳＣが不得手だ。どうせならこいつで戦場で死にたい。」
「死にたいって・・・」

死を覚悟したキーンの言葉にロクは何も言えなかった。
「仲間として言わせてくれ。」
「何だ?」

「こいつに乗って、何度命を落とすとこだったんだ?それでも乗るのか?」
「譲れないな・・・俺らしい生き方ってのは・・・例えお前の意見でもな。」
「キーン・・・」

訓練校の二人が長い棒を振り回し、ポリスの悪ガキたちを懲らしめているという事が、秘かに街の噂になっていた。当時ポリスからの差別が表面化したＰ６のジプシーたちは、ジプシーの子がポリスの子をいじめ返す事が微かな楽しみでもあり、希望でもあったのだ。しかし、そんな2人の武勇伝は長く続かない。

ポリスの子らは更に上の子を使って、この2人に復讐してきたのだ。１０歳くらいの子供であろう、既に勝負は体格差でついていた。
「お前らか!?弟を棒で殴ってるのは!?」

さすがの2人も１０人相手では分が悪かった・・・
2人は顔を腫らしては訓練校に戻った。
「絶対強くなってやる・・・」
「強くなれば誰も馬鹿にしない!」

それが2人の合言葉だった・・・それから2人はポリスの子供らの標的に変わった。来る日も来る日もポリスの子供らにいじめに遭う2人。そこにまた仲間が加わったのはそれからすぐの事だった。ポリスの子供と2人の間には子供の中でもずば抜けてデカい男が立ち塞がる。訓練校のゼッケンは『２２１』。後のバズーだ。バズーはこの頃から、ポリスの子供らをいじめていた、訓練校イチのガキ大将だった。
『２２１』のゼッケンは１０人程のポリスの子らを素手で殴り付け、

あっという間に退散させてしまった。

「お前ら弱いのに・・・よく2人で頑張ったな！」

ロク5歳、キーン6歳、バズー7歳。

「おい。お前らここかよ。」

バズーが整備室に入って来たのはそれからだった。

「ただいま。」

「ロク！無事か！？」

「ただで死ぬ奴か？なあロク？」

「違いないな！ふふふ・・・」

「あれ、ダブルは？」

「今、解読中でな、手詰まっている。」

「解けそうなのか？」

「あいつならやってくれるだろう。取り柄はあれくらいだし・・・」

「女に手を出すのを忘れてないか？」

「違いない！ははは っ！」

「・・・」

3人の何気ない会話中、ロクは再びあの頃を思い出していた。

その5　221・・・バズー

街に3人の悪ガキが現れた。長い棒を持った者が2人、大きな体の奴が1人。3人はジプシーがいじめられてると聞くと、授業をそっち退けで訓練校を飛び出して行った。仲間は1人、また1人と増えていく。ロクにとっては毎日が楽しかった。しかし、7歳を過ぎたバズーや仲間たちは、戦場に借り出される事が多く、会えない日も出てきた。

そんな時だった。仲間の1人が戦場で戦死したのだ。その日、その者を墓地に埋めた。みんな泣いていた。墓地で泣いていたみんなを教官の高森は殴り付けた。

「プロジェクトソルジャーは人の前で泣くな！」

幼い隊員たちは、悲しみと痛さで更に大声で泣いた。ロクはこの日、初めて死というものを知った。

「それで奴ら、基地の中で吹っ飛ばしてやったんだ！」

「こいつ、基地内でバズーカ使いやがるし・・・」

「キーンだって、銃済むとこを剣で切りまくるし・・・ダブル呆れてたぜ！」

「そうか、たまに使わないとな。刀も錆びる。そうだろロク？」

「あ、ああ・・・そうだな・・・」

「ロク？疲れてんだろ？早く休めよ。」

「報告があるなら、俺らがしておくよ。」

「ああ、頼む・・・」

ロクは1人整備室を後にする。重い足取りで長い廊下を自分の部屋へと歩き出して行く。

バズーはその頃、みんなのリーダーだった。バズーは3歳の頃に、両親を亡くしP6に連れて来られた。当時はマサと自分で呼んでたらしい。体が大きい事もあり、格闘技を中心に訓練を叩きこまれた。また、拳銃よりも、大型の武器を早くから持たされ訓練に励んでいた。バズーカを持つことが多かった彼を人は“バズー”と呼ばれるようになる。

「なんか南ブロックにジプシーの女の子をいじめる奴がいるらしい。」

「行こう！」

「長い棒だ！」

「ブッ飛ばしてやる。」

そう言うと、10名程が集まり街になだれ込む。そんな毎日だったが、ある日、ロクはバズーからある言葉を聞く。

「今日、戦場で敵の兵を殺した！」

仲間たちは、どう殺したのか、なんの武器を使ったのかとバズーに詰め寄った。バズーは自慢げに皆の前で話す。しかしロクだけはその話に耳を貸さなかった。

「そんな事をしたら、またこっちが殺されるじゃないか？」

幼いロクが叫んだ。

「敵を殺して、何が悪いんだ！」

「221は、048の仇を取ったんだぞ！」

「仲間を殺した奴だ！死んで当然だ！」

反発する仲間たち。ロクを殴り付ける者までいた。

「やめろ！」

止めたのはバズーだった。

「こいつの言う通りかもしれない・・・」

バズーの言葉で誰もがロクを殴るのをやめていた。ロクの言葉を重く受け止めたのはバズーだった。それからバズーはロクの言葉をよく聞くようになる。小さいながら戦士たちは少しづつ大きくなっていった。しかしその成長と共に、幼い兵たちも一人一人と戦場に散っていく。

ロクは自分の部屋に戻って来た。部屋に入ると脇、腰、足と拳銃を抜き取り、壁のフック部分に掛け始めた。よく見ると、壁には50近い拳銃が綺麗に並べられて飾られていた。ロクはその開いている隙間に6丁の拳銃を一丁づつ置き始めた。

「また、生きて帰っちまった・・・」

ロクはひとり呟くと、上段の左から拳銃をひとつひとつ触り始めた。

「ブルース・・・残(ザン)・・・拓・・・駒ちゃん・・・レッド・・・バル・・・ゴンちゃん・・・マッド・・・空(そら)・・・マウス・・・」

ロクは声を震えながら拳銃を触り、その手は2段目に移った。一人一人の名を呼ぶたびに、その者らの顔がオーバーラップする。

「ハチ・・・みっちゃん・・・ジョグ・・・北斗・・・クック・・・ゾノ・・・DC・・・χ（カイ）・・・P子・・・コウタ・・・」

ロクの手は3段目に移る。蘇って来る戦士たちの顔は笑顔ばかりだ。

「コロ・・・おーくん・・・アゲハ・・・ナナミ・・・Q(キュウ)・・・ベガ・・・シュート・・・我流・・・風ちゃん・・・瑠璃・・・」

ロクの手は4段目になった。女の子の笑顔も出てくる。
「飛鳥・・・オロチ・・・ロック・・・ニコ・・・マグナム・・・アックス・・・キッド・・・ラッシュ・・・ブイ・・・モスキート・・・」

ロクは最後の5段目になっていた。蘇ってくる彼らの映像は死に際にロクに拳銃を手渡す所だった。
「ライ・・・マッハ・・・キキ・・・ホーリー・・・ドルフィン・・・イブ・・・」

最後の6名はロクの腕の中で死んで行った者らだった。ロクは一人泣いていた。頭を壁に激しく強く打ち付けロクは号泣した・・・何度も何度も壁を叩き、ロクは声にならない雄叫びを上げた。
そこにあったのは、ロクがいたプロジェクトソルジャー3期生の50名中、亡き46名の拳銃がそこにあった。

P5指令室。死龍と司令が話し合っている。
「では、明日は予定通りで・・・」
「まあ2日ばかりだ、こっちは任せろ。」
「はい・・・」
「6年ぶりか？P6は？」
「そうですね。」
「里帰り気分で、もう帰らないなんて言うなよ死龍？」
「そんな薄情な女じゃありませんよ。」
「そうだな。それと新兵器はまだ完成してないが、あとは向こうで組み立ててくれるだろう。」
「今回は500名のジプシーですよ・・・」
「3台に分けて搭乗させるか？」

「虹の三角はそんな柔じゃないですよ。荷物と一緒というのは、反発を買いそうですけど・・・」
「わかった。後はこちらでする。明日早いのだろ?今日はゆっくり休んでくれ。」
「了解!」

P6指令室。弘士が指令席に腰掛けている。他の兵も皆、笑顔で談笑している。
「ロクは休んだのか?」
「こちらに寄るんですか?夜から仲間内で祝勝会でもしようかと・・・なあ我妻?」
「そうですよ。呼んで来ましょうか?」
「報告は明日でもいいんだが・・・」
「俺、呼んで来ますよ。こっちも煮詰まってしまって。」
ダブルはいじっていたパソコンの席を離れて、会話に参加してきた。
「寝ているんだったら起こすなよ。今回、一番の功労者だ。好きなだけ寝かしてやれ。」

「わかりました。」
ダブルは指令室を出て行く。

P6地下3階ジプシー専用医務室。
「松井!桑田!もういいわよ。一度休みなさい。もう怪我人も来ないようだし・・・」

「はい。」
「ロク戻ってるんでしょ?どうせまたSCをボロボロにしてるんだ

から、桑田はそっちに回りなさい。」
「はい！失礼します！」

Ｐ６地下３階整備室。キーンとバズーがバイクを挟んで暗い顔をしていた。
「ロク、何か言ってたか？バイクの事？」
「降りろとよ・・・バイクから・・・」
「だろうな。それで？」
「俺にはこれしかないって・・・そう言った。」
「それはそれで、お前らしいな。」
「どうも・・・」

キーンは珍しく照れ笑いを見せた。
「あいつ、昔からさ・・・」
「ん？」
「めちゃくちゃだけど、言うことはまともだったよな？仲間の事を思う際は・・・」
「ああ。」
「それでも、自分を貫くか？」
「そうだな。こればっかりはな・・・」
「そうか・・・」
「そうだ。」
「あんま、ロクを悲しませんなよ。」
「おお。」
「俺は、バイクに乗るお前が好きだけどな。じゃあ、俺行くわ。」
「ああ。」
バズーも整備室を出て行く。バイクを見つめるキーン。

Ｐ６は既に夕方近くになっていた。ロクはいつもの南ブロックの塀の上に登っていた。

その6　667・・・ダブル

ロクは、日没までまだ時間がある西側の山脈を塀の上から見ていた。すると真下の住居街を２０名程の若い兵が、訓練で走らせているのを見かける。兵といっても、８歳から１０歳くらいの幼い兵士だった。その兵の後ろにバイクに乗った５０歳くらいの男が、若い兵らに声を上げて走らせていた。

「教官!!高森教官!!」

その男はロクの声に気づいたのか、塀の上を見上げる。

「おお、ロクか!?みんな止まれ!!ここで休憩だ!!」

男は若い兵らに走るのを止めさせ、自らバイクを降りた。すると男は足を引き摺りながらロクのいた塀の下まで詰め寄った。

「ロク、少しいいか?」

「はぁ・・・?」

高森はロクを横に若い兵の前にいた。兵らは体育座りをし皆ロクを見ている。４、５人の女子も混ざっている。

「みんな!こいつが誰か知ってるか?第６ポリス偵察隊隊長でポリスのエースドライバー、疾風のロクだ!」

「おおっ!!」

２０名の兵がどよめいた。ロクは高森の耳に小声で囁く。

「いつの頃ですか・・・?」

「そうか?まあいい・・・いいか!こいつはポリス最速のＳＣ乗りだ!こいつの前を走る奴は誰もいないんだぞ!」

「おおっー!!」

若い訓練兵たちがまたどよめく。兵たちの目は澄んで輝いていた。
すると、最前列にいた男の子が口を開いた。
「教官!?この方は四天王なんですか?」

皆の目線がロクに注目する。ロクは困った顔をしてこう答えた。
「違います!!」
「ええっー!!」

落胆する兵たち。
「あの、高森教官・・・」
ロクは困った顔をしながら高森に助けを求めた。
「おいおい、あんまり先輩をいじめんなよ。こいつはSCだけじゃないんだ・・・そうだなロク?」
「は、はい。ちなみに住居内での発砲は始末書ですので、駄目ですよ教官。」
「よ、よくわかったな!いいか!このロクは第6ポリス一番の拳銃の腕前で・・・」
「・・・おおーっ!!」
「・・・」
自慢げな高森に対して、ロクは常時困った顔をしていた。

高森とロクは塀に背もたれ地べたに座っていた。20名程の兵たちは各々近くで遊んでいる。高森はヨレヨレの制帽を脱ぎ右手で握り締めていた。髪の毛は薄く。横と後ろに少し残っている程度であった。
「そうか・・・キキらが死んでもう3年が経つか?」
「はい・・・」
「御用聞きのキキとは、あの頃よく言ったもんだな。」

「はあ・・・」
「支援専門屋にしてはよくやったな。ダブルの恋人だったと死んでから聞かされた・・・俺のいい生徒だった。」
「１５ですよ・・・付き合うとかでは・・・」
「まあ、そうだろうけどさ。ダブルはちゃんと立ち直ったじゃないか？」
「まあ変な意味で、“覚醒”しましたけどね。」
「そう言えば昨日の夜、作戦があったろ？」
「訓練校にも召集があったのですか？」
「おやじさんの４番艦に２０名程乗せたばい。」
「１０歳以下の子供まで・・・」
「昔からの事だろ？死んでいくのは幼い兵ばかりだ。」
「今でも死んで行った奴らの顔ばかり思い浮かびます。」
「３期では、もうお前ら４人しか残ってないんだな。ここでは一番古株だな。」
「はあ・・・」
「２期生は全滅・・・１期は手榴だけか・・・」
「ヒデがいますよ。」
「そんな奴もいたな。サンドウルフのヒデ・・・」

高森は薄い髪の毛の頭を掻き始めた。
「先日から、装甲車でここを襲っているのはヒデです。」
「まだ生きていたとは・・・お前がＳＣでトップを取ってなかったら、間違いなくここのエースになっていたはずだ。それで奴は？」
「また、ここに来るでしょう。」
「あの事件がなければ、いい先輩だったろうにな。」
「はぁ・・・」
「いいな？お前もダブルみたいに吹っ切れよ。」
「はい！」
「じゃあ俺は行くわ。よしみんな！訓練所まで走るぞ！」

ロクはあの頃を思い出していた。そう、まさに今ここに座っていた所だった。ある男の子が高森教官に殴られていた。男の子のゼッケンは「６６７」。まだ5歳か6歳くらいであろうか。他の兵らはその光景を黙って見ているだけだった。ロク、キーン、バズーの姿もある。

「足が痛くて走れないだと!お前、戦場で同じセリフぬかしてみろ!!」

その子は高森教官に殴られると、地べたに倒れこんだ。

「いいか!お前は今日は、夕飯抜きだからな!!」

皆が走って帰り始めたが、男の子だけはその場に置いて行かれた。すると一人の兵がその子の元へ引き返してくる。ロクだ。ロクは涙を流す男の子に声を掛けてきた。

「戻るぞ!」

「うん・・・」

ロクは男の子に肩を貸すと、2人で歩き始めた。男の子は後のダブル。ロク6歳。ダブル6歳の頃だった。

ロクの部屋をノックするダブル。

「いない?なんだあいつ・・・どこ行ってんだよ。」

ロクの部屋は鍵が掛かっておらず、ダブルはロクの部屋に入ってみる。するとダブルは壁に並べられた５０近い拳銃を発見する。そして5段目にある1丁の銃を見つけた。

「キキの拳銃か・・・」

その拳銃は、握り手の部分に「ＫＩＫＩ」と書いてある。ダブル自身もすっかり忘れていた様子だった。ダブルはその銃に近づき、

その銃を手にした。
「キキ・・・」

ダブルは目立つ兵ではなかった。いつも一人で機械を弄っては分解し、バラバラに出来る所まで細かく壊してしまっていた。体が小さいせいか、喧嘩も苦手。皆がポリスの子らと喧嘩に行く際も、一人クラスに残っていた。そんなダブルにも理解者はいた。後のキキ、御用聞きのキキだった。キキとダブルは同い年、互いに少し遅れて訓練校に入ったせいか、２人でいる事が多かった。　ロクと同い年のせいか、ダブルが喧嘩を仕掛けるのはロクや同い年の子ばかりだった。しかしダブルの能力が開花したのは１０歳を過ぎた頃だった。ロクと同じくＳＣの運転では、いつしか当時トップだったロクに並んでいたのだ。

ダブルの開花はそれだけではない。当時、規則を破って最初に彼女を作ったのもダブルと言われている。その彼女がキキであった。

しかし、キキは3年前戦場で死んだ。一番の激戦と言われるＰ４とジプシャンの戦い。Ｐ６から応援に来ていたのは、３期生では既に5名しか残ってなかった、ロク、キーン、バズー、ダブル、キキの5人。後方支援中のキキを爆撃弾が襲ったのはその時だった。両足を失ったキキは、ロクの腕に抱きかかえられ、持っていた2丁の銃を、それぞれロクとダブルに託した。そして眠るようにロクの腕で息を引き取った。ダブルはキキの死をロクの口から聞いた。

「お前がいて！なんでキキを守れなかった！？」
ダブルは込み上げる怒りをロクにぶつけるしかなかった。

その7　結ばれるふたり

ロクとダブルは、その日から心の溝が出来てしまった。ダブルは、キキの拳銃をロクも受け継いだ事も、そしてキキの最後をロクが看取った事がどうしても許せなかった。二人はそれを境に、ポリス軍の中でいいライバルとなり互いに昇りつめた。ダブルはキキの死を乗り越えることが出来たのだが、ロクだけはキキを守れなかった罪悪感を背負ってしまう。それがきっかけで同い年ながら、ダブルには頭が上がらない事もしばしば出てきてしまう。

「あっ、日が沈む！」

ロクは再び塀を急ぎ登り始めた。日はちょうど、奥陸山脈に沈む所だった。塀の上に息を切らせて上がったロクは、その沈む太陽をマジマジとみていた。雲ひとつない空が一番輝く時間だった。ロクはこの時間も好きで、ちょくちょくここに来てしまう。そこへ、やはり塀を登って来たのであろう、桑田が息を切らしながらやって来る。

「やっぱここだ！」

「お、おう・・・」

ロクは今朝の桑田とのキスの件もあり、やや照れていた。桑田もそんなロクを見て急に恥ずかしくなり、下を向き始める。

「みんな捜してましたよ。なんか祝勝会をやるって。」

「そんな気分じゃないな。俺抜きでしてくれ。」

「自分で言って下さい。それと・・・記録更新です！」

「なんだ？」

「技師長が数えました。カストリーの被弾数です。前回の７４７発を超えて、８３６発だそうです。」

「あらら・・・嫌な記録だな？」
「じゃあ、そう伝えますよ。」
「頼む。」
「あっ！遅くなりました。お帰りなさい。」
「ああ、ちゃんと戻ったぜ・・・」
「・・・」
「・・・」
見詰め合う２人。日は完全に沈み、空の色が少しづつ変わり始めていた。

「なあ、桑田？」
「はい？」
「俺たちは、あと何回あんな夕焼けを見て死んでいくんだろうな・・・」
「はぁい？考えたこともないです・・・」
「１５じゃあ、まだわかんないか？」
「すぐ子供扱いを・・・ちなみにもうすぐ１６です！じゃあ１８なら分かるんですか？」

「うーん、どうかな？」
「いつまでここにいるんですか？最近ここで寝てるって噂ですよ。」
「はは・・・たまにな・・・日が完全に沈んだら戻るよ。」
「無線を持って下さい！下に戻りますよ・・・」
「ああ・・・」

Ｐ６指令室。弘士がキーンと話し合っている。
「バイクは３０台。人員はキーン任せる。残った者らはダブルの風神隊にでも入れよう。」

「ありがとうございます。」
「お前らは、言い出したら聞かないからな。他の3人は何か言ってたか？」
「ロクが反対はしました・・・それから・・・」
「俺は反対をしませんよ。」

2人の会話に口を挟んできたのは、突然指令室に入って来たのはダブルだった。
「ダブル・・・」
「キーンが決めた事だ・・・文句言えないぜ。」
「てっきり反対かと・・・」
「意外とあの無茶なキーンの攻撃・・・俺は好きだから。ああ、司令。ロクの野郎、部屋にもいませんよ。」
「じゃあ、いつものとこだよ。さっき桑田に伝言を頼んだんだが・・・」
「祝勝会？もう始まってんだろ？」
「ヤバイ！バズーに全部食われる。」
「先に行きますよ、司令？」
「ああ。」

地下5階のポリス専用食堂。既に50名近い兵が談笑しながら食事をしている。バズーは一人食べ物を頬張っていた。
「あいつら遅いなー。」

その頃、タケシの残存部隊は、夕暮れに古川基地に到着していた。ジプシャン軍の最も西にあるこの基地は、鉱山が近い事もあり、造船設備を多く備えている基地でもある。またP5とP6を結ぶポリス道を、牽制するために設けられたという説もあった。ジプシャン

軍としては、本部に次ぐ規模の大きさでたくさんのジプシーが集う基地でもあり、ポリスは容易に近づけない基地でもあった。基地はＰ６のように大きな塀に囲まれ、３つ程の造船ドックを中心にいくつかの建物があった。タケシらはＳＣを降りると基地内に入ろうとしていた。

「ここにも酒場はある。今夜も付き合えヒデ？」

「はあ・・・」

「Ｐ５を落とせばまたここに戻る・・・しばらくの辛抱だ。いいな？」

「お供させていただきます！」

宿舎のような施設に入るヒデと丸田。仲間も次々と施設に入って来る。

「そんなに辛かったのかＰ６は？」

「ああ、死ぬのは幼い兵ばかりだった・・・」

「その頃、Ｐ６の四天王って誰なんだ？」

「その頃の四天王って、誰も顔知らないんだ。ひょっとしたら四天王なんて、架空の人物かもしれないって思っていたくらいだ。」

「まさか・・・」

「俺たちが訓練校に居た際も、噂しか聞かなかったからな。そんな会った事もない奴に憧れた自分も嫌になった。」

「その時に、あいつが現れた・・・」

「あいつは“疾風のロク”と呼ばれ、ＳＣを乗り始めてわずか１年で誰も奴の前を走れなかった・・・銃の腕はトップ・・・誰もが奴が四天王になると噂し始めていた。当時トップだった同期に、手榴（しゅりゅう）という女がいたが、そいつですら奴を認めたんだ。」

「女？いい女か？」

「まあな・・・美しすぎるほどいい女だった。」

「ほぉー。お前が言うくらいなら、本物だな。」
「死んだと思っていた・・・しかし生きてるとは・・・」
ヒデは、窓から見える月を見ていた。

外は既に暗くなっていた。ロクはまだ塀の上にいた。夜になったせいか気温も下がり、ロクはポンチョに包まりながら座っていた。風景を見ているわけでもなく、ただ前を見て座っていたのだった。たまに吹く風が寒いのであろう、ロクはポンチョを首にしっかりと掛け直すと、再び身を屈めた。
「まだここに居たんですか?日が沈んだら戻るって言ったじゃないですか?」

そこに上がって来たのは桑田だった。桑田はメカニックの途中なのか薄手の肩なしの作業着を着て塀の上に上がって来た。
「ごめん。考え事していた。」
「司令が、祝勝会に出ろって・・・今度は命令ですよ。」

ロクはようやく顔を上げると桑田の顔を見た。
「なんだそんな格好で・・・流行病になるぞ。」
「ロクさんこそ・・・こんな所でよく寝れますね?」
「祝勝会は出ない。人が大勢死んだのに・・・何を祝えと言うんだ?」
「まあそう言わず・・・曽根参謀なんか、戦前の貴重な酒に酔い潰れてますよ。」
「お前も気が利かないな?ここに来るなら、口に入れる物でも持って来てくれ。」
「ロクさんのメカニックでも、そこまでメンテナンスしませんよーだ。」
「冷たい奴だな・・・メカニックなら、俺の心の傷も治してくれよ。

」

「あら？珍しく落ち込んでたんですか？」

桑田はロクの顔を覗き込んだ。

「昔の事を思い出していた・・・たくさん死んだ仲間の事を・・・」

「そうですか・・・ロクさんも落ち込むのか・・・」

すると二人は、暫く無言になった。

「うーん・・・でも夜のここもいいですね。星も月も綺麗で・・・でも寒い・・・」

桑田はロクに背中を向け夜空の星を見ていた。ロクはその姿を見ると立ち上がり自分の着ていたポンチョを桑田を巻き込みながら包み込んだ。

「あっ・・・」

桑田はロクの突然の行為に声をあげた。やがてロクの手は桑田を後ろから抱き締めていた。顔を後ろから近寄せ更に桑田の体をきつく抱き寄せていた。桑田もロクの太い腕に自分の腕を絡めた。頭を仰け反りロクの体に体重を掛けると2人はいつの間にか唇を合わせていく。

弘士は塀の下で2人の行為を見上げていた。やがて2人の姿がゆっくり下がり始めると見えなくなり、弘士はその場を立ち去った。

ロクと桑田は塀の影になった所で座っていた。大きなロクのポンチョに2人で包まり、向き合いながら抱き合っている。ロクと桑田は再び唇を重ね合わせた。

その8　月の恋人たち

ロクと桑田は互いに身を寄せ合い、ポンチョの下で抱き合っていた。時折、顔を見つめあうとキスをし、またキツく抱き締める。寒いせいか互いの肌の温もりを確かめるように深く抱き合っていた。

月は欠け、東の空から真上に昇り始めようとしている。警戒用のライトがロクと桑田の塀にも時折当たるが、二人は塀の手摺りの影に腰掛けているので、ギリギリで照明は当たらない。ロクはいつものように優しい顔で、桑田を見つめていた。桑田も照れながらロクの澄んだ瞳を見つめる。互いの瞳には大きな月が映し出されている。

またキスをする二人。互いに言葉は発しないが、二人は互いにこの時間を待っていたかもしれない。桑田はいつの間にか、ロクに全てを捧げていた。桑田は昔からの夢を、今叶えたのだ。

Ｐ６地下３階ポリス専用医療室。ダブルが聖のベットの脇にいた。聖は変わらず顔に包帯をしてベットに座っている。

「調子はどうだ?だいぶ良くなったな。」

「さあね。でもそれなりに動けるようだけど・・・顔の火傷だけよ痛いのは。」

「早速なんだが、流産した子供の父親を知りたい。」

「ポリスがする仕事にしては、変な仕事ね?」

「緊急なんだ。」

「前まで仲間だった、ヒデという男よ。恐らく・・・」

「ヒデ?・・・恐らくでは困る。」

「酔ってたから・・・」

「あれ～酔うと、抱かれちゃうわけ・・・?」

ダブルは聖の顔を覗き込んだ。少し赤くなる聖。
「そ、そんな事ないわよ！！」
「ならそいつは、今どこに居る？」
「タケシと一緒じゃない。」
「わかった・・・」
「ねえ？なぜ私だけ、ここに？」
「心配するな。」
「外の空気が吸いたい。ここ息が詰まりそう・・・こんな地下で育ったわけじゃないのよ。」
「今は無理だ。安静にするように言われなかったか？」
「少しでいい。」
「今、担当に聞いてやる。駄目なら諦めるんだぞ？」
「うん。」

その頃、南ブロック住居街の外れの共同墓地では、大場の遺体を埋葬していた。夜につき、所々照明が付けられていた。直美、勝也、雨音の3人が棺を荒野に埋め終わっていた。3人には、山口ともう一人の兵が護衛にあたっていた。埋葬には5人だけで、他の者は誰もいなかった。

「大場さん。よろしいでしょうか？」
「・・・うん。ありがとうございました・・・勝也、雨音。お父さんにお別れよ・・・」

雨音と勝也は墓地に向かって合掌した。直美は無表情のまま涙が流れ、二人を抱きかかえるように連れて帰った。本来、埋葬は昼に済ますのだが護衛されてる身の上、直美もその事情は把握していた。密葬というにはあまりにも悲しい葬儀であった。

Ｐ６東ブロック軍事施設。あるエレベーター前、車椅子に座った顔に包帯を巻いた聖と、その車椅子を支えるダブルの姿があった。
「随分、あの女医に顔が効くのね？」
「あ？ああ・・・１０分だけだぞ？」
「あっ、月が出てる！」

月は、真上に来ていた。聖は夜空を見て、うれしそうな声をあげた。しかし、すぐ悲鳴を上げた。
「顔痛たた・・・」
「大丈夫か？無理するなよ？」
「やっぱ、外の空気好き！しかも夜の・・・」
「好きなのか？月・・・」
「うん。知ってる？死んだらみんなあの月に行くって？」
「初めて聞いたな・・・死んだら荒野に埋められると思っていたから。」
「好きな人を一度亡くしてるでしょ？じゃなきゃそんなセリフ出ないわね。」
「昔な・・・」
「やっぱり・・・」
「なんでも分かるんだな。」
「人の知恵よ。」
「そうか。そういう所はロクに似ているなぁ。」
「あいつに？そうなの？」
「人の気持ちが分かり過ぎるっていうか、変に周りに気を使いすぎるっていうか、変に勘がいいっていうか。」
「あいつがねぇ・・・」

ロクの話が出た瞬間、聖の機嫌が変った。

「あんたがロクに惹かれたのもそこだろ？」
「そうかもしんない。でも恐い部分もあったよ。こいつを敵にしちゃいけない、みたいな防衛本能みたいなのが・・・」
「そういう意味では、奴は敵から雷獣と呼ばれてんのも分かるよ。」
「あの、不敵な笑顔・・・思い出しただけでゾッとする。確かに戦場では別人かもね。」
「かもな・・・」

ダブルは再度空の月を見上げた。
「でも、彼女いるんでしょ？あいつ？」
「俺らは、恋愛は御法度でねぇ。」
「あら？ならなぜ私に優しくするのかしら？」
「さあね。俺はいい女にはみんな優しいんだよ。」
「ありがと。」
「褒めてないし・・・」
「うふふ・・・」
「さあ、戻るぞ。」
「ありがとね。感謝するわ。」
２人は再びエレベーターに乗り込んだ。

翌日の朝、空は雲ひとつなく快晴。風はなく、朝方の冷え込みも緩い程度だった。まだ暗く、日はまだ昇ってはいない。ロクは、東の空の明るさと寒さで目を覚ました。ロクと桑田は塀の上で一晩過ごしてしまったのだ。
「寒っ・・・」

気が付くと、桑田は自分のポンチョの中で裸でいた。ロクは桑田の顔を撫でると桑田も起きた。
「あ、おはよう。」

「あらら、や、やばい・・・寝てしまった。」
「う、うん・・・」
「先に服着ろ！」
「まだ、こうしていたい・・・」
「アホ！明るくなってきた！誰かに見られるぞ。」
「見られてもいいもん！」
桑田は再び、ロクに抱きついた。

「お、おい・・・」
困ったロクに対して、桑田は今まで見せた事のない笑顔でロクに抱き付いた。

P5指令室。死龍と司令、ボブ、山中の姿があった。
「では、行ってきます。ボブ？司令室もそうだけど、後の事頼んだわよ。」
「任せてください。で？護衛はどうしますか？」
「私は要らないけど、どう？山中艦長？」
「いくらバイク隊とはいえ、途中までは必要かと・・・」
「なら敵の前線までお願いするわね。」
「了解しました。」

ボブは敬礼で、死龍に答える。
「司令？他に伝言は？」
「特にない。無事届けてくれよ。」
「はい！山中艦長、私はジプシーを乗せる2番機に乗るわ。いいわね？」
「了解です。」
「さあ、また“奇跡”を起こすわよ！」
死龍は、笑顔で皆に檄を飛ばす。

その9　虹の三角

ポリスが設立されて２０年余。未だ現役で走るポリスの大型輸送車を人は“虹の三角”と呼んだ。正式名称は当初あったが、今では誰も覚えていない。三角柱をそのまま横にし、その底に大型のタイヤを１０８つ付けた輸送車。車と呼ぶには既に想定外の大きさで、長さは７０メートルにも及ぶ。今のポリスの技術からすると、かなりクラッシックで単純な造りでもあった。６０度に傾いた側面は太陽光を取り入れやすく、左右の側面前面にソーラーパネルを貼り付けている。大型の箱物にしてはエアーブースターを取り付けているのでもなく、タイヤ走行という走りはまさに“奇跡”だった。

虹の三角の由来だが、虹を見ることは奇跡と言われたこの時代。まだ一度も大破したことがなく、奇跡の三角・・・そして虹の三角と呼ばれるようになった。主にＰ５からは鉱山や武器を運ぶ事が多く、またＰ６からは引き上げた沈没船の鉄くずや食料を運ぶ事が多い。当初、ポリスには同じタイプが５機存在したが、２機は現役を退き、今は既に３機のみとなっていた。

Ｐ５のほぼ中心部分に巨大なコンテナが３棟。所々被弾したのか、大なり小なりの穴がいくつか開いている。棟の中には、虹の三角が１機、今まさに発進しようとしていた。前面の三角の一番上の部分にガラス窓があり、どうやらここがコクピットになっている。その窓の下には『２』のマーキングがされていた。その２のマーキングの下が左右に開いていて、５メートル程の階段を設置したトラックが２台、虹の三角に繋がっている。そのトラックの階段をたくさんのジプシーたちが登って虹の三角に入って行く。コクピットの更に

上には、三角の峰の部分に１０メートルの間隔に渡って機銃が設置されている。

２番機虹の三角コクピット。約１０メートル平方の室内のコクピットには死龍と５名ほどの兵が座っていた。死龍が慌しく激を飛ばした。

「ジプシーの乗り込みはどうだ！？」

「８割ってとこです。」

「急がせろ！他はもう出れるぞ。乗員のジプシーはなるべく虹の中央に集中させろよ！上部を使っても構わない。この艦だけは守らるからな！」

死龍の言葉で室内の兵は緊張する。

隣の棟には１番機がスタンバイしている。コクピットには山中艦長が座っている。

「鉱山物の積み込み終了。」

「２番機は？」

「もう少し時間が掛かる様子です。」

「５００名だからな。３番機は？」

「部品は全て積み込み完了です。」

「今回は２番機が優先だからな。３番機の富久にも伝えろ。前線突破までは２番機を中心に逆Ｖ字態勢を取る。」

Ｐ５北ゲート前。ボブを中心に２０台のＳＣが揃っていた。ボブは２０名の兵を前にして声を上げた。

「いいか！２番機だけは死んでも守るからな！」

ジプシャン軍Ｐ５前線基地指令室。大広が部下の報告を受けていた。
「妙な動きですか？」
「はい。恐らく定期便かと・・・」
「タケシのミサイルＳＣ本隊がいないのを、敵に察知されましたね？」
「は、はい・・・」
「バイク隊の意地、総帥に見せるチャンスですね。タケシへの意地もあります。総力を上げて阻止して下さい。」

Ｐ５北ゲート前。ボブのＳＣ隊が集中している所へ、３機の虹の三角が到着する。ボブはひとりＳＣに乗り込む。ボブのＳＣは、車高の低い流星系、真っ赤なボディ、車両の先頭部分には接近戦用なのか鋭い突起物が付けられていた。ボブはハンドルのボタンを押すと、指令室に無線を飛ばした。
「こちらボブ。北ゲート開けてください。」
『了解！』
『指令室、待って！ボブもよ！』

突然割って死龍からの無線が入る。
「ど、どうされましたか？死龍さん？」
『今日の死神は本気のようよ・・・』

虹の三角２番機コクピット。死龍が窓から外を見ている。虹の三角のコクピットの高さはおよそ１５メートル。Ｐ５の塀の高さよりも高い位置にある。死龍はコクピットから塀の外の様子を伺っていた。

「死神が牙を剥いたわね？ボブ、犬死したくなかったら出るな！２０台のＳＣで何とかなる数ではない。」

死龍が覗いた先は、“荒野の死神”こと大広率いるジプシャン軍バイク隊が、数百台も待ち構えていた。

『援護なしで行くのですか？』

「２０台とは言え惜しい数だ。出れば半分はやられる。」

『しかし死龍さん・・・』

「私を誰だと思っている。ん？」

『無理ですよ。援護なしでは？』

「命令よ。ボブはゲート開閉時の北のゲートを守って。なぁに虹の三角にしたらバイクなど蟻同様！いいわね？」

『死龍さん！？』

「まだ若いんだから、死に急ぐことはないわ。山中艦長？富久艦長？聞いてたわよね？護衛なしで行くわよ。」

『り、了解・・・』

「山中艦長？指揮官がそんな返事でどうすんのよ！？」

『了解！』

「なら行くわよ！指令室ゲート開けて！・・・ったく！男って生き物は・・・どいつも、こいつもね。」

北ゲートがゆっくりと左右に開き始めた。それに合わせ最前前線にいたジプシャン軍のバイク隊も前に出てくる。北ゲートの塀の上の機銃砲が一斉にバイク隊を狙い撃ち始めた。ゲートは完全に開き、山中が乗る１番機よりＰ５の外に出て行く。

ジプシャン軍のバイク隊は各々手に手榴弾を手にしている。最前線にいたバイク隊は一斉に虹の三角１番機を襲い始めた。

Ｐ５の指令室。司令が北ゲートの虹の三角出撃を見ていた。
「死ぬなよ。死龍・・・・・・」
モニターを見ている司令、やがて他のオペに大声を掛けた。
「何してる機銃!?全然援護になってないぞ!」

虹の三角１番機コクピット。１番機はバイク隊の手榴弾攻撃を受けていた。
「１４、２９タイヤ大破!」
「右側面被弾!」
「機銃何してる!よく狙え!」
虹の三角の上部から放つ機銃は、数多いバイク隊に手古摺っていた。

ボブは北ゲートの中からその様子を見ていた。
「ボブさん!?いいんですか?」
「大丈夫だ。死龍さんだから・・・」
ボブは自分が参戦出来ないのを悔やんでいた。ボブは遠ざかる３機の虹の三角を見つめていた。拳を自分のＳＣにぶつけた。そして北のゲートは完全に閉まって行く。

北ゲートからは3機の虹の三角が飛び出してきた。その様子をやや離れた小高い丘から見下ろしている大広。
「やつら護衛なしで出てきましたね?いいですか!?一機たりともＰ６へは行かさないで下さい。」
大広は自らヘルメットを被り、２輪のバイクにまたがった。するとバイクのエンジンを掛けると、ハンドルのスロットルを吹かし始めた。

「タケシのいない今、戦果を上げなければ・・・」
大広は一人笑っていた。
「片側のタイヤを狙い横転させて下さい！」

その１０　死龍ＶＳ死神

ジプシャン軍バイク隊の攻撃を受けていたのは、１番機だけではなかった。死龍の乗る２番機、富久の乗る３番機も同じ攻撃を受けていた。

「敵は右からだけの攻撃です！」
「８、１２、２４タイヤ大破！」
「機銃！何してる！」
「敵の数が多すぎます！機銃間に合わず・・・」
「くそっ！ここを頼む。」
死龍は意を決して席を立った。
「死龍さん、どちらへ？」
「上の機銃にまわる！」

死龍がコクピットの後部の通路へと移動しようとした瞬間だった。大きな爆音がし、コクピットは大きく揺れた。立っていたものは転倒し、座っていたものでさえ、椅子から擦り落ちた。死龍もコクピットの後ろで大きく転倒した。
「うっ・・・」

死龍は顔から床に叩きつけられていた。オペレーターの一人が死龍に近づく。
「だ、大丈夫ですか！？死龍さん！？誰か救護兵を！」
死龍は口から血を流していた。慌てて口に手を当てる死龍。
「私に構うな！口の中を切っただけだ！ここを頼むぞ。」
「は、はい！」

オペはすぐ持ち場に戻る。死龍は一人立ち上がると、再び咳き込

んだ。手には大量の血が付いていた。血は軍服にも付着し、慌てて拭き取った。死龍は急に蒼い顔になり、呼吸も乱れた。
「こんな時に・・・」
口元の血を吹き去った死龍は、上部の機銃座席へと急ぎ歩き始めた。

死龍は機銃を扱う若い兵の所に着く。
「何してる!?変われ!」
死龍は自ら機銃のハンドルを握ると、右方向からのバイクを銃撃し始めた。
「まるで蟻だな・・・ふふふ、この位の数で丁度いい感じか?」
死龍の機銃は的確にバイク隊を銃撃していく。

大広のバイク本隊。大広のもとにある部下が報告に来ていた。
「死龍がですか?」
「はい。2番機の機銃に居るのを確認!仮面の女です。」
「間違いないのですね?あの女が出てくるとは・・・何を運んでいるのですか?2番機に攻撃を集中させなさい。」
「了解!」
「死龍がわざわざ・・・妙ですね?左右の隊の全てを2番に当てて下さい!」

2番機の死龍の機銃。バイク隊の攻撃は2番機に集中していた。
「なぜだ?2番機だけに?1番と3番の間に入れろ!」
死龍は機銃を撃ちながら無線を飛ばした。
「ジプシーだけは無事届けなければ・・・もうすぐ前線を突破する各機耐えろよ!」

『死龍さん！左より死神の本隊接近！大群です！』
「死神め！！自ら来たか・・・」
そこに現れたのが大広率いるバイク隊本隊の８０台。

大広は自らバイクに乗り3機の虹の三角に近づく。
「死龍の首・・・頂きますよ。右に攻撃を集中して下さい！奴を横転させます。これでようやく寛子様に四天王の首、届けれますね。」

２番機の死龍の機銃。死龍はまだ遠い死神の隊へ機銃を撃ち込む。
死龍の機銃で４、５台のバイクが転倒撃破される。
「死神が・・・右からの攻撃だけを仕掛けてくる！ダメージは？」
『タイヤ１４本！まだまだ走れます！』
「上等だ！前線は突破したはずだ？」
『こちら山中！死神は我々が引き付けます。死龍さんの２番機は、先にここを脱出して下さい。』
「しかし・・・」
『人命には変えられません！』
「わ、わかった・・・３番機、我に続け！」

山中の１番機が大広のバイク隊の前に出てくる。
「我々を行かせないつもりですか？美しき友情ですね？しかしここは通させません・・・」
大広隊は１番機を無視して逃げる２番機、３番機を追いかけて行く。
「四天王が逃げの姿勢ですか？余程守りたいのですね？いいですか？２番だけに攻撃を集中して下さい！」

大広隊は総力を上げ、２番機に攻撃を集中した。
「右にダメージを追ってます。右に集中して下さい。」

２番機の格納庫にいたジプシーたちは、激しい爆音に肩を寄せ合い震えていた。
「死神が・・・」
死龍も必死で機銃で応戦する。
『敵は右に攻撃を集中しつつ・・・』
「機銃応戦が追いつけない・・・」
『４８、５２大破！これ以上は右に傾きます！』
『１０キロ速度を落とします！』
「走れ！止まるな！一歩でもＰ６に近づくわよ！」

大広のバイク。
「だいぶ傾きましたね。もう少しです！所詮、体のでかい鯨ですね？群がる鮫には勝てんでしょう？」

虹の三角２番機コクピット。既に走行すら不能となってきた室内には敗戦ムードが漂っていた。
「死龍さん！このままＰ５に引き返しましょう？」
『敵のど真ん中に戻るのか？駄目だ！』
「ではＰ５に援軍を！？」
『もう少しだ！走れ！！』

死龍の機銃。
「白兵戦の準備だ！最悪、３番機に乗り換える！」

『この戦場でですか？無理です！』
「死にたくなかったらやるんだ！」
『り、了解！』
無線を切る死龍。　ひとり無心で機銃で応戦する死龍。
「ここで死ねるか！？奴と約束したんだ・・・こんな所で死ねるか！」

死龍はＰ６からＰ５へ移動の日を思い出していた。死龍は当時まだ手榴（しゅりゅう）。左目を中心に左側頭部に掛けてまだ包帯をしていた。街は東から日が昇って来たばかりだった。死龍の前には１機の虹の三角が停車している。まさにその停車中の虹の三角に死龍は乗り込もうとしていた。
「どうして四天王にこだわる！？」

声を掛けたのはまだ少年のロクだった。ロクは右腕を三角巾で吊っている状態で、死龍を見送りに来ていた。死龍はロクの方に振り返る。
「こだわるわよ。四天王よ！ガキの頃からの目標なの！訓練生になってから誰もが目指した地位でしょ？」
死龍はやや強い口調でロクに答えた。
「俺のせいか？」

死龍は無言で首を横に振った。
「Ｐ５の四天王の枠が出来た。ただそれだけよ。ここに居たってあんたら３期生にいつか抜かれるし・・・ロクのせいじゃない。」
「仲間じゃないか？」
「その言葉が一番辛いわね・・・Ｐ５も仲間よ・・・だから行くの。」

2人の言葉をさえぎるように虹の三角のエンジンが始動する。
「行くわよ。ロク。」
「生きろよ手榴。他の1期生の分まで！」
「生きるわ。当たり前でしょ。私を誰だと思ってるの？」
「手榴・・・」
死龍はロクに笑顔で答えた。死龍は虹の三角に乗車する。ロクは寂しい顔で死龍を見送っていた。

「奴に生きると言った！ここ死ねるか！」
その時、再び巨大な爆音が響いた。死龍の乗る虹の三角は大きく揺れ、傾きも更に大きくなる。
『速度落とします！このままだと転倒します！』
『敵本隊接近！』
『正面を塞ぐようです！このままでは・・・』
「これまでか！？1と3番機に援護を！白兵戦だ！ジプシーにも銃を渡せ！」

2番機は速度を落とし、停止寸前だった。戦場で補給車の停止はほぼ死を意味する。死龍やクルーの皆は分かっていた。そこに1番機と3番機が2番機を挟むように停止してきた。
「こうなったら一人でも多くを道連れにしてやる。第5ポリスの意地見せろ！！」

3機は完全に荒野の真ん中で停止してしまった。
「これでも昔は手榴弾の手榴と呼ばれてたのよ・・・」
死龍は胸の手榴弾を外した。

その１１　孤立無援

「白兵戦だ！皆、銃を取れ！！」
死龍は自らライフルを持ち、虹の三角の格納庫を走り叫んでいた。
すると一人のオペを見つけると彼の上着を鷲掴んだ。
「速やかにジプシーを他の艦に移動させろ！」

その頃、大広のバイク隊は3機の虹の三角を包囲していた。
「止めましたね・・・銃撃戦を準備させて下さい。」

死龍は2番機のコクピットに戻って居た。
「包囲されます。このままでは脱出すら出来なくなります。」
「3番機だけでも・・・」
死龍はコクピットの無線を取る。
「3番機富久艦長！聞こえるか！？包囲される前に3番機だけでも脱出しろ！」
『我々だけ逃げる訳には行きません。我々も残ります。』
「武器だけでもＰ６に渡したい！行くんだ！」
『残らせて下さい！』
「生きるんだ。ここで全滅する訳にはいかない！」
『死龍さん・・・』
「行けぇ！」
死龍の命令で3番機は、その場を離れようと再び走り出した。

その様子を見ていた、大広のバイク隊。
「逃がしはしませんよ・・・」

包囲しようとしていたバイク隊のある部隊が3番機を襲う。

死龍が乗る2番機コクピット。
「死神め・・・容赦なしか・・・」
たくさんの手榴弾を受け被弾する3番機。
「これまでか・・・」

すると3番機を襲っていたバイク隊が乱れた。何台かは機銃を浴び転倒する。
「ん！何だ！？」
するとコクピットのレーダー員が叫ぶ。
「援軍です。Ｐ６・・・・・黒豹！」
「なにっ！・・・ロクか！？」

そこに現れたのが、砂煙を巻き上げ猛スピードで虹の三角に近づく、ロクのジャガーカストリーだった。ロクのジャガーは、即効で3番機の周りにいるバイク隊を蹴散らした。
「大広様！ら、雷獣です！」
「馬鹿な！なぜ、ここへ？」

「こちらＰ６黒豹！そこの指揮官は誰だ！？」
ロクはバルカンを撃ちながら無線を飛ばした。

2番機コクピット。
「黒豹より無線！」
「こっちに回して！」

死龍は急ぎ無線を掴んだ。
「こちらＰ５、虹の三角。死龍だ！」
『死龍か？なぜ補給艦に？』
「こっちのセリフよ！出迎えにしては早過ぎるわよ！」
『遠出のテスト走行だよ。』
「わざわざ３００キロも！？正気？」
『でも来て良かった。死龍にしては苦戦してるな？』
「馬鹿言わないで、これから反撃するのよ！」
『そうですか？それにしては派手にやられたな・・・』
するとロクの無線に女性の声が聞こえる。

『ロクさん！左ぃぃぃぃ！！』
「！？女？」
声の持ち主は桑田だった。
「あら、ロクさん？勤務中に女性とドライブかしら？」
『ち、違う！俺のメカニックだよ。』

ロクのジャガー。ロクはガトリングバルカンで大広のバイク隊を蹴散らす中、助手席に桑田がキャーキャー言いながら乗り込んでいる。
「ロクさん！？後ろ！！」
「分かってる。伏せてろ！気が散る！！」
「は、はい・・・」

２番機コクピット。
「白兵戦は中止！このままここを脱出する。動くぞ！」

大広のバイク隊は、雷獣出現に足並みが乱れた。
「何をしてるんです。相手は1台ですよ。」
「相手は方向を変えられるバルカンを撃ちまくり・・・」
「兵が弱腰になっていますね・・・退散します。」
「はぁ？しかし・・・こちらが優勢ですが・・・」
「ある程度のダメージは与えました。無理をする事はありませんね。被害が大きくなります。退散させます。」
「分かりました。」

２番機コクピット。
「敵が撤退して行きます。」
「死神め・・・」
「取り合えず、助かりました。」
「ロクが来なかったら・・・」
３機の虹の三角はその戦場を脱出して行く。

日は真上に来ていた。ここは旧岩手の盛岡市付近。Ｐ５から百キロ離れた所に３機の虹の三角が停車している。２番機のすぐそばには、ロクと死龍、山中、富久他４名が２番機を見つめていた。
「修理しなければならないか？」
「中央のタイヤを外側に移動するだけで走れますが、次同じ所を狙われたら、今度は修理どころでは済みません。」
あるメカニックスタッフがロクの質問に答えていた。
「予備のタイヤは？」
「ありますが、取り付ければ半日は掛かります。」
「Ｐ６まであと二百キロある。夕方までは着けないぞ。」
「これからの道程の方が厳しい。万全に行きたい。取り付けてくれ。」死龍が決定を下した。

「なぜ護衛のＳＣを付けなかった？」
「バイク隊ごときに必要はない。」
「死龍らしくないぞ。」
「Ｐ５のＳＣ隊は既に壊滅に近い。これ以上犠牲を出すのはＰ５壊滅を意味する。」
「そんな状況なのかＰ５は・・・」
ロクが死龍の説明を聞き落胆する。

「ロクさん。敵バイク隊２５０台です。死龍さんもボブの事を思い・・・」と山中が死龍をかばう。
「隊が全滅するとこだったんだぞ！」
「すまない・・・」
「まあ犠牲者が出なかっただけでも良かった。俺は前者を選ぶが・・・？」
「ロク！？」
「タイヤ移動する時間は？」
「３０分下さい。」
「でなければ、ジプシーを1と3に分けて走行する。ここは敵のど真ん中だ。半日も居れない。俺なら2番機を捨てていくぞ。どうする死龍！？」
「そ、そうね・・・ロクの言う通りね。ただ2番機は捨てない。ジプシーを移し変えましょう！最悪の事を想定して2番機は空で走らせるわ。いいわね、山中艦長？富久艦長？」
「はい。」
「でしたら、自分が2番機で指揮を取ります。」
「頼む。メカニック急いでタイヤを！」

ロクと死龍が2人だけになる。死龍の顔からこの日初めて笑顔がこぼれた。桑田はその2人の様子をジャガーの助手席から見ていた。
「あ、あの人、笑うんだ・・・元・恋人か・・・？」

その１２　元・恋人

死龍は少し怒っていた。そして、ジャガーに乗る桑田を横目で見た。死龍は小声でロクに語る。
「なぜ、彼女を？」
「連れて来たくはなかったけどな・・・」
「ここは戦場だぞ？」
「こんな状態とは思わなかった。」
「偶然か？」
「予定は知ってた。ポリス道を北に向かえば“虹”に当たると思っていた。」
「相変わらず、無謀ね・・・」
「彼女を戦場に連れてきたのは反省している。」

ロクはジャガーに乗っている桑田に目を移すと、ロクと死龍を不安そうに見ている桑田がいた。
「彼女をＰ６まで死龍の虹の三角に乗せてくれないか？」
「その選択は正しい！どうせ彼女の同行は許可取ってないでしょ？いいわよ。」
「了解！」
ロクは、ジャガーに近づくと車内の桑田に一言二言話すと、桑田はジャガーから出てきた。
「相変わらず・・・無謀な男ね、ロク・・・」

ジプシャン軍古川基地指令室。あるメカニックとタケシらが話をしている。
「エンジン系が・・・」
「言い訳はいい。」

「あと1時間欲しいとエンジニアより・・・」
「今日中にＰ５は無理のようだな?」
「すいません。タケシ様・・・」
「使えないメカニックどもだ。嶋!待機だ。」
「ははっ!」
「時間まで、また酒でも飲もうぞ。」

古川基地の大きなドックに巨大な船が待機している。核戦争前のどこぞやの国の戦艦が荒野に浮かんで見える。船の波の下になる部分がなく、それ以外は船の形のままだ。ジプシャン軍ではこのタイプの船をサンドシップと呼ぶ。船底にはポリスの技術を盗み、エアーブースターを取り付け荒野を移動するタイプである。主砲は改造してる物を積み、荒野を移動する様子はまさに砂漠の船であった。そのドックのそばにタケシと嶋がこの新型の船を見つめていた。

「この船さえあればＰ６など・・・」
「俺も同じ事を考えていた。」
「ならばタケシ様・・・」
「姉貴の事だ。それも想定内だろ?」
「と、言いますと?」
「ツヨシだよ。」
「あの馬鹿をどうしようと?」
「軍の中では、ツヨシを総帥に押す者もいる。」
「しかし、所詮は側室の子では?」
「俺も敵が多いという事だ・・・」
「まさか・・・」
「なぜ、Ｐ５に死神を付けたか?俺を監視するために他の幹部が送って来た。そう考えてもおかしくはない。」
「死神が・・・」

「まあ、松島の敗戦でツヨシ派が勢いを増して来るのは間違いないようだ。」

同基地内。ヒデと丸田が外をウロウロしていた。
「なぜあいつは死なないといけなかったんだ!!」
「ミキの事は、しょうがないじゃないか・・・それよりいつまでもここにいるんだ?」
「おい!?」

2人の先には、3台のランチャーストラトスが停車している。タケシらの姿はない。二人は何気にその3台に近づく。すると嶋のストラトスのボンネット部分を見てヒデは驚いた。
「こ、これは?」
何本かだが、栗色の長い髪の毛がSCに付着していたのだ。
「やはり・・・嶋じゃないのか?」
「確かにこの車両も黄色だ。それにこの髪の毛・・・」
ヒデは周りを確認すると、嶋のSCの前輪をいじり始めた。
「どうする気だ、ヒデ?」
「まあ見てろ・・・ミキの仇だ・・・」

虹の三角1番機ブリッチ。死龍が座っている指揮官席の横から桑田が入って来る。
「入ります!」
「桑田と言ったな?ロクから聞いた。間もなく出発する。そこの席にでも腰掛けてくれ。」
「はい・・・意外と高いですね?」
「初めてか?虹の三角は?」
「はい。メカニックとは言えSCが専門で、P6にこいつが入る際

も近寄らせてはくれません。」
「ロク専属と聞いた。ロクが認めるくらいだ。いい腕なんだろうな？」
「とんでもないです。高橋技師長が全てやっているようなもんで、私なんかはとてもとても・・・」
「高橋技師長・・・懐かしいな。昔はＰ６の優秀なドライバーだった。私の先輩でな。」
「技師長が先輩ですか？」

「各機出ます！」
「任せる！揺れるぞ。桑田座るんだ！」
「はい・・・死龍さんお怪我を？」
桑田は死龍の制服に血の痕があるのを確認する。虹の三角は再び走りだした。桑田はその揺れに慣れないのか慌てて席に座り始める。
「口の中を切った。大した怪我ではない。」
「そうですか・・・し、死龍さん？」
「どうした？」
「変な質問をしても、怒らないですか？」
「何だ？」

桑田は死龍の方に体を向け、他の兵に聞こえない程度の小声で話し始めた。
「皆から聞いたのですが、死龍さんはロクさんの元彼女なんですか？」
死龍はその質問に一瞬、面を喰らったがすぐ笑顔になりこう答えた。
「桑田？プロジェクトソルジャー第７条は？」
「は、はい・・・ソルジャーは恋愛、結婚を禁止する。これを守れなければ禁固。」
「そうだな。なぜそのような質問が出る？」

「す、すいません・・・」
「ロクとは・・・恋人だった・・・」
「えっ？」
「ふふふ・・・そんな時もあったのかな？いつも一緒だったからな。そう皆に言われても仕方ない。」
「そ、そうなんですか・・・」
「当時、私は1期生トップ。同じ1期の男たちは自分らの評価を恐れて、誰も私と組みたがらない・・・そんな時に私の相棒に手を上げたのは、唯一ロクひとりだった。」
「ロクさんが？」
「奴が１０歳の時だ。心配するな。私にとってロクは、弟みたいなもんだ。」
「弟・・・」

桑田は少し安堵の顔を見せる。
「２期生のトップ連中がある作戦で全滅してしまい、頼るのは3期トップの奴しかいなかったのが正直なとこだ。」
「Ｐ３の戦い・・・ですか？」
「そういえばロクの後ろにくっ付いて、ロクの背中でいつも泣いていた女の子がいたな？口癖は“ロクにぃのお嫁さんになる”って・・・」
「それ・・・私です・・・」
「ふふふ。だと思った。面影はある。」
「じゃあ、小さい頃に私は、Ｐ６で死龍さんに逢っていたんですか？」
「無理もない。私も昔はこんな仮面じゃなかったし・・・当時はみんな“数字”だったしな。」
「どうして死龍さん、仮面を被っているのですか？」
「失礼だな？これでもうら若き女性なんだが・・・」
「し、失礼しました・・・」

「まあいい、Ｐ５の男たちは私が恐くて、理由すら聞けないようだが・・・」
「すいません・・・」
「ロクから、何も聞いてないのか？」
「はい・・・」
「あいつ・・・そういうとこは、仲間思いだよな・・・」
「はあ・・・？」
「顔を撃たれたんだ。左目から入り、幸いにも脳には入らなかった。左耳を抜けた。なので左耳は聞こえない。当然ながらＳＣは降りた。片耳が聞こえないと、ＳＣは降ろされるんだ。それからは、戦略や教育専門でな。」
「そうなんですか・・・」

死龍は桑田の腰の拳銃を見つける。桑田の拳銃はやや小型でグリップの所が白い拳銃だった。
「ワイルドマーガレット？ロクの拳銃？お前が持っていたのか？」
「はい？指令室勤務になる時にロクさんから貰いました。ご存知ですか？」
「私を撃ったのは、まさにその銃だよ。」
「えっ？これですか？」
「その銃で、ロクに撃たれたのさ。」
「えっ！？」

その１３　野生のマーガレット

「手榴(しゅりゅう)？花の中で一番大地に根強い凛とした花って何って花だよ？」

「何よそれ？いつから花好きになったのよ？」

そこに居たのは１０才のロクと、１２才の手榴だった。２人はＳＣの格納庫にいた。

「技師長に作ってもらった銃なんだけど、握りの部分になんか絵を入れたくて・・・」

「分からないわ・・・今調べてみるね。」

「頼む！」

手榴は、急いでパソコンをいじり始めた。ロクは初めて自分だけの拳銃を作ってもらいご機嫌だった。子供用に反動を軽くし、重量も極力軽くしたオリジナルの拳銃・・・それが今の“ワイルドマーガレット”だった。

「色々検索したけど、マーガレットって花が大地に根強いらしいわよ・・・」

「マーガレット？いい名前だ・・・じゃあ野生のマーガレットから・・・“ワイルドマーガレット”・・・うん、そうしよう！それってどんな花？」

２人はＳＣの格納庫のパソコンを見つめていた。

「あいつ、昔から花が好きで拳銃に花の絵を入れてたのロクくらいだったよ。もう死滅して見れないからって・・・」

「それで、マーガレットを・・・初耳です。」

「いつの間にか、持たなくなったからもう使わないと思っていたけ

どね・・・」
「どうして!?・・・どうしてあいつは死龍さんを撃ったんですか!?」

桑田はコクピットで急に大声を上げた。桑田の声に何人かの兵が死龍と桑田を振り返った。
「それは・・・あいつが１２歳の時・・・」

ジプシャン軍古川基地。ヒデと丸田が装甲車を整備していた。
「ヒデ、嶋のストラトスになんの細工したんだよ?」
「次期にわかるよ。」
「そう言えば、さっきここの兵が噂していたんだが、今朝雷獣が北に向かったらしい。４００キロ出していたらしいからな。奴しかいないだろ?」
「もう関係ないだろ?」
「お前が撃ったんだろ?その雷獣を?」
「ああ、１４の時だったな・・・俺が逃げた時、追いかけて来たのがアイツと同期の手榴という女だった。」
「その辺までは聞いたな。」
「追ってきた手榴を人質に取り、奴と対峙した・・・」

ある荒野、ヒデが手榴を羽交い絞めにして拳銃を手榴のコメカミに付きつけていた。
「撃ちなさい!ロク!」
ヒデの目線の先には、拳銃を構えたロクが立っていた。
「銃を置け!６つ全部だ!」
「私は構わない!撃ちなさい!ロク!」

ロクはヒデの要求を聞くこともなく、更にヒデに狙いを付ける。
「ヒデ！ロクの腕は知ってるでしょ？」
「奴は撃てないさ。」
「無駄よ！投降しなさい！」
「嫌だな。」

ヒデは手榴の影に隠れ、人質を小刻みに揺らしロクの狙いを邪魔していた。
「銃を置け！ロク！俺は本気だ！」
「銃を捨てるな。任務を実行しなさい！」

ロクは迷っていた。銃を6つ捨てれば勝ち目はない。こう小刻みに動かれると手榴に当たってしまう。選択は2つに1つだった。ロクは手榴に目で合図を送る。そのロクの目線に手榴も気づいた。長年一緒に血まみれの戦場を渡り合った二人しか分からない無言の呼吸だった。手榴はヒデの一瞬の隙を突いて、銃を突きつけられた自分の顔を強引に振り切ろうとした。ロクはその手榴の行動に合わせヒデに銃を発射した。しかしヒデもこの行動を読んでいた。その瞬間に手榴の顔を力任せに引き戻し、手榴の顔を自分の盾にしたのだ。ロクの銃弾は手榴の左目辺りを貫通した。ヒデは撃たれた手榴を再び盾にしロクに隙を見せない。
「手榴！」

慌てたのはロクだった。手榴の様子を気になったのか、ヒデを狙った拳銃に隙が生まれる。
「仲間殺しが！」
慌てたのはヒデも同じだった。まさかロクが脱走くらいで銃を撃ってくるとは思わなかったからだ。ヒデは顔から血を流す手榴を羽交い絞めにしながら、ロクに銃口を向け発射した。銃弾はロクの胸辺りを貫通しロクは前のめりに荒野に倒れ込みピクリともしなかっ

た。

「気づいたら手榴も意識はなかった。俺は恐くなってその2人を置き去りにして逃げた。」
「それが今の雷獣か・・・しかし2人は生きてきた。」
「ああ、そうだ。」
「今となっては後悔するな。相手が雷獣なら・・・」
「それから流れるままに生きてきた。こうやってな。」

虹の三角1番機コクピット。3機の虹の三角は旧栗駒近辺を南に走っていた。P6までおよそ80キロ。
「ロクは鎖骨を撃たれていただけだった。」
「12歳の怪我って、この時の?」
「ロクは私を連れてP6に戻った。私は左目と左耳の聴覚を失っただけで済んだが・・・問題はロクの方だ。」
「拳銃?まさかその日から・・・」
「その通り。奴は人を狙えなくなったのだ。」
「そ、そんな・・・」
悲しみに上を向くことが出来ない桑田。桑田は悲しくなって涙をこぼし始めた。

ジプシャン軍古川基地指令室。
「なぜ報告しなかった!?」
「ただ雷獣かどうかは・・・?」
基地の幹部がタケシに詰め寄られていた。
「定期便の護衛かと思われます。」
「その定期便が間もなく岩出山を通るのか?」

「ポリス道では道も狭く、一番の難所かと・・・」
「嶋！うちの残存部隊でやるか？」
「もちろんです！雷獣なら兵も喜びます！」
「いい時間潰しが出来たじゃないか！」
「すぐに手配します！」
「誰を敵にしたのか・・・教えてやらないといけないな？雷獣！」

虹の三角１番機コクピット。
「死龍さん！敵です。南東約７キロ、ＳＣが３０台。こちらに向かっています。」
「伊豆沼基地か？全機戦闘配備！ロクは？」
『どうした？』ロクが無線で答える。
「敵のＳＣがこちらに向かっている。数３０！伊豆沼から出たと思われる。」
『あんな基地にＳＣがあったとは・・・今まで相手にもしてもらわなかったのにな。』

「なんで、今回はどこもこうなの？」
『ああ、死龍・・・言い忘れてた、昨日の朝にＰ６で浜田と手樽の２基地を落とした。』
「さ、先に言いなさい。これってそれが原因じゃない？」
『そうか？すまんすまん。』
「すまんって・・・」
『２０以上ある基地の、たかが前線基地２つで、ジプシャンは目くじら立てるかい？』
「眠ってた子を起こしたみたいね・・・」
『あらら・・・』
３機の虹の三角前に３０台のＳＣ部隊が立ち塞がった。

その１４　包囲網を突破せよ！

死龍はロクの無線に慌てた。
「桑田！？なぜ報告しなかった？」
「て、てっきり、ロクさんが報告したのかと・・・」
『死龍、桑田を責めるな。』ロクは無線から桑田をかばった。
「ったく！桑田！機銃くらいは出来るわね？」
「で、出来ます！」
「そこの階段を上がって！」
「は、はい！分かりました。」

桑田は後方の階段を駆け上がっていく。
「ロク？ジプシャンを本気で怒らせたようね？」
『そうか？』
「なにも、こんな日に・・・ならこっちもこっちよ！やるしかないようね！」
『すまん・・・』
「この先の古川基地の方を用心しないと・・・」
『まあ、ここは任せろ。』
「頼りにしてるわ。」
無線が切れると、死龍は立ち上がり、他のオペに声を上げた。
「私も機銃にまわる。ここを頼む！」

ロクのジャガー。
「ふう。バルカンの弾が3割ってとこか・・・ここは温存しますか？」
左右に展開してくる敵ＳＣ隊。ロクは運転席の窓ガラスを5センチ程開けると、拳銃を抜き出した。するとエアーブースターのスイ

ッチを入れる。
「さて・・・行きますか・・・」
ロクのジャガーは砂煙を巻き上げると敵のＳＣ隊に突っ込んでいく。ロクは車の窓から敵のＳＣのタイヤだけを狙い始めた。タイヤを撃たれバランスを崩し横転していくジープタイプの敵ＳＣ。しかし何台かは、後方の虹の三角に近づき、手榴弾攻撃を仕掛ける。
「くそ!させるか!」
ロクは虹の三角に近寄る敵ＳＣにガトリングバルカンを浴びせる。その中、１番機の機銃から、死龍と桑田が機銃で応戦しているのが見えた。
「やるな・・・桑田まで・・・しかし死龍の弾道?な、何だ?前の死龍とは別人じゃないか?まるで鬼・・・」
数ある機銃の中では、死龍の機銃だけが的確に敵ＳＣを破壊していく。
「まさか?これを覚醒と言うのか!?」

ジプシャン軍古川基地。タケシの残存部隊がゲート前に並べられてる。ヒデや丸田の顔もある。
「雷獣発見の報告があった。我々は、ポリス道の岩出山に出撃をする。死んで行った仲間たちの仇を取る。」
「おおっー!」
「作戦は、隊を分け前と後ろからの挟み撃ちにする。前方にミサイル隊、後方はストラトスを中心としたバギー隊だ。ミサイル隊は先回りしてポリス道の狭い箇所に地雷を埋める。古臭い作戦だがあのでかいのを沈ますには効果的だ。」

タケシの作戦途中に、ヒデと丸田は小声で話し始めた。
「補給艦だろ?あの馬鹿でかい船みたいのを地雷だけでやるのか?」
「確かに犠牲は少ないが・・・」

「タイヤだけで3メートルはある。手榴弾じゃなきゃ無理じゃないか?」
「ここにはここのルールがあるらしいな・・・」

そこに、二番隊隊長の早坂が二人に近寄る。
「これが手製の地雷だ。埋めてからここを解除だ。」
「こんなもんで、あの補給艦が止めれるんですか?」
「手榴弾で仕留めれるのは、外側だけだ。それでは中側のタイヤは破壊出来ない。」

「タケシさんの隊は長いんですか?」丸田が早坂に語りかける。
「俺かい?もう6年かな?ここは・・・?」
「年下の上司ってどうなんですか?」
「気にしてないさ。彼が一番、前総帥に似ているかな?だからこうやって、一緒に戦っている。まあ無茶なとこまでそっくりだよ。」
「ふーん・・・前総帥にねぇ。」

虹の三角1番機。桑田の機銃。死龍が後ろからやって来た。
「よく耐えた。粗方片付いた。もうコクピットに戻れ。」
「はい。」
「ロクもバルカンの弾を使い果たしたようだ。」
「12ミリ弾ってここに積んでないですか?」
「ないな。」
「弾が尽きたか・・・」
間もなく3機虹の三角はポリス道最大の難所、旧岩出山近辺に差し掛かろうとしていた。ここはジプシャン軍古川基地よりもっとも近く、道幅も狭い山道だった。

虹の三角1番機コクピット。
『俺が先にＰ６へ行き、援軍を頼む。』
「しかし・・・」
『無線の届く所まで行き、すぐ戻る。』
「ロクさん・・・」
「岩出山をすんなり通れるとは思えない・・・それは最悪のシナリオの時だ。」
『往復で３０分も掛からない。』
「ロクは３０分かもしれないが、援軍は１時間掛かる。ここは突破しよう。」
『死龍・・・』

死龍は今後の作戦をロクと無線で話していた。その時あるオペが口を挟んできた。
「間もなく岩出山に入ります。」
「隊、縦一文字態勢！２番機は最後尾を！」
『２番機了解！』
虹の三角３機は、逆Ｖ字態勢の走行から、縦一文字態勢に切り替えて走行し始めた。

ロクのジャガー。
「あと５０キロか・・・夕方までには到着したい。」
『敵だ！』
ジャガーに虹の三角から無線が入る。

虹の三角１番機コクピット。
『２番機です。後方から、ＳＣ確認。ストラトスです。』
『ストラトスか？あいつ生きてたか！？』と、ロク。

「タケシなのか!?」
『2番機です。我々が引き付けます。死龍さんらは先にP6へ・・・』と、山中。
「馬鹿言うな!!ロク?後方を支援を!」
『数は?』
『およそ20台!』
『なんとかする!』
「主力がいない?奴のミサイル隊が・・・」
「前方!ミサイルです!」
「かわせ!」

虹の三角の進路方向から数十発のミサイルが虹の三角に向けて飛来してくる。かろうじて避ける虹の三角。
「囲まれたか!?」
その時、走行中の1番機の真下から大きな爆発音が聞こえ激しく揺れた。
「じ、地雷か・・・?こしゃくな真似を・・・」
「中央のタイヤが大破!」
「被害は?」
「コンテナ内は無事です!走行可能!」
「ロク!?前方を突破する。援護してくれ!」
『後方のストラトスは?どうする!?』
「・・・」
『死龍!?どうした!?答えろ!』
死龍はロクの無線に答えなかった。

その15　ロクVS三方魚雷

死龍はロクの無線に答えず唇を噛み締めていた。
『どうした?死龍!?』
「・・・」
『死龍!?』

死龍は意を決して無線に向かった。その時別の無線が飛び込んできた。
『山中です。2番機がこの先で横付けします!』
「・・・」
『なっ・・・バカな・・・』とロク。

『後方のタケシ隊だけは食い止められます!死龍さん、先に行って下さい。』
「た、頼む・・・」
『仲間を見捨てんのか!死龍!』
「ロク・・・それしか方法はない・・・」
『なら俺も残る。タケシに背は向けれない。』
『山中です。ロクさんには1と3の護衛を!』
『前方のミサイル隊は、弾がなければただのSCだ。虹の三角だけで出来る。しかしタケシのストラトスは別だ!あんたがその覚悟なら俺もここに残る!いいな死龍!?』
「しかし・・・」
『たまには俺の言うことも聞けよ・・・な?』
「ロク・・・」
『死龍?桑田を頼んだぞ!山中艦長!頼む!』
『ああ、任せてくれ!』

「ロ、ロクさん・・・」
無線を横で聞いていた桑田は心配していた。
「死ぬなよロク！」
『なんとか・・・する！』
ロクのジャガーは最後尾を走っていた2番機の後ろにまわると、2番機は山と山の間が狭い箇所を見つけると、横付けに停車し道を塞いでしまった。

タケシの後方部隊。ヒデらの装甲車もいる。
『1台が道を塞いでしまいました！！』と嶋。
『正面に雷獣もいます。』
「仲間を逃がすつもりか！？しかし自ら逃げ道を断ったのか！？雷獣！？敵は1台だ！逃がすなよ！討ち取れ！」

ロクのジャガー。ジャガーの正面にはタケシの部隊が迫ってきた。
ロクは彼らの砂煙を見ている。
「15台と装甲車が1台？ヒデか？道幅は狭い・・・ストラトスだけここから引き離す。・・・さて、行きますか。」
ロクは再びギアを入れると、壁になっている2番機を背にしてタケシの隊に向かって走り出した。
「山中艦長！タケシのストラトスを連れて行く。後は機銃で応戦してくれ！ある程片付いたらそこを脱出するんだ。」
『了解！相手はタケシだ！無理するなよ！』
「俺の前は走らせないぜ。」
ロクは無線を切ると、タケシのストラトスの正面に向かった。

タケシはジャガーが突っ込んで来るのを確認する。

「行くぞ！三方魚雷だ！！」
『おう！』
『おう！』
ストラトスの3台が正面からジャガーを囲み込んだ。

「この間の技か！？同じ技を！？」
ロクはその時、キーンがバイクを整備している時の事を思い出していた・・・

「後方から？しかも3台で？」
「そうだ！迂闊にも側面を取られてしまった・・・キーン？なんか知ってるか？」
「それは、第二次世界大戦時に、3機の戦闘機と魚雷だけで駆逐艦などの足の速い艦艇を沈める戦法だ。」
「さすが物知りのキーン！で？魚雷？艦艇？なんだこれって飛行機の戦法かよ？」

「そうだ！それをこの陸戦で、しかもSCで行うなんて・・・タケシはとんでもない奴かも知れないな・・・」
「どうすれば防げる？」
「後方から来た場合は、逃げ切ればいい。ジャガーの速度なら問題ない。しかし・・・」

「しかし？」
「正面から来た際は、なかなか難しいだろう。なんせカウンターだからな・・・」

「そうか・・・」

「しかし、所詮は人の作った策・・・しかも舞台が違う・・・どうすれば・・・？」
「まあ、なんとかする。」
「最初の一撃はどっちから来た？」
「右だったな？」
「で？どっちにかわした？」
「普通は左だよな？」
「それで後方から来たＳＣに、左を突かれたか？」
「そうだな。左だ。」
「そしたら右に逃げ左を取られた・・・だろ？」
「そうだ。よくわかったな？」
「人は・・・嫌、動物も昆虫すら、危機を回避するための本能がある。」
「本能？」
「そう。その場からいち早く脱出するために・・・右、左、右とか、左、右、左とか・・・」
「まあ、言われればそうだな。俺もそうするな。」
「敵はこれを読んでいる。となればこの裏を・・・」
「右から来たら同じ右にか・・・？」
「うん！そうすれば２回目の攻撃が出来ない！」
「右、右、右ってただ回るのも手だな！」
「確かに３番手の攻撃は向こうは読みづらくなる。」

ロクのジャガー。
「わざと、罠に落ちたように見せる・・・やってみるか？」
ロクはギアを下げ、スピードをやや落とし３台のストラトスの中心に入る。

「行けっ！1番！」
『おう！』
嶋のストラトスがジャガーの右サイドに体当たりを掛けた。

「来た！なら・・・」
ロクは嶋のストラトスの正面にハンドルを切る。

その行動に嶋は慌ててハンドルを切る。
「こいつ！俺たちの動きを！」

「やるな、雷獣・・・よし、2番、石森！」
『おう！』
石森のストラトスがジャガーの左を突く。

「やはり・・・ならっ！」
ジャガーはまたしても、石森のストラトスの正面に立つべく左にハンドルを切った。

「雷獣が・・・やはり、こちらの動きを・・・なら・・・ヒデ聞こえるか！？」
『はい！』
「お前の装甲車で雷獣の正面を押さえろ！」
『分かりました。正面で良いのですか？』
「そうだ！正面だ！」

『了解！』
「嶋、石森。ヒデが奴の正面を押さえる。例の奴をするぞ！タイミングはヒデに合わせる。」
『分かりました！』
『私が後方に回ります。』
「よし！行くぞ！“十字魚雷”だ！」
ジャガーの四方から3台のストラトスと装甲車が近づいた。

その16　十字魚雷

ロクのジャガーの正面にはヒデの装甲車、後方からストラトスの3台。ジャガーはまさに四方を囲まれる状態だった。

「今度は後方から?しかも正面に装甲車・・・装甲車は囮か?なら・・・」

ストラトスの3台はジャガーを囲むように並走する。

タケシ「囲んだぞ!逃げ道を塞いだぞ雷獣!今度こそ・・・行くぞ嶋!1番!」

『おう!』

嶋のストラトスがジャガーの右横を突く。

「右から!なら・・・」

ロクはあえて先程の反対の行動を取り左へ逃げる。そこへ後方にいた石森のストラトスがハンドルを左に切ったジャガーの左側面を突く。その時、ロクは更に左にハンドルを切った。慌てたのは石森だった。ロクのジャガーが正面から突っ込んで来たのだ。石森は慌てて回避する。タケシも慌てた。本来雷獣が回避するところに雷獣は逃げて来なかったのだ。

「後ろ!貰った!」

『何っ!?』

ジャガーが回避したのは、一番最初にジャガーを突いて回避運動を行っていた、嶋のストラトスのすぐ後ろだった。嶋は慌てて回避

しようとした時だった。
「油断したな！」
ロクは運転席の窓から、嶋のストラトスの右後輪に向かって拳銃を撃ちまくった。何発かは命中する。バランスを取られハンドルを取られる嶋。その時、右前輪のタイヤが衝撃で外れる。

「くくく・・・天罰・・・」
ヒデは装甲車の運転席からその様子を見て、声を発した。嶋の車は凄いスピードで横転していく。

「嶋っ！？」
『嶋！！』
タケシと石森は嶋のストラトスが激しく横転するのを目の当たりにする。

「少し味方のふりでもしておくか？丸田、機銃だ！」
『あいよ！』
丸田が装甲車の上部にある機銃を、雷獣に向け撃ちまくる。乱射だったが、その1発がジャガーのフロントガラスを貫通していた。

「くっ・・・」
弾はロクの右腹に命中していた。拳銃を握っていた右手を握っていたままで腹を押さえ込む。座席には大量の血が流れはじめていた。
「あらら・・・これ、やばいかな・・・？」

『タ、タケシ様！嶋のストラトスがー！？』石森の無線は慌てていた。
「わかっている。ヒデ、もう一度奴を追い込む。」
『嶋さんはどうするんですか？早く救出しなければ、ＳＣは炎上してしまいます。』
ヒデはあえて本意ではない事を言葉にしていた。

「石森？雷獣は？」
『逆方向に逃走しています。銃弾は浴びせてますが、あのスピードです。これ以上は追えません。』
「逃がしたか・・・嶋の救出だ！急げ！」
『了解！』
「十字魚雷も通用しないのか・・・雷獣！」

ロクのジャガー。ロクは苦しそうに右脇腹を押さえている。
「山中・・・艦長・・・き、聞こえるか？」
『こちら2番機、山中。無事か？』
「タ、タケシは引き付けた・・・脱出しろ！」
『了解した。そっちはどうする？』
「はぁ、迂回してＰ６に向かう・・・向こうで会おう。」
ロクは無線を切ると、Ｐ６に向けてアクセルを踏んだ。
「こんなとこで・・・くたばれるか・・・」

タケシと石森が横転している嶋のストラトスの側にいる。中にいた嶋は既に死んでいた。
「嶋・・・」
「雷獣が・・・仇は取らせてもらうからな。」

その中、ヒデだけが薄ら笑みを浮かべている。

死龍が乗る虹の三角1番機。死龍と桑田が機銃でタケシのミサイルSC隊を応戦していた。すると急に敵のSC隊が後方に引き上げて行く。

「敵が引き上げる?」

『死龍さん!後方の2番機も動き出した様子です。』

「やってくれたか・・・ロクはどうした?」

『こちらでは確認できません。』

その無線に桑田の表情は不安を隠せない。

「分かった。戦闘配備を解く。後方に気をつけろ!まだタケシがいるんだ!」

『了解!』

「P6まであと40キロだ。速度落とすなよ!まだ基地はあるぞ!」

『後方に黒豹確認。こちらに向かっています。』

「ロク・・・無事か!?」

「よかった・・・」ロクの確認に死龍も桑田もホッと胸を撫で下ろしていた。

虹の三角1番機コクピット。死龍、桑田がいる。コクピットの窓からロクのジャガーが虹の三角の前に飛び出してくるのが見えた。ジャガーは運転席側の窓を開けるとロクの右拳が出てきて親指を立てているのが見えた。

「ロク・・・」

「ロクさん・・・」

その時、ロクから無線が入る。

『し、死龍・・・先に行く・・・応援を呼んでく・・・』

ロクの無線の様子が気になった死龍。
「どうした？ロク？」
『平気だ・・・先に走ってるぞ・・・』

ロクは、苦悶な表情に青白い顔でジャガーを運転していた。ハンドルを握る手も覚束無く、目も虚ろだった。

その１７　生きたいという本能

ロクは右手を腹にかざしながら左手だけで運転を続けていた。ロクの腹からは大量の血が流れ出ている。
「こちら・・・黒豹・・・Ｐ６・・・聞こえるか？」
『こちらＰ６、我妻。黒豹どうぞ。』
「ポリス道・・・北３０キロに・・・Ｐ５の・・・虹が３機・・・救援を出してくれ・・・」
『ロクさん？どうされました？』

我妻はロクの無線の異変に気がついた。
「俺はいい・・・早く・・・援軍を・・・」
『了解です。至急出します。それよりロクさん？怪我されてませんか？』
「大した・・・事ない・・・急げよ・・・」
ロクはそう言うと、無線を一方的に切ってしまった。

Ｐ６指令室。弘士や曽根の姿もある。
「ロクか？」
我妻のロクへの無線に気づいたのは弘士も同様であった。
「はい、虹に援軍を出して欲しいと。北３０キロまで来てるそうです。」
「まだ敵の中か・・・よし、アシカム、山猫を出す。」
「了解。」
「ロクはテスト走行中だったな？」
「はい、桑田と朝から出ていました。」
「どこまで行ってるんだ？奴は？」
「間もなくレーダーで確認できます。」
「我妻、こちらから無線だ！」

「了解！」
「虹の受け入れ用意だ。松井？山猫は？」
「間もなく北ゲートです。」
「司令、黒豹の応答ありません。」
「黒豹確認・・・こちらに向かってます・・・ん？蛇行していますね！」
「ロクのとこの山口は？」
「非番ですね。」

「俺が行こう。」
珍しく曽根が席を立った。
「お願いできますか？」
「出来の悪い息子を持つと苦労するな。」

その頃、Ｐ６の北ゲートからはダブル率いる山猫隊のＳＣ３０台が出撃していた。
「ポリス道を北でいいのか？」
『すいません、情報が少なく・・・』
「デート中の御本人は？」
『間もなくこちらへ・・・無線が繋がらず・・・曽根参謀が向かっています。』
「曽根参謀？珍しいな・・・バズーに急ぐように伝えてくれ。敵によっては、アシカムは必要だ。」
『了解です。』
「ロクとは、恐らくすれ違う。ロクの方も対応出来たらこちらでやってみるよ。」
『分かりました。伝えます。』
ダブルが無線を切ると、再び無線が入る。
『隊長！ロクさんのジャガーです。』

「ん？」

ダブルの隊の右方向1キロ方向に砂煙を上げ、荒野を走るジャガーを確認する。ダブルは窓を開け目を凝らした。ロクが普通に運転をしているが、何か様子がおかしい。慌ててダブルはロクに無線を飛ばす。

「黒豹？聞こえるか？・・・おいロク！？」

ダブルは隊を離れ、ジャガーに近づいていた。するとジャガーのフロントガラスに銃弾を見つけた。よく見るとロクの様子もおかしい。

「こちら山猫！Ｐ６聞こえるか？」

『こちらＰ６の我妻・・・』

「黒豹確認！フロントガラスに銃弾痕あり。ロク負傷の可能性あり！受け入れ態勢を取ってくれ！急げ！」

『り、了解！』

Ｐ６指令室。

「黒豹確認！銃弾が車両にあると山猫から連絡！」

「分かった。関根チームを北ゲートに急行させろ。」

「了解！」

「ロク・・・」

地下３階の廊下を関根とスタッフがストレッチャーを押しながら走っている。ストレッチャーの上にはいくつかの医療器具が置いて運ばれている。

「どいて！急患だから！」

廊下には、まだ奇襲で負傷したジプシーがまだ座ったままで、廊下はスムーズに通れなかった。

P6北ゲート。ゲートは左右に開き始めていた。関根は先頭に立ってジャガーを待っていた。その時、塀の上の監視兵から声が掛かる。

「来ました！黒豹！ジャガーです！」

ゲートの先の荒野、肉眼でも確認できる程にジャガーは近づいていた。曽根参謀のSCなのか、横に1台並んで走っているSCも見える。仕切りにクラクションを鳴らしている様子だ。だがロクのジャガーは時折蛇行し、北のゲートに向かっていた。

「スピードが落ちていない！みんな気をつけて！」

ジャガーはスピードを落とす事無く、ゲートに近づく。よく見るとロクはハンドルを枕にし、顔を上げていない。

「意識を失っている！このままだとぶつかるわ！」

関根は腰の拳銃を抜くと、ジャガーに向けて発砲した。

「気づいて！」

1発目は空に、しかしロクは気づかない。

「もう！ロク！ジャガーに当てるわよ！」

関根は仕方なく、ジャガーの車体を狙った。銃弾はジャガーに命中。ロクはその金属音に気づくと、慌ててブレーキを踏んだ。停止したのはゲートの近く僅か前だった。関根の医療チームは急いでロクのジャガーに近づく。ロクは既に意識がなく、腹辺りから大量の血を流している。

「ロク・・・急いで輸血の用意！」

関根はインカムを使い、他のスタッフに無線を飛ばした。他のスタッフたちはロクをジャガーから降ろすと、急ぎ医療用ストレッチャーに移し変えた。

「血液は確かO型！急いで用意して！」
『先日の奇襲で輸血のストックがなく・・・』
「兵の中から、献血してもらうわ。同じ血液型の兵を集めて！とにかく急いで！今そっちに行く。」

虹の三角1番機コクピット。
「P6のSC隊確認！」
「早いな。」と死龍。
「無線が入ってます。」
「こちらに繋げ！」
『こちらP6山猫。聞こえるか？』
「久しぶりだな、ダブル・・・」
『死龍か？なぜ虹に？』
「なんだ？来ちゃ駄目な言い方だな？」
『どうでもいいが、ロクはどうしたんだ？』

そのダブルの無線の様子に桑田は思わず立ち上がった。
「先にそちらに向かわなかったか？」
『負傷していた・・・』
「えっ？」驚く桑田。
「ここを離れた時は、なんでもなかったが・・・」
『無線を受けないんだ。まあいつもの事だが・・・』
「ロクは、タケシと交戦した。我々を逃がすために。」

その時、桑田は死龍の無線を奪いダブルに話した。
「それでロクさんは！？」
『桑田か？そこか？既にP6に着いた頃だろう。』
「そうですか・・・」
『敵は？』

「岩出山が最後だ。桑田らから聞いた。松島に奇襲を掛けたそうだな？」
『作戦は成功ってとこだ。』
「まあ、後で詳しく聞く。最後尾の２番機が足が遅い。２番機の護衛を頼む！」
『了解！後でバズーも来ますよ！』
「そうか・・・みんな元気そうだな・・・」
『まあ、ロクの事も心配しなくても大丈夫だよ。ただで死ぬ奴か？』
「そうね・・・」
「・・・」

Ｐ６地下３階ジプシー専用医療室。女医のスタッフ５名がロクの手術台の慌ただしく動いていた。
「どうしてないの？なんでないの？よく探しなさい！」
「あるべき場所にないんです。」
「まあいい。ロクは大して大きい怪我はないし病気もしてない。服を切って！」
「はい！」

関根はロクの腹部を見て驚いた。銃弾は貫通していて傷口は２箇所あるのだが、その２箇所とも針金で縫い合わされていた。
「ロク・・・自分で縫ったのか・・・？輸血は？」
「今、１０名程が・・・」
「時間がない、急がして！・・・流石ね・・・生きたいという本能ね。」
「血圧低下！４５！」
「関根さん！すぐ輸血しないと危険です！」

「死なせないわよ・・・ロク・・・絶対に助けるわ！」

その18　ベイビーフェイス

Ｐ６指令室。既に死龍や山中、富久のＰ５勢、そして桑田の姿もある。それに対するように弘士、曽根がいた。
「テスト走行だったが、ロクがＰ５方向へ行こうと・・・」
「すいません・・・」
桑田は司令に一礼した。

「司令、２人を責めないで欲しい。ロクが来なければ我々は全滅していた。」
「しかし、規則を破ってだな・・・」と曽根。
「あの包囲網を死傷者ゼロ・・・奇跡に近い事です。」と山中。

「死龍、まあ責めたくても当の本人があれじゃな・・・」
「私の判断が招いた事だ。ロクに非はない。」
「それは結果論であって・・・」とやはり曽根。
「事情は分かった。桑田は下がっていいぞ。」
「はい・・・それでロクさんは？」
「地下６の集中治療室にいる。」

「危ないのか？」と死龍。
「出血が多く、意識も戻らない。」
「そんな・・・ロクさん。」桑田は自分の顔を手で覆い泣き始めた。
「何かの歯車が狂い始めているな・・・」

地下６階ポリス専用医療室。ロクが酸素マスクを口に付けたまま、ベットで寝ている。その様子をバズー、キーン、ダブルの３人が窓越しに見つめていた。

「桑田も乗っていたってどういう事だ?」バズーは窓を叩いた。
「相変わらず甘いよな。」
「お前が言うなよ。戦場に彼女同伴してたお前が!」

ダブルはガラス越しにロクを見ていたが、ロクの部屋の隣に聖がいるのを確認すると、軽く笑顔で挨拶した。すると聖もダブルたちの姿に気づきベットから大きく手を振った。
「おいおい、不謹慎だな・・・」とキーン。
「ロクは死なないよ・・・」
「だから、どういう事だ!?」バズーは再び窓ガラスを叩いた。
「ああ、上は、テスト走行って言ってるが・・・」とキーン。
「死龍のお出迎えにしては出来すぎだな。」
「死龍は予定がなかったのか?」
「そうらしいな・・・P5もヤバいという事だ・・・」

北ゲート近くの虹の三角を入れている大型格納庫内。2番機が格納庫内で整備している。それを見つめる高橋技師長。
「技師長大変です!」
松井が格納庫の外から走ってくる。
「どうした?」
「1番機、3番機とも格納庫の扉が開きません。人は降ろせるんですが、物資が不可能です。」
「だいぶ被弾した様子だったからな・・・仕方ない。前の扉部分を切り取っても開けるぞ。1番機には新型太陽光システムも積んでるのだからな。」
「了解!」
「今夜も徹夜になりそうだな・・・」

地下3階のジプシー専用医療室。関根のところに桑田、死龍の姿があった。
「それでロクさんは？」
「ここでの手は尽くした。銃弾は腸を貫いていて・・・」
「・・・」
「意識が戻らないって！？」
「出血が多くてな・・・」
「大丈夫だ。桑田・・・ロクがあんなもんで死ぬような奴じゃない・・・」
「で・・・死龍？お前はどこを？」
関根は血だらけの死龍の制服を見て言った。
「私は平気だ・・・これは口の中を切っただけだ。」
「・・・久しぶりよね。おかえりって言った方がいい？」
「その節は・・・」
「あんただけなら地下6に入れる。ロクのところに行ってやりなさい。」
「私もジプシー出なんですが・・・」
「裏技があるの・・・桑田、案内しなさい。」
「は、はい・・・」

桑田は死龍を案内するべく、医療室を出て行く。
「どういう事だ？桑田？」
「ええ・・・ミュウ検査と言えば、特別に入れるんです。地下6階に・・・」
「わ、私をミュウ扱いにするのか？」
「上で陽性が出て、下で陰性なんてよくある事ですよ。」
「そうだな。」
「ロクさんの様子を見てきて下さい。」
「分かった・・・それで桑田！？」
「は、はい。」

「ロクに恋しては駄目だ。」
「どうしてですか!?」

桑田は珍しく剥きなった。
「規則もある。それだけではないが・・・」
「はい?」
「お前が知ってるロクは、ロクじゃない・・・お前は本当のロクの姿を知らない・・・」

「どういう事ですか?」
「ロクを苦しめる事になる。」
「見守るだけもですか?」
「そうだ!」
「・・・」桑田は悔しそうに下を向く。

P6指令室。曽根と司令
「高橋の連絡ですと、虹はかなり大破しており、物資を降ろすのに時間が掛かるとの事。」
「ロクの意識は?」
「まだ連絡はありません。」
「先日の、ミュウの子を流産した件は?」
「ダブルの話では、一緒にキャンプをした男だと。」
「ロクの話だとその中にヒデがいたらしい・・・ロクは彼ではないかと言っている。」

「サンドウルフのヒデか?ヒデがここを・・・?」と曽根。
「まずは、ミュウ確保だ!虹は高橋に任す。」
「それと、前司令が今夜、一度こちらに来られると連絡がありました。」と我妻。

「死龍にも逢いたいのだろ?まあそれはいい。」
「明日にはＰ５のジプシーはＰ７に移すのですか?」
「その予定だ。検査等はＰ５で済ましているらしい。問題はない。が・・・再度Ｐ６でも検査する。出来ればレヴィアに新型の武器もＰ７に持っていって貰いたいんだが・・・」

Ｐ６地下６階ポリス専用医療室。３人がロクを見守る中、死龍が入って来る。敬礼する３人。死龍も敬礼を返す。
「みんな元気そうだな?」
「まあ・・・一人を除いては・・・」キーンが窓ガラスのロクを見た。
「死龍さんこそ怪我されてませんか?」

キーンは死龍の血だらけの制服を見て驚いた。
「これか?気にするな。」
「どうやってここへ?今、許可出ないはずです。」
「また大きくなったなバズー!関根さんから裏技を教えてもらった。」
「ミュウか・・・?」
「そういう事だ。ロクはどうなんだ?」
「まだ意識が戻らず・・・」とキーン。
「あいつ、自分で傷口を縫ったらしいです。しかもその辺の錆びた針金で・・・」

「らしいな・・・タケシと交戦したまでは確認してるんだが、その後何気なく合流して、先にＰ６に行ってしまったんで何とも言えない。」
「なぜ死龍さん自らＰ６へ?」
「どいつもこいつも・・・同じ質問ばかりだ。そんなに里帰りしち

ゃいけないのか？」

「いや・・・自ら来るなんて初めてでしたから・・・」
「確かに・・・６年も離れると恋しくもなるよ・・・」
「危ないのか？Ｐ５は？」とバズーが問う。
「そうね。危ないわ。それでＰ５は玉砕覚悟で討って出る。最後の挨拶ってとこだ。」

「そうか・・・」
「キキの話聞いたわ。いい戦士だったのに残念ね。」
「もう３年も前の話だ。忘れてたぜ。」
「まあ、あんたは心配してないわよ。」
「あれでダブルは、ある意味“覚醒”したからなー。」とバズーはダブルを見てニヤついていた。
「違いない。」とキーン。
「おいおい。お前らな・・・」
「うふふ・・・ここはいつも楽しそうね・・・」
「ロクからよく聞く。Ｐ５では鬼の四天王だと？」
「あら、そんなに厳しくないわよ。」
「どうだか・・・」とダブル。
「取り合えず、その検査とやらをして来るわ。関根さんの立場もあるらしいから。」
「そうだな。」

Ｐ６南ゲート近くの塀の上。いつもロクが居る場所に桑田がいた。陽は沈んだ直後らしく空は紫色に変わろうとしていた。桑田はその夕焼けを見て一人涙を流している。
「ロクさん・・・死なないで下さい。」
桑田が下を向きながら泣いていると、後方から男の声が聞こえる。

「どうした？なつみ？」
「ロクさん！？」
桑田が振り返ると、そこには優しく微笑むロクの姿があった。

その１９　荒野の十字架

「何してるんだよ。なつみ？」
「ロ、ロクさん？」

桑田はロクの声をする方へ振り返った。しかし・・・
南ゲート付近から伸びる警戒用のライトが桑田の方へ当たっていた。
桑田は目を細くして南ゲートの方を見る。ライトの光は桑田を確認すると、また別の方へ伸びて行く。ライトの光が当たらなくなり、桑田はもう一度辺りを確認するが、ロクの姿はなかった。

「ロクさん・・・」
桑田は空を見ながら塀の上に座り込んだ。

ジプシャン軍古川基地近く。タケシと石森らが荒野に十字架を建てていた。その中にはヒデや丸田の姿もあった。陽は沈み、西の空がやや明るい程度だった。砂をかけたタケシが作業を終えていた。
「いい戦士だった・・・」とタケシ。
「あいつが切り込むと、戦況は一気に変わっていた。」
「このままＰ５に行かなければならないのは無念であろう、嶋・・・」
「あのサンドシップがあれば・・・」と石森。
「俺もそう考えていた。しかしＳＣの数が少ない。」
「火力なら、あの１隻でも・・・」
「俺らには俺らの戦い方がある・・・」
「それと、あの戦艦を出した際に、次の入庫戦艦をここのスタッフに何気に聞いたのですが・・・」
「何だ？」

「サンドスコーピオです。」
「ん?ツヨシのか!?」
「はい、数日後にはここで大幅改造の予定だとか・・・その際、ツヨシもここに来る事を聞きました。」
「Ｐ４を粗方平定して、Ｐ５に参戦させるのか?」
「その可能性はあります。」
「あの・・・」

タケシと石森の会話にヒデが首を突っ込んできた。
「何だ?」
「さっきから聞いてたんですが、ツヨシって誰のことでしょうか?」
「一応、俺の弟らしいがな。」
「はい?」
「腹違いの弟なんだよ。しかも誰も証明出来ない。」
「頭は切れるんで、後継者をツヨシで押す連中もいる。まあ所詮はメカケの子だ。」
「そいつがなぜ古川基地に?」
「Ｐ５に投入するか、Ｐ６の警戒用なのか、それは分からん。Ｐ４を陥落させ、暫くは南方の担当だったが・・・」
「馬鹿で臆病。戦場では早死にするタイプだ。」
「そうですか・・・」

直美や弟、妹がいるＰ６地下３階特別保護室。山口が警護を任される中、キーンが部屋の前にやってくる。
「失礼。」
「なんでしょうか?」
キーンは唐突に部屋に入って来た。
「君ら家族の話をしに来た。」
「いつまでここに押し込められるの?」

「命が狙われてるんだ。もう少しだ。」
「息苦しいの・・・ここ・・・」

直美は弟たちを気遣った
「これからの事だ。弟と妹は訓練校に入ってもらう。」
「弟らは兵にはさせないわ！」
「親を亡くした子供は原則的に訓練校に入るのが規則だ。君も一緒に入るのも構わない。兵を育成するのではない。勘違いしないでほしい。」
「保護って言ったて、兵の育成目的じゃない。」
「ここでは、そうしなければ生き残れない。」
「あんたも、あのロクって言うのも訓練校出でしょ？弟をあんたらみたいにしたくないだけ・・・」
「銃くらい・・・銃くらい撃てる男じゃなきゃ、この世界は生き残れないぜ。」
「私たちは、生まれた時から銃を扱っていた。教わる必要はないわ。」
「あの父親にこの子だな。強情なとこまで・・・」
「父親の事は言わないで。早く犯人を捕まえて！」
「今、捜査してる。取り合えず考えてくれ。あなたは護衛の事も考え、ポリス専用の食堂の仕事を用意している。」
「私はなんだってやる！だから早くここから出して！」
「もうしばらくの辛抱だ。」
キーンはそう言うと、部屋から出て行った。

レヴィア1番艦ブリッチ。久弥が指令室に座っている。外は海上、波が高くブリッチの窓に波飛沫が飛んでくる。
「間もなく陸に上がります。」と桜井。
「15分後には南ゲートだ。P6に報告！」

「了解！」
「死龍か・・・」

Ｐ６地下６階ポリス専用医療室。死龍があるスタッフに右腕から血を取られている。

同じく医療室。聖のベットから隣のベットのロクを心配そうに見ている。

Ｐ６地下３階ＳＣ格納庫。高橋がロクのジャガーカストリーを整備している。そこへ桑田が入って来る。
「どこに行ってた！？このくそ忙しい時に！？」
「すいません。」
「ロクは？」
「まだ意識が戻らず・・・」
「俺は虹の方に行く。こいつのフロントガラスを交換してくれ！それとバルカンの弾の補充だ！」
「はい・・・」
「Ｐ５まで行ったと聞いたが？」
「近くまでです。」
「距離の問題ではない！指令室を外れた今は俺の部下だ！勝手に動くな！」
「すいません・・・」
「それが終わったら、上の格納庫に来い！今夜は徹夜になる！Ｐ５から持ってきたソーラーキャノンを至急降ろす。」
「ソーラーキャノン？」
「レヴィアに取り付けるものだ。いいな？早くしろよ。」
「はい・・・」

Ｐ６地下６階ポリス専用医療室。
意識不明で寝ているロクのベット。指先が微かに動き、ロクの意識が戻った。それに気づいたのか、隣の部屋にいた聖が窓際まで近づいた。
「誰かー！」
聖は慌ててスタッフを呼びつけた。

Ｐ６指令室。我妻が無線を受けていた。
「医務室から連絡。ロクさんの意識が戻りました。」
「そうか・・・」

Ｐ６ポリス専用食堂。バズー、ダブル、死龍が食事をしていた。
そこに内線が入る。
「そうか・・・わかった・・・みんな！ロクの意識が戻ったそうだ。」
「よし！行こう！」
「ロク・・・」と死龍だけが浮かない顔をしている。

Ｐ６地下６階ポリス専用医療室。ロクが目を開けてベットに横になっている。隣の部屋からは聖が来てすぐ側に座ってロクを見つめていた。
「お目覚め？」
「ここは？」
「それも覚えてないの？私も知らないわよ！」
「地下６（ろく）か・・・」

ロクはようやく自分の状況を把握した。
「撃たれたの？」
「ああ・・・撃たれたんだろうな・・・」

「へぇーあんたがねぇ・・・」
「体調はどうだ？」
「その姿のあんたに言われたくないわよ。」
「そうか・・・」
「もう歩けるようにはなったわ。後は顔の包帯だけ。」
「誰があの子の父親なんだ？」
「あの子の父親は・・・」
「ヒデか？」
「えっ！？」

その20　イエスタディ　ドリーミン

「どうしてヒデの事を・・・？」
「あいつはここに居たんだぜ。」
「ポリスに居たのは聞いたけど、まさかＰ６だったの？」
「もう６年前だ。」
「元仲間を襲撃してたんだ、あいつ・・・」
「さてと・・・」

ロクは口に付けられた酸素マスクを外すと、急にベットから起き上がった。
「あんた、大丈夫なの？」
「ここは息苦しい・・・」
「同感ね・・・ここの天井嫌いよ。」

聖はロクの顔を見るとクスッと笑っていた。ロクはそのままベットの横に立つ。
「痛たた・・・」

ロクは腹を押さえやや屈む。顔もしかめっ面になり汗もかき出した。
「あんた重症じゃないの！？」
「動いてないと体が鈍る・・・」
ロクは青白い顔で右腹を押さえていると、まだ左腕に付いた点滴を自ら外し医務室を出て行った。
「根っからの戦士ね・・・」

地下３階のＳＣ整備室。桑田がロクのジャガーの整備を終えてジ

ャガーの助手席でうとうとし始めた。悪い夢を見ているのか桑田の表情は険しく、時折魘されている。桑田の幼い時の夢だった・・・

桑田は孤児だった。3歳の時、両親をジプシャンに殺され三日三晩歩いた。死に際に母親からP6に行けと言われた。そこからは彼女の“生きようという本能”が彼女を歩かせた。既にポリスの外壁に着いた時には意識がなく、やせ細って外壁に座ったまま発見された。桑田はそのまま街の中に保護された。最初はジプシャンのスパイ扱いされたが、5歳まで孤児施設に監視を付けられ育った。スパイの疑いは子供だった桑田に執拗なイジメとなって返って来る。同じ孤児施設の子らに、そしてポリスの子からも・・・

ある日、桑田はいつものように、ポリスの子供らにイジメを受けていた。裏路地の大人たちが目が届かない場所で、ポリスの子供らに囲まれていたのだ。

「こいつスパイらしいぞ!」

「こどもで荒野を歩いてこれるはずがないじゃん!」

「街から出て行け!」

泣き叫ぶ彼女に彼が現れた・・・

「お前・・・またイジメられたんのか?」

ゼッケン“421”。後のロク・・・我武者羅に突っ込むロクだったが、4人相手じゃさすがに分が悪く、幼いロクは一方的に殴られていた。ポリスの子供らは殴り疲れたか、動かなくなったロクを見るなり帰っていく。桑田は泣いたままロクに近づくが、ロクはすぐ起き上がる。

「ふっー。あいつら・・・少しは手加減しろよ・・・」

「大丈夫?お兄ちゃん・・・?」

ロクは顔を腫らしていたが、満面の笑顔で桑田に答えた。

「いつもの事だ。」
その笑顔を見た桑田は、再び泣き始めた。
「泣くなよ・・・俺がイジメてるみたいじゃん。」

ロクのジャガーの中で寝ている桑田。桑田はさっきまでの険しい寝顔はなくなっていた。
「ふふ・・・」
時折、声を上げ再び夢の中に戻っていく。

その事件があってから、桑田はいつもロクの背中の制服を握り締めていた。ロクが訓練校に行っている時は、孤児施設を抜け出して訓練校の門の前で待っている日々が続いた。

「４２１！」
桑田はロクに会えない日は、訓練校に忍び込んでも会いに行く。いつの間にか桑田はロクのクラス、３期生の妹分となっていく。この頃からよく笑い、よく大声を出す活発な女の子になっていく。しかし、ロクたちが訓練で遠出をすることがあり、何日も帰れない日々が続くと、桑田は訓練校の前の校門で一人泣いていた。

ロクのジャガーで眠る桑田から涙がこぼれている。

街にロクたちが現れると、どこからともなく現れいつのまにかロクの背中の服を引っ張っていた。ロクもいつも桑田が背中にいるのが当たり前と感じていた。
「なつみ、大きくなったら、４２１のお嫁さんになってあげるから

！」

桑田の口癖だった。

「勝手に決めるな！ちび！」

「なつみ、決めたから！」

桑田はいつも笑顔でロクの側にいた。桑田にとって辛い日々を忘れさせてくれたのはロクだった。

「どうしてここで寝てるかな？」

その声にムクッと起き上がる桑田。車の側にいたのはロクだった。

「あ・・・？」

急に起き上がった桑田は、車高の低いジャガーの天井に頭をぶつけていた。

「無事だったか？」

「夢？」

「何だ？また悪い夢でも見てたか？」

「ロ、ロクさん・・・？」

桑田はようやく自分の状況が分かったのか、車を飛び出してロクに抱きついた。

「痛っ！」

「えっ！？」

「怪我したんだから少しは加減しろよ。加減を・・・」

「す、すいません。大丈夫なんですか？」

「まだ痛むよ・・・車イス、取りに来たんだ。ここにあっただろ？」

「あっ・・・はい・・・あります。」

桑田は慌てて車イスを持ってくると、ロクはすぐそこに座った。

「まずは指令室だ。」

「私に押せとでも?車イス地下6階にもあったじゃないですか?」
「そうか?怪我した時くらい、少しでいいから労わってくれよ。」
「もう!どれだけ、死龍さんやみんなが心配したのか分かってます!?」
「全機無事か?」
「先に、死龍さんを心配したらどうなんですか!?」
「桑田がここにいるて事は、死龍も無事だろ。」
「もう!そんな言い方して!本当に・・・みんなロクさんの事心配・・・して・・・」

桑田は緊張の糸が切れたのか、ロクの後ろで泣き始めた。
「おいおい、すぐ泣くなよ・・・」

ロクは困った顔をして桑田の様子を伺った。
「本当に心配したんですから・・・」
「ごめん・・・」
「それと・・・私入れません・・・指令室。」
「そうか・・・俺のＩＤで入る。それならいいだろ?」
「もう!指令に怒られるの、ロクさんですよ!」
「なんとかする!」
「また・・・」

その頃、Ｐ６北ゲート付近には、久弥の乗るレヴィア1番艦が到着していた。
久弥「桜井!搬入等は任せる。死龍の所に行く。」
「任せてください!落ち着いたら、後で顔を出します。ガキの頃に一度お会いしただけですから・・・」
「わかった。」

ジプシャン軍古川基地そばの酒場。タケシとヒデ、丸田が飲んでいる所に石森が入って来る。
「タケシ様、船の艦長とは話を付けました。」
「よくついたな。」
「こいつとは同期で、なんとか・・・」
「今度は何を始めるんです?」とヒデ。
「雷獣と決着つけるんだよ。」
「め、命令違反になりませんか?」
「仲間を殺られたんだ。」
「しかし・・・」
「姉貴を敵に回すかもしれないな・・・」

その２１　ソーラーキャノン

Ｐ６指令室。突然ドアが開き、車イスに乗ったロクとそれを押す桑田が入って来る。
「ロク！」
「ロクさん！」
「ロクさん！」

驚いたのは指令室のみんなだった。さっきまで意識不明の男が急に車椅子で現れたのだから。指令室のほとんどがロクの周りに集まり始めた。
「心配掛けました。」とロク。
「大丈夫なのか？重症と聞いたが？」
「まあ・・・」
「まだ傷口は痛いみたいですよ。」と桑田。
「まだこれでも、麻酔が効いてるようだし・・・本当の痛みはこれからじゃないですかね？」
「呑気に人事のように言うな！」と曽根。
「じゃあ、まだ寝てなきゃ駄目だろうが！」と弘士。
「死龍らが無事なのを確認したらすぐ戻りますよ。」
「さっきは、食堂にいたぞ。」
「死傷者ゼロ・・・Ｐ５のクルーに感謝されたよ・・・」
曽根の言葉が痒いくらいにロクに優しく聞こえる。

「それはどうも・・・」
「テスト走行でＰ５まで往復６００キロ・・・聞いた事がない珍事だ。」曽根は呆れて下を向く。
「その責任は取ります。桑田を連れ出した事も・・・」

「その件は、死龍に感謝しろよ。」と弘士。
「はぁ？」
「死龍が駄目な後輩に代わって全責任を取ると！」
「死龍・・・いつまでも後輩扱いか・・・」ロクは口を尖らせた。
「これでいいかな？分かったら少しは安静にしてろ！」
「はいはい・・・桑田？地下６に戻るぞ！」
「いいんですか？もう？」
「把握した・・・」
「では・・・司令すいません。」
「ああ。」
指令室を出て行く２人。

エレベーターに乗るロクと桑田。
「桑田？」
「はい？」
「死龍を連れて来てくれ。」
「地下６にですか？」
「俺のＩＤ持って行け。これで入れるだろ？」
「はい・・・」

Ｐ６北ブロック軍事施設倉庫。虹の三角１番機から、物資を出す作業をたくさんの人々がしている。指揮は高橋技師長。そこへ久弥がやって来る。
「順調か？」
「おやじさん！？」
「ロクが撃たれたと聞いた・・・」
「心配要りませんよ。あいつが銃弾で死ぬ奴ですか？」
「死龍らは？」

「地下で飯でも食ってるんでしょ?随分激戦だったらしいですから・・・」
「こいつを見れば分かる・・・」

久弥は被弾した虹の三角を見上げた。
「このソーラーキャノンはどうするつもりですか?」と高橋。
「こいつをレヴィアに取り付ける。」
「レヴィアにですか?」
「街の四方に・・・と思っていたが・・・6番から10番艦はすでに艦首に取り付ける準備はしている。」
「移動砲台・・・と言う事ですか?」
「問題は、太陽光だな・・・」
「こいつみたいに側面全部がソーラーパネルなら、大量の太陽光が吸収出来ますが、レヴィアでは少し難しいのではないでしょうか?なんせ今は、自分を動かせる太陽光を取り寄せるだけで精一杯ですから・・・これ以上、甲板にソーラーパネルを付けるのは難しいです。」
「いっその事、こいつに取り付けるか?」
「可能ですが、こいつはP5の物です・・・」
「死龍か・・・」
「一番巨大のキャノンは、正直虹からどうやって取り出すかは、まだいい策がなく。このまま取り付けたら私ら技術班にしてみれば楽なんですが・・・」
「死龍に話してみよう。」
「お願い出来ますか?」

P6地下6階ポリス専用医療室。ロクの寝ているベットに死龍がやって来る。
「どこをうろついてる?その怪我で・・・さっき、皆でここに来た

が居なかった。」
「すまない。」
「まあいい。それで?平気なのか?怪我は?」
「これか?まあさっき医者に怒られたがな。1ヶ月は入院だとよ。」
「まあ暫く休むことだ。」
「そうもいかない。」
「ん?」
「タケシはまたここに来る。」
「ここにいる時は、戦闘を忘れなさい!」
「その母さん口調変わんないね?」

ロクは死龍を見て苦笑いしていた。
「ロク!真面目に聞きなさい!」
「それそれ・・・」ロクは笑いが堪えきれない。
「もう・・・」
「それでだが・・・タケシではないが、ストラトスの1台を仕留めた。このまま引き下がる相手ではない・・・」
「わかった、わかった・・・仕事熱心なのはいいが、まず体を直す事だ。」
「1ヶ月もか!?奴はそんなに待ってくれないぞ。」
「相変わらず頑固ね。」

そう言うと、死龍はロクの腹を軽く叩いた。ロクは思わずうなった。
「うっ!」
「これでジャガーに乗れと?」
「おいおい・・・そっちこそ手加減知らないな・・・」
「タケシは任せなさい。明日帰る予定だったけど、2、3日は足止めくらいそうよ。」

「ん？・・・虹か・・・？」
「２番機ね・・・特に酷いのは・・・まあ久々の里帰りですもん、こっちもゆっくりするわよ。」
「タケシの件は、皆に話しておいてくれ。」
「分かったわ。ちゃんと寝てんのよ！」
「ああ・・・」
すると、病室にダブル、キーン、バズーが入って来る。
「お邪魔だったかな？」

ダブルが二人の会話に何かを感じたのだろう。部屋に入るのに一度躊躇いを見せる。
「私の方は、用は済んだわ。じゃあねロク。」
「おお・・・」
「意外と元気そうで、安心したぞロク！」とキーン。
「こいつがそう簡単に死ぬかよ！」とバズー。
そう言うと、バズーもロクの腹を軽く叩いた。
「うっ・・・お前らな・・・」
「心配して損したよ！さあみんな！仕事に戻るぞ！」とダブル。
「なんせ、虹から貨物を降ろすのに大変でな。誰かのせいで！」
「俺じゃねぇし・・・」
「２０ミリ弾か？ジャガーの装甲を貫いたのは？」とキーン。
「ヒデの装甲車だよ。」
「あいつ、まだうろついてんのか？そう言えば聖が言っていたのもヒデ・・・まさか・・・？」とダブル。
「ああ、奴の事だ。そう言えば、あいつに撃たれたのは、これで２度目になっちまったな・・・」
ロクは、撃たれた腹を摩った。

ジプシャン軍古川基地。タケシがＰ５に持ち帰ろうとした新型の

船に、弾薬や食料を積み込んでいる。それをヒデと丸田が遠くから見ていた。
「いいのか？無断で？」
「さあな。俺らの責任じゃねぇし。」
「確かにそうだが・・・」
「さっきの話じゃ、ジプシャンも面倒臭いな。」
「はぁ？」
「タケシだツヨシだ・・・次期総帥争いに巻き込まれんのはご免だ。」
「何か、あの女に遊ばれているような気がしないか？」
「それよ。別に今のままでいいと思うんだが・・・」

そこへ石森がやって来る。
「２時間後には、ここを出る。」
「夜に出るのですか？」
「テスト走行も兼ねてだ。」
「はあ・・・」
「それと・・・嶋のストラトスはヒデに乗ってもらう事になった。」
「俺がですか？」
「タケシ様が、お前の装甲車の運転を高く評価した。どこかでドライバー技術を習得したのか？」
「我流です。」
「ああ、こいつ昔からですよ。」と丸田。
「ならば、明日からストラトスだ。いいな？」
「分かりました。」
石森が去っていく。

「いいのか？ヒデ？」丸田がヒデの顔を伺った。
「くく・・・ストラトスか・・・これで、他の四天王とも互角に戦える・・・」

その２２　ガラスの天井

Ｐ６地下指令室。久弥、弘士が談笑していた。
「傷口は針金を使い自分で縫ってたらしいですから。」と弘士。
「そうか。そんな技術、訓練校で教えていたか？」と久弥。
「さあ？高森さんでしょ？彼なら・・・」
「違いない。まあ後でロクの所にでも顔を出そう。しかし、あの重症で病室を抜け出すとは・・・」

そこへ死龍、山中、富久の３名が入って来る。
「おやじさん！」
「死龍か！？」
「ご無沙汰しております。」
「元気そうだな皆。」

久弥は皆の顔を見渡した。
「松島奇襲作戦、聞かせて頂きました。」と山中。
「まさか、湾の中に侵入して攻撃するとは・・・」と富久。
「Ｐ５支援に開発したレヴィアが初めて役に立ったばい！」
「これで戦況が変わってくれれば良いのですが・・・」

そこへバズー、キーン、ダブルも指令室に入って来る。
「変わるさ！俺たちの手でな！俺たちが未来を守らなきゃ誰が未来を守るんだよ？なあ？」とバズー。
「うんうん。ロクにばかりいいとこは取らせない・・・だろ？ダブル？」とキーン。
「そうそう。あいつはいつもいい所を・・・」とダブル。
「親父さんはいつまでこちらへ？」
「明日の昼にはここを発つ。Ｐ５のジプシーをＰ７に連れて行かな

ければならない。」

「死龍はいつ発つんだ。」
「明日の予定だが、２番機だけ修理が掛かりそうでな。」
「１番機、３番機だけ先に帰えれと言うのですよ、ウチの四天王様が・・・」と山中。

「なんなら死龍の護衛、俺がやってもいいぜ！」
「ロクを欠けたＰ６からダブルまで、借り出したらＰ５四天王の名が泣くわ！」
「しかし、虹１隻では・・・」
「護衛は１と３に付けてください。よくて？加藤司令？」
「こちらは誰を出してもいいが・・・３隻が揃ってからでもいいじゃないか？」
「Ｐ５にはＰ５の都合もあるのよ。」
「まあ、そう言うな死龍。実は虹について頼みがあるのだが聞いてはくれんか？」

「２番機ですか？あの大型砲台の件・・・直接砲台にする？とかでしょうか？」
「ふむ・・・さすが死龍に交渉は無意味なようだな？相変わらずこちらの心を読む。」

「いえ、あんなポンコツでよければ使ってください。」
「そう言ってくれると助かるよ・・・」
「はい。私がＰ６の指揮を取るのであれば、私もそうしてましたし・・・」
「しかし、砲台を降ろせないのは１番機でな。」
「必要なのは１番機・・・」

「そういう事だ。」
「仕方がないです。元々虹はポリス共有の物です。」
「承知してくれるか？ならば高橋にすぐ伝えよう。」
「高橋技師長、まだおられましたか？」
「元エースも、今はＰ６に無くてはならないメカニックだ。」
「出来ればその現場、後で立ち合わせて下さい。技師長にも久しぶりに会いたいので。」

「よかろう。」
「では我々は予定通り、修理後に出発します。いいな山中艦長、富久艦長？」
「分かりました。」と二人。

「で？護衛はどうする死龍？」とダブル。
「うーん・・・ダブルは悪いわね。バズーのアシカとかオットセイがどうのこうのってのでいいわ。」
「アシカムね・・・」と寂しそうにバズー。
「あら失礼！うん、それそれ！」
「ダブル、見事に振られたな！」とニヤつくキーン。
「ちぇ！」
「うふふ・・・やっぱりＰ６はいいな・・・」
死龍は久々の里帰りに笑みが絶えなかった。

Ｐ６地下６階ポリス専用医療室。ロクがベットに寝て天井を見ている。天井はガラス貼り。ガラスの向こうに証明があり、ロクの部屋を微かに照らしている。ロクはぼんやりその天井を見ていた、そこへ聖が入って来る。
「寝れなそうね？添い寝をしてやろうか？」
「間に合ってるな。」

「うふふ・・・あの娘と何かあった？」
「あっ！？」

ロクは慌てて飛び起きようとする。
「隠し事は苦手のようね？それも恋愛も？」
「ああ、迷ってますよ。真剣にな・・・」
「そうなんだ。本気なんだ・・・」
「あんたにはヒデがいるんだろ？」
「あの人はね。あの人は・・・」
「手が届かない、ガラスの天井だろ？」
「え？」
「ここの天井、ガラスなんだぜ。あいつはそんな奴だ。手が届きそうで届かない。そして人一倍壊れやすい。」

聖はロクの見ていたガラス天井を見上げた。
「憧れだったんだ？ヒデって。」と聖。
「ガキの頃はな。みんなあいつが目標だった。」
「ＳＣの運転、統括力、銃の腕前、仲間を思う心・・・確かにそうね・・・」
「なんせ、１期生では死龍と並んで主席だからなー。」
「死龍？Ｐ５の女四天王？」
「よく知ってるな？」
「有名じゃない！あいつそんな中で生きていたんだね？」
「なんだ、何にも知らないんだな。奴の事？」
「そうだね。はるかに遠い存在なんだね。あいつは・・・」
「かもな・・・」

Ｐ６地下３階ジプシー専用医務室。書類整理に追われる関根の所に、一人の医療服を着た女性が慌てて入って来る。

「関根主任！大変です。」
「どうした？慌てて？」
「こ、これを！？」
関根は黒いボードを手渡された。
「こ、これは・・・死龍が・・・まさか！？」

ポリスの地下通路を一人歩く死龍。しかしその歩きはおぼつか無い。時折、壁にぶつかり咳き込んでいる。
「ふう・・・まだだ・・・まだ終われない・・・こいつの運命を見届けなければ・・・」

その２３　死龍の謀反

Ｐ６ポリス大会議室。久弥、弘士、曽根に加え、高橋、バズー、ダブル、キーンの姿がある。そこに死龍、山中、富久が遅れて入って来る。死龍は真っ先に高橋のそばに近寄った。
「高橋さん！」
「手榴・・・いや今は死龍だったな。」
「手榴でいいです！お元気そうで何よりです。」
「相変わらず足だけはしんどいがな・・・」
高橋は自らの左足を2、３度叩いて見せた。

「後で作業を見に行こうと思ってましたが・・・」
「おお、手伝ってもらおうか？」
「ロクとダブルの新しいジャガー見ました！凄いですねＳＣにエアーブースターを取り付けるなんて・・・」
「ダブルが、ロクのカストリーよりも速いＳＣを作れって毎日うるさくてな。」
「うふふ・・・まあこの２人ですもの・・・しょうがないですね。それで虹にあの砲台を取り付けるのですか？」
「レヴィア用の５門は取り出せるんだが、虹の格納庫の扉が、ここに来るまでの戦闘で開かなくなってな。」
「すいません、私の指揮が至らず・・・」
「構わんよ。それで、このまま虹に取り付けたらどうかと、親父さんに相談したんだ。」

「虹は両軍のものです。是非使って下さい。」
「そう言ってくれるとありがたい・・・」

「・・・そろそろ、みんな集まったようだな？」

「では会議を始める。席に着いてくれ・・・」

死龍たちも久弥の向かいのテーブルに腰掛け始めた。

「では高橋技師長！」

「はい・・・今、Ｐ５の死龍にも了解を得たのですが、虹の三角の１番機の不具合により、せっかく運んで頂いた新兵器を下ろすことが出来なくなってしまった。」

死龍は黙ったまま一礼をした。

「よってこのまま虹を利用をし、虹を移動砲台とする事を提案しました。」

「異議はないか？」と弘士。

「・・・」

「異議なしという事で、早速これについては技師長にやってもらおうか？」

「了解しました。それで・・・現段階ではこれをソーラーキャノンと呼んでますが・・・」

「ん？」

会議に無関心だったバズーの目が高橋に向けられた。

「この新兵器の新しい愛称があれば、何かいい名称がありますでしょうか？」

「おっ！」

ダブルが挙手をし、席を立ち上がると皆に意見をする。

「はい！太陽熱を利用するんだろ？なら太陽砲はどうでしょうか？」

「ソーラーをそのまま残してソーラー砲では？」とキーンも続いた。

「開発段階のソーラーキャノンも捨てがたいな・・・」と死龍。

「じゃあ二つを足して太陽ソーラー砲！どうでしょう？司令？」

「んー、意味一緒だろ？」とダブルに突っ込む弘士。

その時だった・・・バズーが初めて口を開いた。

「お前らさ！」

「うっ・・・」

「センスが足りないんだよ。」

「くっ・・・」

「どうでしょう司令！？一発射撃砲はどうでしょう？」

「えっ・・・？？？」驚くダブルとキーン。

「ん・・・いいゴロだなそれ！」と弘士。

「えっ！？」

「どうだよ！お前ら！」黙る他の者に対して弘士が問う。

「いや・・・司令・・・それはどうかと・・・」とダブル。

「そうそう、みんなの期待を乗せる新兵器ですよ司令！？もっと検討を・・・」とキーン。

「なんかおかしいか？」と弘士。

「おかしいと言うか・・・ゴロがいいってどうなんでしょうか？どうだいキーン？」

「そうだな・・・」

「異議ある方は、挙手をお願いします！」とバズー。

誰も手をあげない会議室。

「ではこの新兵器の名は一発射撃砲に決定しました！」

「おいおい・・・」

「またかよ・・・」

「うふふ。ロクがいたら、あららね・・・」と死龍。

会議室を出て廊下に出るダブルとキーン。2人とも会議の内容が気に入らなかったのか、不機嫌な顔で出て来る。
「一発射撃砲発射!とか言うのかなみんな・・・良かった。俺、陸戦兵で・・・海兵の奴等可哀想だよ。特にレヴィアに乗る艦長は、ちょっと恥ずかしくないか?」とダブル。
「会議の時だけはあの2人、妙に気が合うというか。」
「そう言えば、バズーの“アシカム”の名前を付けた時の会議って・・・」
「ああ!あの2人だ・・・」

すると、遅れて会議室からバズーが出て来た。2人を見つけるとすぐ後ろを追いかけて来た。
「あれ~お二人さん?なんか俺のネーミングに不服みたいですが・・・?」
「そんな事ねぇよ・・・」と不機嫌なダブル。
「司令のセンスの問題かな?」と冷静なキーン。
「あれ?俺のセンスが悪いみたいじゃん!」
「悪い!!」二人は声を大にしてバズーに叫んだ。
「な、なんだよ!2人して!」

会議室から出ようとしている弘士と久弥。
「司令!親父さん!少しいいですか?」
「ああ。」
「どうした死龍?」

「先に行っててくれないか？」

死龍は山中と富久に声を掛けると、２人は先に会議室から出て行った。会議室は３人だけとなる。弘士も久弥も死龍の様子を見て、一度立ち上がった席を座り始めた。

「ここなら、いや司令達なら知っていると思いまして？」

「ん？」

「何をだ？」

「まず、私がＰ５に移動した時・・・私の医療カルテがなかったんですが、こちらに保存されてますか？」

「カルテか？そっちに持って行ってないのか？」

「私のだけではありません。ボブもトリプル、ダンのもです。なぜＰ６組のカルテがないのでしょう？」

「どういう事だ？」

「向こうの司令に聞いても、こちらに置き忘れたのではないかと・・・」

「そうかもしれないな・・・探させよう。」

「なぜ移籍した我々だけ？偶然ですか？」

「関根の所にでも混ざったんじゃないか？ポリス組ではなくジプシーだからな。」

「そう・・・ですか・・・？」

「至急確認をさせよう・・・」と久弥。

「それと・・・」

「ん？」

「教えて欲しいのです・・・」

突然、死龍は腰の拳銃を久弥に向けた。

「死龍・・・」

「私の・・・残された時間を・・・」

「時間・・・？」
「・・・」

四天王　第三章　死龍覚醒　完

第四章　予告

【物語は前半戦最大の山場に突入！】

【ポリスゲートに、激突するジプシャン軍サンドシップ！】
久弥「特攻か！？」
【ポリス最大・最悪の白兵戦！】

タケシ「俺は総帥の座はいらない！欲しいのはただ一つ！雷獣の首だ！！」
【全てを捨てたタケシ！捨て身の作戦！タケシＶＳロク遂に決着！】
タケシ「本当の四天王に逢いに来た・・・」

【タケシがロープでエレベーターシャフトを降下する。】
弘士「地下に侵入されたのか！？」

【タケシと直美の過去が・・・】
直美を羽交い絞めして直美のコメカミに銃を付けるタケシ。
タケシ「動くな、この女を殺す。」

【遂に明かされる女スパイ瑠南花の正体・・・】
桑田「銃を置きなさい！女スパイ！そしてヘルメットを取りなさい・・・」
ヘルメットを脱ぐ瑠南花。

桑田「やっぱりあなたが・・・」

【囚われた死龍・・・】
手錠を掛けられ投獄させられる死龍。

【そして、次々に傷ついていく仲間たち。キーンが・・・】
炎上爆発するキーンのバイク。吹っ飛ぶキーン。
ロク「キーン!!」

ロク「人前で泣くんじゃねぇ!」
バズーを殴り倒すロク。

【死龍が・・・】
ロク「死龍!!」
爆発に飲まれる死龍。
ロク「お前の、未来と銃は俺が引き継ぐ・・・」

【そして桑田も・・・】
桑田に銃を突きつけるタケシ。
【桑田死す・・・!?】
タケシの銃弾に倒れる桑田・・・
塀の上で泣き叫ぶロク。
ロク「うわーっ!!」

【逮捕されるロク】
ダブル「ロク・・・お前を逮捕する・・・」
ロク「・・・」

ロク「俺が四天王・・・P6の四天王のロクだ!!」
タケシに銃を向けるロク。

【未来は誰が引き継ぐ？】

直美「誰も死なないでー！！」

次回　四天王　第四章『住所のないラブレター』

その1　死龍とミュウと

死龍が久弥に銃口を向けていた。弘士は慌てて腰の拳銃を抜こうとする。
「待て！弘士！」久弥が止めに入った。
「なんの真似だ！死龍！？」と弘士。会議室内は緊迫した。

「ポリスは何を隠してるんだ！？」
「隠してるじゃと？隠している事は何もない・・・銃を降ろすんだ。」
「ここ数年、独自に調べていた・・・重要資料はことごとく削除されている・・・ポリスに・・・」
「どういう事だ？」
「こちらのセリフだ！ポリスは何を隠してるんだ！？」
「・・・」下を向く久弥。

「そこまでだ！死龍！」
死龍の頭に銃口を突きつけたのは腹部を押さえたロクだった。
「ロク・・・！」
ロクは息が荒く、額にあぶら汗をかき、撃たれた横腹を押さえながら死龍の頭に更に銃を近づけた。
「銃を捨てろ！」
「ロク・・・」

死龍は諦めて銃を降ろした。弘士はすぐ近寄って死龍の拳銃を取り上げた。
「どうしたんだ？死龍？なぜ親父さんに銃を向けた？」
「相変わらず、気配を消して後ろに回りこむ・・・さすがね。でも今回の件はあんたには関係ないわ・・・」

死龍は崩れるように、その場のイスに座り込んだ。
「助かったよ・・・ロク・・・」と弘士。
「いえ、麻酔が切れそうで関根さんを捜しにたまたま通りかかり・・・死龍！説明しろ！」
「・・・」久弥は黙って死龍を見つめる。
「何か隠してるのよ・・・ポリスは・・・」答えが一点張りの死龍。
「どういう事だ？死龍？」

弘士が呼んだのか、３名程の機銃を構えた若い兵が会議室に入って来る。
「取調室に、この女を連行しろ！」と弘士。
「司令！どういう事だ？死龍の言い分も・・・」
「どんな理由でもここで銃を向けたのは重罪だ・・・」
「司令・・・」
「いいのロク。構わないで。こうなるのは最初から分かっていた。」
「死龍・・・・・おやじさん！？」

ロクは久弥に助けを求めた。
「連れて行くんだ・・・後は取調べる！」
「おやじさん！死龍が何をしたって言うんです！？」
「それは、あとで調べる。」
「おやじさん・・・？」
兵に連行される死龍。部屋から出る際、ロクの方を一度見つめ微笑んだ。
「死龍・・・」

Ｐ６ポリス専用食堂。キーン、バズー、ダブルが軽食を取っている・・・そこへ兵がやってきて３人に耳打ちする。

「何！死龍が！？」とダブル。
「拘束ってどういう事だ！？」とキーンも慌てた。
「高速ってなんだよ！何が早いんだよ！」状況がわかっていないバズー。

Ｐ６の指令室。人が続々と集まってくる。その中には、山中や富久の姿もあった。ロクは桑田の席で頭を抱えていた。
「どういう事です！？」と富久艦長。
「会議室でおやじさんに銃を向けた。それで拘束した。」
曽根が詰め寄るＰ５の兵らに説明している。
「我々が聞きたいのは、なぜ死龍が銃を抜いたかです！」と山中艦長。
「それをこれから調べる！！」

そこにキーン、バズー、ダブルが入って来る。
「なんだこの騒ぎは・・・ロク・・・？」
ダブルは桑田の席で、頭を抱えていたロクに気づく。
「何があった！？ロク！？」
ロクが顔を上げると、３人を見つめる。
「死龍を拘束した・・・」
「どういう事だ？」とキーン。

その時、４人に指令室の我妻が近寄る。
「あの・・・」
「何だ！？」
「司令がダブルさんを呼んでます。」
「俺？」
「はい・・・死龍さんの取調べに立ち会って欲しいと・・・」
「すぐ行く」

ダブルだけ指令室を出て行く。

ポリス取調室前。部屋の前には銃を持った兵がいた。ダブルは部屋に入ろうとする。
「ここか？」
「ダブルさんはここをと頼まれております。」ダブルを制止する兵。
「ここって？廊下か？取調べを立ち会えって言われたんだ！」
「相手は、Ｐ５の四天王です。後方支援を！」
「死龍がそんな真似するか！？司令は？」
「隣の部屋ですが、立ち入りは・・・」
「ふざけるな！来た意味がない。死龍に会わせろ！」
「取調べが終わるまでは・・・」
「誰が取調べを？」
「前司令です。」
「くっ・・・」
ダブルは諦めて廊下に立ち尽くす。

取調室。死龍と久弥が向かい合っている。死龍の両手には手錠が繋がれ、後ろには機関銃を持った兵が２名いる。
「黙っていては、わからんぞ死龍・・・」と久弥。
「・・・」
「ポリスは何も隠してはせん。」
「信じられません・・・」

取調室の隣で、この２人のやり取りをモニターで見つめる弘士や兵士たち。
「死龍は何を疑ってるんだ・・・？」

部屋の内線が鳴る。弘士の隣の席の兵が受ける。
「司令、関根主任からです。」

「関根か？なんだ？」内線を変わる弘士。
『司令ですか？死龍から・・・ミュウ反応が・・・』
「死龍から？間違いないのか？なぜ検査した？」
『念の為というか・・・検査を勧めていたの・・・』
「そういう事か・・・分かった。この事は内密にしてくれないか？」
『分かりました・・・』
内線を切り、再び内線を掛け直す弘士。
「地下６（ロク）医務室につなげ。」

取調室。
「死龍？残された時間とは何だ？」
「私は・・・ミュウです・・・」
「なんじゃと・・・？」
「ミュウは、ジプシーからしか出ない。過去ポリスから出た例がない。私は色々なミュウを見てきました。みんな口から血を吐いて、最後は死んでいく・・・」
「その制服の血は・・・？」
「ここに来る際、吐血しました。」
「そうか・・・」
「吐血は、今回が初めてではありません。」
「いつからか？」
「４ヶ月前からです。」
「Ｐ５の医師は、なんと言ってる？」
「カルテがないの一点張りで、詳しい説明はしてもらえず・・・それで独自に調べました。ポリス側がカルテを削除していたのです。」
「カルテがないだと？ポリスが削除？向こうの司令は何と言ってお

る？」
「私の口からは・・・恐らく医師からは耳に入っていると思います。」
「治療はしなかったのか？」
「向こうは医療薬が乏しく・・・」
「なぜすぐＰ６に来なかった？」
「あのＰ５の状況では・・・みんな生きるか死ぬかの状況ですから・・・」

「こちらで、すぐ詳しく検査をしよう。」
「もういいです。ミュウは吐血してから半年も持たず死んで行きます・・・私も同じように・・・」
「勝手に判断するな！馬鹿もんが！」
「おやじさん・・・」
「お前を、死なせはせん！地下６に移させよう！」
「私も戦士です。ベットでは死にたくはありません！」
「死龍、昔から・・・強情だな？」

Ｐ６指令室。指令室内は先程から比べるとやや静かになっていた。ロクらの姿はなく、指令室は正常に動いていた。
「ん？これは？曽根参謀！」柳澤が何かを発見する。
「なんだ？」
「北ゲートの監視塔からの赤外線映像です。」
「中央スクリーンへ！」
「はい！」

赤外線映像が中央スクリーンに映し出される。
「こ、これは！？」

その２　隔離房

Ｐ６指令室の中央スクリーンに映し出されたのは赤外線映像で撮影された巨大な砂埃だった。
「何だこれは！？」
「１５分前の静止画です。距離不明。敵古川基地方面と思われます。」
「レーダーは！？」
「まだ何も映ってません！」
「どういうことだ？竜巻ではないのか？」
「気象レーダーには何も・・・この映像から計算しますと、砂埃は５００メートル以上。恐らく２００メートル級の敵サンドシップのいやそれ以上かと・・・」
「こいつの進路方向を計算しろ！」
「はい！」
「我妻、司令を呼び出せ！」
「はい！」
「んー、桑田、松井を呼び戻せ！それと黒豹の山口を偵察に出るように伝えろ。」
「はい！」
「第１次警戒警報発令だ！」

虹の三角１番機が入る大型ドック。高橋と桑田が打ち合わせをしている。そこへ松井がやって来た。
「我妻さんから連絡。指令室戻れって！」
「何ぃー！こんな忙しい時に・・・」
「わかったわ！やっと戻れる・・・」と桑田。
すると小さいながら警報が鳴る。

「第1次警戒警報・・・？」不安な顔を見せる桑田。
「こんな時に敵かよ！」呆れる高橋。
「恐らくタケシよ！敵も必死なんですよ！」
「おっ！言うようになったね～。」
「なつみ！早く行くよ！」
「うん！技師長スイマセン！」
「おお、後は任せろ！」

Ｐ６指令室。
「黒豹出ます。」
「よし出せ！」

そこへ弘士と久弥が入って来る。
「どうした！？」
「敵のサンドシップと思われる映像です。」
「これは・・・竜巻の可能性は！？」
「気象レーダーには反応はなく！」
「司令、参謀！出ます。敵ルートです！」
「出せ！」

中央スクリーンにはＰ６周辺の地図と、この不明物体の予想進路が出てくる。
「これは？」
「Ｐ６じゃないか！？」
「１時間２０分後到着予定。ちょうど夜明け前です。」
「偵察に黒豹を出した所です。」
「バズーのアシカム発進用意。」
「Ｐ７に連絡、２番から４番の３隻のレヴィアをこちらに向かわせろ！」

「はい！」
「松井と桑田は戻させましたから。」
「任せる！」
「赤外線がなければ夜襲をかけられた所です・・・」
「そうだな・・・山猫は待機だ！」

取調室から死龍が2名の兵によって連行されて行く。ダブルが死龍を引き取る。
「後はいい・・・俺がする。」
「いえ！我々が地下6階に護送します。」
「地下6だぁ！？どういう事だ！？」
「司令の命令ですから・・・」
「ったく！何でもかんでも命令かよ！」

死龍はようやく顔を上げ、ダブルの顔を見つめた。
「死龍・・・」
「すまない・・・」
「どうしたんだ一体？」
「暫く入院さ・・・」
「入院？なんでだ！？なぜ拘束された！？」
「そ、それは・・・」
すると、別の兵の一人がダブルに近寄った。
「ダブルさん。山猫出撃準備だそうです。」
「どういう事だよ、次から次へと・・・」
「敵サンドシップがこちらに！」
「今度は船かよ！」

P6地下6階ポリス専用医療室。死龍が手錠をしたまま、3名の

兵に連れられて入って来る。それを見つけるロク。
「死龍・・・」
死龍はロクの顔も見ずに、ある部屋の中に入れられる。
「特別隔離房・・・なぜあんな所へ・・・」
ロクはベットを起き上がり、その部屋に近寄った。既に兵が1名、その部屋の前に立っている。
「死龍は、なぜこの部屋なんだ?」
「お答え出来ません。」
「ここはミュウを保護し、隔離する場所だろ?」
「すいませんが、我々も何も聞かされておらず・・・」
「司令か!?」
「はい・・・」
ロクは腹を押さえながらそこを離れて行った。

P6指令室。既に桑田、松井が自分の席に着いていた。そこへロクが入って来る。いち早くロクに気づく桑田。
「ロクさん!?まだ寝ていてください。」
「大丈夫だ!司令は?」
「奥です・・・」

ロクは指令室の雛壇を登り、弘士、久弥のいる最上段に上がった。手摺りを使わないと苦しそうだった。
「ロク・・・平気なのか?」と久弥。
「はい・・・まだ痛みますが・・・」
「そうか・・・」
「司令!なぜ死龍を地下6の特別隔離房へ?」
「これを見ろ。」

弘士は黒いボードをロクに手渡す。それを見るロク。

「これは？死龍が・・・？」
「自分でも自覚していたようだ・・・ミュウだと・・・」
「ま、間違いないのですか？」
「残念だがな・・・しかも末期だ。」

すると指令室内のスピーカーに無線が入る。
『こちら黒豹！敵ＳＣ隊と接触！後方の未確認を確認できません。』
「山口か！？」
「あまり無理をするな。こちらに戻れ！」
『了解！』
「敵ですか？」
「お前は、重症なんだ。おとなしく寝てるんだ！」
「タケシですか？」
「残念ながらサンドシップだ！いいから病室に戻れ！」
「くっ・・・」

ロクは諦めて指令室を後にしようといていた。しかし、入口近くの桑田の席に近寄った。指令室は慌ただしくなって行く。するとロクは小声で桑田に囁いた。
「俺のジャガーは動けるのか？」
その言葉に驚いたのか桑田も小声でロクに答えた。
「冗談はやめて下さい。その体で乗れるはずがないじゃないですか？死にたいんですか？」

桑田は珍しく、ロクに凄んでみせた。
「動くんだな？」
「ゲートもエレベーターも動かしませんよ！」
「ジャガーがないなら、徒歩で陸戦だぜ。」
「死龍さん、どうかしたんですか？」
「拘束され地下６にいる。」

「えっ！？」

ロクが桑田のＩＤを首から持っていく。

「借りるぞ」

「もう！傷口開いても知りませんよ！」

「なんとかする・・・」

ロクは笑顔で司令室を出て行った。

その3　ひそやかな反乱

ジプシャン軍最新戦艦が、夜中にＰ６に向かって走行している。全長は２００メートル強。幅は４０メートル程。前方に主砲を3門、後方に2門。機銃は左右に５０機程装備している。中央に高さ３０メートル程の艦橋がそびえ建つ。下部にはエアーブースターを装備し最高速度３５キロで荒野を走る、まるで砂漠の海を走る戦艦である。その小高いブリッチ中央に石森の同期の鈴木艦長がいた。歳は２０歳前後だろうか？

『敵偵察ＳＣ逃がしました！』
「くそ、勘付かれたか・・・なぜ逃がした？」
『敵ＳＣの足、意外と速く！』
「雷獣ではないのか？」
『違うと思われます。別の偵察タイプです。』

鈴木は無線を乱暴に切る。
「くっ！ストラトス部隊がいても、こんなものか・・・」
鈴木は2時間前の事を思い出していた。

ジプシャン軍古川基地のある個室。
「お前には、援護射撃をして貰いたい。」とタケシ。
「ＳＣの数は３０台程。作戦と呼ぶには厳しいですな？」
「戦いは数ではないぞ！鈴木！」と石森。
「我々は元は陸戦部隊。白兵戦はお手のもんだ。」
「ポリス相手に白兵戦？しかし命令を無視するのは。」
「姉貴に言われたら、俺に脅されたと言え！」
「タケシ様・・・」

「船の主砲でＰ６のゲートの一つを破壊すればいい。」
「しかし、この船のクルーはテスト航海もまだでして、それを兼ねてのＰ５の出撃でしたから・・・」
「お前は、次期総帥にあのツヨシになってもいいのか？」
「私は軍人です。政には関心がありません。」
「このまま、ツヨシが幅をきかせてくると南の部隊ばかりがいい目にあう・・・」

「我々は、先程石森に言ったように協力はいたします。しかし、それ以上は・・・」

「姉貴の独裁ぶりに危機感を覚える幹部もいる・・・」
「あの船と、Ｐ５にいる死神がいればジプシャンではツヨシより優位に立てる。タケシ様が総帥になられた際は、お前を軍師として迎えようと言うのだ。不服か？」
「ぐ、軍師ですか？」
「事実上のナンバー２だ。このまま一生、船の艦長として終えるか？」
「そ、それは・・・」
「石森、あまり無理を言うな。鈴木も困っているだろうが。まあ、Ｐ６に着く頃までに決めるがいい。」
「は、はい・・・」

ジプシャン軍最新鋭艦ブリッチ内。
「軍師か・・・悪くない！進路Ｐ６！全速だ！」
「了解！」
「艦内の兵に告ぐ！本艦はテスト航行を兼ね、これより１時間後、第６ポリスを攻撃する！これは訓練ではない。実戦だ！特に砲撃手！お前らの砲撃で、仲間のＳＣの援護が左右される。そのつもりで

行って欲しい！」

ジプシャン軍小牛田（こごた）新本部基地。寛子の新しい部屋に、参謀の犬飼が慌てて入って来る。

「タケシ様がやはり動きました。」と犬飼。

「動いたか？ふふっ、これでタケシを失脚させる理由が出来たではないか？どうだ犬飼？」

「先の松島湾２基地陥落でも十分な理由に・・・」

「奴は失敗を認めんだろ。しかし命令違反をこうも繰り返せば、タケシ派の幹部も黙らせれる。」

「しかし、船１隻無駄にする可能性も？しかし、こちらに向かって来る可能性もありますが・・・」

「ならばあのポリスの新兵器を試せばよいではないか？」

「恐いお方です・・・」

「ツヨシも母違いなら、タケシも母違いだ・・・」

「席はひとつ・・・」

「ここは、ツヨシを味方にしてた方が利口だろ？」

「確かに・・・」

「タケシは追撃するな。このままＰ６に行かせろ。」

「それで、もしＰ６が落ちる事になれば・・・」

「船１隻、ＳＣが４０弱・・・この戦力のどこにタケシの勝機があると言うのだ？犬飼？」飼「しかし、タケシ様を侮ってはなりません。Ｐ３、Ｐ４の戦いぶりは尋常ではありませんでした。」

「お前は随分タケシを高く買うな？あの時と状況が違う。今のタケシでは、Ｐ６は落とせんよ。」

「戦略だけではありません。奇襲や行動力、兵の信頼も厚いのがタケシ様かと・・・」

「確かにタケシは恐ろしい男よ・・・しかし、我が軍有利の戦況・・

・戦が終わればこの地にタケシは不要だ・・・」
「はい・・・」
「問題はタケシにどう後引きさせるかだ・・・」

Ｐ６指令室。
「黒豹より入電！」
「繋げ！」
「はっ！」
『こちら黒豹。敵のＳＣが前方に展開しつつ・・・』
「で？」
『大型の砂煙を上げてる奴に近づけません。』
「そうか、迂回しつつ再び様子を探れ。無理をするな。」
『了解。』

無線が切れ、席に座る弘士。
「わしはレヴィアに向かう。」
「しかし・・・」
「艦同士の戦いとなるだろう・・・」
「策士ロクを欠けた作戦になるはずです・・・ここにいては貰えませんか？」
「うむ・・・後は桜井にでも任すか・・・我妻、桜井に連絡！レヴィアはポリスの北東３キロに待機だ。」
「了解！」
「夜明け前だが、街に避難警報だ！いいな弘士！」
「え、ええ。」
「敵ＳＣの数によっては、風神隊も出すぞ！」
「キーンは実は今・・・」
「分かってるよ。わしもその方がいいと思っていた。」
「前司令・・・」

「バズーは西に待機だ。街の避難急げよ！」

夜明け前の街に避難警報が高らかに鳴り響いた。北ゲート近くの塀の上には、兵士が集まり機銃を北に向かって構え始める。バズーの乗るアシカムが大型エレベーターによって地上に上がって来る。北ゲート前にはダブル率いる山猫隊のＳＣが集まり始めた。時同じ頃、同じ軍事ゲートである東ゲートには、キーン率いる新生風神隊のバイク部隊が集まってくる。

「懐かしいメンバーだな・・・」

その頃、太平洋上に停泊していたＰ７より、レヴィア２番艦から５番艦がＰ６に向かって発進しようとしていた。

２番艦レヴィアブリッチ。

「５番艦はどうした？」

「楠本さんより、もう少し時間をくれと言ってます。」

「訓練兵ばかりだからな・・・テスト航海もなし。仕方ないな。５番艦は遅れて来させろ。Ｐ６の戦力では、今は少しの火力が欲しいはずだ。１番艦は主砲は１門しかないんだからな！２番から４番艦だけで出発する。」

３隻のレヴィアはＰ７を離れ、海水に潜行する。

ポリスの街。一つのエレベーターの扉が開く。するとそこから現れたのは、ロクの乗るジャガーカストリーだった。ロクは既に軍服に着替え、ハットとコートを纏っている。

「さーて・・・行きますか・・・？」

ロクはギアを入れアクセルを踏んだ。

その４　決意の出撃

Ｐ６指令室。
「ん？西ゲートから？・・・ん？ジャガー出てます！」
「あの馬鹿たれが・・・」

桑田は小声で呟いた。
「どうしてロクが出撃してんだ？く・わ・た？」
「あ、あれ～ど、どうしてでしょうね？あははは・・・今呼び出しますよ。」
「何してんだ！？重症だろ？早く呼び戻せ！」
「こちら指令室桑田。黒豹聞こえるか？」
『はい、こちら黒豹山口！指令室どうぞ。』と山口。
「あんたじゃないのよ！すぐ無線切って！・・・黒豹ヘッド聞こえて！」
『こちら黒豹・・・どうぞ！』と今度はロク。
「何してんですか？司令怒ってるじゃないですか！？」

桑田は小声でロクに話しかける。
『ああ、テスト走行。テスト走行・・・』
「テストって・・・戦闘配備中ですよ。」
『山口を見つけたらすぐ戻る。武器も積んでないしな。』
「なんて司令になんて言い訳するんですか？」
『テスト走行、テスト走行・・・じゃあ切るぞ。』

ロクは一方的に無線を切った。
「あ・・・あ・い・つぅー！」
「どうした桑田？ロクは？」と弘士。
「な、なんかテスト走行に、行くって言ってますね・・・はい・・・

」
「ロクは撃たれたと聞く。もう車に乗れるのか?」と久弥。
「先生の話では、今は麻酔が効いてるんですが、麻酔が切れると徐々に激痛に襲われるようで・・・」
「奴の事だ、出来の悪い山口でも救いに行ったんだろ?」
「恐らく・・・ほんと自分の仲間の事になると見えなくなるんだから・・・」

ヒデの乗ったストラトス。タケシと石森のストラトスもすぐ側を走っている。なぜかこの3台だけは、仲間の後方3キロの位置にいた。
「こいつ・・・思った以上のパワーだ・・・嶋はこんなモンスターマシーンを操っていたのか・・・」

ヒデは新しいストラトスを、1個1個確認しながら運転をしている。すると無線が入る。
『どうだヒデ?』とタケシ。
「はい、思った以上のパワーです。」
『戦前のマシーンだが、それなりの改造をしている。早さとパワーを兼ね備えるSCは、こいつ以外にない。』
「確かに・・・凄いです。乗って初めて実感しました。」
『派手に行くぞヒデ、新生ストラトスの初陣だ!』
「ははっ!」

ロクのジャガーカストリー。ロクは夜明け前の荒野を走っている。すると前方に、上空部分のみ朝日の光に映し出された巨大な砂煙を発見する。
「こいつか?かなり上空まで上がっている・・・敵のサンドシップ

にしては大き過ぎるだろ・・・なんだ?」
ロクは突然顔をしかめ腹部を押さえた。
「くそ・・・こんな時に・・・」

それは今からたった３０分前の事だった。関根がいるジプシー専用の医務室にいた。
「馬鹿を言わないでロク!」と関根。
「馬鹿を承知で言ってます!!」

２人はそう言うと睨みあった。
「あなたは、重態なの!鍛えてなければ普通は歩く事も出来ないのよ!」
「わかってます!」
「わかってない!今はまだ麻酔が効いてる。でももう麻酔も切れ、激痛が走るわ!」

「だから、痛み止めの注射を・・・」
「わかってない!命に関わるのよ!今は安静に・・・」
「ここがなくなったら３万人のジプシーたちは路頭に迷う・・・命すら危ない・・・それを見過ごせません。」
「あんたね・・・・・・もう!言ったら聞かないもんね・・・昔から・・・」

関根はロクの真顔を見て諦めた。
「すいません。」
「傷口が開いたらすぐ戻るのよ。それと・・・」

関根は後ろにあった戸棚から注射器を3本取り出すと、ロクの前に置いた。

「麻酔が切れたら、傷口に直接打ちなさい。ほんと、あんたみたいな無謀な男初めてよ！」
「恩にきります。」
「効果があるまで１０分掛かるのよ。量も間違えないで！それと指令には、私が渡したって言わないでよ。」
「はい、ありがとうございます・・・では。」
ロクは医務室を出て行く。

ロクは注射器を取り出し、注射器の１本を口に咥えた。そして制服を上に捲くり上げ、包帯の上から直接患部に注射器を突き刺した。

Ｐ６指令室。松井が隣の席の桑田に小声で話しかける。
「よく、あの曽根の親父が私たちを戻したわね？」
「そうね・・・」
「あら？またロクさんの事考えていたでしょ？」
「うん・・・そ、そんな事ないわよ！あんな人！」急に怒り出す桑田。
「でもロクさん大丈夫なの？」
「あの人なら心配ないわ・・・」
「たいした信頼よね、あなたたち。」
「あなただってどうなの？」
「どうって？・・・私は一方的な片思いだもの・・・」
「ちゃんとキーンさんに気持ち伝えた？」

赤い顔をする松井。
「なつみみたいに積極的に出来ないわよ。で、手紙渡したの？」
「まだ読んでないって・・・」
「意外と無神経ね、あの人・・・」

「でもね、あの人は・・・あの人はね。私に生きるって悲しいことばかりじゃないって事を教えてくれた人なの・・・」

その時、柳澤が叫んだ。
「敵サンドシップ捕らえました。」
「方位は？」と弘士。
「北北西約１０キロ、ＳＣは約３０台。サンドシップと同行してます。」
「我妻？第１次戦闘配置。街の避難は終わってるな？」
「はい！」
「ＳＣの数が少ない・・・」
「別働隊がいるな。柳澤よく探せよ！」と久弥。
「はい！」
「風神隊は西方面に待機！」と桑田。
「了解！・・・風神隊、発進して下さい。」と松井。
『風神出る！』
「気をつけてください。」と松井。
『おお。』
「山猫出ます！」
「アシカム出ます！」

北ゲートから次々と出て行くＳＣ部隊。各隊は各四方に分かれて走って行く。
「各車いいか？戦いは艦隊戦が中心となる、我々は敵ＳＣの壊滅だ。いいな！」　とダブル。

その頃、ジプシャン軍の最新鋭艦にロクのジャガーカストリーが近づく。
『敵ＳＣ接近！雷獣と思われます。』

「タケシ様は？」と鈴木艦長。
「後方３キロに位置！」
「報告だ！？」
「はい！」
「ＳＣ隊は艦の後方へ下げさせろ。」
「しかし・・・」
「タケシ様以外のＳＣが敵う相手ではない。いくら雷獣とはいえ、この船は襲っては来ない。」
「はい！ＳＣ隊後退してください。」

ロクのジャガーカストリー。
「ＳＣが下がった？妙だ？」

Ｐ６指令室。
「黒豹！敵サンドシップと接触！」と柳澤。
「誰がテスト走行だって！？く・わ・た・・・ロクを呼び戻せ！」
「は、はい！もう！何がテストよ！あいつったら！」

ロクは敵サンドシップから砲撃されていた。
「雷獣！足が速く・・・機銃が・・・」
「機銃は何をしている！？敵は１台だぞ！」
『そいつは俺の獲物だ！』とタケシの無線。
「タケシ様！？」
後方から来たのはストラトスの３台だった。

ロクのジャガーカストリー。

「ストラトスか!?タケシ!?しかも3台?1台は潰したはずなのに・・・」

タケシのストラトス。

「少し遊んでもらうぞ・・・雷獣よ!」

その5　新・三方魚雷

ヒデのストラトス。
「雷獣だと!?この間の機銃の手応えはなんだったんだ?確かに当たったはず・・・奴は不死身なのか?」

ロクのジャガーカストリー。
「3台?手勢に補欠でもいたか?」
ロクはふとストラトスのコクピットを見る。するとヒデが運転するのを確認する。3台は、ジャガーに間を詰めて行く。
「ヒデが・・・ストラトスに・・・?厄介だな。囲むつもりか?・・・また同じ技か!?」

タケシのストラトス。
「雷獣が・・・いくぞ!新・三方魚雷だ!」
『おう!』と石森
『おう!』とヒデ。
ストラトス3台は一斉にロクのジャガーに突撃を仕掛けた。

ロクのジャガーは、三方同時に突っ込まれる。
「3台いっぺんにかよ!くそっ!」
慌てたロクは、急いでエアーブースターのスイッチを入れた。ジャガーの周りからたくさんの砂煙が放たれた。砂煙は以前とは違って、ジャガーの周りを竜巻のような形をしてジャガーの上へと伸びて行く。

タケシのストラトス。タケシはその砂煙の様子に慌てて無線を飛

ばした。
「ま、待て！」とタケシ。
ジャガーはタケシたちの前で巨大な砂煙を起こしたが、すぐ砂煙が消えるとそこにジャガーの姿はなかった。
『や、奴が消えました・・・』と石森の無線。
「ば、馬鹿な・・・」

するとタケシらの後方でズドンという音がすると、いきなりジャガーが後方に現れた。

「なにぃ！？後方だぁ！？」

ロクのストラトス。
「いたたた・・・」
ロクは車の衝撃で自分の腹をおもわず押さえた。片手でハンドルを操り、車体を立て直した。
「お前・・・やれば出来る子・・・しかし、バッテリー消耗するなー。まだ夜明け前だぜ。」

タケシのストラトス。
「橋を飛んだ時の技か！？」
『しかし、車体を飛ばすパワーですか？』と石森。
『後方！奴が突っ込んできます！』とヒデ。
「くそが！散れ！」
後方から突っ込むジャガーに対し、ストラトス3台は三方に散り始めた。

ロクのストラトス。
「逃がすかよ！」
ロクはジャガーのギアをトップに入れた。

ジプシャン軍最新鋭艦ブリッチ。
「間もなくポリスが射程距離に入ります。」
「敵は？」と鈴木艦長。
「左舷敵戦艦１隻。右舷に敵バイク隊！正面にＳＣ隊多数。」
「砲撃用意！目標敵北ゲート！」
「了解！第一主砲、目標敵北ゲート！」

ポリス指令室。
「敵戦艦、間もなく射程距離に入ります！全速力でこっちへ向かって来ます！」と柳澤。
「具体的な場所は分かるか！？」と弘士。
「北ゲート方面です！」
「敵ＳＣは！？」
「後方、変わらず！」
「ロクは！？」
「敵ＳＣと交戦中。ストラトスと思われます！」

「ストラトス・・・」桑田は柳澤の方を向く。
「桑田！ロクはどうした！」と弘士。
「は、はい。帰還命令は告げましたが・・・」
「ったく・・・何してる！？もう一度連絡だ！」
「て、敵！砲撃です！」と柳澤。
「我妻！レヴィアに応戦させろ！」
「はい！」

ポリス北ゲート付近。ジプシャンのサンドシップからの砲撃により被爆し始める。

レヴィア1番艦ブリッチ。
「多聞！敵の砲塔を狙え！方位右３２度！距離二千八百！」と桜井。
『了解！』と内線の多聞。
「てぇー！」
レヴィアの砲撃がジプシャン軍のサンドシップを捉えた。

ジプシャン軍最新鋭艦ブリッチ。レヴィアの砲弾を受け、ブリッチは混乱していた。
『第２砲塔被弾！』
『左舷第１４機銃大破！』
『左舷第三高角砲に火災！』
「敵のサンドシップからの砲撃です！」
「ゲートはまだか！？」と鈴木艦長。
「塀部分は破壊しましたが・・・」
「よく狙え！ゲート一つ何してる！？」

タケシのストラトス。
「ゲートはまだ破壊出来ないのか！？」
『もうしばらく・・・』と無線の鈴木。
「ＳＣのバッテリーに限界がある。急げ！！」
『了解！』

ロクのジャガー。ストラトスの1台を追いかけている。
「タケシ？逃げているのか？なぜ敵ＳＣ隊が前に出ない？・・・夜明け前だ、これ以上ブースターは使えない・・・」
ロクはコクピットのバッテリー計を見た。
「3分の1か・・・夜明けまであと１０分・・・」
ロクは右腹を押さえていた左手をハンドルに戻した。するとハンドルに血が付いてしまう。ロクは改め左手の内側を確認する。
「傷口が・・・さっきの衝撃で開いたか・・・？」

Ｐ６指令室。
『敵の砲撃は北ゲートに集中しつつ・・・』と無線。
「敵はゲートを破ろうとしているのか？ＳＣを下げているのはその為か？なんの為だ？松井！山猫を敵ＳＣに向かわせろ！」と弘士。
「了解！」
「ＳＣは３０台・・・なぜ数が少ない」と納得しない久弥。
「レヴィアの砲撃で、敵のサンドシップの戦闘能力は低下！」
「多聞砲撃手・・・やるな。」と久弥。

ジプシャン軍最新鋭艦ブリッチ。
『第１砲塔大破！』
『左舷機銃全滅！！』
「後方主砲！何してる、敵戦艦を黙らせろ！」
「まだ実戦に慣れてない者ばかりです・・・これ以上は・・・」
「この大型戦艦が、あんな１００メートルにも満たない戦艦に沈められる訳にはいかない！」

すると後方にあった最後の砲塔もレヴィアからの砲撃で大破して

しまう。
『第３砲塔被弾！』
『前部砲塔全滅！』
「くそ！このまま敵ゲートに突っ込む！」と鈴木艦長。
「しかし・・・」
「ゲートを破壊するだけだ！艦首を敵ゲートに向けろ！体当たりしても破壊する！」

その6　死龍脱走

ポリス指令室。
「敵サンドシップ速度上げてます。北ゲートです！」と柳澤。
「何っ！？」と弘士。
「特攻か！？」
「我妻！レヴィアに連絡！奴の足を止めろ！」
「了解！」
「速度落としません。北ゲートに突っ込みます！」と柳澤が追報する。
「機銃、砲撃！何してる！？」

元々、北ゲートは軍事用ゲートの為、ゲートの幅はレヴィアや虹の三角を出入りするため広く作られ、他のゲートから比べると頑丈に作られていた。しかし、大きく作っているせいか、復旧や修理等時間の掛かるゲートでもある。また軍事施設のゲートでもあるので、ここを破壊されるのはポリスにとっては痛手であった。弘士は嫌な予感を感じた。

レヴィア1番艦ブリッチ。
「敵が街に・・・」と国友。
「ポリスより連絡！奴の足を止めろと・・・」
「多聞！聞こえるか！？奴の後方のエアーブースターだけを狙えるか！？」
『そいつは神に祈るしかないな・・・』と内線の多聞。
「頼む！」
『あいよ！』
「しかし・・・ポリスの技術を盗んでいるのなら、奴の全てのブー

スターを砲撃しなければ、船は止まらない・・・」

ヒデのストラトス。

「友軍の船が?体当たりでゲートを壊すつもりか!?ボンクラどもが!砲撃で当てる事も出来ないのか!?」

P6地下6階ポリス専用医務室内隔離房。死龍が一人房の中で下を向き座っている。そこへドアの開く音がし、一人の女性が慌てて入って来る。まだ顔の包帯が取れない聖(ひじり)だった。

「誰だ!?」と死龍。

「ひじりと言います。ロクさんに頼まれました。」

「ロクに・・・?」

「すぐ出て下さい!兵が戻って来ます。」

「どういう事だ?」

P6指令室。

「敵シップ、接触まであと120秒!」と柳澤

「我妻!虹の倉庫で作業してる者らを避難させろ!」と弘士。

「了解!」

「松井!南ブロックの地上護衛部隊を北に回せ!」

「了解!」

「レヴィア2番艦から4番艦が上陸してます!」

「間に合ったか!?」

虹の三角の整備している倉庫内の高橋の所に連絡が入る。

「敵の船がここにか?」内線を取る高橋。

『急いで避難して下さい。』
「わかった！おい！全員避難だ！一旦地下に入るぞ！」
高橋は虹で作業中の全スタッフに声を掛ける。

ジプシャン軍最新鋭艦ブリッチ。
「間もなく敵ゲート！」
「突っ込むぞ！各員何かに掴まれ！」鈴木は自分の机にしがみ付いた。

レヴィア1番艦ブリッチ。
「多聞！砲撃止め！これ以上はポリスに当たる！くそ！間に合わない・・・」

ジプシャン軍のサンドシップが、ポリスの北ゲートに衝突する。船の中の兵たちは、余りの衝撃で倒れこむ。ブリッチにいた鈴木らも、席から放り出された。艦はポリスゲートの開閉部分の真ん中に衝突。ゲート2枚は、ポリスの内側へと倒れこんでしまった。

ポリス指令室。
「敵サンドシップ衝突！ゲート部分で停止してます！」と柳澤。
「被害は！？」
「左右のゲート倒れてます！」
「白兵戦用意だ！敵は捨身だ！」
「ん？・・・敵サンドシップ後退してます！」
「馬鹿な！？」
「後方のＳＣ隊は？」と久弥。

「山猫と接触します！」
「弘士！ＳＣ隊が来るぞ！」
「まさか、ＳＣを入れるためだけに・・・」
「敵も必死だな・・・」
「それにしても数が少ない・・・何故だ？」

ジプシャン軍サンドシップブリッチ。
「タケシ隊に連絡！目的達成！我艦はここを離れる！と無線だ！」
「了解！」
「わずか３０台だぞ・・・どうする気だ？」
「ポリスの反対側に新手の艦隊です。」
「後方副砲！東側の敵艦を牽制！ここを全力で離れる！」
「了解！面舵一杯！」
「敵ＳＣ隊と味方ＳＣ隊の中に入る！敵は砲撃をしてこない！残ってる機銃！敵ＳＣを狙え！」

ポリス指令室。
「敵艦、西側に進路！敵ＳＣと山猫隊の間に入ります！」と柳澤。
「松井！風神に追わせろ！」
「了解！」
「敵のストラトスは？」
「北３キロ、ジャガーと交戦中。」
「ストラトスが・・・なぜ来ない？」

キーンのバイク隊。
「了解！敵をポリス内に入れなければいいんだな！？」
『お願いします。ダブルさんと、バズーさんは敵戦艦に進路を阻ま

れ・・・』と松井。

「任せろ！」

キーン率いるバイク隊約４０台が、敵ＳＣ隊を追いかけた。

ポリス内の階段。死龍と聖が階段を上がっている。聖が疲れた表情で階段の途中で立ち止まる。死龍が後ろを振り向いた。

「お前怪我してるんだろ？」と死龍。

「平気ですよ・・・それより、ここどんだけ深いとこにあるんですか？しかもなんでエレベーター止まってんのよ！」

「第一次戦闘配備だ。全エレベーターは止まる。地下６階とはいえ、普通の６階分じゃないぞ。」

「ここの真上は軍事施設って言ってましたから、地下３階まで行ってジプシーの住居街まで横移動しろって・・・」

「ここで育ったんだ、言われなくてもそうするよ・・・」

「じゃあ、案内必要なかったじゃないですか！？あいつ・・・」

聖はその言葉に顔を膨らませた。

「お前もここから逃げたいのか？第一、ロクになんて言われたんだ！？」

「死龍を助けろって、あそこに居たらまずいって・・・」

「それだけか？ポリスの者には見えないが・・・」

「私？まあジプシーですけど・・・」

「察しがつくよ。行くぞ！追っ手が来る！」

「へいへい・・・」

タケシのストラトス。

『敵の北ゲートを破壊！』と石森。

「よし、各ＳＣに告げよ。全車ポリス内に突入せよ！各車ここからが見せ場ぞ！」

バックミラーにはジャガーの姿が映し出される。なぜか深く追っては来ない。

「夜明けか？奴も息を吹き返すな。今日は風が強い。」

東の空からは日が昇ってくる。荒野は砂が舞い上がるくらい風の強い日だった。

「ふふ・・・好都合だ・・・」

その7　聖と死龍

今から一時間前。
ポリス地下6階ポリス専用医療室にロクの姿があった。ロクは人目を気にしながら聖のベットに近づいた。
「お、お前・・・大丈夫なのか・・・？」
「ああ・・・頼まれてくれないか？」
「あたい？」
「そう・・・ゆっくり俺の後ろを見ろ。」

ロクの後ろには、警戒で兵一人が警備する隔離房があった。
「ああ、さっき仮面の女が兵に入れられていた。」
「しっ！」
「えっ・・・？」

2人は更に小声で話し始めた。
「今、戦闘配備中だ。だからエレベーターは使えない。兵士は階段での移動となる。」
「はいはい・・・」
「こういう場合、兵の交代が曖昧になり、ここの見張りの兵は3分程ここを離れる。」
「あたいに脱走の片棒を担がせるき？冗談はやめて！無理よ、無理無理、絶対無理！」

聖はロクの話を聞かないように、両手で耳を塞いだ。
「ドアのロックを開けるだけだ。後は死龍の好きなようにさせろ。」
「し、死龍って女支店王（してん）の！」
大声になった聖に対してロクが再び静かにのポーズ。
「支店王じゃない、四天王な！」

「見つかったら？」
「ここ？お風呂ですか？とかとか？ってかわいく演技したら大丈夫だと思うの・・・？」
ロクは可愛く演技してみせた。

「きもっ・・・私、銃で撃たれるの嫌よ！」
「なんとか・・・して。」
「して・・・って！私メリットないじゃん！」
「逃げたきゃ、逃げていいぞ。」
「ここのベット気に入ったのよねぇー。」
「頼むよ。」
「じゃあ、今度添い寝してもらおうかな？」
「なんとかする。」
「ほんと？」
「ほんと・・・」
「ほんとだからね！」
「ほんとだ。」困るロク。

「もう・・・するよ。すればいいんでしょ？・・・で？どうすればいいの？」
「これＩＤカード。」
「わかったわ。」
「頼むな。次の交代は５時だ。」
「もし見つかりそうになったら、あんたの名前とこのＩＤカード出すからね！」
「いいぜ。」
ロクはそう言うと聖の部屋から出て行った。

ポリス地下３階通路。Ｔ字の通路に聖と死龍が身を潜めていた。

周りには誰もいない様子。
「誰もいない・・・行くぞ。」と死龍。
「ええ・・・」
「で？どうしてついて来たんだ？」
「わかんないわよ！」
「ふっ・・・」

死龍は呆れていた。その顔が聖の勘に障る。
「あの・・・！？」
「何？大声出すな・・・」
「その仮面被んないとまずいの？」
「なんで？」
「逃げるのにその格好じゃ・・・目立つよね？」
「あんたに、言われたくないわ。」
「どういう事？」
「ピンクの医療着に顔面包帯姿。あんたの方が倍も目立ってるわよ。」
「あの・・・さっきからあんた、あんたって・・・顔見えないけど、あんたこそそもそもいくつよ？」
「は、はたちですが・・・何か？」
「えっ？年下じゃない！」
「だから何！じゃああんたいくつよ！？」
「２１です～。」
「大して変わんないわ。」
「１つ違えば大違い～。」
「イチイチ勘に障るわね。ロクもなんでこんな奴に脱走を手伝わせたのかしら？」

「あら、妬いてるの？私たちの事？じゃあ、また地下に戻る？」
「うるさいわね。じゃあ連いて来ないで。」

「じゃあ、ここでぇ～。」
「ああ！もう！」
「最後に・・・」
「何よ！まだ用？」
「ヒデって小さい時、どんな奴だった？」
「あんた、ヒデを知ってるの？」
「まあ・・・」不安そうな聖。

Ｐ６北ゲート付近の荒野。キーンが自分の三輪バイクから敵ＳＣに飛び移り、ソードライフルで敵ドライバーを刺す。なにかリモコンのようなものにスイッチを入れると離れたバイクが近づいてきて再び自らのバイクに飛び移った。その様子をジャガーストームから見ているダブル。

「おうおう・・・キーンよ・・・もう若くないんだからさぁ。無茶するなよ・・・」

しかし、キーンの顔は戦場で誰よりも輝いていた。キーんはバイクで近づいては、敵のジープタイプの後部機銃兵を叩き切っている。
「やっぱ、こうでないと・・・」

ポリス地下３階から地上に続く非常階段。死龍と聖が登る。
「逃げてどうするのよ？」と聖。
「さあね？ロクに聞いてよ。」と警戒してる死龍。
「ポリスに居られなくなちゃうでしょ？」
「私の心配しないで、自分の心配しなさい。」
「へいへい・・・」
「砲撃が止んだのか？」

「街、また攻撃されてるの？」
「ヒデは、危険な奴よ・・・」
「えっ？」
「ここでいいわ。この先は危険よ。地下に戻りなさい。」
「なぜ、ヒデはここを脱走したの？」
「さあね。もう語りたくないの・・・ごめん。」
「うっ・・・四天王に頭下げられた・・・」
「ロクに伝えて。ありがとうって・・・」
「わかったわ。」
「じゃあ行くわ。」
死龍は走ってポリスの住居街を走って行く。

Ｐ６指令室。
「敵ＳＣ隊の何台かは北ゲートに侵入！」と柳澤。
「何してるんだ！？」
「数１８台。街の四方に展開。」
「住居街に入れさせるなよ。」
「山猫もポリス内に入りました。」と松井。
「敵艦は？」
「射程距離外に離れてます。」
「地下の出入口、エレベーターを封鎖しろ！」と久弥。
「地下を攻めるには数が少なすぎます。」
「ならなぜ街に入った？」
「それは・・・」
「北ゲート！ストラトスです！」
「何っ！」
「来たか・・・タケシ・・・」と久弥。

その8　タケシの野望

タケシのストラトス。
『ポリス内に入ったのは18台です。』と丸田の無線。
「街の中央に集結せよ!」
『了解!』
『タケシ様!内部と連絡が取れます!短波無線を使ってください。』
と石森の無線。
「分かった。・・・聞こえるか?こちら第1SC隊隊長土井タケシだ。」

耳を澄ましていると、女の声が流れてくる。
『こちらは総帥直属部隊。この無線を使うなんて、どういうつもり!?』
「瑠南花という者か?」とタケシ。
『そうだが。私は総帥直属の・・・』
「分かってる!地下に入る。手引きをしてくれ!」
『出来ない相談ね。私は・・・』
「事情は知っている。協力すればお前とその家族は開放してやる。」
『ば、馬鹿な・・・』
「本当だ。時間がない。信用してくれ!」
『信用してよいのだな?・・・わかった。わかるようにしておく。目立つようにな。』

「助かる!」
無線を切るタケシ。
「よし!石森!ヒデ!突っ込むぞ!」

Ｐ６指令室。
「ストラトス、北ゲートに入ります！」
「入れるなよ！」

ストラトス３台は、迎え撃つポリスＳＣも少なく、塀からの機銃を潜り抜けると、簡単にＰ６の北ゲートに突入した。ゲート内は先程のサンドシップの衝突により混乱していた。
「奴め、いい仕事してくれてる・・・」

その頃、ロクに異変が起きていた。昨日撃たれた傷口から出血が多くなっていたのだ。運転しながら必死に腹を押さえる。
「タケシめ・・・街の中に・・・アシカムは何してる？」

するとロクの車のそばに１台のバイクが近づいてくる。キーンだ。キーンはヘルメットのインカムで無線を送ってくる。
『大丈夫か？ロク？』
「そっちこそ、無茶してないか？」
『久々なんで勘を戻すのに苦労したよ。』
「タケシは、中だ！ダブルは？」
『追って行ったはずだ。』
「俺らも行くぞ！」
『わかった！』

タケシのストラトス。ストラトスは軍事施設から、住居街に入っていた。タケシは運転しながら出撃前の事を思い出していた。古川基地の駐車場。タケシの部隊の兵５０名程の前にタケシがいた。

「我々は、これよりＰ６に再び襲撃を仕掛ける！しかし、最初に襲撃を仕掛けた時の戦力は３分の１にも満たない！だが俺は総帥の座はいらない！欲しいのは雷獣の首だ！」

そうタケシが叫ぶと、兵全員が手を上げタケシに答える。

「そう兵の前では言ったものの・・・俺が本当に知りたいのはＰ６の謎・・・親父が恐れたこのＰ６の謎だ・・・それが分かればいい・・・」

『タケシさま！間もなく街の中心です！各車集結しつつあります。』

石森の無線。

「仲間が何らかの手引きをする。各車見落とすな！」

『了解です。』

ヒデのストラトス。街の様子を見ている。

「久しぶりのＰ６。なんらあの時と変わっていない・・・さて、タケシさんよ。雷獣を背にしてどうするんだか？」

Ｐ６指令室。

「敵ＳＣは街の中心に集結しつつ・・・」と柳澤。

「うちのＳＣ部隊は？」

「山猫が追っていますが・・・」

「敵艦は？」

「完全に圏外です。」

「黒豹、風神は？」

「北ブロックから敵ＳＣを追っています。」

「アシカムを戻せ！外はレヴィアだけで十分だ！」

「なぜ、奴ら街の中心なんだ？」と久弥が顎ひげをさわる。

「しかも街に入って攻撃はしていません・・・」と曽根。

「我妻！守備隊はどうなってる？」
「間もなく近くに到着します。」
「ＳＣ隊と連動してこの区域を封鎖する！奴らを街から出すなよ。」
「ま、まさか・・・」

久弥は急に大声を出した。
「どうされましたか？」と曽根。
「奴ら・・・地下に入りに来る・・・」
「まさか・・・」と弘士。

その時、指令室に聞きなれない警報が発報音がなる。
「なんだ？」
「火災発報！第８８エレベーター！」と桑田。
「エレベーターは全部下に降ろしたはずだ！」
「モニター出します！」

中央スクリーンに映し出されたのは煙だらけの白いだけの映像だった。
「ん？」
「火災か？」と弘士。
「発報の種類は？桑田？」
「すいません！・・・煙感知器でした・・・」
「火災ではないのか？」
「すぐ確認させろ！」

「はい！・・・あの・・・８８って・・・？」言いづらそうな桑田。
「なんだ？」と曽根。
「この指令室の真上なんですが・・・」
「ん？」
「・・・」みんなが真上を向いた。

「私・・・見てきます！」桑田は席を立ち上がる。
「おい！」
「平気です！見るだけですから！」
「なつみ！はい！」

松井は桑田の席にあった白い拳銃、ワイルドマーガレットを放り投げた。
「サンキュー！」
「弾込めた？」と松井。
「大丈夫！」
「桑田！兵に行かせる。席に着いてろ！」
「我々のほうが早いです！しかもスパイかも！？」
「はぁ？」
「自分の疑いは自分で晴らしますよ！曽根参謀！」とウインクする桑田。
「お前なぁ！命令が・・・」

「銃は持ったのか？」と久弥。
「は、はい！」
「偵察だけだぞ！無理するなよ！」
「了解です。」

桑田は銃を腰に装着すると、急いで指令室を出て行く。
「おやじさん・・・」
「言ったら聞かない。ロクの妹だよ・・・」
「全員！司令室の周りを固めろ！」と弘士。

タケシのストラトス。タケシらはポリスの街の中心にいた。何人

かは無防備にも車を降りている。
「なんだ、誰も出てこないじゃないか・・・」と早坂。
「人ひとりいないのか、この街は?」と丸田。
「あそこだ!」とタケシ。

タケシが指す所に煙が立ち込めていた。
「煙?・・・発炎筒か?」と石森
「あそこは・・・?」とヒデ。
「行くぞ!ついて来い!」タケシが叫ぶ。
「後続は我々が・・・」
「早坂、任せるぞ!」
タケシらは再びSCに乗ると、その煙の立つ所へSCを飛ばす。

P6指令室。
「敵SC動き出しました!」と柳澤。
「どこだ?」
「北ブロックです。」
「なぜ軍事施設だ・・・味方SCなにやってんだ?」
「街の外に逃げるのか?」と久弥。

死龍は街の中の建物に身を潜めていた。そこにSCのエンジン音が聞こえてくる。死龍は窓からその方向を覗くと、先頭にストラトスが走ってくるのを確認した。
「ストラトス!タケシか!?」

死龍はブーツの中に隠していた小型拳銃を取り出すと、そのSC隊らが通り過ぎるのを待って路上に飛び出した。すると最後尾のジープタイプのSCに向かって拳銃を発砲した。弾は機銃を構えてい

た敵兵に命中するが、助手席に乗っていた兵に気づかれ、バズーカを撃たれる。

死龍は慌てて隠れていた建物に隠れたが、バズーカの弾の威力が大きすぎて、建物ごと吹っ飛んでしまう。爆風に吹き飛ばされる死龍。ぐったりして動けなくなってしまう。

その9　なつみＶＳ女スパイ

Ｐ６指令室。
「西住居街で爆発確認！」と柳澤。
「確認させろ！松井？ダブルは？」と弘士。
「はい！敵を追って北ブロックに向かってます。」
「街から奴らを出すなよ。」
「こいつら、やはりポリス内の侵入を狙ってないか？」と久弥。
「そのための突撃・・・しかしここを押さえるにしては数が少なすぎます。」
「各員、銃を携帯！曽根！銃を持て！上の８８に行くぞ！」と久弥が曽根に声を掛ける。
「は、はい・・・」
「艦内の兵に告ぐ、敵の侵入もありうる。各員戦闘配備！白兵戦用意だ！」

Ｐ６北ブロック軍事施設。タケシらは、発炎筒の煙が昇るある場所に到着した。ポリスの兵も集まり始め、銃撃戦となっていた。タケシらはＳＣを盾に応戦する。しかし、ポリス軍は続々と応援が集まってくる。
「キリがない・・・おい！」タケシは石森に合図を送る。
「はい！」

石森は味方のＳＣ１台を無人とすると、手榴弾を４、５個のせ自動で走らせた。ＳＣは建物に隠れて応戦しているポリス兵に突っ込んでいく。ＳＣは巨大な爆音と共に爆発炎上した。ほとんどのポリス兵が吹き飛んでしまう。
「丸田！お前の装甲車で大きい道を塞げ！こっちの道はＳＣを当て

ろ。ここを封鎖するんだ。」とタケシ。
「はい！」
「ヒデ！お前らはここを死守せよ。」
「はい！？」
「１５分でいい。ここを頼む。」
「タケシ様は？」と丸田。
「ポリス内に入る。」
「はぁ？」
「１５分耐えたら、装甲車で脱出するんだいいな？古川に戻れ。」

「案内はいりますか？」突然ヒデがタケシに詰め寄る。
「どういう事だ？」
「こいつ、ここ（Ｐ６）の出なんですよ。」と丸田。
「中にも入った事はありますよ。どこに行くのか知りませんが道案内くらいは・・・」

「いいだろう！ヒデ、一緒に来い！」
「分かりました・・・丸田後は頼むぞ！」
「お前こそ死ぬなよ！」
「女、子供を頼む！」
ヒデと丸田は固い握手を交わした。

「おい！ここからはＳＣを捨てて行くぞ！」
タケシは自ら武器を掴むとその発炎筒の煙が上がる建物に近づいた。煙が出てる建物は人が乗るエレベーター。扉が壊れていて左右に開いている所から煙が立ち込めていた。

「ヒデ！ここは深いのか！？」とタケシ。
「地下３階ですが、５０メートルはあります。」
「エレベーター用のワイヤーを使って降りる。」

桑田は階段を走っていた。地下3階の廊下まで上がると、薄暗い廊下を走り出していた。すると地上から繋がる第88エレベーターの附室にいた。附室内は暗く、奥のエレベーターで発炎筒の光だけが炎の光で照らされているだけだった。桑田は直感で思った。

『この暗い附室内に誰かいる・・・』

桑田は腰の拳銃に手を掛け、ロクの言葉を思い出していた。

ポリス内室内射撃場。ロクが桑田の銃の腕前を見ている。

「遅い、遅い！」とロク。

「狙いは、いいでしょ？」

言い訳気味のなつみの言葉。そして諦めを感じたなつみの口癖だった。

「あれじゃ遅い・・・お前撃たれてるよ・・・」

「だって・・・」

「目で撃つんじゃないんだ・・・なんて言うか・・・体や肌で撃つって言うか・・・」

「肌？」

「頭で考えてたら駄目だ。遅い！撃たれてる。もっと頭を空っぽにしてみろ！」

「無理ですよ。ロクさんらのレベルなんて・・・」

「ならこうならどうだ？」

ロクは射撃場の照明を切ってしまい、真っ暗にしてしまう。

「何にも見えないじゃないですか！」

「的だけをこっちに近寄せる。それを撃ってみろ。耳を澄まして体で感じるんだ。」

「耳でですか・・・？」
「いいか？行くぞ！」
「・・・は、はい！」

暗い中、的がこちらに向かって来る音が聞こえてくる。桑田は音のする方に拳銃を3発、発砲した。ロクは射撃場の照明を付け直す。すると、こちらに戻って来た的には3つの穴が開いていた。的のほぼ真ん中だった。
「おおっ！真ん中じゃないが、お前凄いじゃないか！」
「ま、まぐれですよ・・・」
「お前、銃のセンスあるんだよ。」
「そんな・・・」

珍しくロクが褒めてきたので照れる桑田。
「よし！もう一回だ！」
「お願いします！」
練習を繰り返す2人。

「肌で感じる・・・敵と呼吸を合わせる・・・自分が空気になる・・・」
桑田は附室の入口で、ロクに教わった事を声に出して確かめていた。すると桑田は、拳銃を抜くこともなく気配を消すように一人暗い附室内に入っていく。

『呼吸、呼吸、呼吸・・・』
桑田は暗い附室の中央で立ち止まった。発炎筒の炎が消えようと

していた。微かに照らす炎の明かりが桑田の顔を闇に映し出していた。桑田は目を瞑っていた。桑田は何かを悟ったように目を開ける。

「そこ！手を上げなさい！」

桑田は附室の一番暗い部分に、初めて拳銃を向けた。そこに人の気配はない。

第８８エレベーター地上部分。丸田とタカが乗った装甲車の２０ミリ機銃がポリス兵やバイク隊に火を噴く。現場に一番最初に到着したのは、キーンだった。キーンはバイクでこの装甲車に近寄ろうと試みるが、自分のバイクに銃撃を喰らってしまう。エンジン部分を貫通したのか、キーンのバイクは爆破してしまう。キーンはバイクから転げ落ちる。

「くそっ！！」

するとキーンの後方にバズーのアシカムが停車する。バズーはすぐキーンの傍に近寄った。

「キーン！大丈夫か！？」

両足に怪我を負ったキーン。出血している。

「声でかいんだよ！足をやられただけだ。歩ける！気にするな！それより装甲車を・・・」

「なら、俺のバズーカで・・・」

「２０世紀の骨董品だが、装甲の厚さでは定評はある！お前の火器じゃ効きやしないぞ！」

「じゃあどうする？」

「・・・」キーンは黙ってしまった。

その頃、ロクとダブルはキーンの反対側の封鎖された道路にいた。
「ロク？」とロクに合流するダブル。
「よう！様子は？」とロク。
「８８を押さえられた。敵は約２０名。お前・・・撃たれたのか？」

ダブルはロクの脇腹から出血しているのを見つけた。
「傷口が開いただけだ・・・それより敵の狙いは何だ？地下にでも入ろうっていうのか？」
「さあな・・・？俺が囮になる、お前の銃なら・・・あの上の建物から乱射する。そこを狙え。」

「問題は、装甲車だな・・・」とダブル。
「上の２０ミリ弾は厄介だな・・・なんせ建物を貫通する・・・」
互いに言葉が続かない二人。

桑田は、人気のない闇に向かって拳銃を構えていた。
「隠れても無駄よ。出てきなさい！」

すると暗闇の中から、人一人が歩み寄ってくる。徐々にその姿が見え始める。黒ヘルメットに、黒の皮のライダースーツ。明らかに女性のスタイル、右手には拳銃を握り、桑田を狙っていた。桑田も距離を取り暗闇へと身を潜める。

「銃を置きなさい！女スパイ！そしてヘルメットを脱ぎなさい！」
観念したのか、ヘルメットを脱ぐ女。

「他の兵なら撃ち殺していたわよ・・・なつみ・・・」

「やっぱり、あなたが・・・」

第８８エレベーター地上部分。タケシがエレベーターのワイヤーを掴み下に降りようとしている。先程までではないが、煙も少なくなりやや視界が良くなったが、未だ一番下が見えない状態だった。早坂らが心配そうに見ている。

「煙で底が見えないじゃないか・・・」

「ここは隊長らしく、俺が行くぜ。」

するとタケシはワイヤーを持ち下へ勢いよく降りていく。

Ｐ６指令室。

「シャフト内、敵兵確認！」と柳澤。

「地下に侵入されたのか！？」　と慌てる弘士。

その１０　真・四天王

第８８エレベーター地下３階附室。拳銃を握りしめ、黒皮のライダースーツに狙いを付ける桑田。その者の顔を確認した桑田の握り手が震えだした。

「どうして・・・どうしてあなたが・・・？」

桑田が拳銃を構えていた先にいた人物・・・それはジプシー医療室勤務の関根女医だった。

「これが私の仕事なの。ここのスパイがね・・・」

「どうして？あなたは地下３階から下には入れないはず？それなのに・・・？」

「ポリス史上、完璧な要塞だけど、所詮人が作ったものよ。弱点はある。ＩＤの偽装、電気シャフト、簡単に地下に行けるわよ。まあスパイは私だけじゃないしね。Ｐ６だけで何人いることやら？」

「ずっと・・・ずっと騙していたんですね？酷い・・・」

「お前らを騙したつもりはない。」

「そんな・・・」

するとエレベーターの方から“ドン”という音が聞こえる。桑田は慌ててエレベーターの方に銃を向ける。更に次の瞬間、エレベーターの天井部分が落ちてくる。すると砂漠用迷彩服を着たタケシが飛び降りてくる。

「敵！？」

タケシは関根と桑田をすぐ察すると、ポリスの軍服を着た桑田のほうに銃口を向けた。

「タケシ？」

関根はタケシの行動をいち早く気づき、桑田に向かって発砲した。

「うっ！」

関根の銃弾は、桑田の右肩に命中。桑田は拳銃を離し後ろに吹き飛んでしまった。肩口を押さえ蹲る桑田。そこへ桑田の拳銃を足で払いのけ、タケシが銃口を向けたまま桑田に近づいて来る。その様子を見て、慌てて関根が叫んだ。

「その子は撃たないで！！」

関根の声で、タケシは制止した。関根を見るタケシ。

「瑠南花か！？」とタケシ。

「そうよ。その子を殺したら、この下には行けないわ！」

「くっ・・・」

「なぜ地下なの！？こっちは、特命なの。迷惑よ！」

「家族を人質に取られてるんだろ？開放してやるよ。」

「その言葉に、二言はないよね？」

「ああ。」

「ふう・・・」溜息をつく関根。

すると、またエレベーターの天井から石森が降りてくる。

「タケシさま！」

「来たか・・・」

「まず・・・兵たちにこの子に手を出すなと命令して。」と関根。

「誰ですか？こいつ？」と石森。

「瑠南花だ・・・わかった。兵に伝えよう・・・」

「この女が・・・？スパイ？」

「で？何が目的なの？」と関根。
「本当の四天王に会わせろ！」
「本当の四天王？」
「真・四天王さ・・・」とタケシ。

桑田は肩を押さえながら2人の会話を聞いていた。
「本当の・・・四天王・・・？」

すると、次にエレベーターシャフトを降りて来たのはヒデだった。
ヒデは関根を見つけると、顔をしかめた。
「随分と懐かしい顔がいるのね？」
「なぜあんたがここに？」とヒデ。

P6指令室。
「我妻！地下から出せる兵は、全員地下3階に集合！」
「了解！」
「兵を出したら、地下3階より下は封鎖する！」
「ま、待ってください。地下3には桑田や、曽根参謀、そして親父さんまで・・・」
「仕方あるまい・・・これ以上戦火を広げれない・・・」
「くっ・・・」
「なつみ・・・」と松井。

第88エレベーター地上付近。近辺にいたポリス兵は、どんどんこのエリアを囲み始めている。エレベーター付近を守っていたタケシの別働隊も、残すは丸田とタカが乗る装甲車だけになっていた。
「丸田！約束の15分だ！逃げるぞ！このままではこっちがやばい！」とタカ。

「分かった！敵が増えるばかりだ、逃げるぞ！」

装甲車は道を封鎖していたポリスのＳＣを蹴散らすと、北ゲートに向かって走り出した。

「逃がすか！」とダブル。

「待て！兵の数が合わない・・・」

そこへロクのインカムに無線が入る。ダブルも耳に手を当てる。

「こちら黒豹！」

『松井です。ロクさん、今どちらに？』

「地上のＥＶ８８だ。」

『敵の一部がポリス内に侵入！別エレベーターで地下３に戻って下さい。』

「奴ら、ワイヤーで地下に・・・わかった。今降りる。」

「こいつら・・・囮だったか・・・」とダブル。

「エレベーターって言われても・・・」

「ＥＶ８７からまわったら遠回りだ。」

「奴らが通ったんだ。俺らも行くぞ！」

「ワイヤーでか？お、俺は階段で・・・」

「いいから！行くぞ！」

ロクは逃げ腰のダブルの首根っこを捕まえると無理やり第８８エレベーターに連れて行く。

タケシらは、地下３階の第８８エレベーター附室近くの、人気のない倉庫のような所に潜んでいた。負傷した桑田、後から合流したヒデや早坂たちもいる。

「なつみ、暗証番号を言いなさい。」

「絶対に言わないわ！」

関根が桑田に詰め寄るが、それを見ていたタケシが痺れを切らし、2人に割り込んだ。
「吐かなければ殺す！」

タケシは桑田の口に拳銃を突っ込むと、そう凄んでみせた。桑田はしゃべれなくなり、泣きながら顔を横に振った。
「仕方ない・・・」
「止めて！殺さないって約束でしょ？まだこの子は利用するから・・・」
「殺さないさ・・・ただ・・・」

タケシは桑田の左腕を押さえていた右肩から引き離し、足で左腕を踏みつけた。
「女！これでも吐かないか！？」

すると桑田は、タケシに唾を吐きかけた。タケシの顔色が変わった。
「そうかい・・・」

そう言うとタケシは桑田の左手に発砲した。桑田の左親指が吹っ飛ぶ。
「ぎゃぁー！」

声にならない断末魔の叫びをあげる桑田。
「指はあと9本ある・・・さあどうする？」
「なつみ！しゃべりなさい、暗証番号を！・・・ちょっと！殺さないでよね！」
「殺さないって・・・なあ？」

タケシは再び発砲した。次は左の人指し指に命中した。
「ぐぁー！」
「どうした？あと８本・・・」
「ちょっと！舌でも噛まれたらどうするの！？」
「死なねぇよ！見ろこいつの顔！隙さえ見せれば噛み付いて来る顔だ！」

桑田は指２本を落とされても、タケシの顔を睨み付けていた。
「ぜ・・・絶対に・・・言うもんか・・・」
「そうか、じゃあしょうがないな・・・」

タケシは桑田の左手の残り３本の指を一気に銃で吹き飛ばした。
「ぐわぁぁぁー！」

第８８エレベーター地上部分。ロクとダブルが下に降りようとしていた。
「無理無理！」
「なら先に行くぜ。」

そこにバズーに肩を借り歩いてきたキーンら兵４、５名がやって来る。
「おい！お前ら！」
「バズー？どうしたキーン！？」
「情けない、足をやられちまって・・・」とキーン。
「言わんこちゃねぇ！先行くぞ！ダブル！」
「ああ・・・」
「・・・」

ロクはワイヤーを掴んで下に降りていく。

「敵は？」とバズー。
「一部ポリス内に侵入しているとよ！」とダブル。
「数は？」
「分からん。ＳＣの数からして、そう多くないはず。」
「なら追おう！行くぞ！」とキーン
「お前はここまでだ。おい誰かキーンを下に運べ！」とダブル。
「しかし・・・」
「歩けない奴を連れて行けるか！」
「よし行くぞ！」とバズー
「俺・・・階段で行くよ・・・」とダブル。
「お前な！ガキの頃からの高所恐怖を克服しろよ。」

バズーはそう言うと、ダブルのマントを掴みワイヤーのとこまで放り出した。慌てたダブルは必死にワイヤーを掴む。それを確認すると、バズーはダブルを掴んだ手を離した。
「バズー！！お、お前ー！覚えてろー！」

ダブルはバズーに叫びながら暗闇のエレベーターシャフトに消えていった。
「ふふふ。さてキーン！行ってくるぜ。」
「ああ・・・」

ロクは既に第８８エレベーター地下３階附室にいた。拳銃の銃口を上に向け、少しづつ警戒しながら前に進んでいる。すると薄暗い附室の床に白い拳銃を見つける。桑田の拳銃“ワイルドマーガレット”だった。ロクは急ぎ拳銃を拾い上げる。
「な、なつみの銃か・・・？」

その１１　第一級戦闘配備

タケシは桑田の左腕では物足りず、今度は肩を撃たれて身動きが取れない右腕を足で踏みつけた。
「後・・・指は5本だ！」とタケシ。
「や、やってみろ・・・」

桑田は、タケシを睨みながらも目からは涙が流れていた。
「おいおい・・・こいつは吐かないぜ・・・」
ヒデはその様子を直視することが出来ず、関根に小声で話しかけた。

「あんたがスパイだったとはね・・・」
「あんたこそ、いつからタケシ隊に?」と関根。
「ヒジリって女を捜している。」
「地下6階よ。」
「何っ!?・・・連れ出したいが?」
「無理ね、入れないわよ。」
「どうすれば入れる?」
「そうね・・・」

タケシが桑田の右腕に銃口を向けた時だった。館内の警報が突然鳴り響く。
「何だ!?」タケシは上を向いた。
「第1級戦闘配備!残念ね。もうこれより先の地下施設には入れないわ。」
「なんだと!」と早坂。
「その子のＩＤカードと暗証番号だけでは入れない。あと5分でここは完全封鎖する。」

「なら、こいつは用済みだな?」

タケシが桑田に銃を構える。

「殺さないでって言ったでしょ!?その子がいなければ逃げれないわ。それより、地下に入るなら急ぎなさい!」

「どういう事だ?」

「下から兵が上がって来る・・・そこを襲いなさい。この先に非常出口がある。この警報から5分で完全閉鎖される。その扉の先、真・四天王は地下17階よ・・・」

「地下17階・・・そんなにここは深いのか?」

「あんた・・・なぜそんな事まで・・・」

「この子は、用が済んだら私が始末するわ・・・」

関根は桑田のIDを引き千切るとタケシに渡した。

「ここから上はこれで開くはずよ。逃げる際は、ここのSCを使いなさい。さあ急いで!」

「くっ!・・・急ぐぞ!」

タケシや石森ら10名は外の様子を伺いながら、倉庫から出て行く。関根はその様子を見ながら、拳銃を桑田の頭に向ける。脅える桑田。

「ごめんね、なつみ・・・」

「くっ・・・・・・」

目を瞑る桑田。関根が桑田の頭に向け拳銃の引き金を引く。

タケシらがポリスの廊下を走っている。すると今いた倉庫付近から3発の銃声が聞こえる。一度振り返るタケシ。

「噂通り、冷酷な女だな・・・急ぐぞ!」

ロクは地下3階の廊下を走っていた。後方からバズーが走ってくる。
「敵は?」とバズー。
「いない・・・手分けしよう。」
「ああ。」

タケシら10名。ヒデが道先案内をして先頭を走っている。
「あそこです。」

ヒデが1つの扉を指差した。タケシの兵がその扉に近づくと、何人かのポリス兵が出てくる。
「敵だ!」
4、5人のポリス兵が扉から出てくる。ポリス兵とタケシらの兵が狭い廊下で銃撃戦になってしまう。
「間もなく、完全ロックになる!」
「突破するんだ!」

タケシは先頭に立ってポリス兵を撃ち殺していく。タケシの手の者も3名程撃たれて動かなくなっていた。全てのポリス兵が倒れるのを確認すると、タケシはすぐ扉に近づいたが、扉は閉まってしまう。扉に手を掛けるがビクともしない。
「遅かったか・・・封鎖されました。」
「くそがっ!」

タケシは厚い鉄の扉を叩いた。
「爆薬があります。扉を吹き飛ばします。」と石森。
「無理だ!核シェルターにあたる。核でもこの扉を破れないはず・・

・」
「これまでだな・・・撤退する！」
「タケシ様・・・この下に何があるのですか？」
「この下に眠る・・・全ポリスの頂点・・・あの親父が恐れた奴だ・・・それを確かめたかった。」
「頂点・・・？」

ロクは廊下を警戒しながら歩いていると、廊下に血痕後を見つける。ロクは再度銃を構え直すと、その倉庫内にゆっくり入った。
『誰かいる・・・』

ロクはゆっくり倉庫内を歩き出すと、そこに血だらけの桑田を見つける。
「な、なつみ！？」

ロクは周りを警戒しながら桑田を抱きかかえた。
「なつみ！しっかりしろ！」

ロクは何度も桑田を揺さぶった。すると目を開ける桑田。
「ロ、ロクさん・・・？」
「しっかりしろ！お前・・・」

ロクは改めて桑田の様子を伺った。右肩を撃たれた形跡はあるが、応急処置をしている。左脇下には止血処置。その先を見てみると、手の甲辺りに包帯が巻かれていた。なぜか短いのに気がついた。
「お前・・・左指は？」
「タケシに・・・殺られました・・・えへ・・・」
「えへ、じゃないよ！なんで地下3階にいる？なんで指令室を出たんだ！？」

「自分の疑いは、自分で晴らしたくて・・・」

そう言うと桑田は、堪えていた涙を流し始めた。

「ば、ばかだな・・・それは俺らの仕事だろうが・・・」

桑田はコクリとうなずいた。ロクは桑田をマントの上から抱き締めた。

「タケシは？」

「地下１７階に行くって・・・」

「地下１７階って？」

「ロクさん・・・真・四天王ってなんですか？」

「真・四天王？なんだそれ？」

「奴ら、それに逢いに行くって・・・」

「心配するな。第１級戦闘配備だ。いくら奴らでもこの下には入れない。」

「はい・・・」

「俺はこれから奴らを追う。もう少ししたら医務室行け。関根さんに見て貰うんだ。」

「スパイ・・・せ、関根さんでした・・・」

「関根さんが・・・？」

「でも、この手当てをしてくれて、タケシから守ってくれたのは関根さんなんです。」

「はぁ？どういう事だ？」

今から、数分前。関根が桑田の左腕脇を縛っている。桑田は気を失っていたのか目を覚ました。

「・・・痛たた・・・」
「起きたか？」
「なぜ・・・なぜです・・・？」
「指の事は、私を責めないで。まあ、あんたが暗証番号を言うとは思わなかったけど、昔からロクと同じで強情よね？」

関根は近くにあった棒で、更に左腕を絞り上げた。
「くっ・・・！」
「右肩は、急所を外したわ。応急処置はした。命に別状はない。左手は脇から止血したけど、長時間放置しないで医務室に行きなさい。私の助手に見てもらいなさい。ただ敵兵がいるから静かになったらここを出て。」
「あなたの目的は・・・」
「それは言えない。ただ・・・もうあなたに会うことはないわ。みんなにもね。」

「関根さん・・・」
「そんな目で見ないでよ・・・でもここにいた12年、楽しかったわ。」
「なぜ、私を助けたんですか？」
「あなたを殺したら、ロクになにされるか・・・」
「関根さん・・・」
「いい？10分はここに隠れていなさい。タケシには殺した事になってるから。見つかったら今度こそ殺される。味方が来たら助けを呼びなさい。廊下に血痕を残しておく。すぐに見つけてくれるわ。10分以上止血は出来ないわ。じゃあね。」
関根は倉庫を出て行った。

「そうか・・・関根さんが・・・」

「見つけても撃たないで下さい。」
「撃てるわけないだろ?しかし、どうしてあの人がスパイなんだ?地下には入れないはず。」
「よく事情はわかりません・・・」
「敵は何名だった?」
「約１０人です。この先の緊急非常口に向いました。」
「わかった。」
「気を付けて下さい。ヒデという男がいました。」
「ヒデが・・・わかった!必ずお前の仇は取るよ。」
「はい!」
「ああ!拳銃・・・失くすなよ!」

そう言うとロクは、桑田にワイルドマーガレットを右手に握らせた。
「あ、ありがとうございます・・・」
「動くなよ!いいな!」

ロクは倉庫を出て行った。ロクは倉庫を出るとすぐ蹲った。ロクは顔をしかめると、自らのマントを開いた。すると腹の出血がさっきより多なっていたのだ。
「くっ・・・痛み止め注射は後、１本・・・」

その１２　神の降り立つ街

第８８エレベーター地上付近。キーンは一人の兵の肩につかまりながら移動していた。すると、キーンの目にタケシが地上に置き去りにしたストラトス３台が目に入る。

「ちょっと待て・・・」

キーンは兵を待たして、足を引きずりながらストラトスに近寄った。

「これが奴らのＳＣか・・・？」

キーンはストラトスの内部を伺った。すると、キーンはドアを開け中を覗いた時だった。中からピーピーという音が聞こえてくる。

「ん？」

キーンは急に顔色が変わった。

「みんな！さ、下げれ！」

その瞬間、キーンの開けたストラトスは爆発を起こした。隣にあった２台のストラトスも同時に爆発する。キーンはもちろん、その近くにいたポリス兵４、５人も巻き添いになり、爆風に吹き飛ばされていた。

Ｐ６指令室。

「地上ＥＶ８８付近で爆発確認！！」と柳澤。

「松井！キーンを呼べ！」

「はい！」

「我妻！館内の敵兵はどうした？」

「地下3階、Gブロック！ロクさん、バズーさんとダブルさんが追っています。」

「キーンさん応答ありません。」
「近くに兵はいないのか！？」

地下3階特別保護室。直美家族が保護されてる部屋だった。部屋の前には、ロクの部下シンが機関銃を持ち立哨している。そこにライダースーツを着た関根がやって来た。
「どうしたんですか？関根さん？そんな格好で？」とシン。

すると関根は、不意を付いてシンに発砲した。シンは撃たれ後方に倒れピクリともしない。
部屋の中では、銃声に驚いたのか直美と勝也、雨音が身を寄せ合った。関根はシンの首から、部屋のＩＤを引き契るとカードで部屋のロックを解除した。部屋の中に入る関根。

「直美ね？」
「あ、あなたは？」
「すぐ来てちょうだい。」
「弟たちは？」
「あなただけよ。急いで敵が来る！」
「は、はい・・・すぐ戻りますよね？」
「急いで！」
「はい・・・」

直美は、勝也と雨音に言い聞かせるように話しかける。
「お姉ちゃん、すぐ戻るからここに居てね。」
「嫌だよ！ここにいてよ！」と雨音

「あなたが出たらここはロックするわ！早く！」
「いい？待っててね！」
「嫌だよ！」と勝也
「勝也！雨音を守るんだよ！いい？」

直美は関根に言われるまま、部屋の外に出る。直美はシンが倒れているのを見つけると、少し不安になった。
「彼は？・・・死んでるの？」
「敵が侵入してるの！訳は後で話す。」
「意味が分からないです。」
「あなた母親は？」
「いないです。幼い時に死んだって・・・」
「逢わせるわ。」
「えっ？」
「逢いたくないの？」
「母は死んだと・・・？説明して下さい。」
「とにかく来て！」
関根は直美の腕を強引に引っ張った。

タケシらはポリスの地下道を走っていた。時折後方を振り返っては、後方に発砲している。１０人いた兵も既に６人になっている。
「車庫までもう少しです！」とヒデ。
「真・四天王・・・そもそも何なんですか？」と石森。

「あの親父が、最も恐れたもんだ！」
「タケシ様の父上が？」
「死ぬ前に、親父はこう言った・・・Ｐ６を最後に攻撃しろと・・・
あの時、それが何を意味していたのか俺も姉貴も分からなかった。」
「・・・」

「核兵器が効かない街・・・ジプシーたちはこの街をこう呼んだ・・・神の降り立つ街だと・・・」
「神の街・・・」
「いつの間にかここはそう言われたんだ。この街には４人の神が住み、ここを守っていると・・・」
「それが真・四天王・・・？」
タケシ「神などいるわけがない！それを確かめたかった！そうする事で、親父を超えたかった・・・」
「タケシさま・・・」
「しかしあの女は言った。この地下に眠ると・・・いるんだ。本当にここに・・・」
「私も以前、聞いた事があります。本当の四天王は地下に眠っていると・・・」
「それを確かめたかったが・・・」
「ここです！」

ヒデはある部屋の入口で止まった。その時、薄暗い廊下に銃声が響く。タケシら６人は持っていた拳銃を撃ち落とされる。ヒデは慌てて拳銃を拾おうとした時だった。

「動くな！」
後ろを振り返ると、左手に拳銃、右手にバズーカを持ったバズーが立っている。
「バズーか・・・？」

「動くなよ・・・廊下ごと吹き飛ばされたいか？」
「くっ・・・」

焦るタケシに対し、石森は余裕の顔を見せた。

「タケシ様・・・ここは私が・・・」
「石森・・・」
「早坂さん、ヒデ・・・タケシ様を頼むぞ！」
「ああ・・・」
「こいつは、俺が片付ける・・・」

「この状況で・・・言うね？それに見たツラだ・・・ヒデ？サンドウルフのヒデか？」

「久しぶりだな・・・バズー。」
「お前知り合い多いな・・・」とタケシ。
「まあ・・・」

すると、石森はバズーに一歩一歩近づいて行った。
「おいおい！」

バズーは肩にバズーカを構える。
「こんな狭いとこで撃てば、お前も死ぬぞ！」
「なに！？」
「俺は素手で人を殺したこともあるんだぜ・・・」

そう言うと石森はバズー目掛けて走り出した。バズーは慌ててバズーカーを石森に向けた。
「遅いぞ！」
石森はバズーのバズーカを押さえるとバズーを壁に押し付けた。
「タケシ様！今です！」
「ああ・・・行くぞ！」

タケシら5人は、自らの銃を拾うと2人を後に車庫内に入って行くが、ヒデは自らの拳銃を拾うとバズーに銃口を向けた。

「邪魔するんじゃねぇ！ヒデ！」
「なに！」
「人の楽しみを横取りするな！！」
「正気か！？」
「いいからタケシ様と行け！！」

ヒデは石森の気迫に負け、銃口を下ろしタケシの後を追った。
「随分余裕じゃねぇか！」とバズー。
「その拳銃で６発使ったら、拳銃の弾は空だ・・・」
「ふん！バレていたか・・・」

石森もバズーも身長は２メートル近く。筋骨隆々。ややバズーが細く見える。２人はバズーカを中にして揉め合っていた。
「バズーカを持っているという事は、お前がバズーカと格闘のプロか？」
「あっ！？巷ではなっ！」

揉め合った直後、バズーカは廊下に放り出された。石森の拳銃も遠い。
「俺はジプシャン軍第一ＳＣ隊副リーダーの石森・・・」
「俺は、Ｐ６機動部隊隊長バズー・・・」
「四天王・・・か？」
「あのストラトスのドライバーか？」

２人は向き合い薄笑みを浮かべている。すると石森の方からファイティングポーズをゆっくり作ると、バズーもゆっくりポーズを作る。
「ワクワクするな？たまにはこういう趣向もいいだろ？」と石森。
「そうだな・・・」

「行くぜ！小僧」
「来いよ！おっさん！」

２人の間合いが少しづつ縮まっていく。
「楽しもうぜ！」と石森。
「ああ！」
２人は、ほぼ同時に拳を繰り出した。

その１３　母と子

桑田がいる倉庫。桑田が一人左腕を押さえ苦しんでいた。
「関根さんが言ってた時間だ。ロクさんには動くなって言われたけど・・・」

桑田はよろよろと立ち上がり、倉庫の入口の様子を伺った。
「銃声は聞こえない。ポリスの兵ばかり。大丈夫・・・」
桑田は倉庫を出ると一人で医務室に向かった。

車庫前の廊下。バズーと石森が向かい合っている。互いにやや顔が腫れ、息が荒くなっている。
「名前・・・何って言うんだっけ?」と石森。
「ああ?バズーだ!」とバズー。
「ふざけた名前だな・・・だが始末したら、俺の背中にお前の名前を入れてやるよ・・・ありがたいと思え。」
「ああ、なんなら俺が入れてやるよ・・・」

「ふふふ・・・」
「ふふふ・・・」
今度は、互いに蹴り合いを始める。互いのキックを紙一重でかわす両者。

ポリス地下３階ＳＣ整備室。タケシとヒデらはポリスの屋根付きのＳＣを見つけると、ＳＣにキーが付いてるのを確認する。
「こいつ動きます。」とヒデ。

すると、隣の整備室からタケシの兵が一人入って来る。
「隣にも、ジープタイプが・・・実弾もそのままです。」
「ヒデ、2台に分かれよう!ヒデはこいつに、俺は奥のので上がる。」
「ストラトスは?」
「残念ながらもうない・・・恐らくこっちの方が楽に逃げれるよ。」
「はあ・・・?」
タケシは早坂を連れ、奥の整備室に入って行く。

「こっちも行くぞ!」
ヒデは他の兵2人をSCに乗せてSC用シャフトに入った。

P6指令室。松井が何かに気づいた。
「14SC用エレベーターが作動!敵の逃走してる付近です。手動で地下から動いているようです。」
「現在、使用は全て停止してるよな?」
「下からの手動と思われます。」
「敵逃亡の可能性あり!松井!14エレベーター地上部分に地上部隊を集めろ!」
「はい!」

倉庫内でタケシと兵一人がポリスのジープ型SCのエンジンを掛けようとしている。

「俺らみたいに、エンジン掛けたら爆発しないよな?」

タケシは恐る恐るSCの下部を見回った。
「よし!エレベーターを呼び出せ。」
すると、突然倉庫のドアが開き2人はSCの影に身を潜め銃を構

える。しかし、入ってきたのは関根とそれに連れられた直美だった。
「直美・・・」
タケシは2人を見ると、SCの影から出てきた。直美もタケシに気づく。
「タケシ・・・」驚く直美。

「やはりここで保護されていたか？しかし・・・」
タケシは関根の方を睨む。
「なぜ、こいつをお前が・・・？」
「顔見知り？そうよね狭い基地ですものね？」
「説明しろ！瑠南花！」
「約束よね？私たち親子を解放するって・・・？」

「えっ！？」直美は関根の顔を見上げる。

「親子だと・・・？馬鹿な・・・」とタケシ。

バズーと石森。2人は細い廊下で寝そべり絡み合っていた。上になった方が殴り、更に逆転しては、上が下を殴る。
「しぶといんだよガキが！」
「ああっ？もう根を上げたかじじぃ！」
「誰がじじぃだ！！」

石森がバズーの上になり、上からパンチを繰り出す。バズーは何発ものパンチを喰らいガードが緩んできた。それと同時に石森の上からのパンチがバズーに当たり始める。石森も必死になり、繰り出すパンチが大振りになる。バズーはまともにパンチを喰らい、意識がなくなりそうになっていた。石森も最後だとばかり、拳を大きく振り上げた瞬間だった。バズーは態勢を返し、石森の肩から首にか

けて自分の両足を絡めた。
「くっ・・・」

バズーは、徐々に足で石森を締め始め、最後に石森の頭の上下を掴むと左右に力任せに引く。“ゴキッ”という音がすると石森はそのまま動かなくなった。バズーもそのまま果ててぐったりした。

「はぁ、はぁ。こ、こいつ・・・つ、強えぇ・・・」
バズーは起き上がると、バズーカを拾い再びタケシを追い始めた。

ポリス地下3階ＳＣ倉庫。
「直美は、大場の娘じゃないのか?姉貴に人質に取られた娘って・・・」と困惑のタケシ。
「そうよ・・・この子よ。」と関根。
「えっ!?」
直美は関根の顔を見上げた。

「あなたが・・・私の・・・?」
関根は改めて直美の顔を見つめる。

「びっくりしたわ、大場がこの街に来て、あなたを連れて私の医務室に検査に来たんだもの・・・」
「えっ?」
「慌てて部下に対応させたの・・・その時、私はすぐわかったわ・・・あなたが私の娘だと・・・」
「父は、母は死んだって・・・」
「そう言うでしょうね・・・」

「・・・」タケシは二人の会話を黙って聞いていた。

「ちゃんと説明して！」
「あなたが3歳の時、ジプシャンに襲われ、あなたを奪われたの。あなたを殺さない条件に、私はここにスパイとして潜入させられたの。」
「どうして？」
「医師免許を持っていた・・・ジプシャンはそこに目を付け、ポリスに送り込んだの。大場は知っていた・・・ただあの人が、あなたを育てていたとは思わなかったわ・・・」
「まさか・・・父を殺したのは・・・？」
「そうよ・・・私よ・・・」
「えっ？」
「・・・」直美もタケシも驚く。

タケシ軍襲撃の日。ポリス住居街。大場が暗殺された時。
「久しぶりね・・・大場・・・」と銃を構える関根。
「瑠南花か・・・？」
大場は関根が銃を持ったのを見て後退りする。

「上の女の子は・・・直美ね？」
「スパイ活動をしているとは聞いていたが・・・P6だったとはな・・・？」
「ジプシャンの策士としては、情報不足ね。」
「俺を殺しに来たか？」
「ジプシャンは脱走兵は銃殺。その家族も・・・」
「なら、直美も殺すか？」
「死ぬのはあなた一人よ、ジプシャンの裏切り者！なぜジプシャンを逃げたの？直美まで危険にさらすなんて！」
「仕方なかったんだ・・・このままでは直美が・・・」

関根は銃を構え直す。

「言い訳はいいわ・・・あなたを殺せば、私と直美は解放される。総帥はそう約束した。」

「直美とここで暮らせばいい・・・」

「なに!?」

「もう、人質ではない。直美に全てを話し、2人でここでやり直すんだ!」

「馬鹿を言うな。他のスパイに私が狙われる・・・P6だけで何名のスパイが居ると思っているのよ!」

「直美に全てを話し、ポリスに事情を話せ。ポリスは守ってくれる・・・」

「ポリスは無力よ・・・ここでは子供一人守れない・・・例え地下の隔離房でもね・・・」

「いつまで、ジプシャンにいい様に使われるつもりだ!目を覚ますんだ!瑠南花!」

「黙れ!裏切り者が!」

関根は大場に発砲した。大場は階段を転げ落ちていく・・・

「お前が大場を・・・」

その時、タケシが関根に銃口を向けた。

「なに!?」

関根も瞬時にタケシに銃口を向ける。しかし、早坂に察知され逆に発砲されてしまう。関根は、拳銃を握っていた右手の甲を撃たれてしまった。

「くっ！！」

右手を押さえ、跪く関根。そこにタケシが関根の側にやって来る。

「逃がすと言う・・・約束だぞ・・・」と関根。

「大場は我が師でな・・・」

「何だと！」

「しかも、脱走兵！直美はその脱走兵の家族だ！話は別だな・・・」

タケシは直美に銃口を向けた。

「あっ・・・」尻込みする直美。

「ゲスが・・・」　と関根。

その１４　裏切りの凶弾

ポリス指令室。
「先程の爆発は敵のＳＣの何台かが爆発した様子です。」と柳澤。
「司令！先程の爆発で、キーンさんらが負傷してます！」と我妻。

「え・・・？」松井がキーンの名前にいち早く反応した。
「死傷者多数！特にキーンさんは重症・・・」
「そうか・・・すぐ救助隊をあてろ！」

「そんな・・・嘘です・・・キーンさん・・・」松井は混乱した。
「キーン・・・」嘆く弘士。
「司令！１４ＳＣシャフト！間もなく地上です！」と柳澤。
「地上部隊！！いいか！逃がすなよ！！」

シャフト内のヒデと兵士たち。シャフト内のエレベーターが止まり前方の扉が上に開き始めた。
「行くぞ！」とヒデ。
「腹はくくったぜ！」と他の兵たち。

すると、前方に見えて来たのは銃を構える、１５名程のポリス兵だった。ヒデは驚いて周りを確認するが、建物の上や左右の道路すら銃を構えた兵で一杯だった。
「くそっ！！」
後部座席の兵士たちは、銃を構えた。
「抵抗するな！蜂の巣だぜ・・・」
するとヒデらは観念してＳＣ内で両手を上げた。ポリスの兵らは銃を構えながら、ヒデの乗るＳＣに近寄った。

Ｐ６指令室。
「シャフト内、敵兵３名確保！」と我妻。
「うん・・・しかし数が合わんぞ！館内どうした！？松井？」
「・・・は、はい・・・ロク、ダブル隊連絡ありません。」
「バズー隊同じく連絡なし！」と我妻。
「松井？地上部隊の半分と地下護衛隊を地下３階に導入する。」
「了解！」
「柳澤？曽根参謀らは？」
「地下３階の非常口近辺で負傷者の手当てをしてます。」
「そうか。地下のモニター監視怠るなよ！まだ館内に敵兵が潜んでいるぞ！！」

地下３階ＳＣ倉庫内。タケシが、無防備な直美に銃口を向けて関根と対峙している。
「逃がすと約束したじゃない！」
「事情が変わった。」
「くそ！」

関根は、捨て身で直美をかばってタケシに体当たりを掛けた。しかし、タケシは関根に発砲し、関根は腹を押さえてその場で蹲った。
「いやー！」関根が倒れたのを見て、直美は叫んだ。

ロクはその時、微かな銃声を聞いた。すぐロクはインカムを使い指令室に無線を飛ばした。
「こちらロク、倉庫内で銃声。そちらに向かう！応援を！」
『了解！』と我妻の声。

「２３ブロックの備蓄倉庫に桑田が負傷！誰かまわしてくれないか？」
『桑田無事でしたか・・・分かりました！』
「頼む・・・」

『そ、それとロクさん！』
「何だ！」
『キーンさんが爆発に巻き込まれ・・・重症・・・』
「キーンが！？」
『詳しくは連絡が来てないのですが、片足が・・・』
「嘘だろ・・・キーンに限って・・・嘘だろ！なあ？嘘だろ？我妻・・・？」
『また分かり次第連絡します。そちらに兵を送ります。ロクさんも気をつけて下さい。』
「わかった・・・」

地下３階廊下。桑田は自力で廊下を医務室に向かって歩いていた。途中、タケシ隊とポリス隊が銃撃戦をした非常口付近を通る。
「ジプシャンの兵か？」

そこには、銃撃戦で倒れたのであろう、ジプシャンの兵が３名程倒れていた。３名とも既に息はない。桑田はそれを見て見ぬ振りをして、そこを通り
過ぎた。そこに桑田をつける黒い影があった・・・

地下３階ＳＣ倉庫内。直美が関根をかばって、タケシから守ろうとしている。
「この子だけは、逃がして・・・約束でしょ・・・」

「こいつらは俺を裏切った!!」
「どう言う事よ!?」

すると直美がタケシに向かって吠える。
「裏切ったんじゃないわ!もうジプシャンが嫌になっただけよ。だから父と逃げたのよ!」
「同じ事だ・・・」

タケシが直美の頭に銃口を向けた。
「やめてぇー!」

目を瞑る直美・・・次の瞬間、一発の銃声が倉庫内に響いた。目を開ける直美。目の前には、タケシの拳銃は床に落ち、タケシが手の甲を押さえている姿があった。
「またか・・・次から次へと・・・」とタケシ。

タケシは銃声のあった方向に顔を向ける。そこにはポンチョコートにハット姿のポリス兵の姿があった。ハットに隠れ顔が見えない。タケシは先程のでかい兵かと思ったが、別人なのに逆に驚いていた。タケシについて来た、早坂がそのポリス兵に向かって慌てて銃を向けた瞬間だった。再び銃声が聞こえた。早坂はは肩口を撃たれ後ろに飛んでしまう。

「あらら、すまんな。今日は調子が悪い・・・」

「ロク・・・」
「ロク?」直美と関根はすぐロクだと気づいた。

ロクは、ハットを上げてタケシを睨み付ける。
「誰だ、今度は?」とタケシ。

ロクはタケシに向かって銃口を向けた。
「ストラトスのタケシか？」
「・・・だとしたら？」
「なら、何度も荒野で逢ってるぜ。」
「貴様・・・雷獣か・・・？」

そのロクの言葉で、タケシの声は裏返った。
「あの雷獣なのか？」
「さあな？」
「ん？どこかで見たツラだな？」
「ああ、一度な。Ｐ４のお前らの司令室・・・あの時の、小火（ボヤ）覚えてるか？」

「あの時のガキか？下手な芝居打ちやがるな。」
「覚えてた？」
「で？・・・何モンだお前は！？」

「俺かい？俺が四天王・・・Ｐ６の四天王のロクだ！」

「四天王・・・」と直美。

「四天王だと？ふはははっ！やっと逢えたな？」
「何だと！？」
「ふっ・・・」
すると、タケシは隠し持っていたサバイバルナイフを取り出し、直美の後ろに回り込んだ。

「なに！」
「直美！」と関根。

タケシは左手で直美の首を絞め、右手で直美の顔にナイフを突きつけた。
「くぅ・・・」
「直美・・・」
「雷獣！銃を捨てろ！さもなくばこの女を殺す！」
「野郎・・・」

桑田は薄暗い廊下を一人歩いていた。やはり後ろには黒い影が桑田をゆっくりと後をつけていた。その影はジプシャンの使う拳銃を桑田に向けていた。桑田はそれに気づく事なく前を向いて歩いて行く。

その時だった。一発の銃声が聞こえた。その銃声は狭い廊下に響き渡った。しかし、桑田の耳にはそれは聞こえなかった。桑田は今まで感じたことがない痛みを感じていた。周りの風景だけがスローモーションで流れ、気が付いた桑田の目に映っていたのは廊下の床の部分だった。

『う・・・撃たれた・・・のか？』

床には大量の血が流れ出した。桑田は、倒れて初めて自分が撃たれたのに気が付いた。

その１５　直美・・・紅涙

桑田は這い上がりたがったが左の手は止血の為、既に神経がなく、右手は肩を撃たれていたせいか力が入らなかった。仕方なく体を仰向けにすると、桑田は後方を見た。黒い影が背を向け立ち去っていくのが見えた。

「だ、誰・・・？」

桑田は腰のベルトからワイルドマーガレットを取り出し、その影に狙いを付ける。しかし、右肩の痛みに耐えられず構えることが出来ない。そのうちに黒い影は消えてしまう。

「ここで・・・私・・・死ぬんだ？・・・最後に・・・ロクさんに・・・逢いたかったな・・・」

桑田は小声で呟く。

地下３階ＳＣ倉庫。

「早く銃を置け！雷獣！」とタケシ。

「くっ・・・」

ロクはタケシに向かって拳銃を構える。タケシは更に直美の影に隠れて、ナイフを付き立てた。

「ロク！言うことを聞いて！」

「さっき、その子を殺すって言ってなかったか？」

「！」

「ロク！」叫ぶ関根。

「何だと!冗談ではない!本気で殺すぞ!」
しかし、ロクは銃を下げる事なく、タケシに狙いを付ける。
「ロク!?お願い!銃を降ろして!」

だがロクは、微かに手が震え始めていた。
「ん?」
ロクは腹の傷口を押さえた。タケシはロクの異変に気づいた。
「ふん・・・どうした雷獣?震えてるじゃないか?」

ロクは再びタケシに狙いをつけるが、目が霞み始め直美とタケシの様子が見えなくなっていく。
「くそ・・・こんな時に・・・」
やがて、ロクが見ていた2人の姿が、あの時の、ヒデと死龍の姿に見えてきてしまう。

「死龍・・・」

ロクはあの時の死龍の言葉を思い出していた。
ヒデに羽交い絞めにされ銃を突きつけられている手榴。
「撃ちなさいロク!!」と手榴。
「黙れ!こいつは撃てねぇよ!」とヒデ。
「くっ・・・」

「昔からな!こいつは肝心な時になると逃げるんだよ!」
「うるせぇ・・・」

「お前はな!人を撃つ度胸もないうじ虫なんだよ!」
「ロク!あなたなら、ロクなら出来るわ!撃ちなさい!」
「こいつは撃てない・・・」

「うわっー！」
ロクの撃った銃弾が手榴の左目に命中してしまう・・・

「銃を降ろせ！降ろさなければ・・・」
タケシは直美の首部分にナイフを寄せ、微かに切り込み始める。
「お願い・・・やめて・・・」
ロクは関根の声で再び正視した。

「くっ・・・」
直美は痛みに耐えていた。
「どうした！？銃を置け！こいつの首を切り裂くぞ！」
ロクは銃を下ろし、直美とタケシの前に放り投げた。
「ふっ・・・」
タケシはやや安心したのか、直美の首につけていたナイフを緩めた。それと同時にロクの投げた拳銃をナイフを持ったまま床に拾いに行く瞬間だった。

「直美！」
ロクは直美に大声で叫んだ。直美はロクの声に気づき、自分の後頭部でタケシの顔を叩いて見せた。
「くそっ！」
面を喰ったタケシは、羽交い絞めをしていた直美を離してしまう。
「このアマっ！」
タケシは持っていたナイフで直美の背中を刺そうとした瞬間だった。ロクが腰の銃を抜き、タケシのナイフを撃ち落とした。
「がぁ！野郎っ！」
手の甲を押さえるタケシ。するとロクはもう一つの腰の銃を抜き2丁拳銃でタケシに近づく。

「こいつはキーンの分だ！」
ロクはそう言うと、タケシの右膝を撃ち抜いた。
「くっ・・・て、てめぇー！！」
タケシは絶叫しながら、右足を押さえ床に跪いた。するとロクは更にタケシに発砲する。
「ぐわっ！く、くそが・・・！」
ロクが撃ったのは、タケシの左手の指5本だった。

「こいつは、なつみの分・・・」
ロクは更に、右手の指5本も撃ち落してしまった。
「ぐわっー！」
タケシは指のない両手を目の前にすると、目を見開き絶叫する。
ロクは弾がなくなったのか2丁の拳銃を腰のホルダーに閉まってしまう。
「ら、雷獣は人を殺さないって聞いてたぜ・・・」

「拳銃ではな・・・」

そうするとロクは、タケシのサバイバルナイフを拾いタケシの前に立った。
「ま、待て・・・」
「これは、お前に首を切られたトリプルとダンの分だ！」
するとロクはそのナイフで、タケシの首を力一杯切りつけた。タケシから大量の血が流れ出す。

「こ・・・ごっ・・・こっ・・・」
声にならない声を出し、タケシは前のめりに倒れる。
「動くなよ！」
ロクは肩を撃たれた早坂を一喝する。

「ロク・・・」
関根は気力が尽きたか、腹部を押さえながら倒れてしまう。直美が関根に近づき抱き寄せる。
「お、お母さん・・・」
「私を・・・お母さんって呼んでくれるんだ?ありがとう・・・」
「お母さん・・・」
「ご、ごめんね直美・・・こうするしかあなたを助けれなかったの・・・」
「お願い・・・もう・・・誰も死なないで!」
「ずっと・・・あなたの事を思っていたわ・・・」
「・・・」ロクは二人を見つめる。

「最後に逢えて・・・うれしかった・・・」
「お母さん・・・ヤダよ・・・」
「ロク・・・そこに居て?」

関根は、敵兵を警戒しているロクを呼んだ。既に目が見えない様子だ。
「ここだ。」
「桑田を撃ってしまった・・・許して・・・」
「あんたが、手当てもしたんだろ?」
「あ、謝っておいて・・・それと・・・」
「もうしゃべるな!今、人を呼ぶ・・・」

関根はインカムを使って、無線を使おうとしたロクの手を必死に掴んだ。
「関根さん・・・」
「聞いて・・・おやじさんは・・・」
急に関根の様子が変わり、声が出なくなり始めた。
「おやじさんがどうした!?」

「何か・・・な、何かを・・・か、隠してい・・・」
「おい！しっかりしろ！」
「お母さん！？」

関根はロクの腕を掴んだまま、再び目を開ける事はなかった。
「関根さん！？」
「お、お母さん・・・！？」
直美は関根を抱きかかえながら号泣した。ロクは2人を無表情で見つめていたが、やがて自分も腹を押さえ倒れてしまった。

たくさんのポリス兵が車庫内に入って来る。その中にはダブルの姿もあった。撃たれた早坂は拘束され連行されて行く。直美は関根の遺体の側を離れなかったが、数名の兵に説得されようやく車庫内から出て行く。するとダブルがロクの側に近寄って来た。
「やったなロク！」とダブル。
「ん・・・？ああ・・・」放心状態のロク。
「平気かよ？」
「ああ、これくらい・・・大丈夫だ・・・」

すると倉庫内に顔を腫らし、制服や手が鮮血にまみれたバズーが入って来る。2人を見つけるとバズーも近寄ってくる。
「どうした？バズー？その顔、その血・・・？」とダブル。
「ロク・・・実は・・・」
「！！」　ロクはバズーの顔を見て驚いた。

その16　銃を継ぐ者

「誰が死んだんだ!?」
ロクはバズーの細い声だけで気がついた。
「なっ!?」
驚いたのは、ダブルも一緒だった。
「バズー・・・?」

ロクはバズーの癖に気づいていた。いつも聞きたくない報告はバズーはこんな顔をし、声が細くなる事を・・・ロクは覚悟を決め、再度バズーを問い詰める。
「バズー!?誰だ!?」
バズーは下を向いていた顔を2人に見せた。バズーの目には光るものがあった。
「バズー!?」
「・・・・・」二人はバズーに詰め寄った。
「ロク・・・それは・・・」

ポリス地下3階死体安置所。そこにベットに横たわり布を被された遺体が1体。ロクはその布を顔の方から取ろうとしていた。ロクは恐る恐る布をづらして行く。そこにいたのは、変わり果てた肌が灰色に変わっていた桑田の遺体だった・・・遺体は何も衣服は着けておらず、傷口もそのまま開いたままだった。ロクは桑田を見ると、一度大きなため息をついた。
「すまん。見つけた時は、既に瀕死の状態で・・・」とバズー。

バズーは既に涙目になっていた。下を向きロクを見れない状態だった。ロクも桑田を見ることが出来ず、一人天井を見上げていた。何かを堪えている様子だった。

「銃弾はジプシャンの弾だった・・・医務室に移動中に後ろから撃たれたようだ・・・」

「なつみ・・・」声にならないロク。

それは、ほんの数分前の出来事だった。

バズーがタケシを追って廊下を走っていた時、後方から一発の銃声が聞こえた。バズーは急いでその場に近づくと、仰向けになって横たわる、血の気の引いた桑田の姿があった。

「桑田ーっ！」

「バ、バズーさん・・・？」

「撃たれたのか！？」

「そ、そうみたい・・・」

「い、今、運んでやる！しっかりしろ！」

バズーは、慌てて桑田を起こし自分の背中にまわして担ぎあげた。すると走って医務室に向かった。

「しっかりしろよ！すぐ関根さんに見て貰うからな！」

「う、うん・・・」

「手もこんなに・・・誰がこんな事を？指令室を何で出たんだ！？」

「ご、ごめんなさい・・・」

「も、もういい・・・しゃべるな！」

バズーは桑田の様子を察した。大量の出血にバズーは慌てていた。

「バ、バズーさん・・・」と桑田。
「な、なんだ?」
「私が死んだら・・・これをロクさんに・・・」
桑田は右手で、バズーの前に白い拳銃を出した。桑田のワイルドマーガレットだった。

「馬鹿言うな!お前が死ぬか!?」
「これを・・・ロクさんがよく使う・・・左胸に・・・」
「縁起でもない事言うな!必ず助かる!助けてやる!」
「お願い・・・ね・・・ロクさんへ・・・」
桑田は拳銃を落としてしまう。バズーは慌てて桑田の様子を見るため、桑田を背中から下ろす。

「しっかりしろ!!死ぬな!!桑田!!」
しかし、もう桑田は動く気配がない。バズーは桑田を床に横にすると、心肺蘇生運動を行った。
「死ぬな。死ぬな!死ぬな!!」

バズーは一心不乱に桑田の胸を押し始めた。
「なんでロクがお前を指令室勤務にしたか、分かってのか桑田!?」
バズーは涙声になり、心肺蘇生を続ける。
「お前を心配して・・・お前を死なせたくなくって・・・お前の事を愛してるから・・・」

すると桑田の動かなくなった顔から一筋の涙が流れてくる。
「だから死ぬな!生きろ!!桑田!」
しかし、桑田は二度と目を開けることはなかった。

バズーは耐えられなくなり、大粒の涙を流し始めた。
「死ぬ間際・・・これをロクに託すと・・・」
バズーはロクに、桑田のワイルドマーガレットを渡す。それを無表情で受け取るロク。

「ロクの一番使う、左脇に入れて欲しいと・・・」
バズーは感極まって、大声で泣き始めた。ロクはそんなバズーを見て、バズーの顔面を拳で張り倒した。その場でしゃがみ込んでしまうバズー。
「プロジェクトソルジャーが・・・人前で泣くんじゃねぇ！」
「す、すまん・・・」

ロクは再び桑田の遺体に近づいた。再びロクは桑田の傷口を見る。唇を噛み締めるロク。するとロクは桑田の遺体に語り始めた。
「お前の銃と、この未来は俺が引き継ぐ・・・」

ロクは桑田の遺体に顔を近づけると、桑田の顔にそっとキスをした。すると、ロクは一人その部屋を出て行った。

ヒデが2名の兵に連れられ手錠を掛けたまま、地下6階に連行されていく。それに出くわすダブル。
「懐かしい顔だな・・・」とダブル。
「ダブルか・・・？」
「ふざけんな！！」
ダブルは手錠をしたヒデをいきなり殴りつけた。ヒデは後ろに吹っ飛び倒れてしまう。更に殴り付けようとしたが、周りの兵に止められてしまう。

「手錠した捕虜を殴ってもいいのか？」
「殺されなかっただけありがたいと思え！」
「ふん・・・」
「いつから、タケシ隊になった！？」
「そのタケシはどこだ？」
「死んだよ・・・首を切られてな・・・」
「・・・誰がやった？」
「ロクだよ・・・」
「まさか・・・あの小僧が・・・」
「今のロクは・・・お前の知ってるロクじゃない！」
「出来るわけないじゃないか・・・あの小僧が・・・出来るわけねぇだろ！？」

ヒデは笑いながら2名の兵に連れられダブルの元から離れていく。連れて行かれながらヒデは何度も後ろのダブルを振り返りながらこう叫んだ。
「俺は信じないぞ！！ロクに人なんか殺せるか！！あんな小僧に！？俺は・・・！」
ヒデはダブルが見えなくなるまで、廊下で叫んで行った。
「裏切り者が・・・」

ロクは一人、南ゲート近くの塀の上にいた。すでに太陽は西に沈み掛かっていた。

その17　囚われのヒデ

Ｐ6指令室。
「桑田が・・・」と弘士。
「今・・・ロクさんが対面してるそうです・・・」と我妻。
「なつみ・・・」
松井はその場で泣き崩れた。

「キーンの状態は？」
「命には別状はないようですが・・・」
「悲しんでばかりはいられない！体制を立て直すぞ！」
「はい！！」
「地下３階の警戒は解かず、このまま警戒態勢をレベル２に落とす。松井？前司令と参謀は？」
「は、はい。負傷者の手当てにまわってもらってます。」
「前司令には護衛をつけて、ヒデの取調べに当たってもらう。」
「了解・・・」
「関根がスパイだったとは・・・」と嘆く弘士。

地下３階ジプシー専用医療室。キーンが寝ているベットにダブルの姿があった。キーンがちょうど目を覚ます。
「気がついたか？」とダブル。
「ここは・・・？」とキーン
「地下３だ。」
「そうか・・・」

「爆破に巻き込まれた。奇跡的に助かったぞ！」
「ああ、そうだな・・・」

「ちょっと待ってろ・・・先生を呼んでくる！」
「ああ・・・」

ダブルは席を外すと、医療スタッフを呼びに行き、再び戻ってくる。すると医療スタッフの一人がやって来る。
「目が覚めた？」

その女性スタッフは３０前後、美形で品の良い顔立ち。ダブルの目が輝く。
「これはこれは・・・」

「高田よ。さっき付けでここを任された・・・関根が死ぬなんて・・・」

「いえ、こんな方がこんなとこに居たとは・・・」
「あんたら、軽傷の時以外ここ使わないでしょ？」
「確かに・・・」
「結婚はしてるんで、心配なく！」とダブルに向かって睨む高田。

「俺、そんな顔してましたか？」
「少なくとも、友人の容態よりはね・・・」
「あちゃ・・・」

「先生・・・右足の感覚がないんです。」とキーン。
高田は、ダブリの顔を見た。首を振るダブル。
「よく聞いて、その右足は切断された。」
「えっ・・・」
「先生・・・」驚く
「仕方ないじゃない！いつかは話さないと・・・あなたは、もう戦場には立てない。今は退院してリハビリの事だけ考えてちょうだい

！戦場に戻るのはそれから・・・いい？」

「先生、そんなはっきり言わなくても。」とダブル。
「分かりました・・・」キーンはベットで横を向いてしまう。
「キーン・・・」
「私は、関根とは対立してきたの。関根はＯＫを出していても私には通用しないわよ！」

「恐い恐い・・・」

「さっき来た仲間もそう！よくあんな重体でポリスは戦場に出してるわね！」
「誰？」とダブル。
「ロクよ！ここで点滴打ってなさいって言ったのに、もう居ないし・・・」
「ロクが・・・」
「あんた手が空いているなら捜して来て！いつ倒れても知らないわよ！」
「わ、分かりました・・・」とダブル。

「それと、彼に伝えてちょうだい。桑田の遺体を見たわ。あなたの予想で当たっていると・・・」

「はあ？そう伝えればいいんですね？わかりました。」
ダブルが慌てて部屋を出て行く。

Ｐ６指令室。
「司令？地上部隊より連絡！爆破された建物から死龍さんが発見されたと報告があり・・・」

「死龍が？地下６にいたんじゃないか？」
「再度、確認します！」

そこへ、久弥が入って来る。
「どうだ？」
「ボロボロです。たった１０名の敵兵にポリス内を掻き回されるなんて・・・」
「死者は？」
「上と下合わせて３５名、ほぼ地上部隊です。負傷はキーンほか多数。」
「桑田が亡くなったと聞いたが？」
「はい・・・関根、シン・・・大きな代償です。特に関根にスパイ容疑が掛かっています。」
「そうか・・・」

「それと、ロクがタケシを討ち取りました！」
「ロクが・・・」
「それと捕虜４名を確保。その中にヒデが・・・」
「何だと！？なぜヒデが・・・？」
「兵を付けますので、取調べをお願いしたいのですが？」
「よかろう！わしがやろう！」
「お願いします。」

地下３階のある取調室。後ろに手錠をされイスに座っているヒデ。そこへ銃を構えた兵士２名を引き連れた久弥が取調室に入って来る。
「久しぶりだな・・・ヒデ・・・」

顔を上げ久弥の顔を見るヒデ。既に顔は腫れ意識は朦朧としてい

た。
「じじいか・・・？」
「相変わらず、口の減らん男だな。」
「ふん・・・」
「今回の攻撃の意図を知りたい。」
「知らん！」
「兵の話では、お前がストラトスに乗っていたとか？」
「だからなんだ？」
「それでは、ロクやダブルが苦戦するはずだな。」
「あいつらに負けるはずがないだろうが！」
「しかし、敗れた・・・当時でも勝てんお前が、今のロクやダブルに勝てんだろうが！」
「くっ・・・」

「なぜ、地下に入ろうとしたんだ？」
「タケシだよ！」
「ん？」
「タケシが、地下にある真・四天王に逢うって・・・」
「お前も知ってるかどうかは知らんが・・・そんなものはない！街のジプシーたちが作った妄想だ！」
「なら、街の先人たちは何を見たんだ？」
「なに！」
「あの日、街のじじぃたちは４人の神を見たと言う・・・俺がガキの頃、聞いた覚えがある。」
「あの日じゃと？」
「核が撃ち込まれた日だ・・・」

すると、更に兵が一人入って来ると、久弥の耳元で何かを話した。
久弥の顔色が変わる。
「今度は何だ！？」

「こいつを地下６に連れて行け！」
「何っ！」驚くヒデ。

ジプシャン軍鹿島台新本部。寛子の前に、鈴木艦長の姿があった。
寛子の後ろには犬飼参謀の姿もある。
「それで？」と寛子。
「はい・・・てっきり本部の命令かと思い・・・」と鈴木艦長。
「それでタケシは？」
「ストラトスの認識信号は消えてしまい・・・」
「装甲車１台が松島基地に到着したと報告もあります。」と横に居た犬飼。
「タケシめ・・・」
「内部より、調べさせます。」

「よかろう。鈴木と言ったな。下がるがよい。」
「ははっ！」
「古川に戻り、艦の修理だ。だいぶやられたのだろ？」
「申し訳ございませんでした。」

鈴木が後ろを振り向いた瞬間だった。寛子は銃を取り出し、鈴木を後ろから射殺したのだ。
「犬飼！片付けてちょうだい！」
「ははっ！」
「さて・・・次はツヨシか・・・」不敵な笑みの寛子。

その18　ラブレター

ロクは塀の上で腰掛けていた。空を見るのでもなく、海を見てるわけでもなくロクは一人うつ向いたまま腰掛けていた。ロクはふと顔を上げると、胸のポケットに手を当てた。そこから取り出したのは、何時ぞやに桑田がロクに手渡した手紙だった。手紙は４つ折になり、開けると2枚の手紙になっていた。ロクはその手紙を開き読み始めた。それはとても綺麗とは言えず、まるで子供が書くような字がたくさん書かれていた。

『ロクさん、お仕事お疲れ様です。

親父さんから貴重な紙を頂き、この手紙を書いています。
ロクさん・・・いえ、手紙ではお兄ちゃんと呼んでいいですか?正直・・・ロクさんと呼ぶより、昔からのお兄ちゃんと呼んだほうが、なつみは好きです。

では・・・お兄ちゃん!いつも偵察お疲れ様です!なつみは、お兄ちゃんのジャガーを整備する度、いつも思うのです。』

「この間まで・・・字も書けなかった奴が・・・」とロク。

『最近?銃弾を受ける数がやたらと多くなってませんか?なつみはジャガーを整備する度、心配してます。
ジャガーは特殊コーティングで多少の弾は貫通しません。
でも先日から来ている、装甲車の弾は防弾ガラスさえ貫通します。
ジャガーの性能を過信しないで下さい・・・』

「生意気なんだよ。人の心配より、自分の事を・・・」

ロクの声は少し鼻声になっている。

『では、本題に入ります・・・実は、なつみある人に交際を申し込まれました。お兄ちゃんも知ってる人です。』

「おお。誰じゃ？」思わず立ち上がるロク。

『とってもいい人だと、思います。でも・・・でも・・・』

「でも何だ？お前みたいな暗い女を好きになる奴・・・そういないぞ！」

『なつみには、小さい頃から心に決めてた人がいます。』

「お前な・・・」

『それは、それは・・・ロク兄ちゃんです。』

「なつみ・・・」

ロクは急に悲しくなり、手紙を見ることが出来なくなった。顔を下に向け、目を瞑ったまま顔を上げる事はなかった。しかし、再び手紙を読み始める。

『知ってます！凄く知ってます！！プロジェクトソルジャーのお兄ちゃんが恋愛禁止なのは・・・
でも・・・ロク兄ちゃんがプロジェクトソルジャーじゃなかったら？戦争が終わってその任務が終わったら・・・
ロク兄ちゃんも恋愛してもいいんですよね？？』

「戦争が・・・戦争が終わるはずがないじゃないか・・・」

『もしその時が来て、プロジェクトソルジャーを辞める時が来たら、隊長とか軍とかジプシーとか関係なくなったら・・・なつみはロク兄ちゃんの・・・ロク兄ちゃんの・・・お嫁さんになりたいのです・・・』

「なつみ・・・」

『そして、たくさんの子供たちを産んで、ロク兄ちゃんと子供たち・・・草木が生い茂る草原の丘で平和に暮らして生きたい。これって夢でしょうか?』

「夢じゃねぇけど・・・」

『これ・・・なつみの儚い夢です・・・それを伝えたく、手紙を書いてしまいました。返事が欲しいわけではありません。　ただ伝えたくて・・・でも・・・
ロク兄ちゃんも、ほんの少しでいいので考えて欲しい・・・戦争が終わった時の自分を・・・

桑田なつみ』

「そんな事・・・考えた事もねぇよ・・・」

ロクは大量の涙を流し始めていた。

「うおぉぉぉー!!」

ロクは塀の上で泣いた。大声を出し泣いた。どこに悲しみをぶつける事もなく、ただひたすら空に向かって叫んでいた。

「俺も・・・好きだったんだぜ・・・なつみ・・・」

既に夜になっていた、叫び疲れたかロクは一人塀の上に腰掛けていた。しかし涙だけは止まることなく流れ落ちている。しばらくすると、下から階段を登ってくる足音が聞こえると、ロクは慌てて涙を拭き、ハットを深く被った。するとダブルを先頭に、銃を持った兵が4、5名が塀の上にやって来る。ロクはダブルの顔を見上げた。ダブルはいつになく厳しい顔つきだった。

「どうした?ダブル?」
「ロク・・・」
「ん?」
「お前を・・・反乱罪で逮捕する・・・」
「!?」驚くロク。

四天王　第四章　【住所のないラブレター】　完

第五章予告

物語は怒涛の後編へ・・・

【復讐のため、鬼と化したロク・・・】

目を瞑りながら、敵兵を容赦なく撃ち殺していく形相のロク・・・
山口「ロクさん変わりすぎでしょ?」

ロク「俺がなつみの夢を引き継ぐ・・・」

弘士「ロクを偵察隊から外す!!」

ロク「司令・・・」

寛子「たった1台に・・・基地2つが壊滅だと・・・」

【新たなる強敵・・・】

空母と戦艦を足した奇妙な大型サンドシップが荒野を爆進する。

ツヨシ「バカ兄貴がいないんじゃ、総帥はこの俺のもんだ!」

【再会する二人】

ヒデ「聖か!?」

聖「ヒデ・・・」

曽根「元プロジェクトソルジャーヒデを死刑と処す。」

【今、蘇るP4の激戦!!】

玉木「あなたたちは生き残るの!」

キキ「あの人が躊躇ったら、引き金を引くのよ!」

ダブル「キキー!!」

バズー「仲間が死んで悲しくない奴がどこにいるんだ!?」

キーン「俺たちはもっともっと強くなるからな・・・」

ホーリー「ずっとあんたの事が好きだった。」

陽「あの夜、私を抱かなかったのを後悔してるんでしょ?」

ロク「こ、これがP4・・・」

ロクの前には、瓦礫の山々が立ち並ぶ。

【4人の知られざる過去、四天王誕生の秘話が今、明らかになる!!】

ロク「見てみてぇんだよ・・・」
直美「えっ・・・？」
ロク「草原ってやつを・・・」

次回　四天王　第五章　【カラー・フィールド】

ロク「さぁーて・・・・・行きますか！？」

その1　拘束のロク

暗い部屋の中、ロクが座り込んでいた。部屋は狭く、まるで牢屋の作り。ロクは一人下を向きながら床に座り込んでいる。そこへドアを開ける音が聞こえてきた。中に入って来たのは、機関銃を構えた兵が2名と、女医の高田だった。兵はドア付近に一人、ロクの側に一人、高田はロクに近づき上着を腹の部分からめくり上る。

「もう出血してないわね?」と高田。
「はい・・・痛みもありません・・・」とロク。
「さすが・・・と言いたい所だけど、普通なら死んでるわよ!」
「すいません・・・」
「午後から取調べね?それまで点滴よ。」
「はい・・・」
高田は備え付けの点滴を変えていくと、すぐ部屋を出て行った。最後に兵も出るとロクはまた一人になった。暗い部屋はまた静かになった。ロクは備え付けのベットに横たわることもなく床に座り込んでいた。

地下3階の取調室。ロクは後ろに手錠をはめられイスに座っている。ロクの後ろには銃を構えた兵が一人。そこにダブルが入って来る。
「よお!」とダブル
「おお・・・」
「ロク、具合はどうだ!?」
「俺はいい・・・キーンと死龍は?」
「キーンはもうリハビリを始めた。またバイクに乗るってよ!死龍は・・・」

ダブルは言葉を詰まらせた。
「死龍は！？」
「まだ、目が覚めない・・・腕、内臓、頭・・・正直命があったのは奇跡だ。」

「俺のせいだ・・・」
「ロク・・・」
「俺が逃がしたから・・・」
「・・・それと桑田だが・・・」
「！」
「昨日、埋葬した・・・」
「そうか・・・すまん・・・」

ロクは治療を受けながら取調べを受ける毎日だった。取調べはほぼ毎日ダブルが担当している。ロクがいる独房は、治療も出来る設備に鳴っている部屋だが、ドア一つしかない狭い病室だった。ロクはベットに横たわらず、床に座り込んでいた。一人膝小僧を抱えると、目を瞑っていた。

それは今から3年前・・・
Ｐ６指令室に、久弥と弘士の姿がある。
「２期生からの連絡が絶って約１ヶ月です・・・」と弘士。
「Ｐ４は未だ、援軍を求めている・・・」と当時司令の久弥。
「出すといっても・・・３期、４期の若い連中ですよ。」
「バズーを呼べ。」
「はい！」

Ｐ６台会議室。久弥と弘士、バズーの３人だけがいる。
「出撃ですか？」とバズー
「うむ・・・」
「２期の連中は？」
「連絡がない・・・」
「前回は３期からも、何人か出しているはず・・・連絡がないって・・・」
「確認しに行って欲しい。」と久弥。
「行きますよ・・・それで編成は？」
「任すよ。」
「分かりました。それで出発は？」
「明日の朝だな・・・」
「急ですね？」
「Ｐ４も苦しいと見てる・・・」と久弥。
「はあ・・・」

Ｐ６の大会議室。３期生の１０名が集められていた。バズー、キーン、ダブル、ロク、キキ、ホーリー、残（ざん）、ライ、モスキート、ブイの１０名。みな歳は１５から１８くらいの者ばかりだった。その内、女性隊員は、キキとホーリーの２名。

「明日、０６時３０分に出発する。いいな？」とバズー。
「ＳＣはどうするんだ？」
彼はモスキート。策士。隊の中では一番小柄からそう言われている。
「Ｐ４はＳＣは無理だ。」
「・・・と言うと？」

彼はブイ。無線、通信、機械のプロ。名前の由来はボルテージから。

「途中まで、トラックで行く。それから歩きだ。」
「歩くって、どの位だ？距離によって装備も変わってくる。」
彼は残（ザン）。爆破のプロ。彼が仕掛けると何も残らないというのが名前の由来。

「２５キロという話だ。」
「ＳＣがないと辛いな・・・装備どれだけあると思ってるんだ？」
彼はライ。地雷専門屋。名前は地雷のライ。

「乗り捨てて、わざわざ敵にやっちまうのか？もったいない・・・それと各班、４期、５期からのチョイスは各班長にお任せする。以上だが他になにかあるか？なければ明日早いのでこれで解散する。」
「了解！！」

出発当日、北ゲート付近には３６名の兵士が集まっていた。
「なんで、ロクのとこに女性ばっかり集まるんだよ！」とぼやくダブル。

ダブルはロクの班に、女性が多い事にバズーに噛み付いていた。
それを聞いていたホーリーが近寄る。
「あら、ダブルさん？あんたの班じゃおちおち寝られやしないわ。いつ襲われるか分からないもん。そうでしょキキ？」とホーリー。
「う、うん・・・」と困惑のキキ。

「お前みたいなデカ女！襲うわけないだろ！しかもロクだって男じゃねぇか？」とダブル。
「あんたより、ロク班長の方がまだ安心だわ！」鼻でダブルを笑うホーリー。
「くそーロクめ！またおいしいとこを・・・」

皆が出発準備の中、そこへ当時１２歳の桑田がやって来る。
「ダブルさん！？ロクさんは？」となつみ。
「なんだなつみ？ここは軍事施設だぞ！」
「今日から、ポリスメカニックです！及び指令室のオペです！！」

桑田は胸のＩＤを自慢げに見せびらかす。
「スゲェ・・・そ、そうか・・・今日からか配属・・・おい！ロク？」

すると、ドライバーと打ち合わせをしていたロクが、皆の前にやって来た。
「どうしたんだ？・・・なつみか？」
「今日から、地下勤務ですよ！」
「そうか、今日からだったか・・・」

「Ｐ４ですよね？約束のお土産お願いしますね！」と小声のなつみ。
「遠足じゃねぇし・・・」
「それと種がいいです。」
「種？」
「植物ならなんでも・・・Ｐ４に保管してるとか、南には植物があるって聞いてますよ。」

「ダブル？ほんとか？」

「デマデマ・・・あるのはまだ俺らが口にしたことのない豚と牛の缶詰だよ！」
「ダブルさん！ゆ、夢がないなぁ・・・」
「わかった、種だな？」
「はい！お願いします！」
「それと・・・これをお前にやるよ。」

ロクは腰のホルダーから白い拳銃を手渡した。
「ワイルド・マーガレット！？ロクさんの特注品じゃないですか！？」
「俺には、もう小さい。反動が少ない分、なつみでも平気なはずだ。持ってろ！」
「いいんですか？」
「大事にしろよ。」
「はい！！」

「おい！そろそろ行くぜ！」とバズー。
バズーが各員に声を掛けた。
「さーて、行きますか？」
「気をつけてください・・・」となつみ。
「ああ・・・」

ロクの独房。ロクは下を向いたまま床に座っていた。
「なつみ・・・」

その２　瓦礫の街

世に言うＰ４の激戦・・・ポリス最大の施設、第四ポリスは今から３年前に陥落した。場所は現在の防衛庁とも、皇居とも言われている。

Ｐ４は高い崩れたビルに囲まれ、３０年もの砂嵐でも砂に隠れなかった『瓦礫の要塞』だった。基地の１００パーセントが地下。ＳＣやサンドシップも近寄せない、ジプシャンにとっては難攻不落の要塞と言ってもおかしくはない。しかし、補給も支援も出来ないという短所もあり、Ｐ５やＰ６の支援部隊の犠牲は計り知れない物があった。しかし、ジプシャンにとってはＰ４を陥落すれば、Ｐ５、Ｐ６の平地のポリス陥落は容易なのは確かだったのだ。ジプシャンは全ての兵力を持ってＰ４攻めに注いでいた。

３年前。Ｐ６北ゲート前。３６名のプロジェクトソルジャーが最後のミーティングをしている。

「ようという奴はいるか？」

ロクの周りには１０名程の兵士がいた。半分は女性で、その中の一人が挙手する。

「はい・・・私です。」

その者は、茶髪で眼光も鋭い１２、３歳と思われる少女の兵士だった。

「女・・・？」

驚いたのはロクの方だった。しかし、そのロクの言葉に陽はムッとして噛み付いた。

「女じゃまずいんですか!?」

陽は、ロクに少し歩み寄った。

「い、いや・・・てっきり男の名前かと・・・」

ロクは、珍しくへの字口になり、ホーリーやキキの顔を見つめ助けを求める。すると、ロクの班にダブルが近寄ってきた。するとロクに耳打ちをする。

「分かってると思うが・・・」

「な、なんだ?」と驚くロク。

「キキに手を出すんじゃねぇぞ・・・」

「お前と一緒にするな・・・」

ダブルは、そう言うと再び自分の班に戻っていった。

「・・・ったく・・・さて・・・陽とか言ったな?お前にこの班の副班長を命ずる!ホーリー?面倒を見てやれ。」

ホーリーはナビゲーションのプロ。身長は女では高く１８０センチ近くある。星を見てナビをする事が多いのでホーリーと呼ばれている。

「こいつに副班長?キキの方が・・・」

不服そうなホーリーに対しロクは含み顔でなだめた。

「いいから・・・」

「へいへい・・・」不服そうなホーリー。

「同じく副班長にホーリーだ。いいな陽?」

「は、はい・・・」

陽は突然の命令に戸惑っていた。

『こいつが・・・3期生唯一の四天王のロク・・・』陽はロクを睨んでいた。

「うちの、班は1班、2班の後方支援に当たる。またP4までの突入道の確保だ・・・いいな?」とロク。
「我々の班は、女性ばかりだからですか!?」
突然、陽がロクに口を挟んだ。すると側にいたホーリーが陽に近寄り、無言で殴り倒した。驚くメンバー。

「おいおい・・・殴るなよ・・・」とロク。
「何様か知らないけどね!!ここではロクの命令は絶対だよ!!聞けないというなら、来なくていいうちには置いておけないわ!!」
「ホーリー・・・?」ホーリーをなだめるロク。

陽は倒れたまま、ホーリーを睨みつけたが、すぐ起き上がると直立でホーリーに対した。
「すいません・・・」
「私がいる限り、男たちに女扱いさせないから!他の女子もいい!?」

他の兵士も、ホーリーの圧倒的な言葉に反論の余地なかった。
「さ、さて・・・い、行きますか・・・?」とロク。

ロクがそう言うと、一人一人トラックの後ろに乗り出した。トラックの荷台には12名分の席があり、ロクとホーリーが一番前に座った。陽は、一番後ろに座ったが、ホーリーに手招きされ、前にと移ってきた。
「あんたは、私の隣よ!」とホーリー。
「はい・・・」

ロクは座ったまま、運転席側の小窓を軽く叩くと、トラックは動き始める。それに続き、2台のトラックが走り始めた。

「今日も風が強いな・・・」

ロクは小窓から、運転席の窓を見ると、そう呟いた。そして首に掛けていたスカーフで口を覆った。

「陽って言ったな・・・専門は?」とロク。

「航海学を・・・」

その言葉にトラック内のみんなは驚き、ホーリーが口を出した。

「お前!プロジェクトソルジャーが、レヴィアに乗れると思ってんのか!?」

陽は、その先程の件もあり、ホーリーに反論する。しかし語尾になると先程の反論での件か弱くなっていた。

「教官は!我々でも船に乗れるように・・・そう言ってましたが・・・」

「確かに、俺らも近いうちそんな事になりうるな・・・」

「陸戦部隊の我々がですか?」とキキ。

「あたい、海嫌いだし・・・生きた魚駄目・・・」とホーリー。

「ホーリーも弱点はあるんだな?うーん、時代だな・・・もう5期の訓練には、そのプログラムがあるんだろ?」とロク。

「選択出来るんですよ・・・私はそれで・・・」

「ああ、関係ない、関係ない!」と手を振るホーリー。

「陽は5期のトップだそうだ・・・高森教官からはそう言われている。」とロク。

「そうなん?すげーあの手榴さん以来でしょ?」とホーリー。

「次期四天王候補か・・・」とキキ。

「キキ、ホーリー。こいつだけは命張って守れよ!」とロク。

「任せて!よろしくねキキよ。」

陽に手を伸ばすキキ。陽も握手を交わした。

「さて・・・Ｐ４の道程だが・・・」とロク。
「歩きって・・・我々もですか?」とキキ。
「以前使ってた、志村入口はどうしたんですか?」とホーリー。
「旧三田道路か?ジプシャンに見つかり、自ら破壊したらしい・・・」
「まだ地下鉄跡はあるはずです。」とキキ、
「だいぶ、崩れてしまい通行は不可だ。」
「旧光が丘からの１３号はどうでしょう?ここ深いらしいし。」
「近くまでは行けるが・・・しかも、敵にこの辺は押さえられてるらしい・・・ＳＣの乗り入れも不可。」
「八方塞がりですなぁー・・・それじゃあたいの出番ね?」とホーリー。

「そのためのナビだろ?」
「そうですが・・・旧都心から下に行く方法は?」
「Ｐ６の１５倍の敷地に・・・わずか８つのエレベーター・・・それも今あるかどうか・・・」

「馬鹿げてます!!」
陽がロクとホーリーの会話に突然口を挟んだ。
「そうだな・・・」とロク。
「でもな、おいらたちは命令があれば行かなければならない・・・」とホーリー。
「これじゃあ、犬死しますよ!!」と陽。
「それがおいらたちの仕事だ・・・」
「・・・」陽はその言葉に黙ってしまった。

「ふふふ・・・ホーリーも言うねぇ・・・」とロク。

「2期生だって・・・生きてないですよ・・・」と陽。
「そうかもな・・・」とロク。
「・・・」
陽は、ロクらの作戦を聞いて蒼くなっていた。トラックは南に向かって、荒野を走っていく。

現在。ロクの独房。
「ホーリー・・・なぜあの時・・・」
ロクは床を見ながら一人嘆いていた。

再び3年前。トラック3台は、ある荒野に止まっていた。所々、昔のビルの残骸が荒野から顔を出している。夕日は西に沈みかけていた。ホーリーは一人小高い丘から降りてくる。
「どうだ?」と話しかけるロク。

「凄い数ね・・・ジプシャンの総力って感じかしら・・・蟻一匹抜け出せないかも?果たして、辿り着けるか?」
「どれどれ?」
ロクも身を潜めながら、その丘を登る。一番高い所では顔だけを出し、双眼鏡で覗き始めた。

「こ、これがP4・・・」
ロクが見た物は、広い荒野の彼方に、夕日に作られた長い影を帯びた瓦礫の山々だった。

その３　ロク班の鉄則

バズーが武器を背負っていた。ブイ、ライ、キーンも出撃の準備をしている。それを見守る、ロク、ダブル、キキ、ホーリーたち。日は完全に暗くなっていた。ロクらは崩れかかったビルの中でキャンプを張っていた。明かりは、微かに光るライトが一つ。

「どこから、侵入するつもりだ？」とロク。
「そうだな。やはり志村口かな？」とバズー。
「あそこは封鎖されたのでは？」とホーリー。
「ＳＣは無理としても、人ひとりくらいなら入れるんじゃないか？なあキーン？」

「そうだな。まあ入り口に行けば分かるよ。」とキーン。
「俺はいつ出ればいい？」とダブル。
「朝まで取り付けばいい。」
「わかった。」

「なら行くぜ！後を頼むなロク。」
「あいよ。」
バズーら１２名は暗い荒野に消えて行った。

「頼むぞ・・・バズー・・・」
「陸戦で死ぬ奴かよ？」と見送るダブルたち。
「それにしても、多すぎよ。ここのジプシャンの数・・・」嘆くホーリー。
「なーに心配するな。飯にでもすっか？」
「そうだな。」

ある廃墟の一室。無線機が置いてある机が一つ、男がイスに座っている。薄暗い部屋にライトは一つだけ。男は机を背に微動だにしている。そこへある男が入ってくる。

「タケシ様。」

イスに座っていた男が、イスごと振り返るとそこにいたのは二十歳頃のタケシだった。入ってきたのは当時の嶋。

「何だ?」

「北２５キロ地点で、トラックを確認しました。我軍の物ではありません。」

「Ｐ５かＰ６か・・・」

「恐らく・・・」

「どうやら、他のポリスはここを陥落させたくないようだな?」

「はい・・・」

「しかし、さすがＰ４・・・一筋縄ではいかんな。今回はどうするか?」

「ここを孤立させる為に、全ての援軍は潰すべきかと・・・」

「まあ待て。死神が焦って、前の隊を全滅させたのは誤算だった・・・今回は入れてやろう。」

「敵の入口ですか?」

「そうだ、未だ突破口が開けないんでは、埒が開かん。こいつらには案内役をしてもらえ。」

「なるほど・・・」

「死神にはそう伝えろ。あいつはそういう駆け引きには慣れてないからな。」

「すぐ使いを出します。」

「頼む・・・」

ロクらが張ってる廃墟のベースキャンプの一室。キキと陽が他の兵士の食事を用意していた。
「あ、あの・・・」と陽。
「なんだ?」とキキ。
「うちの班長は、四天王で間違いないんですか?」
「しっ!今度その質問したら、私がぶっ飛ばすわよ。」
「す、すいません。」
「まあいいわ。教えてあげる。」
「はあ・・・」

「本当は、あの人は四天王になりたくはなかった・・・」
「う、嘘です!ここにいるみんなは四天王になりたくって・・・」
「しっ!声大きいって!・・・3期はバズーあっての3期でしょ?それを差し置きロクだけが四天王になったのが嫌だったみたいよ。」
「そんな・・・」
「戦闘能力っていうか、なんだろう?策士なんだよね、あの人。」
「そうですか・・・」

「ああ、ロクの前では四天王の話は禁句よ。それと・・・」
「え?」
「ここでは彼の命令は絶対なの。バズーですらロクの命令を聞くから・・・それと、ロクは殺しはしない。だから彼が躊躇したら私たちが迷わず拳銃を抜く。それと、彼の後ろでは銃は抜かない。撃たれるわよ。それと・・・」
「ま、まだあるんですか?」
「もちろん、彼の“何とかする”は宛にしちゃ駄目。それと・・・ここ重要。」
「は、はい・・・」

キキの言葉に陽は直立した。

「彼を好きになっては駄目！」
「まあ、それはないですな・・・」安堵の陽。
「それならいいけどね。さあ仕事仕事！」
「はい。」

夜の荒野を移動するバズー班。時折遠くにＳＣのライトが見え隠れする。その都度バズーらは崩れた建物に身を潜める。
「簡単過ぎないか？」とバズー。
「そうだな。敵の動きが妙な気がする。」とキーン。
「罠臭いか？」とブイ。
「そろそろ、敵と遭遇してもいい頃だが・・・」

ロク達がいるキャンプ。ダブルとモスキートらが出撃準備をし始めた。第2陣部隊である。そこをキキが遠くから、ダブルを見つめている。ダブルもキキに気づき、みんなに気づかれないようにキキに近づく。

「もう行くの？」とキキ。
「バズーらが心配だ。」
「気をつけてね。」
「キキもな・・・」
「あれ？心配してくれるんだ？」
「心配してねぇし・・・ロクのとこじゃ大丈夫だよ。」
「あんなに私がロクの班にいる事、嫌がってたくせに・・・」
「戦場じゃ信用してる、悔しいがな。」
「うふふ、その辺は男同士しかわからない絆ね。」
「ああ、それじゃあな。」
「うん・・・」

ダブルが、周りの様子を伺いながらキキに顔を近づける。キキもそっと目を瞑る仕草をする。

「あらあらお二人さん。勤務中よ！」

慌てて離れ、声のする方に振り返るダブルとキキ。そこにはニヤニヤした顔で二人を見つめていたホーリーとロクがいた。キキは赤面になってその場を走り去って行く。

「お、おい？キキ！・・・な、なんだよ！デカ女！ロクも・・・いつからそこにいた？」

「あれ？私たちの気配が気づかないほど油断してたのかしら？」

「ソルジャーとしては失格だな・・・」とロク。

「お前らいつもいつも！いい所で・・・」

「デート気分で、戦場に来てんじゃないわよ！まったく！」

「最後かもしんないんだぞ。いいじゃないか、ちょっとくらい。」

「ちょっと、何よ？規則ばっか破って！」

「おいおい、ホーリー。もうそのへんにしなよ。今回は未遂という事でだな・・・」とロク。

「うちの班長が、こんなに甘いからキキは罰せられない。女の身にもなりなよ！このチビすけ！」

「うるさいな！俺は規則なんか怖くないからな！デカ女！」

二人が言い争っていた時、モスキートが準備を終えこの輪に入ってくる。

「準備はいいんだけど・・・後はうちの班長待ちなんだがなあ・・・」

「はいはい・・・いいか、ホーリー！いつかぶん殴ってやる！」とダブル。
「いつでも相手してやるわよ。おチビちゃん！」
「ロク！ちゃんとこの女、躾しとけよ！」
「はいはい・・・」呆れるロク。
「それと、キキに何かあったら許さんぞ！」
「心得てますよ。」とロク。
「それじゃあ2班！行くぜ！」

ダブルの班は真っ暗な荒野へと歩き始めた。ダブルは最後尾につき、キキが走り去った方向を向きキキを捜す。するとトラックの陰からちょこんと顔を出してダブルを見つめるキキを見つけた。ダブルはキキに敬礼すると、キキも敬礼をする。荒野の東側には大きな月が昇り始めていた。

その４　後方の司令官

バズーの班は、現板橋区志村付近にある通称「志村口」に到着していた。

当時Ｐ４は、施設の上の瓦礫を整備する事を止め、核戦争前の地下鉄だった所をＳＣ用の道として整備していた。整備するにはあまりのもの瓦礫の量。また線路だった鉄の再利用もその理由と言われている。

Ｐ４は瓦礫の要塞の道を選択したのだ。その際、北のＰ５、Ｐ６からの搬入の役割をしていたのがこの「志村口」にあたる。旧都営三田線が地下鉄から地上に上がる際のトンネルで、この他にも日比谷線の中目黒口、千代田線の代々木口など当時は５個の搬入口があったと言われている。しかし、近年になるとジプシャン軍の攻撃が激しくなり、極秘の搬入口を除いては全てＰ４自ら爆破し、封鎖してしまったのである。

バズーとキーンたちは、その志村口入口に立っていた。

「中から微かだが風が来るな。」

キーンはポケットからジッポライターを取り出すと、入口付近で火を付けていた。

「やはり、封鎖はされてないな・・・ブイ、ライ。赤外線スコープ。」とバズー。

「ほい来た！」

「隊は逆Ｖ字隊形。進むぞ！ライは地雷見落とすなよ！」

「はいよ！」

「キーン。後方は任せる。」

「了解。二百メートルでいいか？」とキーン。

「任せる。ならみんな行くぜ。」

バズーの手馴れた掛け声が、志村口の中に響き渡った。バズー班は、真っ暗なトンネルを進み始める。ブイとライは左右の先頭を赤外線スコープを掛け歩き出していた。バズーは中央の一番後方。更にキーンはその後方を後ろ向きに歩いていた。

「足跡が8名。まだ新しい。これはポリスのもの・・・だが進行方向だけだ。」とブイ。

「2期生のもんか?」とライ。

「恐らく・・・」

「2期生もここを・・・」

隊はゆっくりと歩いて行く。既に入り口の明かりは遠く、トンネル内は明かりらしい明かりはなくなってきた。

「全員、赤外線スコープ着装。」とバズー。

すると隊の全員が暗視用のメガネを着装した。足音も立てずに歩く隊は、トンネルの中では隊員らの呼吸の音しか聞こえなくなってきた。トンネルの壁には銃弾の跡が目立つようになり、途中には炎上したSCが2，3台見える。

「ここで戦闘があったのか?」

「SCは両方ともポリスのものだ。この様子ではもう数年経っているな。」とブイ。

「各員、そのまま前進だ。」

バズー隊はトンネルの先へと突き進む。

その頃、2班のダブル隊はようやくP4の瓦礫の街に辿り着いていた。東の空は少し明るくなっていた。

「バズーらは、やはり志村口に向かったな。」と残。

「SCは通れないと聞くが・・・人は通行可能なのか?」とダブル。

「おかしいと思わないか?ここに来るまで、お出迎えもない。」
「敵も余裕がないんだろ。行くぞ。」
ダブルの隊が更に奥に入ろうとしていた。しかしそのダブルの隊を付け狙う影があった。

Ｐ４ジプシャン軍北方面キャンプ。そこは、ある瓦礫のビル内に設けられた、基地という言葉には程遠いものだった。そこには３０台の戦闘用バイクが置かれ、２０名近い兵士がいる。カードゲーム耽る者や海草酒を仲間と飲み酔っ払っている者もいた。そこへある兵士がバイクでやって来ては、一番奥の兵に歩み寄って行く。
「大広様」

その奥にいたのは、後の“荒野の死神”と呼ばれる、大広だった。
「どうしたのですか?」
「援軍の第二部隊と思われます。この者らも志村口に向かっております。」
「タケシ様からは手を出すなと言われてます。このまま監視をお願い出来ますか?」
「了解しました。」
「それと誰かタケシ様に使いを出してください。細かく報告を・・・」
「はい。」
「志村口・・・あそこは封鎖されたのでは?なぜあそこを・・・?」

Ｐ４方面ジプシャン軍指令室。タケシのいる部屋に石森が入ってくる。
「タケシ様。北の大広から使いが・・・」と石森。
「なんだ?」とタケシは振り向いた。

「昨日の敵の偵察隊です。第二次部隊を発見した様子です。」
「手は出してないようだな。」
「はい、一次部隊は志村口に入った様子です。」
「前回もあそこだったな?何かあるのか?」
「以前調べた際は、途中で行き止まりになっているはずですが・・・」
「隊を送り、もう一度調べるべきだな。」
「はい。」
「それと、前回の3人の四天王の首はどうした?」
「はい、昨日寛子様の使いの者に運ばせております。」
「来るぞ!もう一人・・・」
「はあ?」
「いつも通り、女は生かして捕まえるんだ。女は口を割る。どうせ奴らは、女も戦場に出して来るアホばかりだ。そこを突け!四天王のもう一人は必ず来る・・・」
「わかりました。大広に伝いえます。我が隊からも人員を出します。」

ロクたちがいるキャンプ。キキが無線機を手にしている。ロクとホーリーはそばでその様子を見ている。
「わかった・・・そう伝える。」とキキ。
「どうした?」
「ダブル班も志村口に向かうと。」
「あそこは、封鎖されたって・・・」

「バズーの考えはSCは無理だけど、歩行なら行けるんじゃないかと・・・」
「問題はどうやってP4とコンタクトを取るかね?」
「さあな?今回の目的は第一陣の捜索だ。P4は関係ない。」

「もし取り付いたらどうするの？」
「Ｐ４の援軍にまわるさ。ただ今回そんな余裕はないだろ。」
「大丈夫かしら？」
「俺らも出るか？キキ準備をしてくれ。」
「今回はうちの班は新人が多い。無理よ。」とホーリー。

「行くのはこの３人だけだ。」
「そう来ると思った・・・」とホーリー。
「なに、入口までだよ。偵察偵察。」
「ただね・・・指揮官は、前線に行くもんじゃないわ。」
「いつから、俺が指揮官だ？この隊はバズーが・・・」
「わかってるわ。ただそのバズーがあなたをここに残した意味も考えてよ。」

「ホーリー・・・」
「今回の総大将は事実上はあんたよ！総大将がわざわざ敵のど真ん中に行くの？」
「俺たちに上も下もないよ。仲間を助けに行くのに命令もくそもない。」
「ロク・・・あんた・・・」
「ホーリー？ロクが行くって言うなら、私たちは行くだけでしょ？」
とキキ。

「あんたたち・・・もう馬鹿ばっかなんだから・・・」
「なら用意を始めるわよ・・・陽？陽はいて？」

キキはその部屋を出て行った。
「これは敵の罠だ。このままだと隊は全滅する。」
「ま、まさか・・・」

その5　　狙撃兵

「どうしてそんな事を言うのよ?」ホーリーは慌てた。
「2班とも敵と接触してないんだ。おかしいよ。わざと敵に泳がされている。」とロク。
「呼び戻したら?」
「ダブルらはな。バズーらは地下なら無理だな。」
「まあ、あたいはここに居るよりは暴れたほうがいいけどね・・・キキは何て言ってる?」

そこに陽とキキが戻ってくる。
「あの・・・何か?」二人の顔を伺う陽。
「ここをお前に任す。24時間で戻らなければ、ここを撤退し、キャンプをここより20キロ下げるんだ。」
「はあ・・・」陽は一瞬戸惑いホーリーを見る。
「聞いての通りよ。後の8人を連れて下がって。」
「もし、前の隊がここを目指して帰ってきたら?」
「その時は、戻って拾ってやってくれよ、陽?」
「わかりましたが・・・」

「前の隊には、イブやカイ、レッドがいた・・・」
ロクは改まってキキらに向き合う。
「そうね・・・」うつむくキキ。
「そいつらがどうなったのか、知るのも俺たちの役目だろ?ホーリー?」
「そうだな・・・わかった行こう!」
「決まりだ!じゃあここを頼むぞ、陽?」
「は、はい・・・」

バズー班。真っ暗なトンネルを隊は前進していた。
「ブイ、どの辺だ?」とバズー。
「入口から１０キロは歩いたはず・・・」
「しかし、中は暑いな。水が無くなるぜ。」とライ。
「しかしどこまで続くんだ?」と不安なキーン。

ダブル班。日が高くなり、隊は廃墟の瓦礫の山を隠れる様に、志村口に向かっていた。
「ダブル?夜まで待った方がいいんじゃないか?」と歩行中のモスキート。
「ああ、そうだな。この辺は敵兵が多すぎる。隠れる瓦礫も少ないな。」
「気づいたか?１２名のバズー班を追いかけてる足跡が１つ。」
残が一つの足跡を見つけ報告に来た。
「追われてるのか?バズーら?」
「こう多いとな・・・気づかれないのも変だと感じてた・・・」
「どうする?ダブル?」とモスキート。
「無線は効かないか?」と残。
「先方隊の奴らもうトンネルに入ってるだろ?ここからでは届かないぞ。」

その時、ダブルのすぐ側に居た若い兵の足に銃弾が撃たれた。すぐ身を伏せる隊員たち。
「どこからだ!?」銃声の方向を確認するダブル。
「６時の方向!撃たれた後に音が来た。距離５００ってとこだ!」
と残が叫ぶ。

ダブルが若い兵を見ると、右足脛を押さえ苦しんでいる。

「待ってろ。今助けてやる。」
「は、はい・・・」

若い兵は、這い蹲り移動をしようと試みる。しかし、2発目の銃弾が彼を襲った。若い兵は右肩を撃ち抜かれ、起き上がることも不可能となっていた。
「ダブル、援護しろ。俺が助ける!」とモスキート。
「駄目だ!これは敵の罠だ!」とダブル。
「このままでは、出血が多くて奴は・・・」
「駄目だ!」

ダブルは隠れながら若い兵に声を掛けた。
「おい、そこから6時の方向は何が見える?」
「4階建ての高い廃墟があります・・・」
「残!迂回してあのビルに廻りこめないか?」
「廃墟が少ない!身を隠せない!」と残。
「こんな時、キーンかバズーが居てくれたら・・・残?遠回りでいい。あの廃墟に回り込んでくれ!」
「わかった・・・」

バズー班はトンネルを進むこと14キロ程歩いていた。現神保町付近。するとトンネルはコンクリートの瓦礫で塞がっている。人ひとり通れない。
「行き止まりか!?」立ち止まるバズーたち。
「いや、上の方はそうでもない。人ひとりくらいなら通り抜け出来る。」とブイがライトを天井に当てた。
「駄目だ。あの感じではいつ崩れるか分かんないぞ。」とライ。

ライトを照らし全員が見上げる天井部分は、いつ崩れ落ちるか分

からない状態であった。
「戻ろう、バズー?危険過ぎる・・・」とキーン。
「ブイ、短波無線を。」
「味方が聞いてればいいが、敵にも居場所を知られてしまう。いいのか?」
「マニュアル通りで頼む!」
「わかった・・・」ブイが背中の無線機を準備し始めた。

そんな時、キーンがある異変に気づいた。
「なんだこの音?」
「ん・・・?」バズーも耳を澄ます。
「エンジン音!?SCだ!」
「隊を戦闘隊形に展開する!」バズー。
隊がトンネル内で展開する中、ブイは無線を操作を続ける。
「答えてくれ・・・P4・・・」

ダブル班、志村口まで2キロの地点。
「間違いない。こいつ狙撃のプロだ・・・」とダブル。
「奴が弱ってきてる。助けるぞ。」とモスキート。
「駄目だ。今出れば撃たれる。」
「見殺しは出来ない。」

ダブルらは撃たれた若い兵の様子を見るが、明らかに先程より息が荒くなって来ていた。
「自分で止血は出来ないか?」
「やってみます。」

ダブルは、持っていた車の下部の爆弾を探す為の鏡を持ち出すと、瓦礫の端へそっと迫り出し、4階建ての建物の様子を伺った。する

とその鏡は瓦礫の端を出した瞬間に3発目の銃弾に狙撃された。
「くっ、野郎・・・」
「やるな・・・覗くなよと！お前の好きな女じゃねえか？」まだ余裕のモスキート。
「ふっ、らしいな・・・」笑顔のダブル。
「ダブル！援護しろ！」モスキートはそこを立ち上がろうする。
「無茶だ。かなりの腕前だぞ。出れば撃たれる。」
「一か八かさ・・・」

そう言うとモスキートは、若い兵に向かって走り出した。
「モスキート！」

モスキートは若い兵に近づくと、瓦礫の影に運ぼうと彼の足を持ち始めた。ダブルは狙いも分からないまま、4階建ての建物に機関銃を乱射した。その時だった。モスキートの右足首に一発の銃弾が貫通する。声を上げその場に倒れるモスキート。

「モスキートっ！！」
モスキートは若い兵の側で蹲っていた。ダブルは2人のそばにいるもう一人の兵に声を掛けた。
「おい？そこからモスキートを連れ出せるか？」
「無理です。2メーターはあります。」
「足だけだ。心配するな！」足を押さえるモスキート。
「動くな！動くとまた撃たれる！」
「わ、わかった・・・」

すると4発目の銃声が聞こえた。銃弾は最初に撃たれた若い兵を貫通。若い兵は命を落とした。
「代わりが出来たから用済みだとよ！」とダブル。
「そうらしいな・・・」モスキートは苦笑い。

「弄びやがって。残？聞こえるか？」無線を飛ばすダブル。

『今、奴の右に回った。しかし、ここからでは確認出来ない・・・』

「いいとこを押さえてやがる・・・」

「後方に砂煙！バイク隊多数！」後方の誰かが叫んだ。

「くっ・・・逃げ道もなしか・・・」ダブルは焦った。

その6　　少年兵

トンネル内のバズー班。トンネルの先から、エンジン音と微かな光が見えてくる。その光でバズー班は全員、暗視スコープを外した。
「一単ライト・・・バイク隊だ!!」キーンが叫ぶ。
「展開しろ!ここで殺るぞ!」バズーが指示する。
「こっちは隠れる場所がない。銃弾も避けれないぞ!」ライが銃を構えながら叫ぶ。
「それは向こうとて同じだ!」とバズー。
「バズー!?天井をバズーカで撃ち抜け!」とキーン。
「最悪全員生き埋めじゃないか・・・?」バズーは湾曲の天井を見つめた。
「生身でバイクと戦えるかよ!?」とキーン。
「なら、直接攻撃でバイクを・・・」

バズーはライトが見えてくるトンネルの先に、バズーカを構えた。
「天井崩れても知らないからな・・・」

バズーが発射したバズーカの砲弾が、トンネルを進んできたジプシャン軍のバイク隊を砲撃した。木端微塵に吹き飛ぶバイク隊。視界が見えなくなるほど埃と砂が舞い飛ぶ。その中爆発したバイクの炎だけがトンネル内を照らし始めた。しかし後続のバイク部隊のライトが遥か向こうに見えて来る。

「くっ、まだ来るぞ!」キーンは苦い顔をする。
「これ以上バズーカを使ったら、本当にここの天井が抜けるぞ。」

埃と砂が収まってくると、さっきのバズーの攻撃でバイク隊が攻撃された天井部分の一部が崩れかかっていたのが爆破の炎で見えて

来る。
「あれは・・・？」

バズーはさっきの爆発で爆破された箇所の横に、別の通路が出来ているのに気づいた。
「あそこに通路がある！あそこに避難するぞ！」
「あんな所に通路か？」とライ。
「急げ！キーン後方を頼む！」
「任せろ！」
バズー班の１２名は、キーンだけを大きい通路に残すと、その脇に続く細い通路へと入ってくる。キーンはその通路に体を半身になり隠れ、バイク１台１台を自分のライフルで狙撃し始めた。

志村口入口手前、ダブル班。
「バイク隊だ！数は１５台！」
後方にいた同じ班の兵が叫んだ。
「ここでバイク隊を迎い撃つ。」とダブル。

「瓦礫から・・・頭出すなよ・・・」瀕死のモスキートが叫ぶ。
「モスキート・・・」

ダブルは、モスキートの声でモスキートの傷の具合を知った。ダブル班は、瓦礫の建物に背中を付けると、拳銃や機関銃を構えだした。
「いいか！瓦礫から出るな！後ろから狙撃されるぞ！」

迫り来るジプシャンのバイク隊。ダブル班はある程度の覚悟を決めた瞬間であった。
すると１台のバイクが炎上するのが見えた。ライダーは放り

出され、荒野へと叩き付けられる。

「何だ!?」ダブルは驚いた。

炎上したのは1台ではなかった。1台また1台とライダーたちが振り落とされていく。

「味方か?P4・・・?」

「こんな派手な演出は・・・奴だよ・・・」ニヤリと笑うモスキート。

「あいつ・・・いつもいい所を・・・」

そこに現れたのは、敵のバイクに跨るキキとホーリーであった。

そこへ、ダブルの元へ無線が入る。

『あらあら、小さい班長さん。苦戦中ね?ちゃんと隠れないと頭狙われるわよ?』

「ホーリー・・・どこでバイクを・・・?」

『途中で、敵から奪ったのよ。昼間暑いしね!』

「あんまり近寄るな!狙撃されるぞ!」

『ああ、あれならうちの隊員が“なんとかする”って言ってたわ。』

「ロクの野郎・・・」

瓦礫の間を走って狙撃兵のいると思われる、4階建ての廃墟に身を隠しながら近づくロクがいた。立ち止まりインカムで無線を飛ばすロク。

「ホーリー?聞こえるか?もっと建物に寄れないか?」

『私に囮になれって言うの?無理よ!これ以上は・・・』

「4階のどこかのはず・・・敵が見えないんだ・・・」

『ロ、ロクか・・・？』

モスキートが突然無線に割り込んで来た。

「モスキート？お前・・・？」ロクはその声に事情を察した。

『俺が・・・囮になる・・・チャンスは一回だぞ・・・』

「やめろ！無茶するな！」

『この出血だ・・・俺はもう・・・いいな。俺の銃は・・・お前に任すぞ・・・』

『やめて！モスキート！ロクは銃を撃てないのよ・・・それなのに・・・私かキキがする！それまで・・・』と無線のホーリー。

『ロク・・・お前なら出来る・・・行くぜ！』

「モスキート！」ロクが叫んだ。

モスキートは倒れていた場所からおもむろに立ち上がり、狙撃兵が居ると思われる建物に向かって銃を構えた。

「うおっー！」

ロクも瓦礫から身を乗り出し建物に向かって拳銃を構えた。すると一発の銃声が聞こえ、モスキートの胸部を貫通する。

「モスキート！」叫ぶダブル。

モスキートは微笑みながらその場へ倒れていく。

「あそこか！？」ロクは廃墟の中に人影を確認する。

狙撃兵もロクの姿に気づき、ライフルのスコープでロクを捕らえた。スコープで除いた狙撃兵が見たものは、不敵に笑うロクの姿だった。その光景に一瞬、引き金を引く動作が遅くなり、先にロクの拳銃音が鳴り響いた。ロクの撃った銃弾は、狙撃兵の狙うライフル

銃の筒先を貫通し、狙撃兵の構えるライフルは狙撃兵の顔の近くで暴発した。

「うっ・・・うっ・・・うわっ・・・」

首から血が流れ、顔は傷だらけとなり慌てふためく狙撃兵。狙撃兵はライフルを投げ捨て、首元を押さえその場から逃げ出そうとしていた。

「やったのか?」銃声を聞いたダブルが廃墟を伺った。
『奴の銃を撃ち落とした。残?いるか?建物を押さえろ!』と無線のロク。
『了解した!』と残。

ダブルはロクの無線を聞くと、すぐモスキートのそばへ駆け寄った。
「モスキート!しっかりしろ!?」
「ロクが・・・やったのか?」
「しゃべるな!衛生兵!誰か衛生兵を!?」
「いいんだ・・・ロクはまた・・・銃だけを?」
「ああ、馬鹿な奴だろ?」
「馬鹿だな・・・あんないい腕なのに・・・戦場では最も敵にしたくない奴だな・・・」
「もういい!しゃべるな!」
「お前らと・・・戦えたのは・・・俺の誇りだ・・・」

薄れていくモスキートの意識。ダブルも必死に傷口を押さえ励ましていた。

「死ぬな・・・モスキート！死ぬな！」
「先に・・・みんなのとこで・・・待ってるわ・・・」
モスキートは静かに息を引き取った。
「モスキート！」

残が狙撃兵がいた建物に、恐る恐る近寄る。すると中から首元を押さえた一人の兵隊が慌てて出てきた。
「動くな！」

兵も、残に気づき慌てて腰の拳銃を抜き、残に銃口を向けた。残は容赦なく、この兵を撃ち倒した。
「ふうー。こちら残。狙撃兵を確保。廃墟内は一人と思われる。」
『わかった。今そっちに行く。』とロク。

残は動かなくなった、狙撃兵に近寄ると被っていたロングハットを足で払い退ける。するとそこにいたのは既に虫の息の、自分らよりも若い１０歳くらいの少年だった。
「まだ・・・ガキじゃないか？」

残は少年の首にたくさんのネックレスを見つける。それはポリス兵や、プロジェクトソルジャーの名前が刻まれた２０本近いドッグ・タグだった。
「こんなにたくさんの兵を、こいつ一人で・・・」

そこにロクがやって来た。
「よお！これを見ろよ！ロク！」
「なんだ・・・子供じゃないか・・・くっ・・・タグがこんなにたくさん・・・」

狙撃兵の少年は、ロクの顔を見るなり怯え始めた。そこにバイクに乗ったキキとホーリーも合流して来る。
「子供・・・？」子供の兵を見て驚くキキ。
「ロク？これを見ろよ！」

残は、虫の息になった少年の首から、1本のドッグ・タグを引き千切るとロクに放り投げた。ロクはそのドッグ・タグの名前を見て驚愕した。
「タ、タンクの・・・タグか？」

その7　　ツヨシ登場

当時のＰ６の四天王は２期生のタンク、レボ、ＳＳ（エスエス）と３期生のロクからの４人から構成されていた。タンクは当時１７歳。２期生でも、四天王の４人の中でもリーダー的な存在だった。温厚で明るい性格は、誰からも愛されていた。バズーを凌ぐ体格。まるで歩く戦車だった事から、皆にタンクと呼ばれていた。今回は２期生を中心にＰ４支援の出撃だったが、途中で音信不通となり、ロクら３期生の出撃となる。

「こいつ、うちらの四天王の首まで・・・殺れよロク。お前が致命傷を与えたんだ。このままでもこいつは死ぬ。とどめを刺せよ！」残がロクに詰め寄る。

「まだ・・・子供じゃないか？」躊躇するロク。

「モスキートもこいつだ！お前がやらなきゃ俺が殺るぞ！」残は腰の拳銃を急ぎ抜いた。

「待って、残！・・・キキいい？」その様子を見ていたホーリーがキキを呼んだ。

「えっ？うん・・・」そう言うとキキは、躊躇う事もなく自分の拳銃を抜き少年を額を撃ち殺した。

「キキ・・・」動かなくなった少年から目を反らすロク。

「いつか、こんな日が来るとは思っていたけどね・・・」キキは坦々とみんなに話す。そんな中、残だけはロクを睨んだ。

「何だよ！仲間の仇もとれねぇのか？えっ！新四天王はよ！？」

残はそう言うと、少年兵のいた建物の中に入っていった。そんな中、ダブル班の残りの１０名も合流してきた。

「何だ?今の銃声は?」
ダブルは、横たわる少年の死体を見て状況を察した。
「残は?」キキに尋ねるダブル。
「この建物に入って行った。今日はここでキャンプね?見通しがいいもん・・・」キキもそう言うと建物内に入って行く。
「そうね。ロクいいでしょ?」ホーリーがロクに尋ねる。
「ああ・・・そうだな。夜まで動けないな。ダブル?モスキートの様子は?」

ダブルは首を横に振った。
「そうか・・・」
「こんなガキが狙撃兵とはな・・・」
「奴が持っていた・・・」
ロクは少年兵が持っていたドッグ・タグを放り投げた。
「タ、タンクのか・・・うちの四天王がこんなガキに殺られたのかよ・・・」
「ジプシャンもこんな若い兵を戦場に送るんだな?」
「俺らだって、7歳から戦場に出てるじゃないか。どこも同じだろ?ああ、モスキートがお前にってよ!」
ダブルは、持っていたモスキートの拳銃をロクに渡した。
「モスキート・・・」
「もう、一丁は俺が継いだ。モスキートを埋める。後で手伝え!」
「ああ・・・」

トンネル内のバズー班。キーンは狭い通路を走っていた。１００メーター後だろうか、なにか照明のような光がキーンを追いかけていた。
「弾切れとは情けない・・・斬りつけるには数が多いな・・・」

すると、キーンの走った先にはバズーがバズーカを構え待っていた。
「バズーか!?」
「キーン!伏せろ!」

キーンが前のめりに倒れると、バズーはトンネル内のたくさんの光に向けバズーカを発射した。弾はその追手たちに命中したが、そのバズーカの威力でその付近の通路の天井は崩れ掛かってしまった。
「あーあー、バズー?」
「すまん・・・って仕方ないだろ!?」
「どうすんだよ?戻れねぇよ・・・」

真っ暗になったトンネルで二人は再び暗視スコープを掛け始めた。
「で?みんなは?」
「この先に居る。違う広いトンネルに繋がったんだ。」
「そうか・・・抜けたか・・・」ホッとするキーン。

Ｐ４の５キロ南の荒野に、どこぞやの国の空母と戦艦がバツの字でクロスする奇妙なサンドシップが停泊している。ポリスのレヴィアとは真逆で船底の下部の所がない。正面から見て、左が空母、右が戦艦。空母の甲板部分には戦闘機ではなく、３０台くらいのＳＣが並べられていた。長さは３００メートルとこの世界では大きく、荒野では目立つ存在だった。環境は空母も戦艦部分も健在だが、戦艦の艦橋部分が司令塔となっている様子だ。

その艦橋部分に、一人の若い男が座っていた。砂漠迷彩の軍服には、たくさんのバッチが取り付けられて、どこか涼しげな顔で前を向いていた。そこへ一人の兵が艦橋に入ってくる。

「ツヨシ様！」

ツヨシと呼ばれた男は、席を立ち上がりおもむろに兵に近寄った。

「出番かい？」

「いえ・・・北でタケシ隊が妙な動きを・・・」

「なんだ、出撃ではないのか？つまんない！」

「ツヨシ様・・・」

この男。ジプシャン軍の土井一族の一人で土井ツヨシ。歳は当時15くらいであろうか。タケシの弟にあたるが、母違いで兄のタケシとは仲が悪い。軍の中では、長男のタケシよりこのツヨシを次期後継者に押す者が多い。兄弟とは言え、タケシとは真逆の性格で、温厚で策士でもあった。

「ここに配属されて10日。砲弾一つ撃ってないよね？両角（もろずみ）？」

「はあ、ここは瓦礫の要塞でございます。我々は南方部隊の支援が中心で・・・」

「つまんない！つまんない！」

「ツヨシ様・・・兵が見ております・・・」ツヨシをなだめる両角。

両角はツヨシ隊の参謀。若いツヨシの教育係りでもあった。歳は40代後半。

「モロズミー？また兄貴に手柄を横取りされるぞ！」

「ここの指揮は、タケシ様になります・・・」

「とは言え、つまんない！それで？その兄は何と？」

「はっ！ポリスの援軍との交戦を確認しております。」

「北か？志村口って奴か？敵の数は？」

「SCはわずかの陸戦部隊とか？」

「北の担当はタケシ隊の死神だったな？」

「その死神が苦戦とも情報が・・・」
「北に偵察に行く。船を出すぞ。」
「し、しかしこちらに待機では？」
「なぁーに偵察偵察！Ｐ４への牽制にもなる。」
「は、はぁ・・・」

トンネル内のバズー班。新しいトンネルを警戒しながら進む。
「おい、これどこまで続いてるんだ？」とバズー。
「これって、旧半蔵門線になるのか？」とライ。
「無線返答なし・・・」ブイは無線機に呼び掛け続ける。
「このまま出れないんじゃないのかい？」
キーンはバズーを睨んだ。

「おいおい怒るなよ。あの時はああするしか・・・」
その時だった。ブイの無線に反応がある。
『こち・・・４・・・です・・・せよ・・・』
「来たぞ！こちらシャチ！聞こえるぞ。」
『今・・・こだ？』聞き取りにくい無線音。
「ルートＭ、１３オーバー。バルーン」（三田ライン、１３キロ過ぎで道に迷う）
『・・・のまま、ミナ・・・に下れ。』

無線は一方的に切れたが、ブイは少しホッとした顔に戻る。
「なんとか、通じた・・・南だとよ！」
「このまま、南でいいのか？ってどっちが南だ？」とバズー。
「・・・って、誰かのせいで戻れないし・・・」

再び、キーンはバズーを睨んだ。
「おいおい、命の恩人を睨むなよ。よ、よし！このまま逆Ｖ字隊形。

隊を前進する！」

隊は再び動き始めた。しかし、キーンだけが、その場を動こうとしなかった。

『しかし、志村口の入口で見た、あの新しい足跡・・・入ったままで出て来る足跡はなかった・・・もしポリスの兵であれば、奴らは一体どこに消えたというのだ？』

その8　　ミュウの謎

現在。ロクの独房。ノックの音が聞こえドアの方へ振り向くロク。
「高田よ。点滴と検診よ。」
「どうぞ・・・」

部屋に入って来たのは、高田と銃を構えた2名の若い兵。
「あんたたち!その距離じゃ間違いなくロクに殺されるよ?」
高田の声に動揺する2名の兵士。二人はロクから少し距離を取った。
「そ、そんな事しませんよ。仲間ですから・・・」
「さあ?どうかしら?」
高田は笑顔でロクに点滴の準備を始める。

「俺が、本気なら先生を人質に取ってるかな?」高田の冗談と知ったロクは、敢えて後ろの若い兵に聞こえるように話した。脅える若い兵たち。
「いい手ね?たまには旦那以外の男に抱き締められるのも嬉しいけど・・・これでも、格闘技はプロよ!四天王とは言え、そう簡単に人質に出来るかしらね?」と高田。
「あらら、怖い怖い・・・」

高田はロクの服をめくり、右脇の傷口を診始めた。
「さすがね~もう傷口がくっついてる。あんたの体力も驚くけど、さすが関根ね!いい仕事をする!」
「関根さん?知ってたんですか?」
「元々、私はポリス専属よ。顔を合わすくらいね。話した事もなかった。私はずっと地下だし、彼女降りれないでしょ?いい腕だっては聞いてたわ!」

「そう！先生！死龍は？」
「まだよ・・・意識が戻らないわ・・・」
「死龍は本当にミュウなんでしょうか？」
「ジプシーに生まれたら、誰もが不安がるよね？でもしょうがない。今の我々の科学じゃ太刀打ち出来ないほどミュウは厄介なのよ！」
「治らないなら、いっそ戦場で死なせたかった・・・」
「馬鹿ね？まだ死ぬって決まってないでしょ？」
「じゃあ治るんですか？死龍？」
「難しいわね・・・でも次の犠牲者を出さない為にも、ここで治療をしなければならないと思うわ。」
「そもそも、何でポリスは発病せずジプシーだけの発病なんですか！？」

「放射能汚染された大地に育ったとか？放射能を多く摂取した魚を食べたとか？大気の変動や核でオゾン層がなくなり、今まで降り注がなかった太陽の光線に当たり過ぎたとか？色んな説があるけど、どれもみんなピンと来ないのよね？」
「どうしてですか？」

「いくつかは、核戦争前にでもあってもおかしくないし、ポリスだって太陽を浴びたり、魚は食べるしね。大体発症はこの近辺だけって噂もある。」
「Ｐ６・・・ですか？」
「まあ偶然かもしれないけどね。今は大体のジプシーはここに居るんだから、ここからしかミュウも出ないでしょ？・・・さて次は明日ね。ちゃんと食べて置くのよ？いい？痛み止めの薬はここよ。」
「はい・・・」
高田らは、ロクの牢屋から出て行った。

ジプシャン軍鹿島台本部。寛子のいる部屋に犬飼が入って来る。
「寛子様！タケシ様の部隊の者がＰ６より戻りました。」
「通せ！」不機嫌な寛子。
「ははっ！」

銃を持った兵に囲まれて、部屋に入って来たのはヒデの仲間の丸田や羽生だった。
「お前らは、あの時の？」
「この者らの話ですと、タケシ様らはＰ６内部に侵入後、連絡が取れないとの事。」
「ふん！死んだか？しかし、下手に捕らえられ薬でベラベラ吐かれても困る。奴に連絡。最悪は始末するようにと連絡を取れ。」
「よ、よろしいのですか？」
「戦死なら、タケシ派閥の参謀らも納得する。さて、聞かせてもらおう？ヒデの仲間だったな？タケシは何と言ってたのだ？」

「はい・・・真・四天王がどうのこうのと・・・地下に入り確認すると。我々には、ここに装甲車で戻るよう指示をされそれっきりで・・・詳しくは・・・仲間たちともはぐれてしまい・・・」

「父が恐れた真・四天王か？しかし、よく内部に入れたな？ふふふ我が弟ながら関心する・・・」不敵に笑う寛子。
「手引きした者がいたようです。それで内部に！」と犬飼。
「ふん！しかし、事実上タケシ隊は崩壊か・・・」

「我々はどうしたら？」不安がる丸田たち。
「好きにするがよい。いっそポリスに投降したらどうだ？」
「そ、それは・・・」
「タケシ様に拾われたのだろ？既にここでは不要だ！立ち去れ！」

「くっ・・・」

丸田たちは無言でその部屋を後にした。

再び3年前。P4近くのダブル班。4階建てのビルの上にはロクが見張りに立っている。日は西に傾きかけていた。その廃墟ビルの横には、モスキートの物であろう、錆びた鉄骨で作られた十字架がある。ダブルとキキはそのすぐ側にいた。

「なんで、前線に上がって来た?」
「仲間は救う・・・それがうちの班長よ!」
「バズーが危ないってどういう事だ?」
「ロク曰く、罠だと・・・」
「確かに、バズーたちをつけてる足跡はあったが・・・」
「それだけじゃないよ。ロクは前に出てるイブたちも捜すつもりよ。」
「心配するな。後は俺らがやる。キキらはもう所定キャンプへ戻れよ!ここから先は命の保証は・・・」
「わかってる!でもロクがなんて言うか・・・」
「キキ!?俺の言うことが聞けないで、ロクの言う事は聞けるのか?」
「これは作戦よ!ロクはここでは上官なの!そんな風に言わないでよ!」

そこに、ホーリーが戻って来る。
「あら?お邪魔だった?」二人の様子を察するホーリー。
「う、ううん。いいのよホーリー・・・」
「チビ助!キキを泣かす真似したら、あたいが承知しないよ。」
「うるへぇー!デカ女!」

「ここの周りには、残が爆薬を仕掛けた。取りあえずは安心よ。」
ホーリーはダブルを無視してキキに話掛ける。
「ホーリーはどうしたい？この先？」
ホーリーは、突然のキキの質問に戸惑った。
「ああ・・・ロクが行くと言うのなら・・・だな？」
「そうか・・・」
「キキは？」
「それは・・・」キキはホーリーの逆の質問に戸惑う。

「ロクの助けはありがたい。でもな・・・」二人の会話に口を挟むダブル。
「それはあんたの私情でしょ？なんならキキだけ戻そうか？」
「ホーリー！お前な！？」
「プロジェクトソルジャーが恋愛禁止なのは、こういう事でしょ？作戦に私情が出るなら、二人ともソルジャーなんて辞めちまいな！」

「お前言い過ぎだぞ！」怒るダブル。
「モスキートは死んだ！もう帰らない！仲間が死んで動揺するなら、この先には行かない！簡単な事よ・・・」

「ごめん・・・そうよね！」ホーリーの言葉に意を決するキキ。
「キキ・・・お前まで・・・」落ち込むダブル。
「仲間を救う・・・私たちいつもそうやって、先頭を走ってきたんでしょ？ロクもバズーも・・・私たちに選択の余地なんかはないわよ。ロクが行くというなら、地獄でもどこでも行く覚悟よ！」
「ホーリー・・・勝手にしろ！」
ダブルはそう言うと、高い廃墟ビルに入っていった。

トンネル内のバズー班。暗視メガネをしている一行に、先方から

明かりが見えて来る。
「んっ！」
バズーが制止の合図に拳を挙げた。トンネルの左右に分かれ警戒態勢を取るバズー班。皆が緊張した。すると懐中電灯でか、照明信号が届く。

「ワレ、ピーフォー・・・ソチラハ？・・・おい、Ｐ４だ！」
ブイは同じく持っていた懐中電灯で、照明信号を送った。向こうも信号で返す。
「仲間だ・・・」

ブイの言葉に安心したのか、バズー班は緊張を緩めた。
「バズー！俺がまず行く！」ブイが一人前に出る。
「任せる。」

ブイは、暗視スコープを外すと、手に持っていた懐中電灯を持ってゆっくり先に進んだ。バズーらは、その場で警戒しながらブイの背中を見つめる。その時だった。トンネル内に、一発の銃声が響いた。すると前にいた、ブイが前のめりで倒れた。

「ブイ！？」バズーが叫んだ！

その9　　盲（もう）撃ち

ブイは前のめりに倒れた。ブイが持っていた懐中電灯が落ちると、トンネル内は再び暗闇となった。

「罠だ！」バズーが叫んだ。

「撃ち返せ！」バズーの声でキーンも叫ぶ。

双方は狭いトンネル内で、激しい銃撃戦となった。暗視スコープを外していたバズー班は、ただ闇雲に音がする方に撃ち返すしかなかった。明かりは銃弾が走る明かりしかない。隠れる所のないバズー班は、一人また一人と銃弾に倒れていく。その時、キーンがバズーに向かって叫んだ。

「バズー！やるんだ！」

「ああ・・・後で文句言うなよ！」

バズーは暗闇のキーンの声の方に叫ぶと、身を屈めながら敵陣営に向かってバズーカを発射した。弾は命中、天井まで被害が及んだ。大量の砂埃と爆風が、バズーらを襲う。静かになったトンネル内にバズーたちは立ち上がった。

「何人撃たれた？」とバズー。

「ライト点けろ！」

埃漂うトンネル内に懐中電灯が点けられた。バズー班で倒れていたのはブイを入れて3人。

「救護班！こっちだ！キーンはブイを！」バズーが指示を飛ばす。

「わかった！」

キーンは、ブイが倒れている所まで走って近寄ると、ブイを抱き起こした。しかし、ブイは動く気配すらない。

「駄目か・・・」

バズーも近寄ると、キーンはバズーに向かって首を横に振った。
「あいつら・・・ポリスの照明信号を使っていた。」
「こんな内部まで、敵に進入されているのか？」
「敵が居るという事は、どこかに出口はあるな？」
「そうだな・・・」
「ブイの装備と無線機を持っていく！」
「ああ・・・」

ダブル班。ロクが廃墟の高いビルから周りを警戒している。あたりは日が暮れ、既に暗くなっていた。そこにある兵がやって来る。歳は１２，３歳。ダブル班の兵士だった。名はボム。当時４期生、後のＰ５四天王のボブである。

「言われた通り、後方５００地点にも仕掛けました。」
「ご苦労。これで安心して前進出来る。」とロク。
「疾風のロクと呼ばれる人と作戦が組めて光栄です！」と謙虚なボム。
「ふっ、いつの頃やら・・・ほら！」照れるロク。ロクは何かの缶詰をボムにほおり投げた。ボムは腹が空いていたのか、その缶詰の蓋を開けて中身を頬張る。ボムは口に物が入りながらロクに尋ねた。

「ロクさんは、盲撃ちが出来ると聞いてます？」
「ああ、確かに・・・」
「今度、自分に教えてください。」
「無事ポリスに帰れたらな・・・」
「はい！」
「とは言え。教えるような技術はない。うーん、なんて言うかな。

俺もＰ５の四天王の死龍に教えてもらったからな・・・」
「Ｐ５の女四天王の死龍さんですか？」ボムの目が輝く。
「ああ、怖い女だぞ！おんな女、上官にするもんじゃないな・・・そいつにさ、目で撃つんじゃなくて肌で撃てって言われてさ。」
「うーん・・・嫌な予感が・・・えっ？肌ですか？」
「うん・・・目を開けていると怖くて、手が縮むから、あえて目を瞑るんだって・・・」
「へぇーそんな事出来るんですね？」
「そうだな・・・傍から見たら不思議なんだろうな？」

すると、そこにホーリーが入ってくる。
「ロク・・・戻ったぞ！」
「それで？状況は？」
「志村口は・・・やばいな・・・」ホーリーが顔をしかめた。

「どうした？」
「敵のバイク隊が入口に集結している。何かあるよ。」
「死神だな？数は？」
「約５０、しかし、運び出されるのはジプシャン兵の遺体ばかりだ。」
「ジプシャンもうまく行ってないという事か・・・恐らく・・・バズーだな？」薄笑みを浮かべるロク。
「私もそう思う。で、どうする？」
「後方から仕掛ける。ダブルには？」
「まだ伝えてない・・・」
「バズーは、苦戦してると思うか？」
「あいつがただでは死なないわよね？」ホーリーは笑ってみせた。

「仕掛けるんですか？ロクさん？」ボムがロクに尋ねる。
「今は、ダブル班・・・ダブルに任すよ。」

「反対したら、一人でも行くくせに・・・」とホーリー。
「そうだな・・・」ひとり苦笑いするロク。
「自分も行かせて下さい。」ロクの前に出るボム。
「駄目よ。君らはここに居て！」とホーリー。
「どうしてですか・・・？」
「ここからは、ダブル班と別行動だな？」とロク。
「どうせ奇襲でしょ？」
「ああ・・・さて、どうしたもんやら。」

志村口入口。そこには既にジプシャン軍のバイク隊の本体が終結しつつあった。大広の姿もある。
「敵の姿は、坑内にはなく！」
「何をしてるのですか？」と大広。
「旧神保町付近に、こちらの兵ばかりがやられ・・・」
「敵の姿がないというのは変です。どこかに抜け道があると思われます。兵を送って下さい。」
「ははっ！」
「敵の2次隊は間違いなくここに来ます。隊を左右に展開しここで待機します。」

バズー班は、更にトンネル内を南に進んでいた。すると突然、無線機が鳴り始める。
「無線だ！」
無線機はライが引き継いでいた。その無線を傍受する。
『・・・4・・・聞こ・・・か？・・・』
「こちらバルーン。こちらバルーン！応答せよ。」
『・・・シックス・・・目指・・・地上に・・・待機・・・よ。』
「了解！シックスだな！？」

『・・・だ・・・』
「了解！」

無線がきれ、バズーらはライに近寄る。
「シックス・・・？なんだ？」とバズー。
「旧六本木６丁目近辺。通称シックス・・・旧防衛庁だ。」
「また、敵の罠じゃないよな？」とキーン。
「第一、今の俺らじゃ地上にも出れないな？」
「風はある。どこからかは吹いてる証拠だ。」とライ。
「今の俺らには、前に進む道しか選択の余地はないな・・・行こう。バズー！」
「そうだが・・・この無線も本当かどうか？」
「考える暇があったら、前に進むぞ。食料はあるが、飲み水は残り少ない。この暑さでだいぶ消費した。まずは地上だ！」
「奴らが入れたんだからな・・・出口もきっと・・・」

廃墟ビルのダブル班。皆が集まっている。
「志村口に敵が？しかもバイク隊？」とダブル。
「死神の本体と思われる。」とホーリー。
「バズーを助けるのか？」
「今の様子から見て、助けは要らんだろ。そうだなホーリー？」とロク。
「そうだな・・・」
「しかし、このまま俺らは地上を行く訳には危険だ・・・」とダブル。
「確かに、危険はある・・・」
「どうするんだよ、ロク？」
「敵は、２次隊の俺らが来るのを待っている。そこでだ・・・」
「ん？」

「敵のど真ん中を、中央突破する！」ニヤリと笑うロク。

その１０　　シックス

志村口入口に陣取るジプシャン軍死神隊。
「奴らの足取りは、まだ分からないのですか？」と大広。
「１０キロ先の行き止まり付近で、側道が見つかり現在調査中との事。しかし途中で天井の崩壊があり・・・」
「奴らを追って下さい。Ｐ４の入口かもしれません。」
すると突然、後方から叫び声が聞こえる。

「敵襲だぁ！！」
大広は慌てて声のする方に、振り向いた。すると１台のバイクが到着し、ヘルメットを被った他のバイク隊と同じ制服を着た血だらけの兵がバイクから転げ落ちたと思うと、ある一箇所を指差しこう叫んだ。
「て、敵の襲撃です・・・奴らすぐそばまで・・・」
兵は銃で撃たれたのか、大広のすぐ側で倒れてしまった。するとその方向は爆発を起こし、一面が炎と化した。現場は慌しくなっていく。
「敵の二次隊ですか？こんなに早く・・・各隊左右に展開！迎え撃って下さい！」
大広のバイク隊は、志村口を中心に左右に展開し、爆発のあった方向へ少しづつ歩き始める。すると更に別方向から爆発し、その辺りの荒野や、廃墟が赤く染まった。すると銃声が聞こえ始め、大広隊も銃声が聞こえる闇に銃弾を撃ち込む。

「敵はどっから撃って来るんだ！？」
「バイク隊出せ！照明を当てろ！暗くて、敵わん！」
何台かのバイクが、銃声のする方向へ走り出した。すると最初に到着した血だらけのヘルメットを被った兵がムックっと起き上がる

と、乗ってきたバイクに跨ると志村口の中に一人走り出した。よくヘルメットの中を見ると、それは敵の制服を着たロクの姿だった。

「敵襲！敵襲！」

ロクは、トンネル内にいた兵にもバイクに乗りながら叫んで行く。バイクは更に奥へと進んだ。

志村口近辺ダブル班。暗闇の中、ダブルと残は敵が混乱している様子を見つめていた。

「そろそろいいかな？・・・撤退するぞ。ホーリーらは？」

「迂回して地上を進んだ。」と残。

「奴らも、そろそろこちらのトリックに気づくよ。」

「了解！ボム！そちらも後退だ。」無線を飛ばす残。

『了解！』

志村口入口ジプシャン軍死神隊。

『敵は遠隔操作の自動操銃を使い・・・』

「どういう事ですか？」無線を受ける大広。

『爆弾も遠隔と思われます・・・敵の姿はなく。』

「くっ・・・図られたか。しかし意図がわかりません？」

トンネル内のロク。敵のバイクで奥まで行くとトンネルは行き止まりになっていた。仕方なくバイクを降りると、ロクは暗視スコープを掛け始めた。

「行き止まり？しかも新しくない・・・？銃撃痕はまだ新しいが・・・？」

ロクは、少し入口方面に戻るとそこに細い側道があるのに気づく。なにやら人の気配だけは感じた。
「足跡はここに・・・ポリスの物も・・・」
そうすると、ロクはジプシャン軍の制服のままその側道に入っていく。

バズー班は、地下道を進んでいた。すると先方から吹く風が強くなっているのに感じ、更に足元には砂が多くなっているのに気づいた。
「出口が近いか？バズー！？」キーンが叫ぶ。
「だろうな。敵の足跡も多いしな。」
「上はまだ夜だろ？出るにはいい頃だな？」とライ。
「果たして、ちゃんと迎えに来てくれるか・・・」

すると突然トンネルの左部分に上に続く長い階段が現れた。一同唖然としその階段を見上げる。
「意外と深いとこなんだなここ・・・？」キーンが階段を見上げる。
「昇るしかないようだな・・・行くぞ！」バズーが先頭に立つ。

昔のエスカレーターの跡であろう、２本の通路を二手に別れバズー班は進んだ。暫く進むと、更にいくつかの階段に別れ地上へと続く様子だった。
「班を３つに分かれ、各チームで地上に出る。」
バズーとキーン、ライは各々チームに分かれ、３つの出口と思われる箇所に向かった。

ロクは細い側道を進んでいた。すると3名程のジプシャンの兵が行き止まりの通路を調べていた。ロクは暗視スコープを慌てて外し

た。

「誰だ！」兵の一人が銃を構えながら叫ぶ。
「て、敵襲です！すぐ入口に戻れとの命令です！」と嘯くロク。
「な、なんだと！？」
「い、急いで下さい・・・」

ロクは再び、敵兵の前で臭い芝居をやってのけ、その場で傷口を押さえるふりをし、座り込んでしまった。

「よし、ここは駄目だ。通れない・・・戻るぞ！」
兵らはロクを抱き起こして引き返そうとした。
「大した傷ではありません。自分で手当てします。それよりも早く・・・」

そうすると、兵3名は元来た通路をトンネル方向に慌てて戻っていった。ロクはそれを確認すると、再び立ち上がり自分の懐中電灯を照らし、周りを確認し始めた。
「ふう・・・ろくに確認もしないで馬鹿だねぇ・・・爆薬の臭い・・・まだ新しい。しかも手榴弾ではない・・・バズーカ規模？バズーだな？ただこの通路を塞ぐのはどうかと・・・？考えろよな～」
ロクは崩れて塞がった細い通路を懐中電灯で照らすと、そうボヤいた。

「確かに通れないな・・・」
するとロクは、その通路の壁に看板が貼られているのを見つける。
看板には大江戸線乗り換えと書いてある。
「ここは、地下鉄の乗り換え用連絡通路？ならば反対側にも・・・」

ロクは来た道を戻ると、再びトンネル内に戻り、反対側の壁を見

渡し始めた。するとある壁に不自然な所を見つける。ロクは、そこを拳の甲の部分で叩き始めた。そしてコンクリートの音と違うのを感じた。

「やはり、ここか・・・Ｐ４が敵の侵入を防ぐ為に、埋め込んだか？」

ロクは、胸の手榴弾を外すと、その壁の下に置きその場を離れた。すると拳銃を１丁抜くと、その手榴弾を狙撃した。爆発する手榴弾。爆風で砂埃が舞うが、やがて視界が開けてきた。するとその場所に、反対側と同じように狭い通路が出来ていた。

「やっぱり・・・確かに普通じゃ分からないな。」

ロクは再びバイクに跨り、その通路に突入した。狭い通路はすぐ階段になり、ロクはその階段をバイクごと下り始めた。　すると道はまたも行き止まりになっている。ロクはバイクから降りると、正面の壁を叩き始めた。

「ここもか・・・？」

ロクは最後の手榴弾を胸から外すと、再び手榴弾を狙撃する。大きな爆音とともに埃が舞い、やがて大きい通路へと繋がった。ロクは歩いてそちら側の通路に顔を出してみる。そこには大小合わせて１０名くらいの新しい足跡が目立っていた。大きい物だと３０センチを越える足跡まであった。

「このでかいのはバズー・・・やはりさっきの道と繋がっている。それに、バズー班は全員ここを通過している。全員無事だな？良かった・・・」

足跡は再び、暗いトンネル内に続いていた。

「さーて、行きますか・・・？」

ロクはバイクに跨がると、再び暗いトンネルを走り出した。

その頃キキとホーリーは、夜の廃墟外を警戒しながら徒歩で前進していた。

「もう！ここまで来るとまともな道もないのね？」汗を拭うキキ。

「急ぐよ！もうすぐ夜明けよ！」

「ロク、うまく行ってるかしら？」

「さあね？それよりダブルにキャンプに帰れって言われなかったの？」

「言いたくても言えないわよ。こんな戦況じゃね。」

「そうね。確かに・・・」

「シックスって、元々高層ビル街だったんでしょ？この辺より道が酷いんじゃない？」

「人じゃ無理かもよ。やっぱり地下を選ぶんだったな？」

「何よ今更！ナビは任せろって言ってたのあんたよ！」呆れるキキ。

「こうも道がないとは思わなかったわ・・・でも隠れる場所はあるのは助かるけど・・・」

廃墟街のＰ４は、夜が明けようとしていた。

バズー班は、各々地上に出ていた。志村口以来の外の空気だった。

小隊は各々周りを警戒しながら外の様子を伺う。

「ライ？そっちはどうだ？」バズーが無線を使う。

『誰もいない！そっちもか？』

「ああ・・・キーンは？」

『こっちもだ。あまりにも静かだ・・・』キーンが答えた。

「よし・・・集結してこれより全員でシックスに向かう！」

その11　イヴ

ロクはバイクで走行中、複数の足跡がトンネル内から消えたのに気づく。バイクのスピードを落としよく観察すると、左手に長い階段が伸びているのに気づく。ロクはインカムを頭に付けるとすぐ無線を飛ばした。

「サードホーム！ファーストホーク、オーバー？」

すると、ライの声でインカムに無線が入る。

『こちらファーストホーク！なぜこの無線を？』

「どうやらすぐそばらしいな？」辺りを見回すロク。

『疾風（しっぷう）か？なぜ？』とライ。

「助けは要らなかったか？」

すると無線の声が変わる。あまりにもでかい声で、ロクはインカムのイヤホンを一度遠ざけた。

『ロクっ！？お前！なんでここにいるんだぁ！？』

「バ、バズーか？い、今どこだよ？」

『敵が聞いてる！追っているなら目印をしておく。』

「そうだな・・・すぐ行く。」

ロクは、無線を切ると一気にバイクで階段を昇り始めた。

バズー班。瓦礫のビルの一角で見張りを立て、警戒をしていた。日は昇り始め、辺りは明るくなっていた。

「ロクめ・・・キャンプでじっとしてれねぇのか！」とバズー。

「奴だけじゃ済まなそうだぞ。」とライ。

「ああ、ホーリーなしではここに来れないしな？」とキーン。

「あの野郎っ！また、勝手に・・・」

ジプシャン軍Ｐ４方面司令室。廃墟の一角にいくつかの機器を持ち込んだ簡単な作りの部屋だった。兵はわずかに6名程で、その奥にはタケシが横柄に座っている。すると、兵の一人がタケシに近寄った。

「タケシ様。敵の無線らしきものを傍受。場所は特定付きませんが、この界隈かと思われます。」

「ほう！ポリスの援軍か？ここまで来れる奴らがいるとわな・・・それともこいつを救出に来たか？」とタケシ。

タケシが振り向いた先には、後ろに手を縛られ、長い自らの髪で天井部分に吊るされている少女がいた。かろうじてつま先だけで立っているが踵が付くと髪が引っ張られる状態だ。ロクらと同じポリスの制服、歳は１５歳前後で顔には無数の殴られた痕があり、口からは血を流し意識朦朧としていた。タケシの声を聞いていたのか、少女はやっとの力で目を開くと、タケシの顔を睨み付けた。タケシはその吊るされた少女に近寄って行く。

「仲間思いだな？お前らは？」

「私を・・・助けになんて来るわけないでしょ・・・私はもう死んだ事になってるわ・・・」と少女。

「しかし、今この界隈に来ているのはＰ４ではない。」

「ふん・・・早く、仲間のように首を切り落としなさいよ・・・」

「首切りは四天王以外興味がないのでな？あと一人を吐かないなら、また別の女を連れて来るだけだぜ？」

「勝手にしな・・・」

「まあ、最後の一人が捕まり次第、お前の前に生首を持ってきてやる。そうすれば、お前はまた泣き崩れるだろうがな？」

「ゲスが・・・」
「ふん・・・よし！この辺りを中心にシラミ潰しで捜せ！もう一人の四天王を連れて来るんだ！・・・女！まあ楽しみに待っていろ！」
そう言うとタケシは、その部屋を出て行った。

バズー班が待機している廃墟ビル。一人の見張りが、バイクの音を確認する。すぐ無線を飛ばす見張り。
「バズーさん！我々が来た後方からバイク音です！1台と思われます！」
『全員、持ち場に戻れ！』とバズーの声。

バズー班の各員は、各々の持ち場に分かれ、そのバイクの音の方向に銃を構える。すると瓦礫の山をアップダウンしながら走る、ジプシャンの兵士が見えて来る。

「敵兵です！バイクに乗っています！・・・ん？」無線を飛ばす若い兵。
『どうした！？』
「胸に“6”の数字！」
『ふふふ・・・撃つなよ！それロクだ！』
「はぁ？」
そのバイクの男は、制服の左胸に6の数字を書き込んでいた。

『いいか？近づいたら空砲を3発鳴らせ！』とバズーの声。
「分かりました。」

見張りの兵は、空に向かって拳銃を3発撃ち込む。するとバイクの男は、その場で停車をしヘルメットを脱いだ。そこにはロクの姿があった。ビルを見上げるロク。

「鳴らさんでもいいのに・・・」

バズー班。ロクを加えたメンバーが、廃墟の一室に集まっていた。
缶詰を空けナイフで直で食事をしている。
「で？キキもホーリーも来るのか？ほら水！」水筒をロクに渡すバズー。
「まあ、そんな感じかな？」
「モスキートが死ぬなんて・・・」とキーン。

「ん？・・・ブイは？」ロクがブイが居ないのに気づく。
「・・・」バズーは無言で首を振った。
「そうか・・・」
「ところでどうして罠だと？」とキーン。
「うん・・・バズー班を追いかけている足跡が一人。ダブル班を追いかける足跡も一人。どっちも泳がされていた。」
「わざとＰ４へ入れたという事か？」とバズー。
「可能性はな・・・ただ何か引っ掛かる。」
「奴等まだＰ４の出入口を分かっていない？」とキーン。
「恐らく・・・」
「で？お前はこのままこっちに合流するのか？」回ってきた水筒に口を付けるバズー。
「ああ、後方支援でよければ・・・出来れば引き返えすのが策の一つだが？」
「ここまで来て、Ｐ６に帰れるかよ？」
「敵も入れないなら、味方も入れない・・・思った以上だ。バズー？この作戦自体、無謀かもしれないぞ！」
「うーん・・・困った困った・・・」頭を掻くバズー。
「そういや無線が届いたんだ。しかも“シックス”に来いと。」と

キーン
「無線?シックスに?それがＰ４のモノだと?敵の策ではないのか?」
「可能性はなくない。トンネル内でも敵はこちらの照明信号を解読していた・・・それで迂闊に近寄ったブイが撃たれた。」
「行くもいいが・・・博打だな?」
「ああ・・・」

すると、突然無線が入った。
『西側１キロに敵兵確認!』
「ここを気づかれたか?」
『いえ・・・何かを捜索してる様子です。』
「無線は使うな。下で待機だ!」とバズー。
「夜まで待ってくれない様子だな?」とキーン。
「らしいな・・・」ロクは一人親指を噛んだ。

タケシの司令室。タケシがいつになく苛立っている。
「奴等、まだ見つからんのか?」
「はい・・・兵は増員していますが・・・」と嶋。
「死神は役に立たんな。敵の裏をかかれるとは・・・」

すると、髪の毛だけで吊るされたポリスの少女兵が口を開いた。
「あいつだ・・・ロクだ・・・ふふふ・・・」

その声に、気づいたのかタケシは少女に近寄る。
「なんだ?何か言ったか?」
「奴が来る・・・ここは・・・全滅するわよ・・・ふふふ・・・」
「誰が来るって?おいっ!?」
タケシは、再び無防備な少女を殴り始めた。

「ふふふ・・・」
殴られながらも、笑いを止めない少女。
「このアマ・・・」

　すると、建物の下の階から爆発音が聞こえる。
「何事だ!?」
部屋にいた、兵士たちが慌しく動きだした。すると部屋の外から男たちの声が聞こえてくる。
「燃えてるぞ!消火しろ!」
「火災か!?」
「どこが燃えてるんだ!?」

　その騒ぎを聞いていたタケシは、部下を下の階まで向かわせた。すると兵が向かった通路から、煙がタケシの居た階まで上がってきた。すると顔を布で押さえた兵士が入ってきた。
「火災です!一旦非難を!」

　タケシも尋常ではない煙の量に驚き、下の階を階段で降り始めた。
「何が燃えてると言うのだ?この瓦礫の建物で?」
　すると、地上階で４名程の兵がバケツなどで火元を消火しているのが見えて来る。タケシは恐る恐る近寄ってみる。
「何だ!?」

　兵士は消火が治まった火元に近寄る。タケシもそれを見てその場に駆け寄った。そこには１０本くらいの発炎筒の燃えカスが置かれているだけだった。
「は、発炎筒?あいつ・・・」

　タケシは降りてきた階段を急ぎ駆け上がると、先程いた煙漂う司令室に戻る。すると、先程まで髪の毛だけで吊るされていたポリス

の少女兵が居ないのに気づく。吊るされていたチェーンには、少女の長い髪の毛だけが付着していた。
「おい！捕虜が逃げたぞ！」

タケシはすぐ、消火に当たらせていた下の兵を呼び込んだ。タケシの声に、兵士が慌てて階に上がってくる。
「あの体だ。そう遠くには逃げれない。捜せ！」
兵らはすぐ機関銃を手に取り、再び階段を駆け下りて行く。タケシは一人、チェーンの少女の髪の毛を見てみる。
「ナイフ・・・？誰かに切り落とされたか？」

少女を担いで瓦礫の街を走る、ジプシャン軍の兵士の姿があった。日は沈みかけ空の色は変わろうとしていた。よく見るとそのジプシャンの兵はロクであった。ロクはある建物の影に入ると、その少女を肩からそっと降ろした。
「イブ！イブ！しっかりしろ！」

イブと呼ばれた少女兵は、ロクの声に気づき目を開け始めた。
「やっぱり・・・あんたね・・・？」
ロクは、イブの力ない声に事が重大な事に気づく。
「どこをやられた？見せてみろ？」
ロクは制服の一番血が滲んでいる所を捲り上げた。
「うっ・・・」

ロクはイブの腹部を見ると、イブに聞こえないくらいの声がつい漏れてしまった。
「何日か前・・・拷問で棒で殴られた・・・アバラが折れてどこかに刺さっている・・・」
「早く言えよ！担いで来るんじゃなかった。」

「いいの・・・もう長くない・・・」
「そんな事言うな！なんとかする！」
「出た出た・・・」
「ふっ・・・」

ロクは持っていた応急道具でイヴに手当てをし始める。
「どうしてあの場所を？」
「ああ、偵察中の兵を捕まえて“吐かせた”。ああ！その方法は聞くなよ。」
「あんな奇襲はロクしかいないと思っていたわ。敵兵を一人も倒さないなんて・・・」
「ＳＣを運転するか、奇襲くらいしか能がないんでな。」
「みんなは？」
「今連れて行く。キキが合流してくれればいいが・・・」
「敵は今、あんたを追っている。私はいい。早くここを逃げて・・・」
「馬鹿を言うな！連れてＰ６まで帰る！」

ロクはイブを抱えようとした時だった。ロクは後ろに気配を感じ、慌てて拳銃を抜くロク。

「動くな！」

しかし既に、ロクの後頭部に銃は突きつけられていた。焦るロク。
ロクは諦めてイヴをゆっくり地面に置くとゆっくり両手を挙げた。

「あらら・・・俺とした事が・・・」

その１２　　ポリス裁判

現在のＰ６。地下３階の取調室。左手から点滴の管を通し、両手には手錠を掛けられたロクが机の前に座らされていた。取調べ室のロクの後方２隅には機関銃を構えた若い兵士が２名配置されていた。ロクは天井にある、カメラを意識したまに小言をぼやいていた。

「司令？今日は誰が担当ですか？」

弘士の姿はないのに、ロクはカメラに向かって呟いていた。その都度、後ろの若い兵たちは銃を構え直す。

「何にもしねぇよ。見ない顔だな？ポリスか？」

ロクは一人の兵に話しかけたが、兵は何も答えない。逆に兵は一歩怯んだ。

「あらら・・・そんなに怖いかね？俺？」

するとドアが開き、入って来たのは久弥だった。

「今日は、親父さんですか？」

「午後Ｐ７に戻る。暫くはＰ７でな、ロクに会っておこうと思い。」

「ここにいると、夜か昼かも分からないです・・・で、死龍は？」

「意識は戻った。ただ重症ではある。吐血も多くなっている。」

「治らないなら、解き放してはどうです？」

「出来ん・・・」

「死龍は何を調べていたんです？」

「ミュウだ・・・」

「ミュウ？ミュウの何を？」

「そこまでは分からない。取調べ中だったしな。」

「死ぬんだな？・・・死龍は？」

「ああ・・・」

「くっ・・・」

ロクは目の前の机を叩いた。
「プロジェクトソルジャーのトップで四天王まで昇った戦士だぞ・・・なぜベットで死なす？」
「死龍は、もう戦えん・・・」
「分かってる・・・しかし死に際ぐらい与えてやれよ。なぜそれがポリスには分からないんだ？」
「ロク・・・」
「キーンはどうした？」
「既にリハビリを始めている・・・」
「そうか・・・」

その会話を最後に、二人は暫く黙り込んだ。
「ヒデだが・・・」久弥が重い口を開く。
「捕まったらしいな？」
「今、ポリス裁判で反逆罪で、銃殺と決まったよ。」
「そうか・・・いつだ？」
「３０日後だ・・・」

曽根参謀が、ヒデの独房の前で立っている。手には黒いボードを持ち、独房のわずかな小窓から中のヒデを見つめている。
「元プロジェクトソルジャーのヒデ、本名秀則。ポリス反逆罪で銃殺と処する。」

ヒデは曽根を見ることもなく、床に座っていた。やがて曽根の姿は見えなくなる。
「いらなくなったら、殺すのか！？ジプシャンと同じだな！？」

再び3年前。どこぞやの長い廊下をロクと女性が歩いている。ロクはポリスの新しい見慣れない戦闘服に戻っていて、女性は久弥や弘士と同じ黒い軍服だった。年齢は５０歳前後。

「敵の軍服を着てたんで、撃つとこだったと報告があったが？」
「すまない・・・それでイブは？」とロク。
「容態は危ない。内出血が酷くてな・・・ジプシャンは女子供でも容赦はしないようだな。」
「助けて欲しい。頼む・・・」
「全力を尽くすよ。それと、何人かの“遺体”を確認して欲しい。」
「遺体？」
「顔がなく。ドッグ・タグもない者ばかりでな・・・」
「わ、わかった・・・」

二人が入ったのは、ある遺体安置所。ロクはその遺体の数に驚き、声にならなかった。
「これ・・・全部か？」
そこに並べられた遺体の数は３０体近く。すべて首がない。しかもＰ６の戦闘服ばかりだった。
「全員制服はＰ６のものだろ？」
「なぜこんな事を・・・？」
「トンネル内が２０名近く。後は場所こそ違うが、地上で発見された。武器も装備、食料すら取られてない。全員、首とタグだけだ。」
「ぜ、全員Ｐ６のプロジェクトソルジャーだ・・・」
「確認もしないでなぜ分かる？」
「仲間を見間違えるはずがない・・・」
「そうか・・・」

するとその遺体安置所に男が入ってくる。ロクに銃を突きつけた

男だ。
「司令!?彼女の容態が・・・」
「司令って?あんたＰ４の・・・?」
「玉木よ。司令って呼ばれるの嫌いなんで、タマさんでいいわ。」
「はぁ・・・」
「こっちよ。」
３人は急いで、その場から出て行く。

ある病室。イブがベットの上で苦しんでいる。そこにロクと玉木が入ってくる。
「どうか?」と玉木。
医者のような男がイブの横に立っているが、顔を横に振る。
「助けてください!先生!」

ロクの声が聞こえたのか、イブはゆっくりと目を開けた。
「ロク・・・私の銃はあなたが・・・」
イブは必死の力でロクに手を差し伸べる。ロクもイブの手を両手で受け止める。
「もう、しゃべるなイブ!」
「最後に、仲間に会えて良かった・・・一人で死ぬと思っていたから・・・」
「イブ・・・」
「一人で死ぬの嫌だった・・・墓も建てられないのよ・・・」
「もう・・・喋るな・・・」

イブの言葉が、ドンドン小さくなっていくのがロクは感じ取っていた。
「私の、自慢の長い黒髪・・・切ったの・・・許さないから・・・」
イブは、笑顔でロクに話すと、持っていたロクの手を離してしま

う。
「イブ！！イブ！！」
医者がイブの元に近寄り、瞳孔を見ると側にいた玉木に首を横に振った。
「ロク・・・」玉木はロクの肩に手を掛けた。
ロクは、イブの側で跪いたままイブの側を離れなかった。泣きたかったのだろうが、玉木と医者の前では涙を堪えていた。
ロクと玉木は長い廊下を歩いていた。
「せっかく敵基地より救ったのに、残念ね。」
「彼女は１０年の付き合いでしたから・・・」
「まあ、看取られて死ぬなんて彼女も幸せだったんじゃないかな？ここでは瓦礫の名もない墓ばかりよ・・・」
「まだ、近くに仲間がいます。助けに行きたいのですが？」
「なら、夜にしてちょうだい。敵にここの入口を教えるようなもんよ。」
すると、右手の廊下の壁がガラス窓になり、円状の広い施設が見えてきた。
「こ、これは？」
「Ｐ４の中心にあたるわ。」
ロクのいた所は、その広い施設から数えてビル６階部分。その廊下は５００メートル先の反対側にも緩いカーブで繋がっている。見えてきた円状の敷地は直径５００メートルの屋根のある、丸い空間だった。その敷地にはコンテナや、ＳＣがたくさん並べられ、たくさんのポリス兵が動いていた。天井は遥か高く、たくさんの照明でその施設は照らされていた。中央には電波塔なのか、屋根まで高い

鉄塔が建てられている。
「Ｐ４も丸いんだな・・・？」
「あら？どこもこういう作りでしょ？そうかＰ６は上に街があるのよね？」
「はい・・・他のポリス入るの初めてで。」
「Ｐ６は魚がうまいと聞くが？」
「はい。海が近いですし・・・え？ここは何を食べてるんですか？」
「他のポリスの補給品が多いわね。まあ最近では缶詰ばかりだけど・・・久弥じいは元気なの？」
「はい。もう現役は退くらしいです。孫の参謀が、新司令に就任されると思います。」
「あの、坊やがね？そのお父さんには、よく世話になったけど・・・」

「ご存知ですか？」
「自衛隊では同期だったの。いい男だったわ。あんな事件に巻き込まれるなんて・・・」
「事件？」
「う、ううん。何でもないわ。忘れて・・・来なさい。ここの指令室を案内するわ。」
「は、はい・・・」

Ｐ４の指令室。雛壇の作りはＰ６によく似ている。兵は２０名程が詰めていた。そこに玉木とロクが入ってくる。前列の兵士らは敬礼で迎えた。二人は雛壇を上がり、一番上まで上がった。そこには、ロクに拳銃を突きつけた男が一人モニター監視をしていた。歳は２０歳くらいでロクよりも体格が小さかった。その男は、玉木が上がって来るのを見ると、立ち上がって敬礼をする。玉木とロクも敬礼で返す。

「紹介まだだったわね？うちの唯一の四天王の風我（ふうが）よ。」
「風我です。その節は・・・」
「Ｐ６のロクです。」
「噂は聞いてます。ポリス最速の男“疾風のロク”と・・・」
「私も聞いてますよ。Ｐ４の幽霊・・・と。」ロクは照れながら答えた。
「自分は気に入ってないんですがね・・・そのニックネーム・・・」
「いえ・・・人に後ろを取られたのは初めてなんで、正直ゾッとしましたよ。味方で良かったと・・・」
「彼女が必死で止めてなければ撃つとこでしたけどね？作戦とはいえ、敵の制服を着るのは危ないですよ。」
「ああでもしなければ、敵のキャンプには入れませんでした・・・」
「タケシめ・・・意外と近くに張っているな・・・」と玉木。
「タケシって？ストラトスのタケシですか？」
「そうです。あの場所から、どのくらいの所か分かりますか？敵の場所を知りたい。」
「１キロくらい南に走ったかな・・・？」

「奴の事だ。もう別の場所に移動してるよ。」と玉木。
「そうですね。その辺は一流でしょうね？」
「なら、あいつ？タケシだったのかな・・・？」
「会ったのか？奴に？」
「指令室みたいなとこに、一人でいたんで何とも・・・」
「まあ、なんにせよ。さすがその若さで四天王になった人ですね。ねえタマさん？」
「そうだな？タケシらがここに攻めに来て、あんたは初めての援軍だからな。」笑顔の玉木。

「そ、そうなんですか？」

「タケシって野郎も、敵ながらなかなかだと思うわよ。」と玉木。
「あの首切りは一体何を意味するんですか？」
「さあね？ジプシャンも変わったわよ。昔は正々堂々と正面から来る戦いだったんだけどね？トップが代わったと聞くけどね？」と玉木。
「まあ、同じ“風”が付く者同士。宜しく頼みますよ！」と風雅。
「はあ・・・そう言えば、他の3名さんは？」
「うん・・・先日の艦砲射撃の際に、亡くなってな・・・」
「そうでしたか・・・」
「SCもサンドシップも走れない街です・・・ここを攻略するジプシャンには、まだまだ負けれませんよ！ねっ？タマさん！」
「はい・・・頑張りましょう！」

その時、指令室のサイレンが鳴り響いた。
「何だ？」玉木が叫んだ。
「北24ブロックで爆破確認！」
「近くじゃないか？ロクの仲間じゃないか？」
「恐らく・・・」顔をしかめるロク。
「戦況は？」
「爆破の所を中心に、敵の歩兵部隊に囲まれてます。」
「敵バイク部隊も確認！」
「厳しいねぇー。死神もかい？」と玉木。

P4北24ブロック。バズー班とダブル班が合流をしていたが、ジプシャン軍のバイク隊に四方を囲まれていた。瓦礫のビルから両方向に向かって機銃を撃ちまくるダブルとバズー。
「おい！ダブル！なんで死神連れて来るんじゃあ！？」バズーが叫ぶ。
「知るか！バズーこそなんでこんな敵のど真ん中にキャンプ張って

るんだ?」応戦中のダブル。
「いや・・・ロクがね・・・その・・・」

そこにキーンが入って来る。
「何揉めてんだよ!?北も敵だ!完全に囲まれてる!」
「ロクの野郎が、単独行動ばかりしてるからこんな事に・・・」

そこにホーリーとキキが入って来る。
「はいはい、人のせいにしないのね・・・」とホーリー。
「そうそう!敵の本部に行けと言ったのはバズーでしょ?」とキキ。
「確かにそう言ったけど・・・」

すぐ側で爆発が起きる。全員一斉に伏せる。そこにバズーのインカムに無線が入る。
『Ｐ４にＳＯＳを流してますが、応答ありません!』

「打ち続けろ!Ｐ４はなぜ助けに来ないのか・・・?」バズーは焦っていた。

その１３　　仲間を救出せよ！

Ｐ４司令室。
「味方のＳＯＳ信号確認！北２４ブロックからです！」
「まずいな・・・」顔をしかめる玉木。
「まさか・・・？その北２４ブロックって？シックスの事か？」
「そうだが・・・それがどうした？」
「無線を流したか？シックスに来いって？」
「そんな事したら、ここの居場所がバレるでしょ？」
「あらら・・・敵の無線にまんまと乗せられたか・・・？」
「確かにあそこは、旧防衛庁・・・そこを突くか？タケシは・・・」

「助けに行かせて下さい！お願いします！」とロク。
「駄目だと言っても、一人で乗り込む顔だね！？」
「え？ええ・・・」
「風我？どうする？一人でも行く気だよ。この子？」と玉木。
「完全に敵の罠です。俺らが出てくるのを待ってると思うんですがね・・・今助けに行くのは危険です。」
「取り合えず外に行かせて下さい。後は何とかします！」
「仲間は何人だい！？」
「約２０名！陸戦ではＰ６のトッププクラスばかりです。そうは負けませんよ！」
「タケシを舐めない方がいいわ？向こうも陸戦はプロよ。あの３０名を見たでしょ？どうする風我？」

「正直打つ手なし・・・」腕を組み目を瞑る風雅。
「俺が着ていた、敵の制服はまだありますか？」
「使うの？」
「ええ、ちょっと・・・ジプシャンはＰ４が助けに来ると思ってま

す。そこを突きますよ！」
「手伝いはいて？」
「いえ・・・それと長いロープを少し・・・」
「ロープ？」

シックスと呼ばれる旧防衛庁区域。瓦礫の街をジプシャンの兵が1名、周りを警戒しながら歩いている。そこに足を押さえて蹲っている同じジプシャン兵がいる。慌てて近寄る兵士。
「どうした！？」
「足を・・・撃たれた・・・」
「どこからだ？大丈夫か！？」

兵が機銃を後ろに回し、倒れた兵を抱き起こそうとした時だった。
「うっ・・・」
突然、喉元に拳銃を突きつけられた。
「ごめんね～？」
「えっ？えっ・・・・・・？？？」

軍服を脱がされ、口枷をし全裸のまま縛られている先程のジプシャン兵。どこぞやの廃墟の部屋に、ロク放り投げられる。ロクは敵の軍服のまま手榴弾を外すと、その廃墟の窓際に置いた。
「逃げようとしたら、こいつ撃っちゃうから？」
「うっ・・・うっ・・・」

ロクは敵の無線を掴むと、おもむろに話し始めた。
「敵の兵がいる！場所は・・・」

ジプシャン兵3名が、ある廃墟ビルを警戒しながら入ろうとしている。部屋は薄暗く、兵らは別々に行動し始めゆっくりとビル内を歩き始める。すると一人の兵が急に張られたロープに足を取られ、転倒してしまう。するとすぐ側でロクが銃を構えていた。
「ごめんね～？」
「えっ！？」

再び裸にされ、縛られたまま先程の部屋に放り投げられるジプシャン兵。
「あ？こいつにも言ったけど、逃げたらあれ撃っちゃうから。」
ロクは窓際にある手榴弾を指して、二人目の兵に忠告した。
「うっ・・・うっ・・・」
「寂しい？今もっと連れて来るよ。」

同じ廃墟ビル。警戒しながらビルを捜索するジプシャン兵。ある物音に気づき、恐る恐る近寄る兵士。するとロープが張られてる部屋に入る。ロープに引っ張られ壁をコツコツと叩く簡単な装置を発見。兵が慌てて後ろを振り向くと、ロクが笑顔で銃を構えている。
「ごめんね～？」

ロクは3人目の兵を連れてきた。やはり口枷に全裸、両手両足を縛られている。
「まだ3人・・・」

バズーらがいる廃墟。キーンとバズーが外を警戒しながら話し込む。

「銃声が無くなった気がしないか？」とバズー。
「確かに・・・」と警戒するキーン。
そこにホーリーがやって来る。
「南の兵が、手薄になった。どうする？」
「北にバイク隊だよな？罠か？」とキーン。
「南には、高速道路が倒れてたよな？南側に・・・」とバズー。
「南に？じゃあ追い込まれたら・・・？」とホーリー。
「ああ、越すことが出来ず、俺らは袋のネズミだ・・・」焦るバズー。

高速道路の高架橋が2キロに渡って倒れている。そこの４５度の傾斜に、ロープを使って登るジプシャン兵がいる。重いリックを背負っている様子で足元も覚束無い。やっとの思いで登った兵は、頂上部分に爆弾を仕掛けていく。すると、同じジプシャンの兵が倒れた高速道路の頂上部分に居るのに気づく。
「お前何してんだよ？」

そこに居たのは、敵の軍服を着たロクだった。
「はい、ここで監視を頼まれまして・・・先輩こそ何してんですか？」
登ってきたジプシャン兵は、ロクよりやや年上なのか、ロクは敬語で答えた。
「はあ？ここはもうすぐ爆破するんだぞ！？聞いてないのか？早めに待避しろよ！」
「じゃあ、先輩の作業が終わったら撤収しますよ！」
「もうここは終わるぞ。お前見たことないけど何班だよ？」
「Ｐ６って知ってます？」

するとロクは拳銃を抜いて、その男に向けた。

「おいおい・・・」
「ごめんね～手を上にお願いしますね！先輩！」

再び、廃墟の部屋。先程のジプシャン兵が全裸に縛られたまま、その部屋に放り投げられる。見ると２０名近いジプシャン兵が、全裸のまま縛られて横たわっていた。皆、口枷をされているので唸るだけだった。
「そろそろ、いいかな？」

大広が陣取る北のキャンプ。双眼鏡で南の倒れた高速道路を見ている大広。
「南の爆破班から、連絡がありませんね？」と大広。
「まだ時間が掛かっているのでしょう？」
「南の部隊は、そろそろ撤収させて下さい。」
「ははっ！」
「奴等を南に追い込みますよ！バイク隊前進して下さい！」

バズー班。廃墟内。日は西へ傾いていた。
「北のバイク隊が動くわ！」とキキ。
「動いたか！？」銃を手にするバズー。
「南は敵が居なくなっているよ！？」ホーリー
「マニュアル通りだな・・・罠に簡単にハマるかよ！」

「無線！？」
突然、キキのインカムに無線が入る！キキが答える。
「・・・誰・・・ロクなの！？」
「ああっ！？」キキの声に驚くキーン。

「無理よ・・・罠よ・・・」
「キキ！なんだ？」ロクからの無線にバズーも驚く。
「分かったわ・・・うん・・・ロクよ！南に下がれって！」
「罠に掛かれと言うのか？」
「暗号だった。詳しくは話さなかったけど、そうしろって！」
「ロクで間違いないんだな？」とバズー。
「うん、なにか考えがあるみたい。」
「わかった！みんなを集めろ！ここを離れるぞ！」
「それと6の番号は撃つなって・・・」
「あいつ、まだ敵の服着てるのか？」
「野郎っ！いつもおいしい所を・・・」呆れるダブル。

バズーとダブルの班が、身を低くしながら廃墟を移動している。そこにある4階建ての廃墟から口笛を吹くロク。いち早く気づいたのは、キキだった。
「ロク・・・」

ロクは窓際から、このビルに入れのサインを送る。
「よし！入るぞ！急げよ！」
バズー、ダブル班の20名近くは、ロクの指示通り廃墟に入って行く。するとその廃墟の階段上でロクは待っていた。

「お前、どこに行ってたんだ！？」
「説明は後だ！バイク隊が来る。まずはこれに着替えてくれ。」
ロクが人数分の、ジプシャン兵の軍服を差し出す。
「これ・・・？どこで手に入れた？」とキーン。
「訳はあとあと！それとこの上の部屋は、キキとホーリーは上がるなよ！」
「なんで女は入れないのさ！」そこはホーリーが反発。

「ホーリーは良いけど、キキは・・・」キキを見るロク。
「どういう事よ！もう！」
「まあ、すぐ分かるよ！バズーとホーリー用の軍服捜すの大変だったんだぜ！」

「これ、みんな臭いわよ！」ホーリーは自分に当てられた軍服の匂いを嗅いでみる。
「我慢我慢・・・」
「一応これでも嫁入り前なんだから、他の隊員の前で着替えられないわ！ねぇキキ？」
「そうよ！どこか、女子専用更衣室はないの？」

キキとホーリーは、ロクとの再会をあえて口にせず、愚痴を吐いてみせた。
「お前な・・・そこまで言うなら、この上を使いなよ・・・」
「そう、さしてもらうわ・・・」
キキとホーリーの2名だけが、更に上の階に上がる。

「で？敵に紛れて逃走でもするのか？」とバズー。
「そう簡単に、逃がしてくれるかな？」
すると上の階からキキの悲鳴が聞こえてくる。

『キャー！』
その声に、　ダブルが慌てて機関銃を構え階段を掛け上がる。

その１４　　初恋

「だから言ったのに・・・」

ロクが捕虜にした、全裸のジプシャン兵を見ているホーリーとキキ。キキは恥ずかしいながらも、指の隙間からキッチリ見ている。そこにダブルやロク、バズーらが駆け上がってくる。

「もーう、嫌！」とキキ。

「あら・・・いい眺めね・・・いい男もいるじゃな？い？」

ホーリーの声で、やや強張っているジプシャン兵たち。ホーリーの目が輝く。

「ロク？いつからこんな趣味になった？」とバズー。

「さあな？」

「どうするんだ？捕虜としては多すぎないか？」とキーン。

「ああ、ここで爆破して全員片付けるつもりだ。」

ロクの言葉に、必死に首を振るジプシャン兵たち。バズーは、ロクの言葉に何かを気づいた。

「そうだな。それはいい案だ。ダブル、爆薬だ！」

「マジかよ・・・？？」渋々爆薬を取りに行くダブル。

ロクの言葉に気づいたのは、ホーリーも同じだった。

「ちょっと待てよ。爆薬がなければ、ここから逃げれないわ。」

「裸で逃がしたら？弾も残り僅かよ・・・」とキキ。

「仲間の首を切り落とす連中だぞ！生かして帰すのか？」とロク。

「なら、勝手に首でも切り落としなさいよ！！」

キキはロクの非道の言葉に対して、珍しく大声を出し背中を向け

た。
「おーい!ダブル!爆弾やめで、斧持って来い!」バズーが叫ぶ。
『どっちだよ!?』下からダブルが叫んだ。
　すると、ロクは高速の上で爆弾を仕掛けていた男の側に行き、しゃがみ込んで話し掛けた。
「ごめんね~?こいつら俺より野蛮なんだ・・・」

　ロクの不敵な笑いに、ジプシャンの兵士たちは、必死に何かを訴え口枷をしたまま叫んだり、泣いている者までいる。　するとダブルが、下から大きな斧を持ってくる。兵士たちは更に顔色が蒼くなった。
「ほらよ!俺はそんな役はごめんだぜ。」
「なら・・・こいつから行くか?」
　バズーは斧を持ったまま、ある兵士に近寄る。その兵士は、縛られながらも他の仲間の兵に近寄り、必死に逃げようといている。
「うっ!うっ!うっ・・・」

　すると、ホーリーが口を挟んできた。
「武器を持たないジプシーを攻撃しちゃいけないんでは?」
「おいおい、こいつらジプシャンだぜ・・・」とバズー。
「軍服は着てないけどな・・・」とロク。

　すると、下から声が聞こえてくる。
『敵のバイクが近寄ってきます!』
「時間がない・・・銃殺する・・・」
　ロクは、腰の拳銃を抜き一人に向かって構え始めた。
「駄目よ!チャンスを与えたら?」とホーリー。
「そうだな・・・」

捕虜の兵らは、Ｐ６の軍服を着せられ両手だけは後ろに縛られていた。縛っているのが分からないように、その上にポンチョコートを着させられている。兵らは全員口枷をしたまま、ビルの入口付近に並べられていた。

「あの倒れている高速道路まで走れ！妙な動きをしたら、お前らみたいに後ろから容赦なく撃ち殺す。いいかな？？」

ロクは笑顔たっぷりに捕虜たちを説得し始めた。

「横に逃げたり、立ち止まっても駄目だ。ビルの上からバズーカや機銃が狙う。」

するとロクは、敵の兵の一人に自分が被っていたハットを頭に被せ、ビルの上を指差す。するとバズーとダブル、キーンまでが各々の武器を構えていた。

「足場悪いけど、全力で走れよ！ああ言い忘れた。味方は近くまで来ている。味方にも撃たれないようにな？」

一人のジプシャン兵が、ロクに向かって唸っていた。ロクが倒れた高速上で拘束した兵だ。

「うーうっ！うううーううううーうう！」

「大丈夫だよ。起爆装置は俺持ってないから・・・」

そう言うと、なぜかその兵は黙り込んだ。

「最初の３０秒だけは、撃たないから・・・じゃあ行くよ！ＧＯ！」

ロクの掛け声で、兵士たちは一斉に走り出した。両手を後ろに縛られているせいか、スタートしてすぐ転倒した者までいる。それを廃墟ビルの上の階から見つめるダブル。

「おいおい・・・」

みんな必死に瓦礫の中を、倒壊した高速道路に向かって走り出してる。

「時間だ！」

ロクの声を聞いた、ダブルとキーんはその兵らを狙撃し始めた。
銃弾は、足や顔にギリギリでかすめていく。兵士たちは更に加速して走り始めた。

大広隊本隊。
「南側で、銃声！敵が爆破ポイントに逃走してるそうです。」
「爆破のタイミングは任せます。奴らめ、痺れを切らしましたね・・・」と大広。

ポリスの軍服を着させられた２０名の兵士は、倒壊した高速道路近くまで来ていた。しかし兵たちは、高速道路の下までは行かず、途中で左右に分かれ始めた。するとその兵士たちの足元を、キーンのライフルが狙撃し始める。兵士らが進退窮まった次の瞬間だった。高速道路の上の部分から爆発が起こり、高速道路が音を立て崩れ始めた。何人かは瓦礫の下敷きとなり巨大な砂埃の中に消えて行った。

ロクたちはジプシャンの軍服を着ながら、高速道路が爆破された現場に集まり始めていた。
「もし、敵が爆破しなかったら？」バズー。
「そしたら、こっちで狙撃してたよ。」
「そうか・・・ああ、ロク演技下手過ぎ！」
「ごめんね～」
「道は出来たか？よしここから逃げるぜ！」キーン。
「おお、これじゃ俺らがＰ４に撃たれちまうだろ！？」とダブル。
「Ｐ４は来ない。」
「何でだよ！？」とダブル。

「断ったんだ。お前らは俺の仲間だからな！俺一人で助けると！」
「くっ・・・いつもいい所を・・・」

　すると、後方を警戒していたキキやホーリー、ボムも合流して来る。
「敵は、完全に芝居に騙されてるわ。」とキキ。
「急ごう、遺体を調べられたらバレルわ！」ホーリーが叫ぶ。
「行こうって、どこに行けばいいんだよ？」とバズー。
「Ｐ４はこの先だ・・・」

　ロクたちは、高速が爆破された箇所を通る時だった。突然、機関銃の銃声が彼らを襲った。
「ロクっ！」

　ロクをかばい、ロクの前に出たのはホーリーだった。ロクの顔に大量の血が吹き付けられた。ホーリーはそのまま後ろに倒れ、ロクはホーリーを抱き締めた。ダブルは咄嗟に撃って来た方向に、機銃を撃ち込んだ。キーんもバズーも拳銃を抜き、まだ砂埃が消えない高速道路崩壊部分に銃弾を乱射した。ロクは、ホーリー腹を抱えると、近くの瓦礫の影に隠れた。

「ホーリー！！」
「ロ、ロク・・・」顔色が変わっていくホーリー。
「キキ！！こっちだ！」
　銃弾は左胸元をエグっていた。大量の血がドクドクと流れ出す。ロクの声に慌ててキキが伏せながらやって来る。銃撃はまだ続いていた。ロクは銃撃痕を必死に手で押さえるが、血は止まらない。キキが背負ったリュックからガーゼを出し、傷口を覆い始めた。
「た、助かる・・・？」必死の形相のホーリー。

「助かるさ！何とかする！」
「嘘よ・・・キキ泣いているもん・・・」
キキは必死の形相で手当てをしているが、キキはホーリーの様子を見て、涙を溢し始めていた。
「泣くな！キキ！」
「だって・・・」

その言葉で、ロクもホーリーの容態を把握してしまった。
「悲しまないで・・・泣かないで・・・遅かれ早かれ人は死ぬの・・・」
「ホーリーっ！！」
「先にみんなのとこに・・・行くだけよ・・・」
「キキ！血が・・・血が止まらねぇよ！！」
「ロク？・・・気づいてた？」
「ホーリー！もういい！喋るな！」
「気づかなかったの・・・？」
「だから、喋るな！」

「ロク！聞いてあげてよ！！」
キキが泣きながら、珍しく怒鳴ってみせた。ロクは自分の顔を見ているホーリーの顔を見つめた。
「な、なんだよ・・・？」
「あんたはね・・・あんたは・・・私の・・・初恋の相手だったんだよ・・・」
「ホーリー・・・」
「あたい・・・こんな男みたいな体で、他の男たちよりもデカいから・・・ガキの頃からポリスに虐められて・・・助けてくれたのはいつもロクだけだったよね・・・？」

「そうだな・・・いつもホーリーを助けてたな・・・ホーリーのゼ

ッケンは“６６６”・・・ゼッケンだけで虐められてたよな？・・・・なんでだよ！キキ！？血が止まんねぇ！」ホーリーの話を聞きながら懸命に止血をするロク。
「最後は・・・好きな男の為に死ねるなんて・・・私・・・幸せだよ・・・」
「撃たれて、幸せな奴がどこにいるんだ！？」
「この銃は・・・あんたに預けるわ・・・」

少しづつ意識が遠くなり、目も虚ろになっていくホーリー。
「ホーリー！！」
「ねえ・・・もっと抱き締めてよ・・・もっときつく・・・もっと・・・あたい・・・幸せだな・・・」
「後は・・・任せるから・・・」
「お前も・・・そのセリフかよ・・・？」
すると、ホーリーはロクの腕で眠るように息を引き取っていった。
「ホーリー・・・」
「・・・」泣き崩れるキキ。

涙を流しながら、我を押し殺しているキキ。ロクは動かなくなったホーリーを強く抱き締めていた。

「やばいよ！前方にも敵兵だ！」
ボムは、崩壊した高速側を見て叫んだ。銃撃は増える一方で、ロクたちの後方からはバイク音が近づいてくる。
「敵に読まれていたか・・・」

「そう簡単には、逃がさないぜ・・・」
瓦礫の中、不敵に笑うタケシ。

その１５　　十字砲火

「ある意味、囲まれてないか！？」
バズーの声が焦っていた。
「読まれていたか・・・」
「後方は、我々が押さえます！」
すると、ボムは３名の若い兵を引き連れ、さっきまでいたビル方面に走っていく。

「正面！銃声からして差ほど多くない！」とキーン。
「しかし、こう出口が狭いと・・・」とロク。
爆破で開いた高速の幅は、僅か５メートル程。その狭さの先に、敵がどのくらい居るのかは分からない。
「俺が切り込む！後は任すぞ！ロク！」バズーが立ち上がった。
「おいおい！死にたいのか！？」とロク。
「やばいよ、左右の隊も動いている！囲まれちまう！」とキキ。
「可能性は前進の方だ。プロジェクトソルジャーが、後退して死んだとあっては、後世の後輩らに笑われちまうぜ・・・」
「バズー・・・」
「ここは、俺とキーンで行く。後は頼んだぞ！」
「無茶すぎる！敵の数も分からんのに・・・」
「その方が、燃えるんだよな・・・行くぞキーン！」
「おおっ！」

その瞬間だった。後方の敵バイク隊辺りから、連続爆破が起きる。
バズーやキーンたちも後方を見つめた。
「て、敵が攻撃を受けている！」キキが後方を確認する。
「Ｐ４？・・・まさか・・・？」

よく見ると敵バイク隊に混じって、赤いヘルメットに赤いライダースーツを着装し、バイクに跨る5名程のライダーを見つける。ロクはすぐに誰か分かった。
「あいつ・・・」
5台の赤いバイク隊は、ジプシャンのバイク隊の後方を突き、隊列を崩して行く。

「味方か?」とバズー。
「ああ・・・陽だ・・・」
5台のバイク隊は、敵を蹴散らすとロクらの近くまでやって来る。すると一人が“右へ回れ”のサインを送った。
「ロク班め・・・いつもいい所を・・・」とダブル。
「バズー行こう!右だ!」
「ああ!」

瓦礫の街を走り出すロクたち。

現在・・・ロクの独房。ロクは点滴を受けながら、ベットに横たわっていた。そこに独房のロックが外れ、高田女医が入って来る。ドアの所には、機関銃を構えた兵が立っていた。

「どう?」
「退屈です・・・」
「キーンは、車椅子でここに来るって言っているけど、どうする?」
「会えるんですか?」
「ドア越しならね。」
「また復帰するって言ってません?」
「話によると、レヴィアの第2艦隊を任せられるようよ。」
「レヴィア・・・第2艦隊?」
「詳しくは本人に聞いて。関根のせいでスパイ疑惑は、医療室に向

けられてるの。」
「船乗りかい・・・？」溜め息の混じりのロクの声。

ロクの点滴を代え始め、腹部の包帯を外し始める。
「驚異的な回復ね！さすがプロジェクトソルジャーね！」
「早く銃を撃たせてください・・・」
「ふふふ・・・見張りの兵士によると、夜魘されてるようね？」
「ええ・・・昔、死んで行った仲間の夢ばかり見ます。」
「あんたみたいなベテランでも？新人の兵には多いんだけどな・・・
安定剤を出しておくわ。」

「あんな薬を飲むと、目が裏返るって聞いてますよ？」
「うふふ・・・まあマレにね・・・」
「ゲッ？本当なんだ？」
「ちゃんと飲むのよ。」
「へいへい・・・」
高田が独房を出て行く。ロクは笑顔だったが、また寂しい顔に戻
ってしまった。

再び3年前。Ｐ４内の大きな丸い広場。天井は高く、巨大な鉄の
ドームで出来ている。証明が当たらない、その広場の一角をロクが
一人歩き出している。するとそこにキキが走りながら近寄ってきた。

「捜したわ。いつも一人で行動するんだから・・・」
「悪い・・・武器を見ていた。」とロク。
「葬儀・・・いつも途中で居なくなるんだね・・・？」
「すまん・・・昔から苦手で・・・」
「ホーリーもイブも無事に終わったわ・・・まさかイブが生きてい
たなんてね・・・残念だわ看取れなくて・・・」

「あの長髪切ったの、最後まで恨んでたな・・・」

すると、さらにそこに陽がやって来た。
「班長？タマさんがお呼びです。」
「今、行く。それと陽？」
「何か？」
「ありがとう・・・」
「い、いえ・・・」

ロクの突然の言葉に、戸惑う陽。ロクは一人Ｐ４の司令室に向かう。取り残された二人。
「怒ってるみたいよ・・・命令違反。」とキキ。
「でも結果的には、みんなを救った・・・」
「だから、怒れないのよ・・・」
「ロクさんも、命令違反は常習犯とよく聞きますが？」
「彼を、叱れるのは参謀の数名だけよ・・・」
「もっとプライドの高い方だと思ってました・・・」
「そんな事ないわ。仲間の為に命を張る。３期はそんな連中が多いわ。」
「仲間ですか・・・」
「部下を亡くしたの、あんまり彼を責めないでね・・・」
「はぁ・・・」

ロクの去った方向を見つめる陽。

Ｐ４の大きな食堂。風我を中心に、Ｐ６の兵士たちが食を囲んでいる。ほとんどが缶詰の食材。しかし兵たちの目は輝いている。
「缶詰しかありませんが・・・どうぞ。」
風我の言葉が終わるやいなや、缶詰に喰らいつく兵士たち。
「これが・・・夢にまで見た牛の缶詰か・・・」とバズー。

「おい！こっちには果物もあるぜ！」キーンも興奮気味。
「なんだ！初めての味だな！」とダブル。
皆、夢中になって缶詰を頬張る。

Ｐ４司令室。玉木が司令室に腰掛けている。そこにロクが入ってくる。
「入ります！」
「ロクか・・・さて、これからどうしたもんかねロク？」
「ポリス最大の規模と言っても、ここにはろくな武器がないんですね？」
「ああ・・・ここは、元研究施設だからな。」
「あの武器の量・・・反撃出来ない理由がようやく分かりましたよ。」
「命掛けで来てくれたのは感謝している。悪いことは言わない。早めにＰ６に戻るがいい。」
玉木は後ろを向きながらロクに呟く。

「タマさん・・・」
「ある程度、ここに就任した時から覚悟は決めていた。ここではジプシャンには勝てない・・・」
「ここを放棄しましょう！Ｐ６に行きましょう！まだＰ５の力だって・・・」
「残念だけど、それは出来ない。３０００人はいるの・・・すでにここは、東西南北は囲まれてるわ。入るのも困難だけど、今となっては逃げるのも無理ね・・・」
「しかし・・・」

「サンドシップが中心地に入ってくるまでは時間が掛かる。所詮、向こうもこうやって白兵戦しか仕掛けてこない。船が入ってきたら、

ここは終わりよ。悪い事は言わないわ。早くここから脱出しなさい。」

「タマさん・・・それは・・・」

ロクは玉木の決意を感じ取っていた。戦局はポリス不利と傾いていった。

その１６　　キキの引き際

ロクたちがＰ４に入り、６ヶ月が過ぎようとしていた。Ｐ４とジプシャンの戦いは泥沼状態に入っていた。ロクの命令で、陽とボムら若い兵らは一度、Ｐ６に戻っていた。残ったのは3期のメンバーだったが、既に残もライも戦死していた。Ｐ４に残っていたのは、ロク、キーン、バズー、ダブル、キキの5名だけだった。戦いは既に勝敗はついていた。ジプシャンは、Ｐ４の上の瓦礫を払いのけ、大型サンドシップを通れる程の道を完成させていたのだ。

あるＰ４地区廃墟街。ロクとキキが闇の街を、身を低くして走り抜ける。キキは小さなカバンを手にし、ロクは片手に拳銃を持っていた。あるビルの陰に来ると、恐る恐るビルの反対を覗き込むロク。そこにあった物は、戦艦と空母を足した奇妙なサンドシップだった。右半分部分は空母、左半分部分は戦艦。角度は３０度くらいの傾斜で交わりＸの形で繋がっている。軍艦とはいえ、他のサンドシップと同じで、海面に隠れるであろう部分がなく、エアーブースターの仕様になっている。ロクはそのサンドシップを目撃すると、度肝を抜かれていた。

「お、大きい・・・」とロク。
「ジプシャンの新型シップね・・・」とキキ
「よくこれだけの物を調達したな?しかも、こんな所まで進入している・・・」
「ロク、Ｐ４に知らせないと!」
「行こう!」
「うん・・・」

『敵だ！！』

ロクとキキがその場を立ち去る時だった。前方からライトが当たり、敵兵の声が聞こえてきた。ロクとキキは慌てて、瓦礫の街中を暗闇に向かって走り出す。何発かの銃声が二人の足元をかすめた。体勢を崩しながらも、瓦礫の街を走り抜ける二人。ロクは後方の敵を確認すると、敵が巨大なロケットランチャーを、まさに今発射しようとしていた。

「ヤ、ヤバイ・・・」

発射されたロケット弾は、真っ直ぐ二人の方に飛んで来た。ロクは間一髪で、そのロケット弾を拳銃だけで打ち落とす。しかし、ロクとキキの寸前で爆発したため、二人は爆風に巻き込まれてしまった。ロクはキキをかばいながら横転する。見詰め合う二人。

「平気か？」

「う、うん・・・」

「走るぞ！」

「ええ・・・」

ロクは、キキを抱き起こすと、再び夜の瓦礫の街を走り出した。

敵の銃撃が聞こえなくなった所で、二人は走るのを止めていた。キキは後方を気にして、ロクは前方を警戒していた。キキがふとロクの方を見ると、ロクの左肘辺りから出血しているのを見つける。

「ロク！怪我してるんじゃない！？」とキキ。

「ああ・・・さっきの、爆風で・・・大したことないよ。」

「駄目よ・・・」

キキはカバンから包帯と薬品を取り出すと、ロクの腕の制服を捲くり始めた。

「ちょっと、皮がめくれただけだよ。」

「これのどこがちょっとよ！」
キキは慌てて、傷口を圧迫する。ロクは右手で拳銃を握りながら、辺りを警戒していた。すると突然キキが、口に手を当て嘔吐し始めた。

「キキ。どうした？」
キキの嘔吐は止まらず、体勢を低くしながら嘔吐し続けた。ロクは嫌な予感がした。
「キキ・・・お前・・・まさか・・・？」
ようやく顔を上げ、ロクに苦笑いをするキキ。

Ｐ４司令室。玉木の前に、ロクだけが直立して立っている。
「敵サンドシップは、旧山の手ラインに迫り・・・」
「あら？敵も精が出るわね・・・」と玉木。
「あと１キロも進めば、ここは砲撃されます！」
「敵の砲弾じゃ、ここのドームは破壊出来ないわ。」
「しかし・・・」
「下がっていいわ。怪我もしてる様子だし・・・」

玉木は、ロクの左腕の怪我を見つけた。
「は、はい・・・それとタマさん・・・ご相談が・・・」
「ん？何？また無茶な作戦？」

キキが医療室で検査を受けている。それを見守る玉木とロク。キキがその中から出て二人の側にやって来る。玉木はロクに問いかけた。
「そんな事まで見抜いちゃうの？Ｐ６のプロジェクトソルジャーたちは、そんな事まで訓練校で習うのかしら？」

「か、勘ですよ・・・」

女性スタッフが1名、玉木の側に来て、黒いボードを手渡した。
その中身を見つめる玉木。
「うーん。こんな時、おめでとうって言った方がいいのかしら?3ヶ月よ～」
その言葉に、ロクは渋い顔をし、キキは下を向き黙ってしまった。
「誰なの?父親?あんた!?」
「な、なんで!?」慌てるロク。
「そうよね。あのおチビちゃんよね?」
「・・・」キキは黙ってしまった。
「私は、P4の司令であって、あなたらの直属の上官ではない・・・さてどうしたもんか・・・」
「すいません・・・」なぜか謝るロク。
「うちの兵士なら、ソルジャーなら禁固なのよ・・・」
「す、すいません・・・」頭を下げるキキ。

キキとロクが、P4内のドーム広場を見渡せる長い廊下の窓際に立っている。二人で広場側を見ていた。
「まったく・・・P6なら禁固もんだぞ。タマさんが女だから、理解してくれたようなもんだ!」
「ごめん・・・黙ってて・・・」うつむくキキ。
「ダブルには、話したのか?」
「まだよ・・・」
「タマさんは、もう戦場に出るなと言うが・・・どうするんだ?」
「昔から思ってたんだけど・・・プロジェクトソルジャーって、辞めれないのかな?」
「今まで生きて辞めた奴、いたっけ?」ロクは目だけ上を向く。

「私・・・女として産んじゃいけないのかな？」
「お、俺に聞くなよ・・・」
「こんな時、ホーリーならなんて言うんだろ・・・？」
「そうだな・・・きっとダブルを張り倒したろうな？」
「こんな相談は、いつもホーリーだった・・・」

「あの時ホーリーに初恋の話をされ・・・正直、面を食らったよ。」
「ずっと、片思いだったのよ？気づかなかった？」
「お前らを、今までそんな風に見た事なかったし・・・」
「あら？そんなに私たち魅力ないかしら？」
「そういう意味じゃない・・・何て言うか・・・仲間としか思ってなかったから・・・」
「ロクに、恋の話は無意味ね・・・昔から鈍感なんだから、この人は・・・それにロクにはもう決めた人がいるようだし？」
「お、俺の事はいいだろ！それより、ダブルになんて言うんだ？」
ロクは要らん事を言われ焦った。

「う、うん・・・私から話す・・・この子とこれからの二人の事も・・・だからみんなには暫く黙っててくれないかな？特にバズーには？」
「そうだな・・・奴に知れたら事だ・・・」

すると、館内に警報が鳴り響いた。続いて館内放送が流れる。
『敵がBブロックに侵入！繰り返す！敵がBブロックに侵入！各戦闘員は・・・』
「やばい・・・俺らがさっき帰ってきた入口だ！」
「逃げれたんじゃない！逃がされたんだわ・・・」
ロクとキキは指令室に走り出した。

「敵ながらジプシャンは凄いな。おい！一緒に行く気じゃねぇよな

？キキは、今回は大人しくここに居ろ！」
「あら、どうして？まだプロジェクトソルジャーよ！しかも名誉あるロク班のね？」
「まったく・・・うちの班は、どいつもこいつも言った命令は聞かないよなー。」
「班長が、班長ですもん！」満面の笑顔のキキ。
「後方支援だけだぞ！いいな？」呆れるロク。

ロクは、キキを言い聞かすように、やや大きめの声でキキに言う。
「はいはい・・・」
「さーて・・・行きますか？」

その17　　ダブル狂乱

Ｐ４の地下通路を走るロクとキキ。ロクが後ろのキキに振り返る。
「走るなよ！歩いて来い！」
「平気よ。さっきまで走っていたじゃない。」
「チッ！」

Ｐ４の地上部分。瓦礫の廃墟ビルを挟み、ポリスとジプシャンが銃撃戦となっている。数は約二十ＶＳ二十。ポリス側にはバズーをはじめ、キーンの顔も見える。その後方にロクがやってきた。
「戦況は・・・？」

ロクは、拳銃を撃つバズーの背中に語った。
「最悪だな。敵にここの入口を悟られるなんて・・・この入口ももう爆破しないと・・・誰か付けられたか？」
「たぶん、それ俺・・・」
「ロクにしては、珍しくヘマしたな？」とキーン。
「足跡残さないように、うまくやったつもりだが・・・」
「敵もやるって事だよ。」とバズー。
「ダブルは？」
「その爆破の火薬を取りに行った。」

するとロクの目に、更に後方で待機するキキの姿が映る。ロクは両手で帰れの合図を出したが、首を横に振るキキ。
「くそっ・・・俺は側面にまわる！」ロクが駆け出そうとした。
「勝手に行くな！爆薬がきてここを吹き飛ばしたら、入口は敵の向こうにしかない。帰れないぞ！」
「それまでには、帰るよ！」

ロクは、身を低くしながら隊の右側を走り出した。それを見ていたキキも、ロクを追いかける。
「あいつら・・・」二人を見ていたバズーが呟く。

ロクの後ろを必死に追いかけるキキ。ロクは敵の側面にまわると、瓦礫の山に身を潜めた。すぐ側にキキも到着する。双方の銃撃の音も遠くなっていた。
「戻れって言ったろ!?ダブルの方にまわれ。」
「一人で何するのよ?」
「敵をこっちに引き付ける。だから戻れ!」
「一人じゃ無理よ。どうせ撃てないくせに!」
「それでもするさ!キキは戻るんだ!」

ロクは珍しくキキに凄んだ。
「分かったわよ・・・ただ後方支援はするわよ!」
「離れてろよ!」

ロクはそう言うと、敵の側面に拳銃を撃ち込み始めた。銃弾は、敵の機銃だけに命中する。その様子を後方から観察するキキ。
「だから・・・援護にもならないわよ・・・ロク班の鉄則・・・班長の変わりに躊躇なく撃つ!」
そう言うと、キキも拳銃を持ってロクの援護に回る。

「あいつ・・・」ロクはキキの行動に呆れた。

その頃、ダブルはロクたちが死守する、Ｐ４への入口に爆薬を仕掛けていた。

「少し攻撃が弱くなった・・・まだかよ?ダブル?」
銃撃の中、インカムに話しかけるバズー。
『あと1分くれ。半分は撤退させろ!』無線のダブル。
「わかった・・・ロク!キキ!下がれ!そろそろ撤退する。」
『わかった!先に行け!俺はこいつらを引き付ける!最悪別の入口から帰る。』とロク。
「無茶するなよ!」
『ああ・・・』
「よし!一人づつ撤退するぞ!」バズーが指示を飛ばす。

ロクは、敵が陣取る建物から見えるように走り出す。敵の銃弾がロクを狙う。
「こっちだ!」
ロクは更に敵の後方へと走り抜ける。敵は後方のロクにバズーカーを構えた。
「火気、反則だろ!」
ロクは飛んできた砲弾を間一髪でかわした。
「危ない、危ない・・・」

するとロクの近くまでキキが近寄ってくるのが分かった。
「キキ!来るな!」

その時、敵の砲弾がキキのすぐ後方で爆発する。身の軽いキキは数メートルも上に吹き飛んだ。
「キキィー!!」
慌ててキキに近寄るロク。そこには両足を失い、瀕死の重傷を負ったキキがいた。ロクは急ぎビルの影にキキを運んだ。
「しっかりしろ!」
「あ、足・・・が・・・」

「ついてくんなって言ったじゃないか!?」
「ロ、ロクを一人に・・・出来ないでしょ?」
「今、運んでやる!」
「無理よ・・・なんか・・・腹も貫通したし・・・」
「腹・・・?」
「赤ちゃん・・・大丈夫かな・・・?死んじゃったかな・・・?」
「引退して、ダブルと結婚するんだろ?しっかりしろ!」
「ちょっと・・・無理そうね・・・分かるわよ。これでも衛生担当よ・・・」
「こんな事で死ぬな!キキっ!」
「こ、これをダブルとロクに・・・」

キキは持っていた2丁の拳銃を、ロクに渡した。

「キキ、お前・・・」
「これでまた・・・一緒に戦える・・・」
「こんな時にまだ戦争の話かよ・・・」
「ダブルに・・・伝えてよ・・・私・・・幸せだったって・・・」
「キキ!」
「やっぱプロジェクトソルジャーは、生きて辞めれないわね・・・あ、後は任せるわ・・・ロク・・・」
「キキィー!・・・お前もそのセリフかよ・・・?」

キキは眠るように息を引き取った。

P4のある廊下。ダブルが我を忘れ、バズーとキーンに食って掛っていた。

「ふざけるな!キキが死ぬ訳ないじゃないか!?今朝も一緒だったんだ!死ぬ訳ねぇだろ!ふざけてんならブッ飛ばすぞ!」
「落ち着け!ダブル!」キーンが暴れるダブルを制止する。

「なあ・・・さっきまでロクと居たじゃないか!?奴はどこだ・・・ロクは?・・・ロクっ!おい!ロク!?」
「ダブルーっ!!」
バズーの大声に我を忘れていたダブルは自分を取り戻した。
「キキは!・・・死んだ・・・」
「はは・・・嘘だね!・・・みんな冗談キツイぞ・・・なあどこだよ・・・キキは?会わせろよ・・・この中に居るんだろ?通せよ!なあ?」

ダブルは狂ったように、バズーの制服を掴みそのままバズーを廊下の壁まで押し当てた。
すると、その廊下に面した部屋のドアが開き、暗い顔をしたロクが出てきた。

「ロ、ロク・・・キキは・・・?キキはいるんだろ?・・・なあ?」

ロクは無言のまま首を横に振った。その様子を見て更にダブルは逆上した。
「お前がいて、なんでキキを守れなかったぁー!?」

ロクは黙ったままだった。

その１８　　四天王誕生

「お前がいて、なんでキキを守れなかったんだ!?」

ロクは魘されながら悪い夢から覚めた。

現在のＰ６。ロクの独房。ロクはベットから飛び起きていた。そばにあったコップの水を一口飲むと、額の汗を制服で拭き去る。するとロクの独房のドアを叩く音が聞こえる。

「は、はい？」

『魘されていたようだが・・・？』

声の持ち主はキーンだった。ロクは片足を引きずりながら急いでドアに近寄った。ドアの小窓から見えたのは、車椅子に乗ったキーンと、松井の姿があった。

「ロクさんに会うってきかなくて・・・」と松井が笑う。

「どうせ退屈してると思ってな？」

「足、大丈夫なのか？」とロク。

「ああ・・・おい、二人だけで話がしたい。」

「はあ・・・」

キーンは後ろの松井に話しかける。松井がその場を離れていくのを確認すると、ドアの側までキーンは近づいた。

「なんなら、ここ開けてやろうか？」小声のキーン。

「馬鹿言うな。出ようと思えばいつでも出れる。」

「相変わらず、頑固だな。」

「それで・・・艦隊司令だって？」

「おお？どうしてそれを・・・？ああ高田さんか？」

「さあな？」
「気をつけろ。今度は高田女医がスパイって噂だぞ・・・」
「かもな？」
「わははははっ。知ってたか？」
「ああ・・・」

二人は心から笑っていた。しかしロクはキーンの足を見ることが出来ない。
「まあ、その報告もあってここに来た。」
「指令室でもいいじゃないか？嫌なのか？」
「根っからのソルジャーだぜ。死ぬなら荒野だな・・・」
「そうだな・・・」
「まだ痛むのか？」
「少しな・・・なぜか足に来ちまって・・・歩くのはしんどいな。」
「バズーの話だと、お前は無罪で済むらしいぞ。」
「ほぉー！それはありがたい。銃殺じゃないかと夜も寝れなかったが・・・」
「嘘付け！どうせ親父さんが救ってくれると思っていたろ？」
「ああ、少なくとも今度こそＰ７へ島流しだろうがね。」
「そりゃいい！船酔いも克服するな。ああ新しいオペが入ってきた。ダブルは既に指令室に入り浸りだ。美人らしいぞ。無事に黒豹復活ならお前の担当だ！」
「果たしてすんなり偵察隊に帰れるか・・・？それで黒豹に戻ってもダブルに怒られそうだな？」
「違いない。“ロクの野郎またおいしい所を・・・”ってか？」
「ハハハ・・・さっきな、キキの夢を見ていた。」
「・・・そうか。」
「あの時さ・・・もしキキが・・・」

ロクの言葉に察したキーンがすぐ割って入る。

「キキの死で、みんな強くなった！」
「えっ！？」
「ダブルには悪いが、あの時キキが教えてくれたんだよ。そして今の四天王が居る・・・」
「キーンが・・・？」
「悪い時間だ・・・戻るぞ・・・まだリハビリ中でな。また来るよ。」自分で車椅子を動かしていくダブル。
「ああ・・・」

３年前のＰ４の地上。辺りは夜になっていた。月光もなく、真っ暗な瓦礫の街をロクとキーンとバズーの３人が立っている。風が強く３人のポンチョが風になびいていた。３人の目線の先には、いくつかのコンクリートの破片で作られた墓標があった。その一つにカタカナで“キキ”と書かれている。

「奴は？」バズーはいないダブルを捜した。
「まだ泣いてるんだろ？ほっとけよ・・・」とキーン。
「とうとう、４人だけになったな？ここで何人死んだんだ？」とロク。

ロクもまだ悲しんでいる様子で、キキの墓をまともに見ることが出来ない。そこに遅れてダブルがやってきた。
「おせぇぞ・・・」
「るせぇよ！」ロクと目を合わさないダブル。
「さあ始めるか・・・？」それを察したキーン。
「ああ・・・」

４人は墓の前に跪き、各々黙祷を始める。するとロクが一人声を出し始めた。

「もっと・・・強くなる・・・」

その声に、黙祷途中でダブルは目を開け、隣のロクを見つめる。
すると今度はキーンが呟いた。
「俺たちは、もっともっと強くなるからな・・・」
ダブルは次はキーンの方を向く。するとダブルがまた騒ぎ始めた。
「なんだよ・・・？お前ら・・・まるで今の俺たちが弱いみたいじゃねぇか！？」

すると黙祷を終わったバズーが立ち上がり、ダブルに近づく。
「おい！」
「あんだよ？」
バズーはダブルの腹部を右拳で殴った。両足が浮くほどのバズーのパンチは、夜の瓦礫街にダブルを這いつかせた。
「ごほっ・・・ごほっ！何しやがる、この野郎！」
「弱いんだよ。特にお前が！」バズーがダブルの前に仁王立ちする。
「な、なんなんだよ！？どいつもこいつも！」
「キキは妊娠していた・・・お前だろ？」とキーン。
「に、妊娠って・・・本当かロク？」
「ああ・・・」
「遊びにここに来てるんじゃねぞぉ！」とバズー。

「キキ・・・」
「キキはＰ６に帰ったら引退するつもりだった・・・」とロク。
「引退って・・・ソルジャーをか？」
「ああ・・・」

するとダブルは、這い蹲りながら大声を出し泣き出した。
「キキ・・・なんでだ！？キキ・・・なんで・・・？」
「拳銃を預かった・・・一つはお前の分だ・・・」

ダブルは泣きながらロクから拳銃を受け取ると、拳銃を抱き締め屈み込み再び泣き始めた。
「プロジェクトソルジャーが人前でな・・・」

バズーがダブルを叱ろうとした時、ロクは無言でバズーを止めた。
「泣かせてやれよ・・・」
するとダブルは、泣きながら3人を見上げた。
「お前らは・・・お前らは悲しくないのか・・・？仲間が死んで悲しくないのか？」
「仲間が死んで、悲しくない奴がどこにいるんだ!?」
バズーが、初めて自分の気持ちをダブルにぶつけた。４人とも黙ってしまう。

「絶対、強くなってやる!」とロク。
「強くなれば誰も馬鹿にしない・・・」とキーン。
突然、ロクとキーンが思い出したように口ずさんだ。
「ダブル・・・もっともっと強くなろう・・・死んでいった奴らの為にも・・・」とダブル。

すると、ダブルは立ち上がりキキの墓に正対した。ダブルはいつの間にか泣き止んでいた。
「ああ・・・強くなってやるよ・・・キキの為にもな・・・」

４人はいつまでもキキの墓を見つめていた。

その１９　帰還命令

Ｐ４の指令室。雛壇の上で玉木とロクが話している。
「キキは残念だった・・・」玉城がロクを慰める。
「いえ・・・それでダブルの処分ですが・・・？」
「前も言ったが君らはＰ６の預かりだ。私に権限はないよ。」
「それでは・・・？」
「聞かなかった事にする・・・それだけよ！」
「ありがとうございます・・・では今後の作戦ですが・・・」
「待って。会わせたい人がいるの。会議室へみんなを集めて！」
「はあ・・・？？」

Ｐ４の会議室。ロク、バズー、キーン、ダブルが座って待っている中、玉木、風我とロク班にいた陽が入ってくる。
「陽？」ロクは驚いた。
「おお、陽じゃねぇか“よう”！？」バズーが声を掛けた。
「あら？４人ともご無事ですね。バズーさん？今の笑えませんから・・・」
「バ、バカ・・・シャレじゃねぇよ！」

「一人か？陽？」とロク
陽に詰め寄る４人。そこに玉木が口を挟んだ。
「さっきここに着いたのよ。」
「さすが次期四天王候補ですね？この包囲網を単独で来るとは・・・」と風我。
「単独だからですよ・・・それで他のメンバーは？」
「・・・死んだ。」とバズー。
「キキさんは？他のメンツは？」

「・・・」首を振るロク。

「そうですか・・・一番残って欲しくない４人が残りましたね。また出世しそこねました。」

「お前な・・・」バズーがその言葉に怒り出す。

「それで、何の用だ？ここに来た理由だ？」ロクが問う。

「はい・・・親父さんからです。残存部隊に帰還命令が出てます。」

「帰還命令？Ｐ４はどうするんだ？」バズーが詰め寄る。

「そう、私に言われても困ります・・・」

突然の帰還命令にロクたちは戸惑った。

「タマさん・・・？」

「そうね・・・そろそろ君らも帰る頃よね？どう？風我？」

「はい・・・私もそう思います。」

「タマさん・・・風我・・・」ロクは二人に助けを求めた。

「間もなく、ここは陥落する。無駄死にはしないでＰ６に戻りなさい。まだ死ぬ事はない・・・」と玉木。

「我々も戦います！」

「最後までの残らせて下さい！」バズーとキーンが直訴する。

「居させて下さい！お願いします！」ロクも二人に続く。

「駄目よ！君ら命令を無視する気？明日この子と帰りなさい！足は用意しておく。いいわね？」

「タマさん・・・」

そう言うと、玉木と風我は会議室を出て行った。気の抜けた４人を見つめる陽。

「何かあったんすか？」と陽。

「ほっとけ！」とバズー。

「はいはい・・・」

Ｐ４の指令室。司令席に玉木が座っている。何か疲れた様子だ。
そこにロクが一人でやって来る。玉木は、ロクの表情にいち早く気がついた。
「ロク・・・無理よ！命令は変わらないわ！」
「しかし・・・」
「ここは、あとは我々が守る。いい？」
「タマさん・・・」
「今、もう８００人も居ないけどね・・・何とかする。うふっ！」

玉木はあえてロクの言葉を使って答えた。
「一緒にＰ６へ行きましょう！？」
「無理な作戦ね。今の現状を見なさい。敵の軍服全員分調達出来る？」
「何か手はあるはずです。」
「Ｐ４の私の命令も聞けないの！？」
「ここと、Ｐ５、Ｐ６の戦力があればまだまだポリスは・・・」
「Ｐ４にはＰ４の意地がある・・・ここのみんなそのつもりなの・・・ここまで応援来てくれただけでも感謝する。ただこれからこの国の未来を作るあなたたちまで、死なせたくはないの。分かって・・・」
「タマさん・・・」
「いい・・・生き抜くの・・・分かったロク・・・？」
ロクは玉木の強い意志を感じ、両手に握り拳を作りまともに玉木の顔を見れなかった。

Ｐ４会議室。ロクを除いたＰ６のメンバーがいた。
「途中までバイクか？」バズーは陽に問う。

「はい。郊外までは徒歩、それからＳＣです。北の死神の部隊はだいぶ南下しており手薄です！」
「Ｐ５やＰ６の援軍は来ないと踏んでいるな。タケシらしい考えだな・・・」とキーン。

「で・・・？うちの班長の考えは？」
「あいつは納得出来ないんだろな？撤退は・・・」とキーン。
「ああ、あの豚や牛の缶詰が食えないと思うとちょっと残念だがな・・・」とバズー。
「おいおい、そっちですか？」呆れる陽。
「さあ帰る準備だ！ダブル！？」
「ああ・・・」
陽はダブルが気を落としている様子が気になった。

Ｐ４の薄暗い個室。ベットが一つだけおいて他に何もない。陽はシャワーでも浴びたのかバスタオル１枚を裸に巻いてくつろいでいる。そこにドアをノックする音がする。
「どうぞ！」
すると、ロクが入って来る。ロクは陽の無防備の姿を見て、少し慌てた。
「何か羽織れよ・・・」
「あれ？気に入りませんか？これでもなつみの貧乳よりいいと思いますが？まだ女として見てくれるのは嬉しいですが？」

陽は、わざとバスタオルを下にヅラすと、ロクの目の前に胸の谷間を強調し挑発した。
「お、おい・・・」
ロクが大したリアクションも取らなかったので、陽は髪を梳かしながら、諦めてベットに腰掛けた。

「班長は男女関係なく隊員を見てくれると聞いてましたが？」
「キキか？」
「はい・・・ここに配属する時、キキさんから鉄則を教わりました・・昨日ですか？キキさんが亡くなったの？」
「ああ、その事だがあまりダブルを構うなよ？」
「そんな嫌な女じゃありません！でもみんな・・・よく戦った方ですね？」
「四天王の座が欲しいお前の言葉じゃないな・・・」
「まあ、ちょっとガッカリですがね・・・」
「本音か・・・それで向こうは？」

「こっちはいいですね？毎日シャワーが浴びれる。水が豊富なんですね？向こうはまだ平和なもんですよ・・・こっちから比べたら・・・あ、そうそう・・・なつみから伝言が・・・」
「な、何だ？」なつみの名前に反応するロク。
「種・・・忘れないで下さいね・・・って言ってましたかな？」陽はわざとなつみの真似でロクに報告する。
「ああ、いけねぇ・・・すっかり忘れていた・・・」
「彼女も脳天気ですね？今ではすっかり指令室の人気者ですよ。まるでこっちの現状なんか知らないのに・・・お土産の催促ですか？何を考えてるんだか・・・？」
「そう言うなよ・・・そう言えば、なつみと同い年だったか？」
「ええ、訓練校時代から、ロクさんに通っているのを何度か見てます。一時スパイ説まであった・・・まあ友人にはしたくないタイプですね・・・」
「馬鹿な事言ってないで、明日の作戦を聞かせろ？」
「一人で入るのは楽でしたが・・・5人での脱出か・・・厳しいですね。いっそ一人づつ行動した方が楽ですわ・・・」

陽はようやく、バスタオルの上から制服を着始めた。一瞬、バスタオルが外れ全裸に近い格好になったため、ロクは目線を逸らした。
「な、なんにせよ、夜に動くしかなさそうだな？」慌てるロク。
「班長のプランは？」正面を向く陽。
「出来るだけ敵を引き付けたい・・・これがＰ４の最後の作戦になるだろうからな・・・」
「お得意の中央突破ですか？今度ばかりは無理無理ですよ。しかも５人ですよ・・・素直に脱出だけを考えて下さい。タケシって奴・・・噂通りですからね。二度と同じ手は喰わないでしょうね？」

「北は兵を置いてないって聞いたが？」
「はい・・・まるでＰ５、Ｐ６の援軍はもう来ないと敵は察してますね。」
「昨日のキキとの偵察で、一つ分かった事があるんだ。」
「はあ・・・？」
「帰るなら、ジプシャンに手土産ぐらい置いていかんとな・・・」
「手土産ですか・・・？」

「俺たちがいたという証拠だ・・・」
ロクは陽に不敵に笑ってみせた。

その２０　　草原という名の希望

Ｐ４のある施設。白い壁に覆われ、青いライトに照らされた植物の苗のようなものがたくさん土に生っている。そこにロクと風我が入って来る。

「種？野菜のか？」と風我。

「いいや、野菜じゃない・・・なんて言うか、花とか木って言うか・・・」

「ここの農場プラントじゃ野菜くらいしかないな・・・」

「そんなんならＰ６にもあるんですよ・・・」

「植物好きなのか？」

「好きとかではないけど・・・ここに来たら植物の種があるって聞いたから・・・」

「種？ちょっと待ってろ。」

風我はその施設の端にある、一室に入るとある人物を捜した。

「先生？先生？」

すると７０を超えたような老人が一人、ひょっこり顔を出す。

「聞こえてるぞ！なんだ！」

老人は不機嫌そうに風我に言い返した。

「ここに野菜以外の種ってありましたっけ？」

「風我か？種だと？何に使う・・・？」

すると老人は、部屋の端にいたロクを睨み付ける。

「ど、どうも・・・」

ロクは咄嗟に老人に挨拶をした。

「どうでもいいが、こいつらに照明をあてる事も出来ないのか？最近すぐ電気が止まる！」老人は野菜プラントの件で風我を叱り始める。

「すいません、敵の爆撃が多く、ソーラーパネルばかり狙われてしまいます。」

「壊してないぞ。奴等はパネルを剥がしては、味方のＳＣや船に取り付けてるのじゃろ？」

「ま、まあそうなんですが・・・」

「電気がなければ、水も汲みあがらない。土も掘れないじゃないか？Ｐ４も時間の問題じゃの？」

「はあ・・・」

「種はどうするんじゃ？」と老人。

　すると、風我はロクに助けを求めた。ロクも風我の無言の態度を察して慌てて答えを探そうとする。

「いえ・・・あのう・・・Ｐ６の者なんですが・・・荒野を草原に出来ないかと思って・・・はい・・・」

「・・・草原じゃと・・・あんな荒野に植物なんて生えんよ。何を言っているんだ！？」

「いえ・・・下の土を掘り返したら、野菜だって出来るじゃないですか？花や木だって出来ると思うんですが・・・」

「ああ、確かに出来るよ。土を８００メートルも掘り起こせたらな。」

「８００メートルですか！？」

「そうじゃ！ここの野菜の土８００メートルから掘り起こしたもんだ。それ以上は土さえも汚染されている。出来ても食えんぞ！」

「なら、育つんですね。花や木！？」

「確かに育つ・・・しかし８００メートル以下の土じゃ。Ｐ６の者と言ったな小僧？Ｐ６は植物など生えんよ。」

「なぜです？」
「あそこは核が3発落ちたと聞く・・・放射能の汚染もＰ４近郊より深い所まで来てるはずじゃ・・・」
「核・・・」
「あそこには、旧多賀城の陸上自衛隊駐屯地、苦竹、松島、また塩釜の第二海保基地など戦前では要だった。敵としては厄介な箇所じゃ・・・」
「はあ・・・」
「しかし、なぜあそこの街並みは戦前のままの形をしているのじゃ・・・」
「昔から、街は神が守っていると言われています。」
「そんなもんは迷信じゃ。タマばぁなら何か知っているじゃろ！」
「タマさんが・・・」
「それと、野菜以外の種じゃったな・・・これはどうかな？」
その老兵が取り出したのは、黒い大粒の種だった。

「何の種ですか？」
「さぁな？何かの花かもしれん・・・ここは野菜しか育てないからのう・・・生えないかもしれんぞ・・・それでもいいか？」
「はい。ありがとうございます。」

Ｐ４のある廊下で、風我とロクが歩いている。
「変わったじいさんだろ？ここの昔のコック長でな。今じゃああやって野菜と格闘中だ。いつの間にかみんなに先生って呼ばれるくらいの地位に就いちまった。」
「ああ、確かに・・・しかし、草花の種がまだあるとは思わなかった・・・」
「それ？どうする気だ？」
「さあな？でも一回は見てみたかったんだ・・・花や緑を・・・」

「そうか・・・大陸にはまだあるらしいぞ花や緑・・・」
「大陸って、西の大陸か!?」
「う、噂ではな・・・誰も見たこともないしな。」
「そうか・・・大陸にはまだあるんだ・・・」
「大型の船でも作んないと大陸には渡れねぇぞ。」
「船か・・・P6のレヴィアじゃ無理かな・・・?」
「某国の原子力潜水艦を逆さにした、ポリス最初の水陸両用艦か・・・」
「ああ、その前に船酔い克服しないと・・・」
「ははは、違いない!」

「・・・怖くないか?風我?」ふと我に返るロク。
「ああ?・・・ああ・・・怖いな・・・追い詰められた魚?そんな気分だ・・・」

「俺たちと来ないか?」
「馬鹿を言うな。仲間は見捨てない!」
「・・・と、言うと思った・・・」
「短い間だったけど一緒に戦えて、嬉しかった。年下から学んだのは初めてだからな・・・」
「こっちこそ。気配を消して後ろにまわる・・・とうとう盗めなかった。」
「簡単だ・・・自分が風になる事だ・・・」
「ほんとか?・・・そう簡単に言うよな・・・」
「ふはははは・・・そうか?・・・・・・死ぬなよ?ロク?」
「ああ・・・風雅もな。」

P4指令室。玉木と風我に加わってP6の5人もいる。あるパネルに手書きした地図を見ていた。

「この廃墟ビルですが・・・」
ロクはある箇所を指差していた。
「確かに・・・ここを爆破したら、敵シップは進むのが困難・・・しかし・・・」と風我。

「瓦礫なんて、すぐ片付けられちまうぞ・・・」とキーン
「通る前に爆破するんじゃないです！通る瞬間を爆破します。」
「む、無茶だ。敵もそれくらいは読んでいるぞ！しかも核の爆風ですら倒れなかったビルだ。基礎もそれなりだ。時間、爆薬とスタッフ、テクニックがいる。しかもこの辺は既に敵の守備範囲だ。陸戦で行く事も困難だぞ！」
「風我の言う通りだ。今の我々では、ここに辿り着く事も出来ない。」と玉木。
「司令？無理っすよ！うち班長、一度言ったら引きませんから・・・」

「陽・・・」陽を睨むロク。
「へいへい・・・黙ってます、黙ってます・・・」
「ロク？何か手はあるのか？」とバズー。
「Ｐ４は以前からモグラ部隊の異名を持つ穴掘りの部隊・・・地下から行きましょう。」
「地下？同じ事だ、奴等地下階まで警戒している！」と玉木。
「地下は地下でもこの旧道路沿いの真下・・・地下５０メートル下の地下鉄跡だ・・・」
「地下鉄・・・？」
「はい・・・道路下を爆破してもシップを落とす穴も作れない。ただこの地下鉄の横穴を爆破すればビルの基礎を破壊できます。ビルは自分の重みで傾く！」
「地下５０メートルの下の空洞だぞ！一体何キロの爆薬がいると思ってんだ！？」とバズー。

「ロクよ?その作戦じゃ、恐らく数百キロ、いやトンの単位の爆薬がいる。ここが最後の時に自決用の爆薬合わせたって５００キロも用意出来ないぞ!しかも明日には敵シップはそこを通過するんだろ?準備不足だ!」ロクの作戦を全面否定する玉木。

「なあ?タマさん?バズー?誰が爆薬で地下を爆破するって言ったかな?」

「なに!」玉木は不敵に笑うロクの顔に驚く。

その２１　　死の塔

「なんだ?ここにはガスでも吹き出るのか?」バズーが皮肉たっぷりでロクに問う。
「ああ・・・１０００メートルも掘ればな・・・馬鹿!そんな時間あるかよ!?」一応ボケるロク。
「お前・・・倉庫のアレを使う気じゃ・・・?」と玉木。
「はい・・・貸してくれますか?」
ロクは甘えた顔で、玉木を見つめた。

暗闇の地下道をロク、バズー、キーン、ダブル、陽の５人が早足で移動している。その後ろにはいくつかの懐中電灯の明かりと、数名の兵が大きな荷物を押しているのが分かる。

回想。昨日のＰ４会議室。
「地下に電源はない。どうやって稼動するんだ?」と風我。
「この先に、旧地下鉄の緊急時の非常用電源装置がある!」とロク。

その荷物は、５人の兵士が大きいトロッコに乗せ線路上を押して移動している。高さ2メートル、幅3メートル程の布に包まれた物は、静かに移動中だった。

回想。昨日のＰ４会議室。
「３０年前の発電機械だ。動くはずがないだろ!?」と玉木。
「先日、キキと行って確認している。バッテリーは残っています。

あいつまだ動きますよ。短時間なら・・・」

ロクら先発隊は、天井を見上げると立ち止まった。
「ここだ・・・」とロク。
「さっさっと、上げるわよ!」と先輩たちをせかす陽。
「命令すんな!しかしこのデカ物・・・上がるか・・・?」

回想。昨日のＰ４会議室。
「もし・・・爆破させたとして・・・どうなる・・・?」
「半径８０メートルは・・・骨も残らない・・・」
「正気か・・・?」と玉木。

トロッコが台ごと上に伸び始め、その荷物はトンネル天井近くまで上がった。
「コードお願い!」
荷物と一緒に上がった陽が、上から電流コードの束を投げ捨てた。

回想。昨日のＰ４会議室。
「剥き出しの機械だ・・・稼働中に銃一発でも食らったら・・・?」
心配する風我。
「爆発させるんです!船に積む時のように、周りを鋼鉄の箱に囲ったら意味ないでしょ?」
「危険過ぎる・・・防音壁も使わずそのままだろ?・・・稼動時の音でばれてしまうだろ?」
「その前に、爆破させますよ・・・」

荷物の周りにあった布が取り払われる。　現れたのは剥き出しになった、サンドシップ用のエアーブースターだった。

回想。昨日のＰ４会議室。
「トンネル内の爆発は想定以上だ。下手したらトンネルごとお前らも潰されるぞ・・・」と玉木。
「覚悟の上です！」とロク。
「例えトンネルが残ったとして、そこを吹き抜ける爆風は計りしれない・・・長距離から操作しなければ・・・」と風我。

「聞いてなかったけど・・・誰が起動ボタン押すの？」天井部分からロープで降りてきた陽。
「リモートで遠隔でするんだよな？リモートで爆破・・・そうだなロク？」と自信満々のダブル。
「あれ？そんな便利な道具・・・うちにあったけ？」とぼけるロク。
「ああっ！？じゃあどうすんだよ？」慌て始めるバズー。
「俺が言い出したんだ。俺が押すさ！」とロク。
「起動はそれでいいですが・・・爆破は・・・？」

陽は心配そうに４人に問う。
「俺が銃で撃つ！」
「す、凄く・・・シンプル・・・」唖然とする陽。
「まあ、何とかするよ！」満面の笑顔で決めるロク。
「出た出た・・・」とダブル。
唖然とするロク以外の４人。

ジプシャン軍大型サンドシップ“スコーピオン”艦橋の司令官席に横柄に座るツヨシがいた。
「後５００メートルも進めば、敵の本部真上のドームを砲撃出来る・・・」
その横にいた参謀の両角がツヨシに近寄った。
「しかし、このシップを通れるだけの道を、短時間でここまでよく整備しましたな？」
「そこはさすが兄貴と褒めちぎったわ！」自分の腕をポンポンと叩くツヨシ。
「さすがです。ツヨシ様・・・」一礼する両角。

「姉貴の口約束だと、ここは我が基地となる場所・・・出来れば破壊せず使えるものは使いたい。」
「さて・・・どうしたものか・・・？」
「噂では、ここの指揮は女らしい・・・和平を持ち掛け、逃がしてやりたいな。」
「タケシ様が聞いたら、そのお言葉さぞ驚くでしょうね・・・？」
「用は戦わずして勝てばいいのさ・・・」

トンネル内。
「あと１０分で、敵シップがこの真上を通ると地上班から・・・」
「さぁーて・・・行きますか？」
「本当に一人で大丈夫か？」
「走って脱出するんじゃない。バイクだから大丈夫だよ。」
「よく、こんな直線の所を見つけてましたね？」
「キキの提案なんだ・・・エアーブースターもな！」

「そうか・・・ならその仕事俺がする！」
「おいおい」

「いや・・・バイクと狙撃なら俺の仕事だ。ロクのバイクの運転も心配だしな?昔から転んでるのしか見たことないぞ!そうだったなバズー?」
「確かにロクよりキーンだろうな・・・ロク?こいつの爆風は想像以上だ!狙撃もキーンが上だ!」とバズー。
「しかし・・・」
「キキの最後の仕事だ!ここは俺が・・・」諦めないダブル。

「ほんと・・・この４人の友情には敵わんなぁ・・・」４人の会話を聞いて呆れる陽。
「お前は黙ってろ!!」と４人。
「へいへい・・・」
「ここは俺に任せろ。なあロク?」とキーン。
「キーン・・・」
「さて・・・作戦も決まった事ですし、おいらは先に逃げますよ・・・」と陽。
「・・・ったく、ロク班は逃げ足だけは早いな?」とバズー。
「ふふふ、違いない・・・」とキーン。

スコーピオ艦橋。
「間もなく、死の塔の脇を通過!」
艦橋内に緊張感が走る。

「死の塔か・・・」窓際に立っているツヨシ!
「核の爆風も倒れなかった４０階の建物・・・老朽化してはいますが、心配要りません。全軍を持ってこのビルの警戒に当たらせています。」両角も窓際に立つ。
「意外と何もなかったな・・・私がＰ４の将なら、このビルを利用していた・・・倒されていたなら、この船の進軍は相当遅れていた

はずだ・・・」
「既にＰ４にそのような反撃する力はないかと・・・最近はもっぱらゲリラでの戦い・・・」
「追い込まれたネズミ・・・なんやらを噛むと言うし・・・」

「地下の階まで警戒を当たらせてます。心配ないかと・・・」
「この下に、旧地下鉄があったはずだ？」
「５０メートルの深さです。数トンの爆薬でも影響はありません。しかも入口はどこもポリスによって封鎖されてます。不可能かと思われます。」
「数名でいい。誰か兵を当たらせろ！」
「ははっ・・・しかし・・・」
「念には念をだ・・・このまま向こうが黙るはずがない・・・」

その２２　風使い

地下鉄トンネル内。キーンたちが準備を進める中、風我らＰ４の手勢が慌てた様子で彼らに合流する。
「ロク！悪い知らせだ！地上部隊から連絡。反対口のトンネルから敵兵が来る！」と風我。
「どうする？ロク？」とキーン。
「人数は？」
「１０名程とバイクだ・・・始末するか？トンネル内では銃撃は不利だぜ？」風我は５人を見つめた。

「敵シップ到着までもう時間がない・・・やばいな？」
「時間前に気づかれたら作戦はパーだ！」とバズー。
「バイクか？分が悪いな・・・」
「反対側は、俺らが先頭に立つ・・・いいな？」
「風我・・・」

ロクは風我の目を見つめた。
「ここは俺らの居場所だ。しかも今日帰るお前らに、無茶はさせられない！」
「駄目だ。危険過ぎる。敵が来る前にこいつを爆破しよう！最悪、敵の足を止めるだけでいいんだ！」
「ロク！後はこっちでやる！お前らはもう逃げるんだ！反対側に敵を招いたら逃げれないぞ！敵の足を止めても所詮時間の問題だ。多少のダメージを負わせたい・・・」
「しかし・・・」
「お前の言葉じゃないが・・・なんとかする！」
「・・・わかった！爆破班は続行だ・・・急げ！」
ロクは風我の言葉に、この作戦への決意を感じ取っていた。

同トンネル内。風我のＰ４隊はトンネルの中央分離体の柱に身を隠し敵を待ち伏せしていた。
「いいか?火器は使うな!トンネルが崩れたら逃げ道が無くなるって事だぞ!」風我が部下に指示を飛ばす。

そこに遠くからバイクの爆音が聞こえてくる。風我は頭に付けたインカムを口前にした。
「地上班?敵シップ位置は?」
『あと３５０メートルで塔の横です!』
「あと2分ってとこか?・・・キーン!ブースター始動!」
『了解!』無線のキーン。

キーンが地下鉄の予備電源のスイッチをオンにした。
すると風我隊の後方１００メートルにあった、ブースターが音を立て起動し始める。その音は低音から高音へと変化していく。

「よし・・・行くぞ・・・」

風我はそう呟くと、中央分離帯より機関銃を迫出しバイク音が聞こえる方へ銃を乱射した。他の兵士も風我に続く。2、3台のバイクが倒れライダーたちはトンネル内に投げ出された。

スコーピオ艦橋。通信兵の一人がツヨシと両角参謀に叫んだ。
「トンネル内で銃撃!敵がいます!」
ツヨシは急に立ち上がり、他の兵らに指示を飛ばす。
「なに!直ちに艦を直ちに止めろ!急げ!」

「やはり居ましたな・・・」と両角。
「こうでないと面白くない・・・ビル内の兵を全て地下に送れ！」
ツヨシの命令でスコーピオは塔の前で停止した。

風我隊はトンネル内で、激しい銃撃戦となっていた。しかしジプシャン軍は後続の兵の導入で勢いを増す。８人いた風我隊も既に４人を失っていた。そんな中、風我のインカムに無線が入った。
『こちら地上隊！敵の船が予定ポイント前で停止しました！』
「くそっ・・・感ずかれたか・・・こうなったら・・・ロク！？聞こえるか？」
『どうした！？』と無線のロク。
「敵シップは塔の前で停止した・・・こうなったらここでブースターを爆破する！」

『バカな・・・そんな事をしたら・・・』
「覚悟の上だ・・・みんな退避したな？」
『よせ！風我！』
「行くも地獄・・・戻るも地獄なら・・・俺は行く方を選ぶ・・・」
『風我ぁー！』

風我は１００メートル先のエアーブースターに拳銃で狙いを定める。しかしその時、風我の横に敵の手榴弾が投げ込まれた。手榴弾はトンネル内で爆発を起こし、残ったＰ４の兵士たちの息の根を止めてしまった。

ロクはトンネル内を走りながらインカムに向かって叫んだ。
「おい！風我！？風我！？・・・くそっ！」

ロクは立ち止まると、もと来た道を戻ろうとする。陽やバズーに引き戻されてしまう。　バイクに乗っていたキーンもロクたちに合流した。
「ロク行くな！俺が戻って爆破する！」とキーン。
「キーン！」
「お前らは下がってろ！」

ジプシャンの兵らが恐る恐る風我隊に近寄る。風我を始め誰一人動かない。それを確認すると一人の兵が無線を持ちしゃべり始めた。
「トンネル内の敵は殲滅しました。」
『了解。続けてその先を検索しろ！』
「了解！しかし何の音だ？この音・・・」

スコーピオ艦橋。
「ツヨシ様！トンネル内の敵兵殲滅した模様です！」
「よし、船を出せ。」とツヨシ。
再び動き出すスコーピオ。

トンネル内。横たわっていた風我が再び目を開け始めた。風我の目にはエアーブースターに近づくジプシャン兵の後ろ姿が映っていた。風我はインカムを手にし、静かに語り始めた。
「ロ、ロク・・・き、聞こえるか・・・？」
『生きてたか？風我！？』
「ば、爆破するぞ・・・」
『何！？ま、待て！・・・キーン下がれ！』
『り、了解！』とキーン。
「ロク・・・か、風になれよ・・・」
『風・・・？』

すると風我は最後の力を振絞って、拳銃をエアーブースターに向けた。
「あ、当たれ・・・」
風我の放った銃弾が、エアーブースターに命中する。トンネル内は今まで聞いた事がないほどの高音と衝撃波が轟く。
ロク側のトンネルにも凄まじい空気の流動と爆音が響いていた。身を伏せる5人。
スコーピオ艦橋。ツヨシは艦橋内で微かな微震と爆音を感じ取った。
「何だ!?この音は!?」
すると、進行方向左にあった死の塔と呼ばれるビルがゆっくりと傾いて来た。
「ぜ、全速だ!船に当たるぞ!」ブリッジの誰かが叫んだ。
「バ、バカな・・・」ツヨシは唖然となる。
ビルは艦橋の2倍程の高さだったが、船の左側、戦艦部分の艦橋部分に激突すると、船の艦橋部分の半分はへし折れてしまった。ビルは傾くものの、約15度の角度程傾いただけで停止してしまった。ビル倒壊までには至らなかったのだ。
タケシのいるP4方面指令室。タケシが中央の指令室に座り、8名程の兵士が動きまわっていた。そこに無線が入る。

「スコーピオにビルが激突！航行を停止しました！」と嶋。
「何だと！」
「死の塔です。戦艦部分の艦橋に激突との事。艦橋は上部が折れたとの事です。負傷者多数！」
「あそこには１００名以上の兵を警戒させていたはず・・・それでツヨシは？」

「はい・・・空母部分の艦橋にいたらしく無事との事です。」
「さすがに悪運強いな・・・しかしまだＰ４は抵抗するのか・・・？こちらからは死神の部隊を送ると伝えろ！」
「ははっ！」
「ふん・・・まだＰ４にそんな力が残っていたとは・・・？」

ロクら5人はある瓦礫のビルの屋上から、この船の様子を見ていた。街は夕方になり長い影を帯びてる。
「倒れなかったな・・・」とバズー。
「まあ、あれだけやれば上出来でしょ？そうだなロク？」とキーン。
「ああ・・・」ロクは得意そうに鼻の下を指で擦って見せた。
「クソッー！倒れれば船は真っ二つだったのによ・・・」悔しいそうなダブル。
「さあ、皆さま。帰りますよ？」陽は一人リュックを背負いだす。
「あばよキキ・・・」ダブルは軽く敬礼する。

「風になれ・・・か？」ロクは最後までその風景を見ていた。

Ｐ４が陥落したのは俺たちがＰ６に帰って3ヶ月程経ってからだった。最後はドームの天井を自ら爆破し、多数のジプシャン兵を地下に引きずり込んだという。

玉木司令の消息は不明だった。事実上のＰ４の玉砕と言えよう。
現在Ｐ４はジプシャンの南方方面の主力基地として使われている。
あの死の塔も傾いたままで、今も倒壊してないそうだ。

俺はいつか玉木司令がひょっこりＰ６にやって来ると信じていた・・・

「ロクゥゥ・・・」
血だらけの玉木が瓦礫の中から這いつくばって来る。玉木は血だらけでロクの足首を掴んだ。

その２３　　なつみの墓

ロクはベットから飛び起きた。ロク自身嫌な汗をかいているのに気づき、手で額の汗を拭う。

現在。Ｐ６独房。

ロクはまた悪夢を見ていた。この独房に入ってから毎晩のように昔の仲間たちの夢を見ていたのだ。

すると、独房のドアがノックもされず突然開いた、そこには高田女医が立っていた。

「元気？ロク？」笑顔の高田。

「ええ・・・まあ・・・」

「また汗かいてる。また悪い夢見たんだ？」

「ええ・・・」汗を拭うロク。

「あなたを地下６の方へ移動するわよ・・・」

「えっ！？」

高田はそう言うと、ロクの毛布や、飲み薬、点滴の用具を部屋の外にいたスタッフと運び出している。ロクは訳も分からず部屋に立ちすくんだ。

「一般って・・・先生？」

「死龍が目覚めたの・・・ロクに責任はない。逃亡は私一人の責任って言ったらしいわ。まあ誰も信じなかった様子だけどね・・・」

「死龍が・・・？」ロクは驚く反面喜んでいた。

「彼女に感謝しなさいよ！一般って言っても、もうあなたは完治に近いから、ちょくちょく通院はしてちょうだい。いい？」

「は、はい・・・」

「みんな外にいるわよ。」

「えっ？」

ロクは片足を引き摺りながら、恐る恐る独房を出ると、ダブルとバズーが待っていた。

「よう！少し痩せたか？」最初に口を開いたのはバズーだった。

「一時は銃殺じゃないかって噂も出てたんだぜ・・・」とダブル。

「よせよ・・・ん？キーンは？」ロクはキーンが居ないのに気づく。

「あいつなら、親父さんとＰ７だ・・・」

「もう復帰してんのか？」

「偽足がどうのこうのって、言ってたけどな。今朝Ｐ７へ向かったぜ。船の勉強をするって言ってたな。」

「そうか・・・」

「司令が、取り合えずここを出たら、指令室に上がれって。」

「おいおい、バズーも気が効かねぇな・・・ロクはまず行くところがあるだろ？なあロク？」とダブル。

「ああ・・・そうだな・・・」

Ｐ６の南ブロックの塀の側、ジプシーたちの共同墓地がある。すぐ側には高い風力発電機用の風車が音を立て回転していた。ロクはある墓の前にいた。日は西に傾いていた。

「ジプシーの墓にしてはよく出来てるじゃないか・・・ポリスしては奮発したな？」

墓はどこぞやのコンクリートの一部で、表面には“Ｎａｔｕｍｉ Ｋｕｗａｔａ”の文字が刻まれていた。

「遅くなったな・・・ごめん・・・」

ロクは墓に手を合わせていると、後ろから同じオペの我妻がやって来る。

「我妻・・・？」
「ロクさんが退院されたと聞いて・・・」
「ああ、まずここに来ないとな・・・」
「私も勤務があって、ここ来るの初めてなんです。」
「そうか・・・バズーたちも立ち会ってないって言ってたな・・・」
「密葬だったようです。立ち会ったのも、司令と親父さんら数人だったらしく・・・」
「そうか・・・それも変な話だな？シンたちは軍葬で盛大にして送ったんだろ？なぜ桑田だけが・・・」
「どこぞやの参謀のジプシー差別・・・ってとこですかね？」
「ふっ・・・だろうな？」ロクは苦笑いする。

「ロクさん？」
「ん？」
「あの・・・桑田の件で、お話したい事があります！」
「・・・？」

ロクがよく来る南ブロックの塀の上。我妻とロクが階段で上がろうとしている。ロクは杖を付きながら必死に階段を上がっている。
「ああ・・・腹を撃たれてから、なぜか右足に来てしまってな・・・階段キツいな・・・」
「大丈夫ですか？」
「そうか・・・お前だったか・・・？」
「はい・・・桑田はロクさんの事が好きなのは分かっていたんですが・・・すいません。」
「おいおい、謝んなよ。俺らプロジェクトソルジャーは恋愛禁止だろ？いいんだよ俺の事は気にしなくても・・・」
「ロクさんは？桑田の事を・・・？」
「死んでから分かった・・・俺はなつみの事を、好きだったと思う・

・・」
「ロクさん・・・」
二人は海を見ながら暫く黙ってしまった。
「あんまり近くにいて気づいてやれなかったんだよな・・・あいつの気持ち・・・」
「ロクさん・・・俺は・・・」
「俺が早く戦場で死んじまってたら、なつみも死なずに済んだと・・・今頃普通のジプシーの娘として幸せになれたんじゃないかって・・・お前みたいになつみを分かってやれる男が出来て・・・結婚して子供を産んで・・・俺が指令室なんかに勤務させたから・・・だから最近後悔ばかりしている。」
「そんな事ないと思います。あいつは、ロクさん側にいたから幸せだったと思います。死んでいいなんて言わないで下さい！」
「うれしいね・・・そんな事考えもしなかったよ・・・」
「いつも隣にいたんです・・・ロクさんの無線を受けるあいつの笑顔が俺の救いでしたから・・・」
「お前・・・」
そう言うと我妻はロクの前で泣き出してしまった。ロクも涙を堪え、空を見上げる。
ロクはＳＣの整備室に来ていた。高橋と見慣れない若い女性のメカニックが二人でロクのカストリーを整備している。すると高橋はロクに気づき、作業途中でロクに近寄って来た。ロクも杖を付きながら高橋に近寄る。
「よお！くたばりぞこない！」
「はあ・・・」
「なんだ元気ねぇな！留守の間、ちゃんとジャガーちゃんは整備し

てたぞ！」
「ありがとうございます！」
「お、お前に感謝されると、さ、寒気がする・・・ああ、紹介しよう。新しいメカニックのスミだ！」
「スミです。先日Ｐ７から配置になりました。ＳＣは専門外で、主に砲座が担当で・・・」
「よろしく。」
「それと、お前とチビのオペも変わったぞ。もうそのチビがメロメロらしいがな。」
「聞いてますよ。ん・・・ガトリングバルカン変えましたか？」
ロクは自分のジャガーのバルカン部分が変わっているのに気づいた。
「はい！これ説明書です。」
すると角は、１枚のフロッピーディスクをロクに手渡した。
「なんだこれ？」
「読んでおいて下さい。」
するとロクは不機嫌になり角を睨んだ。
「俺のメカニックなら覚えておいてくれ。俺は機械音痴だ！」
「え！？」
角がびっくりして高橋の顔を見直す。すると高橋は無言で頷いていた。

「コンピューターも使えないし、それと俺は漢字は読めない！説明書は全部フリガナを入れていてくれ！」
「四天王と聞いて、浮かれていた私が馬鹿でした・・・」
「おいおい・・・それ、どう言う意味かな・・・？」
「なら・・・口頭で・・・今度のバルカンには自動追尾装置が取り付けています。」
「なんだそれ？」
「簡単なレーダーと思ってください。これが味方と敵を判別して、

自動ロックオンを示してくれます。」
「便利だね・・・俺は何をするんだ?ボタン押すだけか?」
「元々、このバルカン・・・助手の仕事なんですから!運転しながら撃ちまくってるのロクさんとダブルさんくらいですよ!」
「そりゃどうも・・・」
「この装置のおかげでバッテリーは更に消耗しますんで、宜しくです。」
「ふーん・・・これがねぇ〜」ロクはバルカンを撫でてみる。

なにか納得してないロクに高橋が追い討ちを掛けた。
「大丈夫だ!スミ!こいついつもテストなしでもやっちゃうタイプだから!」
「それは助かります・・・ついでにテスト走行もお願いしますね・・・」

そう言うと角は、隣の整備室に消えていった。
「船専門だったらしい。ここの勤務は不服の様子だ・・・最近の若いのは扱いにくいよ・・・」
「なるほど・・・」

黒豹隊の整備室。山口をはじめ、アキラの顔も見れる。各々自分の車を整備していた時だった。ロクが杖を付きながら入って来る。
「ロクさん!い、いや・・・隊長!」
「みんな元気そうだな?」
「なんか遠くへでも行ってたセリフっすねぇ・・・」とアキラ。
「遠くか・・・そうだな?・・・シンを見送ってくれたそうだな?ありがとう。式にも出れず・・・」ロクは深々頭を下げた。

「いえ、いいんです・・・それより、黒豹復帰でいいんですか?新

しい隊長ってのが来ましてね・・・これがどうも・・・」
「新しい隊長?あらら、とうとう俺の居場所が無くなったか?」
「年下で生意気で、しかも女っすよ!」
「女?」驚くロク。
「聞いてなんですか?何でも昔、ロク班で隊長を救ったんだなんて
偉そうに言ってましたがね・・・嘘ですよね?」

「誰が偉そうですって!?」突然後ろの扉が開いた。

その２４　新隊長・陽

その声の方にロクは驚き振り向いた。そこには長い黒髪の少女が立ちすくんでいた。ロクはすぐ誰か分かった。

「陽か・・・？」

陽は１２歳の頃の風貌はなく、自慢の茶髪も髪型も変えていた。体系も大人の女性になっていたのだ。

「隊長なら隊長らしく、部下に拳銃の訓練ぐらいさせて下さい。正直、偵察隊だからって隊の訓練を怠っていたんじゃないですか？」

ロクは、突然の陽の言葉に面を食らった。

「Ｐ７に居たと聞いてたが・・・気配を消して後ろに回り込む・・・風我の技だな？いつの間に・・・」

「はい・・・海兵を育てる役でです。親父さんが来て晴れてこっちです。まさか悪名高い黒豹とは・・・風我さんの技？最後の無線でなんか気づきましたよ・・・」

「なんだ？黒豹が嫌みたいだな？」

「てっきり、レヴィアの配置かと喜んでいたんですが・・・」

「お前が、ここの新隊長なら教えてくれ？俺はどこの配置だ？」

「噂じゃＰ５とか・・・？死龍さんがこっちにいるなら向こうはあの“馬鹿”ボムだけでしょ？ロクさんが向こうだと、こっちの四天王の席が一つ空きますね・・・？という事は俺もとうとう・・・うんうん・・・」

陽はニヤニヤしながらロクの顔を見つめる。

「相変わらずだな・・・？」

「そうですか？自分では随分大人になったと思ってますけど・・・ああ、あの夜、私を抱かなかったの後悔してたら遅いですよ？ちなみにまだ処女ですけど・・・うふっ！」

陽のその言葉に他の黒豹隊の隊員らは驚いた。

「ど、どういう事ですか？隊長？」

「確かに陽はいい女になったな？残念ながら俺は貧乳好きでな・・・」

「なんだよ！なつみが亡くなって少しは悲しんでると思ったら・・・さすがポリス最強の四天王っすねぇー？励まして損した・・・」

陽は腕を組んで少し怒ったフリをした。

「励ましたつもりか！？」

「しかし、Ｐ４以来の難敵、あのタケシの首を取るなんて、どう褒めましょうか？Ｐ７では噂になってますよ。ロクは覚醒したんじゃないかって？」

「おいおい・・・人をミュウみたいに言うな！」

「まあ、私の正式配置は明後日からですから・・・それまでこのボンクラどもを再教育してくださいよ！」

「お前なぁー。来て早々ボンクラ扱いか！？」

「副隊長・・・私は年下じゃないわ！同い年ね？それと女だからってナメないでよね！明後日からはみっちりしごくわよ！」

「わかったわかった！明後日までにはなんとかする！」

「ロクさんのなんとかするは、当てにしてません・・・キキさんとホーリーさんから教えて頂きました！ほんと・・・頼みますよ！」

そう言うと陽は、再び格納庫を出て行った。

「先が思いやられます・・・」

「そう言うな・・・次期四天王だ・・・」

P６地下６階ポリス専用医務室。聖のベット横にはダブルの姿があった。聖の顔は包帯がだいぶ取れ、傷口数箇所に処置がされているだけであった。しかし聖の顔色が前よりも悪いように見える。
「ヒデが・・・？」
「ああ、一週間以内に執行される・・・」
「いるんだ・・・あいつもここに？」
「この上の階にいる。」
「会えないかな・・・？」
「どうかな・・・？会ってどうするんだ？」
「一言いってやりたいだけ・・・」
「面会って事で上に聞いてみるよ。」
「お願い・・・」
「ああ・・・」

P６指令室。弘士と曽根が雛壇上で打ち合わせをしている。そこに片足を引き摺ったロクが入ってくる。
「失礼します！」

ロクの声に何人かが立ち上がりロクを向かえた。何人かは見慣れない顔もいる。
「ロクさん！」柳沢が声を掛けた。
すると司令や曽根参謀もロクに気づき、雛壇を降りてきた。
「くたばらなかったか？」
「昔から悪運だけは強いですから・・・」
「用件だけ言うぞ・・・」

弘士は少し怒った口調で、ロクに話しかけた。直立するロク。
「ロクをレヴィア第一艦隊司令に命ずる！」

「はっ！・・・あの・・・Ｐ５の話は・・・？」

ロクは恐る恐る司令の顔を見上げた。

「なんだ？Ｐ５がいいか？」

「死龍に感謝しろよ・・・」

曽根はなお不服そうだったが、司令の手前少し我慢している様子だった。

「キーンとどう違うんですか？」

「ああ、あいつは第二艦隊・・・お前は１番から５番だ。リハビリも途中で、もう奴はＰ７で勉強しているぞ！」

「そうですか・・・」

「正式な辞令は明後日からだ・・・それまでに陽に黒豹を引き継ぐんだ・・・いいな？」

「はあ・・・」

Ｐ６南ブロック、ジプシー墓地。外は月明かりもなく、たまに通り過ぎる警戒用のライトが墓場近くを照らす程度だった。ロクは桑田の墓の前にしゃがんでいた。

「なつみ・・・俺がお前の夢を引き継ぐ・・・」

するとロクは立ち上がり、歩き始めた。

ロクがジャガーに乗っている。シャフトは上に上がり、ロクはその間、バルカンの調整をしている。

「うーん・・・なんかフロントガラスに文字がたくさん出るようになったな・・・」

ロクが機器類に難色していると、フロントガラスに見慣れない若

い女性が映る。
「こちら、指令室！黒豹聞こえますか？」
「はいはい。おっ！？新顔だな？」
「は、はい・・・よ、宜しくお願い致します。皆からはルナと呼ばれてます・・・ルナッチでいいですよ！」
「ルナッチねぇ・・・情報は迅速に・・・黒豹には情報第一。いい？ルナッチ？・・・って言っても俺のここのポジションも明日までだが・・・」
「はあ・・・努力します・・・それで、偵察はどちらに？」
「試運転も兼ねる・・・まあ夜だし・・・遠出はしないよ。」
「了解です！」
シャフトが止まり扉が開く。
「さぁーて・・・行きますか？」

街は既に夜になっていた。ジャガーは夜の街を走り出す。すると山口やアキラのＳＣがロクのジャガーに合流する。ロクはバックミラーでライトの数を確認する。腑に落ちない様子で、無線を飛ばした。フロントガラスには山口の姿が映し出される。

『どうしましたか？隊長？』
「いや・・・1台多くないか？」ロクはバックミラーで車のライトの数を数えていた。
『え？・・・そうですね？誰の車だ？？』

すると山口に変わって映し出されたのは陽の姿だった。
『私だけ留守番ですか？ズルくねぇ？』
「お、お前ＳＣあったの？」
『ただのＳＣじゃないですよ・・・ここの倉庫に眠っていた掘り出

しもんですよ！親睦会？お別れ会？私も混ぜて下さい？』

すると再び山口が、慌てた様子で無線に割り込んでくる。

『た、隊長！？最後尾見てください！』

「何だ！？暗くて見えねぇぞ！」

隊は北ブロックゲート前に到着すると、先頭のロクが車から降りてくる。そして逆光強い最後尾の車に目を懲らした。目が慣れロクの目に入って来たのは、車種こそ違えどジャガーと同じ斑カラーの見慣れない車だった。運転手は陽。いつの間にか山口も車から降りていた。

「ロ、ロクカラー・・・？」驚く山口。

「おいおい・・・」

呆れる黒豹隊の男子たちを尻目に、陽も車から降りてきた。

「ロータス・エスプリ・・・噂じゃ、海も潜れるタイプもあるとか・・・」

「なんかのスパイ映画に出てた奴じゃないですか・・・？？」

「海？ないない・・・」と手を横に振るロク。

「外面はエスプリですが、エンジン等は私なりにカスタマイズしました！」

「なんでこの色なんだ・・・？」とロク。

ボンネットのライト部分も赤というジャガーと同じカラーを見てロクは少し呆れていた。

「2台で走ったら、目立ちません？」

「あのな・・・」

ロクは悪意のない陽の顔を見て、笑いながら再びジャガーに乗り込んだ。

「ルナッチ？黒豹出るぞ！北ゲートオープン！」
『了解！』とルナ

暗闇の荒野を偵察隊の１０台が併走して走っている。ロクのジャガーと陽のエスプリだけが、暗い荒野に赤く光っている。そこにロクのジャガーに無線が入る。
『どんだけ走るんですか？テスト運転の限度を超えてますよ？』
「まだいいだろー」
『この辺・・・敵の地雷網のはず・・・やばくないですか？』
「このちょっと先に、ジプシャンの基地があったよな？そこまでだよ・・・」
『お、女川基地ですか？確かに戦力的には小さい所ですが・・・こっちは大した武器なんか積んでないですよ！』
「なら、全員帰れ！俺一人で行くぞ！」

『相変わらずの、単独行動・・・ったく、男って生き物は・・・？』
陽が無線に割り込むと一人嘆く。

すると突然、ジャガーのフロントガラスに“警報”を意味する文字が示される。

その25　　ロクの異変

「ん?な、なんだよ・・・警報?各車スピード落とせ!」

ロクの号令で各車はスピードを落とし、警戒態勢を取った。すると今度はジャガーのフロントガラスには“ロックオン”の文字が点滅する。

「勝手に捕らえるなよ。気に入らねぇな!機械の分際で生意気なんだよ・・・撃てばいいのね?」

ロクはガトリングバルカンのレバーを押し当て、グリップを握ると前方の暗闇の荒野にバルカンを発射した。暗い荒野に数十本のオレンジの線が伸び、消えていく。

次の瞬間、暗い荒野に昼間の太陽ような鮮光が大地を覆う。

「おっ!?」

『うおっ!』驚く山口。

光は炎となり、巨大な火柱になりロク隊の前を立ち塞がった。ロク隊は徐行をして速度を落としていたが、回避することが出来ず、その炎の壁の中を突破する。ロク隊の全車は、炎の中から出てきた。

その炎の勢いは、窓を開けていた山口の衣服までにも引火し、山口は運転しながら慌てて衣服の火を消す。

「ひっ!ヒッ!火ぃー!」驚く山口。

『きっと、火って言葉はこんな時に生まれたんだわ・・・』冷静な陽。

『ぜってぇーちげぇー!』呆れるアキラ。

ロクはその中、ガトリングバルカンの追尾装置を一人感心してい

た。
「お前・・・凄くいい子・・・」

ロク班は、ジプシャンの最東の基地、女川基地まで足を伸ばしていた。既に夜が開け、ロクを中心に小高い丘で女川基地を観察している。数人は軽食を取りながらくつろぐ者までいる。
「バッテリーはどうだ?」
「夜が明けたんで心配はありませんが・・・」と不満な様子の陽。
「で?どうするんですか?向こうも俺らがここに居るのを感づいてますよ。」山口は双眼鏡で基地を見下ろしてる。
「中央突破かな・・・?」
「出た出た・・・」いつもの山口。
「武装もしてないんですよ!?どうしたいんですか?なんの意味のない弱小の敵基地ですよ?」と陽は不満気味。

ロクのいい加減な発言に、陽は切れてみせた。陽は、この言葉がロクのハッタリと思い込んでいた。
「なら、お前ら全員ここで待機だ!」
「へっ?た、待機って・・・」と山口。
「相変わらずの単独行動・・・ちっとも変わってねぇーや!」呆れる陽。
「いいから、手出すなよ!」
そう言うとロクはジャガーに乗り込み、一人丘を駆け下りて行く。

ジプシャンの女川基地もロクの行動にいち早く気づき、SCを迎撃で出してきた。
「15台・・・こんな小さな基地にしては多い方だな・・・なら遠慮なく・・・」

ロクのジャガーは左右に展開するジプシャンのＳＣ隊の中央をあえて選び接近する。すると四方から銃弾を食らうジャガー。
「さて・・・行きますよ・・・」
ロクはガトリングバルカンを迫り出すと、銃弾を発射しようとした。しかし、銃弾は出るもののなぜか砲座が回転しない。
「スミさん・・・回らんよ!?整備不足・・・ならこっちが・・・」
ロクは諦めると、ギアを一つ上げアクセルを踏み込み、ハンドルを思いっきり右に切った。車にスピンがかかり、そのままバルカンを発射させると、ジプシャンのＳＣ隊はの半分が大破する。

丘からその様子を見ている、山口と陽たち。
「あれ・・・ストラトスのタケシの技・・・」驚く山口。
「やる～！」陽も声をあげる。

ロクは残りのジプシャン軍のＳＣ隊を追い詰めていた。するとジャガーのフロントバンパーから2本の鋭利な長い金属棒が出てくる。ロクは1台のＳＣに狙いを定めると、その横腹にその突起ごと体当たりを掛け串刺し状態にする。体当たりを掛けられた敵兵のドライバーも、運転席から拳銃で必死の抵抗を見せるが、ジャガーの装甲とパワーになす術もなく横に引きずられていく。スピードを増すジャガー。するとその車は、女川基地のあるゲートまで押し戻されると、ジャガーに急ブレーキを掛けられ、そのゲートに吹き飛ばされてしまう。

「横に引きずったままＳＣを・・・？こ、これがジャガーカストリーのパワーなの・・・？」驚く陽。

女川基地のゲートはジャガーの押し込んだＳＣの重さで、左右に

吹き飛んでしまった。

「柔な作りのゲートだな?車一台の重みだけで!?」
ロクのジャガーは躊躇なく敵基地に侵入する。中は簡単な作りの2階建て小屋がいくつかと、電波塔を兼ねた見張り台が2塔程で、以前攻撃した浜田基地よりも劣っていた。ジャガーの突然の侵入に驚いたのはジプシャンの方だった。

「敵だぁー!!敵が侵入したぁぁー!」
見張り台の兵士が叫ぶと、建物からは20名程の兵士たちが血相を変えて出てきた。

ロクは、ポンチョにハットを被りジャガーから出てくる。
「さぁーて・・・行きますか・・・」
ロクは機銃を構えていた、見張り台の敵兵を撃ち抜くと、兵は見張り台から落ちてしまった。

ロクはなつみとの拳銃訓練を思い出していた。
「肌で感じろ・・・」と拳銃を回すロク。
「はあ・・・」困惑するなつみ。
「目で見るから遅いんだよ・・・わかるか?」
「さっぱり・・・」

「うふふ・・・」
ロクは目を瞑り、片足を引き摺りながら敵基地内を歩き出した。

それを丘の上から見ていた陽たちは驚いた。
「あらら・・・歩き始めましたよ・・・」と山口。
「もう！どうしたいんだか・・・？」と陽。

風が強くて砂埃で目を開けれないのか、それともわざと瞑っているのか分からない。しかしロクは建物から出てくる敵兵を次々と撃ち抜いていく。

「あれ？・・・確実に人を撃ってますよね？」陽に問う山口。
「う、うん・・・」
山口と陽は初めて見るロクの銃裁きを見て驚いていた。

ロクは時折拳銃を変え、左右の建物から出てくる兵を同時に撃ち殺していた。ロクは一度も目を開ける事もなく淡々とその作業を続けていた。

室内の射撃場で訓練をするロクとなつみ。
「頭で考えるから、人より遅くなる・・・自然の風も、影も、匂いも・・・全部味方にするんだ・・・」
「あー・・・自分馬鹿だからそれ以上分かんないですよ・・・」
「うん・・・ちょっとお前には早いかな・・・・？」
「うんって！もう！」怒るなつみ。
「うははは！」

ロクは歩くのを止めていた。拳銃は左右に構えたまま動く事はなかった。すると強風のせいか、右の建物の2階部分のドアが音を立てて開く。ロクは右手の拳銃をそのドアに向けるが、撃つ事はなかった。やがて人の気配を感じなくなると、ロクは左右の拳銃を腰のホルダーに入れる。

するとようやく目を見開いたロクは、基地内を見渡す事なくジャガーに戻り始めた。

その様子を山口や陽たちは丘の上から見ていた。

「銃声・・・聞こえなくなった・・・」

「見て!?ジャガーが戻ってくる・・・」

山口は自分の車に戻ると、無線をジャガーに飛ばした。

「聞こえます?隊長?」

『なんだ?』

「あの・・・今・・・敵兵撃てませんでしたか?」

『そうか?見てなかったよ。』

「はぁ?」

そこに陽が近づき山口の無線に割り込んだ。

「盲撃ちですか?」

『ああ・・・次ぎ行ってみよう?!』

「えっ!?・・・つ、次と申しますと・・・?」

「ふふふ、次の基地に決まってんだろ!」笑顔で無線を飛ばすロク。

その２６　　ヒデと聖

ジプシャン軍小牛田本部基地。総帥の座に寛子が座っている。そこへ犬飼参謀が慌てて部屋に入ってくる。
「寛子様！」
「何事だ！？」
「女川、石巻の２基地との連絡が途絶え、確認したところ２基地とも全滅した模様・・・」

犬飼の言葉に、土井は怒鳴り散らした。
「どういう事なのだ！？もっとも東の基地２つだ！拠点とは言えないが、それなりのＳＣや武器の配備はしていたはず・・・しかもＰ５とＰ６からのルートというルートは、地雷を埋め尽くしたはず？」
「二基地とも全兵士は額を撃ち抜かれており・・・逃げのびた兵の話によると、たった１台のＳＣの襲撃だそうで・・・恐らく雷獣ではないかと・・・？」
「馬鹿な、たった１台に基地２つが壊滅だと？・・・しかも雷獣・・・奴は殺しはしないと聞くぞ・・・間違いないのか！？」
「恐らく・・・念の為、他の基地にも警戒態勢を取らせています。東ブロックの守備を固めました。」

「ふん・・・雷獣か・・・噂通りなら覚醒したミュウの子と聞くが・・・目障りだな？まもなくここへ来る、ツヨシにでもやってもらうか？」
「それがよろしいかと・・・」
「目には目を・・・か・・・？」

ポリス軍事施設内敷地。室内射撃場。山口を筆頭に、黒豹隊のメ

ンバー１０名程が射撃訓練をしている。ロクは杖をつきながら彼らの後ろをゆっくり歩いている。山口の射撃が終わり、的が向こうから上のレールに沿って移動してくる。それを近くで手に取り見つめるロク。

「山口！！丹田（下腹部）に力を入れろ！！」
「は、はい！」

ロクは杖をその場に投げ捨て、山口の前に立った。すると下からのパンチを山口に放つ。山口は両足が浮く程、飛び上がった。
「うっ！」
ロクにパンチを貰った山口はその場へしゃがみ込んでしまう。
「あ、ありがとう・・・ございます・・・」
「うん・・・次！アキラ・・・」
「は、はい・・・」
ロクに笑顔はなかった。

射撃場の前に黒豹隊の１０名が整列している。その前をロクが杖を付きながら歩いている。
「これで、俺の教える事は全てだ・・・明日から俺はＰ７勤務だ。陽はああ見えて、男にでも手を上げるから気をつけろよ！」
「ええっ？？」ビビる山口。
「心配するな・・・ああ見えていい奴だよ・・・」とロク。

「隊長が言うと、全然そんな風に聞こえませんが・・・」とアキラ。
「ふふふ、なら・・・これで解散する！」
ロクが敬礼すると、全員返礼をした。

地下6階の聖の病室。聖が寝込んでいるが、急に咳き込む。口に手を覆う聖。咳き込んだ後、手の平を確認すると、吐血の後があった。聖は慌てて近くにあった、タオルで手と口元を拭き取った。そこへダブルが入ってくる。

「聖・・・許可が取れた。立会い人が居るならドア越しでヒデに会えるぞ。」

「そ、そう・・・良かった・・・最後くらいガツンって言ってやるわ！」と聖。

「どうした・・・顔色悪いぞ？先生呼んでくるか？」

「へ、平気・・・それよりいつなの？」

「今からだが、都合が悪いか？」

「うん、すぐ行く・・・支度したい・・・外で待ってて。」

「分かった・・・」

聖はダブルが去ったあと、すぐ側にあった医療機器をじっと見つめた。

「ヒデ・・・」

ロクを抜かした黒豹隊のメンバーが食堂で黙々と軽食を取っている。

「あれからロクさん変わったよな？」とアキラ。

「確かに・・・」

「おい！・・・隊長だろ？」と山口。

「すいません。ってか今日までですけど・・・？」とアキラ。

「山口副隊はどう思います？」他の兵。

「それは・・・」戸惑う山口。

「敵から、雷獣って呼ばれるはずですよ・・・」

「確かに・・・ロクさん変わりすぎでしょ？あのなつみの死だよな・

・・？」と山口。

荒野を北に向かって進む、ジプシャン軍サンドシップスコーピオ。艦橋には、ツヨシと両角がいる。

「間もなく夕暮れです。本日はここ辺りでキャンプかと・・・」と両角。

「船は遅いのう・・・」とツヨシ。

「先程、本部の手の者から極秘で連絡があり・・・タケシ様がＰ６で不明と・・・」

「あの馬鹿兄貴も悪運尽きたか・・・」

「後は、あの姉だけですね？」

「いや、問題ない・・・これでタケシ派の参謀はこっちへ寝返る。姉貴は総帥の座を降りたがっていた・・・バカ兄貴がいないんじゃ、総帥はこの俺のもんだ！」

ポリス地下５階独房。ある部屋にヒデが収監されている。その独房前にダブルと聖がやって来た。聖は走ってそのドアに近寄ったが、ダブルが聖を止めに入った。

「何よ！」

「ドアに近寄るな！」

「何で！？」

聖の頼みをダブルは聞き入れなかった。ダブルは自ら部屋のドアの格子窓に近寄るとヒデを呼びつけた。

「ヒデ！？面会だぞ！」

独房の奥で横になっていたヒデは、ダブルの言葉に気づきドアの格子窓までやって来た。
「ヒデ・・・」聖がその変わり果てた姿に驚く。しかし、ヒデの顔を見た瞬間、聖の歓喜の声が漏れる。

「聖か・・・？」とヒデ。
聖の目にはうっすらと涙が溢れた。

ダブルはその二人の様子を、複雑な表情で見ていた。

ロクは自分の部屋で、身支度をしている。大きめの鞄に衣服などを詰め込んでいる。するとロクは壁に掛かった５０近い拳銃に目を移す。

「みんな連れて行くから、心配すんなよ！」
ロクは、拳銃に語り始めていた。

その27　　なつみの夢

夕方、ロクは南ゲートの塀の上にいた。ロクの定位置である。

「いつもここにいるんですって？」

ロクはその声に振り向くと、塀の階段を上がって来たのは大場の娘の直美だった。

「外に出れるようになったのか？」とロク。

「おかげ様で・・・」

「そうか・・・」

「あなたもでしょ？」

「ああ、ここに来るの久々なんだよ・・・」

「お母さんの件・・・」

「ん？」

「ありがとうね！罪人なんでしょ？ポリスにとっては？それにしてもいい墓だった・・・あんたがやったって言ってたわ。」

「気にすんな・・・」ロクは正面を向き続ける。

「うん・・・」

「タケシの事・・・」

「聞きたいって顔してるね・・・？」先に開口を開く直美。

「そういう交渉・・・お前、あの親父にそっくりだな・・・？」ロクはその直美の口調に苦笑いした。

「あの人の子供だもん！！」

ロクは直美の強がりに気づいた。

「ふふ、容姿はおかあさん似だよな？」

「あれ・・・お母さんとなんかあった？」

「バ、バカ言うな！」
「そうだよね・・・ロクは・・・」
「・・・」

ロクは急に寂しそうな顔を見せた。
「ご、ごめん！そんなつもりじゃ・・・聞いたよ・・・なつみちゃんの事・・・」

ロクは寂しい顔をしたまま、直美を見る事はなかった。
「なら、なにも聞くな・・・」
「うん・・・ごめん・・・」
「聞かせろよ。タケシと父親の事？」
「私は・・・タケシの許婚だった・・・嫌だったの、親同士の政略結婚なんて・・・まあ、タケシもだけど・・・それで父親が逃がしてくれた・・・」
「うん・・・それで納得した。まあちょっと無謀だよな？でもあの人ならありか？」
「戦争しか頭にない男なんて嫌いだし・・・あいつから逃げるなら、死んでもいいと思ってた・・・」
「それで、幼い弟と妹も巻き込んだのか？」
「しょうがないじゃん！置いていく訳もいかないでしょ？」
「確かに・・・ん？何か俺に用でもあったのか？」ロクは急に何かを思い出した。

「あんたが明日からここを離れるって聞いて・・・お礼が言いたくて・・・それとなつみちゃんの事と・・・」

「そうか・・・なあ？大陸ってまだ草木があるって噂だぜ。」
「えっ？・・・どうしたの急に？」
「見て見てぇんだよな・・・」

「えっ？」
「草原ってやつを・・・」
「草原？」
「あいつのガキから夢だったんだ。この地球に植物を復活させるって言ってたっけ・・・」
「なつみちゃんが・・・？」
「俺がなつみの夢を引き継ぐ・・・」

ロクは左脇からワイルドマーガレットの拳銃を取り出すと、握り手のマーガレットの花の絵を見ている。
「その花は？」
「マーガレット・・・凛と咲き、大地に根強い花らしい・・・」
「ふーん・・・草原か・・・そんな事、一度も考えた事ないな・・・」

二人は塀の上から海を眺めていた。

「何か用か！？」
ヒデは、聖を見ると怒鳴りちらした。聖は歓喜から一転し、黙ってしまい下を向いてしまった。

「おいおい、死刑囚に最後に会いたいとわざわざ面会に昔の仲間が来たんだぜ？それはないだろ？」とダブル。
すると、ヒデはダブルを睨んだ。

「こいつは仲間を裏切ったんだ。自分の兄貴を殺したポリスに取り入るなんて・・・」
「裏切り者はお前だろ！？仲間に弓引くような事しやがって！」
「ポリスの犬が黙ってろ！」
「何だとっ！」いがみ合う二人。

「やめて！」
二人が言い合いになったのを聞いて、聖が叫んだ。
「ちゃんとヒデにお別れが言いたくて・・・」
「・・・」

ポリスのある地下施設。見たこともない特殊な機器類が部屋の周りを囲んでいる。白い感染防護服を着たスタッフが2、3名程、機器を覗いている。部屋の中央には大きな円柱の水槽が何本かあり、良く見るとその中の一つに全裸女性が、数本の管に繋がれ水槽の中央部分に浮いた状態になっている。その前には、高田女医がいて、その水槽の中の様子を観察していた。するとスタッフの一人が高田に近づく。

「順調です・・・怖いくらい・・・」
「ふん・・・やはり生きていたのか？このまま観察を続けなさい！」
「はっ！」

スタッフは、再び機器をチェックし始めた。すると高田は水槽の中の女性に語り始める。

「あなたが、悪いのよ・・・なつみ・・・」
高田が見ていた、その水槽に入っていたのは全裸姿の桑田だった。

四天王　第五章　【カラー・フィールド】　完

【遂にロクＶＳヒデ・・・決着！！】

ヒデの銃弾が、ロクを貫く。

聖「最後くらいキスさせなさいよ？」

ダブル「ああ・・・」

独房の格子窓越しにキスするヒデと聖。目を見開くヒデ

【ジプシャン軍大型サンドシップ・スコーピオＶＳレヴィア艦隊】

キーン「Ｐ６始まっての艦隊戦だ！気合入れろ！」

【激戦の中、若き英雄たちが散っていく・・・】

死龍「友人として・・・いや同じ戦士なら・・・死に場所くらい・・・与えてよ・・・ロク・・・？」

ロク『早まるな！死龍！』

虹の三角で敵戦艦に体当たりする。

大破したブリッチ内でロクに抱きかかえられるキーン。

キーン「お前と戦えた事を・・・誇りに思う・・・」

ロク「キーン！」

【混沌とするＰ６・・・遂にミュウの正体が明らかになる・・・】

高田「桑田は・・・生きているの・・・」

ロク「なら、あの墓はなんだ！？」

ヒデと聖はある水槽の前で立ちすくんでいた・・・

聖「な、なんなの?中にいるの・・・ロクの妹よ!」
ヒデ「こ、これは・・・?あのなつみなのか・・・?」
巨大な水槽に全裸のまま入れられ、何本のチューブに繋がれている桑田。

【ロクＶＳツヨシ】
ＳＣ同士をぶつけ合い激しくぶつかり合うロクとツヨシ。

弘士「四天王システム作動!」
【３０年の眠りから目覚めた本当のポリスの姿とは・・・?】

ロクは驚き、頭上を見上げる。ロクに覆いかぶさる巨大な人影・・・
ロク「こ、これが・・・真・四天王か・・・?」

次回　四天王　第六章　【真・四天王降臨】

その1　　三現主義

Ｐ６地下独房施設。
「仲間を裏切ったのはヒデ、あなたでしょ！？」と聖。
「なっ・・・」ヒデは聖が泣いているのに驚いた。

聖も泣きながらヒデに訴え続ける。。
「こうなったのも自業自得よ・・・」
「てめぇこそ仲間を・・・」ヒデは牢屋から凄んでみせる。
「わ、私の事なら心配ないわ・・・だって新しい彼も見つけたし・・・」
聖は作り笑いをしながら、チラッとダブルの顔を見つめた。

「お、俺・・・？」驚くダブル。
「ふん、へぇーこんなチビが好みだったとはね・・・？」皮肉を言うヒデ。
「チビは余計だよ！」とダブル。

「でも、少しでもあんたに気を許した自分がバカだったわ・・・」
「聖・・・」
「これでチームリキも解散ね・・・じゃあね！」
聖は一人、独房から歩き始めた。

「ひじりっ！」
ヒデは独房の中から、精一杯の声で聖を呼び止める。背中を向けたまま立ち止まる聖。

「好きだったんだぜ・・・聖の事が・・・」

「・・・」ヒデの言葉に黙る聖。
聖は突然独房のドアまで走り出すと、格子窓の隙間に顔を寄せヒデにキスをする。
「おいおい・・・どっちなんだよ!?」
二人の不意な行動に唖然となったダブルは慌てて二人を引き離そうとする。
「野暮ね!最後くらいキスさせなさいよ!」
聖はキスを一度中断すると、ダブルに向かってこう言った。
「ああ・・・」
聖の迫力に、ただ圧倒されるダブル。するとキス中のヒデの目が一瞬見開いた。次の瞬間、聖はヒデから離れた。
「もういいわ・・・もう後悔しない・・・じゃあねヒデ!」
そういい終えると、聖は一人独房を後にした。ダブルがそれを追いかける。
ヒデは二人が消えるのを確認すると、すぐ独房の奥に引っ込み、口元に手をあてる。するとヒデは自分の口の中から針金が折れ曲がった束を取り出す。
「なんだ、あの女・・・今時、針金で鍵が開くわけねぇだろ・・・」
すると、独房の隅へと針金を投げ捨てた。
夜が明け、東の空から太陽が昇り始める。ロクはいつもの塀の上にいた。また塀の上で寝ていたのだ。
「ふわぁー!よく寝た・・・さーて・・・行きますか?」
ロクはそう言うと、塀の階段を走り降りて行く。

P６指令室。早朝なのか人も疎らだ。
「司令これを！」
柳澤はスクリーンの一部の異変に気づく。
「どうした？」
司令をはじめ数名が立ち上がった。
「南ブロック高台の映像です。正面に投影します。」

すると荒野の映像が中央スクリーンに映り始める。かなり遠くの映像で、画面中央付近に砂嵐のようなものが映し出されていた。
「砂嵐か・・・？？」
「気象レーダーには何も・・・先日の敵シップよりも巨大な事は確かです。」
「距離は分かるか？」と弘士。
「まだレーダー範囲外！」
「進路は？」
「このままですと、ポリス道を北です。こちらは進路を外れてますね。このルートですと・・・敵古川基地方面と思われます。」

「我妻。黒豹を出せ！」
「了解。」
「今日から、黒豹は陽隊長だったな・・・？」
「はぁ・・・しかし・・・いえ、そうではなくて・・・いやいや・・・」

弘士は我妻の無線を聞いて何か揉めてるのを感じた。
「どうした？我妻！？」と弘士。
「はあ・・・ロクさんがついでなんで偵察に出ると言ってますが・・・？」

「ロクが？・・・何のついでだよ？まあ既に奴の事だ。ゲート前に居るんだろ？暫くは海の上だ。出ろと伝えろ！」
「了解・・・こちら指令室・・・北ゲート開けます。」
「奴の事だ！偵察だけで済むかな・・・？」

「さーて、行きますか？」
ロクのジャガーは北ゲートから飛び出していく。そのジャガーの遥か先には、巨大な砂煙が高々と空に向かって伸びているのが見える。するとフロントガラスに陽の姿が映し出される。

『ちょっと！ずるいです！今日から偵察隊は私が・・・』
「ごめんね～！別に仕事を追われたからじゃないのよん～！」
『もう！昔から、都合が悪くなると可愛く喋るんだから・・・私も行きますからね！』
「こいつに追いつけるかい？」ロクはハンドルを軽く叩く。
『ナメないで下さい・・・』
「怒んなよ・・・でもお前の車の塗装・・・ちょっと迷惑・・・」
２台の斑のＳＣは、Ｐ６を後にした。

ジプシャン軍サンドシップ、スコーピオ。早朝の荒野を北へと移動している。空母側の甲板にはたくさんのソーラーパネルが敷かれているが、その一部にテニスコートが作られている。そのコート内にはツヨシと若い兵が、ラリーを続けている。息を切らしたツヨシが相手側に強くボールを打ち込む
が、ボールは走行中のシップの外に飛び出してしまう。

「悪い、悪い・・・」
すると、艦橋がある側から両角が慌てて走ってくる。

「ツヨシ様、Ｐ６区域です。一度艦橋にお戻り下さい。敵偵察車も出てるそうです。」
「バカな・・・あのボケＰ６が襲ってくるはずがないだろ？」
　すると、突然音を立て甲板付近を銃弾が走った。身を伏せる二人。すると艦橋上の見張りの兵が二人に叫ぶ。
「敵襲！敵襲だぁー！」
「チィ！」
　ツヨシは舌打ちをしながら艦橋へ入った。
　空母側の艦橋内は慌てていた。ツヨシは何もなかったように指令席へ腰掛ける。
「数は！？」とツヨシが叫ぶ。
「ＳＣが２台！偵察タイプ・・・２台とも斑模様！雷獣です！」
「雷獣だと？」
「なんだ雷獣って？」
「２台とは言いましたが、実際近寄っているのは１台のみ！高速タイプです！」
「機銃！？何してんだ！？撃ち落とせよ！」
「はっ！何分、あ、足が速く・・・」
「右舷機銃何してる？相手は１台だろ？」
『敵の足、思った程早く・・・うわっ・・・』
『右の機銃兵負傷者多数！交代要員をまわして下さい！』
「何してんだ・・・ボンクラどもが・・・？たった１台のＳＣに何振り回されてるんだ？で・・・雷獣とは何だ、両角？」
「はあ・・・北の兵たちを脅かしているＳＣだそうで、一説によると覚醒したミュウの子とも、神の子とも言われており・・・」

「ポリス事だ。ミュウを手懐け、人間兵器にしてこちらに送ってくる事も十分に考えられるな・・・」
「ミュウ狩りをしていた、ポリスがですか？お言葉ですがそのような事をポリスが・・・」
「なんなら俺がこの目で確かめてやる・・・船を止めろ！」
「ツヨシ様？何をなさるのですか？」と両角。

「俺は昔から“三現主義”でな・・・」
「はぁ？」

「現場で、現物を、現実に捕らえる・・・見てくるぞ！神の子と呼ばれる雷獣とやらを・・・」ツヨシは不敵に笑う。

その2　　ロクVSツヨシ

ロクのジャガー。フロントガラスには陽の姿が映っている。
『ほらほら!言わんこっちゃない・・・相手を怒らせましたよ!SC戦になります!早くヅラかりますよ!』
「おいおい、こっからが面白くなるのに・・・逃げるなら一人で逃げな!」
『もしも~し!?偵察って意味知ってますか!?そもそもこれ、ロクさんの仕事じゃないですよね?ったく・・・男って生き・・・』

「ああっ?いいんだよ!ここP6のレーダー範囲外だし・・・先に撃ってきたの向こうだし・・・司令には内緒な~!?」
『相変わらず言い訳ばっか!へいへい帰りますよ。どうせこっちは非武装タイプですし・・・へいへい・・・』
「ふふふ、頼んだぞ!」

すると砂塵が消え、船全体の姿がロクの前に現れてくる。
「こいつ・・・砂塵で見えなかったが、あの時のP4のくたばり損ない・・・風我が命を張って止めた船・・・」ロクの表情が変わる。

するとスコーピオの空母部分の側面が開き、1台のSCが出てくるのを見つける。
「たった1台かよ?ならお付き合いしますよ・・・陽下がってろよ!」
『へいへい・・・見学させて頂きますよ!』

スコーピオから出てきたSCは車体全部がメタリックシルバーのボディ。太陽の光でまばゆいくらい光り、タイヤ部分が見えなく、

真横から見ると薄い三角形であった。車高はジャガーより低く、スピード重視タイプ。
「初めて見るな・・・何だあのボディ・・・なにより俺より派手じゃねぇ？」

ツヨシのＳＣ。
「２台か？それにしては何だあの塗装は？舐めてんのか？しかもコンビで・・・？二人してバカなのかい？」

ロクのＳＣ。
「武器はなさそうだな？・・・ならどうすんの？」
ロクはあえて車体を銀の車の横に近寄せた。
「銃くらい付けたら？どうやって戦うんだい？」
そう言うと、ロクはグリップを握りバルカンを撃ち始めた。至近距離のせいか、ほぼ全弾が命中するが銀の車体には穴一つ開いてない。
「バルカンが効かない？こ、こいつ・・・ジャガーと同じ装甲・・・いやそれ以上か・・・？」

ツヨシのＳＣ。
「ガトリングバルカンが・・・横に向くタイプがあるとはね？ちょっと驚き・・・だがな・・・」
そう言うとツヨシはハンドルを左に切り、ジャガーに体当たりを掛ける。車体が低いせいか、ロクのジャガーも避けきる事が出来ず、一瞬銀の車の上に乗り上げてしまう。
「くっ！」

ロクは慌ててエアーブースターのスイッチを入れ、乗り上げを回避した。

「ほぉー！避けたのお前が初めてだよ！何だ今の！？」とツヨシ。

ロクのジャガーは数メートルジャンプした後、荒野に着地する。

「危ねぇ？武器がない理由は分かったけど・・・体当たりだけじゃね・・・」

「雷獣・・・翔ぶのか！？こいつブースターでも搭載してんのか？なら爆弾積んでるのと同じだな？どこだ？」

ツヨシはジャガーをよく観察し後部座席付近が不自然なのを見つける。

「あそこか！？」

ツヨシは車内のあるスイッチを押すと、ボンネット部分から機銃が出てくる。すると正面にジャガーを捕らえ機銃を撃ちまくる。

「正確な射撃・・・慣れてるな・・・タケシのタイプとはまた違う・・・ならこっちも！」

ロクもバルカンを銀の車に向けて撃ち返す。しかしバルカンの弾が切れてしまった。

「こんな時に弾切れ・・・とは言え、こいつ相手じゃ弾の無駄使いか・・・さてどうする？こいつに後ろは見せたくないな・・・？とはいえ接近戦は不利か？」

ロクはもう一度追尾してくる銀の車を見直す。

「真下しかない・・・」

ロクは胸元の手榴弾を引きちぎると、窓を開け銀の車の前に向かって投げつけた。投げた瞬間すぐ拳銃を抜き、その手榴弾に向かって狙撃する。

爆発した手榴弾の爆風でツヨシの車は斜めに少し傾き、車の左側にかけて浮く形になった。ロクはその瞬間を見逃さなかった。ジャガーは急ハンドルを切り、その僅かな隙間に車体を突っ込ませた。

「さっきの借りは返すぜ！」

ジャガーに真横から突っ込まれ横転していく、ツヨシのSC。最後は反転し荒野に横たわった。ロクは拳銃を構えながら、すぐ側に停車する。

すると顔から血を流したツヨシが、意識朦朧のままゆっくりとドアから開け出てくる。銃を持ったロクの存在に気づくと、急いで自分の銃を捜した。

「動くなよ？」

ロクはそう言うと、ツヨシは諦めたのか横転した車に寄りかかりながら、ロクを見上げた。

「お、お前が雷獣か・・・？」とツヨシ.

「その名前は嫌いでね？3年前のビルの崩壊で艦橋部分は壊したつもりだったが・・・」

「お前・・・あの時いたのか？」

「ああ、すぐ側で見学してましたさ。艦橋は新しいのに変えたんだな？」

ロクはスコーピオを見ながら拳銃を構え直した。
「早く撃てよ・・・」とツヨシ。
「いや・・・殺さない！お前にはあの船の責任者に伝言を頼むからな！このまま生きて帰す！」拳銃をしまうロク。
「バカな・・・」
「こう伝えろ・・・タケシの首は討ち取ったと！」
「な、なに・・・！？」

「そう驚くなよ！親戚か・・・？タケシの首を返して欲しければ、過去の四天王の首と交換だ！」
「貴様・・・」
「大丈夫だ。ちゃんと瓶に入れて綺麗に保管してる・・・とな。」

いつの間にかロクのすぐ後ろに控えていた陽が叫ぶ。こちらに向かっているＳＣの砂埃が見える。
「敵の援軍よ！急いで！」
「ああ・・・」

ロクはツヨシをそのままにすると急いでジャガーに乗り込もうとする。すると座り込むツヨシに向かって、一丁の拳銃を放り投げた。
「何の真似だ！？」
「タケシのだ！嘘だと思われても困るんでな・・・」
ツヨシは拳銃の握り手の部分を見て驚いた。そこには“Ｔ．Ｄ”と書かれている。
「タケシ・・・土井・・・？」
「分かったらそう艦長に伝えろ・・・」

陽は車に乗るロクを呼び止めた。
「どうして息の根を止めないの！？」

ロクは振り返って陽を睨んだ。
「殺すなよ！」
「キキさんに言われたの！あんたが撃つのを躊躇ったら変わりに撃てって・・・」
「いつの話だ？いいからこいつは泳がせろ！」
「り、了解・・・」
２台はその場を離れていく。変わりにジプシャンのＳＣが３台、ツヨシの元に近づいて来た。
「あの野郎・・・イカレてる・・・」
『どうして逃がすんですか？敵兵ですよ・・・』無線の陽。
「さっきの会話、聞いてなかったのか？タケシを餌にあの戦艦をこっちに誘い込む・・・」
『正気ですか？どういう事です？』
「あのタイプは敵の拠点用強襲艦だ。このままだと間違いなくＰ５に行く。あいつをＰ５に行かせる訳にはいかない。」
『それはそうですが・・・今のＰ６にあいつと戦う術がないじゃないですか？』
「レヴィアだけでも十分戦えるさ・・・Ｐ５のプラントがなくなったらＰ６も終わる。」
『そうですが・・・』
無線の中の陽の表情は晴れなかった。
Ｐ６地下３階ＳＣ整備室。シャフトでジャガーが降りてくる。それを迎えたのは角一人だった。シャフトから出たジャガーからロクが降りてくる。

「技師長は？」
「ソーラーなんとかの方が忙しくて・・・あーあ、また派手にやりましたね？」
角はジャガーの傷跡を見て落胆していた。
「暫くこいつとはお別れだ・・・いい？誰もこいつには乗せるなよ！」
「あれ？一緒にＰ７に持って行くんじゃないんですか？」
「おいおい・・・向こうに持って行っても意味ないじゃないか？走れないんだから・・・」
「技師長の話だと、ロクは戦闘の際はあいつは必ずジャガーで出るから、常にレヴィアに積み込んで方がいいって。」
「あらら・・・痛いとこ突かれたな。確かにそうかも～？」
「なら整備しておきますよ。定期便でＰ７に送り届けます。」
「助かる・・・そう言えば角さんって前の配置、Ｐ７だよね？」
「はあ・・・それが何か？」
「陽は知っているのか？」
「もちろんです。数少ない乙女組でしたから？」
「乙女って・・・？そういや陽は、向こうで何を学んでいたんだ？」
「あいつは・・・？船の航海とか、戦術とか？海洋戦術の基礎みたいなのをよく勉強してましたよ。それがどうしたんですか？」
「いや・・・そうか・・・あの頃と変わってないんだな・・・」
「惚れちゃったんですか？駄目ですよ。あいつ昔から好きな男いるみたいですし・・・」
「へぇー！彼女、一応プロジェクトソルジャーなんですがね？」
「昔から言い寄る男は多かったんですよ・・・でもことごとく振ってたな？」
「へーえ、意外と持てるんだな？」

「よく、ロクさんらのＰ４の戦いは若い兵に聞かせてましたよ・・・生きて帰ったのは今の四天王と私だけって・・・」
「確かに・・・いや、そんなあいつがなぜ陸戦の配置なんだ?」
「さあ?今の配置が決まった頃は、だいぶご立腹でしたけどね。」
「ふーん・・・」

すると、そこに若い兵が敬礼して入って来る。
「ロクさん、ここでしたか?Ｐ7より定期便の船が到着したと!」
「わかった、出航は昼だったな?まだ寄る所がある・・・じゃあ角さん。ジャガーを頼みます。」
「任せてください。」
ロクは最後ジャガーを見ると一声掛けた。

「いい子でいろよ・・・」ロクはジャガーを見つめた。

その3　　ヒデの遺言

Ｐ６地下６医療室。個室の一角に死龍の姿があり、起きてベットに座っていた。そこにロクが入ってくる。
「元気そうだな？」とロク。
「ロク・・・」死龍は表情がやや青白くなっていた。
「重症と聞いて心配してたがピンピンしてるな？」
「明日からでも戦場に出れるわよ！」

まだ所々包帯姿の死龍の強気の言葉に苦笑いするロク。
「おいおい、無理するな。何日か前まで意識不明だったんだろ？」
「寝てる間に、回復してたわ。さすがミュウね・・・ははは・・・」
「はは・・・はは・・・いや、そこは笑われんな・・・今日、Ｐ７に向かう。ここには月一くらいでしか戻れない。死龍がＰ５に帰る前に挨拶したくてな。」
「当分向こうには帰れそうもない。暫くはここで治療に専念する。毎日血ばかり抜かれてフラフラよ。」
「まあ俺は暫く、船酔いでフラフラかな？」
「そうロクが漁師さんとはね・・・」
「そう言うなよ・・・確かにそうは言われてるけど・・・」

一番言われたくなかったのか、ロクは死龍から目線を外してしまった。
「ジャガーちゃんはどうするの？」
「一応置いてく・・・海じゃ走れないしな。」
「ロクがいないんじゃ、退院したらＰ５まで誰に送ってもらおうかしら？」
「なんなら俺がＰ７から駆けつけてやるよ。」
「早いけど、ロクの運転荒いでしょ？」

「乗ったことないくせに・・・」
「じゃあ、お願いしようかな?」
「わかった・・・連絡しろよ。もう行くぜ。上でダブルを待たしている!」
「ええ、気をつけてね。」
ベットの上で敬礼する死龍。それに答礼するロク。

P6地下6階の医療ブロック。エレベーター待ちをしているロク。ふと目をやったのは、地下6階以降専用のエレベーターが地上階行きのエレベーターの真後ろにあった。ロクはそのエレベーターをじっと見る。ドアには“関係者以外立ち入り禁止”の表示がされている。

『桑田が最後に言ってた・・・タケシとヒデが捜していたものが地下にあると・・・しかし、この先はポリスしか入れない・・・試したことはないが、俺のIDカードで開くとは思えない・・・ガキの頃から、立ち入り禁止と聞かされ続け、ポリスの人間でさえ一部の者しか入れない区域・・・一体何があるというのだ?この地下に・・・?』

ロクは恐る恐るそのエレベーターに近寄り、胸ポケットからIDカードを取り出した。

『開くのか・・・俺のIDで・・・?』

ロクはカードをかざそうとした時、ちょうどその専用エレベーターが開いた。中から高田が白衣のまま出てくる。
「あら?どうしたの?」

「い、いえ・・・別に・・・ああ、高田さんに挨拶しようとしたんですが、こっちだって聞いて・・・ここで待ってました。」
「なんだ・・・呼び出すならそこのインターフォンを使えばいいのに・・・あっ！ちょうどいいタイミング。ヒデのサンプルを取るの・・・手伝えて？」

「ヒデのですか？構いませんが・・・」一瞬戸惑うロク。
「若い兵したちは怯えてるのよ・・・元プロジェクトソルジャーに・・・いや、ミュウと言った方がいいかしら？噛みつかれて伝染するってもっぱらの噂が流れててね・・・」と高田。
「ミュウと聞いて怯えない奴はいないでしょ？一時は空気感染説まで流れましたから・・・」
「そうよね・・・じゃあ、いいかしら？」
「はい・・・」

ヒデの独房。両腕には手錠をし独房で膝を抱えたまま座るヒデがいた。その独房のロックを外し、高田が中に入る。ロクは銃を構える事もなく高田のうしろ姿とヒデを見ていた。するとドア側に立っているロクをヒデは見つけた。

「ロクか・・・？お前・・・タケシを殺したそうだな！？」
ヒデは大声を出した。高田は少し驚く。
「もう！びっくりさせないでよ！今日は暴れないでよ！すぐ済むわ。今日は血液検査だけよ！」

坦々と作業を続ける高田。しかしヒデはロクが質問に答えなかったのを怒り出し、献血中に急に立ち上がった。
「聞いてんのか！？ロク！」
そのヒデの姿を見て、ロクは初めてヒデに向かって拳銃を構えた。

「ちょっと！腕に針が刺さってんだから動かないで！」
立ち上がりロクに目線を合わせるヒデを、高田は一喝した。

「銃殺だってな？なんなら今、俺がお前の刑を執行してやってもいいぞ・・・」
ヒデはロクが両腕で拳銃を構えたのを見て、何かを悟ったのか再び床に座り始める。ホッとする高田。ロクも拳銃を下ろした。

「お前ら・・・変わったんだな・・・いや、変わってないのは俺だけだな？」鼻で笑うヒデ。
「変わったじゃないか？立派な盗賊にな？」とロク。
「なに！？」
「タケシとこのポリスに入った理由はなんだ？何かを盗むには手が込んだ作戦だな？」
「俺は死刑囚だぜ！もうお前らにしゃべる事はない！」
「墓まで持っていく気か？」
「そうだな・・・」
「勝手にしろ・・・」

「どうせミュウなんだろ？死刑にするより人体実験の方がいいんじゃないの？ねぇ先生？」と高田に甘えるヒデ。
「そ、そうね・・・研究の為に個人的にはそっちの方がい、いいわね・・・」
「なっ？先生話が分かる！死刑は覚醒してからでいいだろ？」
「それは、ここの司令が決める事よ・・・」と高田。
「ふん！そうかい！」
「さて！終わったわ！ロク、ありがとね。」
「いえ・・・」安堵するロク。
高田はそう言うと、注射器を何本か持ちながらヒデの独房から出てきた。ロクは警戒しながら独房のドアを閉めた。するとヒデはド

アの格子窓までやって来る。
「それでいいのか？ロク？」
「ん？」
「ポリスの犬になって何人の仲間が死んだ！？」
「ヒデ・・・」
「子供を兵士に育て、ジプシー同士戦わせてるポリスをお前はなんとも思わないのか！？」
ヒデは鉄の格子を握りしめ、ロクに言い寄った。
「俺はポリスに拾われた。俺はその恩を返すだけだ・・・」
ロクはそう言うと、ヒデの独房を離れた。
「目を覚ませよ！ロク！おい！ロクーっ！」
ヒデの言葉に耳を貸さないロク。
「いいか！？ロク？これは俺のからの遺言だ！」
ロクがダブルのＳＣの助手席に乗っていた。車は南ゲートを出たばかりだった。
「ふーん、ヒデとそんな事が・・・？」とロク。
「ほんと、参ったよ。人の前でキスしやがって・・・で？会ったのかそのヒデと？」
「ああ、さっきな・・・奴の執行はいつなんだ？」
「さぁな？その前に高田さんがミュウとして徹底して調べるって言ってたな？ミュウとしてはいいサンプルだって。銃殺の前に彼女に切り刻まれるって噂だぜ！」とダブル。
「それも嫌な刑だな・・・」苦笑いのロク。

「聖の容態も日に日に悪くなっていく・・・やはり助からないのか・・・」
「宿命なのか・・・」
「おっ！見ろよ！」

二人の前に現れたのは、黒い新型のレヴィアだった。艦の横には白い文字で“６”と書かれている。１番艦から５番艦とは形も大きさも違い、潜水艦を逆さにしたタイプだった。やはり底の部分に５メートル程の艦橋が取り付けられている。

「少しデカくないか？どうもこの６番艦、キーンが乗ってるらしいぜ。」
「キーンが？」驚くロク。
ダブルの黒のジャガーは、新型レヴィアに近寄って行く。

その４　　総帥出撃す！

海岸線に停泊しているレヴィア６番艦。その横に二人はいた。
「なら行って来る！」ダブルに挨拶するロク。
「ああ、なんか二人がいっぺんに居なくなると寂しくなるな。」
「はぁ？お前らしからない言葉だな？」
「そうだな・・・」どこか寂しげなダブル。

黒のレヴィアの横ゲートが開き、車イスのキーンが兵の付き添いでロクたちの所に下りてくる。
「ロク？出所したって？」皮肉混じりのキーンの挨拶だった。
「キーンこそ、リハビリ途中でＰ７に行ったらしいな？もっとゆっくりしたらどうだ？」ロクもまだ片足がうまく操れない。
「ジプシャンは待ってくれないぜ。それに少しでも船に慣れておきたくてな・・・リハビリはこっちでやってるさ！あれ？ご自慢のジャガーは？」
「置いてきた。必要あるか？」
「Ｐ７の屋上なら車も上げれて、少し走れるぞ。」
「狭いだろ・・・？」

「なら、俺は帰るぜ？キーン？ロクを頼むぞ！」と車内のダブル。
「ああ、わかった！来いよ、ロク。こっちだ！」とキーン。
「ああ・・・」

レヴィア６番艦ブリッチ。１番艦のブリッチと違い、広く作られている。クルーも多い。そこにエレベーターでキーンとロクが入ってくる。皆、二人に敬礼する。
「ブリッチまで、エレベーターかい？凄いな・・・中も広いや・・・」

「まだ車イスの俺には優しいよな・・・ジャガーと同じ作りで、甲板全部がソーラーパネル・・・元某国の潜水艦らしい・・・軍物なんで元の装甲も厚い・・・艦橋部分は切り取って船底に付けてある。相変わらずのリサイクル・シップだ。６から１０番にはバズーが名付けたなんちゃら砲って武器も取り付く予定だし・・・」
「一発射撃砲ね・・・」首を項垂れるロク。
「ああ、それそれ・・・」

するとブリッチ前方にいた、２５くらいの兵がロクとキーンの元へやって来る。
「おお、紹介しよう。この艦長の白井だ！」
「白井です。宜しくお願い致します。」
「宜しく！」とロク。

ジプシャン軍小牛田本部。寛子の居る総帥の間に犬飼がやって来た。
「ツヨシ様が単独でこちらに来られました。」
「通せ・・・」
「はっ！」

犬飼の案内で、顔に包帯姿のツヨシと参謀の両角が部屋に入ってくる。二人は寛子の前で一礼すると跪いた。
「ツヨシ？その顔はどうした？」と寛子。
「はっ！先程Ｐ６付近を航行中に敵ＳＣと交戦しまして・・・」
「指揮官自ら迎撃したのか？それにしては派手にやられたな？」
「お姉さまはご存知でしょうか？雷獣というミュウの戦士を？」
「雷獣だと？昨日は北で目撃されて、今日は南か・・・確かに神出鬼没だな・・・」

「やはりご存知ですか。何者です？」とツヨシ。
「確かにミュウの噂はある。しかし詳細は不明だ。」
「先程、その者にこれを渡されました・・・」

ツヨシはタケシの物であろう、拳銃を寛子の前に差し出した。犬飼がツヨシから受け取り寛子に手渡す。
「こ、これは・・・？タケシか・・・？」
「間違いないでしょうか？」
「なぜそやつに遭遇した！？それにこの拳銃は！？」
寛子は大声を出し、ツヨシを突き詰めた。
「それが・・・」

レヴィア６番艦ブリッチ。
「艦隊司令！まもなく本艦はテスト航行を兼ね、Ｐ７へ向かいます。」
「任せる！」

そのキーンの様子に驚いたのはロクだった。
「艦隊司令・・・？」
「お前も次期にそう言われるんじゃないか？まあそう呼ばれるのは、ちょっと抵抗はあるがな・・・」
「どうでもいいけど、互いに陸戦出だぞ？何にも専門知識知らねぇのに・・・いいのかな？」
「海の知識はサポートが付くとよ！うちはこの白井だ。なぁ？」
「ただ、この船は陸に上がっての戦闘が多くなる。上はそう睨んでるでしょうな！船と考えず、サンドシップとしてレヴィアは考えて下さい。」
「それじゃあ俺の所のサポートは、桜井ってとこだな？違うか？」
「いい勘してます・・・」と白井。

ジプシャン小牛田本部。
「タケシの首をか・・・？」と寛子。
「は、はあ・・・面目ありません・・・」一礼するツヨシ。

言葉を失う寛子とツヨシ。
「敵の罠かもしれません！内部のスパイに再度探らせます！」と犬飼。
「タケシの事だ。そう簡単にはやられまいと思っていたが・・・」
「私に、Ｐ６を任せてはもらえませんか？」
「スコーピオは新型の武器を取り付け次第、Ｐ５へ行ってもらう！」
「兄上の首一つ取り戻せないのでは、兵に笑われるでしょう・・・」
「確かにそうだな・・・土井一族の恥だな・・・正直、雷獣はツヨシに任せようとは思っていたが・・・」
「お言葉ありがたく頂戴致します」

「それでは、前総帥の遺言が・・・」犬飼が反論する。
「Ｐ５を陥落させれば文句はあるまい・・・新型の武器・・・試し撃ちにはぴったしだと思うが・・・」
「ま、まさか・・・あの大筒を・・・？Ｐ５へですか・・・？」
「ここを丸裸にされた以上、本部を北に上げるしかない・・・私自らＰ５討伐の指揮を取ろう！死神では役不足だ。そう北の死神に伝えろ。」

「兵も奮い立ちます！」と犬飼。
「どうだ？ツヨシ、これでＰ６へ行けるだろう？」
「ははっ！光栄です！総帥！」とツヨシ。

Ｐ６大会議室。弘士が一人座っている中、ノック音が聞こえる。
「入れ。」
高田女医がある資料を持って会議室に入ってきた。
「失礼します！」と高田。
「うん・・・まあ座ってくれ！」
「はっ！」

弘士の正面に座った高田は、あるボードを弘士に手渡した。
「ヒデのミュウとしての資料です・・・」

弘士は何ページかを開いていくと、あるページで目が止まった。
「これは・・・？」
「ヒデの死刑執行を延ばしてはいけませんでしょうか？」
「うーん・・・刑は確定した。ある程度は延ばせるが・・・」
「生きている、まして覚醒前の貴重なミュウ本体です。今後の研究には必要です。」

弘士は沈黙していた。
「ポリスの司令として、決議を変更は出来ない・・・ただ出来るとしたら、刑の執行を遅らせる程度だ・・・」
「ど、どのくらいでしょうか・・・？」高田が問う。
「延ばせても１０日ほどだな・・・？」
「分かりました・・・その時間でなんとかしてみます。」
「うん。頼む・・・それと死龍の容態は？」
「吐血が酷く・・・四天王として鍛えてなければ、既に歩けなかったでしょう・・・それでも本人は現場復帰を望んでいます。それと、ヒデの子を身ごもっていたジプシーの女ですが、吐血が始まり・・・出来るだけ両名とも延命処置をするつもりですが・・・」
「そうか・・・」
「死龍の覚醒はやはり究極の戦闘を掻い潜った頃・・・と見ていい

でしょう・・・」
「やはりな・・・」弘士が頷く。
「それと桑田ですが・・・」と高田。

弘士は、見ていたヒデのボードファイルを閉じて高田に正対した。
「うん・・・最善を尽くしてくれ・・・結果はどうであれ・・・」

その5　　海戦

ジプシャン軍古川基地。サンドシップ・スコーピオンを側から見つめるツヨシらが居た。ツヨシらは技術のスタッフから説明を聞いている。

「この空母部分の甲板をくり貫き、大型の砲座を取り付けます。奴等がソーラーキャノンと呼んでる物です。」

「何から何までポリスのパクリだな?」とツヨシ。

「はあ・・・詳細は不明ですが、奴等の技術系のトップにスパイを潜り込ませていると聞きます。」

「だろうな・・・あの姉貴がやりそうな事だ・・・」

「それで砲座は、上下の角度だけ調整が出来ますが、左右の角度は出来ません。ですので、空母側の艦首を発射方向に向けてもらいます!」

「わかった・・・いつ完成するのだ?」

「10日ほどで・・・」

「駄目だ!7日で完成させろ!」

「ははっ・・・!」

スタッフがその場を離れ持ち場へと走っていく。ツヨシと両角は、作業風景を見つめていた。

「ポリス内部にもスパイを潜入させる・・・総帥も手が込んでますな?」と両角。

「いや・・・親父の代からの手法だ。姉貴や兄貴の頭じゃそんな事思いつかないな。」

「しかし、大きい砲座だ・・・こいつを使うのにまたソーラーパネルをたくさん取り付けるとかで・・・」

「くくくっ・・・せっかくのテニスコートも潰さないといけないな・

・・」苦笑いのツヨシ。

レヴィア６番艦ブリッチには、船酔いで蒼い顔をしたロクがいた。
「間もなくＰ７到着です！」と白井艦長。
「やっとかよ・・・」とロク。

すると通信兵がロクに呼びかける。
「ロクさん。加藤司令から無線です。」
「俺？・・・スピーカーへ・・・」
「了解！」

「こ、こちらロクです。」
『敵シップの攻撃！それと女川、石巻の敵基地への攻撃！！』
「あっ？」
『あっ！じゃないよ・・・なんで報告しないのかな。ロクくん・・・』怒りを堪えている声の弘士。
「あれ？その報告は、新隊長の陽の担当じゃないんですかね・・・？アハハ・・・お、おかしいな？」
『一応、まだ君の管轄だったぞ！・・・で？一人で基地二つ潰すなんていい度胸じゃないか？へ？ロクさんよー！？』
「す、すいません・・・」
『相変わらずの、命令無視。それに単独行動・・・まだ牢屋に繋いでいた方が良かったな？』

その無線を聞いていた、キーンや白井も苦笑いしている。
「いやー、まさか撃ってくるとは思わなくて・・・まあそれで、ちょろっとしただけですよ・・・アハハ・・・はい・・・」
『どこがちょろっとだよ！！２基地の兵は全員射殺したそうだな？山口が吐いたぞ！』

「あ、あいつ・・・」
ロクは小声でぼやいた。

『まあ、お前が銃を扱えるようになったのは幸いだが・・・キーン？聞こえてるなら先輩としてキッチリロクを躾ろよ！』
「自分の訓練で精一杯ですよ・・・」とキーン。
『フフフ、ロクを頼むぞ！』
「了解！」
無線が切れ安堵の顔をしているロク。それを振り返って見守るキーン。

「ふーん・・・二つの基地をね・・・？」とキーン。
「たまたま当たっただけだよ・・・」口を尖らすロク。
「たまたまね・・・？」
ロクはキーンを見て妖しく笑っていた。

タケシ襲撃から半月が過ぎようとしていた・・・

宮城沖４０キロの海上。レヴィア１番艦から5番艦が海上を北へと向かって航行していた。

「ソナー反応！水深３００メートル、４次の方向です！」と国友。
その声にレヴィア１番艦ブリッチが慌しくなる。

「敵に潜水艦？ジプシャンに潜水艦なんてあったか？鯨の群れじゃないのか？」とロク。
「長さ１００メートルを超えます。鯨ではありません！」
「進路は！？」

「こちらに気づいた様子！数は二隻。真っ直ぐこちらに向かっています！」
「三島！各艦に戦闘配備だ！」
「はい！」と三島。

「潜水とは厄介ですね・・・こちらも潜りますか？」
舵を取っていた桜井が心配そうにロクを振り返った。
「いや、進路このまま！」と冷静沈着なロク。
「しかし、３００メートル海の下の潜水艦です。爆雷も効果は・・・このような時はこちらも潜り、魚雷でしか沈めません！」
「気づくのが遅かった・・・そう敵に思わせろ・・・」
「はぁ？？」
「こちらは五隻・・・確実に一隻はやられる・・・三島！？」
「はい！？」
「４番艦に照明信号！」
「はあ？無線では駄目ですか？」
三島は不思議そうな顔でロクを見つめ返す。
「そうだ！こう打て・・・」

「敵はまだ海上です。進路そのまま。」
「爆雷攻撃で沈めれると思ってるのか？舐められたな・・・ならこのまま直進。お望みの物を横腹に食らわせてやれ！」

「敵、速度を上げました！射程距離まであと８分！」と国友
「各艦エアーブースター最大！」とロク。
「反転して、潜りましょう！いくら５隻とはいえ、爆雷だけで倒せる浅さではありません！」と桜井。
「誰が爆雷で倒すって？桜井！？」不敵な笑みさえ浮かべるロク。

「はぁ？」
「国友？敵の位置は？」
「変わりません！同じ方角です。距離はやや詰めたくらいです。」
「全艦、面舵いっぱいだ！」
「了解！面舵いっぱい！」と桜井。

「敵反転します！我が艦隊の正面に出ます！」
「痺れを切らしたか・・・魚雷用意！」
「ま、待ってください・・・て、敵一隻が不明で・・・す！？」
「何っ！？潜水したんじゃないか？」
「スクリュー音感知出来ません！」
「レーダーに反応なし！」
「バ、バカな・・・どこに行ったというのだ？・・・潜望で確認する！海面まで近づけろ！」

「敵進路方向に入ります！間もなく射程距離！」と国友。
「敵艦隊、速度を落とし浮上して来てます。」
「よし！各艦砲撃用意！」

桜井はロクの作戦にようやく気づいた。
『ま、まさか、奴等を浮上させる為に・・・』

その5　海戦（後書き）

前回の話を投稿した際に、完結の話に切り替わってました。慎んでお詫びします。

その6　迎撃

海面から潜望鏡が出ている。ブリッチから海面の様子を潜望鏡で見ている男がいた。
「敵は四隻しか・・・一隻がいない？敵を捜せ！」
「ブースター音も４つしか聞こえません！」
「間もなく射程距離に入ります！」
「各艦魚雷管開け！発射用意！」
「魚雷発射用意！」
「爆雷退避用意！」
「潜航と同時に魚雷発射だ！」
「了解！」

「敵、魚雷発射体制に入りました！」と国友。
「艦隊司令！」桜井が叫ぶ。
「敵はこちらの爆雷を避ける為、深く潜る前に、魚雷を撃って来る！そこに魚雷を撃て！」
「ですから・・・魚雷攻撃は潜水してからでないと・・・」
「もう潜ってるよな？三島？国友？」
ロクの質問に、三島も国友も笑顔で答えた。
「はい・・・そう伝えてます！」と三島。
「いますよ・・・この真下に・・・」と国友。
「はぁ？じゃあさっきの照明信号って・・・？」桜井が振り返る。
「ああ・・・こちらも魚雷用意だ！」ロクが指示を出す。

ロクたちが乗る１番艦レヴィアのすぐ真下を潜航する４番艦レヴィアがいた。

「各艦！魚雷１番、２番発射用意！」
「発射！！」
「発射！」
暗闇の海底を４本の魚雷が、海上のレヴィア艦隊に向けられ発射された。

「敵魚雷確認！目標は・・・ぜ、全弾本艦です！」と国友。
「何！？」と桜井。
「こちらも魚雷発射！」とロク。
「了解！発射用意だ！・・・回避運動は？」と桜井。
「任すよ・・・」
ロクはそう命令をすると、司令席の右脇にある階段を昇り始めた。
三島はすぐロクの行動に気づいた。
「ロ、ロクさん？どちらへ！？」と三島。
「ん？迎撃だ・・・魚雷撃ち落してくる・・・」
「はぁ！？魚雷をですか！？」驚く三島。

ロクはそう言うと天井のハッチを開け、ブリッチの屋根に上がった。すると艦首方向に目を凝らす。すると海面を走る４本の白い線を見つける。
「あれか・・・？」

ロクは素早く腰の拳銃を抜くと、揺れる船体に合わせて魚雷に向け四発の銃弾を発射した。先頭の３発の魚雷はロクの銃弾のせいか勢いがなくない途中で動かなくなったが、残り一発の魚雷がロクたちのレヴィアに向かってきた。
「あらら・・・当てたつもりだったが・・・」
ロクは再度拳銃を構え、魚雷に向かって銃弾を撃ち込んだ。しか

し、波が激しくなったのか船体が大きく揺れ始めた。ロクは構えていた体勢を崩してしまった。
「やば・・・全員何かに掴まれ!!」

ロクはブリッチの天井から桜井たちに警告した!それを聞いた桜井は慌てて舵を切った。
「面舵一杯!・・・ま、間に合え・・・」と桜井。
しかし魚雷はレヴィア1番艦の側面に着弾した。
『ゴン!』
ブリッチ内部でもはっきり聞こえる着弾音。しかし魚雷は爆破しなかったのだ。
「ふぅ・・・ロクさん、どこを狙撃したのやら?」

するとロクは天井から再びブリッチに戻ってきた。
「国友!?どうだ?敵は?」
「はっ!ロクさんの読み通り・・・着弾します!」

「魚雷!?」
「バカな!?回避だ!!なぜ気づかなかった!」
「ま、間に合いません!」
「くっ・・・」

レーダーを見つめていた国友は急に大声を上げた。
「魚雷着弾!敵艦の横腹です!」
ブリッチ内は歓声に溢れた。
「やりました!ロクさん!」と桜井。
「安心するな!もう1隻いるんだ!国友!位置は?」
「一次の方向!だいぶ慌てている様子です!」

「沈めるのはおしいな・・・」
「ロ、ロクさん・・・？」
「残り全艦隊に告げろ。全艦急速潜水！敵残りの艦を包囲せよ！」
「はい！」
「三島！敵艦に打電だ！海中に沈みたくなくば、我が艦隊に全面降伏せよ・・・と！」　ニヤリと笑うロク。
「は、はい！」
「この場で敵と？こ、交渉ですか・・・？」唖然とする桜井。
「ふぅ・・・こんなもんだろ？」ため息をもらすロク。

P7の大会議室。中央に久弥と楠本の姿。それを境に、左右にロク隊の艦長たちとキーンと白井の姿が互いに向かい合って座っている。なぜか両陣営とも殺伐としている。そんな中、中央にいた久弥が口を開いた。

「うーん・・・結果はロク班の勝利と思うがどうかね？」
ロク側にいた海兵らは大きく頷き、満足気だった。するとキーン班にいた白井が挙手をする。
「なんだ？白井？」と久弥。
「魚雷が先に命中したのは我が方です。そのシュミレーションは当てになりません！」

白井の意見に、ロクらは渋い表情だ。白井の抗議が続く。
「旗艦である1番艦を先に沈めたのは、我が艦隊であって・・・」

「異議あり！！」
白井の意見途中に挙手したのは、ロク班の桜井だった。

「何だ桜井！？」と久弥。

「第二艦隊の言い分では、１番艦を沈めたと言いますが・・・これを見て下さい。」

　すると桜井は中央のプロジェクターに１枚の画像を投影した。

「こ、これは？」驚く白井。

　そこに映し出されたのは、一本の魚雷の写真だった。桜井は立ち上がって写真の中央部分を指差した。

「こんな抗議もあろうかと思い、海中から磁石を使ってわざわざ引き上げました・・・白井艦長？これは６番艦タイプの魚雷で間違いないでしょうか？」

「ああ・・・だから何だ！？」

「ならここを見て下さい・・・これは１番艦に着弾した魚雷です。先が少し凹んでいるのが分かります。」

「だから、それがどうした！？」と白井。

　会場が静まり返った。

「注目すべきはこの箇所です。」

　桜井の示した箇所にある、１発の銃痕。

「なにっ！？」

「本来なら、この魚雷は１番艦には着弾しなかったのです。なぜなら・・・うちの艦隊司令が、拳銃で爆破させているのですからです！」

「なっ・・・」驚く白井。

「距離は１００メートル以上！爆破したにせよ、問題ない距離と思われますが・・・」

　ロク班からは歓声と拍手が鳴り響く。

　ロクは正面のキーンの顔を見て笑顔で会釈する。やられたという顔をしている無言のキーン。そこに久弥が口を開いた。

「他に異議はないか？」
会場からは誰も意見はなかった。
「では今回は、第一艦隊の勝利とする。３日後、５対５の海上戦の模擬戦闘を予定する。以上だ！」
「はい！！」

Ｐ７食堂。Ｐ６の食堂と比べるとかなり狭く、どことなく汚い感じが漂う。たくさんの若い兵らがカウンターに並んでいた。そこにロクとキーンが鉄のお盆を手にカウンターへと並び始める。
「おいおい！ここでは俺の方が先輩なんだぞ。少しは先輩を立てろよなぁ・・・」
「弱音は禁物だぜ？第二艦隊司令？」ロクはキーンに言い返す。
「でもよ・・・こっちにも新型の意地ってもんが・・・」
「おばちゃん！今日のおかずなに！？」

ロクは厨房に居た６０代くらいの女性に質問する。
「今日はおいしいおいしい魚のフライだよ！それと海草サラダとスープ付き！大盛りにするかい！？艦隊司令殿？」
すこし嫌味が入ったその言葉に二人とも顔をしかめた。

「たまには魚以外食わしてくれよ・・・」とロク。
「鯨、イルカ、オットセイでもいいな・・・」とキーン。
「バカ言ってんじゃないよ！そこまで言うなら自分で捕まえに行きな！」とおたまを持って怒るおばちゃん。
「へいへい・・・」

「それで？聞かせろよ・・・消えた４番艦のトリックを・・・？」
キーンはテーブルの中央に身を寄せた。

「ん？ふふふ・・・」ロクは不敵に笑ってみせた。

その7　暗雲

ロクとキーンはあるテーブルについた。キーンは車椅子のままテーブルにつく。
「それで・・・」身を乗り出すキーン。
「3日後戦う敵将に作戦を話せねぇな・・・」
「そこをなんとか・・・」
「よかろう!」

ロクは目の前のテーブルの食器などを一度どけると、食器とはしで海戦図を作り始めた。
「キーンたちは4次の方向から我が艦隊を追いかけてきた・・・」
「ふむふむ・・・」
「この時点で、4番艦に照明信号を送った。」
「なんと!?」
「1番艦の真下に潜航せよと・・・」
「それはわかったさ!なぜ我が艦隊は4番艦のスクリュー音もブースター音も捕らえられなかったんだよ?」
「苦労したさ・・・4番艦を消して、キーンたちの艦隊を一度浮上させなければならなかったんだから・・・」
「ふむふむ・・・そこそこ!」
「トリックはトロール用の網だ。」
「網?」

ロクは、ある食器をキーンの前に出して説明した。
「ああ、網だ・・・実は網を左右からループ状に海底に垂らし、その中に4番艦を吊った状態にした。」
「ま、まさか・・・4番艦を魚雷を撃つ為だけに・・・」
「ああ・・・海中じゃあ、ブースター航行には限度がある。とは言

えスクリューでの航行でも感知される。吊ってしまえば、ソナー反応もなく、ブースター音もスクリュー音もなかった・・・こちらが潜航していれば、そちらは距離を置く・・・1隻いないのを必ず浮上で確認すると思っていた。」
「こいつは驚いた・・・相変わらず奇襲だけはさすがだな・・・」
「次の5対5の艦隊戦も容赦しないぜ・・・キーン?」
「望む所だ!」
「最新鋭艦とはいえ、クルーが不慣れなところを突く・・・いいな?」
「手厳しいな・・・昔から・・・3期生のみんながお前が味方で良かったと嘆いていたのを思い出すよ。」
「なんせ、これしか能がなくてな・・・」頭をかくロク。

ロクとキーンがある狭い部屋で寝ている。ロクはハンモック。キーンはベットで寝ている。ロクは起きていて丸い小窓から夜空を眺めていた。
「まだ起きていたか?」
キーンがベットからロクの様子を伺った。
「今日は時化るな・・・船酔いもきつい・・・」
「明日、定期便はロク班だろ?久々の地上じゃないか?」
「ああ、キーンの足も出来てるらしいし・・・」
「そいつは助かる。車椅子だと、行ける場所が限られる・・・」
「それよりまずリハビリだろ?」
「やってるさ・・・ほら?」
キーンは松葉杖だけで、ベットから飛び起きて見せた。
「無茶するなよ・・・」
「それとジャガーはどうする?」
「持ってくる・・・屋上で走らせてやる・・・」

キ「そうか・・・明日早いんだろ?寝た寝た!」
キーンが床につく中、ロクは小窓から夜空を見つめていた。

レヴィア1番艦ブリッチ。
「急速潜航!目標Ｐ６!」とロク。
レヴィアがＰ7から海底に沈み始める。朝日はちょうど海から昇り始めていた。

Ｐ６会議室。弘士と高田が席について向かい合っている。
「それでどうだ?」
「はい・・・それが・・・」
「今日が約束の日だ・・・これ以上は引き伸ばせない・・・」
「分かっています・・・しかし・・・」
「まだ生きたサンプルはある。最悪は彼らを・・・ヒデは諦めてくれ・・・」
「しかし・・・」
「刑は予定通り、本日正午行う・・・」
「はあ・・・」

Ｐ６指令室。指令室には曽根が陣取っていた。
「レヴィア1番艦確認!」と柳沢。
「ルナ?無線だ!」
「はい!こちらＰ６!海竜ワン応答せよ!」とルナ。

すると中央スクリーンにはロクの姿が映し出される。
『こちら海竜ワン!到着は４０分後だ!』
「了解!」

「元気そうだな？ロク？」
『参謀も・・・』
ロクと曽根は互いの顔を見つめあうが、それ以上の言葉はなかった。

ロクは、ポリス内の桑田の墓の前にいた。
「ただいま・・・」
そう呟くと、跪き祈りを捧げるとすぐ立ち上がった。すると側の塀の上を見つめる。

ロクはいつもの塀の上にいた。太陽は真上、風は穏やかだった。すると後方の階段を駆け上がって来る音が聞こえる。すると息を切らした陽が上がってくる。
「ロ、ロクさん・・・！？」
「おお、来たか陽・・・？」
「い、いえ・・・不謹慎です・・・まだ喪に服していなきゃいけないのに・・・ったく男って生き物は・・・？」怒った口調だが、なぜかロクの顔を見れない陽。
「ん・・・？」
「ただ・・・桑田が亡くなって寂しいのは凄くわかるんです・・・凄く分かるんですが・・・？どうなんですか？こういうの？」
「はあ・・・？」

陽はロクの顔を見れず、たまに女の子らしい仕草でロクを上目使いで時折見つめていた。
「ただ、互いにプロジェクトソルジャーです・・・お話は嬉しいのですが・・・」

「受けない・・・という事か？最初の方がよく分からんが・・・？」
「それと・・・言うんなら、直接言って頂いた方が・・・何もあのエロチビを通さなくても・・・これじゃポリス内でも噂になります！」
「エロチビって・・・」
「いや・・・違います！ロクさんがどうしても私って言うなら考えますよ・・・ただそれをあのエロチビ経由で話されても・・・エロチビですよ！？あのエロチビ・・・いいえ、ダブルさんはロクさんは友人かもしれませんが・・・？」
「確かに・・・お前を指名したのは俺だが・・・？」
「し、指名とか言わないで下さいよ！なんか命令みたいじゃないですか！こんな個人的な事・・・？」
「個人的？・・・あのお前ダブルになんて言われた？」

ロクはゆっくりと陽に問う。すると陽は我に返り、ロクを見つめた。

「えっ！？ロクさんが私に告白したいからここに行けって・・・ち、違うのですか？」
「うーん・・・それはダブルにしてやられたな・・・？」
「え・・・？」
陽は暫く赤くなって、固まり動かなくなった。

「あのっ！！エロチビぃー！！！」

突然陽はそう叫ぶと陽は腰の拳銃を抜き、階段をダッシュで降りていく。それを唖然と見つめるロク。
「ふう・・・やれやれ・・・」

ジプシャン軍古川基地。ツヨシのスコーピオが基地内のドックか

ら出ている。そのブリッチにツヨシらはいた。
「スコーピオ発進準備に掛かれ！目標！Ｐ６だぁー！」

その7　暗雲（後書き）

その8　脱走

ロクがポリス専用食堂で、昼食を取っている。そこへ、顔を横に向けながらロクの席の前に腰掛けるダブルがいた。ダブルは腰掛けたても、ロクに右の横顔を向けたままだった。

「よ、よお・・・ロク・・・」

ダブルの不自然な様子に、ロクは笑いを堪えながら答えた。

「陽か？」とロク。

「な、なぜわかった！？」ダブルは頬を隠した。

「どうせ、ビンタでも貰ったんだろ？」

「さ、さすがだな・・・」

「陽に何言ったかは知らんが、少しはほっといてくれ！」

その言葉にようやくロクの正面を向くダブル。左の頬には陽のものであろう手形が、真っ赤になって浮き上がっていた。

「いや、なにね・・・ロクもいつまでもなつみの事、引き摺ってたように思ってさ・・・陽は陽でお前の事、好きみたいだし・・・」

「引き摺っちゃ悪いか？」剥きになるロク。

「悪いなんて言ってねぇよ。ただ長引くじゃねぇか？お前の悪い癖だ。キキの事もそうだろ？」

「そうだ！キキの事は、お前が言うな！」少し切れ美味ロク。

「だから・・・俺もそれが嫌なんだよ・・・キキも成仏出来ねぇよ。キキは俺の女だ！」

「ふう・・・キキが死んでから言うな！そんなセリフ、生きてるうちに言ってやれよ！」

ロクは珍しく大声を張った。

「そう噛み付くなよ・・・お前みたいな頑固者を好きになるなんて、

なつみしか居ないと思ってたんだから・・・ある意味奇跡だ。ああ見えて陽は陽でかわいいとこあるじゃねぇか?知ってるか?あいつの胸?」
「胸?」
「お前が貧乳好きって言った日から、あの巨乳を隠そうと必死に胸になんか巻いてるそうだぞ!」ダブルは手振り素振りで巨乳の格好を示した。
「それは、ご苦労なこったな・・・」食事に夢中のロク。
「お前にそんな女心が分かるか?」とダブル。
「わからん!」

　すると突然二人の間に、乱暴にコップ水を置く者がいた。二人はその方向に顔を上げた。そこに立っていたのは、怒った顔をした直美がいた。
「あれ?これはこれはお嬢様・・・今日は如何しましたか?」とダブル。
「二人で昼間から巨乳の話?・・・楽しそうね?」直美の目が吊り上がっている。
「い、いや・・・こいつにですね・・・女心って物を教えていたんですよ・・・はい・・・」

「ごちそうさま・・・」
　ロクは食事を終え、席を立った。
「お、おい?ちゃんと考えて置けよ?」とダブル。
「俺らは恋愛禁止だろ?」背中で答えるロク。
「そうだけどさ・・・」
「先に指令室に上がる・・・」
　ロクはそういい残すと、一人食堂を後にする。その二人の様子を見つめていた直美が、ダブルに問う。

「喧嘩でもしたの？」二人の様子を心配する直美。
「いや・・・それならいいんだけどさ・・・ああっ！？」
ダブルは直美の顔を見て、急に大声を出した。

「な、なによ・・・いきなり・・・」
「そう言えば、直美さまはロクの嫁候補では・・・？あいつと付き合ってみない？」
そう言った瞬間、直美はダブルの左頬をビンタする。
「い、痛てぇ・・・」
「何よ、いきなり失礼ね！」
そう言うと、直美もその場から立ち去って行った。
「なんで俺ばっか・・・」

P6指令室。ロクが一礼をして入ってくる。
「入ります。」
見慣れた顔もあれば、見慣れない者もいる。司令はその最上段にいた。ロクは雛壇を上がると敬礼をする。

「第一艦隊司令、ロク。只今P7より戻りました！」
司令は不機嫌そうに座席でパソコンをいじっているが、ロクに目を合わせない。
「到着してからここに来るまで、随分と寄り道をしてないか？」

弘士は、相変わらず目を合わして来ない。ロクは司令が怒っていると察知した。
「すいません。昼食を取っていたもので・・・」
「お前にやって貰いたい事がある・・・」
「はあ・・・なんでしょう？」
「あと1時間程で、ヒデの銃殺刑を執行する。その刑を執行して欲

しい。」
「お、俺ですか?」
ロクは驚き、自分で自分を指していた。
「本当はダブルの役だったが・・・彼がロクがいいんじゃないかと言うんでな・・・」
「しかし・・・」
「報告では銃を人に向けれるとある・・・ヒデに二度撃たれているお前が適任かと言うんだ・・・どうだ?」
「はあ・・・」
ロクは戸惑っていた。撃たれていたとて、ヒデは元“仲間”だったからだ。彼の死に立ち会いたくはなかった。
「私には本日任務があり・・・恨みはありますが、銃を持たない者を銃で撃てません・・・」
「そうか・・・兵らの話によると、ロクは覚醒したなんて話も持ち上がっていたが・・・何にも変わってないようだな?よかろう、この件はダブルに任せよう!」
「はあ・・・」
弘士はこの日始めて、ロクの顔を見上げた。
ヒデの居る独房。ヒデはベットで横たわり、天井を見つめていた。そこに高田女医が兵を連れて入ってくる。
「調子はどう?」
高田の言葉にベットから起き上がるヒデ。
「まだ血が必要か?」
「え?ええ・・・」
ヒデは高田の何かの様子に気がついた。高田はヒデの腕から血を

抜き始めた。
「先生よう！俺はいつになったら死刑なんだ？」
「さ、さあね・・・」
「それまで献血も悪くないけどよ・・・」
そう言うとヒデは自分の腕に刺さっていた注射器を奪い取ると、高田の首元に突き立てた。
「あんたも嘘が下手だな・・・」

「バ、バカな真似はよしなさい！ヒデ！」
独房のドア付近に警戒していた兵2名も機関銃を構える。
「ミュウは血液感染すると聞く・・・ちょっとでも刺さったら、先生はミュウを感染する・・・」
「くっ・・・」
ヒデはそう言うと高田を人質に取っていた。

その9　　地下研究室

Ｐ６指令室。何かの警報が室内に鳴り響く。
「何の警報だ?」弘士が叫ぶ。
「地下６階の独房からです・・・収監中のヒデが人質を取って立て篭もったと・・・」とルナ。
「何だと!?」
「人質は医務班の高田主任です!」
「ダブルを向かわせろ?ロクもいたな?場合によってはヒデの射殺も構わん!逃走を図られんように全エレベーター停止だ!」
「はい!」
「・・・高田め・・・しくじったな・・・」

ヒデは高田を羽交い絞めにしながら、独房から出てきた。高田も必死に抵抗する。するとヒデの独房の３つ隣から声が聞こえる。よく見るとタケシ隊の早坂隊長が、鉄格子の窓から叫んでいた。
「手伝うかい?ヒデ?」と早坂。
「ああ・・・」

ポリス兵たちも続々と独房前に集まり始めていた。ヒデは高田の首に掛けてあったＩＤカードを引き契ると、早坂の独房前まで高田を引き摺った。
「私はいい!構わず撃ちなさい!」
高田は自分のミスで引き起こした現状を打破しようと、兵たちに発砲を命令した。しかし若い兵らは銃を構えるだけで、撃とうとはしなかった。
「何してる!撃ちなさい!」
ヒデは高田のＩＤを使うと、早坂の独房を開けてしまった。

「甘いんだよ・・・ポリスは・・・」

すると、待ちかねたように早坂が独房から出てくる。
「どうする、ヒデ?」
早坂は慌てた様子で、ヒデの影に隠れた。
「逃げるさ・・・銃殺はごめんだ・・・」
「ここからは逃げるなんて無理よ。既に封鎖されたわ!」と高田。
「なら潜るだけだ・・・聖はどこだ!?」
「なに・・・?」と早坂。

P6指令室。
「Nブロックは封鎖しろ!奴を地上に出すなよ!」
弘士が指揮を振るう中、ダブルが入ってくる。
「司令!」
「すまん・・・ヒデが脱走を図っている・・・」
「捕まえるんですか!?」
「このまま刑を執行してくれ・・・」
「分かりました!」

高田とヒデと早坂が緊急用エレベーターで地下に向かっていた。
高田はそれでも必死に抵抗する。
「ふん・・・施設中の守備隊は、若い兵ばかりで銃も撃てねぇ・・・
今のポリスの現状は酷いもんだな?先生?」
「聖を連れ去る気?」
「ああ、惚れてたんでね・・・」
「なら逢わない方がいいわ・・・」
「ど、どういう事だ!?」
ヒデは高田の言葉に逆上した。

「せめてここに居させて、楽に死なせなさい！」
「バカな・・・１０日前には元気だったはずだ。」
「女性がミュウに犯されると、病状は早い・・・特にあの子の場合は異常なくらい・・・連れ出すなんて無理よ！」
「そんな脅し、俺には効かないぜ・・・」
「彼女を見れば分かるわ・・・」
「ふん・・・」

地下６階のエレベーターの扉が開くと、バズーと兵士ら５人が待ち構えていた。
「ちぃ！ここもか・・・」
ヒデは高田を盾にすると、早坂とエレベーターから降りてきた。
「観念しろヒデ！どこにも逃げれないぞ！」とバズー。
「あの男・・・石森をやった男か？」
早坂はバズーの顔を見るなり、バズーを睨んだ。
「通せ！この女を殺す！」とヒデ。

ヒデは再度、高田の首元に自分の血液の入った注射器を突き立てると、バズーらを威嚇する。
「くそっ・・・」
「この階だよな？聖はどこだ？」

その時、外の様子の異変に気づき聖が病室から出てくる。
「ひじり・・・」
ヒデが見た聖の姿は、１０日前に見た元気な姿から程遠い姿になっていた。髪は全て抜け、顔も青白く、少しやつれている様子だった。

「ヒデ・・・」

聖はヒデの姿を見ると、髪の毛のない頭を必死に隠そうと、頭部を手で覆いながら病室からフラフラと出てきた。
「行くぞ・・・」
「うん・・・」

ヒデは高田を羽交い絞めにしながら、聖に手を伸ばした瞬間だった。銃を構えていた一人の若い兵が、聖に向かって発砲した。
「うっ・・・」
「聖!」

銃弾は聖の右肩を貫通し、聖は後方に倒れてしまった。
「患者を撃つな!何してる!?」
高田の怒号に、兵らは狙いを再びヒデらに向け始める。

「てめぇら!人質を殺すぞ!」
早坂がヒデに変わって聖の傍に近寄り、抱きかかえた。
「大丈夫だ・・・急所は外れている・・・」
「そうか・・・逃げるぞ・・・」
ヒデは高田を連れたまま、ポリス兵が少ない箇所へと少しづつ移動していく。するとヒデの目に一つのエレベーターが目に止まった。

「地下7階以降の特別エレベーター・・・面白い・・・真・四天王とやらを拝んで行くか?」
ヒデは高田を盾にしたまま、特別エレベーターに近寄っていく。

あるエレベーターにロクとダブルが乗り合わせている。ロクは拳銃に弾を込めて、ダブルはインカムで何かを話している。
「銃殺だと!?生け捕りじゃないのか?・・・・・・わかった。おい?そういう事だ・・・」

「おいおい・・・手間省くなよな・・・」ロク。
「現在、地下6でバズーらが追い込んでるらしい。」
「なぜ地下に下がる？・・・・・・目的は聖か・・・？」
「野郎っ・・・俺の花嫁に・・・」

エレベーター内のヒデたち。聖は早坂の肩を借りていた。
「聖！？大丈夫か？」
「ええ、大したことは・・・どこに行く気なの？」
「まあ見てろ！」とヒデ。
「何をする気なの！？」
「真・四天王さ・・・」
「馬鹿を言わないで！ここにそんなものが・・・」高田が叫ぶ。
するとエレベーターが止まり、扉が開いた。そこには薄暗い研究所が彼らを待ちわびていた。

その１０　　ヒデと死龍

ヒデたちの前に現れたのは、まるで何かを研究するためのラボが広がっていた。何人かのスタッフはヒデたちの様子を見て慌てて反対側の出入り口に逃げていく。ヒデは誰も居なくなった事を確認すると、武器にしていた注射器と高田を早坂に任せた。

「こ、ここは・・・何だ・・・？」

ヒデは一人、ラボ内を歩き回る。そこには大なり小なりの水槽や、円柱のガラスの水素内に赤ん坊から、成人女性の遺体が全裸の格好で緑色に着色された何かの液体に漬けられている。特に赤ん坊の数は多い。

すると聖が奥の方から何かを見つけ叫んだ。

「な、なんなの？中にいるの・・・ロクの妹よ！」

ヒデがその声に聖のそばに近寄った。

「こ、これは・・・あのなつみなのか・・・？」

そこには巨大な円柱の水槽に入っているなつみの遺体があった。ヒデはなつみとこういった形で再会するとは思ってもいなかった。なつみは全裸のまま、緑色の液体に漬けられ、何かの管が鼻や口、そして腹部やへその辺りに何本も繋がれている。ヒデはそれを唖然と見つめていたが、やがて早坂に羽交い絞めされいる高田の元へと向かった。

「おい、ここは何の施設だ！？」

「ここは・・・ミュウを研究する施設よ・・・」

高田は悔しそうにヒデに口を開いた。

「ミュウ・・・そんな施設がこんな地下に・・・噂は聞いていたが・・・本当に実在するのか!?」
ヒデは驚きのあまり、再度施設内を見渡す。

その頃、地下6階でロクらとバズーらが合流していた。しかしロクと兵らが揉めていた。
「なぜ追わない!?」
「ここからは我々も入れません・・・」
「IDがないんだ・・・入るには司令の許可がいる。」
「その司令は?」
「非常階段から守備隊を送っているとの事・・・ロクさんらはここで待機と・・・」ある兵が答える。
「追えって言ったり、待機って言ったり・・・それで聖は?」
「はあ・・・一人女性を連れて行ったとの事です!」
「手が出せないか・・・誰か地下の見取り図を持って来い!」

「ミュウはなぜ産まれ・・・なぜ早く死んで行くのかをここで研究していたの・・・」と人質の高田。
「タケシの捜していた、真・四天王ってこれの事か?」
「馬鹿言わないで。これが四天王に見える?」
ヒデは言葉を失い、その場で跪いた。
「ポリスは一体何を隠してるんだ・・・?」

すると奥の階段から、複数の足音が聞こえてくる。早坂はいち早くそれを察知した。

「ヒデ?やばいぞ!ここにも兵が来る!急げ!」と早坂。
「ああ・・・先生よ!?聖は貰っていくぜ!」

「馬鹿言わないで・・・ここならまだ治る可能性が・・・」

高田は必死にヒデを説得した。

「荒野で産まれたんだ・・・荒野で死ぬのが運命さ・・・」ヒデは弱った聖を見つめる。

するとヒデは空調の網戸を蹴破り、そこに聖を押し込んだ。

「ここから上に向かうんだ！」とヒデ。

「ヒデ・・・」

「いいから先に行け！必ず追いかける！」

「うん・・・」

聖は一人空調ダクト内を這って行く。

「こいつはどうする？殺すのか？」

早坂は羽交い絞めの高田を更に締め上げた。

「いや・・・ここを出るまでは、人質になってもらうさ・・・ポリスにとっては、無くてはならない人らしいしな・・・？」

そこに部屋のドアが開く音がする。身を構える早坂とヒデ。

「久しぶりねヒデ・・・」

そこにいたのは、青白い顔をしたマスク姿の死龍だった。

「その声・・・手榴か・・・？」ヒデは身構えた。

「死龍・・・なぜここに？」驚く高田。

地下６階で待機中のロクたち。ロクがインカムの無線に耳を澄ましている。

「ダクトを使って逃走だと？・・・おい！図面だ！奴等また上に上がってくるぞ！」

兵が施設内の図面を床に開く。それを見つめる3人。
「この空調ダクト・・・一体どこに繋がってんだ?」とバズー
「普通のダクトと違うな・・・?」とダブル。
「この施設・・・一体・・・?バズー!?」
ロクはバズーを睨んだ。
「し、知らねぇよ・・・大体、俺らこの階から下へ入れねぇだろ?」
「こいつ・・・普通のダクトじゃねぇ・・・中央の制御室へ繋がっている・・・なにかを隔離する為に作られている・・・」とロク。
「ヒデ・・・何するつもりだ・・・?」とバズー。

「生きていたか・・・?手榴?」
「勝手に殺さないで・・・」と死龍。
死龍の息は荒く、立っているのが精一杯の様子だった。死龍は武器も持たずヒデたちに近づく。

「こんな地下に、こんな施設があるとは思わなかったな・・・」
「お前も知らなかったのか・・・?」
「6年ぶりかしら・・・?ジプシャンにいたとはね?」
「そのマスク・・・あの時の・・・?」
「幸いにもね・・・」
「何の用だ?」
「その人と人質の交代よ。」
死龍は高田を見てヒデに話した。

「信用できないな・・・」
「その人はソルジャーたちに格闘技を教えるくらいの猛者よ・・・
私は見ての通り病人よ・・・どう?」
「・・・・・」ヒデは高田を見つめた。

「追ってくるのはロクよ・・・私の方が都合が良くて・・・？」
「早坂さん!?」
「ああ・・・」
ヒデは高田を早坂に任すと、死龍に近づき身体検査をする。

「武器は持ってないようだな・・・いいだろう。あんたが人質ならロクも手が出せないか・・・？」とヒデ。
「相変わらず、賢いじゃない・・・？」
「早坂さん?そいつを縛って置いてください。」
「ああ・・・この女医はいいのか?」と早坂。
「大丈夫、こいつを連れて行きます。」
「・・・」
死龍は不敵に笑っていた。

その11　尖った牙

ヒデと早坂は狭いダクト内を這って移動していた。ヒデと早坂の間には死龍もいる。ヒデは後ろを振り返りながら黙々と前へと前進していた。

「なぜ、あの施設に・・・？あそこは一部のポリスの者しか入れない様子だった・・・」とヒデ。

「私を誰だと思ってるの？あそこのスタッフが避難した際に、ドサクサに入ったの・・・」と死龍。

「当時と変わらんな・・・その勘に触るしゃべり・・・」

「元々ここのミュウに関して調べていた・・・私もミュウよ・・・」

「ふーん・・・俺もらしいぜ・・・そして聖もだ・・・あっ！？お前それで人質を交代したな？」

「そうよ。今頃気づいたの？」

「そういうとこも変わんないな・・・なら注射器で脅しても意味ないようだな？」

「そのようね・・・これからどうする気よ？」

「さあな・・・夜になったらここを出るさ。」

「地下からも街からも逃げれないわよ。」

「俺は一度ここから逃げてるんでね・・・」

「ふふふ、そうよね・・・」

３人の先には聖がいた。聖はダクトの最後部分からその先をキョロキョロと覗きこんでいた。

「聖！？何してる？」

「何って・・・行き止まりよ・・・」

聖の振り返った先に死龍を見て何故か不機嫌になる聖。

「またあんた？」と聖。
「縁があるわね？」と死龍。
「どういうつもりよ？ヒデ？なんでこの女なの？」
「今度は、こいつが人質だ！」

狭いダクト内を、ヒデと聖は交代すると、ヒデは聖が覗き込んでいたダクトの先を見つめ驚愕する。
「こ、これは・・・？」

ヒデの目に飛び込んできたのは、直径１００メートル程の円柱の形をした縦の人工的な空洞だった。中は薄暗く、地上に向かった先も照明らしきものはない。ただ縦に伸びた壁の所々に小さな照明がランダムに取り付けられていた。天井までの距離は１００メートル弱だが、底の部分は暗くてどこまでが底なのか分からない状態だった。

よく見ると、空洞の中央部分に鋭利な建物がある。天井に行けば行くほどその建物は鋭利な作りをしている。天井ギリギリの部分がてっぺんだった。真っ直ぐ伸びるというよりややカーブしているようにも見える。ヒデの声に早坂もダクトから顔を出した。
「まるで尖った牙だな・・・」早坂が見上げる。
「何の装置だ・・・？」

二人は唖然としその鋭利な建物のてっぺんを見つめていた。
「核ミサイルか・・・？それに射出口か・・・？またデカいミサイルをポリスは持っているんだな？」
「馬鹿言え！こんな直径の核なら、地球ごと吹き飛んでしまうぞ！」
「じゃあなんだこれは？」

『なんの空洞なんだ？俺がいた時にこんな穴がポリスにあるなんて聞いたことないぞ・・・しかも、この中央の鋭利な建物は何だ？俺

らがいたのは北ブロック・・・ダクト内を這ったとしてもかなりの距離を進んだ。俺の勘ならここは北ゲートの真下かそれ以上・・・』

ヒデは一人悩んでいた。

「何!?死龍が人質に!?」

無線を持ったロクの声が裏返った。

『私の身代わりにね・・・なにか作戦があるみたい・・・なぜあのブロックに入ったのかは不明よ。ヒデと死龍は共に一期生・・・それにミュウよ。共闘したかもしれないわ・・・』

「馬鹿言わないで下さい!それで、死龍は!?」

『ヒデたちとダクト内に・・・兵らが追っているわ・・・』

「断面図でそのダクト内の先に、妙なブロックを見つけた・・・北ゲートの真下辺り・・・ポリスの敷地外だ?この巨大な空洞はなんだ?」

『空洞?私に聞かないでよ?』

「そうだな・・・自分で確かめる・・・」

ロクは無線を切ると、ダブルとバズーに目だけで合図を送り、その場を立ち去る。2人も合図に感づいたのか無言でロクの後を追う。

ダクト内の4人。ヒデが空洞内を見渡していると、ダクト内そばに上下に伸びた鉄梯子を見つける。

「これで降りれるぞ!」とヒデ。

「馬鹿な・・・地上に逃げるんじゃないのか?」と早坂。

「これがタケシが捜していた、真・四天王だろ・・・それにポリスの構造から考えて上に行ってもハッチは開かないだろうな・・・」

「馬鹿言え!下に行けば兵たちに捕まるぞ!」

「気づかないか?兵たちが追ってくるなら、もうとっくに追いつかれている!」

「どういう事だ!?」
「追ってこないんじゃない・・・入れないのさ・・・ポリス兵もな・・・」
「ま、まさか・・・?」
「どうやら、俺たちは見てはいけない物を見てしまったようだぞ。」
「私たちはどうするのさ?階段を上がる力なんて私に残ってないわよ・・・」と聖。
「おぶってでも連れて行くさ・・・手榴はここで開放してやる!」

死龍はヒデの顔を見つめる。
「随分余裕ね?」
「病人じゃ足手まといだ・・・」とヒデ。
「あら気づいたの?」
「体中が悲鳴を上げているな?数日前まで重症だった動きだ・・・それとも俺たちと逃げたいのかな?同じミュウとして・・・?」
その言葉に死龍は迷っていた。ヒデもその死龍の様子を伺っていた。
「それもいい手ね・・・?」死龍が笑う。

P6指令室。指令室が慌しい中、柳澤が司令に叫んだ。
「司令!古川方面に、巨大な砂煙確認!」
「スクリーンに出せ!」と弘士。
中央の巨大スクリーンに映し出されたのは、遥か彼方の砂塵の映像だった。

「距離不明!先日の敵サンドシップの物と思われます。」
「柳澤、進路を計算!我妻、P7にレヴィア艦隊の発進要請を!」
「了解!」
「これより警戒レベルを2つ上げる。ヒデの捜索は引き続き続行し

ろ！」

ロクとダブルとバズーは北ゲート前にいた。北ゲートが左右に少し開くと、ポリスの中から3人が出てくる。するとロクはある方向にひとり走り始めた。

「どうした？ロク？ちゃんと説明しろ！」

ロクの後姿にバズーが叫んだが、それを無視するようにロクは先へと走り続ける。するとある箇所に立ち止まり、地面を片足で勢いよく踏み始めた。

「ロク、どうしたんだ？」とダブル。

「前から不思議と思っていたんだ・・・」

「だからなんだ！？」

「ある箇所の上を走ると、エンジン音が二重に聞こえる箇所がある・・・」

「なにっ！？」

ロクは場所を変えながら、足で地面を叩き続けた。

「最初は、塀に音がぶつかって聞こえていると思っていた・・・もし図面の通り、この辺りに本当に巨大な空洞があるとしたら、その音は下から聞こえていた事になる・・・」

「確かに・・・」とダブル。

するとダブルもロクの真似をし、地面を無策に踏みつけ始めた。

「おいおい、ダブルまで・・・」二人の様子に呆れるバズー。

『この下に一体何が眠っているんだ？・・・これがタケシが捜していた真・四天王なのか・・・？』ロクは必死に地面を蹴っていく。

その１２　　ジプシーの宿命

バズーもロク同様に地面を蹴り始めた。塀の上の見張りたちはこの３人の様子を滑稽に見つめていた。するとある見張りが、塀の上から３人に叫んだ。

「北方面に砂塵が見えます！敵の船かと思われます！」

「チィ！次から次へと・・・」

ロクたちはその声に作業を止め、再び北ゲート内に戻っていく。

空洞内。死龍が先頭に、早坂、そして聖をおぶったヒデが順に梯子で下へと向かって降りていった。ヒデは聖をおぶっている分、苦しそうな顔を見せる。すると真上にいるヒデに向かって、早坂が叫んだ。

「その女がどんな繋がりだか知らねぇが、落とすんじゃねぇぞヒデ！」

それを聞いたヒデも、真下の早坂に返した。

「ああ、分かってるさ！・・・しかしどのくらい深いんだこの穴！やや曲がってるせいもあるが、まるで底が見えないぞ！下を見るだけで目がくらむぜ。」

「下を見るなよ！それにしても下の仮面の女。なんで連れて行くんだ！？」

「人質だ！さっき聞いた話では、そいつはＰ５の四天王だぞ！」

「あ、あの死龍かよ！？おいおい、冗談だろ！？なぜここに居るんだ！？」

「なら本人に聞いてみろよ！？」

「知るか！？なら妙な動きをしたらこの底へ蹴落とすからな！」

すると死龍は上のヒデと早坂を睨みつけた。
「何ごちゃごちゃ言ってのよ。ここにまたダクトがあるわ！少し休憩しない？疲れたでしょ？」
「ああ、そうだな・・・今日は怖いくらい優しいじゃないか？ええ手榴？」
「ここで死なれたら手柄にならなくてよ。」
「任務優先かい・・・？」

北ゲート塀の上。ロク、ダブル、バズーが北方向の高く舞い上がった砂塵を見ていた。するとロクはインカムを口元に持ってくる。
「我妻？指令室は北の砂塵を確認しているのか？」
『はい。サンドシップです。ポリス道を南の進路ですが、こちらに向かうかは微妙です！』
「予想到達時間は？」
『2時間半と見ています。レヴィアは既にP7を出発しています。』
「わかった・・・何かあったら追報をくれ。」
『了解です。』

ダクト内の4人。ヒデと早坂が空洞内を見ているのに対して、死龍と聖がダクト内で向き合っていた。
「髪の毛・・・？」聖の頭を見る死龍。
「言わないで・・・」
「ごめん・・・」
聖は手の平で、髪の毛の抜け落ちた頭部を隠そうとした。

「逃げたんじゃなかったの？」
「あの後、街で撃たれたの・・・大砲にね・・・」

「あんたもヘマはするのね?」
「生きてたのが奇跡って言われたわ。昔から体力の回復だけは人一倍早くてね・・・」
「あなたもミュウなの?」
「そうみたいね・・・」
死龍は一度目を伏せた。

「ミュウって・・・?」
「ミュウはね・・・」
死龍は聖の言葉を掻き消すように言葉を被せた。

「ミュウは・・・ミュウはね・・・一度発症すると治らないって言われている・・・」
「そうらしいね・・・」
「血を吐き続けて、最後は眠るように死ぬ・・・もう何人も見てきたわ・・・」
「私もそうやって死ぬのね・・・?」
「ポリス内部でも、まだ血液の病気としか把握してないわ・・・昔は女性しかかからなかった・・・そんな記録が残っていたわ。それで一時この国の人口は激減した・・・それと本来ミュウの人間と、ミュウから感染した人間が居る。あなたは恐らくヒデから感染した口ね・・・ここに残って治療を続けなさい!」
「命令しないで!荒野で生まれたんですもん。荒野で死ぬわ・・・それがジプシーの定めでしょ?」
「そうかもね・・・?」と死龍。

するとヒデが空洞の中から戻ってきた。
「早坂は上へ、俺は下を降りてみる。手榴?ここにいろ。聖を頼む。」
「あんた、人質の私にこの子を見てろって言うの?」

「この先は空洞がやや曲がっている・・・聖を背負っては無理だ・・・」
「あんたね・・・この顔の傷・・・誰に付けられたと思ってるのよ？」
「知らんな、ロクだろ!?」
「くっ・・・いいわよ!戻って来なかったら私はこの先のダクトに向かうわ!この子を外に連れ出しても何にも出来ないわよ!」
「どこで死ぬかは、聖が決める事だ!」

ヒデはそう言うと、早坂と階段を上下に別れてダクト内から消えて行った。
「あんた・・・敵なのに随分ヒデに信用されてんのね?その辺のあの人の感覚が私にはわかんないわ・・・?」
「嫌いじゃないわよ・・・好きでもないけどね?」
死龍は聖に不敵に笑ってみせた。

ジプシャン軍鹿島台本部。総帥の座には寛子が座っていた。すると前方から犬飼参謀が入ってくる。
「総帥、本隊の出撃の準備が整いました。」
「よかろう。我が隊もＰ５に向け出発をする!」
「ははっ!」
「Ｐ６方面の全ての基地を放棄する。よいな?犬飼?」
「ははっ!・・・しかし本当によろしいのですか寛子様?あのツヨシめにＰ６を攻撃させて・・・?前総帥の遺言が・・・」
「Ｐ５も時間の問題だ。この期に及んで順番などどうでもよいわ!しかもツヨシが父の本当の息子かどうかも分からんしな。」
「しかし・・・」
「これで本当のＰ６の正体が分かれば、それもよしとする・・・では駄目か?犬飼?」

「まさか・・・ツヨシをＰ６の餌にしたという事ですか？」
「その通りだ・・・」

荒野を南下するスコーピオ。そのブリッチにはタケシと両角がいた。
「専門家の話では、艦を止め充電に３０分程度は掛かるとの事・・・」
「３０分？面倒だな・・・？」
「直径５メートルの大筒です・・・仕方ないかと・・・」
「それで効果は？」
「はい、場合に寄っては地下のシェルターまで威力を発揮出来るとの事です！」
「いい加減な答えだな？どんな場合なんだ？」
「はあ・・・専門家の話です・・・真上からが効果があるそうですが、所詮この艦も陸戦兵器・・・発射時は街の真横からでしか撃てません・・・」
「最初から分かっていることだ・・・」
「元々は対艦用に作られた敵の兵器です。街の攻撃としては・・・」
「その為に砲口を大きくし、改良したはずだろ？それで？」
「は、はい・・・１発目の攻撃で街の地層部分、２発目で地下１階と地下２階の住居シェルターを、３発目でポリス内部の核シェルター部分の攻撃が効果的と申しております。」

ツヨシは突然席から立ち上がり、進行方向へと目を向けた。
「３発の攻撃が必要か・・・？くくくっ・・・充電時間を入れると、Ｐ６も僅か９０分という事か・・・？移動を入れてもポリスはあと４時間で終焉・・・」

その１３　陽の初仕事

Ｐ６指令室。柳澤が敵サンドシップの進路を急ぎ計算をしている。
「妙だな・・・速度を落としたか？」

その声に弘士が柳澤を覗きに来る。
「進路はまだ分からないか？」
「はい・・・この分では、南下かこっちかはまだ・・・」と柳沢。
「通り過ぎてくれればいいが・・・ルナ？黒豹は？」
「新隊長は既にスタンバイしてますよん！」
「なら・・・行ってもらうか・・・？」と弘士。

北ゲート前。エスプリの車内でイライラしている陽の姿があった。
「遅いな・・・まだかよ？」
するとフロントガラスに山口の姿が映し出される。
『焦っても仕方ないです。じっくり腰を据えて・・・』
「う・る・さ・い！」
『へいへい・・・で？・・・ロクさんからの話ってなんだったんですか？』
「あっ！肝心な事聞いてないや・・・あのエロチビのせいで・・・」
『ダブルさん？聞いてたら怒りますよ・・・』

すると山口の映像が切れ、ルナに変わった。
『こちら指令室。黒豹聞こえますか？』
「待ってたわ！偵察ね？」
『はい！敵の足が遅くなりました。三方からの偵察をお願いします。』
「了解！北ゲート開けて頂戴！山口副隊？聞こえたわね？３番機は

アキラでお願い。その他はここで待機よ。」
『了解！』
『了解。北ゲート開けます！』

すると陽の車に、音声だけの無線が入る。
『正面は、陽だな。左右は山口とアキラ・・・』
「ん・・・？誰・・・？ロクさん？」
無線の声はロクだった。陽は車の周りを見渡す。すると北ゲートの塀の上からロクとダブルとバズーが覗き込んでいた。
『左右なら奴等もすぐ逃げれる・・・それと・・・』
「あの・・・隊長は私です！！作戦は私が立てます！！」
『ああ、ごめんごめん！』
「・・・って、どうして3人がそこに？ヒデが逃げてるって聞きましたよ？」
『その捜索だ・・・』
「警戒レベルが上がります。そろそろ皆さんスタンバイして下さいね・・・敵は先日のサンドシップ・・・ロクさんが挑発するから・・・」
『はいはい・・・』

北ゲートが開き、陽らは車のギアを入れ始めた。
「さあ、みんな行きますよ！」
塀の上から陽の隊に敬礼するロクたち。

その頃、ヒデは空洞の底に辿り着いていた。底の部分は牙のような建物が空洞の壁部分に最も近づき、人が一人歩けるほどの幅になっていた。照明はわずか上部にあるだけで、かなり薄暗くなっている。ヒデは手探りながらその狭い部分をゆっくり歩き始めていた。

「なんだこの建物は・・・？なにか発光する機械そのもの・・・？入れる所もなさそうだ・・・しかし上に行くほど湾曲している。一体何に使うんだ？」
ヒデは薄暗い空洞の天井部分を見上げ、建物の周囲を回り始めた。

同じ頃、早坂は階段を昇り空洞の天井部分に到達していた。天井部分には手で回すようなハンドル付きのハッチがある。早坂は一度下を覗くと、あまりの高さに唾を飲み込んだ。
「なんて高さだ・・・底すら見えない・・・」
早坂は片手でハッチのハンドルを回そうとするがびくともせず、恐る恐る両手を使って回そうとするが全く開く様子がない。
「くそっ！非常口じゃないのかよ！開きやしない！ヒデの読み通りか・・・」

北ゲート外で、再び荒野を確認しているロクら3人。そこにルナから無線が入る。
『こちら指令室ルナ。ロクさん聞こえますか？』
「こちらロク。どうした？」
『間もなく警戒レベルを上げます。艦隊司令は1番艦にお戻り下さい。ダブルさんはSC隊を率いて東ブロックへ！バズーさんのアシカムは北ゲートへお願いします。』
「わかった！ヒデはどうするんだ？」
『守備隊が追ってます。大丈夫です、出れませんよ。』
「ならいいが・・・おいダブル？出撃準備だ！」
「ああ！」
ロクらは急ぎゲート内に入って行く。

ダクト内の聖と死龍。聖がいきなり咳き込む。すると大量の血を吐いてしまう。慌てて聖の背中をさする死龍。
「大丈夫？」
「う、うん・・・」
「あいつら・・・戻って来ないわね？私も病み上がりなんでさすがにあなたを背負って上に戻れないわよ？どうする？」
「ヒデは戻って来るわ・・・」
「そうだといいけど・・・」
「戻るわよ・・・」
「でもこのままではあんたが・・・」
「気にしないで！」

Ｐ６から北へ３５キロ地点のポリス道。陽のロータスが北へ向かっていた。陽は進行方向の砂塵が高く空に舞い上がっているのを確認した。
「凄い砂煙だ・・・やはり先日の・・・山口？アキラ？捕らえた？」
『いえ・・・敵もＳＣ隊を出してる様子です。かなりの数です。』
「敵も臨戦態勢？ならＰ６に行くね？」
『通過する量ではない・・・という事ですか？』
「いいわ・・・後は私が・・・先に帰ってＰ６に報告して。」
『はあ・・・隊長は？』
「奴を確認するまで近づく。」
『平気ですか？我々も・・・』
「や・ま・ぐ・ち・・・命令が聞けない？」
『いえ・・・では先に戻ります・・・』
無線が切れ、陽は一人怒り始める。
「ったく！男って生き物は・・・女だからって舐めないでよね・・・」

陽は前方の砂塵に向かってアクセルを踏んでいた。

その１４　　白髪のヒデ

スコーピオブリッチ。ツヨシが中央の司令席に座っている。そこへある兵が叫んだ。
「敵のＳＣです。真っ直ぐこちらに向かっています！」
するとツヨシが余裕の笑みを浮かべ答えた。
「１台だと・・・？まさか奴か？こちらのＳＣ隊は出撃させた。斑なら囲って討ち取れと言え！」
「はっ！」
すると両角がツヨシの傍に近寄ってくる。
「ツヨシ様？雷獣でしょうか？」
「さあな・・・しかし１台とはねぇ・・・こちらも舐められたな・・・」
「艦砲射撃はどうされます？」
「味方のＳＣがいる・・・？だが・・・任せるよ・・・」
「かしこまりました・・・敵ＳＣに砲撃用意だ！」両角が指示を飛ばす、
スコーピオの左部分。戦艦の主砲３門が静かに動き始めていた。
陽のロータス・エスプリ。車窓前方には複数のＳＣの砂塵が見える。
「来たか・・・偵察相手に２０台・・・本気ね・・・」
スコーピオブリッチ。緊迫した中、１本の無線が流れた。
『敵、黄色と黒の斑！雷獣です！』

「艦を止めろ！」
「しかし・・・ツヨシ様・・・」
いきなりのツヨシの命令に両角が止めに入った。
「先日２台確認した内の１台かもしれません・・・今出るのは・・・」
「囮という事か・・・」
「まずは艦砲かと・・・？」と両角。
「ふん・・・相変わらずお前は硬いね・・・」

陽のロータス・エスプリは間もなく敵ＳＣ隊と接触しようとしていた。陽はあるレバーを引き抜くと、左右のボンネットから小型バルカンが迫り出してくる。
「あの人ならこんな時、どう戦うのかな・・・？さぁーて行きますよ！」
陽は敵のＳＣ隊の中心にあえて飛び込んで行った。
「何っ！！」
すると飛び込んだと同時にスコーピオからの艦砲射撃と思われる爆撃がある。陽の近くにいた敵ＳＣ隊の何台かは、その爆撃で吹っ飛んでしまう。
「バカな・・・味方の所に撃つなんて・・・」
敵のＳＣ隊はその異変に気づき、陽のロータスから遠ざかった。
「嫌わないでよね・・・好きになられても困るけど・・・」
陽はハンドルを巧みに捌きながら、敵サンドシップに近づいた。

スコーピオブリッチ。ある兵の悲痛な無線が流れた。
『こちら先発隊！艦砲を御止め下さい！味方が・・・味方が！』
「討ち取ったか？」
ツヨシはその無線を無視して、敵の確認を優先した。

「敵ＳＣ、来ます！」
ツヨシの表情が変わった。
「１台でか・・・？機銃！生きて帰すな！」

陽のロータスは、砂塵がたくさん舞う敵シップ近くまで取り付いていた。その砂塵の少しの隙間にあの船の姿を確認する。
「やはり、先日の・・・」
陽のＳＣはスコーピオからの機銃攻撃の標的になっていた。
「これだけ確認できれば・・・」
陽は急ぎハンドルを切ると、今度はＰ６方面へと向かってアクセルを踏んだ。

ヒデはその頃、再びあの巨大空洞の手摺階段を登り始めていた。そして聖と死龍が待機している薄暗い横穴のシャフト口に入る。そこには聖の姿しかなく、聖もシャフト内で大量の吐血をしている。
「大丈夫か！？聖！？」とヒデ。
「私は・・・もう・・・」聖は虫の息になっている。
「あの女は！？」死龍を捜すヒデ。
「この先に様子を見に行くって・・・」
「あいつ・・・」
すると、そこに早坂も上部から戻ってきた。
「ヒデ！上も駄目だ！なにか電子ロックが掛かっている・・・手動じゃ開かない！下はどうだ？」
「下には何もなかった。行き止まりって事か・・・」
「あの仮面の女は？」と早坂。
「この先に向かったらしい・・・」

ヒデたちは薄暗くなったシャフトの奥を見つめた。

「やっぱり逃げたんだよ。俺たちの居場所を伝えるぞ?ここじゃ危険だ・・・おい・・・ヒデ!?」

突然早坂がヒデの様子を見て、顔色を変えた。すると虫の息だった聖もヒデの様子を伺う。

「どうした・・・?」とヒデ。

「ヒデ・・・お、お前その髪の毛どうした・・・?」

「髪の毛だと?」

早坂の言葉に聖もヒデの顔を見つめる。よく見るとヒデの黒髪が全て白髪に変わっていたのだ。

「ヒデ・・・」聖も思わず声を上げた。

「どうした?」

「髪の毛がどうした?」

「白髪になってしまってるぞ・・・」

ヒデは自分の髪の毛を撫で回した。

「埃でも付いたんじゃないか・・・?」

すると早坂はヒデの髪の毛を恐る恐る触り始める。

「間違いない。白髪だ・・・お前一体何をしたんだ・・・?」

「何っ・・・」

「・・・」

ヒデも聖も驚いて声にならなかった。

その頃、死龍はあるダクトの入口を蹴破ってある地下室に辿り着いていた。そこは非常灯だけが点いている薄暗い機関室だった。

「ここはどこだ・・・?」

死龍は部屋中を捜しまくり、ある内線電話を見つけ操作してみた。

「かかるのか?」

Ｐ６指令室。我妻が内線電話を受けていた。
「死龍さんから内線連絡！」
弘士が慌てて我妻の席に降りてくる。
「死龍か？場所は？」
「地下１７階、北特別機関室からです！」と我妻。
「変われ！」
「はい！」

弘士は我妻の席の内線を手にする。
「死龍か？なぜそこから・・・」
『北の空洞から更に下の階に・・・ここは一体何なの！？』
「そこは、戦前の施設・・・立ち入り禁止区域だぞ！」
『戦前の施設？だけどまだこの施設は生きてるわ・・・それとあの巨大な空洞はなんなの？』
「後で説明する。無事なんだな？ヒデたちの人質になったと聞いたぞ！？」
『奴等もこの先にいる。今は奴等から離れている。脱出できなくて困っている様子よ。なぜあのダクトに兵を送らない？』
「死龍・・・そ、そこの施設は・・・」
弘士は返答に困っていた。

その１５　幻覚

Ｐ６指令室。弘士が内線電話を掴み、言葉を捜していた。
「死龍・・・よく聞け・・・その場所な・・・」
すると横にいたルナが弘士に向かって叫んだ。
「司令!?司令宛てに黒豹から緊急連絡!」
「す、少し待てぇ!!」
『司令・・・?』
「死龍・・・そこはな・・・」弘士は声が詰まった。

弘士が話し始めようとするが、ルナが再度割って入った。
「司令!?緊急です!!」
「くっ・・・死龍・・・そこにいろ!係りの者をそこにやる。動くなよ・・・」
『はい・・・しかし・・・』

弘士は内線を切ると、正面を向いた。
「ルナ!黒豹の無線をスクリーンに!」
「はい!」

すると正面の大型スクリーンには山口の姿が投影された。
「どうした?山口!?」
『敵サンドシップは攻撃態勢です。間違いなくＰ６に向かいます!』
「何だと!?陽はどうした?」
『はい・・・敵を確認すると言って我々に帰還命令を出し、一人戦地に残りました。』
「そうか・・・引き続き偵察だ!」
『了解!』
無線が切れ、弘士は各員に指示を出した。

「間もなく敵シップは来る。警戒態勢を上げるぞ！街のジプシーたちは全員地下シェルターに避難！警戒警報発令！」
弘士の指令が部屋内に響いた。指令室は慌しくなる。その中、弘士は我妻に小声で指示を出した。
「我妻？」
「はい・・・」
「特殊防護班を北の特別機関室に向かわせろ。」
「は、はい・・・」
「死龍を救出する。ヒデらが居た場合は射殺も許可する。」
「り、了解です・・・」

ロクはその頃、レヴィア１番艦ブリッチに入った。ブリッチ内は桜井が指揮を取り、発進体勢が整っていた。
「ロクさん！警戒レベルが上がりました。敵シップはＰ６に来ると予想されました。」

「黒豹か？」
「はい、先程連絡があったそうです！」
「この艦への指示は？」
「他の第一艦隊と合流後、東海岸線で待機との事。第二艦隊も出ると報告がありました。」

「１０隻全部晒すのか？まだ６番艦からは隠しておいてもいいのに・・・」

ロクの頭では５隻のレヴィアで十分対抗出来ると感じていたのだ。
「それほどの敵でしょうか？」と桜井。
「先日の敵の中型艦とは訳が違うな。確かに火力は桁が違いそうだ

が・・・あれを使いたいんだよ・・・よし動くぞ！」
「あれ・・・ですか？了解！」
ロクは弘士の意図が分かっていた。

死龍がいる地下機関室。死龍が一人蹲っていると、重装備の防護服を着たポリスの兵が3名程機関室に入ってきた。死龍は顔をしかめながら彼らの方に近寄る。3人は恐る恐る死龍に近寄る。
「まるで宇宙人ね・・・」
死龍から見た3人は、昔ＳＦで見た宇宙飛行士の格好に近い。死龍が呆れた顔で3人を見ていると、その中には高田女医の姿もある。
「まずは頭からよ！」
高田がそう言うと、他の2名は死龍の頭から噴霧状の液体を頭から浴びせた。嫌がる死龍。
「何よ！これ！ちゃんと説明して！」
すると高田は死龍の肩を両手で押さえつける。
「暴れないで！被爆した可能性があるの・・・」
「被爆って・・・」

Ｐ7のレヴィア6番艦。キーンと白井が中心となって指揮を飛ばしている。
「急げよ！」
キーンが座りながら他のクルーに激を飛ばした。すると白井がキーンの席に近寄ってくる。
「残念ですが9番艦と１０番艦は、一発射撃砲の調節が間に合わないそうです。」
「仕方ない・・・乗組員も不慣ればかりだ。しかし・・・6、7、8は撃てるんだな？」

「可能です！」
「上出来だよ・・・準備が出来た艦から各々発進しろ！敵は待ってくれないぞ！」
キーンは初めての艦隊戦を前に少し焦っていたのかもしれない。

P7指令室。久弥と楠本が館内の様子を上から見ている。
「おやじさん、微速ながら陸に近寄っていますが・・・なんせ船ではないので・・・」

「期待はしておらんぞ。所詮こいつは巨大ドックだよ。それと9と10番艦に手間取っているな？」
「出航すら危ういかと・・・」
「間に合わせろ！」
「了解！」

死龍と高田らはあるエレベーターに乗り込もうとしていた。遅れて歩く死龍が高田の肩を強引に掴んだ。
「被爆って何よ！？それにあの液体！？」
死龍は訳の分からない液体を頭か大量に掛けられたのも怒っていたのかもしれない。高田らはエレベーターに乗り込むと、ようやく頭の部分の防護メットを脱ぎだす。
「さあね・・・司令の指示よ・・・私はただそう言われて、指定の薬品を掛けただけ・・・」
高田の返答はやけに冷たかった。何かを隠している・・・死龍は悟っていた。

「ヒデたちはどうするの？あの先にあの聖という子もいるのよ！？」
「警戒レベルが上がったの・・・兵は回せないらしい・・・大丈夫

あそこからはどうあがいても出れないそうよ。」
高田はようやく死龍の顔を見て話してくれた。死龍もそれは嘘じゃないと確信する。

「それにしても、人質を変わってくれたのは感謝する・・・さっきはありがとう・・・」

すると突然、死龍の目には高田の動きがスローモーションとなり飛び込んでくる。彼女の髪の毛一本一本が揺れているのが分かる。彼女だけではない。振り返ってもいないが、後方にいる兵2名が何かに怯えているのが分かった。

『手の震え?・・・この子たち、この狭いエレベーター内で、私に距離を取っている・・・そう言えば後ろの2名は防護メットを外していない・・・』

死龍はそう思うと再び高田の方を見た。五感が冴え、何かをしゃべっている高田の言葉一つ一つが“本当”と“嘘”として脳に入ってくるのが分かった。

『なんの感覚なんだ・・・そばにいるだけで先生たちの気持ちが分かる・・・幻覚でも見ているのか・・・?』
死龍はエレベーター内の情景が歪んで見えていた。
『もう死ぬから?・・・ミュウとして死ぬから?これがミュウの覚醒って奴なの・・・?』

「どうした死龍?」
気がついたら、高田が目の前にいた。既にエレベーターの扉は開き、後方の2名も死龍が降りるのを待っている状態だった。

「いや・・・何でもない・・・ここは・・・？」
死龍は我に返っていた。
「地下６よ・・・」
死龍はよく周りを見渡すと、見慣れた情景が広がっていた。

「さっきの話だけど・・・あれは戦前の建物ってことしか私は分からないわ・・・それに・・・ねえ死龍？聞いてるの？」
死龍はそんな質問をしたのさえ覚えていない様子で、高田をぼんやり見ている。

「被爆って何よ？やっぱりあれは尖った建造物は“核”なんでしょ？プルトニュウムって奴なんでしょ？被爆の原因は？」
死龍は今思っている自分の質問の全部を高田にぶつけてみた。

「あんな核兵器がある訳ないでしょ・・・被爆っても戦前の建物をだからよ！それに詳しくは聞かされてないし・・・あなたは暫く隔離して・・・」
高田は死龍に説明してた時だった。

「あなたは・・・」
突然死龍は高田に向かって声を発した。

「あなたは嘘を付いてる・・・私には分かるわ・・・」

その１６　　救助信号

Ｐ６指令室。ルナの所に陽から無線が入る。
「こちら指令室ルナ。黒豹ヘッドどうぞ。」
ルナの機転で陽の映像は中央スクリーンに映し出された。

『こちら黒豹。敵は多数のＳＣ隊を出撃させており・・・』
すると弘士が陽に答える。
「ならこっちだな？」
『恐らく・・・』
「で・・・？なんでお前は部下を先に帰して単独行動なんだ？」
『ちょっと前隊長みたいに挑発してやろうかと・・・うひっ！』
陽は余裕で司令に答えて見せた。指でＶサインまで出す始末。

「あのな・・・ん？ロクが敵艦を挑発でもしたのか？・・・そんな報告は聞いてないぞ！？」
『あれ？報告してなかったんですか？先日、敵兵にタケシの首を取りに来いって・・・？』
陽はさすがにロクは報告はしていない事を知っていて、弘士に話を振った。

「ロクらしいな・・・Ｐ５へ向かわす敵シップをタケシの首で釣ったか・・・？」
陽は弘士が激怒するのを期待してたが、ロクの作戦を持ち上げる結果になったのが不満だった。

『ただ・・・気になることが・・・』
「どうした？」
『先日遭遇した際から比べると、何か敵艦の雰囲気が変わった気が

します・・・』
「そうか・・・そのまま敵を監視！いいな！？」
『了解！』

スコーピオブリッチ。ツヨシが進行方向むかって左側の風景を見つめている。
「風が強くなった・・・北側？いや海側か？」
ツヨシの所に両角が近寄り、一緒に窓から外を見つめる。

「やませという風です。この季節、この辺りに吹く風と聞きます。」
「やませ・・・？よく吹くのか？」
「はい・・・強いものであれば砂嵐程度のものが・・・」

ツヨシは咄嗟に航海士に命令を下した。
「ポリス道を外れ、海側に進路を取るぞ！この風を利用する！」

レヴィア1番艦。ロクはブリッチの屋根に一人立っていた。敵シップが来る方向を見つめるのではなく、ロクも海からの風を感じていた。
「やませの風・・・？もうそんな季節か・・・？そんなに強い風でもないが・・・敵もこの風を利用してくる・・・」
ロクはブリッチの屋根から頭だけを開口部に突っ込み、ブリッチ内の桜井に指示を飛ばす。
「桜井！俺たちだけ北側にコースを変更する。」
突然のロクの声に、桜井はロクの居場所を捜した。ようやく逆さになったロクの顔を天井に見つける。
「あの・・・うちら“艦隊”なんですけどね・・・」

ロクの唐突の作戦に慣れてきたが、たまにロクの命令に不審を感じている・・・そんな言葉の意味を含んで桜井は答えた。
「なら他の艦にもそう伝えろ・・・取りあえずは北に艦首を向けておけ・・・」
ロクはそう言うと顔を引っ込めていた。
「はいはい・・・三島・・・頼む・・・」
「はあ・・・」
桜井は溜め息をひとつつくと舵を取り船を移動させていた。

「あなたの言葉には真実が見えないの・・・」
死龍の咄嗟の言葉に高田は反論すら出来なかった。
「どうしたの死龍？なにが嘘だって言うの？」

「分かるわ・・・分かるの・・・」
そう言うと死龍は突然吐血して跪いてしまう。慌てて高田が死龍に寄り添った。
「大丈夫？・・・急いで！医療室に運ぶわよ！」
高田は他の二人の兵に死龍を運ぶように指示した。両脇を抱えられ運ばれる死龍。その姿を高田は後ろから見つめていた。

「死龍・・・やはりあなたは・・・」

早坂が先程、死龍が確保された大掛かりな機関室にいた。彼は内線電話を発見すると、すぐその下の配線部分を引き千切ってはなにやら再び配線をし始めていた。

スコーピオブリッチ。ある通信兵か、ツヨシの元に黒のボードを持ってやってくる。
「ツヨシ様・・・ある短波無線をキャッチ。Ｐ６からと思われますが・・・」
「ほう・・・短波信号か？こちらが侵入させたスパイか？」
「いえ・・・救助信号です。途中で電源が切れた為、詳細不明ですが・・・最後に隊員コードまで入っており・・・認証したところタケシ隊二番隊長早坂と判明・・・」
「早坂？あの老兵早坂か？生きていたか？」両角が会話に入って来る。
「奴が生きていたか？先日の戦いでタケシと消息が分からなくなっていたはずだ・・・？するとなにかい？あのお兄様も生きているのかい？」
ふざけた口調でツヨシは兵を困らせた。

「北のゲート深くにいるとの事。それ以上は・・・」
「そう思う・・・両角？」
ツヨシは横にいた両角に薄目で合図を送った。
「はあ・・・敵の罠ですな・・・間違いないでしょう・・・」
「お言葉ですが・・・こちらの認識コードまで知っておりました。そのような事は・・・本人で間違いないかと・・・」
「しかし、救助といってもねぇ・・・なあ・・・両角？」
再びツヨシは薄目で両角に合図を送る。
「聞こえなかったのか？これは敵の罠だ！もし本当であっても味方一人・・・作戦に変更はない！」
両角は通信兵の意見を跳ね返していた。渋々自分の席に戻る兵士。
するとツヨシは両角に耳打ちする。

「あの馬鹿が生きていたら事だな？も・ろ・ず・み・・・？」
「はあ・・・兵には口封じをさせておきます・・・」

「そうだよ・・・そうこないと・・・俺は兄殺しの汚名を被る・・・なあ両角?」
ツヨシは不敵に笑っている。

巨大空洞脇のダクトに座り込むヒデと聖。ヒデは聖の肩を抱きしめていた。するとそこに早坂がダクトの奥から戻ってくる。
「いたか?」とヒデが問う。
「いない・・・あの女・・・逃げやがったぞ!」
「この先はどうなっている?」
「何かの機関室に辿り着く・・・かなり大掛かりな機関室だ。あの女の足跡はあるドアで切れている。後はどの部屋も行き止まりだ。扉は何重にもロックされている・・・八方塞がりだ・・・」
「あんた頭の毛・・・」
ヒデが早坂の髪の毛を見ると、ヒデほどではないが白髪が増えている。

「なんだ俺もじじいの仲間入りか?」
「くっ・・・どうしてしまったのかな・・・?」
「ああ、救助は呼んでおいたぜ!」
落胆するヒデに向かって早坂が叫んだ。

「救援だと?」
「これでもメカニック出でな・・・敵の内線を利用して簡易短波無線を作り、救助信号を出した。」
「それで!?」
「さあな・・・こっちは受信が出来ないからな・・・届いて浜田基地まで・・・いまあるかどうか・・・まあ運がよければ味方に届く・・・出力もあるかどうか分からんしな・・・?」
「そうか・・・」

「ただヒデの勘は当たっていた・・・奴等がここに来ない理由・・・機関室の至る所にこれより先立ち入り禁止の看板。何重にも作られているだろう出入り口、ダクトの作り、また防護服着装順の看板・・・俺たちはポリスですら入ってはいけない所に入ってしまったようだぞ・・・」

　すると聖が再び吐血をする。聖の背中を擦るヒデ。早坂は聖に難色な顔を見せていた。

「どうするんだ?そいつを連れていたら逃げるにも逃げれないぜ・・・」

「ならこの先は別行動だ・・・」

「正気か?」

「俺はこいつをどうしても連れ出す!」

「そうか・・・とは言え・・・出れる術がないんじゃなぁ・・・」

　ジプシャン軍浜田基地。

半壊した基地横にはヒデと丸田が乗り回していた装甲車と数台のジープタイプのＳＣが止められていた。すると基地内から男数名が出てくる。丸田と羽生たちだ。

「なんでだ?ジプシャンはここを放棄したのか?」と丸田。

「食い物もＳＣもない・・・毛布くらい残して置けよ!!」

「ただ暫くはここにいるか?女子供はここに置く。雨風も凌げる。それとここならＰ６まで２０分とかからねぇ!」

　よく見ると装甲車の後部からは、子供や老人、女たちが外の様子を伺っていた。

「くそ!タケシが死んだら用済みかよ。ジプシャンの奴等、食いもんぐらい分けろよなぁ!?」

羽生が無造作に転がっていたヘルメットを遠くに蹴り上げていた。
「なあ？羽生？」
「なんだ？」
「ヒデは生きてるかな？」
「さあな・・・死んでいたらどうするんだ？」
「わからねぇ・・・」
二人はＰ６方面の海岸線を静かに見つめていた。

その17　　ミュウの最期

Ｐ６指令室。柳澤が異変に気づいた。
「敵シップ！進路を変更！海側に寄りつつあります！」
「海側？」
弘士は立ち上がり、柳澤にスクリーンの投影を命じた。
「少し前の映像です・・・まだレーダー範囲外なので何とも・・・」
確かに映像の砂塵は向かって右側に移行していた。

「我妻！黒豹を当てろ！」司令が叫ぶ。
「了解！」
「ジプシャンめ・・・やませの風を利用する気か・・・？」弘士は唇を噛み締めた。

スコーピオブリッチ。机に簡易な地図が置かれ、その周りにツヨシや両角、そして数名の兵が取り囲んでいた。両角が長い棒を持ち説明を始める。
「Ｐ６の北２キロに標高５０メートル程の小高い丘があります。ここに艦を固定し、街に砲撃を仕掛けます。」
「その丘・・・この艦で上がれるのか？」とツヨシ。
「この艦の排出量で、この程度の丘なら問題ないかと・・・」
「大筒の射程距離は？」
「十分です！平地なら無理な地下への攻撃も、ここなら可能と思われます！」
「うん・・・なら中央道を南下・・・我が艦はこの丘から攻撃を開始せよ！」

レヴィア1番艦ブリッチ。ロクとルナが映像無線で話をしている。
『て、敵シップ・・・し、し、進路を変え・・・』
「落ち着けルナ・・・それで?」
『は、はい・・・だ、第一艦隊は北へ移動・・・迎撃体勢を取って欲しいとの事!』
「了解した・・・なら第二艦隊は敵の横腹って事だな?」
『と・・・思います・・・』
「街の避難は?」
『既に完了してますが?』
「街の守備隊全員にゴーグルを着装させろ!」
『と、言いますと・・・?』
「敵の船の輩出量からすると風を利用して風上に立ち、砂塵を舞い上がらせこの街の視界を奪う。恐らくP6は巨大な砂塵に包まれるはず!?」
『な、なるほど・・・り、了解です・・・司令に伝えます。』

無線が切れると、ロクは席から立ち上がった。
「さあて・・・行きますか・・・?桜井!頼む!」
面を食らう桜井。
「ロクさん・・・どちらへ・・・?」
「まだ敵到着まで時間あるだろ?偵察偵察・・・」
ロクはそう言うとブリッチの階段を下りていった。そんなロクを呆れ顔で見ている桜井たち。
「あの人にやっぱ船は合わないのかな・・・?」

その頃、レヴィア6番艦から8番艦がP6の南海岸付近に上陸し始めていた。1番艦から5番艦とは形も大きさもブリッチの構造も違く、潜水艦を逆さにしたその黒いボディは砂塵を舞い上がらせ、一路P6へと荒野を走り出していた

６番艦ブリッチのキーンは北側に見える巨大な砂塵を見て驚いていた。
「先日の敵シップよりも大きいな？」
すると艦長の白井がキーンに報告に来る。
「Ｐ４常中の戦艦と聞いています・・・右が空母、左が戦艦・・・全長は３００メートルあるとも・・・」
「奇妙な形だな！？Ｐ４で遭遇した船か！？」
「ご存じですか？」と白井。
「因縁という奴だな・・・向こうも偵察は出してるはず！？これはここを通り過ぎるだけでは終わらないな・・・」

Ｐ６地下６階ポリス専用医務室。死龍がストレッチャーに乗せられ運ばれてくる。死龍は薄目を開け、体全身が痙攣を起こしている。
「静かに運んで！」
高田の合図でスタッフが死龍を手術台に移し変えた。
「全身麻酔を用意！！」
すると死龍が起き上がり、高田の白衣を掴んだ。
「せ、先生！正直に言って・・・あ、あとどのくらいまで持つの・・・？行かないといけないの・・・み、みんなが待っているのよ・・・」
「こ、この体でどこに行こうって言うの！？戦闘は無理よ！」
「せ、戦場よ！戦場に決まってるじゃない！」
「な、なぜ？」
「エレベーターで兵たちのイヤホンから流れていた・・・て、敵が来てるんでしょ？行かせて！」

高田は死龍の聴力に驚いていた。

『いや・・・ミュウだからか・・・？』

「死龍！落ち着け！」

死龍の手を振り切ろうとする高田。他のスタッフも死龍を必死に取り押さえようとする。

「分かるの・・・体が崩れていく感じが・・・もう最後なんでしょ？教えて・・・先生・・・？」

高田は死龍の死期迫る表情に覚えがあった。

高田はミュウで死ぬ者をたくさん見てきた・・・

吐血で始まり全身痙攣、そして死・・・ミュウとしての末期症状だった。ここまで来ると、ポリスにある薬品では痛みを堪えるのも不可能だった。

ある者は目が痛いと自分の眼球をエグり取り・・・

またある者は手の先の痛いと自分の指を食い千切り・・・

高田はその一人一人の答えてやれなかった若い頃の自分を思い出していた。

だから全身麻酔・・・それしか彼らの痛みを救う術はなかった。

しかし・・・

死龍は私の白衣を離そうとはしない・・・

末期なのは一目瞭然で、相当痛みを堪えているはずだ。なのに・・・

彼女は戦場で死にたがっている。

死龍の気持ちに答えられない自分が辛かった。

死龍は自分の顔を掻き毟ると、遂には自らマスクを剥ぎ取った。

「死龍・・・」

初めて見る手術後の死龍。手榴時代は何度か顔を見ていたものの、撃たれたと聞いた後の顔を見るのは初めてだった。
眼球がないのか、左目部分は陥没しており、目の辺りから左耳部分までたくさんの手術跡が見える。耳はかろうじて耳たぶ部分が付いている程度だった。
死龍は唸りながら高田を見つめていた。
「先生・・・・・・早く・・・・・・時間が・・・・・・」

高田はそんな死龍を見つめながら涙を流していた。

『伊達に女で初の四天王になった奴ではない・・・死龍は心底戦士なんだ・・・』

死龍の手榴時代から応援していた自分が居た。
年下だったがなぜか尊敬していた時もあった。
手榴が手柄を立てるとなぜか自分が褒められる気がしていた。
女性ながら戦場に立っている手榴が羨ましかった。

高田は決断した。

「鎮静剤を!」
高田を見つめるスタッフ。助手らしい女性が更に下のスタッフに声を掛ける。
「鎮静剤・・・５０を!」
すると高田は追報した。

「いや１２０よ・・・」
全ての医療スタッフが高田を見つめ、手が止まった。
「しかし・・・その量は・・・?」スタッフが躊躇う。

「責任は・・・私が取る・・・」
その量は既に普通成人女性の量を遥かに超えていた。

「は、はい・・・」
スタッフの一人が注射針の量を増やし死龍の腕に注射針を差し込んだ。死龍の苦痛の表情が和らぐ。
「先生・・・ありがとう・・・」
死龍は涙を流しながら高田に感謝した。
「落ち着いたら・・・行きなさい・・・」死龍の目を見れない高田。
「はい・・・」

『こんな事しか出来ない・・・』
高田は悔やみ、一人手術室から去って行った。その目には涙で濡れていた。

すると死龍は無表情で手術台から起き上がると、不敵な笑みを浮かべて出口に向かって歩き出していた。

その１８　　砂塵という闇へ

東ブロックの直美宅の地下施設。直美と雨音、勝也らが身を縮めて待機をしている。時折聞こえる警報やサイレンなどに怯える下の二人。

「お姉ちゃん・・・」雨音は直美に抱きつく。

「大丈夫よ・・・地下だったら・・・」

ジプシャン軍旧浜田基地。半壊した2階建ての建物の上からある兵が丸田に叫んでいた。

「北の方角に砂煙！こっちに来るぞ！」

装甲車の中にいた丸田は慌てて外に飛び出した。

「何だ・・・サンドシップか？・・・それにしてはなんて排出量だ？」

「どうする？この風だ・・・巻き込まれるぞ？」と羽生。

「Ｐ６へ行くのか？どこの誰かは知らんが・・・ならこの風と砂塵に便乗させてもらうぞ！」

そう言うと丸田は装甲車に乗り込んでいた。

Ｐ６指令室。ルナの所に無線が入った。

「こ、こちら指令室ルナ！」

『こちら黒豹ヘッド・・・敵シップは旧三陸道を南下。このままだとＰ６まで７０分だ。』と陽の声。

「旧三陸道ですね？了解！」

『案外、足が遅いんで助かったわ。そっちは？』

「万全の構えです！」

『このままだと、北の丘の横に出るわ！気をつけて！』

「了解！」

レヴィア６番艦。ブリッチのキーンと白井艦長。
「間もなく、９と１０が上陸予定！」
「間に合ったか・・・」安心するキーン。
「第一艦隊は北に進路を取った模様！」
「ロクたちは北に？砂塵が直撃するぞ？」
「砂塵を利用する敵に対し、その砂塵を利用する気では？」
「砂の中に身を潜める気か・・・？ロクならやりかねない・・・ならこちらはプレッシャーを掛けてやるか？ポリスの西に進路を取る！９番艦、１０番艦に伝えろ！」
「了解！」
「Ｐ６始まって以来の艦隊戦だ！気合を入れろ！」
黒の第二艦隊はポリスの西に移動始めた。

ポリス北１０キロ旧三陸道付近。単独行動のロクのジャガーがいた。既にこの辺り、敵シップの砂塵と風のせいか、かなり視界が悪くなっている。すると南下している敵のＳＣ隊をジャガーのレーダーが捉える。ジャガーのフロントガラスに警告の文字。
「敵か！？３台だけ？レーダーがなければ気づかなかった・・・お前は凄くいい子！」
ロクはスピードを落とし、ジャガーのガトリングバルカンのレバーを引き上げた。
「砂塵の中、ご苦労さんね？偵察隊かな？」

スコーピオブリッチ。通信兵がツヨシに叫んでいた。
「味方偵察隊より連絡！１２キロ先に雷獣発見！！」

「雷獣だと！」両角がいち早く反応した。
「我が後ろにいるのは、雷獣ではないのか？モ・ロ・ズ・ミ！？ポリスめ舐めた真似を・・・」
「どうされます？ツヨシ様？」
「このシップに挑んで来る気ではあるまい。我が船はこのままＰ６に直進する！」
「了解！このまま前進だ！」

ロクのジャガー。
「ＳＣ隊が下がった？・・・今度の敵はタケシと違って随分と慎重だな？さて・・・どうしたもんだか・・・？」
ロクは引き上げる敵ＳＣ隊の砂塵を見て困り果てていた。
「今度の敵は艦隊戦をお望みか・・・？なら・・・」
ロクもハンドルを切るとＰ６方面と引き返していた。

スコーピオブリッチ。通信兵が再びツヨシに叫んだ。
「雷獣下がりました！」
「どういう事だ！？」と両角。
「ふん・・・面白いな雷獣・・・まあまだ何か出てきそうだな？しかし、偵察隊が前に出れないとは・・・」
「海岸から浜田経由で偵察を出させます！」
「偵察隊は戻すんだ！」
「しかし・・・」
「中央を堂々と行こう！」
「はあ・・・」
「段々と敵の動きが読めてきたぞ・・・」
仁王立ちのツヨシが前方を見据えていた。

Ｐ６指令室。我妻がインカムの無線を受けている。
『敵は偵察を下げた！奴等艦隊戦で来るぞ！』とロクの声。
「了解しました。」
『ああ、俺が偵察に出てるのは司令には内緒な！？』
「はいはい、まだ気づかれてませんがね・・・」小声になる我妻。
『よ・ろ・し・く・・・俺はレヴィアに戻るよ！』
「了解！」

その時、指令室に軍服の死龍が入ってくる。驚く室内。弘士は雛壇上の司令室を下りてきた。
「死龍・・・？どうした？」
「司令・・・」

北ゲート内に待機中のＰ６のＳＣ隊。その中にダブルのジャガーストームとアシカムがある。ドライバーたちは皆外に出て北側に徐々に広がる砂塵を見つめていた。ダブルはバズーとアシカムの上にいる。
「やばいな・・・風が強くなってくるぞ！砂塵も高くなるばかりだ・・・」とダブル。

「あのシップの排出量から考えると、砂塵は相当の量になるな？」とバズー。
「視野が奪われるな・・・？」
「接近戦は不可か・・・？」
「厄介だな・・・」

南下中のスコーピオ。スコーピオは巨大な砂塵を進行方向に撒き

散らしながらＰ６へ向かっていた。ブリッチではレーダー員だろうか、ツヨシに大声で報告をする。
「間もなくＰ６がレーダー範囲内になります！」
「そろそろか・・・」ツヨシは立ち上がった。
「まずはＳＣ戦と行きますか？」
「Ｐ６とはいえ、１００台の数はあるだろう・・・こちらは５０・・・分が悪い・・・まずは敵の戦艦潰しだ！」
「ははっ！」

Ｐ６の北には巨大な砂塵が広がっている。その砂塵は北から吹くやませという季節風でＰ６を今まさに覆おうとしていた。

ロクはレヴィアの甲板に立ち北の砂塵を見ていた。
「嵐がくる・・・」

その１９　　キーンの不安

Ｐ６指令室。柳澤がレーダーに影を見つけ弘士に叫んだ。
「敵シップ捕らえました！北およそ１０キロ速度１５キロ！」
「警戒レベルＭＡＸだ！レヴィア艦隊は左右に展開。山猫、アシカム出撃！」
「了解！」
司令室内が一気に慌しくなった。

バズーのアシカム。
「了解！北ゲート開けてくれ！」

ダブルは慌ててジャガーストームに乗り込む。
「よし！全車出るぞ！遅れるなよ！」
８０台近いポリスのＳＣ隊が北ゲートを出て行く。

レヴィア６番艦ブリッチ。キーンの席に松井から無線が入っていた。
『第二艦隊は左翼をお願いします！』と松井。
「了解！ロクが右翼か・・・」
『気をつけて下さい・・・キーンさん・・・』
「敵の戦艦の構造から言えば物足りないがな・・・」
『どう言う事です？』
「敵戦艦の左半分は戦艦・・・どうしてもロクの方が標的になる・・・」
『ロクさんの事です。それも計算済みですよ・・・』
「まあこっちは、不慣れなクルーが多い・・・逆に助かるよ・・・」

『そうですね。ではお願いします！』
「場合によっては砂塵を避けて更に西に移動するつもりだ！そう司令に伝えてくれ！」
『了解です！』

無線が切れるとキーンは白井艦長に指示を飛ばす。
「白井艦長！艦隊を更に西５００メートル移動！」
「てっきり砂塵に入ると思われましたが・・・？」
「視界がきかないのにか？不慣れなこっちは中に入れば不利だな・・・せめてロク隊の餌にでもなるのが第二艦隊の使命じゃないか？どうだ白井艦長？」
「確かにそれも作戦ですが・・・こちらには切り札が・・・？」
「それは場合によってだ・・・」

スコーピオブリッチ。ツヨシの周りも慌しくなっていた。
「敵艦隊はポリスを中心に左右に展開し・・・」
「数は１０隻！」
「敵ＳＣ隊！ポリスを出ています！」
「右５隻はデータにありません！」

様々な情報が入ってくる中、ツヨシは一人立ち尽くしていた。窓から見える風景は砂塵で何も見えず、真上に登った太陽の光さえも砂塵で覆いつくされていた。
「主砲用意！」両角が黙るツヨシに変わって指揮を取っていた。
「こちらのデータでは海竜は４隻のはず・・・６隻多いぞ両角！ポリスめまだまだ笑わしてくれそうだな！？」とツヨシ。

左側が戦艦になるスコーピオの主砲３門が動き始める。

ポリス北ブロック見張り台。敵シップが舞い上げた砂塵が風に乗り、北ブロックに到着しつつあった。徐々に視界が奪われていくＰ６の街。

その頃、レヴィア第一艦隊は既に砂塵の中にスッポリ隠れていた。
レヴィア１番艦ブリッチ。
「風速は１０から１２メートル！やませの季節風にしては強風ですね！」と国友。
「国友！視界が利かない今、お前と多聞が頼りだぞ！しっかり頼むぞ！」ロクが国友を励ます。
「了解！」

スコーピオブリッチ。ツヨシがブリッチ中央に仁王立ちしている。
「両角！」ツヨシが叫ぶ。
「はっ！」
「先発隊３０台を前に押し出せ！」
「了解しました！」
「この砂塵どっちに味方してくれるかな・・・？」
陽が最初に接触したジプシャン軍のＳＣ隊３０台近くが砂塵の中、Ｐ６目掛けて荒野を爆走する。

ダブルの山猫隊。
『敵ＳＣ隊３０！北から接近！』とルナの声。
「了解！おいルナ？生きて帰ったらデートだぜ？」と、余裕のダブル。
『きゃー！どうしましょう・・・？考えときます！』

「約束だぞ・・・野郎ども行くぞ！全車ライト点灯！」
迎え撃つダブルのＳＣ隊。

レヴィア１番艦ブリッチ。
「敵ＳＣ隊に山猫接近！間もなく接触します！」と国友。
「敵ＳＣはどこに向かってる？」とロク。
「やや第二艦隊寄り！」
「ならこっちは移動だ！三島？艦隊を動かす。各艦に連絡！桜井？少しポリスから離れるぞ！」
「了解！」と桜井。
ロクの第一艦隊はポリスのやや西に艦隊を動かしていた。

スコーピオブリッチ。
「敵左翼の敵艦隊が後退してます！」と兵士。
「味方ＳＣ隊、敵ＳＣ隊と接触！何台かは右翼の敵艦隊に接触してます！」
「目的地まであと３０分！」

「艦を止めろ！残りのＳＣ隊も出す！」とツヨシ。
ツヨシの指示でスコーピオはＰ６目前で停止した。左右の側壁が開き、ＳＣが飛び出してくる。
「左敵艦隊は我が後方に取り付こうとしているな？砲撃が不慣れな証拠だ！全ＳＣ隊を出せ！すぐここを出発する！」

Ｐ６指令室。
「敵シップ停止！ＳＣを出しています！」と柳沢。
「なぜだ・・・この砂塵の中・・・なぜＳＣで不利な戦いをする？」

弘士はある不安を感じていた。
「砂塵の中の味方に当てるなよ！」

レヴィア第二艦隊。レヴィア６番艦ブリッチ。まだこの辺りは砂塵の影響がない。キーンは杖を使いながら自分の席を立ち上がった。
「寄って来るＳＣは機銃で対応しろ！」とキーン。
「艦隊司令！敵ＳＣ隊の第二次部隊がこちらに接近！」と白井。
「なぜポリスに向かわない・・・今度の敵は慎重過ぎる・・・タケシとは違うタイプと言う事か・・・？」
キーンは敵の慎重過ぎる行動が気になっていた。

「通信兵！１番艦へ直通無線繋げ！」
キーンはロクに無線を繋ぐ。

「ロクか？」
『どうした？援軍要請か？』とロクの声。
「なぜ敵は街に行かない？」
『まずはこっちの船じゃないか？そっちはデーターにない。こっちはデータがある。まだ手探りなんだよ、向こうは・・・違うか？』
「そうだな・・・」
『タケシが倒れて、敵も慎重になってる。そう考えよう・・・俺らもこういう時は同じ行動を取るだろ？こっちも慎重に行く・・・』
「うん・・・わかった！」
『敵戦艦は丘の西側を通ってくるだろう。俺らは丘の東側に待機する。』
「わかった・・・俺たちが囮になる。後は任すぞ！」
『止めはそっちの一発なんちゃら砲ってので頼むぜ！』茶化すロク。
「ふふふ・・・了解！」

レヴィア1番艦ブリッチ。無線を切るロク。桜井はロクが誰から無線を取ったか気になった。
「誰からです？ホットライン・・・？」
「キーンだよ！初めての艦隊戦になる・・・無理もないさ・・・さて、そろそろ互いの射程距離になるが・・・各艦砲撃用意！目標敵シップ！多聞頼んだぜ！？」
『了解！』

ダブルの山猫隊は敵ＳＣと接触する。しかし敵のＳＣ隊はなぜか攻撃を仕掛けてこない。ダブルは車中からイライラし始める。
「どういう事だ！？奴等逃げてばかりだ！」
敵ＳＣ隊は山猫隊を無視すると、キーン率いるレヴィア第二艦隊の周りを走り出した。

「全車！レヴィア艦隊を援護する！続け！」
敵ＳＣ隊に再度接触を試みるダブルの山猫隊。

スコーピオブリッチ。ツヨシは味方のＳＣ隊の活躍を確認すると席を立った。
「よし！丘を登るぞ！Ｐ６を見下ろしてやれ！」
スコーピオはＰ６が見下ろせる“あの”丘に進路を取った。
「さて御対面といくか・・・？」ツヨシは不敵に笑っていた。

その２０　　罠に落ちた鯨

Ｐ６指令室。柳沢が敵シップの異変に気づいた。
「敵シップ！進路変更！お、丘を登る様子です！」
「丘だと！？」弘士が叫んだ。戸惑う司令室内。誰もが敵の行動を読んでいなかったのだ。

レヴィア１番艦ブリッチ。それはロクも同じだった。
「敵シップ丘を登ってます！」と国友。
「丘だと！？」とロクは慌てた。

ロクたちは丘の東南にいる。ほぼ敵シップとＰ６の直線上だ。このまま敵シップが丘を登ってしまうと、街全体はおろか自分たちの頭まで押さえられてしまう。まして標高５０メートル弱。こちらの下から攻撃は敵主砲などに通用しなくなってしまう・・・
しかし航行によっては荒野の段差により、航行不能に追い込まれる危機がある。それは大きな船の致命的な弱点でもあった。
「その危険を知っててなぜ？」ロクはこの敵の作戦に何かあると感じていた。
ロクはすぐ頭の中で作戦を練り直していた。

「ロクさん！このままでは頭を押さえられてしまいます！」
桜井も叫ぶ。どうやら同じ考えのようだが、結論は互いに出てない様子。ロクは必死に考えた。

「国友！後どのくらいで奴は着くんだ？」とロク。
「約１５分です！」
「敵のエアーブースターくらいは止めてみせる！このまま我隊も丘

を目指す！桜井！艦隊全速前進！」
「了解！」と桜井。

スコーピオブリッチ。ツヨシはあるメカニックに後ろから唐突に声を掛けた。
「撃てるのかい！？」
「は、はい・・・充電は十分かと！前も説明しましたが、艦首だけは正面を向けてください。角度は調節出来ます！発射時は強烈な閃光になります。各員及びＳＣ隊はサングラス着用をお願いします。」
「甲板に迫り出すのは、最後だ！撃つ直前に出す！砲撃でもされたら事だ！」とツヨシ。

「ははっ！」
「うん・・・面白くなってきたな・・・モ・ロ・ズ・ミ！ここは任せるぞ！」と部屋を出ようとするツヨシ。
「ツヨシ様？どちらへ？」
「戦艦側の艦橋に行く！せっかくだＰ６とやらを高見の見物といく！」
「しかし、敵左舷の艦隊と砲撃戦となりましょう・・・危のうございます！」
「前も言ったな、俺は“現場”で“現物”を“現実”に捉えると・・・」
「はあ・・・しかし・・・」
「ここは任す・・・」言葉少なくブリッチを出て行くツヨシ。

ポリス北ゲート見張り台。敵シップ接近につき砂塵の量は増え、１キロ先も見えない状態になっている。
「くそっ！これじゃ何も見えねぇと同じだ！！」

見張り台の兵の一人が叫んだ。Ｐ６は更に深い砂塵に飲み込まれていく。真上にあった太陽さえも見えないくらいに砂塵が舞い上がる。

その頃、ダブル率いる山猫隊は敵の第一次ＳＣ隊を全滅に追い込んでいた。

「どう思うキーン？」

ダブルはキーンに無線を飛ばしていた。

『どうって？どうなの？こっちが知りたいな・・・？』と無線のキーン。

「いくらなんでも武器も持たず敵に突っ込んで来ますかって？」

『無謀だな・・・』

「タケシと比べたら失礼なんだろうけど・・・弱くねぇか？」

『さあな・・・なんだ？お前が強いって言って欲しいのかい？』

「おいおい、キーンさんよ！指令室のルナに聞こえちまうじゃないか・・・おいおい・・・」

自分の隊を無傷で敵を殲滅したダブルは有頂天だった。

『しかしだな・・・敵ＳＣの何台かはえらく爆発してなかったか？』とキーン。

「確かに・・・それは驚いた・・・おっ！敵二次隊到着！ちょっと行って来ますよ！」

ダブルは視界に入った敵ＳＣ隊に再びハンドルを切った。

『気をつけろよ！ダブル！』

「あいよ！！」

レヴィア１番艦ブリッチ。外の砂塵はさっきよりも濃くなってい

る。
「山猫隊、敵の第二次部隊と接触！」と国友。
「桜井？どう思う？」とロク。
「何がですか？」
「敵のＳＣ隊だ・・・やけにあっさりしてないか？」
「どこぞやのお方が“雷獣”なんて呼ばれだして、Ｐ６も恐れられた・・・って証拠じゃないですか？」
桜井は少し嫌味気味にロクに返答する。

「だといいが・・・」
ロクは敵の行動に不信を抱いていた。そんな不信感を桜井にでもぶつけるしかなかったのだ。

レヴィア６番艦ブリッチ。
「間もなく敵シップ、丘の上に到着します。」とレーダー員。
「よし！迎え撃つぞ！第二艦隊、横一文字隊形で丘へ全速前進！」
「了解！」と白井艦長。

第二艦隊の５隻は前方の山猫隊と敵ＳＣ隊の戦闘を横目に丘へ進もうとしていた時だった。
キーンの乗る６番艦の艦首部分が巨大な黒煙とともに爆発してしまう。ブリッチはあまりの衝撃で立っていたキーンは倒れてしまった。

「何だ？この爆発は！？」

それはキーンの乗る６番艦だけではなかった。艦隊の先頭だった８番艦、そして最左翼にいた１０番艦も同じ爆発が起きる。
「本艦の右艦首爆発！」
「エアーブースター緊急停止！」

「右舷魚雷発射口大破！」
「我艦だけではありません。８番、１０番も被弾しました。」
「攻撃されたのか！？」焦るキーン。
すると続いて左隣にいた７番艦も爆発にあう。

「７番艦被弾！」
「艦隊を停止させろ！」
キーンが第二艦隊の停止を命じた。

Ｐ６指令室。第二艦隊が被弾した映像が中央スクリーンによって映し出された。５隻中４隻のレヴィアが艦首部分から黒煙を発している。
「キーンさん・・・」
心配そうな松井。弘士も曽根も心配そうにスクリーンを見つめる。
「柳沢！？何が爆発した！？」
「爆発したのは・・・て、敵が残して行ったＳＣの残骸です！」
「な、何だと！？」

レヴィア６番艦ブリッチは様々な情報が入り混じり混乱していた。
「わかるように説明しろ！」とキーン。
「ですから爆発物は敵が残して行ったＳＣの残骸が・・・」とあるクルー。
「だから！なぜ無人のＳＣの残骸がなぜ爆発したんだ？タイマーでも仕掛けてのか！？」

「タイミング的には不可能かと・・・」
「遠隔操作・・・」と白井が助言を入れた。

「遠隔操作・・・ま、まさか敵はそれまでも計算して爆薬入りのＳＣを乗り捨てていたのか？」キーンは蒼くなっていた。
よく見ると第二艦隊の進路方向に２０台近いＳＣが乗り捨ててある。

「と、とにかく航行は出来るんだな？」とキーン。
「はいエアーブースターの１機が緊急停止しただけです。走れます！」と白井。
「すぐ後退して迂回する。敵はもうすぐ来るんだぞ！白井！？」
「了解です！艦を一時後退させます！」
５隻の艦は、前進が不可能なのを知ると艦隊全部を後退させた。
レヴィアのブースターでこの辺りも砂塵が舞う。

しかし再び悲劇は起きる。
後退していたレヴィア後方から爆発が起きた。驚くキーンや白井。
「ば、爆発・・・今度は何だ！？」とキーン。
「地雷です！地雷が後方に撒かれています！」
「じ、地雷だと・・・」焦るキーン。

キーン率いるレヴィア第二艦隊は、敵到着目前に完全に進退が窮まってしまった・・・

スコーピオン戦艦側ブリッチ。
「敵艦隊完全に制止しました！」兵が叫ぶ。
「罠に掛かった鯨が５頭・・・」ツヨシが不敵に笑う。

その２１　閃光の荒野

レヴィア６番艦ブリッチ。怒号と混乱でブリッチは慌てふためいている。
「右舷艦尾大破！」
「同じく８番、９番艦もです！」
「後首エアーブースター緊急停止！」
「何が爆発した！？」
「火を消すのが先だぁぁー！」
「各艦次の指示を待ってます！キーンさん！？」
「右第７ブロック火災発生！消火班は消火に当たれ！」

様々な情報が流れる中、キーンは次の自分の行動が分からないでいた。そんな中一つの情報でキーンは我に返った。
「敵ＳＣ隊！第一艦隊に向かいました！」
「敵ＳＣが！？ロクに連絡だ！」とキーン。

『どうした？何が起こった！？』とロクの声。
「気をつけろ！敵ＳＣ隊がそっちの進路方向に地雷をバラ撒いている！」
『何だと！？』

その頃、ジプシャンの第二次ＳＣ隊はスコーピオとレヴィア第一艦隊の間の砂塵の中を縦横無尽に走り出している。

レヴィア６番艦ブリッチ。キーンは無線のプレストークボタンを押しながらロクに語る。
「すまん・・・ロク・・・我、第二艦隊は完全に敵の罠にはまった・・・」

『キーン?・・・巧遅より拙速!・・・だろ?』無線のロクが急に大声を出した。
「何っ!?」驚くキーン。

『高森教官の教えだ。巧くやっても遅れていては駄目・・・荒くても早く動く事・・・忘れたか?』
「ああ・・・覚えてるさ・・・」
『ならまだ反撃する余地はある。なんせまだ敵は現れてないんだからな!』
「そ、そうだな・・・」ロクの言葉に励まされるキーン。
『まあ俺は突っ込む事と奇襲しか能がない俺のセリフじゃないか・・・そうだろキーン!?』ロクは余裕で答えた。
「ふふふ、わかった!やってみる!」

しかし、その時キーンたち第二艦隊の前に奴が姿を現してきた。

巨大な砂煙・・・まるで丘自体が噴火でもしてるように砂煙が上空に舞い上がっている。その砂煙のせいか、戦艦本体がまるで見えない。かろうじて見えるのは地上から30メートル程にある艦橋部分が時折見えるだけであった。

そして彼はその最高部分に腕を組みキーンが率いるポリスの艦隊を見下ろしている。

「SC隊め・・・いい働きをする。右翼の艦隊は動けん様子だ!まだ射程距離外だ。ほっておけ!」
ツヨシは最も高いスコーピオのブリッチ部分にいた。砂塵に巻き込まれていない所で身動きが取れない第二艦隊を見ては薄ら笑いを

浮かべている。

「空母甲板開け！目標Ｐ６！！」とツヨシ。
　すると空母側の前部甲板が開き、長さ２０メートル、直径３メートルほどの黒い砲筒が迫り出してくる。

「主砲！左舷の艦隊をレーダーで確認！発射準備出来た物から撃ちまくれ！射程距離が届かなくても構わん！」
　スコーピオの戦艦部分の主砲が左舷の砂塵の中に向くと次々と火を吹きまくる。

　後手に回ったのはキーンたちだけではなかった。ロクたちの第一艦隊も砂塵の中、敵砲撃音で混乱している。
「て、敵の砲撃です！」と三島。
「バカな射程距離はまだのはずだ！？」とロク。
「敵の牽制です！」と桜井。
「敵ＳＣ隊撤退します！」と国友。
「敵はまた地雷を撒いてんでしょうか？」と桜井。
「くそっ・・・完全に劣性だ・・・」と悔しがるロク。

　スコーピオ戦艦側ブリッチ。ツヨシの元に様々な情報が報告されていたが、ツヨシはある機関からの音だけを目を閉じじっと聞いている。
「敵、砲撃してきました！」
「左舷艦隊が後退してます！」

「馬鹿め・・・敵は同じように地雷を撒いていると勝手に思い込んだな・・・くくく、砂塵の中で目の見えない恐怖と戦うがよい・・・

」と細笑むツヨシ。

「エネルギー充電１００パーセントを超えます！」
「発射角度調整マイナス１、５度！」
「目標Ｐ６の中心に合わせました！」
「撃てます！」各兵士たちが叫ぶ。

するとツヨシはサングラスをかけブリッジ全体に叫んだ。
「よし・・・てぇぇー！！」

スコーピオの空母甲板部分から金の閃光が砂塵の中に向けられ発射された。空は一瞬ピンクに染まり、閃光は砂塵の中へと伸びて行く。その次の瞬間、巨大な爆音が響き、ブリッチの向こうに見える砂塵の更に上に巨大な黒煙が舞い上がっていた。

街の一部が巨大な力で捩じ伏せられた。ポリスの西ブロックの外壁の一部が爆風で内側から吹き飛び、塀の上に居た兵士たちが爆風に飛ばされる。

直美宅地下シェルター内。巨大な轟音と地震並みの揺れが３人を襲った。
「きゃー！」
泣き叫ぶ雨音。二人を抱き締める直美。
「大丈夫よ！」直美が二人を言い聞かす。

スコーピオ戦艦部分ブリッチ。
「ブースター停止！大筒を一時格納！」とツヨシ。
空母甲板の大筒は格納され姿が消えていく。

「砂塵で太陽光が拾えなければ事だな・・・うーん良い攻撃だった。第二攻撃まで２０分だ！戦艦主砲は左舷敵艦隊を牽制！寄せるなよ！俺はそれまでランチだ！」
「ツヨシ様！？」両角が驚く。
ツヨシはそう言うとブリッチに両角を残し出て行った。

Ｐ６指令室は先程の攻撃によって混乱している。
「なんだ！？今の振動は！？」弘士が叫ぶ。
「西ブロックで火災です！」
「敵はあの丘から攻撃を・・・」
「西ブロック！？応答して！西の守備隊の連絡ありません！」
「３６、４０、４３エレベーターがか！？・・・ない？ないってどういう事だ！？ちゃんと説明を・・・！？」
「北ゲートと西ゲートの間の塀の一部が崩壊してます！！」
「救護班は至急現地へ！」
「地下のシェルターから助けを求める連絡多数！！」

指令室は混乱している。そんな中、弘士は柳沢に近寄る。
「わかったか？」
「ミサイルではありません！砲撃でもないです！火薬反応なし！レーザー反応なし。熱反応だけです！なんて言うのか・・・？焼かれた・・・って感じです！」と柳沢。
「焼かれた・・・ま、まさか敵は・・・」

そんな中、地上班の兵士からライブ映像が届く。
「地上班からの映像！中央に映します！」とルナ。

『指令室！聞こえますか！？西ブロック特別隔離施設近辺です！』
食い入るように中央スクリーンを見つめる指令室のスタッフ。あ

る若い兵士が変わり果てた街中にいる。
『街の一部が焼かれて無くなっている感じです・・・確かにここには建物が・・・見てください！付近の建物は爆風で崩壊してますが・・・ここは何も残っていません！・・・・それと・・・あっ！見て下さい！ち、地表が・・・地表がえぐり取られています・・・』

「地表がだと・・・？無くなっているってどういう事だ！」弘士が兵に叫んだ。

『幅１０メートル程でしょうか？深いところで５メートルくらい・・・しかし地下１階部分の住居シェルターまでには達してないようです・・・』

「柳沢！？敵シップは！？」と弘士。
「はい・・・現在停止してます。エアーブースターを切ってる様子で、間もなくカメラで映像が捉えれます！」
「動いてない・・・？ルナ？地下の様子は？」
「は、はい。こ、混乱してるようですが、まだ被害はありません！シェルター内は死傷者なし！」とルナ。

「敵はなぜこんな攻撃を・・・ま、まさか？・・・各員に告ぐ！西ブロックのジプシーを地下３階の連絡通路を使って南ブロックへ避難！全員だ！」弘士は何かに気づいた。
「しかし・・・それでは・・・このブロックだけで六千人のジプシーがいます！病人も居ます！移動だけでも約一時間は掛かります」と曽根。

「急げ！敵はもう一度ここを狙ってくる！急げ！次はもたないぞ！・・・敵はここを狙っている・・・この地下を・・・」弘士は焦っていた。

その２２　四天王システム

直美宅の地下シェルター。怯える３人。その中館内放送が流れる。

『西ブロック３８から４７ブロックのシェルターのみなさま。地下３階へのロックを解除します。直ちに地下３階を経由して南ブロックへ移動して下さい・・・こちらは・・・』

「お姉ちゃん・・・？」と不安そうな勝也。

その放送を聞いた３人は地下三階への緊急扉を開くと、そこは既にたくさんの人で既にパニックになっていた。ポリス兵が所々で誘導をしているが、たくさんのジプシーたちが我先にと狭い廊下を南ブロックへ走っている。

「行くわよ！いい！？」

直美は雨音を背負い、勝也の手を握り締めると意を決してこの集団に飛び込んで行く。

レヴィア１番艦ブリッチ。ロクが立ったまま三島のすぐ後ろにいる。

「駄目です！無線が混乱して指令室とは不通状態です！」と三島。

「わかった。飛び交う無線を聞いてる分では大した事なかったようだな？」とロク。

「あそこから敵は何を仕掛けたんでしょうか？それと閃光みたいなのが空を走りましたが？」と桜井。

「さあな・・・？」遠くを見つめるロク。

するとキーンからの無線が入ってくる。

『ロクか？』

「キーンか?そっちは無事か?」
『今、地雷除去作業中だ!これから突っ込む!それより街だ?なんか掴めたか?』
「死傷者は出てない様子だ。だいぶ混乱している。電波塔がやられたのか、無線が通じない・・・」
『まあみんな地下に避難してたはず、被害が少ないようなのは確かだ・・・そっちは?』
「地雷を撒かれた所を迂回中だ。もうすぐ敵と交戦に入る・・・敵はなぜかブースターを制止した。間もなく砂塵は消える・・・そうなったらこっちから反撃する!いいなキーン!?」
『わかってるさ!今バズーとダブルが敵の傍まで行ってる。それ待ちだ!』
「了解!待ってるぜ!」

バズーのアシカムが敵シップ側まで近寄って走行している。
「さすがにでかいな・・・しかしさっきは何を発射したんだ?それらしい武器が・・・」

アシカムが近寄ると、敵の砲弾が飛んでくる。寸前でかわすアシカム。
「おっと・・・しかし奇妙な戦艦だ・・・なぜ2隻の船をくっ付けたんだ・・・?どう思うダブル?」
『バズーさんからそんな言葉を聞くとは・・・ほんと男って生き物は・・・ふ・し・ぎ・・・』

突然女性の声が割り込んでくる。声の主は陽だった。
「陽か?こいつのケツに付いてたんじゃないか?」
『そうですな~しかし我々は偵察専門ですので・・・』
「お前な・・・そうだ!お前?戦車くらい乗れるよな?」

『はぁ！？』呆れた陽の声が響く。

スコーピオブリッチ。空母側のブリッチの自分の席で、優雅にフォークとナイフを使ってランチを食べているツヨシがいた。
「敵ＳＣ隊接近！高速戦車も混ざっております！」
「機銃で対応せよ！」とフォークで指揮を取るツヨシ。
「間もなく2発目が発射出来ます！」あのスタッフがツヨシに叫ぶ。
「よし！二回目発射準備だ！」口元を制服で拭いさると食事を途中で止め立ち上がるツヨシ。

空母側の甲板が再度開き、黒い大筒が再び競りあがってきた。
「発射角度よし！」
「エネルギー充電１２５パーセント！」

ある戦闘のない荒野で、陽とバズーが車を降りている。
「どうするんです？」と陽。
「とにかくこいつを運転してくれ！」
「やりますけど・・・」
その時、二人の後ろを閃光が走った。
「な、何だ・・・？」バズーが目を伏せながら空を見上げた。
再びＰ６方面で巨大な轟音と黒煙が上がる。バズーが敵シップの方を見ると、甲板部分から巨大な砲塔が見えた。
「あれか・・・？」

地響きをあげるＰ６指令室内。
「敵の攻撃です！」ルナが叫んだ。
「被害は！？」と弘士。

「同じ箇所に直撃！今度は地下1階、2階のシェルターを突き破りました！地下3階にも被害！」
「避難中のジプシーが数名負傷！」
「レヴィア艦隊は何してるんだ！」
「SC隊！機動部隊！敵に取り付いてますが、レヴィア艦隊は・・・」
「柳沢？敵は？」と弘士。
「位置は変わっていません！エアーブースターも動いてません！」
「・・・・・柳沢！？エスチームを呼べ！」と弘士が叫んだ。
「は？は、はい・・・」慌てる柳沢。

スコーピオ空母側ブリッチ。
「大筒を収納！エネルギー充電開始せよ！」とツヨシ。
「ツヨシ様？P6はこれで・・・？」と両角。
「そうだな・・・次でとどめだ・・・だが・・・敵も黙ってはいないはず・・・3回目はそう簡単に撃たせてくれまい・・・特に敵があの雷獣ならばな・・・」
するとレーダー員が叫ぶ。
「敵の右舷艦隊接近！」

「ほらな・・・も・ろ・ず・み！相手してやれよ・・・」薄笑みで両角を振り返るツヨシ。
「ツヨシ様・・・？」
「なんとしてもあと30分持たせろ！！いいな！」
ツヨシは両角に鬼気迫った顔で詰め寄る。
「ははっ！主砲！敵右舷艦隊に攻撃を集中しろ！」両角が檄を飛ばす。

Ｐ６指令室。
「どうだ?」と弘士。
「このままですと、次の攻撃でこの地下５階まで達します!計算ですとこの指令室近辺!」パソコンをいじる柳沢。
「しかし、地下３階以降は核用のシェルター・・・地下１階から３階の戦闘用シェルターと作りが違います!」と曽根。
「地上の建物の消失から計算して・・・一瞬のエネルギーは核エネルギーの２０倍と考えられます!このシェルターでは持つかどうか・・・?」
「バカな・・・ここが持たないと言うのか・・・?」と曽根。
「はっきり言います!これは我軍が開発したソーラーキャノンシステムです・・・」と柳沢。
「その計算!間違いないのか?」と曽根。
「威力こそ違えど・・・間違いありません。虹に取り付けているこちらの大型のキャノンタイプの倍の威力はあります!元々は対艦や拠点攻撃用の武器です!それを砲口を大きくしてジプシャンが改良したと考えていいでしょう。」
「バ、バカな・・・なぜ奴等がこのシステムを・・・」曽根は全てが信じられない様子だった。
「北の見張り台からの映像が届きました!５分前のものですが、発射直後の映像です!中央スクリーンに映します!」とルナ。

そこには敵シップの空母部分の甲板から大砲のような物が閃光を発射される映像が映し出された。一同は唖然となった。そこに映っていたのはポリスが開発したソーラーキャノンと同じ形の砲筒だったからだ。
「やはり我々の・・・」

曽根は跪き、制帽を床に叩き付けた。落胆する一同。
「計算が出ました!一回目から二回目発射まで３０分程度・・・次

の発射と推測される時間まであと25分です！」と松井。
「25分だと？・・・敵は充電の為に停泊しているのか！？司令！？緊急避難命令を・・・？レヴィア艦隊の攻撃が出来ない今、我々としては街を放棄するべきかと・・・」と曽根。
「・・・・・・・・待て！」
その時、弘士が重い口を開いた。

「全員に告ぐ！四天王システム作動させる！」
指令室の全員が弘士を見つめた。

その２３　　特攻のバズー

ロクはその頃、第一を引率するため自らジャガーに乗り、地雷のない箇所を捜しながら敵シップへ近寄っていた。
「急げ桜井！」
『無理ですよ！これでも最大です！』と桜井。

ロクは走行中、横目でポリスの北ゲート付近を見る。
「兵士がいない・・・見張りもだ・・・」
ロクは不自然なＰ６の様子を横目で見ながら何か腑に落ちなかった。

『艦隊司令！ポリスから緊急連絡です！』と桜井から無線が入る。
「連絡？無線が繋がったか？何だ！？」
『はい・・・Ｐ６の外壁から２００メートルを立ち入り禁止。またこれより指示があるまで各ゲートの出入を禁止する・・・です。』
「な、なんだ？立ち入り禁止って・・・今までそんな指令聞いたことないぞ・・・」

するとロクは走行中にも関わらず、車内で何か振動を感じる。
「何だ・・・？この振動は・・・地震か！？」

空洞内のダクトに閉じ込められていた３人もこの振動を感じていた。
「ヒデ・・・なんだこの振動は！？」と早坂。
「地震なのか？」
「ヒデ見ろ！」
早坂が指したのは、空洞内の尖った建物だった。徐々に上に移動

しているように見えた。

「こ、こいつ・・・上にあがっているぞ・・・」驚く早坂。
「しかも、なにか輝いてないか・・・？」
その尖った建物は暗闇の中、妖しい七色の光を発し本体自ら微かな音を立てながら上えと移動している。

P6指令室。雛壇の中段に座るあまり見慣れないスタッフ5名程が、普段使わない機器類の操作を始めていた。
「エレベーター始動！」
「天井ドームを開きます！」
「電磁コイル回転２０秒前！１９、１８、１７・・・」
「トリガー設定オン！」
「地上部分兵の全撤退確認！」
「地下2階と3階部分に磁気バリア発動！」
「電磁コイル回転１０秒前9、8、7・・・」
「電磁コイル地上に出ます！」
弘士はその様子を静かに見つめていた。

ロクは車内から北ゲート付近に妙な砂塵を発見すると、ハンドルを切っていた。
『ロクさん！そこは既に立ち入り禁止です・・・』と桜井の無線。

「わかってるよ・・・」
言葉とは裏腹に、ロクの目にはそこの箇所しか見えていない。ジャガーは砂塵が舞う箇所へ移動していた。

空洞のシャフト内のヒデと早坂。
「ヒデ見ろ！“角”の底の部分から上にあがってくる！タイミングを測ってあそこに飛び乗ろう！外に出れるぞ！」
ヒデはダクトから顔を出すと下の尖った建物の底を見つめる。上を見ると尖った建物に合わせて天井部分が真ん中から丸く開いているのが分かった。上からは外の光と大量の砂が落ちてきて、ダクト内も砂塵で視界が奪われつつある。底があと５０メートルまで迫っていた。
「やるしかなさそうだな・・・」

ヒデは狭いダクト内で、虫の息となった聖を背負い、上がってくる底のタイミングを狙っていた。
「これより別行動だ！死んでも恨むなよ・・・ヒデ？」と早坂が笑った。
「ああ・・・」
二人はダクトのギリギリまで近寄り下を見つめる。

Ｐ６指令室。雛壇中断にいたスタッフたちの動きが活発になっていた。
「次の発射まで１０分を切りました！」とルナが叫ぶ。
「急げよ・・・」
焦っているルナに反して弘士は冷静だった。

「電磁コイル最大出力まで５分！」
「サイドアーム用意！」
「出力は北の多聞天と西の持国天だけでいい！他は構うな！」
「司令！？最大出力後、暫くはシステムは・・・」
「分かっている・・・凌げればいい・・・」と弘士。

北ゲート付近を走行中のロクは車を停止し車外にいた。先日ロクたちが荒野を調べていた箇所から轟音と微振動を伴い、尖った建物が突出してくる。建物は光を増し上に向かって姿を現した。建物はやや湾曲に曲がり、外壁の外から街の中に向かって傾いている。
「でかい・・・なんなんだこいつは？」

ロクが辺りを見回すと、その建物は北ゲート付近だけではない。南ゲート、西ゲート、東ゲート近辺でも同じような建物を確認する。４本の塔はすべて街の内側に向かって反り曲がっている。
ある高さまで来たその塔らしい建物は、左右の部分からアームのような施設が迫り出してくる。それはまるで人型にも見えた。

ロクのすぐ傍にそびえ立つ建物は人型の影をロクの所に落としていた。
「ま、まさか・・・こ、これが・・・真・四天王か・・・？」

スコーピオ空母側ブリッチ。
「ツヨシさま！」再び食事中のツヨシの元に両角が駆け寄る。
「どうした！？」
「ポリスに異変が・・・？」
「何っ・・・？」両角の言葉にフォークを投げ捨てるツヨシ。

Ｐ６指令室。雛壇中段のスタッフが慌しくなっていた。
「敵キャノン軌道に集中しろ！」
「多聞天、持国天出力最大へ！」
指令室の照明が薄暗くなった。

スコーピオ空母側ブリッチ。
「街の４箇所からあのような塔が・・・」と両角。
ツヨシは街を見下ろすと、高さ３００メートル程の４本の湾曲した塔が迫り上がっているのが見えた。
「あ、あれが・・・真・四天王か・・・？大筒は！？」
「はい！発射まであと2分！」とクルー。
「急がせろ！」
「はい！甲板より大筒を出します！」
三度空母側甲板よりジプシャンのソーラーキャノンが浮上してくる。

スコーピオ近くに待機していたバズーのアシカム。コクピットには陽が乗っている。バズーは屋根部分にバズーカを持って待機している。
「野郎だ！陽！出せ！」
バズーは屋根からコクピットを叩く。
「・・・ったく・・・男って生きもんは・・・どうなっても知らないよ！」
陽はアシカムのアクセルを踏み込む。

スコーピオブリッチ。
「エネルギー充電１００パーセント超えます！！」
「右舷より敵高速戦車接近！」
「ポリスめ・・・狙いはこの大筒か？・・・地対空ミサイル撃てぇ！」

スコーピオに近寄るアシカム。コクピットには陽、その上にはバズーカを構えるバズーの姿がある。
「バズーさん！この距離であの大砲を爆破したら・・・？」と陽。
「知るかよ！？今はあいつを葬る事だけを考えろ！行けぇ！！」
そこへアシカムに向かって十発ほどのミサイルが飛んでくる。

「ち、地対空ミサイル・・・？」慌てる陽。
必死に交わす陽だったが、何発かがすぐ側で爆発してバズーカを構えていたバズーが振り落とされてしまう。
「バ、バズーさん・・・？」
すると再度発射されたミサイルにアシカムが直撃。アシカムは爆発に巻き込まれてしまう。

P6指令室。
「ア、アシカム・・・爆発！識別信号消えました！」と柳沢。
「バズー！？」驚く弘士。

その２４　光る街

ダブルのジャガーストーム。
「バズー・・・！？」
車内からアシカム爆発に驚くダブル。

ロクのジャガーカストリー。無線を受けてるロク。
「な、何っ！？バズーのアシカムが・・・！？」

敵シップ右舷方面でキャタピラを大破したし黒こげになったアシカム。微動だにしないと思いきや、陽が横の非常用ハッチを蹴破り大量の煙と一緒に出てきた。自慢の黒髪は縮れ、以前のくせ毛の髪型に戻っていた。
「いやーあ～死ぬかと思った・・・ＳＣなら死んでるわ・・・さすがアシカム・・・で、どこ行ったあの人！？」
辺りを見回す陽。しかし車上にいたバズーの姿はない。

スコーピオブリッチ。大筒は既に発射体勢になっている。
「角度調整マイナス１、５度！」
「エネルギー充電１２５パーセント！」

「真・四天王の力見せてもらおうか・・・・・・てぇー！！」発射命令を下すツヨシ。

空母側の甲板から三度発射される巨大な閃光。

Ｐ６指令室。雛壇中段のスタッフの一人が叫んだ。
「分離マグネット展開！！来ます！」
「多聞天、広目天！出力最大！」中央にいた眼鏡のスタッフが眼鏡を直しモニターを見つめる。
「頼む・・・・・・」見守る弘士。

北ゲートと西ゲートにある２本の塔から互いに無数の稲妻のような閃光が光る。街はその閃光に包まれた。
すると街に向かって放たれたスコーピオのソーラーキャノンの閃光とぶつかる。２つの閃光は巨大な轟音を出し競り合う。

Ｐ６指令室。
「持つのか・・・？」と不安な弘士。
「電磁素粒子最大高速！」中段のあるスタッフが冷静に叫ぶ。

ロクはジャガーの中からこの二つの閃光のぶつかり合いを目を細めて見ている。
「な、何だこの光は・・・・・・？」

街は２つの光が織りなす巨大な光によって黒い影を帯びていた。そして二つの閃光は貫く側と、凌ぐ側に分かれてぶつかっていたが、貫く側の閃光が弱くなりポリスへの攻撃にはならなかった。

Ｐ６指令室。
「ステージ・ワンクリア！や、やりました・・・」と安堵する雛壇中段のスタッフたち。
「し、司令・・・」と安堵の曽根が弘士を見つめる。
「やったのか・・・？レヴィア艦隊に告ぐ！次の攻撃を受ければ次こそＰ６は被害を受ける！それまでに敵艦を粉砕せよ！」

スコーピオブリッチ。
「こ、攻撃が効かない！」驚く両角。
「くくく、やるな・・・Ｐ６・・・」とツヨシ。
「右舷敵艦隊接近！」
「ツヨシ様！今のＰ６の光は・・・？」と両角。
「あれが、親父が恐れた真・四天王・・・３０年前、核兵器からあの街を守った兵器だ！」
「真・四天王・・・あ、あれが・・・？」
「怯むな！次はあの塔自体を攻撃する。それまで敵艦隊を近寄せるな！」
「ははっ！」
「Ｐ６め・・・とうとう切り札を出してきたな・・・」

レヴィア６番艦ブリッチ。
「司令から無線！」と白井。
「繋げ！」とキーン。
『無事か？キーン？』と無線の弘士。
「は、はい・・・先程の武器は？あの４本の塔は一体・・・？」
『説明は後だ！敵戦艦が次の攻撃を仕掛けてくるまで３０分！それまで沈めなければ、Ｐ６の次はない！』
「了解！」

『最悪あの砲撃の角度を変えるだけでいい・・・頼む・・・』

無線が切れ、キーンは覚悟を決めていた。

「全艦！このまま敵シップへ突入する！」

ロクはレヴィア1番艦のブリッチに戻っていた。

「艦隊司令！第二艦隊は敵シップへ突撃を開始し・・・」と桜井。

「なら我艦隊もだ！第二艦隊を援護！敵艦を砲撃しつつ接近せよ！」

とロク。

「了解！」

スコーピオブリッチ。

「敵右舷艦隊は射程距離に！左舷艦隊も接近！」

「残ったＳＣ隊は！？」とツヨシ。

「およそ１５台！」

「左舷艦隊は砲撃を続行！総力戦だ！・・・両角！」

「はっ！」と両角が呼ばれる。

「回天部隊を出せ！右舷の艦隊に当てる！」とツヨシ。

「・・・はっ！」

スコーピオの空母側左舷が開き１５台程のジープ型ＳＣが飛び出してくる。ＳＣ隊は右舷にいた第二艦隊に向かって勢いよく走り出した。ＳＣ隊のドライバーたちは５隻の第二艦隊にハンドルを合わすと、ハンドルとアクセルを固定し始めた。

レヴィア６番艦ブリッチ。

「新手のＳＣ隊！正面から突っ込んできます！」

「正面！主砲三式弾発射！」と白井！

ジプシャン軍のＳＣ隊は数台が砲撃で爆破される。残ったＳＣ隊はハンドルを固定し終えると、ドライバーたちはＳＣから飛び降りてしまった。荒野を転げるドライバー。無人になったＳＣはレヴィアに向かって走り続ける。砲撃や機銃を掻い潜ったＳＣ隊はレヴィア艦首部分に突っ込み爆発してしまう。

レヴィア６番艦ブリッチ。爆破で大きく揺れている。
「艦首部分に敵ＳＣが・・・！自爆しています！」
「７番艦！艦首大破！」
「８番艦航行不能！」

「て、敵ＳＣが爆薬を積んだまま本艦に突っ込んで・・・」と白井。
「なんて敵だ・・・味方のＳＣを当てに来るなんて・・・」とキーン。

スコーピオブリッチ。
「１５台中、９台が命中！３隻が航行不能！」
「十分だ！左舷は！？」とツヨシ。
「２隻が大破してます！」
「敵が我艦に突っ込んで来ると言う事は、あの街の武器はそうそう使えんようだ・・・作戦変更だ！塔への攻撃ではなく、次も同じ箇所に撃ち込むぞ！これでポリスに決着つけてやる！発射急げ！」
「了解！」
「次で終わらしてやる・・・ポリス・・・」ツヨシが街を睨む。

レヴィア1番艦ブリッチ。第一艦隊は敵砲撃を受けていた。
「第二艦隊7、8、10番艦が航行不能です！」と国友。
『右舷第一高角砲大破！』と館内無線。
『同場所で小火！消火班急げ！』
「4番艦ブリッチに直撃弾！大破してます！」と三島。
「水谷の艦か・・・？くそっ！」

ロクは窓から4番艦を見つめる。ブリッチから黒煙が出ている。
「敵砲撃のタイムアップまであと10分！」と国友。
「こちらもキャノンが使えないのですか！？」と桜井。
「使えるのは6から8番艦までだ・・・7、8が航行不能なら後はキーンの船だけだ・・・」悩むロク。

するとロクの司令席に無線が入る。
「こちら第一艦隊！」とロク。
『第二艦隊キーンだ！』
「無事か！？」
『ああ、バズーがやられた・・・』
「そうだな・・・」
『残念だ・・・』
「6番艦のソーラーキャノンだが・・・」
『残念だが、2度の攻撃でこちらの艦首は開かない・・・使用は出来んぞ！』
「そうか・・・」

落胆した二人。言葉が続かなかった。
『だが奴の向きくらいは変えてみせる！ロク・・・後は頼んだぞ！』
「お、お前もそのセリフかよ！？」キーンの言葉に何かを感じるロク。

『ここは、お前しか頼めんだろ!?』笑いながら答えるキーン。
「キーン!?どうする気だ!?」
『まあ・・・見てろ!』
「キーン!?」ロクは顔をしかめプレストークボタンを握りしめた。

その25　見えない答え

レヴィア6番艦ブリッチ。
「白井！敵砲撃を避け左舷に回りこみ、艦首を敵の艦首横にぶつける！」とキーン。
「了解！」
『こちら9番艦艦長伊藤！6番艦を援護します！』と無線。
「頼む！」

レヴィア1番艦ブリッチ。
「6番艦、9番艦！敵左舷に回り敵艦に突っ込みます！」と国友。
「キーンの奴・・・桜井！こちらで第二艦隊を援護する！このまま敵左舷に突っ込め！」
とロク。
「了解！面舵一杯！多聞！敵主砲を狙え！」
『了解！』と多聞。

スコーピオブリッチ。
「敵右舷艦隊の2隻が右に回りこみました！」
「敵左舷艦隊3隻も左に！！」
「キャノンの充電にどのくらい掛かる？」とツヨシ。
「あと残り7分！」
「再び回天隊が通用する相手でもあるまい・・・エアーブースター始動！艦を後退させる！」
「このまま逃げるのですか？」と両角。
「バーカ！5隻とは言えこちらは不利だ・・・一度艦を下げ砂塵の幕を張る！ポリスへの砲撃はそれからだ・・・」

「了解！エアーブースター始動！艦を後退させる！」と両角。
再び丘の上はスコーピオの周りを砂塵が舞い始めていた。砂塵は接近している第二艦隊を飲み込もうとあいていた。

レヴィア６番艦ブリッチ。
「敵が動き出しました！後退してます。」
「何だと・・・？どういう事だ？街への攻撃を止めたのか！？」と白井。
「夕方になり太陽光の充電が不可能になったという事か・・・？」とキーン。
太陽はだいぶ西に傾きかけていた。

レヴィア１番艦ブリッチ。
「敵シップ後退してます！」と国友。
「攻撃を止めて撤退という事かよ・・・？」と桜井。
「違う・・・奴は逃げたんじゃない・・・」とロク。

「どういう事です？」
「こちらの南側の丘は急斜面だ。敵は我々がこの丘を登りにくい事を知っている。ましてエアーブースターが１個でも起動しなければここを登るのは難しい。またはこちらの射程距離分下がって、砂塵を再び利用するつもりだ！期を見て再び発射してくるはず！」
「艦隊司令！６番艦は丘を登り始めました！」と国友。

「あいつ・・・既に６番艦に砲一門ないのに・・・援護どうした！？」叫ぶロク。

レヴィア６番艦ブリッチ。
『ブースター出力最大！』
「白井！」とキーン。
「はい！」

「ソーラーキャノンは本当に使えないのか！？」

「む、無理です・・・艦首部分が大破してます・・・砲口を開ける事も出来ません！」
「ならこのまま敵艦の横腹を突く！なんとしてもあいつの動きを止めるぞ！」
キーンは既に何かを覚悟していた。白井にはそれが分かっていた。

スコーピオブリッチ。
「右舷艦隊の２隻が本艦に接近してきます！」
「主砲を破壊した割には、悪あがきが過ぎる・・・地対空は弾切れか！？なら総員甲板の上からバズーカと機銃で迎撃してやれ！回避運動は任せる！」とツヨシ。

空母側の甲板に１０名程の兵が並び、右舷から接近するレヴィア６番艦に上から砲撃し始める。近いせいもあるが、全弾が命中し火達磨となるレヴィア艦。しかしその進撃は止まらなかった。

レヴィア６番艦ブリッチ。既にブリッチ内は電気系統がショートを起こし、たくさんの火花を起こしていた。キーンも白井もまだ無事だった。
「敵艦首に当てろ！」
レヴィア６番艦は砂塵で敵の様子が見えなくなった敵に必死に体

当たりを仕掛けた。

次の瞬間、鈍い金属音が響き、レヴィアのブリッチに居た者たちはみな床に放り出され、キーンも車椅子から転げ落ちていた。
「や、やったか・・・？」とブリッチの窓を見上げるキーン。
白井はすぐ立ち上がると、窓の外を確認する。
「こ、これは・・・？」

白井が窓の外を見ると、右上にに敵戦艦部分、左上に敵空母部分が見える。

レヴィアはスコーピオの空母と戦艦が交わる船中心部分に艦首をぶつけていた。
「バ、バカな・・・真横にぶつけたはずだ・・・なぜ敵の正面に・・・？」と白井。
「・・・て、敵の間なのか・・・？」とキーン。

スコーピオブリッチ。
「空母側を狙った特攻作戦か・・・？ミエミエなんだよ！空母側をかばって、戦艦側を当ててやろうと思ったが・・・こんな所に入るとはな？お前ついてないよ！高角砲は使えない！左右の機銃で上から攻撃しろ！生きて帰すなよ！！」とツヨシ。

レヴィア６番艦ブリッチ。両側を敵に挟まれたレヴィアは左右から機銃攻撃を受けていた。
「白井艦長！」キーンは自力で車椅子に戻る。
「はい！」

「残念だが後退も出来んようだ!この艦を放棄する!館長総員退去命令を・・・」白井に命令するキーン。
「艦隊司令!白兵戦を仕掛けましょう!敵艦に乗り移り・・・」
「この敵のブースターの出力を見ろ!甲板も数メートルも上だ・・・とても飛び移れないぞ!」
「しかし・・・」
「うわっ!」
その時、機銃の銃弾がブリッチを直撃する。航海士や他のクルーが撃たれる。ブリッチ内は血の海と化した。

「この艦の突入により敵は容易に艦の方向をＰ６に向けれない。十分にやった・・・後はロクたちに砲撃させこの艦は自沈する!」とキーン。
「艦隊司令・・・・・・」と白井。
「急げ!」

白井が艦内無線で全員撤退命令を流す。その横でキーンはソーラーキャノンの装置を確認し始めた。
「艦隊司令!?何を・・・?」と白井。
「私はこの艦に残る・・・このままイチかバチかソーラーキャノンを撃つ!」
「艦首部分は塞がれてます!このまま発射すればこの艦はどうなるか分かりません!」

「答えが分からないからするんだ・・・答えが分かっていたらつまんないだろ?」

キーンは不敵に白井に答えた。
「タイムアップはとうに過ぎてる・・・敵はエアーブースターを使い、充電は不十分だ。今しかない・・・」

「艦隊司令！では艦長である私が残ります！」
「白井はここの艦の者を脱出させろ！急げ！」
「キーンさん・・・」
「俺は車椅子だ・・・・・3分後に自沈する・・・頼むぞ・・・」
意を決した白井は負傷したクルーに肩を貸し、ブリッチのエレベーターに乗り込む。ドアが閉まる寸前白井は涙を流しキーンに敬礼をする。キーンも返礼する。
ブリッチに一人残ったキーンは銃弾が飛び交う中、ソーラーキャノンの準備を進めた。
「ロク・・・」
キーンは目を瞑りＰ４の戦いを思い出していた。

『なんで俺がいつも後方支援なんだよ！』と１５歳のロク。
夜の荒野にいつもの四人がいた。戦闘前か、皆緊張している様子だった。そんな際にロクは敢えてキレて見せた。

『お前を先頭に立たせたらどこ行くか分かんないだろ？なあバズー？』とキーンが笑う。
『ああ勝手に動くわ。勝手に戦うわ・・・お前は後方に居て、俺らに指示してればいいんだ。』とバズー。
『その方が安心なんだよ。俺らにとって・・・』とダブル。
『つまんねぇな・・・後方後方って・・・』と膨れ面のロク。

『俺はお前が後ろにいる・・・ってだけで俺は安心だけどな・・・？』と笑顔のキーン。
そんなキーンの笑顔を見るとロクの心の葛藤もいつの間にか無くなっている。

すると敵のサンドシップが動きだした。キーンは船の揺れでそれを悟っていた。

『ロク、ダブル・・・・・・後は任せたぞ・・・』

レヴィア6番艦の後方の非常ハッチから白井らが機関銃を構えながら上を警戒して出てくる。敵のサンドシップのエアーブースターの勢いで何人かはレヴィアの後方に飛ばされてしまう。すると敵は白井たちに気づき、上甲板から機銃を撃ちまくる。何名かは命を落としてしまった。

ダブルはこの銃撃戦に気づき、部下数台と白井たちを救出に近寄る。兵たちは慌ててジープの後部座席に飛び乗った。白井はダブルのストーム助手席に乗る。

「無事か!?・・・ん?・・・キーンはどこだ!?」とダブル。

しかし、白井は無言でダブルを見つめた。

「おい!?まさかキーンは・・・!?」

白井の胸ぐらを掴む激怒するダブル。

レヴィア6番艦ブリッチ。後方の様子を司令席のモニターで見つめるキーン。

「離れろダブル!」

『キーン!?お前!?何するつもりだ!』キーンの無線に答えるダブル。

「時間がない!急げよダブル!」

『キーン!?お前・・・!?』

会話の途中で無線を切るキーン。

「・・・・・さあ答えを見つけてやる!!一発射撃砲・・・・・・

発射！！」

キーンはソーラーキャノンの発射スイッチを押した。

その２６　　ツヨシの切り札

レヴィア６番艦の艦首部分は強烈な閃光を発し、次の瞬間には艦首部分から大爆発を起こしていた。キーンのいたブリッチは爆風で甲板部分から折れて、レヴィア艦の後方に飛ばされていた。

「キーンっー！！」１番艦のブリッチから叫ぶロク！

それに伴い、スコーピオの戦艦と空母部分の結合部分近辺は誘爆を貰い、次々と爆破されてやがて巨大な爆発を起こしていた。戦艦部分の高い艦橋は根元付近から折れて倒れてしまう。

スコーピオ空母側ブリッチ。巨大な爆発がブリッチを覆い始めていた。

「両角！」

「はい！」

ツヨシは巨大な爆破の中、両角に何か指示を出す。

やがて爆破は艦全体に回り、辺り一面を巨大な炎と黒煙で包んでいた。

ロクはブリッチからその風景を見つめるしかなかった。やがて桜井や国友たちが立ち上がり、その黒煙に向かって敬礼をし始める。

戦いは終わりを告げるはずだった・・・

Ｐ６指令室は松井以外はこの爆破を喜んでいた。スタッフは立ち上がり歓喜している。そんな松井をルナが慰めていた。

レヴィア１番艦ブリッチ。その時、敬礼をしていた国友が何かに気がついた。慌ててレーダーを覗く。

「な、なんだこの反応は・・・？」と国友。

桜井が国友に近寄る。

「どうした？」

「あの黒煙の中にエアーブースター反応！？」

「何っ！？」桜井が窓を覗き込む。

黒煙の流れが一部不自然な所を見つける。その部分は煙の流れが異常に速く、砂塵と炎が入り混じり空高く舞い上がる。その風は向かって右側の敵戦艦部分と爆破したレヴィア６番艦の火災を更に煽り、旋風火災を引き起こしている。

すると黒煙の左側から何かがゆっくりと出てきた。

「あ、あれは・・・？」と驚くロク。

Ｐ６指令室。皆が中央スクリーンを見つめる。

「空母か・・・？」と弘士。

そこに姿を現したのはスコーピオの空母部分、しかも前半分がゆ

っくりと黒煙から出てきた。やや接合部分だった場所は爆破の影響でまだ煙を吐き出している。

スコーピオ空母ブリッチ。

「ふははははっ！ポリスめ！まさか自爆するとは・・・とんだ計算違いだ・・・しかし切り札は最後まで取って置くものよのう？両角？」

とツヨシ。

「そのようですな。」と両角。

そのスコーピオの一部は後退前の発射ポイントに移動しつつあった。

「残った戦艦も既に砲塔一門残ってはいまい・・・さあいよいよクライマックスだ！」

スコーピオは再び丘の上へと走り始める。

レヴィア１番艦ブリッチ。

「桜井！」ロクは桜井を見る事なく前を向いたまま桜井に叫んだ。

「は、はい・・・」

「俺たちも行くぞ！」

「はい・・・」震えていた桜井の声が自然に戻っているのがロクには分かった。

Ｐ６指令室。

「レヴィア１番艦が行くぞ！」と柳沢。

「ロク・・・」とモニターを見つめる弘士。

レヴィア1番艦ブリッチ。

「艦隊司令!ブースターのいくつかが停止してます!残りのブースターでこの丘を登れるかどうか!?」桜井がロクの方を振り替える。

「ならジャガーに砲弾でもくくるか・・・?」

ロクは不敵に笑っていた。既に正気なロクではない事を桜井は感じていた。敵シップは既に丘の上に戻って停止しようとしている。

「走れ!間に合わんぞ!」

桜井は操縦しているハンドルを手で叩き始めた。

「これまでか・・・?」と嘆くロク。

「後方、虹です!」

国友が叫んだ。ロクはブリッチの横の窓から後方を見ると、P6で改装中の虹の三角が夕日の荒野を全速力で走っている。ブリッチ部分に目を凝らすと制服姿の死龍が乗っているのが分かった。

「死龍か!?」ロクは無線を持つ。

「死龍!聞こえるか!?」

『ロク・・・どきなさい!私が行くわ!』

「お前・・・入院してたんだろ?なぜ・・・?」

『ふっ・・・これでもねP5では北の宇宙戦艦ヤマトって言われてたのよ!』

「核戦争前の漫画だな?・・・・・・い、意味わかんねぇ・・・?」

『次の場面にはねぇ!体が治ってるって事よ!』

「・・・・・・・・・・・・深けぇ・・・」と納得のロク。

「艦隊司令!関心してる場合じゃ・・・」と呆れ顔の桜井。

やがて虹の三角は足の遅いレヴィアを抜きに出る。

虹の三角コクピット。
『死龍?どうする気だ!?』とロクの無線。
「どうもこうも・・・奴の足を止める!もうこれしかない!」
『死龍!やめろ!』
「こいつには、ソーラーキャノンが取り付けてある。充電もしてある。テストはしてないが・・・レヴィアと違って艦首を開ける面倒臭さはない。最悪このまま撃つ!友人として・・・いや同じ戦士として・・・死に場所くらい・・・与えてよ・・・ロク・・・」
『死ぬな死龍!』
「プロジェクトソルジャー規則第十条・・・プロジェクトソルジャーは、いつでもポリスの為に命を投げ出す覚悟でいる事・・・片目なくても戦士よ!ベットで死にたくなかった・・・ただそれだけ・・・」
『死龍・・・』
「ロクは家族よ・・・大事な弟・・・だから守るの・・・私がね・・・」
『いつまでも弟扱いしやがって・・・』
「ふふふ・・・もう行くわよ!」

無線を切る死龍。虹の三角は敵空母部分に向かって走った。
「さぁーて・・・行きますか?」

その27　戦争の理由

スコーピオ空母ブリッチ。
「左舷！敵補給艦！突っ込んで来ます！」
「何だと！？」とツヨシ！
ツヨシがブリッチの窓を覗くと、猛スピードで荒野を走る虹の三角の姿がある。

「は、発射を急がせろ！！左舷高角砲てぇー！！」と焦るツヨシ。
するとツヨシは後方のドアの方へ歩きだした。
「両角！？後は任せるぞ！」とツヨシ。
「はぁ・・・どちらへ・・・？」と両角。
ツヨシは無言でブリッチを出て行ってしまう。

死龍の乗る虹はスピードを上げ丘を登り始めたが、敵の高角砲を何発か被弾して火達磨と化していた。死龍の乗るコクピットも機器系統がショートし火花を出し始める。
「まだまだー！！」叫ぶ死龍。

Ｐ６指令室。弘士がこの様子をモニターで見ている。
「死龍・・・」

２時間程前。死龍が突然指令室に現れた時だった。
「死龍・・・」と弘士。
「司令・・・」
死龍は既に何かが壊れていたのだろう。弘士は死龍の目を見て直

感した。

「もうミュウとして末期のようです・・・このままベットで死ねません・・・」

「その体でどうするつもりだ?戦場に出ると言うのか?」弘士は問う。

「戦場で死にたいんです・・・ミュウで死ぬんじゃない・・・ソルジャーとして死を与えてください・・・」

何かに耐えているのだろう。死龍の言葉に既に力はなかった。

「言って聞かせても無駄なようだな・・・?」

「はい・・・」

死龍は弘士だけを見ている。恐らく駄目だと言えば死龍はここで自害するだろう・・・弘士はそう感じた。

「行け・・・虹の三角は既に整備が終わってるようだ・・・」

「あ・・・ありがとう・・・ございます・・・」

死龍は一礼すると指令室を出て行った。

P6指令室。弘士は中央のスクリーンの虹に向かって敬礼をする。

「死龍・・・」

虹の三角は丘を登り、敵シップ左舷に躍り出ていた。既に砲撃を所々浴び、動くのも奇跡だった。

死龍はコクピットでハンドルを握りながら笑みすら浮かべている。

「みんな?・・・今・・・みんなのとこに行くよ・・・」

すると虹は空母側の左舷に頭から突っ込んでいた。その衝撃で虹のコクピットはめちゃくちゃに破壊される。

スコーピオの艦首はその衝撃で本来の目標である、街中心部分から大きく外れてしまう。

死龍は立ち上がり何かの装置を押そうとしていた。

「これが・・・ポリスの・・・切り札よ・・・」

虹の先頭部分から閃光が発射され、空母右舷のブリッチ下付近に貫いた。次の瞬間、虹とスコーピオは大爆発し巨大な黒煙に包まれる。

レヴィア1番艦ブリッチ。

「死龍!!」

ロクは思わず叫んだ。この日一番の大声だった。ロクはブリッチのタラップを急いで駆け下りると、甲板から下の車庫に伸びるラッタル（急勾配の階段）を駆け下りていた。

ロクはそのままジャガーに乗り込むと、傍に居た兵に車庫の扉を開けるように命ずる。ジャガーはレヴィアが動いているにも関わらず、夕焼けの荒野に走り出していた。コクピットのロクの目には薄っすらと涙が見える。

「馬鹿野郎・・・馬鹿野郎・・・」

ロクは誰もいない車内で呟いている。

ジャガーは丘の上、虹が爆発した箇所にいた。まず目に入ったの

は敵空母部分、そして木端微塵になった虹だった。「これはさすがの死龍も・・・」すると次に目に入ったのは、レヴィア６番艦の艦橋部分だった。横に倒れていたが、まだ原型がある艦橋部分にロクは微かな希望を持てた。

「ひょっとしてキーンは生きてるかもしれない・・・」

ロクは車を止め、拳銃を下に構えながら急ぎブリッチの入口を捜した。脇にラッタルが見える。ロクはそこによじ登ると、ブリッチを目指した。

ロクはブリッチに入った。車椅子を見つけたが、キーンの姿はない。

「まさか艦内本体の方か・・・？」

そう思ってブリッチを出ようとした時だった。崩れた天井に下敷きになった足を見つける。

「キーン！？」

ロクは慌てて近寄り、天井を払い除ける。そこには血だらけのキーンがいた。微かに息がある。

「しっかりしろ！キーン！！」

キーンを抱きかかえるロク。するとキーンはロクの声に反応して、目を開けて見せた。

「ロ・・・ロクか・・・？」

ロクは慌ててインカムの無線を口に持っていく。

「桜井！６番艦ブリッチに生存者あり！至急救護班を・・・」

するとキーンはロクの無線を手で制止した。

「どうした？」とロク。

「腹をやられた・・・もう助からない・・・」とキーン。

ロクはキーンの腹部の制服を捲り上げる。腹は縦に15センチ程切れ、大量の血と腸までもが出ているのが分かる。

「くっ・・・」ロクは絶句した。
「なあ・・・？無理だろ・・・？」
キーンはロクに心配掛けまいと気丈に笑ってみせた。

「キーン・・・」ロクの目には涙が溢れ始める。
「ロク・・・どうして俺らは・・・戦わなければならなかったのかな？」とキーン。
「さあな・・・」
「でも・・・これでやっとみんなの所へ・・・」キーンはじっと天井を見つめる。
「馬鹿言うな・・・」
「敵は・・・？」
「ああ・・・死龍がやった・・・」
「無線聞いてた・・・ヤマトは受けたよ・・・それで死龍は？」
「・・・ああ・・・無事だ・・・」
「そうか・・・俺が死んだら・・・死龍に四天王を・・・戻ってきてもらえ・・・」
「馬鹿言うな・・・今、人が来る。助かる！」
「陽でもいいな・・・あいつは昔の死龍に似ている・・・」
「ああ、そうだな・・・」
ロクは堪えられなくなり、涙が流れ始める。

「泣くな・・・ロク・・・人間いつかは死ぬ・・・早いか遅いかだけだ・・・」
「キーン・・・」
「俺のソードライフルはお前に・・・拳銃は・・・松井にやってくれないか・・・？」

「わかった・・・もうしゃべるな・・・」

「お前と戦えた事を・・・誇りに思う・・・」

するとキーンは握っていたロクの手を離し、眠るように目を閉じた。

「キーン・・・キーン！！」

ロクはキーンの遺体を抱き締めながら号泣した。

外の太陽は西に沈み始めていた。　誰もこの戦争の理由は知らなかった。

その２８　　ロクの恐怖

日が暮れて辺りは星の光しか見えない。月が出ていないせいか荒野は暗い。スコーピオの残り火のせいか丘の周辺だけは明るかった。昼間までの強風が嘘のように荒野には風がなかった。

その暗闇の荒野をヒデは聖を背負いながらあの丘へと歩いていた。時折Ｐ６のＳＣがライトを照らしながら通り過ぎると、ヒデは身を伏せていた。

やっとの思いで丘の上に辿り着くと、そこには見覚えがあるＳＣが１台。車高が低く、スピード重視のデザイン。まるでジャガーの原型。

『俺の車だ！』ヒデは聖を背負ったまま車へと近づく。

ヒデは車へ近寄ると運転席を覗く。

『誰も居ない・・・』

咄嗟に目をやったのは、キーの差込部分だった。

『鍵もある・・・しかしなぜこいつが・・・？』

ヒデは恐る恐る後部のタイヤ跡を見ると、まだ新しいタイヤ跡がＰ６方面から続いていた。そこには数名の足跡もある。ヒデはあるひとつの足跡の方向を目で追う。そこにはジャガーのボンネットに腰掛けるロクの姿がある。

「ロク！？」

「やはりここに来たか・・・ここに来れば仲間にでも会えると思ったか？」

ロクはそう言うとボンネットからポンと立ち上がった。

「なぜ俺がここに来ると・・・？」とヒデはロクに尋ねた。

「日常動線志向性・・・・・人は目の前の恐怖から逃れるために、普段使い慣れた経路を利用して避難する。高森教官の授業でやってたろ？もう忘れたようだな？」

「お前のその優等生面があの頃から気に入らなくてな・・・」

「そりゃどうも・・・」

ロクは腰の拳銃を一つ抜くと、ヒデの前に投げ捨てた。

「なんの真似だ・・・？」

「決着つけたいんだ・・・あの頃の・・・」

「決着だ？お前も根に持つね？手榴の件か？」

「お前の愛車・・・サンドウルフ・・・長年整備してたんだぜ？まあちょっとカスタマイズしたけどな・・・」

「ふーん・・・まだあったとは驚きだ・・・」

ヒデは聖を背負うのが疲れてのか、荒野に聖をゆっくりと座らせた。

「３期生の俺らにとってはこの車こそＰ６の代名詞だった・・・こいつを抜き去る事が目標だったんだ・・・」

ロクはサンドウルフと呼ばれたヒデのＳＣを撫で回した。

「そうか・・・」

「苦労したんだぜ・・・廃車にせず今日まで隠してきた事・・・それとこの大惨事の中、部下二人に頼んでここにこれを持ってくるの・・・」

「何が言いたい？」

「こいつを最初に抜いてすぐだったよな？Ｐ６から逃げたのは？」

ロクはヒデの顔を睨む。

「くっ・・・ここで待っていたのも偶然か？」ヒデもロクを睨み返

した。
　対峙する二人。

「ああ・・・そう言えば手榴を撃ってしまったのもこの辺りだったな？」
「決着と言ったな？まさかこの車で俺と勝負しようなんて言い出すんじゃないよな？」

「やろうぜ・・・」
「何っ！？」
「お前に勝つなんて今更どうでもいい・・・俺はあの頃の自分に勝ちたいだけだ・・・」
「自分に勝ちたいだと？」

「覚えてるか？お前らは何かにつけ俺を殴りつけていた。訓練も実戦でも・・・」
「ああ・・・お前が嫌いだったんでね・・・」
「ふざけては実弾を顔に近くに向け発射したり、銃口を口に突っ込まれたこともある。」

「覚えてるさ・・・お前は泣いて俺に媚びていたな。」
　ヒデはロクを嘲笑った。

「あの頃から銃を抜けなかったのは、お前の陰湿なイビリのせいかもな・・・」
「そういえば、俺と出会ってからだな？お前が銃を人に向けれなくなったのは？あの頃から心が弱かったんだよ！」

「毎日が恐怖だった・・・実戦の際はお前に後ろから撃たれるんじゃないかとも思った事もある・・・」

「ああ、本気で殺そうとも思っていたさ・・・」

「お前があの頃、皆からサンドウルフって呼ばれていた・・・それは狼は仲間を大事にするからだろ?だが違った・・・お前は俺だけを目の敵にしたんだ!」

「そうさ・・・お前は俺の全てを奪って行った・・・」

「全てだと?」

「エースドライバーの座、仲間の信頼、四天王へのきっかけ・・・そして手榴のパートナーの座もな・・・」

「お前・・・手榴の事が・・・?」

「ああ惚れてたさ・・・あんないい女・・・だが手榴はお前を選んだ!!」

「選んだんじゃない・・・死龍は・・・いや手榴はお前と競り合いたかったんだ・・・同期のプロジェクソルジャーとして・・・」

「何だと!?」

「あの頃、よく話していた・・・私と張り合えるのはヒデしか居ないって・・・」

「なに・・・」

「他の連中じゃ物足りないと・・・」

「バカな・・・」

「俺に取られただと?勘違いするな!そんな事でポリスを脱走か・・・?馬鹿げてる・・・」

「お前には分からないだろうな?」

「わからんな・・・話しても無駄なようだ・・・そろそろやろうや！」
「ああ・・・」

「マシンで後で文句いわれちゃ適わん・・・ジャガーと同じ装置をサンドウルフにも付けてある。」
「ふん・・・相変わらず甘ちゃんだな?で・・・?俺が勝ったら?」

「そいつを連れて車で逃げるがいい・・・」ロクは聖の方を見る。
「お前が勝ったら?」

「その女はポリスに連れて帰る・・・」
ロクの言葉に聞く耳を持たなかったヒデだが、一度聖の所に戻る。

「聖・・・これを持ってろ・・・」
ヒデは自分の首に掛けていた尖った角のようなペンダントを聖の首に掛けてやった。聖は既に意識が遠い。
「これ・・・あんたのお守り・・・?」
「ああ、カジキの角で作った・・・これをしていると弾に当たらない・・・」
「貰えないよ・・・」
聖は必死にペンダントを取ろうとするが、既にそんな力さえない。
ヒデは聖の腕を制止した。

「いいから・・・お前が持ってろ・・・」
「うん・・・」
ヒデは聖の首にペンダントを掛ける。

サンドウルフに乗るヒデ。ロクは運転席のヒデに話しかける。
「ハンドルの中に無線。ギア前にブースターの装置。あの頃と変わっているとすればそこくらいだ。機銃はない。」
「いい演出だよ。まるでこの事を予想していたみたいだな?」
ヒデはロクの取った段取りに感心していた。

「ああ、全部俺が仕組んだ・・・」
「はぁ??」
「お前を逃がせと死龍と一芝居打ったのさ。」
「お前・・・まさか松島で俺を逃がしたのも・・・?何から何まで勘に障る男だ!!」
「ふふ・・・さぁーて、行きますか?サンドウルフ?」

その29　ラスト・ゲーム

闇の荒野に響くエンジン音。ロクとヒデは同時にキーを回していた。観客は聖のみ。二人しか分からない6年目の決着戦だった・・・

「・・・ったく!狂ってやがる・・・」

ヒデは一人車内で呟く。

「しかし・・・あの頃と一緒だ・・・ふっ・・・馬鹿げてる・・・」

するとフロントガラスにロクの顔が投影される。ヒデは驚いた。

「なんだ・・・?」

『エアーブースターは勘で覚えるんだな。』とロク。

「こんなもん使わなくたって、マシンだけで勝てるさ!」

『そうかな・・・』

「で?どういうルールだ!?拳銃だけか?」

『そうだな・・・まあ少し走ろうや!』

「ちっ・・・」

ヒデは思わず舌打ちをする。ロクに主導権を握られ少しイラついていた。

するとジャガーが先に走れ出した。慌ててヒデも追いかける。2台はP6方向に向かっていた。

P6指令室。

「ん!?」柳澤が異変に気づく。

「おい!?ルナ!?ロクさん今何してるんだよ!?」と柳澤。

「何って・・・救助活動でしょ!?」とルナ。

「なんか友軍のSCと外走ってるんだけどな・・・」
「そんなはずは・・・呼び出してみる・・・」

ジャガーとサンドウルフは夜の砂浜を猛スピードで併走している。波が砂浜に上がると大きな水飛沫をあげていた。　2台は時折激しくぶつかっては離れて走り続けた。

「雷獣とは・・・よく言ったもんだな!?連いて行くだけで一杯だ・・・」
ヒデはそう言うとハンドルを思いっきり左に切り、車体を左脇のジャガーにぶつける。

横にいたロクもヒデの攻撃を避けることなく、右に接触させる。砂浜の先の海からはちょうど半月の月が昇り始めていた。
「そんなもんか!ウルフ!!」

2台は時折火花を散らし内陸方面と戻ってきた。するとロクのフロントガラスにルナの顔が投影される。
『ロクさんどうしましたか?』
「お、俺を・・・外でロクと呼ぶな・・・!」
『し、失礼しました・・・』
ルナはロクの言葉に無線を躊躇しようとした。

『あ、あの・・・?艦隊司令・・・今何を・・・?』
「後で報告する!俺の最高の時間だ・・・邪魔すんな!!」
『ひ、ひ、ひゃい（はい）・・・』
ロクはルナの顔を一度も見ることもなく無線を切る。すると次に投影されたのはヒデの顔だった。

『随分余裕じゃねぇか!?ロク!?戦闘中にデートでも申し込んでんのか!?』
「ああ・・・悪いか!?」
ロクは再びヒデのＳＣに体当たりをかける。

Ｐ６指令室。半べそのルナに柳澤が問う。
「何だって?」
「お、怒られた・・・何にもしてないのに・・・」とルナ。
「はぁ??」と柳澤。

月夜の荒野。２台は全速力で併走し火花すら出すほど激しく接触する。互いのドアは激しく損傷している。ヒデもだいぶ勘が戻ってきたのか、ロクのジャガーを圧倒する場面が続く。

「ロク!?」叫ぶヒデ。
『なんだ!?』と無線のロク。
「馬鹿みたいに飛ばすからバッテリーも半分になったぞ・・・」
『そろそろ・・・・・やりますか?』
「ならデットレースだ!」

互いにスピードを下げる2台。するとロクのジャガーはその場に停車してしまう。ヒデはそのまま走り抜けてその先でUターンして来た。互いに向かい合う2台。ヒデのＳＣもジャガーの正面で停止した。

『デットレースか?懐かしいな・・・』とヒデ。
「いい演出だろ?」
『そう言えばお前はこれで俺に勝った事がなかったな?』

「もう逃げやしないぞ！」
『それはどうかな？お前は逃げてばかりじゃないか！？』
「もう逃げやしない・・・」ロクは自分に言い聞かせた。

互いにアクセルを空ぶかしする。爆音が暗い荒野に響く。
「お前は逃げるさ・・・」とヒデ。
『前のマシーンならな・・・今ではこっちの車高が低い。パワーも上だ！』と無線のロク。
「所詮はマシーンの力か！？魂で来い！！ロク！！」
『ああ・・・』

ロクはハンドルを強く握り締める。正面を向きヒデのサンドウルフを睨む。ロクはギアを入れるとアクセルを踏み始める。ヒデもロクに向かって走り始めた。

『お前はいつも逃げるさ・・・』とヒデ。

「逃げるかっ！」とロク。

2台は互いに正面から突き進んだ。譲らない2台。既に距離は互いの顔が見える位置まで来ていた。

「逃げるさ・・・」とヒデ。

「もう逃げない！」とロク。

2台は激突寸前だった。しかし先にハンドルを切ったのはヒデのSCだった。ヒデのSCは車高の低いジャガーに乗り上げ、空中に舞い上がった。
ヒデのSCは2、3回空で横転すると、闇の荒野に逆さに叩きつけ

られた。

ロクのジャガーはフロントガラスにひびが入り視界が悪くなった程度だった。ロクはSCをUターンさせると、ヒデのSCの近くに停車した。ロクは拳銃を下に構えながらジャガーから出てくる。ロクは辺りを警戒しながらヒデのサンドウルフに近寄った。

次の瞬間、別方向から銃声が聞こえロクはその銃弾に倒れた。撃たれたのはロクの心臓部分だった。ロクは荒野に倒れたまま微動だにしない。

銃声の暗闇方向から姿を現したのはヒデだった。ヒデは表情が険しく、足を引き摺ってロクに近寄った。

「即死か・・・？だからおめぇは詰めが甘いんだよ・・・」と息の荒いヒデ。

ヒデが安堵し拳銃を下ろした時だった。銃声が響き、ヒデの右肩に銃弾が撃ち込まれる。ヒデは拳銃を離してしまい、後方へと倒れてしまう。ヒデは倒れながらロクの方向を見ると、ロクが倒れながら拳銃を構えていた。

「ば、ばかな・・・心臓を撃ったはず・・・」

ロクは立ち上ると、拳銃を構えながらヒデに近寄った。ロクは息一つ乱れてない。ヒデはそんなロクを見上げていた。

「なぜだ・・・弾は当たったはずだ・・・」とヒデ。

するとロクはポンチョコートの中から白い一丁の銃を取り出した。

するとワイルドマーガレットのグリップの所に銃弾が一発突き刺さっている。

「これがなかったら死んでいた・・・」とロク。ロクは改めてヒデに狙いを付ける。

「ふん・・・昔から悪運だけはいいな・・・？殺れ・・・」

ヒデは目を瞑った。

すると次の瞬間、暗闇からライトが見え、ヒデが前に乗っていた装甲車が二人の前に現れた。

「ヒデぇ！」丸田は叫んだ。

その３０　　消せぬ記憶

丸田が乗る装甲車が真っ直ぐロクに向かって走ってきた。天井部分にある２０ミリ機銃がロクに向けられた。ロクは半身になり拳銃を装甲車に構えた。装甲車から発射されるオレンジ色の銃弾。ロクは動くことなくこの銃弾を避けてみせると、天井部分の機銃者に向けて拳銃を発射した。

装甲車の機銃を操作していたのは羽生だった。羽生は頭部を撃たれ動かなくなった。

「羽生！？羽生！？くそっ！！」

丸田は無線に叫んだが応答がない。丸田は感情的になり、そのまま装甲車でロクを跳ねようとアクセルを踏む。

ロクは微動だせず、運転席の丸田に向かって再度拳銃を発射した。

ロクの銃撃で左胸の鎖骨近辺に銃弾を受ける丸田。丸田はその銃弾に思わずハンドルを切ってしまう。すると装甲車は大きく曲がり横転し、ヒデのサンドウルフを巻き込み荒野を激しく転がりだす。更にヒデが倒れていた箇所に突っ込んでいった。

激しい横転で砂埃が荒野を漂う。徐々に砂埃が消え、横転した装甲車とそれに巻き込まれたサンドウルフの姿が月夜の荒野に現れてきた。

ロクは一歩も動く事はなかったが、やがて静かになった荒野を装甲車に向かってゆっくり歩きだした。途中には機銃だった者か、一人荒野に投げ出されているのが分かった。近寄ると目を見開き死んで

いるのが分かった。

ロクは徐々に装甲車に近寄る。装甲車横転しながらまだタイヤが回っている。すぐ側にあるヒデのサンドウルフもエアーブースターの装置なのか、微かな空気の流動音が聞こえていた。ロクは拳銃を構える事なく、装甲車の周りを調べ始めた。運転席には装甲車の運転手であろう、頭から血を流しピクリともしない。ロクは中の様子も伺ったが、気配がない。どうやらさっきの機銃の者と運転手だけらしいとロクは確信する。

ロクは装甲車の反対側を調べ始めた。その時だった。
装甲車の車体に右腕を挟まれ身動きが取れないヒデの姿があった。すぐ側にはエアーの音がするサンドウルフがひっくり返っていた。

「ヒデ・・・」

ヒデは苦痛の表情で必死に右腕を抜こうとしているが、装甲車の重さにどうする事も出来ない。やがてロクの姿を見つける。

「てめぇ・・・」とヒデ。

ヒデはロクの顔を見るなり苦痛の表情を隠してしまった。彼なりの最後抵抗だったかもしれない。ヒデはロクを黙って睨んだ。

「助けねぇよな?」とヒデはロクに語った。

「助けて欲しいか?」
「いや・・・せめて最後の介錯しろや!」とヒデ。

「プロジェクトソルジャー第八条・・・ソルジャーは最後まで作戦

を諦めない・・・」

「ふん・・・今更・・・何がプロジェクトソルジャーだ・・・？」

ロクはそんなヒデに愛想がついたのか、ジャガーの停車した所まで戻って行った。するとジャガーのドアを開け、後部座席をゴソゴソと何かを探し始めた。

ロクはある物を持って再びヒデの傍までやって来る。するとヒデの空いている左手の側に５０センチ程のノコギリを放り投げた。驚くヒデ。

「何の真似だ!?こ、これで右腕を切り落とせって事か!?」

ヒデは再びロクを睨みつける。

「お前・・・？マッドマックスって映画覚えてるか!?」とロク。

「・・・何・・・マックスだぁ!?」

ヒデは正直思い出せなかった。

「お前の命令で高森教官の部屋に忍び込んで“色んな”ビデオを持ってくるように言われていた・・・」

「お前は使い走りだからな!」

「そんな中、妻子を殺された主人公が最後犯人を荒野に追い詰める映画だ・・・覚えてるか?」

「覚えてねぇ!」

「主人公は犯人と犯人の車を手錠で繋ぎ、何分後かに車を爆破する装置を付ける・・・」

「ああ・・・あの映画か・・・」
ヒデはようやく思い出した様子だ。

「主人公は犯人にノコギリを渡し、手を切って時間内に脱出すれば助けてやると言った・・・」
「犯人はそんな事出来る訳ねぇだろ！・・・と叫んでたな？」とヒデ。

「だが確かお前は・・・自分なら切って逃げる・・・と言ってたはずだ。」
「・・・」ヒデは黙っていた。

「旧友を撃つ事はしたくない・・・だから・・・俺はお前の車を撃つ・・・」
「何っ！」
ロクはすぐ側の反転したサンドウルフを見つめた。
「１０分やる・・・そしたら追いかけない・・・いいなヒデ？」

「くそが・・・自ら死も選べねぇか・・・」ヒデは諦め夜空を見上げる。
ロクは一人ジャガーの方へ向かって歩き始めた。ヒデはそんなロクの背中に叫んだ。

「せめて放置しろ！虫たちに食われ、ウジ虫の餌になった方が楽だ！」とヒデ。
「ウジ虫か・・・そう言えばお前からよくウジ虫と呼ばれていたな・・・」

ロクの目はどこか狂気に満ちていた。ヒデはロクの目を見てそう感じた。奴は本当に車を撃って来る。そう確信した。

ロクはヒデの方を向いていたがやがてまたジャガーに向かって歩き出した。

暗闇の荒野にひとり置いていかれるヒデ。ヒデは懸命に右腕を引っ張りだそうとしてたり、装甲車を足で押してみたりするが、装甲車はビクともしない。下敷きになった腕が痺れ麻痺していくのが分かる。やがてヒデはロクが放り投げたノコギリを一度左手で持ってみるが、遠くへ放り投げ返してしまう。

「せめて・・・拳銃があれば・・・」

ヒデの心の中には既に結末が見えていたのかもしれない。

ロクはジャガーの車内にいた。既にガトリングバルカンを迫り出し、砲口をヒデのサンドウルフに標準を合わせていた。ロクは車内でヒデとの出会いの頃を思い出していた。

訓練校時代のヒデはいつもたくさんの仲間に囲まれ、女性隊員からたちも人気があった。ロクたち3期生から見ると憧れの先輩だった。

仲間の信頼も厚く、実戦交じりの訓練ではいつも頼りになっていた。

しかし、いつの頃からロクはヒデに殴られ続けるようになる。理由は特にない。目が合った。傍に寄った・・・なんて理由もあった。

標的はいつもロク一人だった。

拳銃を耳の側で発砲する事もある。訓練校の裏に4、5人で呼び出

されてはいつも殴れていた。子供の頃の二歳差は大きく、ロクはただ殴られ続ける日々が続く。ロクにとって毎日が地獄だった。

ロクにとってヒデを超えることが唯一の救いだったのだ。

それを実力で勝ち取ったのは12歳になったロクだった。SCの運転技術でヒデを超えた頃、ロクはヒデの全てを奪ってしまったのかもしれない。ロクはそんな自分に後悔していた。

そんな時、ヒデが訓練校から脱走した。しかも手榴を人質に取って・・・

しかしロクは仲間に向かって銃を構えれない。やっとの思いで撃った銃弾は手榴に命中していた。ロクの中で何かが弾けてしまった。

その後、ロクは6年も銃を人に向けれなくなっていた。

『失ったのはヒデだけではない・・・自分も何かを失った・・・』

そう自分に言い聞かせると、ロクはガトリングバルカンのグリップを握り締め、親指を発射ボタンの上に置いた。ロクの指定した時間はとうに過ぎていた。

「ヒデ・・・」

キーンがさっき亡くなった際、自分に言った言葉が頭を過ぎる。

『どうして俺らは・・・戦わなければならなかったのかな?』

ロクは何故か悲しくなり車内で涙をこぼした。右手で握っていた

ハンドルに頭を強く打ち付けていた。

『死龍・・・俺の精一杯の手向けだ・・・』

ロクは意を決して、ガトリングバルカンの発射ボタンを押した。

その３１　命の意味

ジャガーから伸びた銃弾がオレンジの線となって荒野に消えていく。次の瞬間巨大な爆風と爆音が暗闇の荒野に響いた。特に爆風は距離を置くジャガーの所にまで、砂埃となって目に見える程だ。爆発したところには火の気がなく逆にエアーブースターの爆発力が凄いのをロクは感じていた。

砂埃が消え視界が開けてくると、さっきまであった装甲車の姿が綺麗に消えていたのが分かった。

「爆発したら・・・骨も残らない・・・確かだな・・・」

ロクは一人呟くと、ジャガーのエンジンを掛けた。するとＰ６方面からダブルのジャガーと思われる赤いライトのＳＣと、数台のＳＣがロクの側にやって来る。ダブルのジャガーはロクのカストリーの真横に並べて停車した。ダブルは助手席の窓を開けると、ロクに声を掛けてきた。

「どうしたロク？何の爆発だ！？」

ロクは笑いながらダブルに答えた。

「何でもないさ・・・悪いな・・・忙しい所・・・」

笑っているがロクの表情に覇気がないのを感じたダブルは、車を降りて爆発箇所を歩いて廻り始めた。

「装甲車か・・・？それともう一台・・・ん？誰かの遺体・・・うう・・・見る影もないな・・・夢に出そうだ・・・これじゃあ判別も出来ないな・・・」

ダブルがロクのジャガーの横に戻ってくると、運転席のロク目線に顔を下げた。
「バズーが行方不明だ・・・それと陽も・・・まさか今のミンチじゃないよな?」とダブル。
「不明って・・・?アシカムは爆発したんじゃないのか?生きてるのか?」驚くロク。

「さあな?アシカムにはバズーは居なかった。またすぐ近くで陽のロータスが置き去りだった。」
「爆発に巻き込まれたか!?」
「今、総出で捜してるよ・・・それと早く報告会に出ろよ。桜井たちが捜してるぞ!」

「今行く・・・ああダブル?」
「何だ?」
「ちょっと付き合え!」
「あ?」

2台のジャガーは赤いライトを点け、丘の上にいた。すると荒野に横たわった聖を見つける。
「ひじりさんか!?」ダブルは驚いた。
髪が半分以上抜け落ち、残った髪の毛も白髪になっていたからだ。

「おい、しっかりしろ!?」ダブルが意識を確認するが応答がない。
「連れて返る。運ぶの手伝ってくれ!」とロク。
「ああ・・・しかしどう言う事だ?ヒデともう一人いたろ!?」
「ヒデはさっきのだ、もう一人は不明・・・逃げられたな・・・」
「そうか・・・」

ダブルとロクに両脇を抱えられ聖はカストリーの助手席に乗らされた。聖はジャガーが走り出した頃に意識を取り戻した。
「ここは・・・？」と聖。
「Ｐ６に戻る・・・」
「ヒデは？」
「あんたが俺の車に乗っている・・・そういう事だ・・・」
聖はその言葉に静かに泣き始めた。

「降ろして・・・もうポリスには戻れない・・・」
「そう言うと思ったさ・・・だがな・・・」
ロクは咄嗟に車を止めた。

「俺はたくさんのミュウの最後を見てきた・・・最後は気が触れて死ぬ奴ばかりだ・・・」
「・・・・・」
「特に酷かったのは、自分の喉を掻きむしって死んだ奴もいた・・・あんた？そんな激痛に耐えれるか？」
「荒野で死にたいの・・・生まれた所だもん。」
「まだ生き残る可能性はある！そう信じろ！命を粗末にすんな！ヒデの為にも・・・」

聖は大声を出して再び泣き始める。ジャガーは再び走りだした。

「あの子は？」と泣きながら聖が問う。
「誰だ？」
「あんたの妹よ・・・」
「・・・タケシが襲撃の際に戦死した・・・」
「・・・ロク・・・実はね・・・あの子を・・・」

「！！」聖の言葉に驚くロク。

Ｐ６指令室。弘士を中心にまだ指令室は総動員でいた。
「７番から１０番艦はＰ７へ移動予定ですが・・・」
「何が問題だ！？」と弘士。
「艦底部分を傷ついた艦が多く・・・Ｐ７への海路は無理かと・・・」
「ふうー・・・検討する・・・街のドックでは限界がある・・・応急処置だけでいい！急げ！次は！？」
「はい・・・街の被害ですが・・・例の敵新兵器の影響で受けた穴ですが・・・」
「至急重機を使って埋め戻せ！次は・・・？」
「ヒデ捜索は難航しており・・・」と我妻。
「それも次に回す・・・次は？」
「４つの塔の収納ですが・・・夕方になった為、電力が少なく・・・」と東海林。
「風力発電を回せないか？出来れば収納したい・・・あんな高い塔を見たら、ジプシーたちが不安になる・・・」と弘士。
「時間が掛かりますが・・・やってみます・・・」
「頼む・・・次は・・・？」

「敵兵の遺体ですが・・・思った程数が多く・・・手が回らないのが現状です。朝になれば傷みが早く・・・出来れば今夜中に埋めたいのですが・・・？」
「ポリスが優先だ。街の男手も借りよう・・・守備隊が落ち着いたらそちらに回す。次は・・・」
「外の兵たちが街内に戻りたいと連絡が来てます。」と我妻。
「４ゲート以外の通用門を使わせろ。塔の周りには立ち入り禁止だ。

それは継続する！」
　するとルナのデスクの表示灯が音を立て点滅する。ルナは会議の輪から離れインカムを付けた。

「はい、こちら指令室ルナです。」
『こちら黒豹・・・いや第一艦隊のロクだ・・・』とロクの声。
「ロクさん？・・・いや艦隊司令・・・？みんな捜してますよ？さっきの件、終わったんですか？」少し小声のルナ。
『ああ・・・逃亡中のミュウを確保。ゲートは通れるのか？』
「まだ解除になっていません・・・通用門を使って街にお入り下さい。」
『分かった・・・そこはみんな無事か？』
「一応です・・・ただ・・・」
『ただ・・・？どうした？』
「バズーさんも、陽さんも行方不明・・・それと松井さんが・・・」
『松井？松井がどうしたんだ？・・・泣きたいのはこっちもだよ！ああ高田女医を待機させてくれ。北と東の通用門から入る。』
「了解・・・」

　ロクは無線を切ると北ゲートと東ゲートの間辺りに設置されてる通用門に向かった。通用門は車1台分の幅のトンネルのような門で、ロクのジャガーはそこの前に到着すると門は自動的に開き、ジャガーはその中へと入っていく。

　ジャガーが辿りついたのは東ブロックのある軍事施設だった。建物の前では高田とスタッフが3名が待ちわびていた。ロクはその横に車を止めると、高田たちが助手席の聖を運び出していく。

「この子だけなの？」と高田。

「はい・・・」
「ヒデは?」
「死にました・・・」とロク。
「そう・・・どっちみち今日刑が執行されていた訳だし・・・」

高田たちが聖をストレッチャーに乗せ運ぼうとする。ロクは高田だけを呼び止めた。

「女医!?」
「その呼ばれ方、好きじゃない・・・先に運んでて!」
高田は部下に聖の搬送を頼むと、ロクの方へ戻って行った。高田はロクの冷たい目を見つめ何かに気がついた。
「何か話し?」
「彼女が逃亡してる最中・・・妙な施設を見たと・・・」
「ええ・・・知ってるわ。私も人質だったんだから・・・それで?」

「その施設で・・・なぜかなつみを見たと言っています・・・」
「ふふふ・・・」
ロクの言葉に高田は薄笑みを浮かべた。

その３２　　対空防御システム

高田はロクの真剣な眼差しに降伏した。
「さすがポリスの交渉人と呼ばれるあんたに、嘘は付けないようね・・・？」
「やっぱり・・・本当なんですね？」
「あら・・・鎌掛けられたかしら・・・？さすがね？」
「高田さん！！」
ロクは高田の言葉に呆れ怒ってみせた。

「怒らないで！ちゃんと言うわから・・・ただどこから説明するのか迷うわね・・・だから落ち着いて聞いて頂戴・・・」
「はい・・・」

「桑田は・・・生きてるの・・・」

「は、はい！？ど、どういう事だ！？ならあの墓はなんだ！」
「詳しくは後で話す。その施設でちゃんと説明するわ・・・後で私の所に来なさい。」
「高田さん！」
「本当はロクに知らせるなと司令から言われてるの・・・それとあなたたちが入るには司令の許可が要る・・・司令の許可が出たあと・・・それから説明するわ・・・今はあの子の治療が優先！いいロク？」イチイチ勿体ぶる高田の言い方。
「高田さん・・・」
高田は小走りに先のスタッフを追いかけていった。

「なつみが生きてる・・・」
ロクは一人立ち尽くした。

Ｐ６指令室。雛壇中段部分のスタッフたちが声を出しながら計器を見ている。
「持国天・・・収納します！」
「電力弱いですが・・・行けます！」
それを見守る弘士たち。そこにロクとダブルが入室してくる。

「入ります！」
ロクはモニターに映ったあの塔を横目に弘士に近寄り敬礼をする。

「ご苦労だった・・・」と弘士。
「司令・・・バズーは・・・？」とダブル。
「うん・・・まだ見つからない・・・陽もだ・・・」
「そうですか・・・」
「キーンと死龍の件は残念だった・・・二人ともＰ６の為に尽くしてくれた・・・」

「あの塔はなんなんです？」ロクは少し怒った口調で弘士に問う。
「あれは・・・戦前の建造物だ・・・」
「あの稲妻のような光・・・敵が真・四天王と言っているものですか？」
「ああ・・・それは間違いない・・・」

「我々は現在、四天王システムと読んでいます！」
雛壇中段にいたメガネの若い男がロクに語った。
「四天王システム？なんだそれは？」見慣れないスタッフにロクの言葉は乱暴になった。

「初めてだったな？彼がこのシステムの責任者で東海林（とうかいりん）だ。」

「しょうじとも呼びますがとうかいりんです。宜しくお願い致します。」
一礼する東海林。礼儀正しいその一礼にロクは戸惑った。
「司令?ちゃんと説明して下さい。」不機嫌なロク。
「では変わって私が説明しましょう・・・」と東海林。
「俺は司令に・・・」ムッとするロク。

「磁石の馬鹿でかいのを使って、磁石に電気を流して電磁バリアを街の上空に張り巡ります。簡単に説明するとこんな感じです。」
「バリア?電磁?俺は科学って好きじゃないんでね・・・」
「30年前・・・この街を核ミサイル3発から守った・・・これならどうです?」
「少し納得・・・」とロク。

「まあ元はと言えば旧自衛隊の産物です・・・この辺りは、松島、多賀城、苫竹、塩釜の海保・・・自衛隊の基地ばかりでしたしね・・・核戦争を予想に国民に知らせず作っていた秘密兵器と申しましょうか・・・?」
「秘密兵器・・・」とロク。

「対空防御システム、またはSシステム・・・当時はそう言われていました・・・」
「たいくう防御・・・システム・・・?」とダブル。

「Sはシールドのエスです。まあ当時は試作品でした・・・どこぞやの国に作らされたとも言われてます。当時の日本の首都は東京・・・戦争を予想していた政府はひそかに首都を旧仙台近郊に移す計画でした。第二首都として・・・」
「第二首都・・・?」とロク

「それに気づいた敵対国がここに核を撃ち込んできたとも言われてます・・・それで急遽使用したのです。当時の街の人々を救うため・・・効果はありました。この辺りは3発の核に耐え切ったんです・・・・・しかしこのシステムには欠陥箇所も多く・・・・」
「欠陥?」とロク。

「ロクさん?あの警戒中にあの塔に近寄りませんでしたか?立ち入り禁止の命令を出したつもりでしたが・・・」
「ああ・・・ん?なぜわかった?」不審がるロク。
「その髪の毛ですよ・・・」
東海林はロクの前髪を指した。ロクの前髪の毛は少し白く変色していたのだ。ロクは顔をしかめた。
「白髪・・・?」
ロクはヒデの白髪と聖の髪の毛を思い出していた。

「簡単に申しますとある遺伝子だけが被爆したんですよ。それでロクさんの髪の毛の染色体が電磁波によって急激に退化したんです。まあ体には異常はありませんから心配なく!」
「被爆だと・・・?」前髪の毛を掴んで自ら見てみるロク。
「ああ、先っぽだけ切れば問題ありませんよ。なんせ今回使用した電源は当時の百分の一程度ですから。」

「違う!俺の聞きたい事はこのシステムの存在自体、なぜ俺らに黙っていた?」とロク。
「それはですね・・・」口籠る東海林。
「それは私が言おう。」と弘士。
「司令・・・」
「今も言った通り、このシステムは欠陥品に間違いない・・・本体も当時のままでなんの改良もしていないのだ・・・解体も考えていた・・・」

「欠陥!?・・・ちゃんと敵の兵器から街を守ったじゃないか?何が欠陥なんだ!?」
「使用方法次第では多大の被害が出る!・・・だが今回は苦肉の策で緊急に使ったんだ。本来は地中に封印してなければならない産物だったんだがな・・・」
「封印・・・」

「それにしても凄い閃光だった・・・空がピンク色になったからな・・・」

ロクは聞き覚えのある声に後ろを振り向く。そこには目の辺りに包帯をし、左手を三角巾で吊ったバズーが立っていた。

「い、生きてたよ・・・」と声を揃えるダブルとロク。

「なんだ!二人とも生きてて悪い言い方だな?」
目が見えないのに二人の声の元に近寄るバズー。二人に殴る素振り。
「まあ、お前が死ぬとは思わないけどな・・・なあロク?」とダブル。
「目を・・・お前!?目はどうした?」とロク。

「ああ、これか?あの敵兵器の閃光をすぐそばで見たんでな・・・時期に戻るそうだ!」
「そうか・・・そうだ陽はどこだ?一緒だったんじゃないか!?」
とロク。

「あたいならここよ!」

バズーの影に隠れていたのか、なぜか火事現場からでも出てきた

ような格好をした陽だった。顔は煤だらけ、自慢の長い黒髪は全て縮れ、制服はほぼ焼けている。

「い、生きてたよ・・・」また、呆れ気味に声を揃えるダブルとロク。

「あれ?生きてちゃまずかったですか・・・?いやー、それにしてもバズーさんは丈夫ですよ。あの戦闘の中、目の見えないまま私を背負って歩いてくるなんて・・・いやーマジで死ぬかと思った・・・」

「今のお前らが言うと、みんな納得するわ・・・」とダブル。

弘士たちも、陽のその姿にだけは苦笑いしていた。

「司令!!最初からこのシステムを出せば、キーンも死龍も死ななかった!!違いますか!?」ロクは溜まっていた心の叫びを弘士にぶつけた。

「し、死んだ・・・キーンも死龍もか!?」バズーも陽も驚く。

「確かにロクの言う通りだ・・・だがさっきも言った通り、このシステムを使いたくはなかった・・・すまない・・・」頭を下げる弘士。

「司令・・・」その姿に呆然とするロク。

暗闇の中、ロクは肩にはスコップを担ぎなつみの墓の前に立っていた。夜になってか風がまた強くなったのか、すぐ側の風力発電機のプロペラが音を立てて回っている。

「さぁーて・・・掘りますか？」

ロクは塀の上の警戒用ライトを気にしながら、スコップで墓を掘り出していた。

ある程度掘り起こすと、棺桶が出てくる。ロクはその周りだけを綺麗に掘り起こすと、棺桶の前に立ち意を決して棺桶の蓋を開けた。

その３３　　ミュウ研究室

ロクは桑田の棺桶を開けてみた。そこには・・・
ロクは薄目を徐々に開きながら棺桶内を見渡す。しかし棺桶の中は空になっていた。
「やはり・・・」
ロクはそう呟くと、街の中心に向かって走り出した。

Ｐ６指令室大会議室。弘士と参謀三名ほどが打ち合わせを終え会議室から出るところだった。会議の入口に駆け寄るロクの姿があった。弘士と目が合う。
「司令・・・」
「うん・・・そろそろ来ると思っていたよ・・・連いて来い。」
「はい・・・」
ロクは言われるまま弘士の後に連いて行く。

地下に降りるエレベーター内にロクと弘士はいた。
「なつみが生きてるって聞きました！！」

黙る弘士に対し、ロクが先に口を開いた。
「生きてる？うーん・・・高田の言い様だな・・・？」
「言い様？」
「体はという意味だ・・・」
「体・・・？」ロクは戸惑った。

そうこうするとエレベーターが止まり、扉が開く。ロクにとっては初めての場所だった。

「ここは・・・？」
「ミュウ研究室・・・」と弘士。
「ミュウ・・・」

暗い室内には緑色の液体に入った百体近くの赤ん坊が、まずロクの目に飛び込んで来た。弘士が歩き出すとロクは辺りを伺いながら、その後を追いかける。室内の中央部分にはスタッフが5名ほど動いていた。高田もその中に混じっていた。
「あら？来たの？」高田はロクに軽い挨拶をする。

ロクは水中容器に入った赤ん坊を一つ一つ観察していると、中には手と足をバタつかせるものまである。
「こ、こいつ・・・い、生きてる・・・！？」驚くロク。

「桑田は？」と弘士が高田に問う。高田は更に奥へと二人を案内した。

暗い室内の奥にやや大きな円柱の水槽がありやはり、緑色の液体が入っている。高田はそこで止まった。
「桑田よ！」
高田の声にロクは耳を疑った。

その円柱の水槽には全裸のなつみが体を丸めるように浮いていたのだ。円柱の上からは十本程の管がなつみの口や腹部に伸びている。
「なつみ・・・」
ロクはすぐなつみとわかった。ロクは水槽に顔を寄せると、中のなつみをマジマジと見つめる。
「ど、どういう事です・・・どうしてなつみが・・・？」
ロクは水槽のすぐ側でしゃがみ込み、下を向いてしまった。

「生きているのは、桑田の赤ちゃんよ・・・」と高田。
その言葉にロクは高田の顔を見上げた。

「その父親は・・・ロク・・・あなたね？」
ロクはその言葉に床に頭を擦り付けた。ロクはなにも返答出来なかった。

「まあ、桑田が他の男と寝てなければの話だけど・・・ロクに心当たりはあるの？」
高田の優しい言葉に、ロクは無言で一度頷いた。

「すごい生命体よ・・・」と高田。
ロクはようやく顔を上げ、高田に詰め寄った。

「どうして・・・どうしてお腹の赤ん坊だけが・・・なつみは死んでるんでしょ？なのになぜ・・・」
弘士は黙って二人を見つめる。
「正確にはまだ赤ん坊ってもんじゃないわ・・・細胞って呼んだ方がいいかしら・・・？」
「細胞・・・？」
「あなたが桑田の検死を頼まなかったら、恐らく誰も気づかなかった・・・」と高田。

「どういう事です？」とロク。

「桑田が戦死した日・・・解剖が終わって桑田の死体の処置をしていた時、微かな電流を機械が感知した・・・」
「電流？」
「びっくりしたわ・・・死んだ遺体から電流を検知するなんて・・・でもそこで初めて桑田が妊娠しているんじゃないかって調べたの・・

・そしたら・・・」
「・・・」
「レントゲンにも写らないはずよね・・・まだ受精して間もない受精卵ですもの・・・」

「なつみは・・・なつみをどうするんです・・・？」
ロクは高田の肩を激しく揺さぶった。弘士が慌てて割って入る。

「このまま出産させるわ・・・あなたと桑田の子供を・・・」
「し、出産って・・・？」
「事例がないのよ・・・この細胞から育てるなんて・・・ミュウを研究するにはいい材料なの・・・だから・・・」

「ミ、ミュウ？ミュウの子なのか！？」ロクは大声を上げた。
「司令・・・」
高田は目線で司令に助けを求めた。

「すまん、まだロクには・・・」と弘士。

「ならいいわ・・・私が話す・・・ロク、よく聞いて頂戴・・・こうなったのはあなたか桑田のどちらかが、ミュウって事になるの・・・」

「お、俺が・・・ミュウだと・・・？」

四天王　第六章　【真・四天王降臨】　完

四天王　第七章　予告

海辺でロクに抱きかかえられる傷ついた久弥。
久弥「ロクに・・・全てを話さなければならない・・・」
ロク「親父さん・・・」

【ミュウ誕生の謎とは・・・】

『永田町の国会議事堂』

【ジプシャンとの対立とは・・・】

『潜水艦の上空を飛び回るたくさんのヘリ』
『緊急発進する戦闘機』

【プロジェクトソルジャーとは・・・】

『核爆発で破壊される街』

【桑田暗殺・・・】

『目を開く桑田』

【そして・・・最後のスパイは・・・？】

ロク「お、お前がスパイか・・・？」

【そしてポリスＶＳジプシャン、最後の戦いが幕を開く】

寛子「捻り潰せ！！」

『ポリスの前に現れた巨大なレヴィアと５００台のＳＣ』

松井「出力限界です！！持ちません！！」

【街を覆う巨大な閃光】

【ロクＶＳ寛子】

ロク「おまえがジプシャンの総帥か？」

寛子「ありがとう・・・礼を申すぞ！」

バズー「ロク・・・後は任せる・・・」

ロク「お、お前・・・？」

バズーがロクを抱き締める。

【最後に生き残るのは？ミュウか？人類か？】

久弥「なつみを撃ったのは・・・わしだ・・・」

ロク「バ・・・バカな・・・？」

【全ての謎の答えがここにある！】

四天王　第七章　【愛は砂漠に・・・】

そして・・・四天王は最終章へ・・・

【荒野でロクが自分の頭に銃を突きつけて目を瞑る。】

弘士「ロク！死ぬな！！」

【懸命にロクに叫ぶ弘士・・】

ロク『ありがとう・・・みんな・・・』

【銃声・・・・・荒野に顔から倒れるロク・・・】

『ロクはなぜ自ら死を選んだのか・・・』

四天王　最終章　【さらば・・・ロク】

その1　人類の未来

暗闇の荒野。一台のＳＣがライトも点灯せず北に向かって走っていた。車高の低い銀のＳＣ。あのツヨシの愛車だった。運転席にはツヨシ、後部座席には両角の姿があった。

「しかし何ですな・・・ツヨシ様も御用意がいい・・・」と両角。
「部下４００人・・・犠牲も大きかったがな・・・」と運転中のツヨシ。

あの爆発の中、ツヨシはいち早く格納庫に移動、艦の爆発と同時にＳＣ一台で脱出を図っていた。

「しかし、敵艦隊は事実上崩壊・・・本部の2隻の艦があれば・・・」
「まずはＰ5だろ?姉貴の事だ・・・Ｐ5を落としから動くはず・・・」
「しかしＰ6もしぶとい・・・」
「まあ、真・四天王を出させた・・・次はない・・・」とツヨシ。

ジプシャン軍浜田基地。崩壊した基地にヒデの一派が火をおこしキャンプを張っている。ＳＣはわずか5台だけだった。そんな中ある老兵が叫んだ。
「Ｐ6の方から誰か歩いてくるぞ!!」
数人の男たちは警戒態勢を取った。丸田と羽生が居なくなったここをまとめていたのはタカだった。

「一人か!?」と低姿勢のタカ。

「恐らく・・・」と老兵。
「用心しろ！」
タカは男たちを左右に展開すると、自ら機銃を構えた。
「撃つな！！味方だ！！」
月明かりに照らされた白髪の男が見える。どうやら武器を持っていない様子だ。男は必死に手を振っている。
「味方か！？」とタカ。
「しかし妙です・・・軍服ではありません・・・」と老兵。
その男の格好は、まるで囚人服。ジプシャンの軍服ではなかった。
「止まれ！！」タカは男に叫んだ。
「撃つな！味方だ！タケシ隊の者だ！早坂という！」
「タケシ隊だと！？」
タカたちはその声に警戒を緩めた。タカ一人が男に近寄った。
「浜田基地の者か！？」早坂は叫んだ。
「タケシ隊だと？その隊は半月前に全滅したと聞く。」とタカ。
「お前ら・・・ヒデの仲間だな？ここの基地の者は？」
「俺らが来た際は、もう誰も居ない・・・タケシ隊なら知らないか？ヒデの安否を・・・？」
「ヒデか・・・さっき別れた・・・丘に向かったはず・・・」早坂は丘の方角を見つめた。

Ｐ６地下の研究室。
「俺が・・・ミュウ・・・」

ロクは高田の言葉に落胆し座り込んでしまった。その様子を見た高田はロクの両肩を掴んだ。

「まだ決まった訳じゃない・・・覚醒しなければ問題はない・・・」

高田の言葉には説得力がなかった。ロクは床に座ったまま動かなくなってしまった。弘士は立ったまま二人の会話を聞いている。

「すぐミュウの検査をする・・・以前の検査で陰性でも、時が経って陽性の可能性もある。」と高田。

ロクは気が抜けたのか床に座ったまま水槽の中のなつみを見ている。左手全部の指がなく、致命になったであろう胸の銃弾後も生々しい。ロクは改めてこれが現実だと言うのを思い知らされた。

「ロク？協力して頂戴・・・」

「どうして・・・どうしてミュウは生まれてくるんです・・・？」

とロク。

「もう２０年近く研究している・・・でも何も分かってないの・・・ただこのままミュウが増え続ければ地球は・・・いや、人類は死滅してしまう・・・」

「死滅・・・？」

「私が思うには・・・ミュウは・・・母体を食い荒らすバクテリアと考えている・・・」

「バクテリア・・・？」

「見て・・・この桑田の中の細胞を・・・桑田は・・・母体は死んでいるのに、母体の栄養や血液中の酸素までコントロールしようとして、生き続けてようとしているの・・・人間の赤ん坊では到底出

来ない事よ・・・」
「しかし・・・ミュウの子供と分かって、この子を出産させるなんて・・・なつみがあんまりです!!それにこの姿・・・」
ロクが泣きながら高田に訴えた。

「お願い・・・この子を育てさせて・・・人類の未来が掛かっているの・・・」
高田も床にしゃがみ込み、ロクに目線を合わせた。ロクは弘士の顔を見る。弘士は黙って頷いた。

ロクの心中は複雑だった。自分の過ちでなつみをこんな姿にさせてしまったという後悔。なつみを早くここから出して楽に眠らせてやりたいといういたわりの心。ここに来れば好きだったなつみにまた会えるという愛。そして高田が唱える人類の未来・・・
今の自分では判断が出来ないと感じたロクは、無言で弘士に助けを求めていた。それを察知したのか弘士は二人に口を挟んだ。

「高田・・・今のロクには答えは出せん・・・少し時間を与えたらどうだ?」と弘士。

「そうね・・・ロク?考えておいて・・・」
声も出さず、ただうなだれるロク。ロクは再びなつみを見つめた。いくら見た所でなつみが目を開ける事はない。そんな事を百も承知でロクはやり場のない怒りを静めていた。

地下3階のある集会所。広い部屋だったが、たくさんのジプシーたちが中で身を寄せ合っていた。その中で直美と勝也、雨音らの姿もある。そこへポリスの兵士らが、食事や飲み物を配給に来た。すると、老人の一人が若い兵に声を掛ける。

「いつになったら地上に戻れるんじゃ？」
一人が口を開くと次々に騒ぎ始めた。

「もう爆撃の音も聞こえない・・・いい加減にここから出せ！」
「こんな狭いところは嫌じゃ・・・」
「父が病気なんです・・・早く医者を呼んで下さい・・・お願いします！」
「敵はいないんじゃろ！？だったら家に戻せ！」

若い兵は返答に困っていた。
「夜明けには、避難解除になります。今夜はここでお休み下さい・・・」
覇気のない兵の言葉に、ジプシーたちは更に騒ぎ出した。

直美はその様子に弟と妹を抱き寄せていた。
「お姉ちゃん・・・」と雨音。
「大丈夫よ・・・もう大きい音しないでしょ・・・」

直美にとって今一番怖いのはここにいる“群集”だったかもしれない。　直美は更に二人をきつく抱き寄せた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9983o/

四天王

2011年10月26日12時03分発行